福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集

老司古墳

1989

福岡市教育委員会

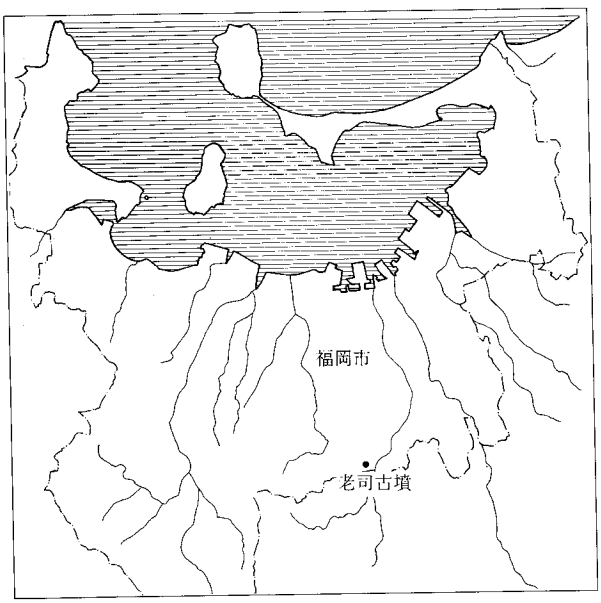
福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集　老司古墳　正誤表

頁	行	誤	正
vi	20	勘先古墳	勘崎古墳
ix	31、35	井尻１号墳	井尻Ｂ１号墳
x	4	復元想定	復元想定図
11	13	留どめるように	留めるように
	19	伸る	伸びる
20	22、23	墳丘埋土	墳丘盛土
24	17	（19より灰がかる）	（19より灰色がかる）
24	19	地山の２次下面は	地山の２次、下面は
24	26	やわらかい粘質弱い	やわらかく粘質弱い
75	8	鉋	鉋
75	31	土坑内からは	土壙内からは
106	1	圭部鏃	圭頭鏃
139	7	約16㎜まどの高さで	約16㎜までの高さで
215	2	低部穿孔	底部穿孔
217	19	副葬品多く	副葬品が多く

NO.16801

福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集

老 司 古 墳

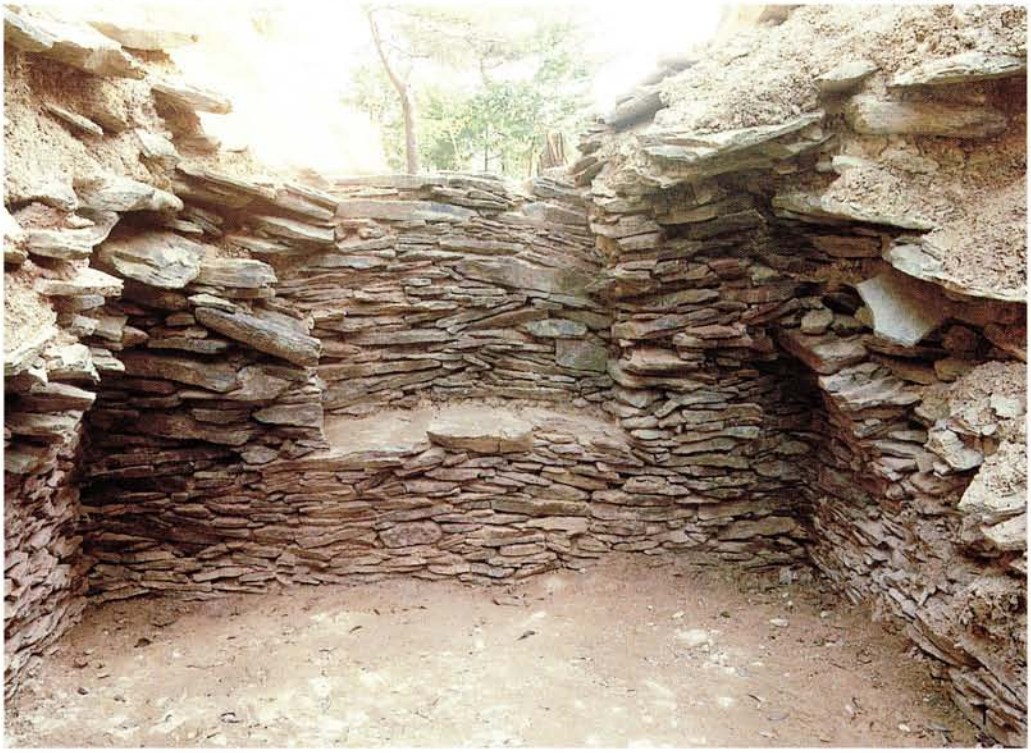


1 9 8 9

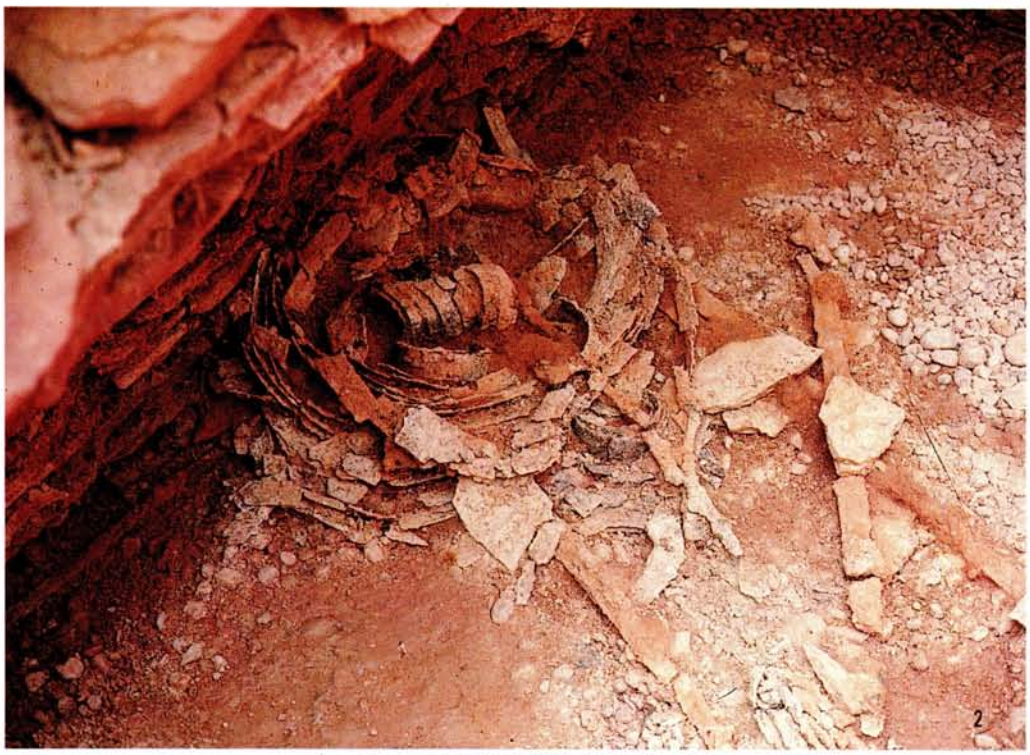
福岡市教育委員会

1．老司古墳周辺（南から）　▲は老司古墳の位置を示す
2．老司古墳周辺（西から）

1．くびれ部敷石検出状態（西から）
2．敷石の部分（南から）



1．3号石室開口部（北から）
2．3号石室奥壁（南から）



1．3号石室遺物出土状態（西から）
2．3号石室遺物出土状態（南東から）

1．出土遺物　舶載君宣高官銘蝙蝠座鈕内行花文鏡
2．出土遺物　舶載方格規矩四神鏡

2 号石室出土短甲

序

奴国の故地・福岡平野の真只中を北へ流れる那珂川の中流域に立地する老司古墳は，比較的大規模な前方後円墳として早くから知られてきた。その老司古墳の名が全国的に知られるようになったのは，竪穴系横口式石室という特異な遺構と，鏡・短甲・武器・農工具など豊富な遺物が発見されてからのことである。

1965年夏にはじめて墳丘測量が行なわれ，ついで翌1966年から3次にわたって，内部主体の石室群を中心とした発掘が実施されていらい，早や10数年の歳月が流れた。その間，各方面から調査報告書の刊行が待望されながら，諸般の事情から実現にいたらなかった。ところで，1987年に入って，石室の埋め戻しを主眼とする保存処置と，墳丘ならびにその周辺まで含んだ範囲に対する，部分的な補足発掘と測量が行なわれたことが契機となって，報告書刊行の気運が高まり，ここにようやく実現の運びとなったわけである。

本書の刊行によって，まず第一に，竪穴系横口式石室の全貌が明らかにされるとともに，最近，調査が行なわれた鋤崎・丸隈山両古墳と合わせ考えると，日本における横穴式石室の出現過程の解明に資するところが大きくなる。つぎに，墳頂部出土の初期須恵器や，石室内出土の短甲・馬具などは，5世紀における手工業製品の技術革新の先駆的なものとして注目され，さきの石室とともに，中期古墳時代史の解明に重要な資料を提供する。いっぽう，老司古墳は，奴国以後の筑紫における豪族の動きを考える上でも重要な位置にあり，古代地方史はもちろん，筑紫と大和政権との関係解明にも重要な手がかりを与えるものと確信する。

本書は，調査担当者が多忙のため，かならずしもじゅうぶんな叙述や考察が行なえたとは思わないが，少なくとも正式の学術報告書として，考古学・古代史の専門家はもとより，一般市民の皆さんにも，広く活用されることを願ってやまない。

本書がなるに当っては，実に多くの関係者のご理解とご協力をいただいた。改めて関係各位に感謝を申し上げたい。そして，老司古墳が，国の史跡に指定されて完全に保存されるとともに，史跡公園として整備された上，学界ならびに市民社会の間で，広くその価値が享受される日がくることの遠からんことを切に願うところである。

1989年3月31日

九州大学名誉教授
岡　崎　　敬

序

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には多くの貴重な遺跡が分布しています。本市では，特に文化財の保護・活用につとめてきています。

老司古墳は，昭和41年から46年にかけて，九州大学の鏡山猛先生・岡崎敬先生・森貞次郎先生によって調査が行なわれ，多大な成果を得ています。以後，調査を行なわれました先生方から保存整備の必要性を説かれていました。しかし，その後の高度経済成長に伴い市内の都市基盤整備が進み，多くの貴重な遺跡が失われることになり，本市では記録保存のための調査に追われることになりました。昭和62年，やっと，史跡指定化・環境整備に向けて，重要遺跡確認調査を実施いたしました。

本書は，これまでの老司古墳調査すべての報告書です。

鏡山猛先生（故人）・岡崎敬先生・森貞次郎先生・西谷正先生・小田富士雄先生をはじめとする九州大学考古学研究室の方々，小年院所長をはじめとする関係各位の協力に対し感謝の意を表しますとともに，本書が文化財の理解の一助となり，広く活用されることを願います。

今後老司古墳につきましてはこれから史跡指定し，環境整備を進めていこうと考えています。今後とも御協力下さいますようお願い申し上げます。

平成元年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　　佐　藤　善　郎

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が1987年に実施した福岡市南区老司571に所在する老司古墳の発掘調査報告書である。また，あわせて1965～1969年に九州大学考古学研究室を主体に行なわれた発掘調査の成果も含めている。なお，1967年の調査は福岡県教育委員会，1969年の調査は福岡市教育委員会の委託によるものであった。

2．発掘調査は上記の主体により行なわれ，調査組織は「II　老司古墳の調査経過」のなかでそれぞれ示している。

3．遺構実測は調査参加者全員がおこなった。浄書は墳丘関係を城戸康利，前田達男，吉留秀敏が行い，石室関係を久保寿一郎，溝口孝司，長家伸，五百路裕之，川上洋一，塩見充子，重藤輝行，渋谷格，高久健二，中村真由美，渡辺芳郎（以上九州大学），吉留秀敏がおこなった。
遺物の実測は高倉洋彰，橋口達也，西村強三（九州歴史資料館），西健一郎，郭鐘喆，古野徳久，土井基司，久保寿一郎，太田睦，溝口孝司，長家伸，五百路裕之，大西智和，高久健二，中園聡（以上九州大学），吉留秀敏がおこない，浄書を豊福弥生（九州歴史資料館），郭鐘喆，古野徳久，土井基司，久保寿一郎，太田睦，溝口孝司，長家伸，五百路裕之，大西智和，高久健二，中園聡，渡辺芳郎，吉留秀敏がおこなった。また，観察表の作成は執筆担当者がおこない，牟田裕二，屋山洋（日本大学），大塚恵治（福岡大学）の援助を受けた。

4．遺構の写真は森貞次郎，小田富士雄，山口譲治，吉留秀敏がおこない，遺物の写真は岡村秀典（京都大学），石丸洋（九州歴史資料館），西健一郎，田中良之（九州大学），上方高弘，吉留秀敏がおこなった。また，自然科学的研究と付説に関する写真は，おもに担当者がこれにあたった。

5．文章は分担執筆であり，文責は文末に記した（執筆者一覧は236頁参照）。

6．編集は森貞次郎，小田富士雄，西谷正の指導のもとに，山口譲治，吉留秀敏，渡辺芳郎がおこなった。また，編集に関する作業は九州大学考古学研究室の全面的協力によりおこなわれた。

7．本書に使用した方位は磁北である。真北との偏差は西偏06°21'である。

8．出土遺物は1965～1969年の調査分については九州大学考古学研究室において，1987年の調査分については福岡市埋蔵文化センターにおいてそれぞれ保管し，図面，写真等の記録類は両機関において複写共有し，保管，活用していく。

9．調査から報告までに以下の方々や機関のご援助，教示を得た。記して感謝申し上げます。
上村俊雄（鹿児島大学）　東潮（橿原考古学研究室）　新原正典（福岡県教育委員会）　村上久和（大分県教育委員会）　蒲原宏行，家田淳一（佐賀県教育委員会）　丹羽野裕（島根県教育委員会）　山本悦世（岡山大学埋蔵文化調査研究センター）　平川敬治　伊藤睦子（大阪府文化財センター）　丸山康雄，平田定幸，中村昇平（春日市教育委員会）　原俊一（宗像市教育委員会）　舟山良一，向直也，秀嶋和子（大野城市教育委員会）　川村博（前原町教育委員会）　片岡宏二，速見信也，中島達也，宮田浩之（小郡市教育委員会）　九州歴史資料館　老司中学校　老司中学校歴史研究部　老司小学校　老司公民館　福岡大学歴史研究部

本文目次

I　地理的歴史的環境……1
II　老司古墳の調査経過……5
　1　1965～1969年の発掘調査……5
　2　1987年の発掘調査……6
III　墳丘の調査……11
　1　前方部の調査……11
　2　後円部の調査……16
　3　くびれ部の調査……23
IV　墳丘出土の遺物……27
　1　概要……27
　2　埴輪……32
　3　須恵器……41
　4　土師器……46
　5　その他……47
V　石室の調査……49
　1　概要……49
　2　1号石室……50
　　1)墓道の構造……50
　　2)石室の構造……50
　　3)遺物の配列……53
　3　2号石室……54
　　1)石室の構造……54
　　2)遺物の配列……57
　4　3号石室……58
　　1)墓道の構造……58
　　2)石室の構造……61
　　3)石室墓壙内埋土(1987年度調査所見)……62
　　4)遺物の配列……63
　5　4号石室……71
　　1)墓道の構造……71
　　2)石室の構造……72
　　3)遺物の配列……73
　6　石蓋土壙墓……75
VI　石室出土の遺物……77
　1　銅鏡……77
　2　武器……84
　3　農工具……106
　4　装身具……124
　5　土器……134

6　馬具 ……139
7　石製品 ……143
8　武具 ……144
Ⅶ　自然科学的調査 ……151
1　老司古墳出土人骨について ……151
2　老司古墳出土の赤色顔料 ……163
3　石材 ……167
4　老司古墳出土須恵器の螢光X線分析 ……173
Ⅷ　考察 ……179
1　老司古墳の墳丘復元 ……179
2　石室の構造 ……188
3　老司古墳出土の環頭大刀 ……193
4　装身具 ……197
5　銅鏡 ……203
6　老司古墳出土須恵器の編年的位置付け ……206
7　老司古墳出土の埴輪・土器について ……211
Ⅸ　結語 ……215
付説 ……219
筑前卯内尺古墳出土と伝える鏡　三木文雄 ……219
鋤先古墳石室天井部の復元　柳沢一男 ……225

挿図目次

図1.　福岡平野(那珂川・御笠川流域)の古墳分布図(縮尺1／10万) ……xiv
図2.　老司古墳と周辺の遺跡　(縮尺1／8000) ……3
図3.　老司古墳および周辺地形図　(縮尺1／1200) ……4
図4.　老司古墳地形図(1965年)　(縮尺1／500) ……7
図5.　老司古墳地形図(1987年)　(縮尺1／500) ……9
図6.　A・Bトレンチ遺構検出状態　(縮尺1／60) ……12
図7.　Aトレンチ北壁土層断面図　(縮尺1／40) ……13
図8.　4号石室　E・G・H・Iトレンチ遺構検出状態　(縮尺1／60) ……折込
図9.　Hトレンチ東壁土層図　(縮尺1／40) ……16
図10.　各トレンチの遺構検出状態　(縮尺1／60) ……17
図11.　1・3号石室西側土層断面図　(縮尺1／40) ……折込
図12.　3号石室墓道両壁土層断面図　(縮尺1／40) ……折込
図13.　3号石室墓道横断およびPトレンチ土層断面図　(縮尺1／40) ……22
図14.　Oトレンチ南壁土層断面図　(縮尺1／40) ……24
図15.　T調査区内uトレンチ東壁土層図　(縮尺1／40) ……26
図16.　T－R調査区遺構検出状態　(縮尺1／60) ……折込
図17.　埴輪樹立位置　(縮尺1／600) ……27
図18.　埴輪出土状態(1)　(縮尺1／10) ……28
図19.　埴輪出土状態(2)　(縮尺1／10) ……29

図20.　埴輪出土状態（３）（縮尺１／10）……30
図21.　老司古墳須恵器片出土分布図（縮尺１／200）……31
図22.　石蓋土壙墓に使用された壷形埴輪（縮尺１／４）……32
図23.　墳丘出土の遺物（１）（壷形埴輪１）（縮尺１／４）……33
図24.　墳丘出土の遺物（２）（壷形埴輪２）（縮尺１／４）……34
図25.　墳丘出土の遺物（３）（壷形埴輪３）（縮尺１／４）……35
図26.　墳丘出土の遺物（４）（壷形埴輪４）（縮尺１／４）……36
図27.　墳丘出土の遺物（５）（壷形埴輪５）（縮尺１／４）……37
図28.　墳丘出土の遺物（６）（壷形埴輪６）（縮尺１／４）……38
図29.　墳丘出土の遺物（７）（壷形埴輪７）（縮尺１／４）……39
図30.　墳丘出土の遺物（８）（壷形埴輪と円筒埴輪）（縮尺１／４）……40
図31.　墳丘出土の遺物（９）（形象埴輪・土師器・その他）（縮尺１／４・１／１）……42
図32.　墳丘出土の遺物(10)（須恵器１）（縮尺１／２）……43
図33.　墳丘出土の遺物(11)（須恵器２）（縮尺１／３）……44
図34.　墳丘出土の遺物(12)（須恵器３）（縮尺１／３）……45
図35.　１～３号石室位置図（縮尺１／80）……48
図36.　１号石室横断面土層図（縮尺１／40）……51
図37.　１号石室縦断面土層図（縮尺１／40）……51
図38.　１号石室遺物出土状況図（縮尺１／10）……52
図39.　１号石室玉群Ａ・Ｂ出土状況図（縮尺１／４）……53
図40.　１号石室の遺物群（縮尺１／40）……54
図41.　２号石室横断面土層図（縮尺１／40）……55
図42.　２号石室縦断面土層図（縮尺１／40）……55
図43.　２号石室遺物出土状況図（縮尺１／10）……56
図44.　２号石室の遺物群（縮尺１／40）……58
図45.　３号石室横断面土層図（縮尺１／40）……59
図46.　３号石室墓道実測図（縮尺１／40）……折込
図47.　３号石室の遺物群（縮尺１／60）……63
図48.　３号石室遺物出土状況全体図（縮尺１／15）……64
図49.　３号石室II群遺物出土状況（縮尺１／４）……65
図50.　３号石室玉群Ａ出土状況図（縮尺１／４）……66
図51.　３号石室玉群Ｂ・Ｃ出土状況図（縮尺１／４）……66
図52.　３号石室玉群Ｄ出土状況図（縮尺１／４）……66
図53.　３号石室VII群遺物出土状況図（縮尺１／６）……68
図54.　３号石室VIII群遺物出土状況図（縮尺１／４）……折込
図55.　４号石室遺物出土状況図（縮尺１／10）……74
図56.　4号石室の遺物群（縮尺１／40）……75
図57.　石蓋土壙墓　平面図および断面見通図（縮尺１／20）……76
図58.　１号石室出土舶載方格規矩鏡拓影・実測図（縮尺２／３）……77
図59.　３号石室出土銅鏡拓影・実測図（１）（縮尺２／３）……79
図60.　３号石室出土銅鏡拓影・実測図（２）（縮尺２／３）……82

図61.　1号石室出土鉄器(1)　(縮尺1／5)……85
図62.　1号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)……86
図63.　1号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)……87
図64.　1号石室出土鉄器(4)　(縮尺1／2)……88
図65.　1号石室出土鉄器(5)　(縮尺1／2)……89
図66.　2号石室出土鉄器(1)　(縮尺1／4)……90
図67.　2号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)……91
図68.　2号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)……92
図69.　3号石室出土鉄器(1)　(縮尺1／5)……94
図70.　3号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)……95
図71.　3号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)……97
図72.　3号石室出土鉄器(4)　(縮尺1／2)……98
図73.　3号石室出土鉄器(5)　(縮尺1／2)……99
図74.　3号石室出土鉄器(6)　(縮尺1／2)……100
図75.　3号石室出土鉄器(7)　(縮尺1／2)……101
図76.　3号石室出土鉄器(8)　(縮尺1／2)……102
図77.　4号石室出土鉄器(1)　(縮尺1／2)……104
図78.　4号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)……105
図79.　出土鉄器(石室不明)(1)　(縮尺1／4)……106
図80.　出土鉄器(石室不明)(2)　(縮尺1／2)……107
図81.　1号石室出土鉄器(6)　(縮尺1／2)……108
図82.　1号石室出土鉄器(7)　(縮尺1／2)……109
図83.　1号石室出土鉄器(8)　(縮尺1／2)……110
図84.　1号石室出土鉄器(9)　(縮尺1／2)……111
図85.　1号石室出土鉄器(10)　(縮尺1／2)……112
図86.　2号石室出土鉄器(4)　(縮尺1／1)……112
図87.　3号石室出土鉄器(9)　(縮尺1／3)……113
図88.　3号石室出土鉄器(10)　(縮尺1／3)……114
図89.　3号石室出土鉄器(11)　(縮尺1／3)……115
図90.　3号石室出土鉄器(12)　(縮尺1／2)……116
図91.　3号石室出土鉄器(13)　(縮尺1／2)……117
図92.　3号石室出土鉄器(14)　(縮尺1／2)……118
図93.　3号石室出土鉄器(15)　(縮尺1／2)……119
図94.　3号石室出土鉄器(16)　(縮尺1／2)……120
図95.　3号石室出土鉄器(17)　(縮尺1／2)……121
図96.　4号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)……122
図97.　出土鉄器(石室不明)(3)　(縮尺1／2)……123
図98.　出土鉄器(石室不明)(4)　(縮尺1／2)……123
図99.　1号石室玉群A　(縮尺1／1)……124
図100.　3号石室玉群A　(縮尺2／3)……126
図101.　3号石室玉群B　(縮尺2／3)……129

図102.　3号石室玉群C　(縮尺2／3) ……129
図103.　3号石室玉群D　(縮尺2／3) ……130
図104.　3号石室玉群E　(縮尺2／3) ……132
図105.　老司古墳出土櫛　(縮尺1／1) ……133
図106.　1号石室出土器台　(縮尺1／4) ……134
図107.　3号石室出土土器片枕　(縮尺1／4) ……135
図108.　3号石室出土盤状土器　(縮尺1／6) ……136
図109.　4号石室出土器台(縮尺1／4) ……138
図110.　2号石室出土尾錠　(縮尺1／2) ……140
図111.　3号石室出土馬具　(縮尺1／2) ……141
図112.　3号石室馬具復元図　(縮尺1／2) ……142
図113.　1・3号石室出土砥石　(縮尺1／3) ……143
図114.　2号石室出土短甲(1)　(縮尺1／6) ……144
図115.　2号石室出土短甲(2)　(縮尺1／6) ……145
図116.　3号石室出土三尾鉄　(縮尺1／6) ……145
図117.　3号石室出土甲冑　(縮尺1／6) ……146
図118.　籠手威法想定図 ……147

埋葬人骨

図119.　2号石室人骨出土状態　(縮尺1／20) ……151
図120.　3号石室人骨出土状態　(縮尺1／5) ……152
図121.　4号石室人骨出土状態　(縮尺1／20) ……153
図122.　頭最大長・頭最大幅・頭長幅示数 ……159
図123.　上顔高・中顔幅・上顔示数 ……159

赤色顔料

図124.　No.10の粒度分布曲線 ……164
図125.　No.10の粒度累積曲線 ……165
図126.　出土朱の粒子径と均一性の相関関係 ……165

石材

図127.　福岡付近における新生代玄武岩質岩石の分布 ……169

胎土分析

図128.　井尻1号墳出土須恵器のRb－Sr分布図 ……173
図129.　K因子の対比 ……174
図130.　Ca因子の対比 ……174
図131.　Fe因子の対比 ……174
図132.　井尻1号墳出土須恵器のD－Dプロット ……175
図133.　老司古墳出土須恵器のRb－Sr分布図 ……176
図134.　老司古墳出土須恵器のD－Dプロット ……176
図135.　有田街区出土須恵器のRb－Sr分布図 ……177
図136.　有田街区出土須恵器のD－Dプロット ……177

考察編

図137.　老司古墳墳丘外表施設　(縮尺1／400) ……180

図138.　老司古墳墳丘復元推定図　(縮尺１／400)……181
図139.　老司古墳の敷石に使用された円礫の大きさ(左)と重量分布(右)……185
図140.　三葉環大刀の類例　(縮尺不同)……194
図141.　老司古墳出土須恵器器台の復元想定　(縮尺約１／３)……207
図142.　老司古墳出土壷形埴輪の分類　(縮尺１／12)……211
図143.　壷形埴輪Ａ類の製作工程想定図　(縮尺１／８)……213

付説

図144.　卯内尺古墳出土と伝える銅鏡および銅鏃拓影　(縮尺１／２)……219
図145.　江藤正澄『福陵雑纂』三所収の三神三獣鏡……223
図146.　卯内尺古墳出土と伝える銅鏡および銅鏃写真……224
図147.　鋤崎古墳石室実測図　(羨道～墓道は築造時・第Ｉ面)……225
図148.　石室墓墳と天井石崩落状況……226
図149.　鋤崎古墳後円部横穴式石室崩壊状況および墓壙実測図　(縮尺１／80)……227
図150.　鋤崎古墳横穴式石室の天井石および石室縦断面方向復原図　(縮尺１／50)……228

付図

１.　老司古墳墳丘測量図(1987年度調査後)　(縮尺１／200)
２.　１号石室平面図および断面図　(縮尺１／20)
３.　２号石室平面図および断面図　(縮尺１／20)
４.　３号石室平面図および断面図　(縮尺１／20)
５.　４号石室平面図および断面図　(縮尺１／20)

図 版 目 次

図版１. (1)墳丘遠景(西より)
(2)後円部近景(南東より)
図版２. (1)第１トレンチ(南より)
(2)第２トレンチ(西より)
図版３. (1)前方部近景(北より)
(2)Ｒ・Ｔ調査区遺構検出状況(南西より)
図版４. (1)Ｅトレンチ遺構検出状況(北より)
(2)Ｉトレンチ遺構検出状況(北より)
図版５. (1)Ａトレンチ遺構検出状況(南より)
(2)Ｆトレンチ遺構検出状況(東より)
図版６. (1)Ｂトレンチ遺構検出状況(東より)
(2)Ｎトレンチ遺構検出状況(北西より)
図版７. (1)ｕトレンチ遺構検出状況(南より)
(2)Ｔ調査区敷石石列検出状況(南より)
図版８. (1)Ｔ調査区遺構検出状況(南より)
(2)後円部２段目平垣面検出状態(南より)
図版９. (1)３号石室墓道西壁土層(北東より)
(2)３号石室墓道東壁土層(北西より)
図版10. (1)Ｏトレンチ南壁土層(北西より)
(2)Ｐトレンチ南壁土層(北東より)
図版11. (1)Ｐトレンチ東端南壁土層(北東より)

(2)uトレンチ内溝状遺構検出状況(西より)
図版12. (1)15号埴輪検出状況(南より)
(2)16号埴輪検出状況(南より)
図版13. (1)17号埴輪検出状況(南より)
(2)17号埴輪検出状況(南より)
図版14. (1)8号埴輪検出状況(東より)
(2)13号埴輪検出状況(東より)
図版15. 墳丘出土の遺物 1(壷形埴輪) 縮尺1／6
図版16. 墳丘出土の遺物 2(壷形埴輪) 縮尺1／6
図版17. 墳丘出土の遺物 3(円筒・形象埴輪・土師器) 縮尺1／3
図版18. 墳丘出土の遺物 4(須恵器器台) 縮尺1／2
図版19. 墳丘出土の遺物 5(須恵器甕) 縮尺1／2
図版20. 1～3号石室全景(上空より)
図版21. (1)1～3号石室近景(南西より)
(2)1～3号石室近景(北より)
図版22. (1)1号石室検出状況(西より)
(2)1号石室検出状況(東より)
図版23. (1)1号石室検出状況(南東より)
(2)1号石室検出状況(北東より)
図版24. (1)1号石室検出状況(西より)
(2)1号石室天井石除去後(西より)
図版25. (1)1号石室閉塞部および墓道(北より)
(2)1号石室閉塞部(東より)
図版26. (1)1号石室遺物出土状況(III群)
(2)1号石室遺物出土状況(I・II群)
図版27. (1)1号石室遺物出土状況(II群)
(2)1号石室遺物出土状況(I群)
図版28. (1)2号石室検出状況(南東より)
(2)2号石室天井石除去後(北より)
図版29. (1)2号石室閉塞部(北より)
(2)2号石室閉塞部(西より)
図版30. (1)2号石室短甲出土状況(北より)
(2)2号石室遺物出土状況全景(北より)
図版31. (1)3号石室横断面土層(北より)
(2)3号石室西側土層(北東より)
図版32. (1)3号石室横断面土層(北より)
(2)3号石室奥壁裏込め(東より)
図版33. (1)3号石室検出状況(南より)
(2)3号石室検出状況(東より)
図版34. (1)3号石室横口部(北より)
(2)3号石室南東隅(北西より)

図版35. (1) 3号石室奥壁(南より)
(2) 3号石室墓道横断面土層(北より)
図版36. (1) 3号石室墓道(北より)
(2) 3号石室墓道(南より)
図版37. (1) 3号石室遺物出土状況全景(南より)
(2) 3号石室遺物出土状況(Ⅰ・Ⅲ群)
図版38. (1) 3号石室遺物出土状況(Ⅲ群)
(2) 3号石室遺物出土状況(Ⅱ群)
図版39. 3号石室遺物出土状況(Ⅳ群)
図版40. (1) 3号石室遺物出土状況(Ⅶ群)
(2) 3号石室遺物出土状況(Ⅳ群)
図版41. (1) 3号石室遺物出土状況(Ⅷ群上層)
(2) 3号石室遺物出土状況(Ⅷ群下層)
図版42. (1) 4号石室全景(東より)
(2) 4号石室検出状況(北西より)
図版43. (1) 4号石室検出状況(北東より)
(2) 4号石室墓道(東より)
図版44. 4号石室遺物出土状況
図版45. (1)Aトレンチおよび石蓋土壙墓検出状況(東より)
(2)石蓋土壙墓検出状況(南より)
図版46. 3号石室出土三角縁鏡片およびフリア美術館所蔵三角縁四神四獣鏡 縮尺2／3
図版47. 3号石室出土銅鏡 縮尺約2／3
図版48. 1・2号石室出土銅鏡 縮尺約2／3
図版49. 1号石室出土鉄器 1 縮尺1／6・1／3
図版50. 1号石室出土鉄器 2 縮尺1／3
図版51. 1号石室出土鉄器 3 縮尺1／6・1／3
図版52. 2号石室出土鉄器 縮尺1／6・1／3
図版53. 3号石室出土鉄器 1 縮尺1／6・1／3
図版54. 3号石室出土鉄器 2 縮尺1／3
図版55. 3号石室出土鉄器 3 縮尺1／3
図版56. 3号石室出土鉄器 4 縮尺1／3
図版57. 3号石室出土鉄器 5 縮尺1／6・1／3
図版58. 3号石室出土鉄器 6 縮尺1／3
図版59. 4号石室出土鉄器・土器 縮尺1／6・1／3
図版60. 老司古墳出土玉類
図版61. 老司古墳出土櫛および人骨付着状態
図版62. 老司古墳石室出土土器・砥石 1・2は縮尺約1／6,他は1／3
図版63. 3号石室出土馬具
図版64. 2号石室出土武具
図版65. 3号石室出土甲冑1
図版66. 3号石室出土甲冑2

図版67.　人骨出土状況(1・2号石室1号人骨, 2～3・4号石室)
図版68.　2・4号石室出土人骨
図版69.　出土顔料の顕微鏡写真
図版70.　1・3号石室石材の偏光顕微鏡写真
図版71.　4号石室石材および可也山・能古島粗面玄武岩の偏光顕微鏡写真
図版72.　1・3・4号石室石材および可也山・能古島粗面玄武岩の偏光顕微鏡写真
図版73.　(1)卯内尺古墳(左)と老司古墳(右)(南西より)
　　(2)卯内尺古墳全景(西より)

巻頭原色図版目次

1．1．老司古墳周辺（南から）
　2．老司古墳周辺（西から）
2．1．くびれ部敷石検出状態（西から）
　2．敷石の部分（南から）
3．1．3号石室開口部（北から）
　2．3号敷石奥壁（南から）
4．1．3号石室遺物出土状態（西から）
　2．3号石室遺物出土状態（南東から）
5．1．出土遺物　舶載君宣高官銘蝙蝠座鈕内行花文鏡
　2．出土遺物　舶載方格規矩四神鏡
6．2号石室出土短甲

表　目　次

表1．　頭蓋骨主要計測値・示数 ……154
表2．　頭蓋骨非計測的小変異の観察 ……155
表3．　四肢骨主要計測値・示数 ……156
表4．　老司古墳被葬者の歯冠計測値 ……157
表5．　推定身長の比較 ……157
表6．　老司古墳4号石室2号人骨四肢骨計測値の比較 ……158
表7．　資料の採取位置と分析結果 ……163
表8．　分析値(岩石標準資料ＪＧ－1による標準化値で示す) ……178
表9．　丁字頭勾玉の類例一覧 ……197
表10．　3号石室出土管玉色別表 ……198
表11．　玉群別管玉計測表 ……199
表12．　各古墳出土装身具計測表 ……201
表13．　土師器および初期須恵器編年案対照表 ……210
表14．　老司古墳出土銅鏡計測表 ……230
表15．　老司古墳出土鉄製農工具計測表 ……230
表16．　老司古墳1号石室出土勾玉観察表 ……230
表17．　老司古墳3号石室出土勾玉観察表 ……230
表18．　老司古墳3号石室出土管玉観察表 ……230
表19．　老司古墳出土埴輪観察表 ……234
表20．　各石室出土遺物一覧 ……150

1．老司古墳
2．卯内尺古墳
3．野多目古墳群
4．三十田古墳
5．箱池古墳
6．大牟田古墳群B群
7．四十塚古墳群
8．柏原古墳群1号墳
9．柏原古墳群
10．小丸古墳群
11．浦ノ田古墳
12．中尾古墳
13．老松神社古墳群
14．野口古墳群
15．観音堂古墳
16．井河古墳群
17．若山古墳群
18．白石古墳群
19．妙法寺古墳
20．油田古墳群
21．大万寺前古墳
22．イボリ古墳
23．墓の前古墳
24．熊本古墳群
25．風早古墳
26．松尾古墳
27．京ノ隈古墳
28．神松寺御陵古墳
29．穴観音古墳
30．平尾古墳
31．比恵古墳群
32．剣塚古墳
33．那珂八幡古墳
34．板付八幡古墳
35．諸岡古墳群B群
36．諸岡古墳群A群
37．不詳
38．井尻1号墳
39．スク古墳群
40．赤井手古墳
41．竹ヶ本古墳
42．竹ヶ本古墳群
43．下白水大塚古墳
44．日拝塚古墳
45．門田古墳群
46．天神山古墳
47．ウトロ古墳群
48．ウトロ古墳
49．原古墳群
50．エゲ山古墳群
51．炭焼古墳群
52．安徳大塚古墳
53．貝徳寺古墳
54．観音山古墳群
55．観音山古墳群
中原I群1号墳
56．平石古墳群
57．西浦古墳群
58．大堤古墳群
59．塚原古墳群
60．塚原古墳群1号墳
61．惣利古墳
62．向谷古墳
63．吉松古墳
64．成屋形古墳群
65．笹原古墳群
66．深町古墳・金山古墳
67．銀山古墳群
68．原口古墳群
69．ウド古墳
70．博多1号墳
71．北ノ浦古墳
72．花尾古墳群
73．東谷表古墳
74．大谷古墳
75．宝満尾古墳
76．宝満尾東古墳群
77．上ノ池古墳
78．天神森古墳群
79．萱場古墳群
80．立花寺古墳群
81．熊野古墳群
82．文珠谷古墳群
83．熊野古墳群
84．金剛山古墳群
85．七曲古墳群
86．金隈古墳
87．観音ヶ浦古墳群
88．持田ヶ浦古墳群A群
89．桜ヶ丘古墳群
90．岩長浦古墳群
91．観音浦古墳群
92．丸山古墳
93．影ヶ浦古墳群
94．堤ヶ浦古墳群
95．持田ヶ浦古墳群B群
96．持田ヶ浦古墳群C群
97．持田ヶ浦古墳群D群
98．持田ヶ浦古墳群E群
99．今里不動古墳
100．持田ヶ浦古墳群F群
101．宝満神社古墳
102．御陵古墳群
103．御陵古墳群赤坂山支群
104．盗原古墳群
105．中古墳群
106．ウソブキ古墳群

図1．　福岡平野(那珂川・御笠川流域)の古墳分布図（縮尺1／10万）

I　地理的歴史的環境（図1～3）

老司古墳の所在する福岡平野は，九州島北部に位置し，北を玄海灘に面し，南を背振，三群山塊という比較的急峻な山々に囲まれている。その山々から派生する中小河川は海岸線の各所に沖積平野を形成するが，福岡平野はそのなかでも最大の面積を有している。平野をおおよそ南北に貫流する主な河川は西から室見川，樋井川，那珂川，御笠川，多々良(宇美)川などがある。河川の間には開析の進んだ丘陵や段丘が残されている。老司古墳は那珂川流域の西岸に位置し，背振山系の片縄山（293m）から派生する花崗岩基盤の丘陵上に立地する。丘陵頂部は標高約45m，周囲の沖積地との比高差約30mを測る。

さて，福岡平野は大陸，朝鮮半島と近い立地条件を持ち，早くからの人的，物的交流を裏付ける遺跡，遺物が発見されている。板付遺跡，野多目遺跡を代表として，各所に列島で最初の農耕集落が成立している。また，弥生時代前～中期の板付田端遺跡，須玖岡本遺跡などの墳墓から多量の輸入青銅製品などが出土している。この時期には，そうした製品が一部の特定集団や個人に集中して副葬される傾向が次第に強まっている。また，須玖岡本遺跡を中心に各種の金属器製作遺構，遺物が多数検出されている。これらの金属器類の輸入，製作，保有，配布を一つの条件としながらこの地域に有力な集団や個人が台頭してきたことが推定される。志賀島で発見された金印も当該期の外交権や対外交流の形態を示し，併せて他地域を圧倒する政治的背景の存在を示している。弥生時代後期には，主にこの地域で生産された青銅製武器形祭祀具が北～中部九州から瀬戸内西部の広範囲に分布し，同様の分布が輸入青銅鏡とその鏡片のあり方にも認められる。依然としてこの地域が周辺地域に対して圧倒的な優位性を保っていたことが明らかである。弥生時代後期～終末には近畿系土器群が，本地域の主に海岸線の集落で急増している。田崎博之氏はこれを「近畿地方の勢力が海上交易権を掌握する過程」と捉えた。こうしたあり方とその背景はなお今後の検討課題であるが，近畿地域を中心とした広域な連合体の形成が，こうした現象の基盤をなしたと見ることができよう。

古墳時代には北部九州でも前方後円墳を中心にさかんに造墓活動が行われる。各地域ごとに弥生時代以来の首長層の系譜をどう考えるかは重要な課題である。那珂川～御笠川流域では7基の前方後円墳がこの地域の首長墓の系譜を示している。それらは古墳時代のほぼ全時期を通じて継続し，全長50～80mがこの地域最大規模のものである。周辺の地域では今津湾に面する地域，宗像，津屋崎地域，御笠川の上流地域などがあり，隣接した地域の首長層の存在を窺わせている。老司古墳は那珂川流域のグループに所属し，那珂川と御笠川中～下流域の平野部を基盤とする集団の首長層とみられる。首長墓は全て那珂川流域に立地し，中～下流域の約10kmの範囲に群在している。このうち那珂川町，福岡市南区，春日市に所在する安徳大塚古墳，老司古墳，日拝塚古墳，貝徳寺古墳と，福岡市博多区に所在する那珂八幡古墳，東光寺剣塚古墳，

博多1号墳は約4㎞離れて別の群をなすが，古墳の時期などからみて，この地域を本貫とする一系列の首長墓の系譜と考えられる。その他に首長墓の可能性は春日市下白水大塚古墳と那珂川町裏田2号墳などにあるが，詳細は不明である。那珂八幡古墳は全長約75mであり，最古式の古墳に位置付けられる。その次の安徳大塚古墳は全長約64mを測る。博多1号墳は全長約65～70mに推定され，出土埴輪から5世紀前半に位置付けられる。貝徳寺古墳は全長約53mを測る。出土埴輪や須恵器から5世紀後半～末に位置付けられる。日拝塚古墳は全長約56mを測り，巨石を用いた単室の横穴式石室から多数の副葬，供献品が出土した。6世紀前半に位置付けられている。東光寺剣塚古墳は全長約75mを測り，複室の横穴式石室に石屋形を設けている。出土埴輪から6世紀後半に比定されている。この時期以降は前方後円墳の築造は見られないが，福岡市今里不動古墳や同穴観音古墳のように巨石を用いた横穴式石室を有する大形の円墳が築造されており，7世紀初頭までのこの地域の首長系譜を示している。

さて，福岡平野に隣接する今宿地域や宗像，津屋崎地域では4世紀後半に首長層の造墓活動がさかんとなるが，何れの地域も農耕地とは離れた海岸線に造墓している。宗像，津屋崎地域では沖ノ島の祭祀遺構の形成もほぼ同時期に開始されている。この地域は近畿地域と大陸や朝鮮半島とを繋ぐ重要な中継点としての位置にあった。この地域の首長層の成長は前時代からの海上交易と半島との交通路の掌握を含めた航海技術に負う所が大きいと考えられる。こうした北部九州の地域に初期の横穴系の石室が多数構築されている。福岡市老司古墳，鋤崎古墳，丸隈山古墳，さらに浜玉町谷口古墳などである。これらの共通した埋葬形態の導入は被葬者の活動基盤の関連や，それらの首長層の間にある種の同盟関係の存在を示している。また，福岡平野には6世紀前半に大和政権による「那津官家」修造の記録がある。福岡市比恵遺跡で検出された6世紀後半の大規模な官衙的遺構は，和歌山県鳴滝遺跡や大阪市難波宮址下層から検出された5世紀代の倉庫群と並んで地域を超えた，いうならば「国家的な」建造物であった可能性が高い。これが先の記録に登場する関連遺構かはなお不明であるが，この地域ではその後「筑紫太宰」の前史を経て太宰府の造営，整備と，大和政権の対外交渉の一大拠点造営が続いている。これらの施設の造営は同時に九州の徹底した地域支配の基礎造りの性格も有していた。

さて，老司古墳は那珂川流域の首長墓の中で三番目に築造されたと推定されるが，周辺地域と本地域内の古墳と異なる要素を幾つかもっている。まず，同時期の隣接した地域では海岸線に選地する例が増加するが，安徳大塚古墳と老司古墳は逆に平野奥部に選地している。また老司古墳に限ると本古墳群内ではその立地，古墳の主軸方向などがことごとく異なっている。こうした点のもつ意味は今後解決が必要な課題である。この古墳の被葬者が弥生時代以来，激動の絶えない北部九州の中心的地域にいて，かつ周辺の首長層との間にある種の同盟関係を保持していたとすれば，大陸，半島的な新たな埋葬型式を導入した首長層達の盟主的性格を有していたのかもしれない。本遺跡の調査と保護の持つ歴史的意義ははかりしれない。　　（吉留秀敏）

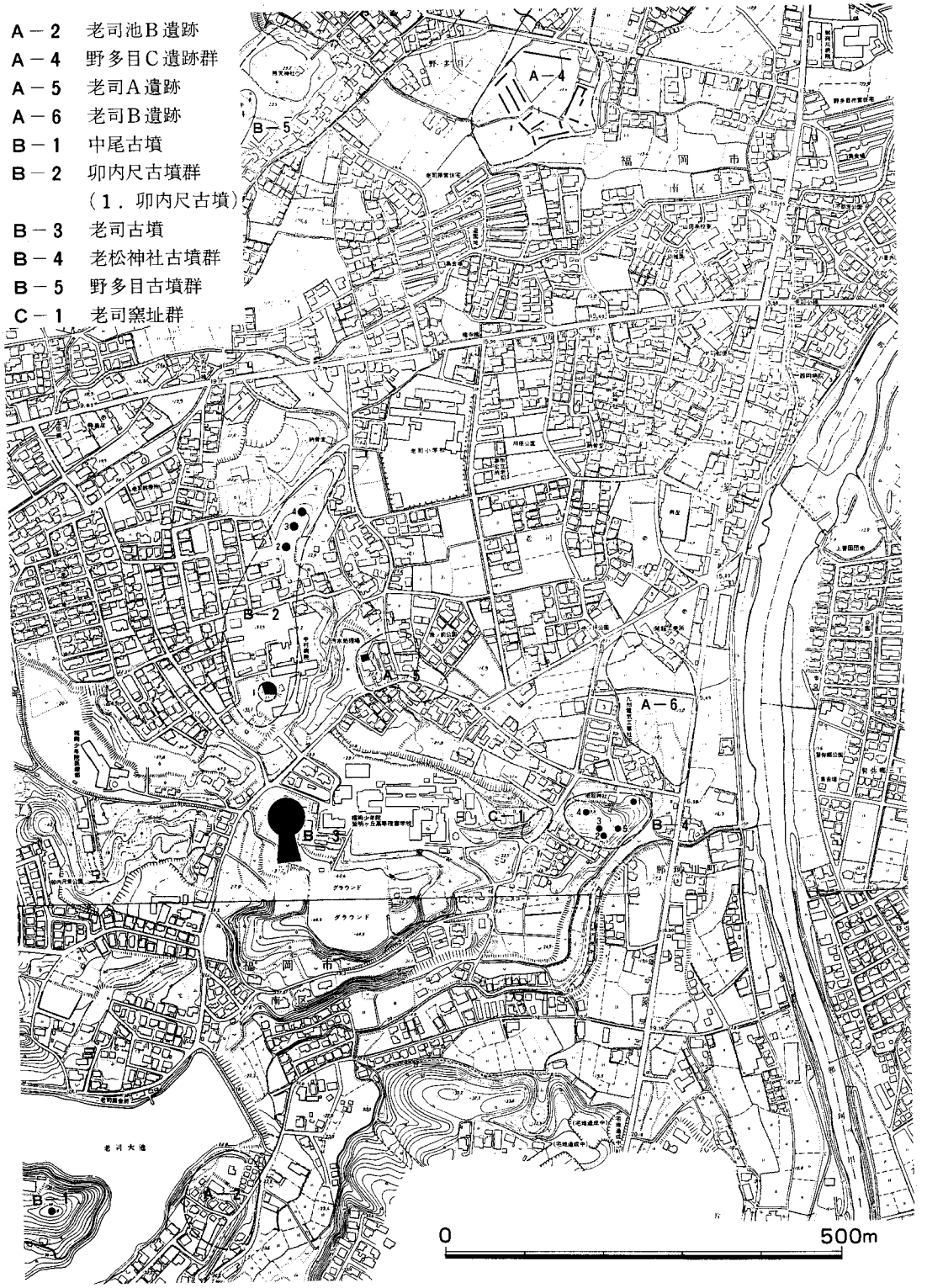
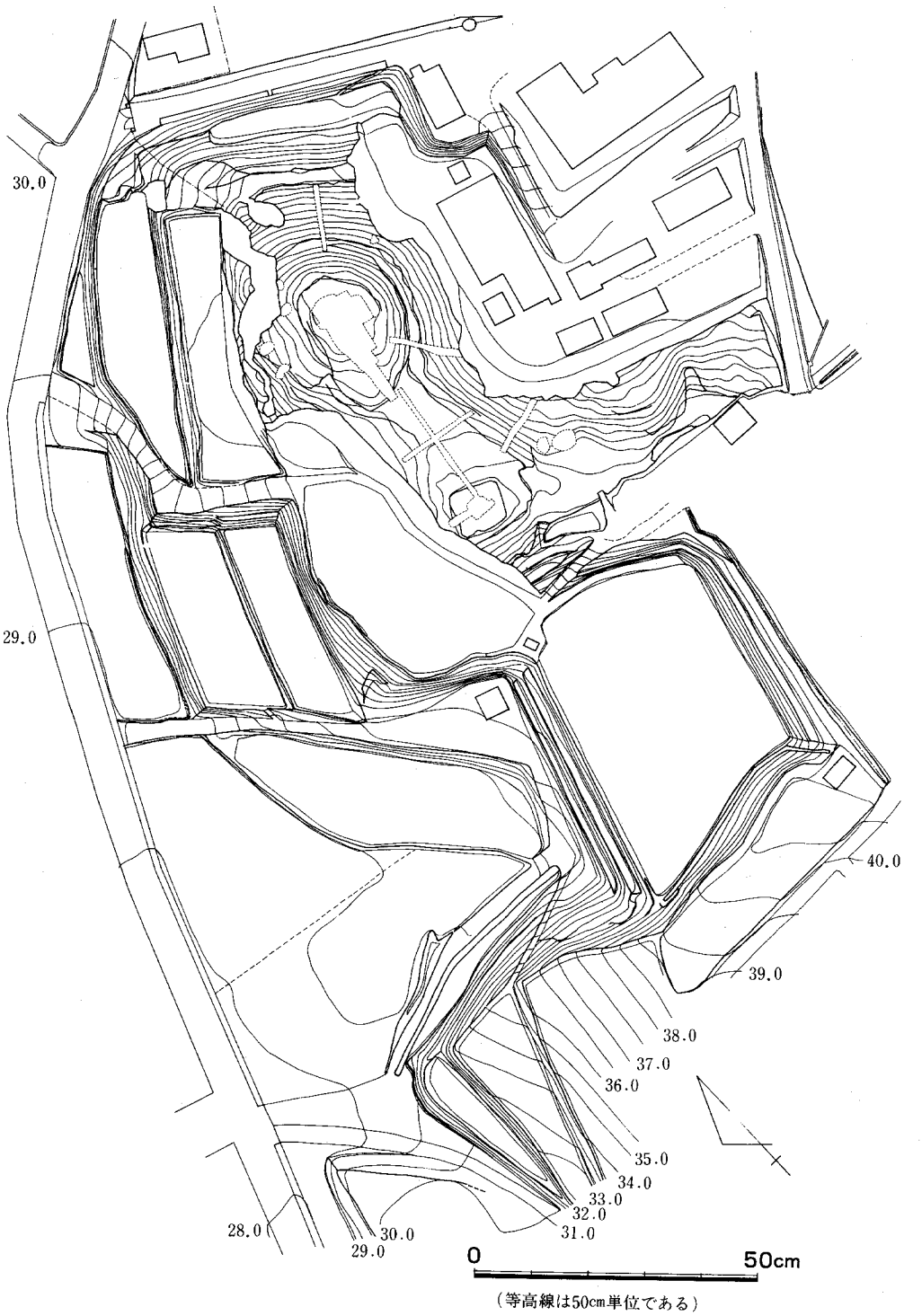


図2．　老司古墳と周辺の遺跡　（縮尺1／8000）



（等高線は50cm単位である）

図3． 老司古墳および周辺地形図 （縮尺1／1200）

II　老司古墳の調査経過

1．調査の経過

1）1965～1969年の発掘調査（図．4）

老司古墳の存在はすでにはやくから知られ，全長90mにも及ぶ大型前方後円墳であること，古式古墳としての特徴を備えていることなどから注目されてきた。福岡少年院の改築や敷地拡張工事のために古墳を乗せる丘陵が両側から削られて，次第に崖上に孤立する情況がすすんできた。そこで1965（昭和40）年夏，当時の福岡少年院長井上謙二郎氏の御厚意を得て墳形実測図の作成にとりかかった。森貞次郎・小田富士雄ら九州大学考古学研究室学生が中心となり県立福岡高校学生らの援助を得て，8月8日から11日まで，つづいて翌1966（昭和41）年4月6日に補測して完了した。当時後円部の盗掘穴から石室（のち第1号竪穴式石室となる）に出入することができ，遺物が保存されていることが確かめられた。そこで改めて発掘調査を計画し，九州大学考古学研究室の鏡山猛教授・岡崎敬助教授・森貞次郎講師・小田富士雄助手が調査担当者となって調査申請がなされて，1966（昭和41）年から1969（昭和44）年まで三次にわたる発掘調査を実施した。この間九州大学考古学研究室の大学院および学部学生が主体となり，福岡少年院の教官・生徒諸氏の労力奉仕を賜わった。また調査費用に関しても1次調査は調査員各自の自弁であったが，2次調査には福岡県教育委員会，3次調査には福岡市教育委員会の助成を受けるところがあった。

第1次調査〔1966年8月5日～8月14日〕

後円部第1号石室の発掘を行ない，古墳主軸に直交する竪穴式石室であること，その東隣に古墳主軸に平行する第2号竪穴式石室を発見調査した。さらに1号石室が後円部中心より北側に寄っているところから，中心部にさらにもう1基の石室を想定してトレンチ探索を行なったところ，3号石室の存在を確かめたが次回にまわすこととした。

第2次調査〔1967年8月5日～8月24日〕

後円部主軸線上にある第3号石室の発掘と，後円部墳丘をめぐる壺形埴輪・葺石の検出に主力をあげた。3号石室の南側小口部に階段状施設と前方部上面に通ずる墓道の検出，追葬の確認など予期せぬ成果によって当時5世紀初頭までのぼせうる最古の竪穴系横口式石室となった。また前方部がやや高まるところから試掘を行ない東西方位の第4号石室の存在を確認した。

第3次調査〔1969年3月10日～3月17日〕

第4号石室の発掘と西方に開く横口構造と墓道を検出した。そこで1号石室の調査所見から懸案となっていた1号石室西側小口部の再調査によって横口構造と墓道を検出した。また2号

石室の南側小口部も階段状構造となるので横口構造が予想されるが，再調査には至らなかった。さらに埴輪配列の追跡を行なって前回調査を補足した。かくして横穴式石室受容期の始源形態を示す重要な成果に加えて，豊富な副葬品を得て全調査を終了させ，将来の遺跡整備を待つこととなった。

（小田富士雄）

発掘調査関係者

予備調査参加者 森貞次郎　小田富士雄　石松好雄　前川威洋　宮小路賀宏　下条信行　橋口達也（九州大学考古学）　福岡高校生

第1次調査参加者 鏡山猛　岡崎敬　森　小田　下条　橋口　黒野肇　松本肇　安倍芳一（九州大学考古学）　佐野一（九州大学人類学）　宮小路（福岡県教育委員会）　石松（奈良国立文化財研究所）　長洋一（福岡高校教諭）　山内幸子（双葉女学院教諭）　山崎正法（香椎高校教諭）　福岡高校生

第2次調査参加者 鏡山　岡崎　森　小田　下条　亀井明徳　佐田茂　橋口　上田和子　高倉洋彰　西田京子　清水直美　古賀紀美代　松本　藤口健二　貞方敏　安倍（九州大学考古学）　佐野一　石松　福岡高校生

第3次調査参加者 鏡山　岡崎　森　小田　下条　亀井　佐田　橋口　塩屋勝利　高倉　藤口　真野和夫　徳永博行　貞方　岩崎二郎　松本　西健一郎　呉明勲（九州大学考古学）　永井昌文　佐野（九州大学人類学）　武末純一（九州大学教養部）　福岡高校生

福岡少年院 井上謙二郎　柳沢昇　竹村末光　渡辺次郎　鶴丸重海　少年院教官諸氏　少年院生徒各位

福岡県教育委員会 結城庸夫　渡辺正気　松岡史　宮小路賀宏　柳田康雄

福岡市教育委員会 長東正之　青木嵩　清水義彦　石橋博　山口俊二

2．1987年の発掘調査

1）調査の経過

1965～1969年の調査成果を受けて，福岡市教育委員会では早急に保存，整備を行う方針をもった。そのために調査が終了した各石室や調査区は埋め戻されず，保存措置を待つこととなった。しかし，本古墳が少年院敷地内にあり，開発行為が行われないことや，1960年代後半からの高度成長に伴う開発行為が進み，福岡市でも都市基盤整備を開始したため，当教育委員会はその対応に追われることとなった。古墳への対応は順延となった。1970年代後半には，石室の一部崩壊が少年院側から報じられ，早急の対応が要望された。1976年から本市では重要遺跡確認調査として今宿地区の古墳，遺跡の調査整備を進め，1985年からは那珂川流域の前方後円墳の調査を行うこととなった。初年度は那珂八幡古墳の調査が行われた。老司古墳については少

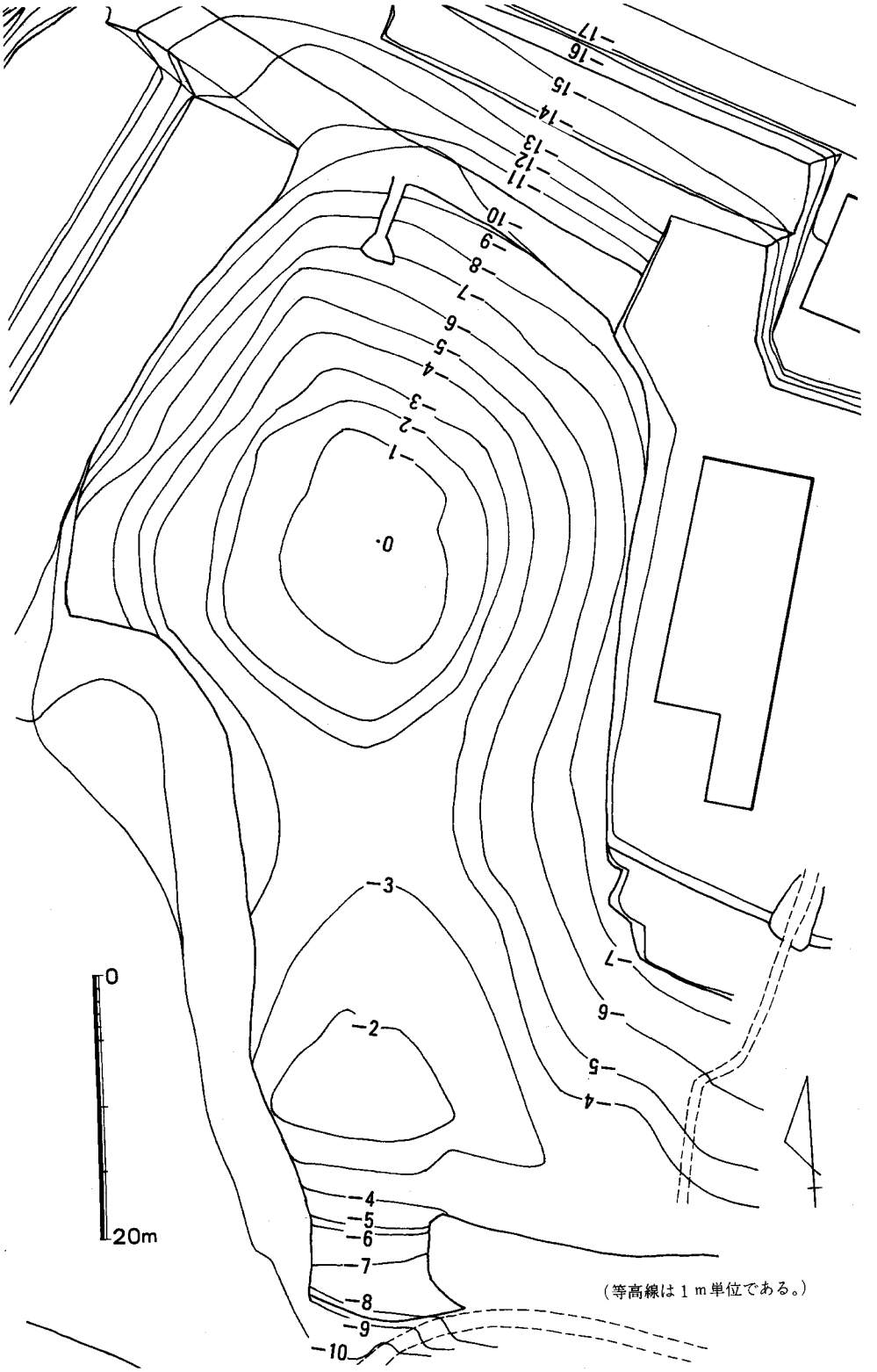


図4. 老司古墳地形図(1965年) (縮尺1／500)

年院，文化庁，福岡県教育委員会の保存策に関する要請も踏まえて，国指定史蹟としての保存，整備という方針を持つに至った。その方針に沿い，古墳規模の確定，石室の埋め戻し，周辺地形図の作成を進め指定域を確定するための資料を整えることになった。そのための調査は1986～1987年度の重要遺跡確認調査とした。調査については1987年３月５日調査指導委員会を開催し，指導を仰いだ。ここでは墳丘規模，墳丘および石室の構築方法の究明，隣接する卯内尺古墳の調査，報告書の作成が要請された。調査は1987年３月６日から６月29日まで約４カ月間実施した。

調査はまず，伐採と１～４号石室の清掃，墳頂部に残されていた前回の排土を除去することから開始した。また，その間に周辺を含めた多角測量を開始し，同時に近接した測量用水準点から標高の移動も行い測量に備えた。墳丘測量は平板測量により実施した。縮尺は１/100とし，等高線は50cmを単位と一部では25cm線も使用した。発掘調査は墳丘のこれ以上の破壊を可能な限り避けるため，調査範囲を最小限に押さえることを第一の目的とした。しかし，その上で墳丘規模，形態，さらに墳丘の構築状態把握を基本的な目標とした。こうした点から，前調査時のトレンチを利用し，必要最小限のトレンチをこれにくわえ設定することにした。また，前調査時の調査区壁の観察によって墳丘盛土の観察，検討を進めた。また，この過程で必要な場合は最小限のトレンチを設けることとした。

写真撮影は地上写真，アドバルーン撮影，航空写真により実施した。

なお，調査開始後初期に墳丘上に須恵器片の出土が認められた。その所属を検討するために分布状態，出土状態の調査も進めた。

自然科学的調査として石材を西南学院大学唐木田芳文氏に，須恵器片を奈良教育大学三辻利一氏に，出土人骨を九州大学医学部永井昌文，土井直美，田中良之氏に，赤色顔料を福岡市埋蔵文化財センター本田光子氏に調査を依頼した。また，九州大学理学部下山正一氏に古墳の立地する周辺の段丘形成などの地質的成果と墳丘盛土の地質的検討について教示いただいた。

調査終了後石室の埋め戻しを行なった。石室の保全には発泡ウレタンを使用した。なお，埋め戻しに際しては福岡市埋蔵文化第センター後藤直，浜石哲也氏の全面的協力をいただいた。

当初予定していた卯内尺古墳の調査については期間と調査費用の問題からそれを断念した。

２）調査体制と組織

1987年の調査にあたって以下の調査組織を構成した。調査に際しては福岡少年院の諸先生方を始め，前回までの調査に係わられた諸先生方の指導助言をいただいた。あわせて協力に謝意を表します。

調査主体　福岡市教育委員会文化部

教育長　佐藤善郎　　文化部長　川崎賢治　　埋蔵文化財課長　柳田純孝　　第１係長　折尾学　第２係長　飛高憲雄　　文化財主事　山崎純男　二宮忠司　横山邦継　　福岡市埋蔵文化財センター所長　後藤直　　文化財主事　柳沢一男　　福岡市立歴史資料館文化財主事　塩屋

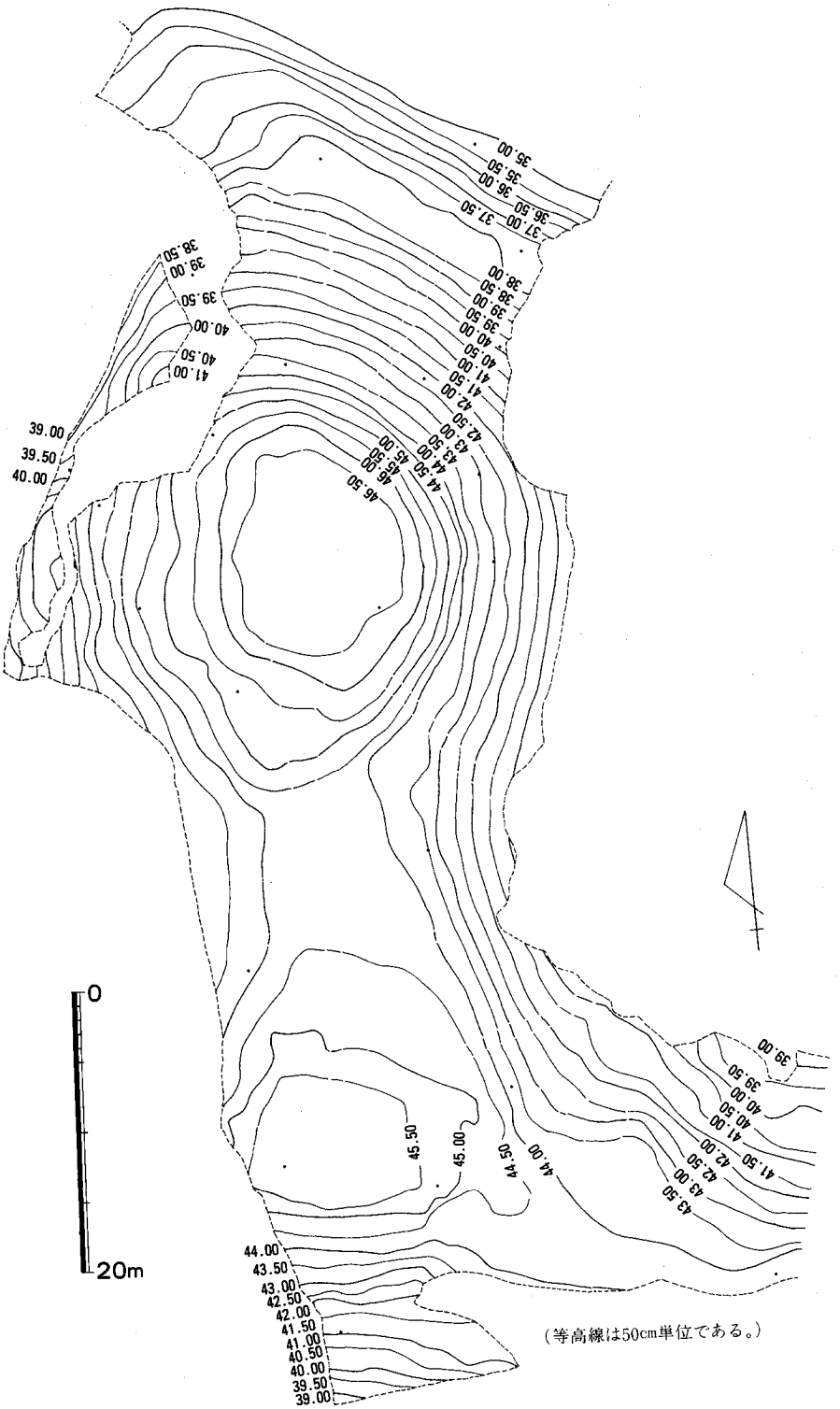


図5. 老司古墳地形図(1987年) (縮尺1／500)

勝利

調査指導員　岡崎敬（九州大学名誉教授）　森貞次郎（九州産業大学）　横山浩一（九州大学教授）　西谷正（九州大学教授）　小田富士雄（福岡大学教授）　下条信行（愛媛大学教授）　宮小路賀宏（福岡県教育庁文化課課長補佐）　栗原和彦（福岡県教育庁文化課参事補佐兼記念物係長）　浜田信也（福岡県教育庁文化課技術主査）

調査協力者（当時）　川原純之　佐藤信（文化庁）　大塚初重（明治大学教授）　平野邦雄（東京女子大学）　唐木田芳文（西南学院大学教授）　永井昌文（九州大学医学部教授）　近藤義郎（岡山大学教授）　都出比呂志（大阪大学教授）　大澤正己（新日鉄）　三島格　渡辺正気　青木嵩　志鶴幸弘　三辻利一（奈良教育大学教授）　佐田茂（東海大学助教授）　高倉洋彰　横田義章（九州歴史資料館）　柳田康雄，橋口達也（福岡県教育庁文化課）　木村幾多郎（佐賀大学）　石野博信，河上邦彦（橿原考古学研究所）　土肥直美，田中良之（九州大学医学部助手）　本田光子，田崎博之（福岡市埋蔵文化財センター）　宇垣匡雅（岡山県教育委員会文化課）　藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）　渡辺芳郎（九州大学助手）　下山正一（九州大学助手）　西健一郎（九州大学助手）　新納泉（岡山大学助手）

調査事務担当　岸田隆，松延良文（福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課）

調査担当　山口譲治　吉留秀敏（第２係）

調査補助員　城戸康利　上方高弘　前田達男

李弘鐘　古野徳久　土井基司（九州大学大学院）　小沢正一　小沢重雄（早稲田大学大学院）　北條芳隆（広島大学大学院）　朴廣春（熊本大学大学院）　牟田裕二　池ノ上宏　中村清治　板坂和博（福岡大学）　棚田昭二　徳永博文（別府大学）　西川徹（山口大学）　太田睦　五百路裕之（九州大学）

1965～1969年の調査

遺跡調査番号　6602　遺跡略号　ＲＺＫ　調査地地籍　福岡市老司字大谷

分布地図番号　043－Ｂ３　調査対象面積　2000㎡　調査面積　200㎡

調査期間　1965年８月８日～1969年３月17日（延べ43日）

1987年の調査

遺跡調査番号　8658　遺跡略号　ＲＺＫ　調査地地籍　福岡市南区老司571

分布地図番号　043－Ｂ３　調査対象面積　2000㎡　調査面積　200㎡

調査期間　1987年３月６日～1987年６月29日（延べ90日）

（山口譲治，吉留秀敏）

III　墳丘の調査

1．前方部の調査（図6～9，図版2～11）

1966～1969年の前方部の調査は，墳丘規模や形態の確認を目的とし，前方部を十字に切るようにトレンチを設けた。また，前方部東側斜面に，墳端の確認を目的とし，前方部側辺に直交するトレンチを設けた。トレンチは何れも幅1mの規模である。まず墳頂部に前方部の主軸に沿って後円部と接する地点から，4号石室の墓壙までの約24mの間に第1トレンチが設定された。次に同幅で後円部に接する地点から10m離れた位置に，先のトレンチに直交して第2トレンチが設定された。さらに東側斜面に第3トレンチが設定された。その結果，前方部の各辺の墳端は明らかにされなかったものの，前方部平坦面や東側斜面に葺石（後述の「敷石」を含む）が良好に残存しているのが確認された。

1987年の調査では，前回確認できなかった墳丘規模と，前方部の形態と構造を明らかにすることを目的として実施した。なお，調査にあたってはこれ以上の破壊を極力避けるために，トレンチの設定は最小限に留どめるように注意し，以下の10カ所のトレンチを設けた。まず，墳端の残存が予測された前方部東側墳端の確認のため，斜面に直交してA，B，Cトレンチを設けた。また，第3トレンチの斜面部を再調査し，Fトレンチとした。次に，前方部前面の墳端の確認を目的としD，G，Qトレンチを設けた。さらに前方部上の4号石室の周囲の壇状の構造を調査するのを目的としE，Iトレンチを設けた。同様の意味で第1トレンチの南端を再調査し，Hトレンチとした。以下その調査結果を順に報告する。

Aトレンチ　Aトレンチは墳丘の東側から伸る丘陵と前方部東側コーナー部が接する部分である。調査前の状況は西側は墳丘に向って約10°の傾斜でゆるく立ち上り，東側はややひろい平坦面を呈していた。この部分では葺石の端部と，古墳築造に伴う丘陵切断などの地形改変の確認を注意した。まず，前方部主軸に対してほぼ直交して幅1mのトレンチを設けたが，その結果トレンチ西側で拳大の円礫を用いた葺石が現われた。その葺石の最下段には20～30cmの比較的大きな石を用いた根石と判断される石列が検出された。石列はほぼ直線であり，その方向はN－06°－Eを測る。葺石はこの根石の上に，傾斜約26°で構築されている。根石の南北方向での延長をみるためにこのAトレンチを拡張した。その結果，根石は全体で約4.0m確認し，南側は近年の攪乱と削平によって葺石と共に失われている。また，北側の拡張部分でその石列はとぎれ，その部分から根石は平面で約60°振れて斜面下方へのびている。葺石，根石は全て花崗岩円礫である。トレンチ中央付近での根石の下面は標高44.0mでほぼ水平であるが，検出範囲の北端に向って僅かに下る。葺石および根石をはがしての調査は実施していないが，根石より外方の土

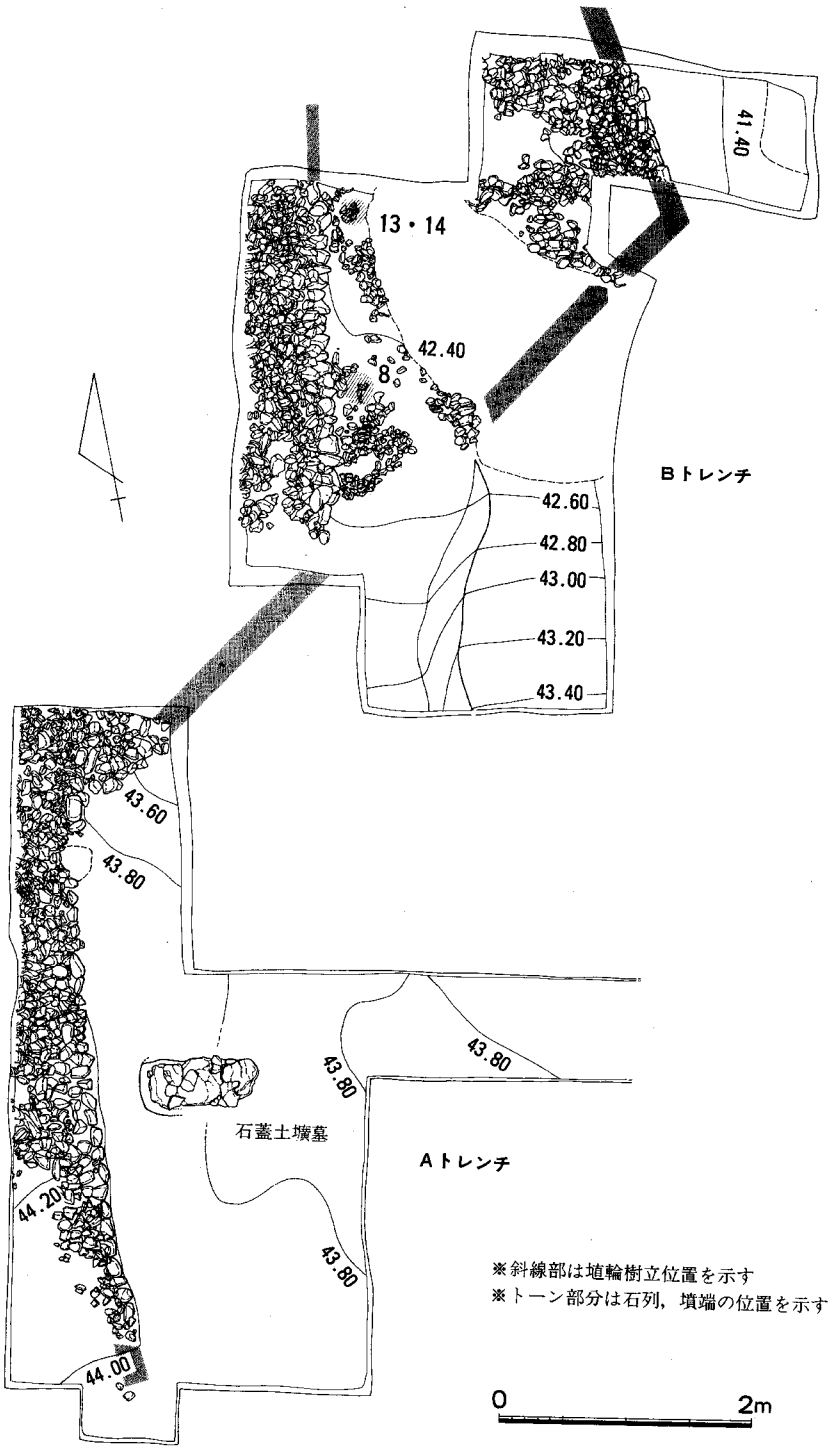
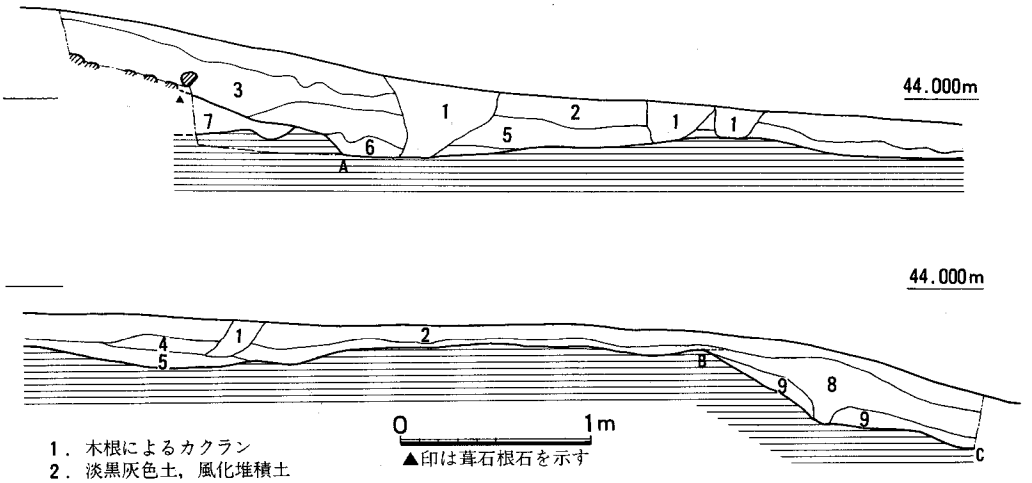


図6． A・Bトレンチ遺構検出状態 （縮尺1／60）



1．木根によるカクラン
2．淡黒灰色土，風化堆積土
3．黄褐色砂質土，4㎜程の砂粒を含む流出土
4．黄褐色土（5より赤味がかる）
5．暗黄褐色土，微量に有機質を含む，汚い土，2層とのカクランと思われる，砂粒は目立たない
6．淡橙色砂質土，黄灰色ブロックと混入
7．明黄褐色砂質土，黄灰色ブロック混入，しまりは悪い，ややピンクがかる墳丘盛土
8．黄灰色土，下部にカーボン混入，上部がやや明るい色調
9．黄赤褐色粘性土，地山との堆移層

図7． Aトレンチ北壁土層断面図（縮尺1／40）

層観察と攪乱部分での状況からみて，葺石と根石は地山整形面に直接構築されるのではなく，一定の盛土の上に構築されるとみられた。なお，根石より下方には葺石がなく，約15～20°盛土の傾斜が0.5～0.8m続いた後，地山整形による平坦面に達する。

葺石，根石より東側に拡がる平坦面は，土層図におけるA－B間を示し，根石から7.7～8.0mまでの範囲に認められる。土層図におけるB－C間は自然堆積状態を示し，地山整形は認められない。平坦面における地山の状態は東側で粘質化し，西側に向ってしだいに新鮮な花崗岩媒乱土となり，全体として西側に向って地山の深部に相当する性状を示している。付近がかつて連続した丘陵であり，前方部側に向って高まる地形であったと推定される。なお，この平坦面は東西に7～8m，南側ではCトレンチの南側の崖面に達し，南北10m以上の拡がりを有している。平坦面上はゆるい凹凸があり，標高43.6～43.8mを測る。この平坦面上には根石から0.4m離れた位置に石蓋土壙墓が1基が検出された。なお，平坦面の形成時期は，葺石と根石の構築がこの地山整形面の盛土上からおこなわれていることと，平坦面上の土層の堆積状態や石蓋土壙墓が地山整形面の上部に堆積した流土上から設けられていることなどから墳丘築造と前後した段階と推定される。

Bトレンチ　（図6，図版6）　Aトレンチで確認された葺石の北側の延長をつかむために，北側の斜面に設けたトレンチである。植えられている樹木を避けるために平面は不定形となっている。トレンチ内は中央に攪乱があるものの，葺石の遺存状態は比較的良好であった。本トレンチ内で前方部東側の葺石とその端部の根石列を確認した。また，壺形埴輪が樹立する段築一段目の平坦面を検出した。Aトレンチから斜めに延びる石列は，この平坦面で角度をさらに

約26°東よりに振り，墳端の根石列に達するとみられる。墳端の石列は標高41.5mでほぼ水平になる。これより東側は，地山整形による平坦面となっている。この平坦面は外側に1.2m以上拡がり，標高約41.4mを測る。段築一段目の平坦面は幅0.8～1.0mあり，直径5cm以下を主体とする小円礫を敷き詰めている。この平坦面は標高42.3～42.6mを測り，南側にゆるく下る。この平坦面には二段目葺石の根石列に接するように，壺形埴輪が樹立されている。埴輪は約1.5m離れて2基を検出した。なお，Aトレンチ東側の平坦面と本トレンチ墳端外方の平坦面との間には約2.2～2.4mの落差があり，連続しない。傾斜は自然地形によると推定された。この傾斜面のうち葺石に近い部分には，斜面に直交して約0.2～0.3mの段差が設けられている。

Cトレンチ　Aトレンチで検出した葺石の南側への延長，すなわち前方部東側コーナー部分の確認を目的としてAトレンチの南側に設けた。南側は近年の造成により2m近い崖線となっている。調査の結果，葺石はすでに攪乱によって基底石から失われていた。上部の攪乱土中から葺石に使用されたと見られる円礫が少量出土したに過ぎない。本トレンチの東側部分はAトレンチと同様に地山整形による平坦面が認められた。

Fトレンチ　旧第3トレンチの再調査である。前方部東側斜面に直交して設けられている。前調査時以降の流出やその後の植栽により葺石の保存状態は良好ではないが，現地表下0.2～0.4mの深さで葺石の遺存が確められた。ここでは標高44.1～41.8m付近までが構築状態を残している。これより下位の斜面にも多数の円礫が分布していたが，上部からの転石と判断された。なお，この葺石間では段築面はない。標高41.9～42.0m付近で他の葺石より一まわり大きな円礫により石列が設けられている。これはA，Bトレンチの基底石に類似したものである。この石列は南側に向って僅かに高くなり，その方向から南側のBトレンチの墳丘二段目の基底石に連続すると考えられる。これらの葺石や基底石は，地山面に僅かな覆土を挟むだけであり，地山整形後にほぼ直接設置されたと推定される。なお，地山整形面は葺石のない標高40.8～41.0m付近まで認められる。これより下方はやや斜面が緩やかになり，腐植土の形成が著しく，自然堆積状態を示す。

Dトレンチ　前方部前面の墳端を確認する目的で，A，Cトレンチの西側に南北方向に設定した。調査の結果，本トレンチでは攪乱により葺石，地山整形は遺存していないことがわかった。

Gトレンチ（図8）　Dトレンチと同様の目的で古墳主軸線に沿って4号石室の墓壙南側から斜面下方まで設けた。4号石室南側の緩斜面では葺石が検出された。それは標高45.6～45.9mの部分にあり，傾斜約30°を測る。標高45.65mの付近にやや大きい石により基底石の石列がほぼ東西に設けられている。その石列を境界とし，南側には約5°の僅かに傾斜をもつ平坦面が設けられている。土層の観察から標高45.25mより上は墳丘盛土と判断された。したがってこれらの各面は盛土上に構築されたものである。この斜面，平坦面にはほぼ全面にわたって円礫が葺かれている。なお，石列より北側約50cm，南側約80cm付近で削平，攪乱により葺石は除去され，遺存していない。平坦面には壺形埴輪の樹立が確認された。壺形埴輪は石列より20～30cm離れ

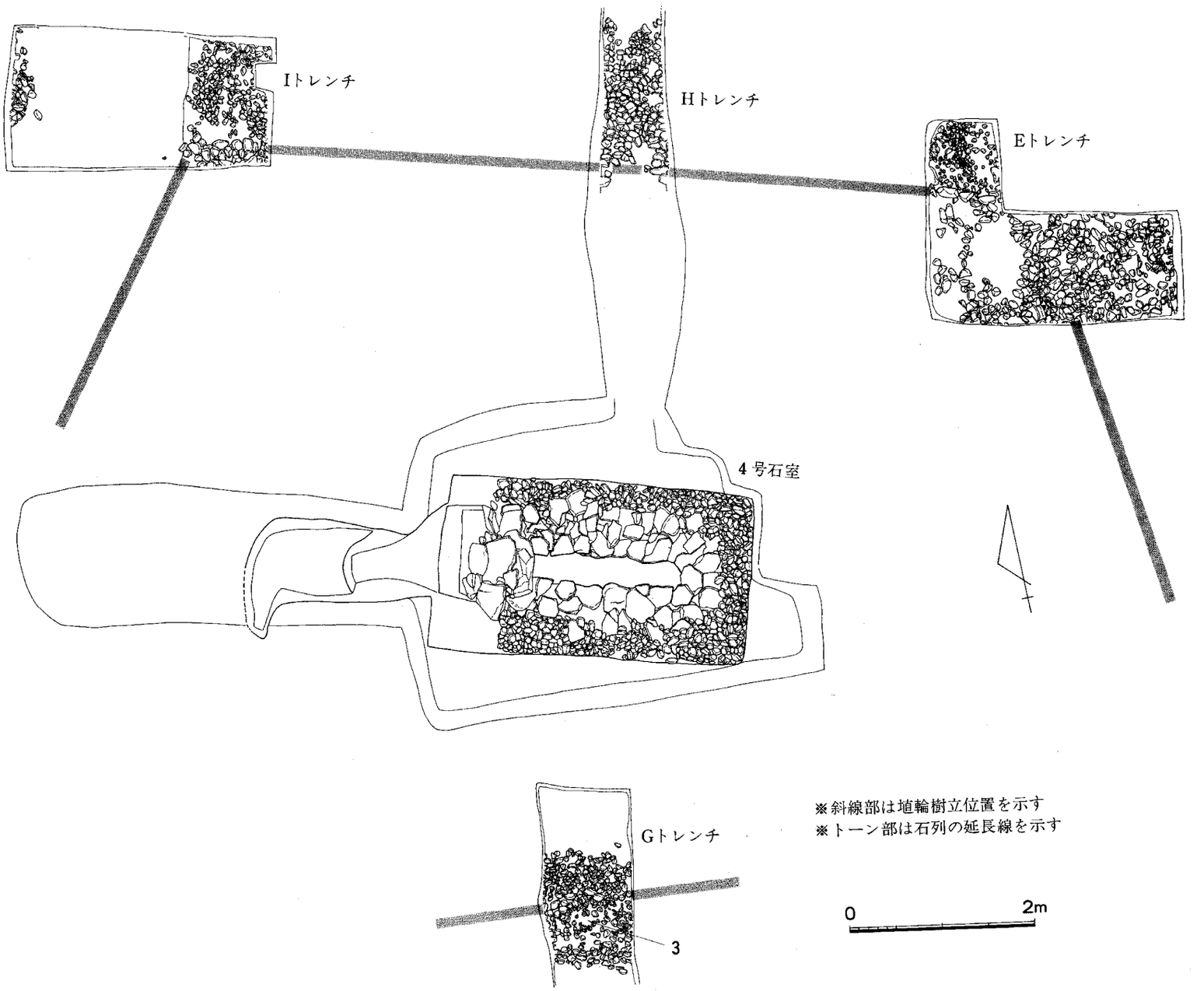


図8.　4号石室　E・G・H・Iトレンチ遺構検出状態　(縮尺1／60)

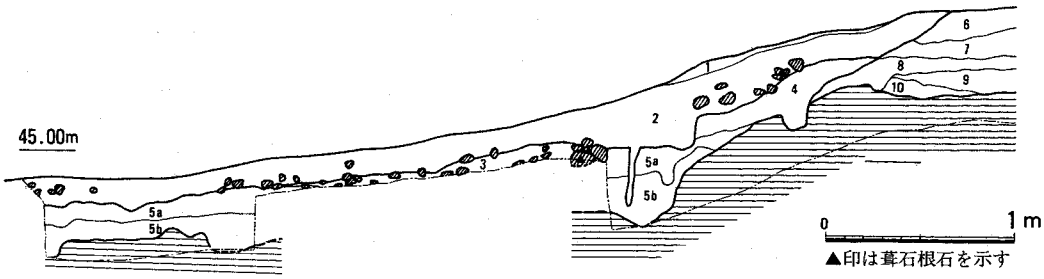
た位置で，敷石を除去した深さ５㎝の穴に底部を埋め込んであった。平坦面より南側は約7.5m下の道路部分まで約30～35°の急斜面となるが，盛土，葺石などは残存しない。斜面中の数カ所で地山整形らしい段を認めたが，埋土や周辺地形から古墳に伴なうものとするにはやや疑問があり，むしろ近年の造成によるものの可能性が強い。

Ｑトレンチ　前方部前面をボーリング探査した結果，斜面西側に円礫が集中分布している地点が確かめられた。この部分に葺石の遺存する可能性が生じたので，その構造と墳端の確認を目的にトレンチを設けた。調査の結果，円礫は攪乱によって動いたものであることがわかった。

Ｅトレンチ（図８，図版４）　Ｇトレンチの調査結果から４号石室のある前方部先端部分の高まりは盛土によって構築された壇状の遺構であると推定されたため，その構造を知る目的で設けた。トレンチは現地表で略方形の形状を呈する壇の北東側隅部にＬ字状に設定した。その結果地表下20～30㎝の深さにおいて，壇の基底部と推定される石列を検出した。石列は20～30㎝の円礫で造られ，調査区内で平面的に110～115°の角度で折れている。標高は45.0～45.1m付近である。この石列より内側は約15～20°の斜面で立ち上がり，葺石が施される。石列の外方すなわち北側～東側は前方部頂平坦面である。この平坦面にはほぼ全面に円礫が敷かれている。この円礫上面には比高差がほとんどない。円礫は葺石とほぼ同様の大きさであるが，石列の北側では直径５㎝以下のものが多く使用されている。

Ｉトレンチ　Ｅトレンチと同様の目的で。壇の北西隅部に設けた。その結果，Ｅトレンチと同じような石列を検出した。石列は調査区南東端に僅かにかかって検出されたために，特に斜面側での構造は不明である。石列は20～30㎝の円礫を使用し，標高45.0m付近に設けられている。石列の折れ曲る角度は不明である。しかし，その折れる地点はＥトレンチと比べると，古墳主軸に対して非対称となり，壇の基底部分での平面形が不整方形を呈していると判断される。石列の北側の前方部頂平坦面には，直径10㎝以下のやや小ぶりの円礫が敷きつめてある。

Ｈトレンチ（図９）　旧第１トレンチの南側部分であり，４号石室の墓壙に達するトレンチである。前調査時に壇を掘り切って設けられており，この部分の地山整形，墳丘盛土を観察するために再調査を実施した。まず，トレンチ内ではＥ，Ｉトレンチに連続するとみられる石列が，標高45.1m付近で確認され，その北側の前方部頂平坦面に円礫が敷きつめた状態で検出された。石列より南側の葺石はトレンチ調査の際に除去されていた。土層の観察では地山整形の後，その上に20～50㎝の墳丘盛土を行ない，壇，葺石などの構築を行っていることがわかる。地山である花崗岩媒乱土層上面は，腐植や攪乱によって一部に凹凸が認められる。地山上面は前方部頂平坦面でほぼ平坦であり，石列の約20㎝南側に向って５°以下の傾斜で緩く上る。この部分の標高は44.5～44.7mである。地山はその地点から約30°の傾斜で南側に高まり，さらに標高45.4m付近で平坦となり，壇の基礎を形成する。盛土には前方部頂平坦面で比較的新鮮な地山の二次堆積物が，壇上面とその斜面ではやや汚れた地山二次堆積物が使用されている。盛土の構築は堅固では



1．橙灰色土，灰白色粘土粒含む（前回調査時の廃土）
2．明黒灰色土（腐植土・旧表土）
3．黄褐色砂質土，石英粒多い，水分含むと粘性あり
4．橙褐色砂質土，やや風化進む
5a．橙褐色土，やや粘質
5b．同上，やや暗色
6．橙灰白色砂質土
7．橙灰褐色砂質土，より新鮮（石英・長石含む）
8．明茶褐色土
9．茶灰褐色砂質土
10．茶灰褐色土

1～3：流土，表土　4・5：前方部墳丘盛土
6～10：前方部壇墳丘盛土

図9．　Hトレンチ東壁土層図　（縮尺1／40）

ない。盛土の厚さは前方部頂平坦面で約20～30cm，壇斜面部で約10～20cmを測る。壇頂部の盛土上面は削平されており，全体の層厚が不明であるが，現状で最大50cm強の盛土が認められる。

2．後円部の調査（図10～13，図版6・9～11）

1966～1969年の調査では，後円部の規模と構造を確認するためにくびれ部に近い後円部東側斜面に第4トレンチ，後円部後方の斜面に第5トレンチを設けた。何れも幅1mの規模である。その結果，墳頂部より－3.5～－4.2m付近に段築面（後述の2段目平坦面）と埴輪列を検出した。しかし，それより下方の段築面の有無や墳端の確認はできなかった。1987年の調査ではその追跡を目的とし，前回の調査トレンチの再調査とともに，新たに2カ所のトレンチを後円部斜面に設けて実施した。その際第4トレンチをKトレンチ，第5トレンチをLトレンチとした。また，Lトレンチの西側にM，Nトレンチを設けた。

後円部頂では崖状に遺存していた1，3号石室西側の調査区壁と，3号石室墓道の両壁を清掃し，後円部墳丘盛土の南北方向での観察を行なった。また，3号石室の東側にOトレンチ，西側にPトレンチを設け，同様に東西方向での盛土の観察を行なった。

Kトレンチ　旧第4トレンチの再調査である。くびれ部に近い後円部東側斜面に直交して設けられている。前調査時以降の流出のため，特に斜面上部での葺石の保存状態は悪い。トレンチの上端と下部に良好に遺存した葺石が確認された。まず，トレンチ上部の標高43.85m付近で比較的大きな石を用いた石列が検出された。石列の西側は約33°の急斜面となり，全面に葺石が認められる。東側には約1mほど平坦となり，段築面と推定された。この石列は後述のR，T調査区において，前

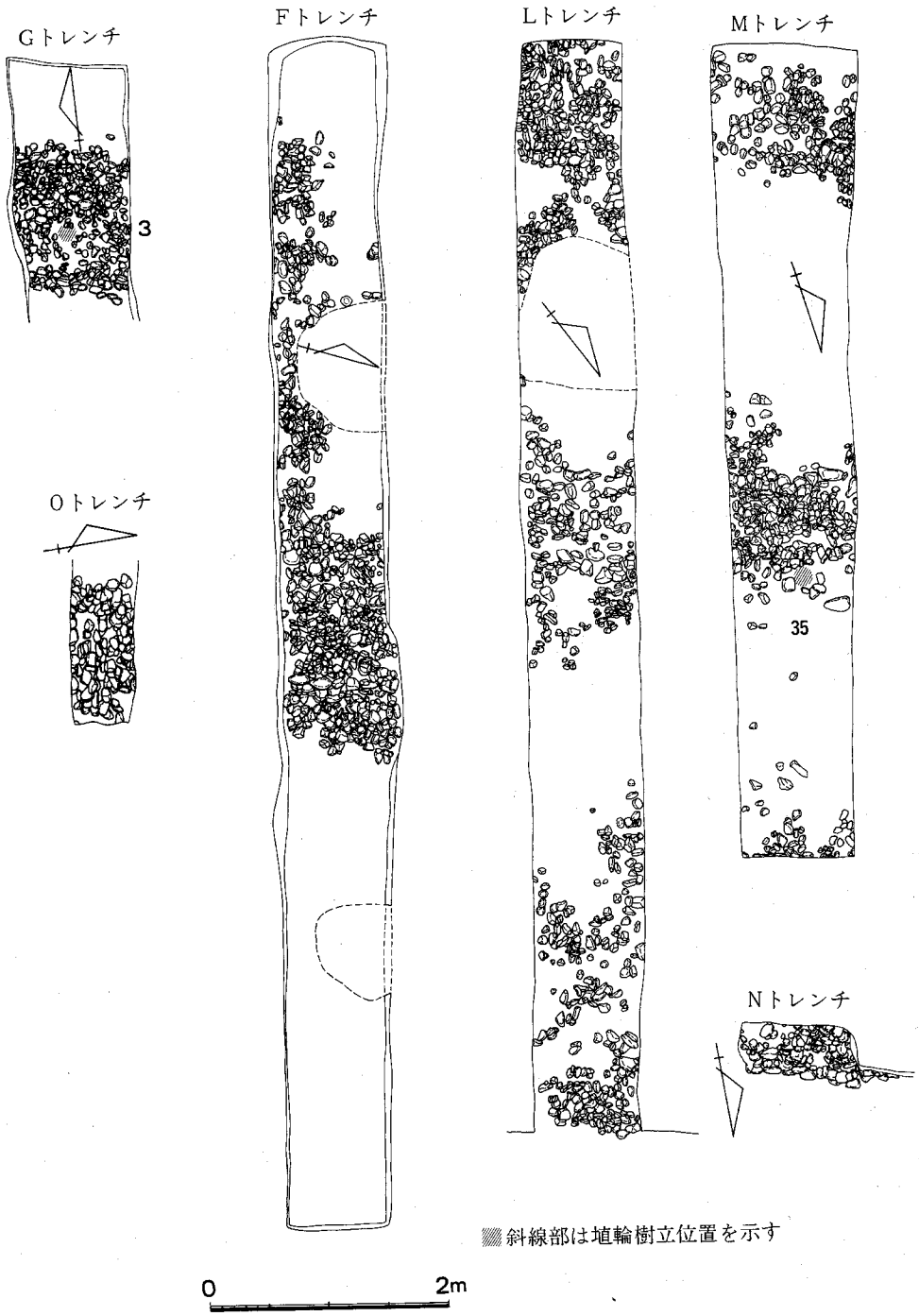


図10.　各トレンチの遺構検出状態　(縮尺１／60)

方部平坦面へ連続するのが確認され，後円部二段目の段築面と判断された。この部分から約7.7mまでは約20～22°の傾斜で下り，遺存部分では全面に葺石が構築されている。また，先の石列から8.7mの位置で比較的大きな石を用いた石列が確認された。石列から0.8～0.9mで崖線に達する。石列下端の標高は41.05m付近であり，走行はおおよそN－10°－Eである。この石列より東側は約10～12°の緩い傾斜であり，その上面には直径10cm以下の小円礫が散布していた。

Lトレンチ　旧第5トレンチ北側の再調査である。後円部後方の斜面に直行して設けられている。1987年の調査では前調査時に検出された平坦面の外縁部（以下では「a点」とする）から，14.5mの長さで設定した。標高41.0～41.5m付近に前調査時以後の攪乱（犬の埋葬）があり，また標高37.8～36.6m付近は幅約2.5mの道路跡があり，墳丘斜面が荒されている。さらに葺石の流出した部分も多い。しかし，葺石の遺存は予想以上に良好であった。トレンチ上半部の傾斜は約27°を測り，ほぼ全面に葺石が構築されている。葺石が一旦途切れる付近，a点から約5.3mの位置に，比較的大きな石を用いた石列が検出された。標高は40.25m付近である。石列の東側は攪乱により一部が動いたり，失われているが，その方向は墳丘斜面にほぼ直行してしている。ちなみに，a点とこの石列との比高差は約2.6mを測る。石列の北側には幅約50cmほど傾斜の緩い部分がある。この部分には周辺の葺石より小さい直径5cm以下の小円礫が散布している。この面の傾斜角は計測が困難である。この緩斜面は標高40.1～40.2m付近で不明確となり，それより斜面下方には約30°の傾斜面をなす。標高39.0～37.9m付近は再び葺石が遺存し，a点から約10.2mの地点で道路跡の切り通しに達する。これらの葺石は攪乱などの観察から，地山上に直接か5cm以下の堆積物を介して構築されている。なお，a点から約12.2mの地点から以北は道路の削平から免れているが，葺石はなく，地山とその上部の堆積土も自然状態のままであり，墳丘外と判断された。

Mトレンチ　Lトレンチで検出された標高40.25m付近の石列と緩斜面の確認と追跡を目的とし，Lトレンチから4～5m西側の後円部後方斜面に直行して設けた長さ約7mのトレンチである。調査の結果はLトレンチとほぼ同様であり，石列と緩斜面をより明瞭に検出することができた。石列はa点から約5.1mの位置の標高40.50m付近にあたる。石列はトレンチに直行して検出された。石列の北側は40～50cmの幅の緩斜面があり，5cm以下の小円礫が一部を敷石状に散布していた。石列の南側は約27～30°の斜面であり，葺石が遺存していた。また緩斜面より南側も30°前後の傾斜となり，標高39.6m以下では葺石が良好に遺存している。なお，本トレンチの緩斜面では，壺形埴輪の樹立が認められた。これは石列に接する位置にあり，小円礫上面から地山を穿つ約10cmの深さの穴に底部を埋め込んであった。以上の状況から，この石列の緩斜面は後円部一段目の段築面を形成する平坦面と推定される。なお，本トレンチの石列上方の葺石中に，花崗岩円礫以外の石材である玄武岩板石が1点認められた。

Nトレンチ（図版6）　L，Mトレンチで確認できなかった後円部後方の墳端の確認を目的と

し，葺石が最も外方まで遺存する部分に設けた。現存する樹木の間隙を縫い，道路跡の切り通しとの間に長さ0.5mの小規模のトレンチを設けた。その結果，崖線に接するように石列を検出した。石列の石は周囲の葺石より比較的大きな石の長軸を横位に据え，並べている。この石列はａ点から約11.2mの位置の標高37.8m付近にあたる。石列は調査区にほぼ直行している。石列より南側は約30°の傾斜であり，葺石が良好に遺存している。切り通しの断面観察では石列の直下は地山であり，地山整形面に直接石組みを行っていると推定された。石列より外方の構造は不明である。

1，3号石室西側壁断面の土層観察（図11）　後円部の１～３号石室の埋め戻しに先立ち，残されていた壁面の清掃を進め，墳丘盛土の観察を行った。西側壁面はほぼ南北に約12mの長さであった。その位置は南端が３号石室墓道壁内にあり，北端が１号石室墓道内に終る。このラインは墳丘主軸に並行するが，中心より約３mほど西にずれている。したがって，図上の墳丘の曲線や，地山，埋土の傾斜などは正しくその特徴を示さないおそれがある。また，図上の最高所は本古墳後円部の最頂部ではない。本壁面では地山の上部に７群，114層の盛土を確認した。この層群が後円部の基本土層となるので，以下では堆積順に層群の性状を概観する。

１）地山　南端で確認した。３号石室墓道西壁内にあたり，上面は標高44.7～44.8mでゆるく凹凸を見せるが，明瞭な線として捉えられる。

２）第１層群　地山直上に堆積する黄褐色砂質土である。５cm以下の粘質土土塊を多く含む。また，特徴的に花崗岩起源の長石砂粒を未風化の状態で含む。さらに本層の上半部に玄武岩小片を少量含む。これは風化が進んでいるために，その給源などの検討は不明であった。層厚は南側で約30cm，北側で約50cm以上を測る。上面の標高は南端，北側共に約45.4mを測る。本層群の上部には一部に地山に達する縦状の土層（89，113層）が明瞭に認められる。植物の根痕か，動物の生痕と推定される。

３）第２層群　本層群はさらに二分されうる。下部はややよごれた茶褐色土であり，上部は特徴的な「あずき色」砂質土層である。このうち下部は３号石室墓壙外で約10cmの堆積を見るのみである。上部の土層は色調が明瞭であり，後円部頂においてのみ，各所の同層順で確認することができる。調査時には1966～1969年の所見とあわせて鍵層として捉えていた。その成因は1987年の調査時の検討から，基盤である花崗岩媒乱土層の，深層部分の新鮮な二次堆積物であると推定された。壁面の南端で約50cm，北側で10～30cmの堆積がある。堆積状況は特に上部の「あずき色」砂質土が３号石室の墓壙壁に向って内傾し，かつ切られている。北側では３号石室の墓壙壁から約１mの地点をピークとするレンズ状の堆積となっている。また，本層群の上面に貼り付くように，５cm以下の花崗岩小円礫が点々と認められた。

４）第３層群　黄褐色～赤褐色砂質土，茶褐色弱粘質土の厚い互層である。基盤の二次堆積物，ローム層などの土塊を含み，やや固くしまる。南端で約10cm，北側で約80cmの堆積がある。南側では第２層群と同様に墓壙壁に内傾している。その上面は南端では第４層群とした３号石室

墓壙埋土に覆われ，北側では第6層群に覆われる。ちなみに3号石室墓壙壁と1号石室墓道壁の立ち上りは本層上面に達している。

5）第4層群　3号石室墓壙内埋土を一括した。これについては3号石室の項で触れられる。

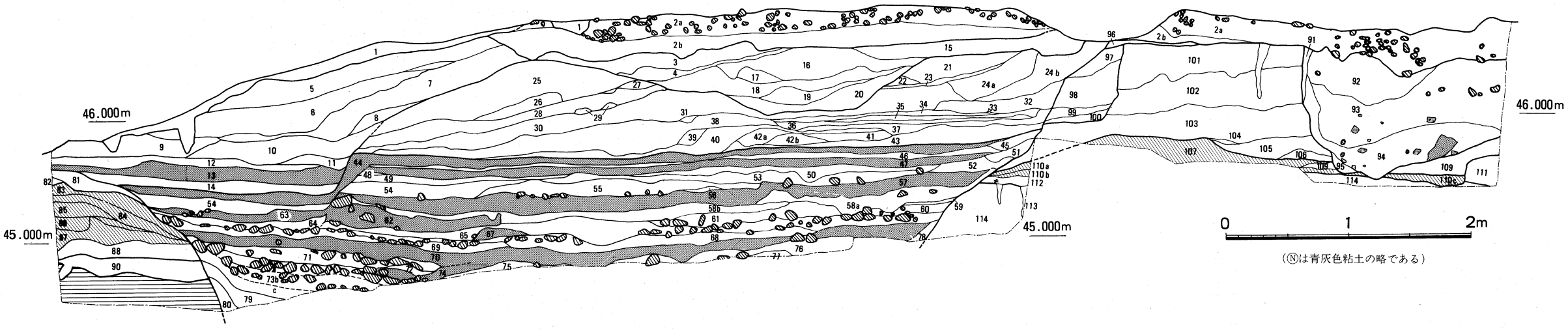
6）第5層群　1号石室墓道内埋土を一括した。第4層群との直接の切り合い関係はないが，墳頂部堆積物に類似した円礫などが混在して認められたことから，第4層群より新しい堆積時期と判断した。その点では第6層群より新しい堆積物の可能性もあるが，第6層群の上部が本層群を覆っていることからここに位置付けた。茶褐色～黄褐色の粘質土であり，直径5㎝以下の円礫や，青灰色の粘土塊が混在していた。

7）第6層群　後円部最上部の盛土である。本層群は層厚が30㎝前後を測り，その下面は比較的平坦である。上下に二分され，下部は茶褐色砂質土であり，上部は礫層である。上部の礫層は暗褐色土を基調とし，層厚15～20㎝を測る。含まれる礫は直径5㎝以下を主体とする花崗岩円礫であり，まれに直径10㎝以上のものを含む。調査当初は「葺石層」という呼称を用いたが，礫層中，最下面などに円礫を意図的に構築した面やその痕跡は認められず，円礫を積み上げた状態に近い。

8）第7層群　黒褐色の腐植土層である。下位にしたがい色調は薄れ，同時に第6層群起源の円礫を含むようになる。下面は凹凸を示す。墳頂平坦面で10㎝前後の堆積が認められる。

3号石室墓道両壁の土層観察　開口していた3号石室墓道の埋め戻しに先立ち，壁面の清掃と土層観察を行った。土層は後円部中心より約8m南側から始まり，前方部平坦面と後円部丘が接する地点（以下では「b点」とする）までの約7mである。両壁のうち東壁は本墳の主軸にほぼ一致し，西壁は主軸にほぼ平行しながら約2m西側になる。両壁の堆積状態は概ね共通しており，細部で異なる点がある。特に西壁では墓道内埋土の遺存部分が標高44.6～45.0m付近にあり，墳丘埋土層を隠している(墓道内埋土については3号石室墓道の項で触れられる)。ここでは墳丘埋土に関して，先の1，3号石室西側壁の基本層群と比較しながら説明する。

地山上面は大きく凹凸があるが，明瞭に分離される。上面の高さは北側で最も高く，標高44.85～45.0mであり，ゆるい凹凸を繰り返しながらb点に達する。西壁ではb点から約1.6mの地点から約20°の傾斜で下り，東壁ではb点から約4.4mと約1.0mの付近で傾斜面があり，前者は24°，後者は22°を測る。第1層群は標高45.2mを最高所とし，東壁でb点から約1.5mの位置まで堆積している。この部分では南に下る約17°の傾斜である。中～下位に花崗岩小円礫を含む。層厚は40～60㎝を測る。北側を後述する「斜道状遺構」により切られる。第2層群は明瞭な「あずき色」砂質土層である。壁面の北側にのみ認められ，東壁でb点の北約4.2mの位置から，西壁では不明確ながら約5m付近から北側に緩く下る傾斜で堆積している。傾斜は5°前後である。下面は平坦である。第2層群は「斜道状遺構」内の下部埋土を構成する。第3層群は北側で第2層群を，南側で第1層群を覆い堆積する。層厚は50～60㎝に達している。西壁では残存



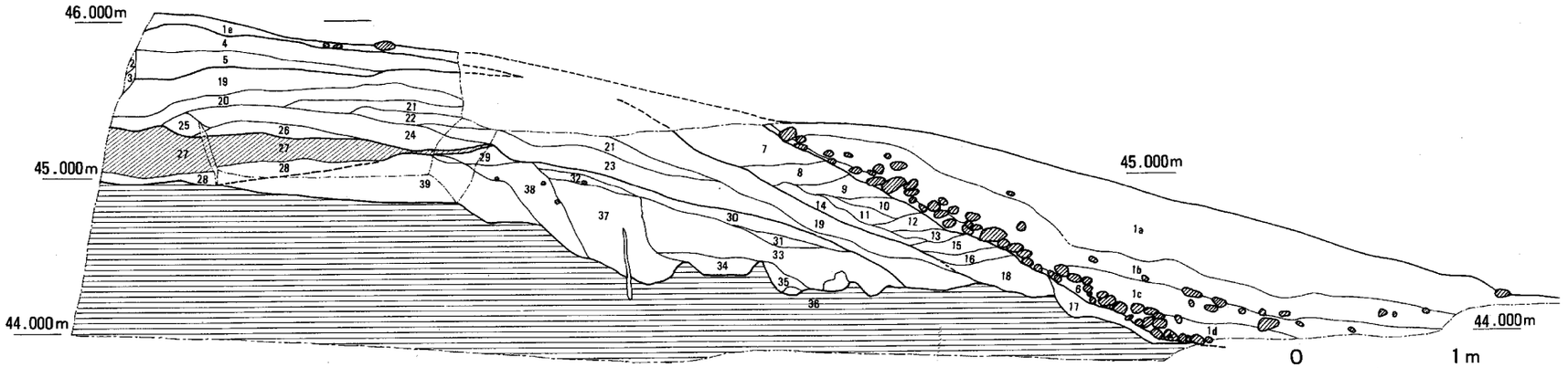
（Ⓝは青灰色粘土の略である）

1．黒褐色～灰褐色腐植混じり土，上面に腐植，漸移変化する，円礫多く含む
2a．黒褐色～灰褐色腐植混じり土，多量の円礫を含む，径5㎝を主体とし，径10㎝以上のものもまれに含む，10～20㎝厚さの円礫堆を形成
2b．淡茶褐色砂質土，ややきめ細かい，(長石片ない)やや硬くしまる，黄色ブロック少量含む，砂粒少ない，上部は腐植等でやや汚れている，北側にしだいに硬質化，石英砂目立つようになる，
3．上位層より明るい色調，ややしまる
4．茶褐色土，やや粘質気味，粘土ブロック（1㎝径以下），石英砂多く含む，硬くしまる
5．淡「あずき」色砂質土，軟質，地山2次，石英砂多い
6．茶褐色粘質土混じり淡「あずき」色土層，ブロック（10㎝径以下）多含，長石含，石英砂多い
7．淡「あずき」色砂質土，茶褐色粘質ブロック混じり，(径5㎝以下)少量，ややしまる，長石・石英粒多含，玄武岩片わずか含む，黄色ブロック（元花崗岩？）径5㎝以下含む
8．淡茶褐色砂質土，茶褐色粘質ブロック混じり（径5㎝以下）やや多い，長石・石英砂粒含む，硬くしまる，黄色ブロック（元花崗岩？）径5㎝以下，わずかに含む
9．淡「あずき」色砂質土，5層に類似（性状）
10．淡「あずき」色砂質土，やや硬くしまる，地山ブロック，茶褐色粘質土ブロック含（何れも径5㎝以下）長石の未風化が目立つ
11．淡「あずき」色砂質土，やや硬くしまる，ブロック少ない，長石の未風化が目立つ
12．黄褐色砂質土，新鮮な地山2次，茶褐色粘質土の互層状堆積，小円礫含む（石英）Ⓝを少量ブロック状に含む
13．Ⓝ，淡青灰色粘土，上・下面は鉄分沈着，茶変，砂質が多い部分がブロック状に存在する(アミ部)→本層上面は鉄分沈着著しい，かなり凹凸がある（細かい）
14．赤褐色砂質土，軟質，長石含む，小円礫含む（石英）
15．茶褐色弱粘質土，砂粒（石英）やや少ない，ややきめ細かい，やや硬くしまる
16．茶褐色弱粘質土～赤褐色粘質土，石英粒多い，長石はほとんど含まず，硬くしまる
17．淡「あずき」色砂質土，石英砂・長石多含，ややしまる
18．淡「あずき」色砂質土（より明るい）黄色砂質ブロック（径3㎝以下）含む，石英・長石多含，硬くしまる
19．赤褐色砂質土，石英・長石砂多含，硬くしまる
20．赤褐色砂質土，砂礫混じり粘土，5㎜以下の石英粒多量に含む，硬くしまる
21．淡赤褐色砂質土，ややきめ細かい，よくしまる
22．淡「あずき」色砂質土，黄色ブロック（径2㎝以下）を含む，硬くしまる
23．茶褐色粘質土，石英粒含む，硬くしまる
24a．赤橙色砂質土，石英・長石多含（砂粒），しまりはやや悪い
24b．赤橙色砂質土（やや茶色が混じる），しまる
25．淡「あずき」色砂質土，やや軟質，石英・長石粒多く含む
26．赤褐色粘質土ブロック，レンズ状堆積，25層を一部とり込む
27．赤褐色粘質土ブロック，レンズ状堆積（花崗岩未風化）
28．25層と同性状，黄色ブロックを少量含む
29．赤褐色粘土ブロック，レンズ状堆積，26・27層と同性状
30．25質とほぼ同性状ではあるが，赤褐色粘質土ブロックを少量含む
31．茶褐色粘質土ブロック，レンズ状堆積，しまる，石英砂含む
32．淡赤橙色砂質土，黄色砂質ブロック（径5㎝以下）含む，硬くしまる，砂粒（石英・長石）多く含む
33．茶褐色粘質土ブロック
34．茶褐色粘質土，砂粒（石英）を多含，2～5㎝厚さの薄層をなす硬くしまる
35．淡赤橙色砂質土，黄色砂質ブロックを多く含む，砂粒（石英・長石）多含
36．茶褐色粘質土，34層と同じ性状
37．淡赤褐色砂質土，32・35層と同じ性状
38．淡「あずき」色砂質土，ややしまる，赤褐色粘質土ブロックを少量含む
39．茶褐色粘質土，34・36層と同じ性状
40．黄褐色砂質土，鉄分多く含む，ややしまる（粘土層上面の38層が水成作用…鉄分沈着のため酸化したものか？）
41．赤橙色砂質土，硬くしまる，石英・長石多く含む
42a．赤橙色砂質土，硬くしまる，石英・長石多く含む，黄色砂質ブロック（2～3㎝）多く含む
42b．赤褐色砂質土，39層に類似
43．茶褐色粘質土，やや汚れた感じ，旧表土層に近い？微かに炭化物片含む，石英砂粒多含，長石片少量含む
44．Ⓝ，上部は鉄分のため茶変，硬くしまる，石英粒等含む，部分をブロック状に分布，上面はかなり平担である，砂質分の多い所は層がやや厚くなる傾向がある
45．赤橙色砂質土，ややしまる，茶色土が微かに含まれる
46．赤橙色砂質土，硬くしまる，黄色砂質ブロック含む
赤橙色砂質土，硬くしまる，長石・石英粒多い
47．Ⓝ，部分的に黒色粘土（砂粒含む）を含む，砂粒に富む部分がやや少なくなる
48．赤橙色砂質土，硬くしまる
49．「あずき」色砂質土，長石・石英多く含む
50．「あずき」色砂質土，長石・石英多く含む
} ややしまる同一性状
51．赤橙色砂質土，ややしまる
52．黄橙色砂質土，ややしまる
53．黄橙色砂質土，ややしまる，黄色砂質ブロック(礫)含む，赤褐色粘質土ブロック含む
54．赤橙砂質土，ややしまる，黄～白色砂質ブロック(礫)をやや多く含む，長石・石英多含，下部に円礫，径5～10㎝が分布→裏ごめ石
55．赤橙色砂質土，黄色砂質ブロック，赤褐色粘質土ブロックを多く含む
56．「あずき」色砂質土，砂粒（石英・長石）を多く含む，硬くしまる
57．Ⓝ，やや厚みのある粘土層，4つの性状の粘土ブロックからなる（①黒色ラミナ状粘土，②淡青灰色粘土・やや粉っぽい，③青灰色粘土・きめ細かい，④砂混じり淡青灰色粘土）上面やや凹凸があり，径5㎝以下の円礫が分布
58a．赤橙色砂質土，よくしまる，砂粒（石英・長石）を多く含む
58b．赤橙色砂質土，しまる，砂粒（石英・長石）を多く含む，淡黄色砂ブロック（径5㎝以下）を多く含む
59．黄褐色砂質土，よくしまる，砂粒（石英）を含む，粘土（Ⓝ）を少量含む
60．赤橙色砂質土，砂粒（石英・長石）を多く含む，硬くしまる，円礫（5㎝以下）多く含む
61．赤褐色粘質土ブロック混じり，赤橙色砂質土
62．Ⓝ，57層と同様に4種の粘土あり，混沌状態，円・半角礫含む，鉄分沈着わずか，上面は凹凸がかなりある
63．62層と同じ
64．黄橙色砂質土，石英粒多い，長石少ないが含まれる，微かに粘質帯びる
65．赤橙色砂質土，硬くしまる，石英砂・長石多含，茶褐色粘質土含む
66．67層と同じ
67．Ⓝ，レンズ状堆積，黒色粘土を含む，汚れた感じ，鉄分含む
68．黄褐色砂粒含粘質土，硬くしまる，石英砂やや大きい（0.5㎝以下）長石微細片含む，やや粘質，円礫含む
69．暗黄褐色土，砂粒多い，硬くしまる円礫(径10㎝以下)，本層上面に多量に分布…裏ごめをなす
70．Ⓝ，4種の粘土が混入，よくしまっている，上面に大きくうねるような凹凸がある
71．茶褐色粘質土，石英砂多く含む，硬くしまる→本地域地山上の風化土2次堆積物，上部に円礫（10㎝以下）含む
72．赤橙色砂質土，石英・長石砂含む，しまる，レンズ状堆積
73a．赤橙色砂質土，石英砂粒多量に含む，円礫(径10㎝以下多い）を含む
73b．赤橙色砂質土，石英砂粒多量に含む，やや赤味を持ち長石を含む風化は進んでいない
73c．赤橙色砂質土，石英砂粒多量に含む，円礫はない(a層と同性状)
74．Ⓝ，比較的きれいな淡灰色粘土からなる，硬くしまる
75．茶褐色粘質土、石英砂粒を多く含む，長石片もあり円礫少量含む，しまる
76．茶褐色粘質土，やや赤味を帯びるが75層に類似する
77．茶褐色粘質土，よくしまる，石英砂多く含む
78．黄褐色砂質土，やや軟質，水成状のラミナ構造あり砂質に富む
79．赤橙色～「あずき」色砂質土，黄色ブロック（径5㎝以下）含む石英片・長石多含，ややしまる
80．赤橙色～「あずき」色砂質土，黄色ブロック（径5㎝以下）含む石英片・長石多含，比較的軟質
81．黄褐色砂質土，風化やや進む，石英砂多い
82．茶～赤褐色土，軟質，一部粘質あり
83．「あずき」色軟質土
84．「あずき」色軟質土
} 両層の間に薄い黄色砂含む，長石含む
85．黄橙色砂質土，軟質，風化の進んでいない地山2次，玄武岩（風化進む）小片含む
86．黄褐色砂質土
87．「あずき」色軟質土，風化の進んでいない地山2次（83・84と一連のもの）
88．茶褐色（粘質土ブロック含む），軟質土，小円礫含む
90．黄～茶褐色粘質土，硬くしまる，長石未風化，1次盛土である
91．暗褐色土，軟質，汚れてくすんだ色調，木根痕
92．茶褐色弱粘質土，砂粒（主に石英）を多く含む，Ⓝ，粘土小ブロックを少量含む，円礫含む，しまる
93．茶褐色弱粘質土（上位層よりやや赤味を持つ）Ⓝ，粘土ブロック円礫を多く含む，ややしまる
94．茶～黄褐色弱粘質土，Ⓝ，粘土ブロック，小円礫多く含む，炭化物片微量に含む，硬くしまる，砂粒には主に石英，微かに長石含む
95．茶褐色弱粘質土，粘土化が比較的進んでいる
96．黄褐色砂質土，石英・長石等の砂粒多含，硬くしまる
97．黄茶褐色砂質土，茶褐色粘質土ブロックを多く含む
98．茶褐色粘質土に黄褐色砂質土を含む，97層とは2種の含有%が逆転する
99．茶褐色粘質土，砂粒（径1㎝以下）を多く含む…石英主体，硬くしまる
100．黄褐色砂質土，粘質土ブロック（径1～3㎝）を含む，Ⓝ，粘土を少量含む→注意
101．赤褐色弱粘質～砂質土，上部はやや粘質が強い，硬い，砂粒（石英）を多く含む，少量の炭化物分布する
102．茶～黄褐色土，石英砂多く含む，硬くしまる
103．茶褐色土，径2～3㎝の黄色砂ブロック（花崗岩風化礫）を含む石英砂は上位層より少なく小さい，本層上部にやや新鮮な花崗岩バイ乱2次含む
104．赤橙色砂質土，石英・長石砂含む，レンズ状堆積
105．茶褐色粘質土，石英砂多く含む，硬くしまる
106．茶褐色粘質土，105層より茶味が強く粘質高い
107．淡「あずき」色砂質土，砂粒（石英・長石）多く含む，硬くしまる
108．107層と同じ
109．茶褐色粘質土，砂粒（石英）含む，他より粘質に富む
110a．「あずき」色砂質土，砂粒（石英・長石）多く含む，しまる
110b．淡「あずき」色砂質土，砂粒（石英・長石）多く含む，やや赤味弱い
110c．「あずき」色砂質土，砂粒（石英・長石）多く含む，しまる
111．暗褐色土，砂粒（石英）を含むが全体にきめ細かい，旧表土からなる
112．茶褐色粘質土，やや汚れている，硬くしまる，砂粒（石英）多い
113．褐色粘質土，きめ細かい粘質土，砂粒少ない→木根痕に堆積
114．黄褐色砂質土，黄色土ブロック（5㎝以下）を多く含む（石英・長石）を多く含む，極めて硬くしまる

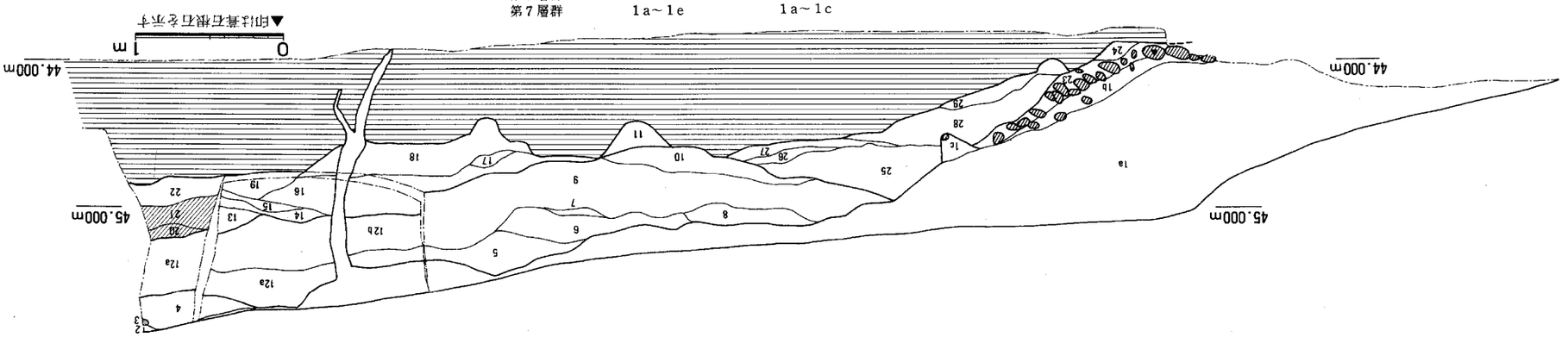
後円部層群との対応

	南側	北側
第1層群	90	114(111)
第2層群	83～88	107～110c
第3層群	81・82	101～106(96～100…遺構か？)
第4層群	5～80	5～80
第5層群	対応層なし	91～95
第6層群	2a・2b	2a・2b
第7層群	1	1

図11.　1・3号石室西側土層断面図　(縮尺1／40)



後円部層群との対応	東壁	西壁
第1層群	29～39	13～19
第2層群	27・28	20～22
第3層群	19～26	25～29・12a，b
第4層群	4・5	2～4
第5層群	対応土層なし	対応土層なし
第6層群	6～18	23・24
第7層群	1a～1e	1a～1c



東　壁

1a．黄灰色土，小礫を含む（流出堆積土）
1b．淡黄褐色土（流出堆積土）
1c．暗黄灰色土（流出堆積土）
1d．明黄褐色土，地山ブロックを微量混入
2．淡橙色砂質土，ピンクがかる，しまりがいい「小豆色」とよく似た質
3．淡明黄褐色砂質土，しまりがいい
4．淡黄灰色土，3㎜程の砂粒を混入，微小な粘土ブロック混入，しまり悪い
5．黄褐色砂質土，0.8～1㎝程の小礫を混入
6．淡黄褐色土，やや赤味がかる
7．明黄灰色土，ピンクがかる，小礫を混入
8．明黄褐色砂質土，やや赤味がかる，パラパラ
9．明黄褐色砂質土，ややピンクがかる，黄灰色ブロック混入
10．明黄灰色砂質土，ややピンクがかる，粘土ブロック混入，しまりがいい
11．明黄褐色土，やや粘性
12．淡橙色砂質土，やや粘性，黄灰色ブロック混入
13．明黄褐色土，黄灰色ブロック混入
14．明黄褐色砂質土，ややピンクがかる，やや粘性
15．黄褐色砂質土，黄灰色ブロックを混入
16．暗黄褐色砂質土，粘土ブロックを混入
17．明黄褐色砂質土，黄灰色ブロックを混入
18．明黄褐色砂質土，黄灰色ブロックを混入，しまりがいい
20．明白褐色砂質土，ピンクがかる，しまりがいい，微小な粘土と地山のブロック混入
21．淡橙色砂質土，ピンクがかる，20層より明るい，微小な粘土のブロックを混入
暗黄灰色土，赤味がかる，微量に地山ブロック混入
22．明黄褐色砂質土，粘土ブロック混入，しまりが悪い
23．明黄褐色砂質土，ピンクがかる，しまりが悪い
24．「小豆色」砂質土，黄灰色ブロックを混入
25．淡橙色砂質土，黄灰色ブロックを混入，しまりが悪い
26．明黄灰色砂質土，やや赤味がかる，やや粘性，しまりがいい
27．「小豆色」砂質土，黄灰色ブロックを混入，24層よりやや明るい色調
28．明黄褐色砂質土，地山ブロックを混入，西壁の19層と同一
29．黄灰色土，4㎜程の砂粒を含む
30．暗黄灰色砂質土，ややピンクがかる，微量に粘土ブロック混入
31．暗黄灰色土，パサパサ
32．黄褐色砂質土，やや赤味がかる，カーボンを混入
33．明黄灰色砂質土，微量に黄灰色ブロックを混入
34．黄褐色砂質土，やや汚い
35．淡橙色土，地山とのまじり
36．赤褐色花崗岩バイラン土（地山）
37．淡橙色砂質土，黄灰色ブロックを混入
38．黄褐色砂質土，円礫を混入
39．明黄褐色砂質土，地山ブロックを混入，西壁の19層と同一

西　壁

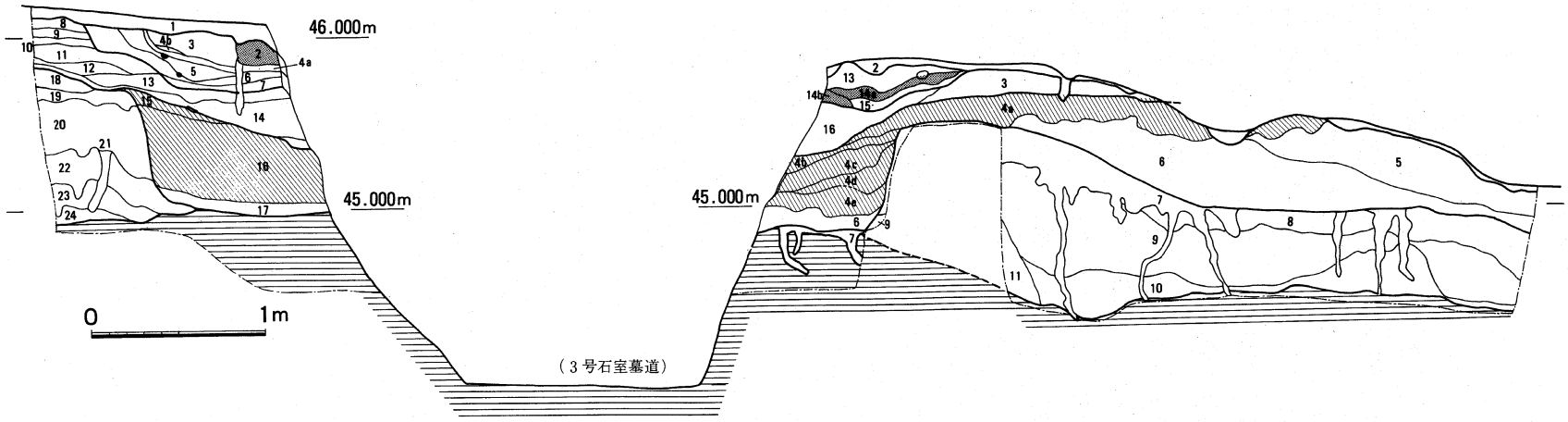
1a．暗褐色弱粘性土（微量に有機質を含む）流土
1b．暗黄褐色土，微量の有機質，4㎜程の砂粒を含む（流土と思われる）
1c．暗黄褐色土，やや粘性，3㎜程の砂粒を含む
2．淡黒灰色土（風化堆積土）
3．青灰色粘土
4．淡橙色砂質土，白色粘土の4㎝程のブロックを含む，ピンクがかる，黄褐色砂質土，やや粘性，しまっている，微量のピンクのブロックを含む
5．明白褐色砂質土，ピンクがかる，ガチガチに固い，微小な粘土と地山ブロック混入
6．明黄褐色土，やや粘性，ピンクがかる，3㎜前後の砂粒，地山・粘土ブロックを微量含む
7．暗白褐色砂質土，粘性，しまりがいい
8．明黄褐色土，2㎜程の砂粒，微量の白色粘土，地山ブロックを含む
9．白黄褐色土，4㎜程の砂粒，4㎝程の白色粘土のブロックを含む
10．明黄褐色砂質土，地山ブロックを混入する
11．暗黄褐色土，3㎜程の砂粒を混入する
12a．明褐色砂質土「桃色」に近い，硬くしまる
12b．明黄褐色砂質土，しまりがいい，小さな地山，茶色のブロックを含む
13．明黄褐色砂質土，ややピンクがかる，地山ブロックを混入する，しまりがいい
14．明黄褐色砂質土，ピンクがかる，地山ブロックを混入する
15．白黄褐色砂質土，ややピンクがかる，黒い斑晶が微量に混入する
16．暗黄褐色砂質土，しまりがいい
17．明黄褐色砂質土，地山ブロックを混入する
18．白黄褐色砂質土，小礫，4㎜程の砂粒を含む
19．明黄褐色砂質土，地山ブロックを混入する
20．「小豆色」砂質土，しまりがいい
21．「小豆色」砂質土，4㎜程の砂粒を含む，やや汚い
22．明黄褐色砂質土，地山ブロックを混入する
23．暗黄褐色土，16層より濃い色調，やや粘性，微量の地山ブロックを含む
24．暗橙色土，有機質を含む，粘性
25．暗白黄褐色砂質土，微量の地山ブロックを混入，やや大きめ（4～6㎜）の石英質の砂粒を含む
26．暗橙色砂質土，地山ブロックを混入する
27．暗黄褐色砂質土，微量の地山ブロックを混入する
28．明黄褐色砂質土，地山ブロックを混入する
29．暗黄褐色土，粘性，やや砂粒が混じる

図12.　3号石室墓道両壁土層断面図　（縮尺1／40）

する墓道内埋土に隠れて不明であるが，その上面は標高45.7～45.8m付近で水平となり，b点から3.5～4.0m付近から傾斜約28°で南に下る。第4層群は両壁の北側に見られる。層厚は20cm以下であり，南側へは墳丘埋土と連続する様相がある。第6層群は墳頂部では流出したためか遺存せず，南側の墳丘斜面で認められる。西壁ではb点付近に僅かに堆積し，東壁ではb点から約1mの範囲で水平の互層状に堆積する。本層群の外面はb点に向って傾斜28°で下る。この外面には東壁で標高45.3m以下，西壁で標高44.6m以下に葺石が良好に遺存している。第7層群は主にこの葺石を覆う部分で厚く堆積している。b点付近で最も厚く約1mを測る。本層群の下部には円礫が多く含まれている。上位の礫層や葺石の落石と考えられる。

Pトレンチと3号石室墓道横断面土層（図13，図版10・11）　後円部の東西方向の墳丘盛土の観察を目的に，前調査時の3号石室墓道横断面土層の延長としてPトレンチを設けた。このラインは後円部中心より約7.5m南にずれている。Pトレンチの上部は後円部墳丘西斜面に近ずくが，上部の墳丘盛土の流出が著しい。その侵食は保存の良い東端でも第3層群まで，西端では第2層群の下部に達している。したがってPトレンチでは墳丘外面の葺石などの施設は残存しない。まず，地山面は墓道の両側において標高44.9～45.0mでほぼ平坦であり，西側に墓道の約0.6m付近から約20°の傾斜で下る。Pトレンチ内では多少の凹凸はあるが，標高44.8～45.0mでほぼ平坦となる。第1層群は約90cmの層厚があり，遺存状態の良いPトレンチ東側では最上部に暗色の腐植土層が残る。本層群上面は墓道両側で掘方により幅広く溝状に掘削され，またPトレンチ西半において標高約45.0mまで段状に削平されている。前者の溝状の遺構は3号石室墓道によって切られるが，遺存する範囲で床面の標高，壁面の立ち上り，遺構内埋土が共通していることから，墓道掘削以前の遺構と推定された。先にみた3号石室墓道壁面の状況から，3号石室に向って傾斜する「斜道状遺構」と推定した。その規模は断面である東西方向で上面幅4.4m，深さ0.6～0.7m，床面幅4.0mを測る。長さは残存する部分で約2.5mである。第2層群はこの遺構内と西側の削平面に約50～60cmと厚く堆積している。なお，「斜道状遺構」内では第2層群下部が薄く，上部の「あずき色」砂質土が厚く堆積している。逆に西側の削平面では下部が厚く，上部が薄く堆積している。なお，この遺構埋土による土層のへこみはさらに上位の層群に影響している。第3層群はPトレンチでは東側に約20cmの層厚であり，「斜道状遺構」の上部では30～50cmの層厚でレンズ状堆積を示す。第4層群も本遺構の上部に約20～30cmの層厚で堆積している。以上の盛土の最頂部は東端の標高46.1m付近であるが，第6，7層群が残存しないことから，旧状より約30cm程度の墳丘盛土の流出が予測される。

Oトレンチ（図14，図版10）　Oトレンチは古墳主軸に直行し，後円部中心より，南側に約3m南に寄った後円部墳丘斜面に設定した。さらにその延長として，2号石室南側の旧調査区壁を清掃し，その観察を行った。その結果，Pトレンチ内に保存状態の良い葺石を検出し，あわせて後円部東側の墳丘盛土の状況を知ることができた。葺石はトレンチ内の東端，約1mの範



東側

1．暗褐色土（腐植土）旧表土
2．青灰色粘土
3．茶褐色砂質土，3cm位の赤褐色ブロック含む
4a．黄色粘質土を基礎とし，4b．青灰色粘土，4cm位の風化しかけた花崗岩礫板石の破片らしきものを含む，粘土は西側を中心に分布している。最西部は2に接合し見分けにくい
4b．（赤色）「あずき」砂質土，いわゆる「あずき」より赤い
5．赤褐色砂質土，板石の破片らしきものを含む
6．黄褐色砂質土，5mm位の石英粒を含む，一ヶ所青灰色粘土を含む
7．5よりやや暗い赤褐色砂質土，墓壙の埋土最下層か？
8．暗黄褐色砂質土
9．明白褐色砂質土
10．白褐色砂質土（ややピンク気味）
11．明桃褐色砂質土，西側に移るに従い濃くなる
12．10に近い（10よりやや赤味が強い）
13．赤茶褐色砂質土，西側では黄味を強く帯びてくる
14．明茶褐色土，板石の破片らしいものを含む
15．（淡赤色）「あずき」色砂質土，いわゆる「あずき」よりややうすく黄色砂質ブロック（5cm位）を多く含む
16．（淡赤色）「あずき」色砂質土
17．明黄褐色砂質土
18．黄褐色砂質土（赤味帯びる）しまっている
19．暗黄褐色砂質土（腐植を受けているのかくすんでいる），しまっている
20．明黄褐色砂質土，硬くしまっている，2cm位の黄色土ブロックをわずかに含む
21．茶褐色粘質土（下部の方が粘質強い）
22．明橙褐色砂質土，硬くしまっている
23．橙褐色土，硬くしまっている，やや粘質あり
24．地山ブロック土

西側

2．黒褐色腐植土（表土，調査前）下位層を侵食
3．茶褐色土「あずき」ブロック・花崗岩風化土を多く含む，下面は平担
4a．（淡赤色）「あずき」色砂質土，軟質である，下面は凹凸をなす，上面は西側がかなり削平されているもよう
4b．（淡赤色）「あずき」色砂質土，軟質，4aに近似
4c．（淡赤色）「オレンジ」色砂質土2～3cmの黄色ブロック含む，軟質（4bよりはしまる）
4d．（黄褐色）「オレンジ」色砂質土，4cより黄色が強い，軟質である（4cと同じ位）
4e．（淡赤白色）「あずき」色砂質土，白色粒子が多く混る，軟質である（4bと同じ位）
5．茶褐色土，花崗岩の風化ブロックを含む，小円礫を含む，3よりやや暗く粘質がある
6．暗黄茶褐色土，やや粘質あり，5mm程度の石英粒を多く含む（くすんだ色調をしている）
7．茶褐色粘質土，地山ブロックを小量含む，東側に行くに従い粘質は強くなる上面は削平されている
8．明茶褐色砂質土，地山ブロックを少量含む，石英粒は少ない
9．地山ブロック混じりの黄褐色砂質土（径10cm以下のブロックを含む）たいへん硬くしまる
10．地山ブロック土
11．暗茶褐色粘質土，かなり風化が進んだと思われる土，1cm以下の石英粒を含む

後円部層群との対応

	東　側	西側
第1層群	18～24	7～11
第2層群	15～17	4～6
第3層群	8～14	3・16
第4層群	2～7	13～15
第5層群	対応層なし	
第6層群	対応層なし	
第7層群	1	2

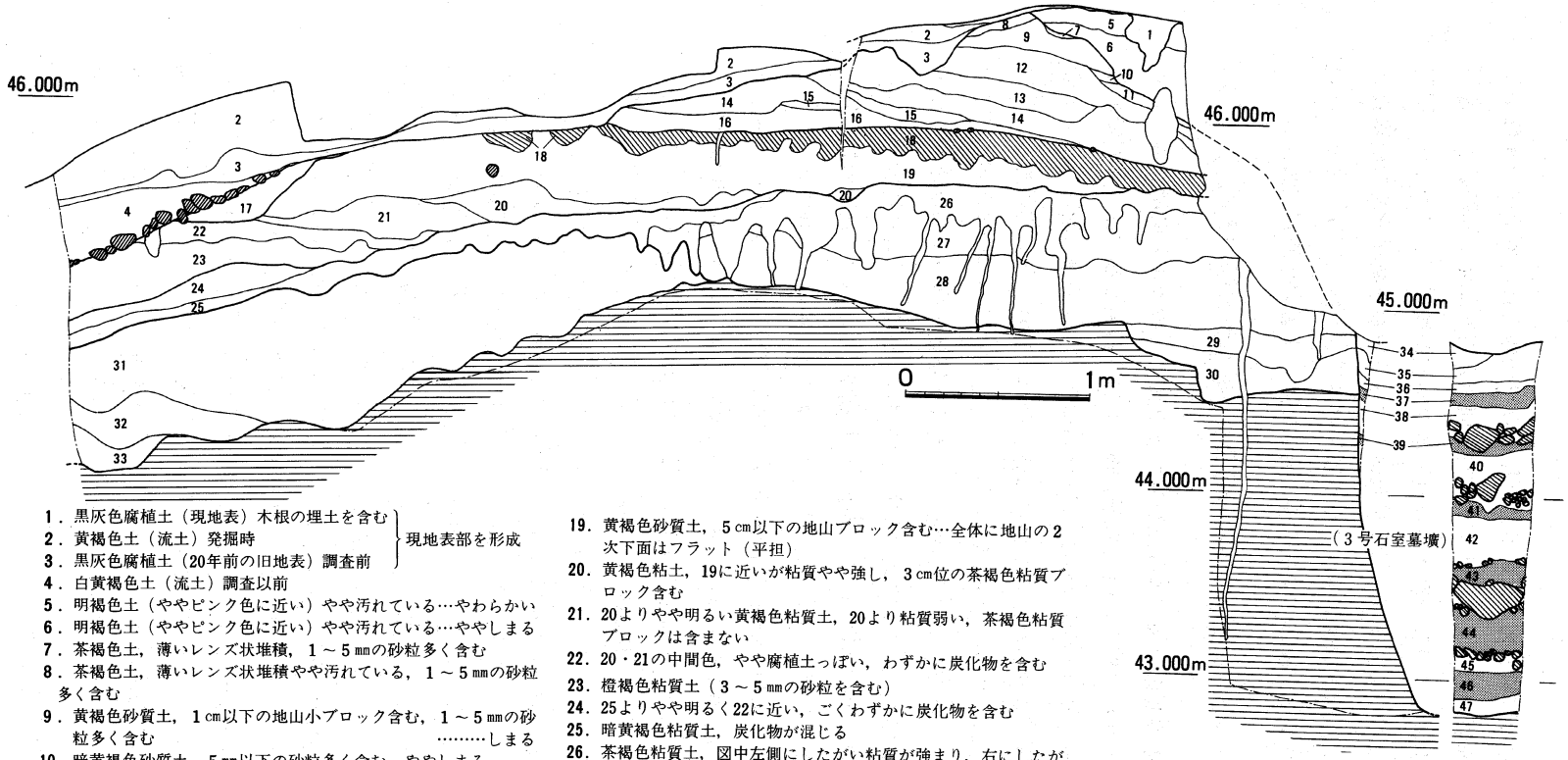
図13.　3号石室墓道横断およびPトレンチ土層断面図(縮尺1／40)

囲で標高45.6～45.1mの間に遺存し，さらに下方の調査区外にのびている。標高45.6m以上の葺石は削平の流出のために失われている。盛土は地山の上部に第１～４，７層群の堆積を見る。地山はＰトレンチ内で特異な状況を示す。すなわち，トレンチ西側の地山上面は花崗岩媒乱土の整形面であり，その上位に第１層群が直接堆積し，その区分は明瞭であった。しかし，トレンチ東側の，後円部頂が斜面に変換する地点，厳密には３号石室の墓壙と接する地点(以下「ｃ点」と略す）の東側約3.5mの地点から，地山である花崗岩媒乱土の上位に暗褐色の粘質土層が，地形に沿って約40～70cm堆積しているのが観察された。第１層群はこの粘質土を覆って堆積している。この粘質土は第１層群とは異なり，均質であり，堅固であり，かつ下位の媒乱土層とは不明瞭に漸移変化する。また，上位に暗色土層があり，腐植土層と推定された。この粘質土層には第１層群に特徴的に観察された長石などの砂粒や，玄武岩小片は含まれていない。さらに同様の性状を持つ堆積層が古墳の周辺の花崗岩を基盤とする自然丘陵の地山に認められる。以上の点からこの堆積層は地山であると推定される。Ｐトレンチ東端ではこの粘質土は分層することができた。以下ではこれを地山層群と仮称する。さて，トレンチ内の地山上面は「ｃ点」から約４ｍの位置から西に向って，つまり墳丘中心に向って10°前後で傾斜する。第１層群はこれを埋め平坦にするように堆積している。したがって東側に薄く，西側に厚く堆積している。層厚は50～110cmを測る。本層群の上部には，暗色土層があり，下位を不規則に侵食している。これは東側にしたがい暗色が増し，炭化物片も少量認められる。この層は東側の地山層群上部の腐植土層に連続する。本層群の上面はｃ点から約2.7mの位置まで平坦であり，７～20°としだいに傾斜を増して墳丘斜面に向う。第２層群はトレンチの全域で確認された。層厚は15～70cmあり，東側に下位の茶褐色土が厚く，西側に上位の「あずき色」砂質土が厚い。上面はｃ点から約5.5mの位置までほぼ平坦となり，標高は約45.8～45.9mを測る。第３層群は上部の侵食によって部分的にしか残存しない。層厚は最大約70cmであり，全体にレンズ状の堆積を示す。第４層群は東端で確認した。墓壙壁の立ち上りの上端はｃ点から東に1.85mの位置である。遺存状態は悪いが，第３層群を切り，傾斜約35°で西に下る。本トレンチではこの部分が最高所であり，標高約46.6mを測る。第６層群は遺存せず，第７層群が全体を薄く覆う。

３．くびれ部の調査（図14～16，図版７・８・11）

くびれ部には前方部頂平坦面の西側にＲ調査区，東側にＴ調査区，東側斜面にＪ調査区を設けた。そのうち，Ｔ調査区において第１トレンチ北側の深掘部を再調査したところ，地山上面に略東西に溝状遺構を検出した。この部分をｕトレンチとし，さらにその追跡のためにＴ調査区内にｖトレンチ，Ｒ調査区内にｗトレンチを設けた。ここではまとめて説明する。

Ｒ，Ｔ調査区の前方部頂平坦面では，表土層を剝ぐとほぼ前面に円礫による敷石が現われた。この敷石は表土層の厚く堆積した後円部寄りの方に保存状態が良好であり，一個一個の円礫を



1．黒灰色腐植土（現地表）木根の埋土を含む
2．黄褐色土（流土）発掘時
3．黒灰色腐植土（20年前の旧地表）調査前
} 現地表部を形成
4．白黄褐色土（流土）調査以前
5．明褐色土（ややピンク色に近い）やや汚れている…やわらかい
6．明褐色土（ややピンク色に近い）やや汚れている…ややしまる
7．茶褐色土，薄いレンズ状堆積，1～5㎜の砂粒多く含む
8．茶褐色土，薄いレンズ状堆積やや汚れている，1～5㎜の砂粒多く含む
9．黄褐色砂質土，1㎝以下の地山小ブロック含む，1～5㎜の砂粒多く含む ……しまる
10．暗黄褐色砂質土，5㎜以下の砂粒多く含む…ややしまる
11．黄褐色土，5㎜以下の砂粒多く含む…しまる
12．赤褐色粘質土，5㎜以下の砂粒含む，硬くしまる，ローム下部の2次堆積→上下層に明瞭
13．橙褐色粘質土，上位層より砂質強い，花コウ岩風化土少ブロック含む
14．淡茶褐色粘質土
15．淡茶褐色粘質土（より黄色気味） ……やや明瞭な分層
16．黄褐色砂質土，比較的風化の進んでいない地山2次堆積物，上下に明瞭
17．黄褐色砂質土（19より灰がかる）（2㎜前後の砂粒）
18．「あずき色）砂質土，地山2次が変色しているややわらか，3㎝大の地山ブロック少量含む，直上（上面）に径5㎝以下の円礫分布する，砂粒細かい，上面フラット，下面凹凸あり，何れも明瞭に分層される
※後円部頂全域に分布堆積する
19．黄褐色砂質土，5㎝以下の地山ブロック含む…全体に地山の2次下面はフラット（平担）
20．黄褐色粘土，19に近いが粘質やや強し，3㎝位の茶褐色粘質ブロック含む
21．20よりやや明るい黄褐色粘質土，20より粘質弱い，茶褐色粘質ブロックは含まない
22．20・21の中間色，やや腐植土っぽい，わずかに炭化物を含む
23．橙褐色粘質土（3～5㎜の砂粒を含む）
24．25よりやや明るく22に近い，ごくわずかに炭化物を含む
25．暗黄褐色粘質土，炭化物が混じる
26．茶褐色粘質土，図中左側にしたがい粘質が強まり，右にしたがい砂質化する，ややしまる，下面は凹凸が著しく
※細い縦位の堆積が多く認められるこれは一部地山に達する（この中の堆積物はやわらかい粘質弱い，木根等の痕跡と推定される） …腐植土と推定される
27．暗黄褐色砂質土，径5㎝以下の地山ブロックを多く含む，上部は汚れ粘質化やや漸移変化
28．地山ブロック混じりの黄褐色砂質土，径10㎝以下のブロック多量に含む，小円礫を少量含む
29．地山ブロック土，上位層に近以するがやや砂礫が少ない
30．地山の崩壊土層，下位の基盤がブロック状に遊離，その間に砂質土が混入した状態
31．暗黄褐色粘質土，25よりやや明るい，西側は赤褐色粘質土が強く東に漸移する，粘質強くなる（地山か？）
32．黒みを帯びた橙褐色土，砂粒はほとんど含まない（地山か？）
33．32よりやや明るい2～3㎜の砂粒含む
34．黄茶灰色砂質土
35．黄灰色砂質土
36．明茶灰色砂質土
37．青灰白色粘土
38．明茶灰色砂質土
39．青灰白色粘土
40．明茶灰色砂質土
41．青灰白色粘土
42．明茶灰色砂質土
43．青灰白色粘土
44．青灰白色粘土
45．明茶灰色砂質土
46．青灰白色粘土
47．明茶灰色砂質土

後円部層群との対応

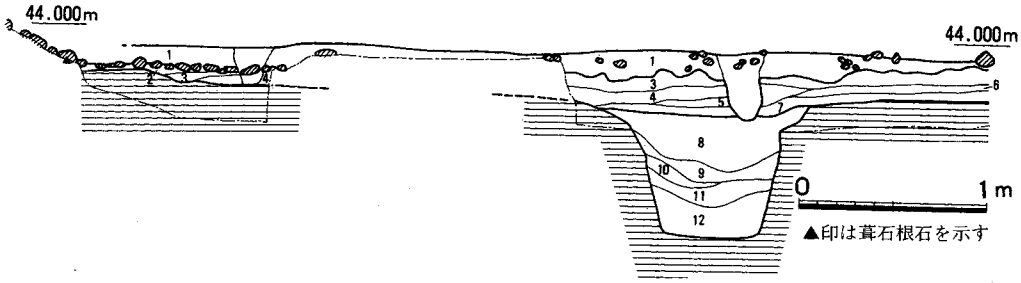
地山層群…31～33
第1層群…25～30
第2層群…18～23
第3層群…7～16
第4層群…5～6，34～47
第5・6層群…本土層壁では対応する層はない
第7層群…1～4

図14．　Oトレンチ南壁土層断面図　（縮尺1／40）

嚙み合せるように構築した状況が認められた。逆に南側ほどこの敷石の保存状態は悪く，表土層中に浮き上っているものも多い。また，くびれ部の両斜面よりでは墳丘とともに，この敷石も流出している。さてこの敷石の上面はほぼ平坦であり，標高約43.9～44.0mを測る。前方部頂中心付近が僅かに高く，その両側に僅かに低くなる。敷石に使用される円礫は直径10cm以下が主体であり，前方部の中央付近に10～20cm大の円礫が認められる。敷石の密度は高く，保存の良い場所で1㎡あたり220～280個の円礫が使用されている。

前方部頂平坦面と接する後円部三段目墳丘の基底部（b点）には，石列が巡らされている。石列は三段目墳丘下面の曲線に沿ってゆるく曲線を描き，前方部平坦面と接続する。石列には長軸が20cmを超える円礫も多数使用され，三段目墳丘の基底部をなすとともに葺石の根締めとなっている。石列はほぼ水平に据えられており，敷石と接する部分で標高約44.0mを測る。3号石室墓道部分から墓道の東側約0.7mの範囲ではこの石列が不明確となり，同時にその部分の後円部側葺石に使用されている円礫も小さく特異である。石列上部の葺石は，3号石室墓道両壁にも現れているが，傾斜約30°で堅固に構築されている。この石列から前方部側に0.9～1.1m離れた位置に並行してもう一つの石列が認められる。それは直径10cm以上の円礫を使用し，密接した二重の石列（以下この石列を「二重石列」と呼ぶ）からなる。この二重石列は先の石列と同様に後円部墳丘の曲線に沿ってほぼ正円を描き，後円部二段目平坦面の端部（a点）の方向へと続く。この石列の延長を追跡するためにT調査区をKトレンチまで拡張したが，東側くびれ部付近で墳丘流出のために失われ、確認はできなかった。しかし，Kトレンチと接するT調査区内において，二重石列の残骸と見られる比較的大きな円礫がa点直下にあり，二重石列の並びが後円部二段目平坦面の端部に続いていたと見られる。したがってこの二重石列と先の三段目墳丘基底部の石列との間は，二段目の平坦面に連続する。この平坦面も前方部平坦面と同様に敷石があるが，前方部側では敷石の上部にさらに直径5cm以下の小円礫が多数散布していた。この小円礫はR調査区内では下位の敷石を完全に覆っている部分がある。こうした状況から，前方部平坦面に比べて円礫の上面は僅かに（5cm程度）高い。またこの石列間には敷石に南北に並ぶ小石列が幾筋か認められる。これは敷石の構築過程を示している。さらに石列間には壺形埴輪の樹立が認められた。

R，T調査区におけるu～xトレンチでは前方部頂平坦面の敷石を破壊せぬ範囲で下部の構造の観察を行った。その結果地山，墳丘盛土，敷石，地山上面遺構などが確認された。その中で後円部中央に近いuトレンチにおいて最も保存状態が良好であった。地山は花崗岩媒乱土の整形面である。その上面は標高約43.7mで平坦であり，後円部に向って僅かに上る。地山上には10～20cm程度の黄褐色粘質土からなる盛土があり，その上面に葺石が構築されている。前方部側では表土が浅く，敷石が遊離している。なおuトレンチにおいて地山直上に東西方向の溝状遺構を検出した。これは後円部三段目墳丘の基底部の石列から約2.7m離れた位置にある。遺



1．暗黄褐色土，やや粘性，微少な地山ブロックを含む流出土の下部，暗褐色土，やや粘性，風化堆積土および浸透層
2．赤褐色花崗岩バイラン土
3．暗黄褐色土，暗色気味
暗黄褐色土，粘性，微小な粘土ブロック混入やや汚い
4．明黄褐色砂質土，やや粘性，黄灰色ブロック混入
赤黄褐色土，粘性，黄灰色ブロック混入，粗い砂粒を含む，硬くしまっている
5．淡赤褐色土，粘性，黄灰色ブロック混入，粗い砂粒を含む，硬くしまっている
6．明黄褐色土，粘性，やや赤い，黄灰色ブロック混入
7．淡茶褐色土，粘性，粗い砂粒を含む，汚い土
明黄褐色土，粘性，粗い砂粒を含む，汚い土
「地山カット面上の堆積土」（カット後に踏まれたような土か？）
8．暗橙色土，やや粘性，黄灰色ブロック混入，地山の土を埋めたもの
9．暗黄灰色土，粘性，粗い砂粒を含む
10．暗橙色土，粘性，地山のくずれたもの
11．暗黄灰色土，粘性，9よりやや暗い
} 風化堆積土
12．暗橙色土，やや粘性，地山堆積土

2～7：前方部墳丘盛土　8～12：溝状遺構内埋土

図15.　T調査区uトレンチ東壁土層図（縮尺1／40）

構は幅1.1m，深さ0.7mの逆台形の断面形を呈し，溝底は標高約42.85mを測る。埋土は黄灰色土であり，レンズ状堆積を呈する。これは地山上部の風化土であり，自然流入土と推定される。遺物の出土はなく，先の盛土がその上面を覆う。vトレンチでは墳丘流出のため盛土が存在しない。トレンチ南端に先の溝状遺構の延長が検出された。規模，溝底の標高，埋土の状況は共通している。両トレンチは約3m離れており，その間はほぼ直線に伸びている。w，xトレンチでは墳丘盛土が残存せず，地山上に直接表土が堆積している。地山は花崗岩媒乱土上に地山層群が残されていた。ここでは溝状遺構は確認できなかった。

くびれ部墳丘斜面は東側のみが残存し，西側はすでに古く土取りにより破壊されている。東側に設けたJ調査区とT調査区東側の状況からは，この部分の標高43.2m以下に保存状態の良好な葺石を確認した。この部分での葺石は直径10cm前後を最大とし，堅固に構築されている。その傾斜は約22°である。後円部と前方部の斜面部での変化点は不明瞭であり，だらだらと移行する。石列などの境界を示す施設も確認できなかった。なお，J調査区の東端では南北方向の石列を確認した。これは標高41.05m付近にあり，比較的大きな円礫を使用している。この石列はすぐ北側に設けたKトレンチに連続している。石列の東側は約8°の緩斜面となり，直径5cm以下の小円礫が散布している。（吉留秀敏）

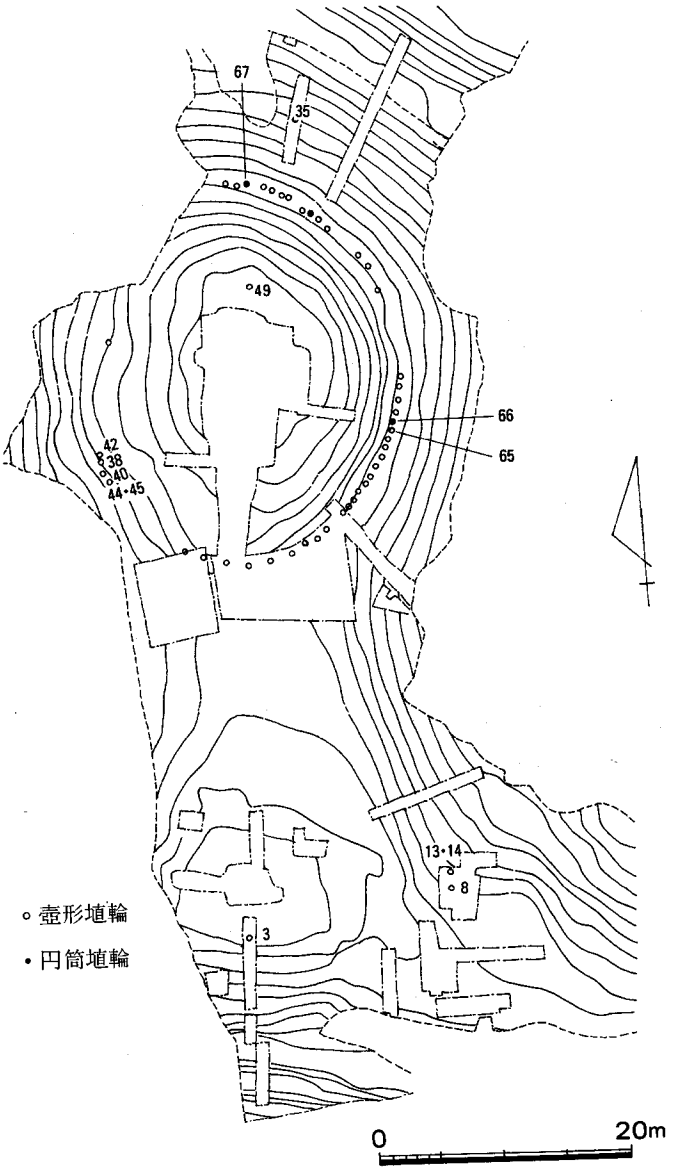
図16. T－R調査区遺構検出状態 （縮尺１／60）

Ⅳ　墳丘出土の遺物

1．概要

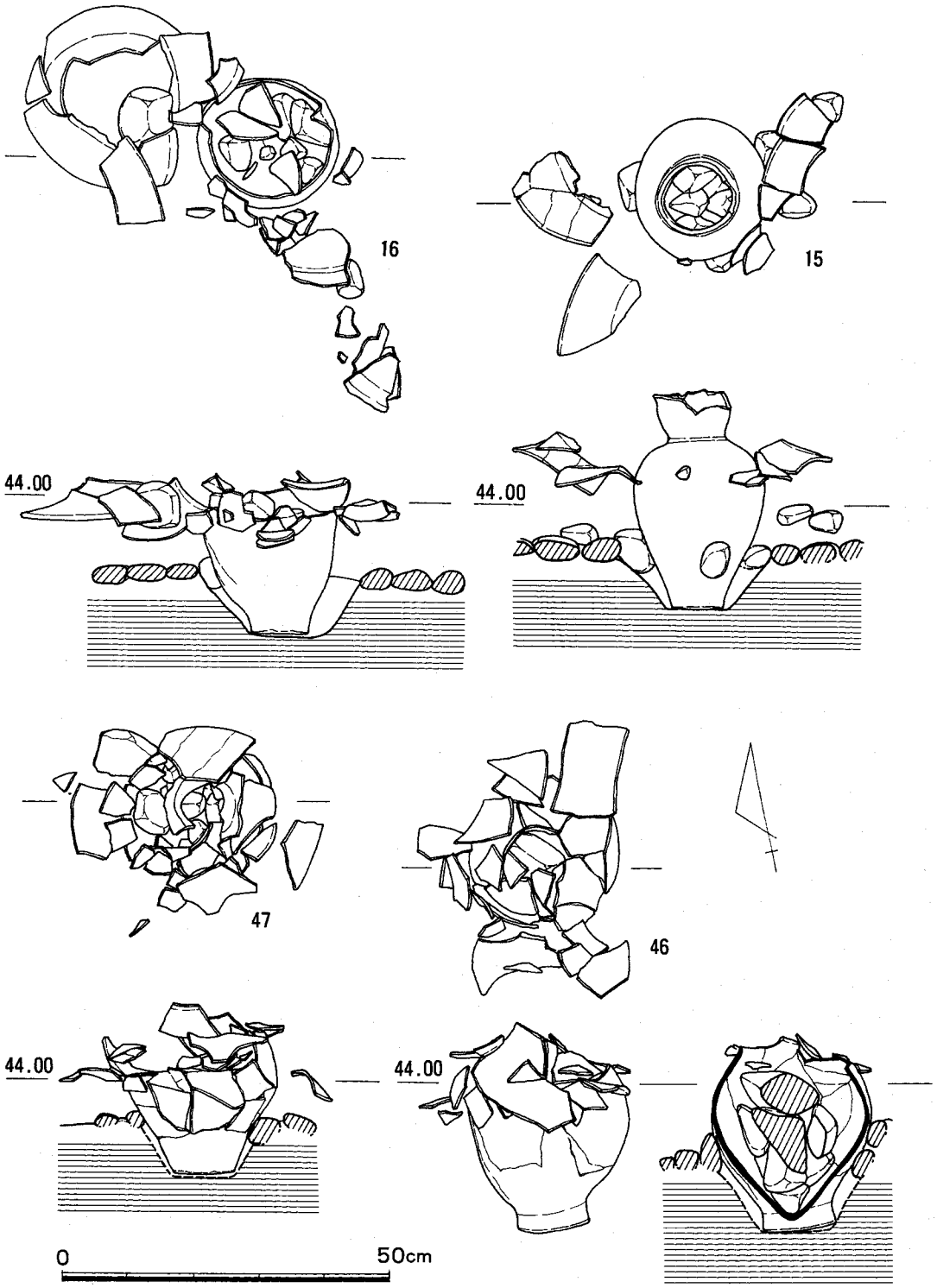
ここでは老司古墳の墳丘から検出した遺物を報告する。老司古墳では墳丘各所において古墳に関係すると見られる遺物の出土や採集があった。それには，埴輪，須恵器，土師器などがある。その他に古墳築造に先行する時期の遺物として先土器時代の剥片がある。

埴輪は1967～1969年に後円部二段目平坦部の追跡の過程と，1987年のB，G，Mトレンチと R，T調査区において樹立状態で検出した。ほとんどが上部を破損していたが頸部まで直立していたものもある。埴輪はほとんどが壺形埴輪であり，共通した手法により平坦面に設置されていた。それはまず，平坦面の敷石を底部の大きさに合せて外し，直径，深さ共に10cm以下の浅い穴を穿つ。そこに埴輪を樹立させ，内部に円礫を詰める。これは重心を下げ，安定を図るためと推定される。底部の形状に多少の変異があるため



※1965～9年と1987年の成果の合成図である。
・埴輪番号は図21とあわせて、図面No.に一致する。
・埴輪No.65～67と番号のないものは位置の確認の後、埋め戻されている。

図17.　埴輪樹立位置　(縮尺１／600)



（方位はすべて共通する。水準は絶対高，単位はｍ）

図18.　埴輪出土状態（１）（縮尺１／10）

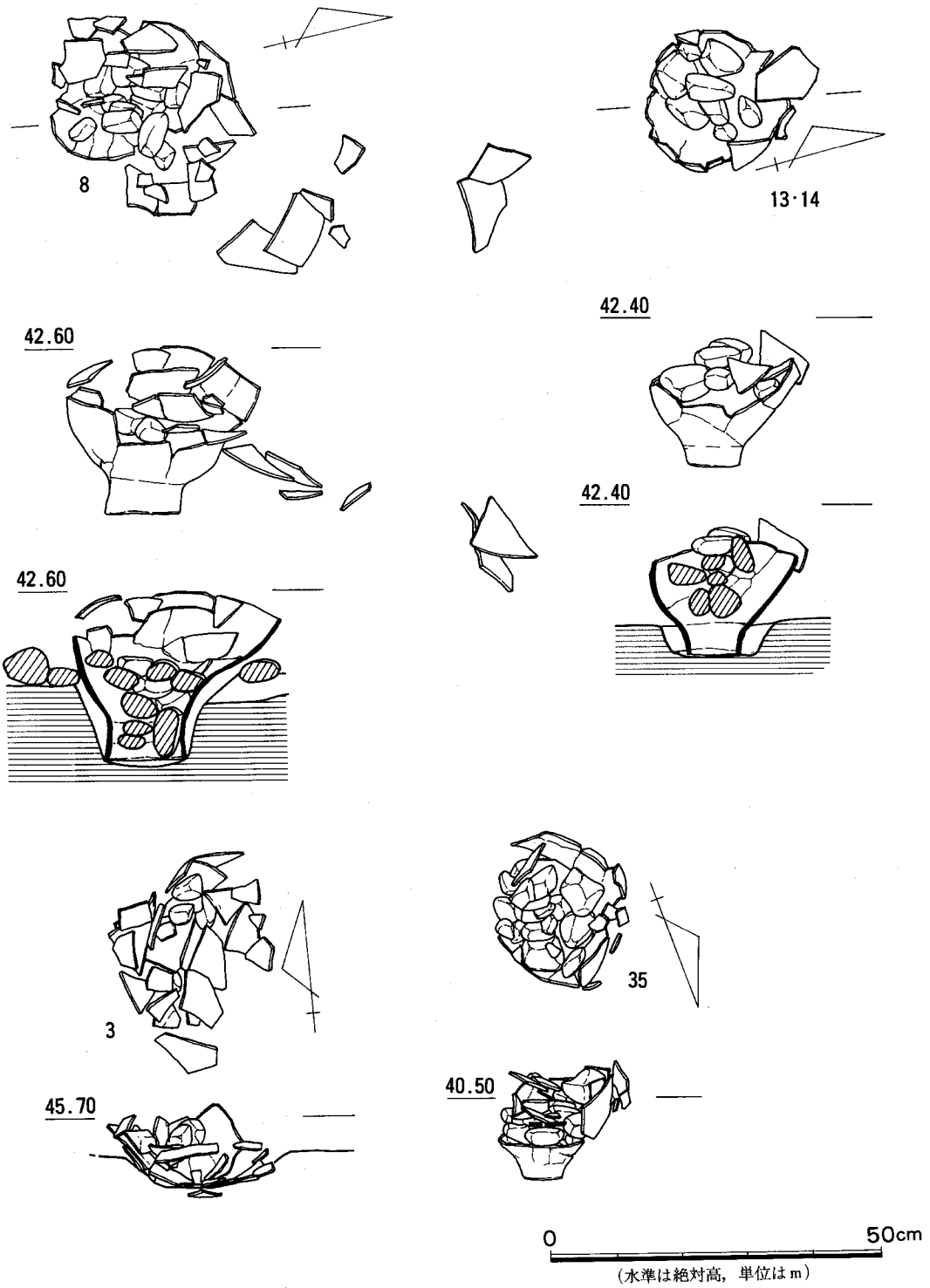


図19.　埴輪出土状態（２）（縮尺１／10）

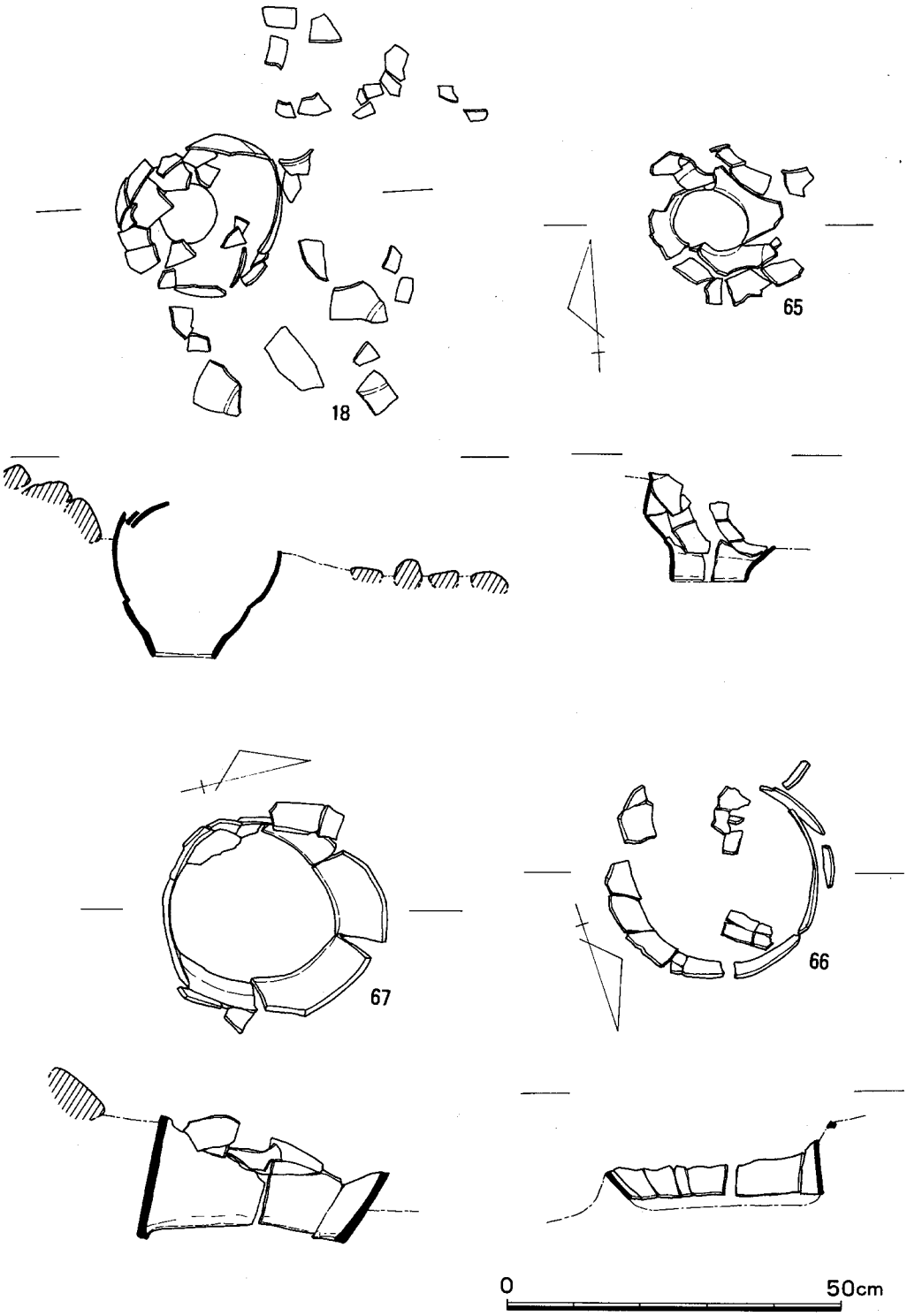


図20.　埴輪出土状態（3）（縮尺 1／10）

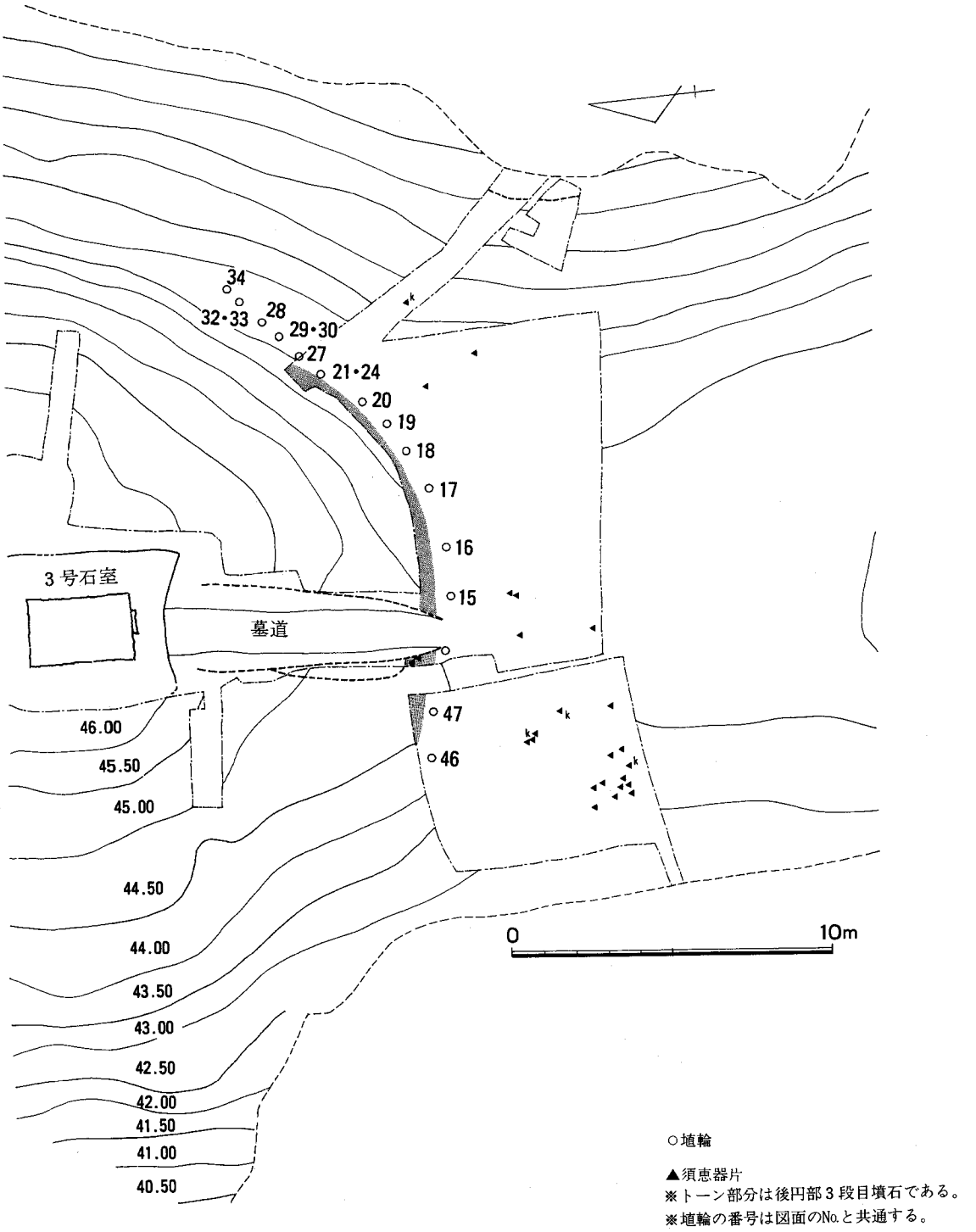


図21.　老司古墳須恵器片出土分布図　(縮尺1／200)

か，その手法にも僅かに差異もあり，№15のように埴輪外面と敷石の間に支えの石を挾む例もある。この他にすべてのトレンチ，調査区から多くの埴輪片が出土した。その中でも特に墳丘斜面の平坦面に多くの破片が出土した。こうしたあり方から，本古墳では各平坦面や前方部，後円部の墳頂平坦面の端部に埴輪の樹立があったと推定される。樹立の間隔は一部しか判明しないが，後円部二段目の平坦面においては場所によって間隔が異なり一定しない。まず，後円部後方では0.6～0.7mであり，東側では0.9m前後となる。さらに前方部に連続する平坦面上では1.3～1.8mとしだいに拡がる。一段目の平坦面の状況は不明であるが，Bトレンチにおいて1.5mおきに2個体が検出されている。また，使用される埴輪は後円部で二重口縁形が主体であり，単口縁形，円筒形もある。前方部では単口縁形が主体であり4号石室周辺にのみ僅かに二重口縁形がある。なお，形象埴輪の破片が3号石室墓道付近と東側くびれ部で出土している。

須恵器は1969年の3号石室墓道の調査の際に一部が出土している。出土位置は正確には不明であるが，「排土中」と「葺石上面」出土の記録がある。そのほかは1987年の出土である。これらは全て破片での出土である。おもに墓道両側の葺石上と，墓道前面の前方部頂平坦面からの出土が多い。ほかに東側くびれ部付近からも少量出土した。このうち前方部平坦面の出土はR，T調査区において敷石上に接して分布している（図21）。

土師器は小破片が少量出土した。出土位置は前方部のB，Gトレンチと，後円部のMトレンチとR調査区である。何れも葺石や敷石の覆土中である。

（吉留秀敏）

2．埴輪（図23～31，図版15～17）

埴輪には壺形埴輪，円筒埴輪，形象埴輪がある。

壺形埴輪には口縁形態において単口縁形と二重口縁形の2種類がある。大きさの点でその差は少なく，単口縁形が僅かに口径が大きいようである。ちなみに単

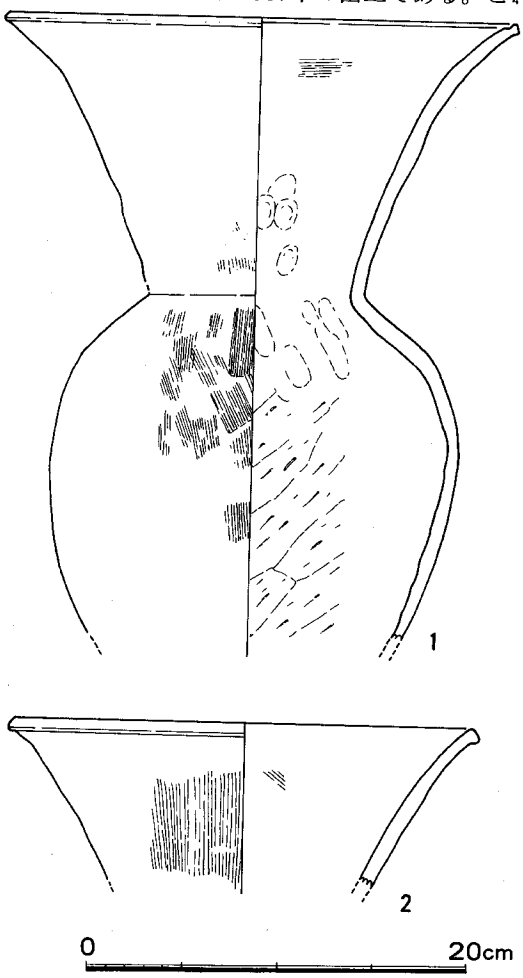


図22. 石蓋土壙墓に使用された壺形埴輪（縮尺1／4）

口縁形は口径24.2～35.0cm，二重口縁形は口径18.8～32.9cmのものがあり，それぞれある大きさに集中しない。器高の判明した例は少ないが，両者に明確な差はないようである。形態，整形，調整などに両者に共通する特徴が見られる。まず，口縁～頸部形態以外について見るなら，胴部は最大径を上半に持ち，底部は焼成前穿孔を有する。底部の形態は大きく4種類に分けられ，1）底部に向かってすぼまり，最下端で緩やかに内湾するもの。2）底部に向かってすぼまるもの。3)底部に向かってすぼまるが，底部上方で傾きが変換し，ほぼ直立するもの。4）底部のやや上方まですぼまるが，底部上方で外反するもの。3)，4)には胴部形成後，後から貼り付けて拡張したものが多い。外面調整は縦位のハケが主で，上半にはその後斜め～横位のハケを施す例がある。内面調整は，胴部ではヘラケズリが主である。中～下位では縦位，上位では横位のヘラケズリが施される。工具は下から上へ半時計回りである。底部は指オサエ，ナデが主であり，横ハケを施す例もある。口縁～頸部の特徴は，まず単口縁形において立ち上り部は共通しており，直線的で口縁端にゆるく外反する。口唇部はa）端面が丸い，b）端面が平面を持つ，c）下方に折れ曲る，d）上方に折れ曲るものがあり，b)，c）が主体を占る。外面調整は縦位のハケが主で，僅かに斜め～横位のハケ，ヘラミガキがある。内面調整は横～斜めハケが主である。頸部，口縁端では指オサエ，ナデが用いられている。二重口縁形は頸部，

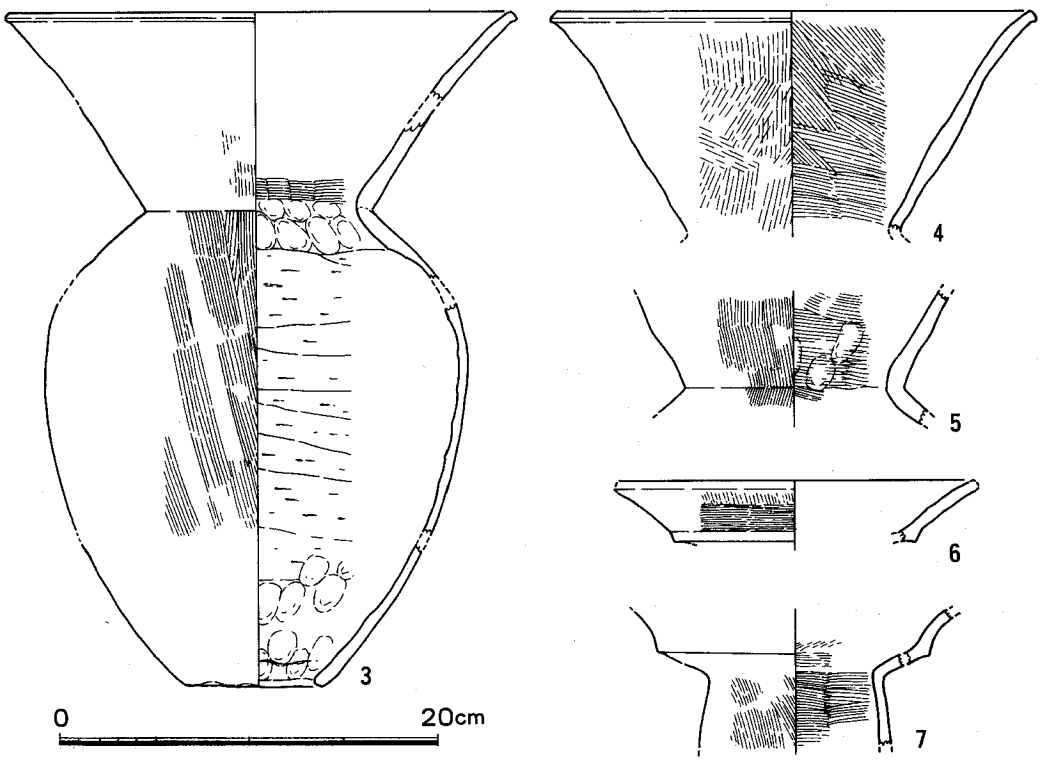


図23.　墳丘出土の遺物(1)(壷形埴輪1)　(縮尺1／4)

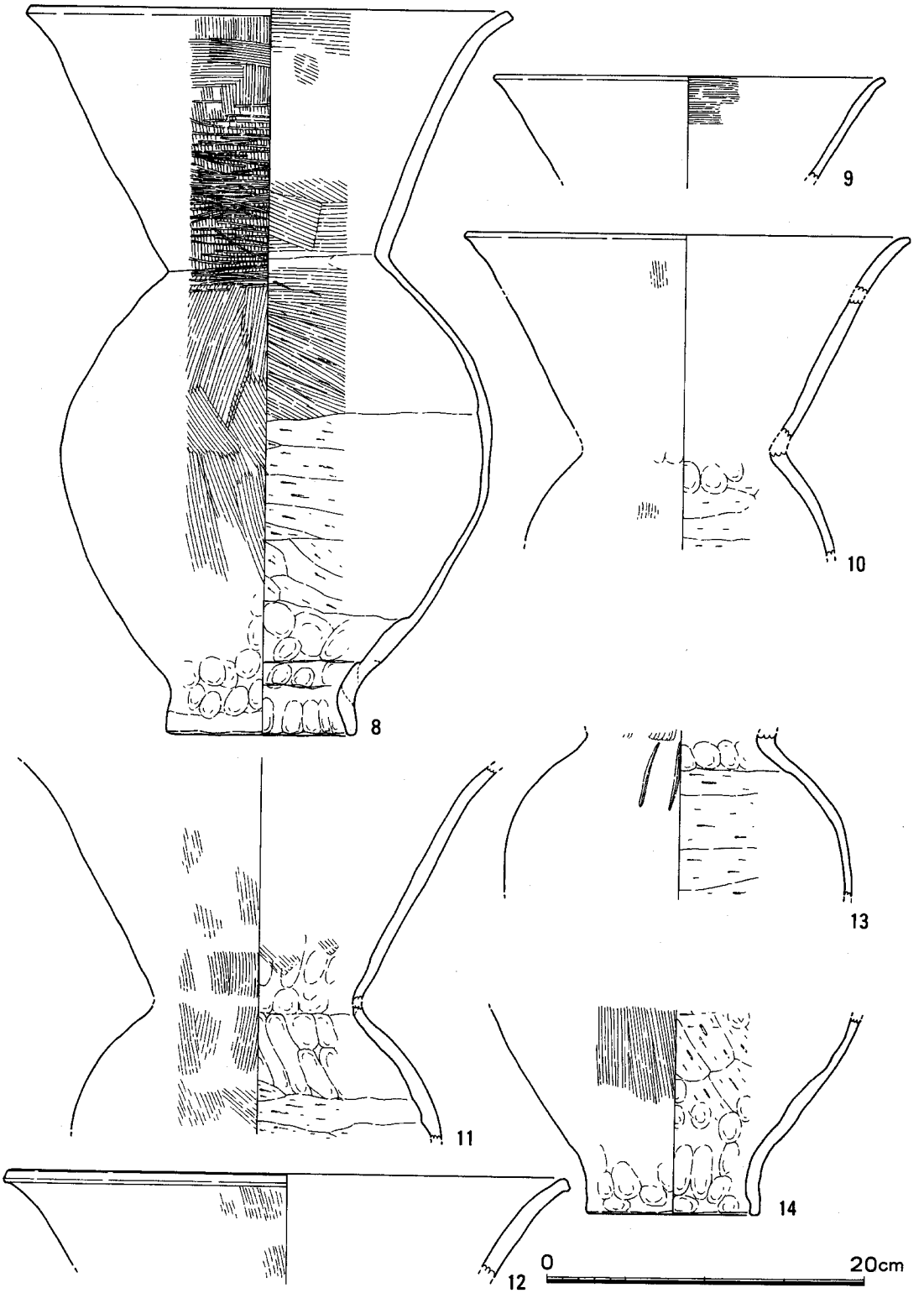


図24.　墳丘出土の遺物(2)(壷形埴輪2)　(縮尺1／4)

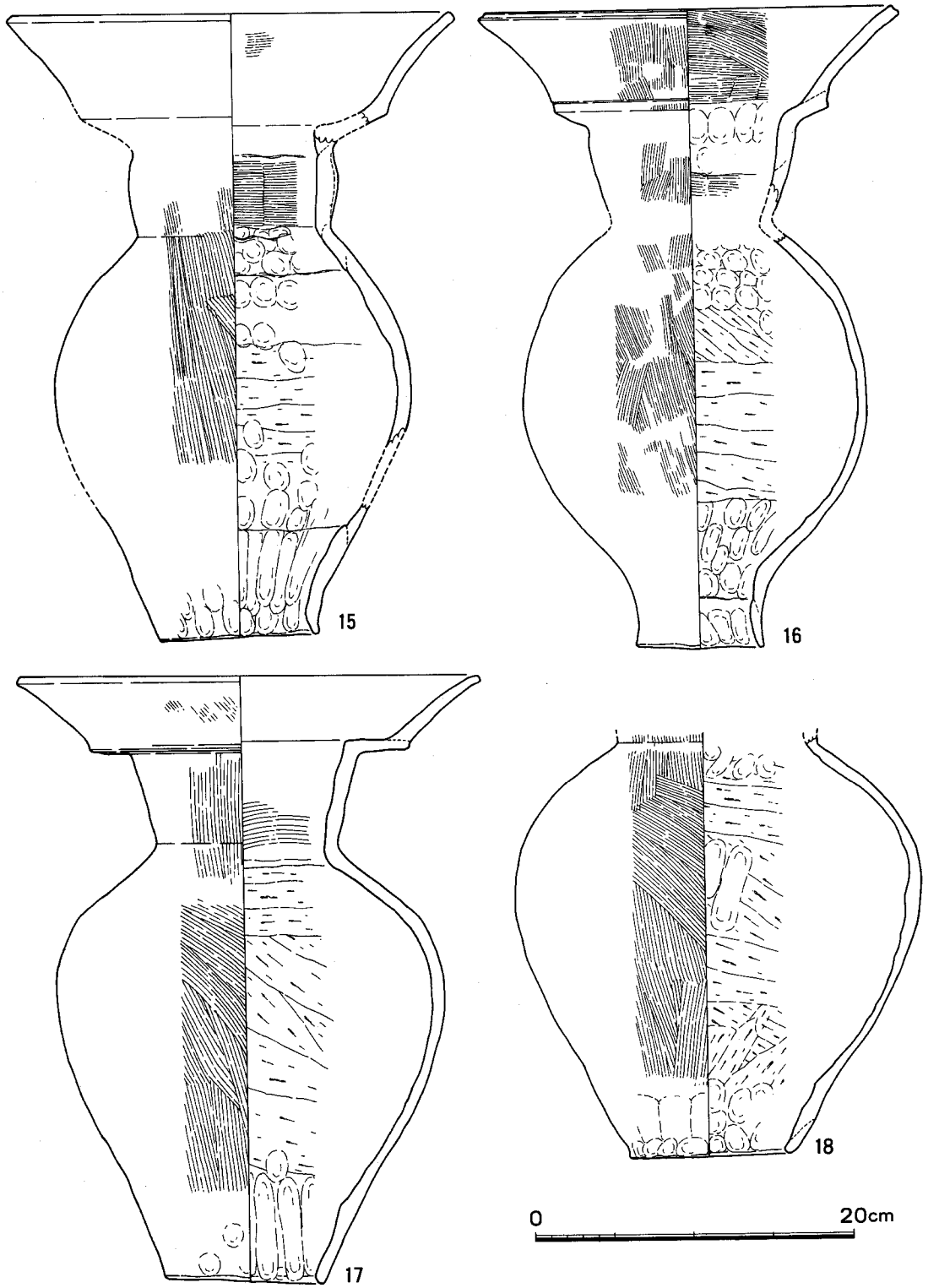


図25.　墳丘出土の遺物(3)(壷形埴輪3)　(縮尺1／4)

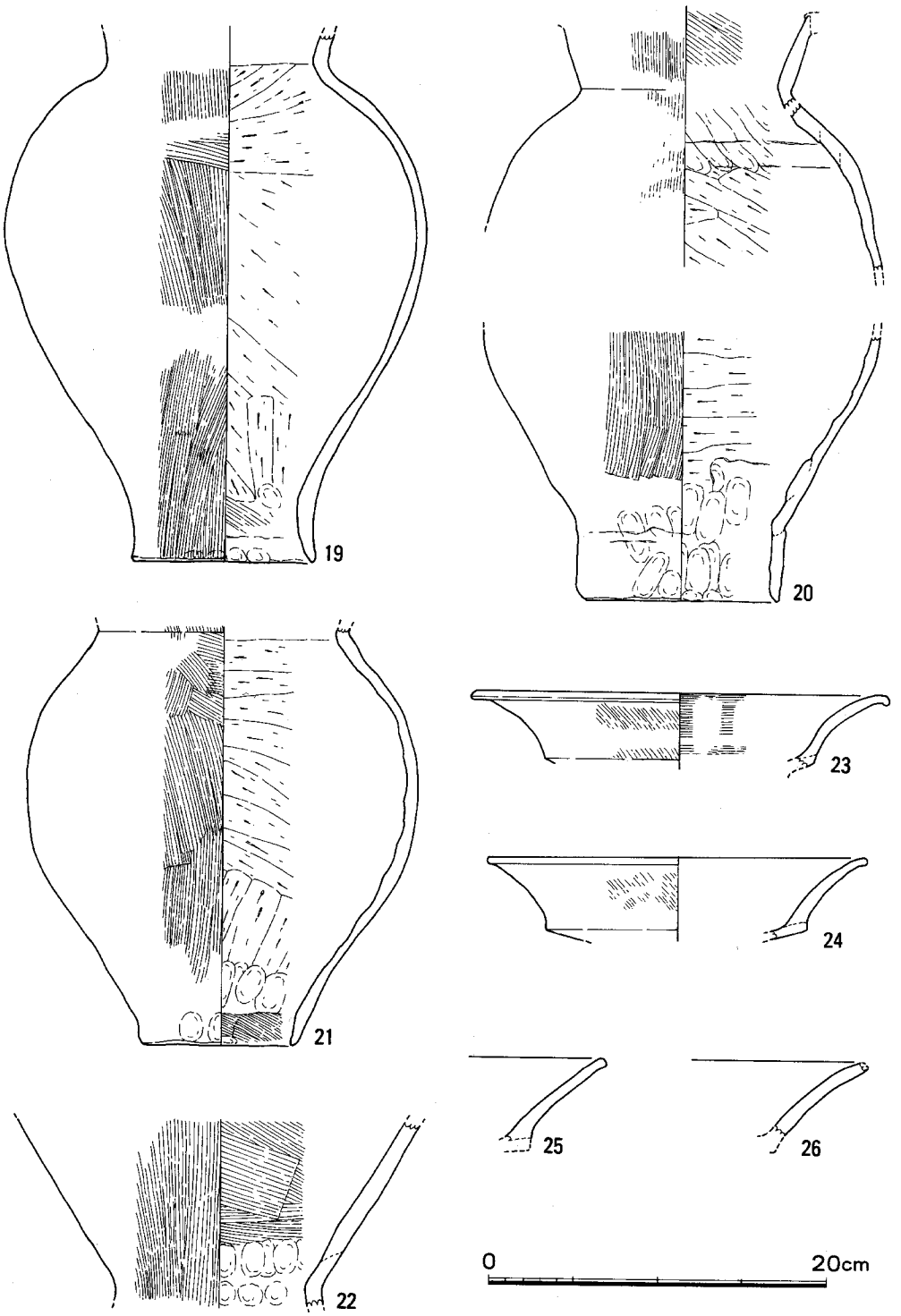


図26.　墳丘出土の遺物(4)(壷形埴輪4)　(縮尺1／4)

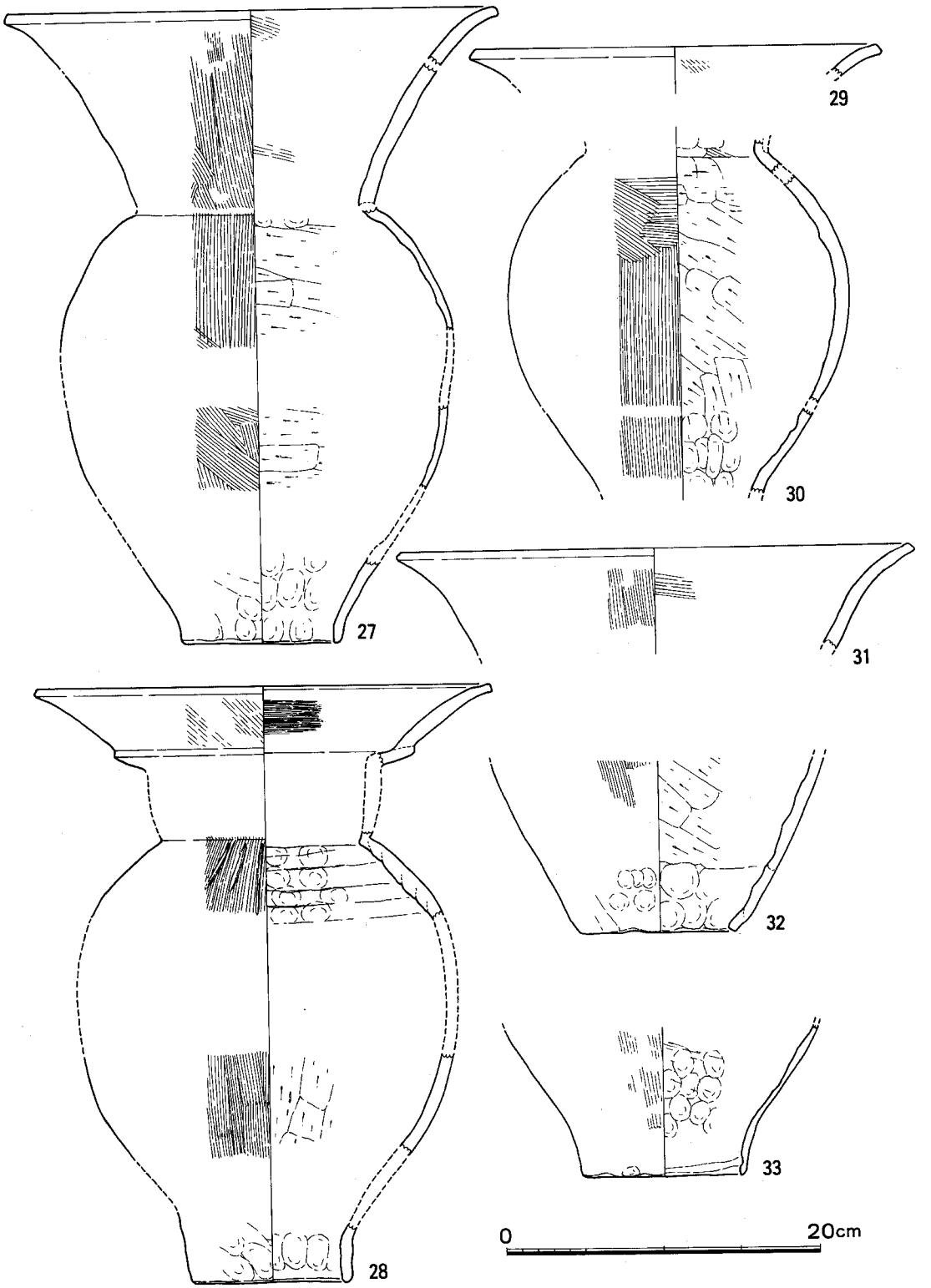


図27.　墳丘出土の遺物(5)(壺形埴輪5)　(縮尺1／4)

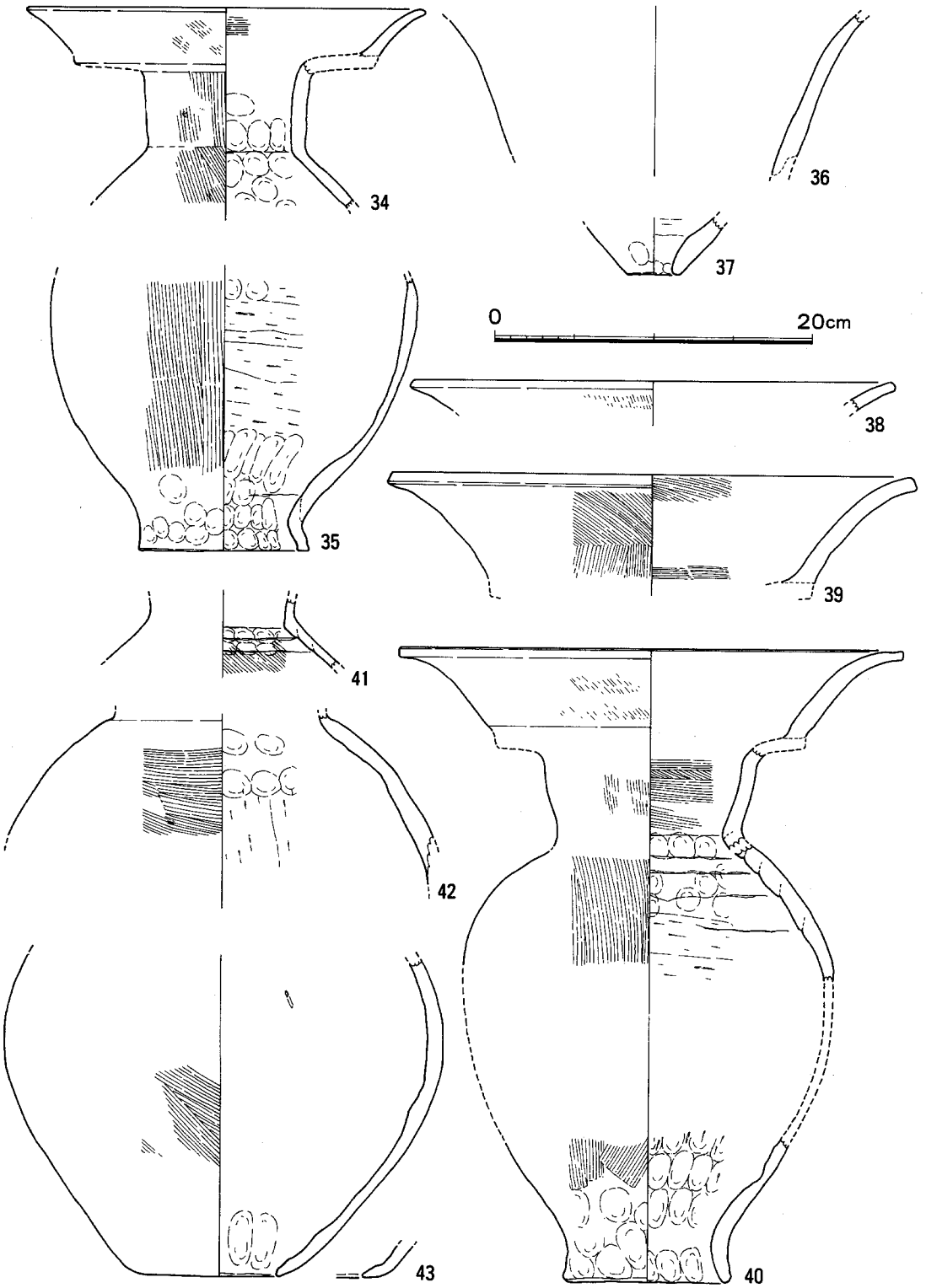


図28.　墳丘出土の遺物(6)(壺形埴輪6)　(縮尺1／4)

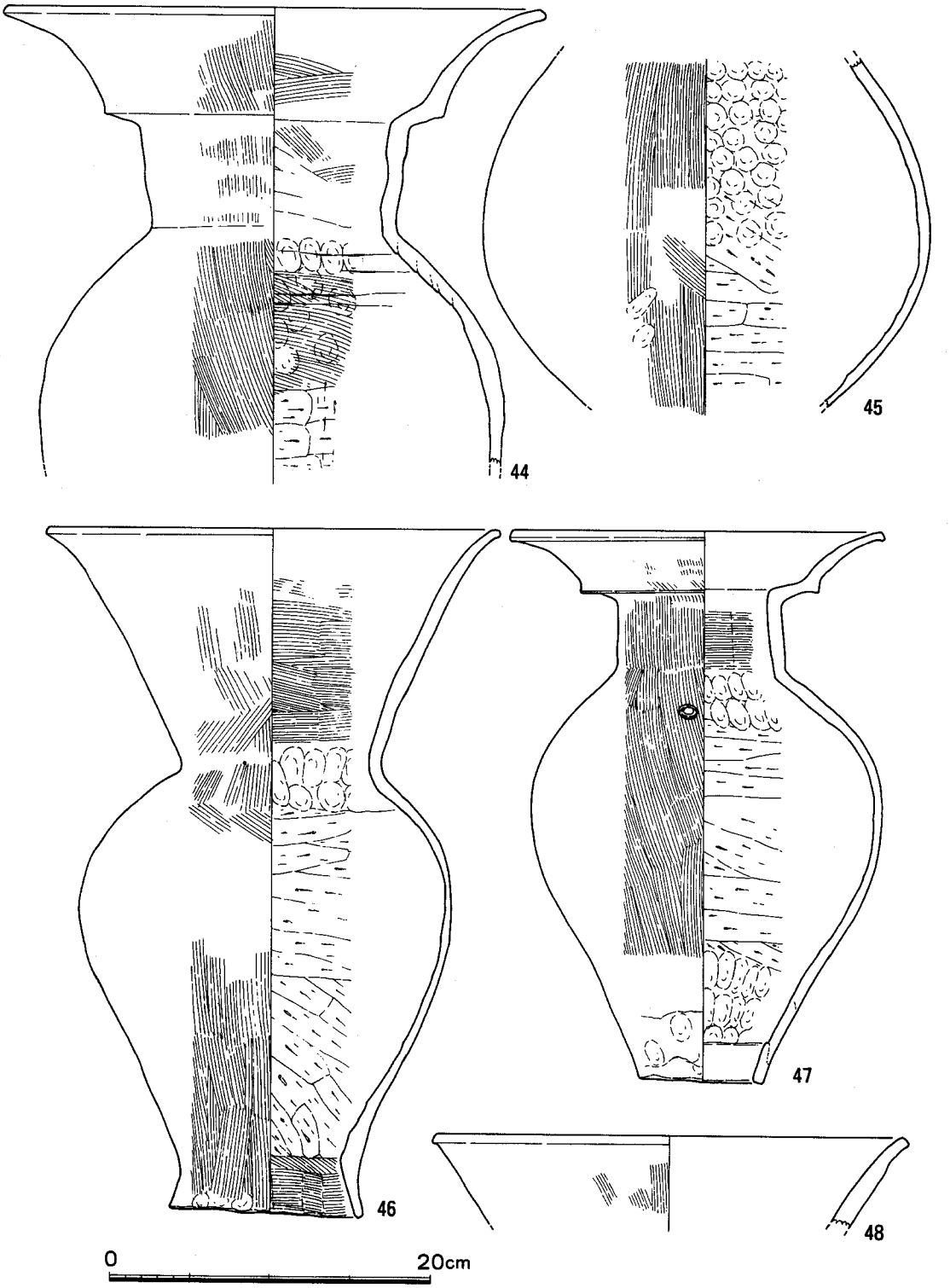


図29. 墳丘出土の遺物(７)(壷形埴輪７) (縮尺1／4)

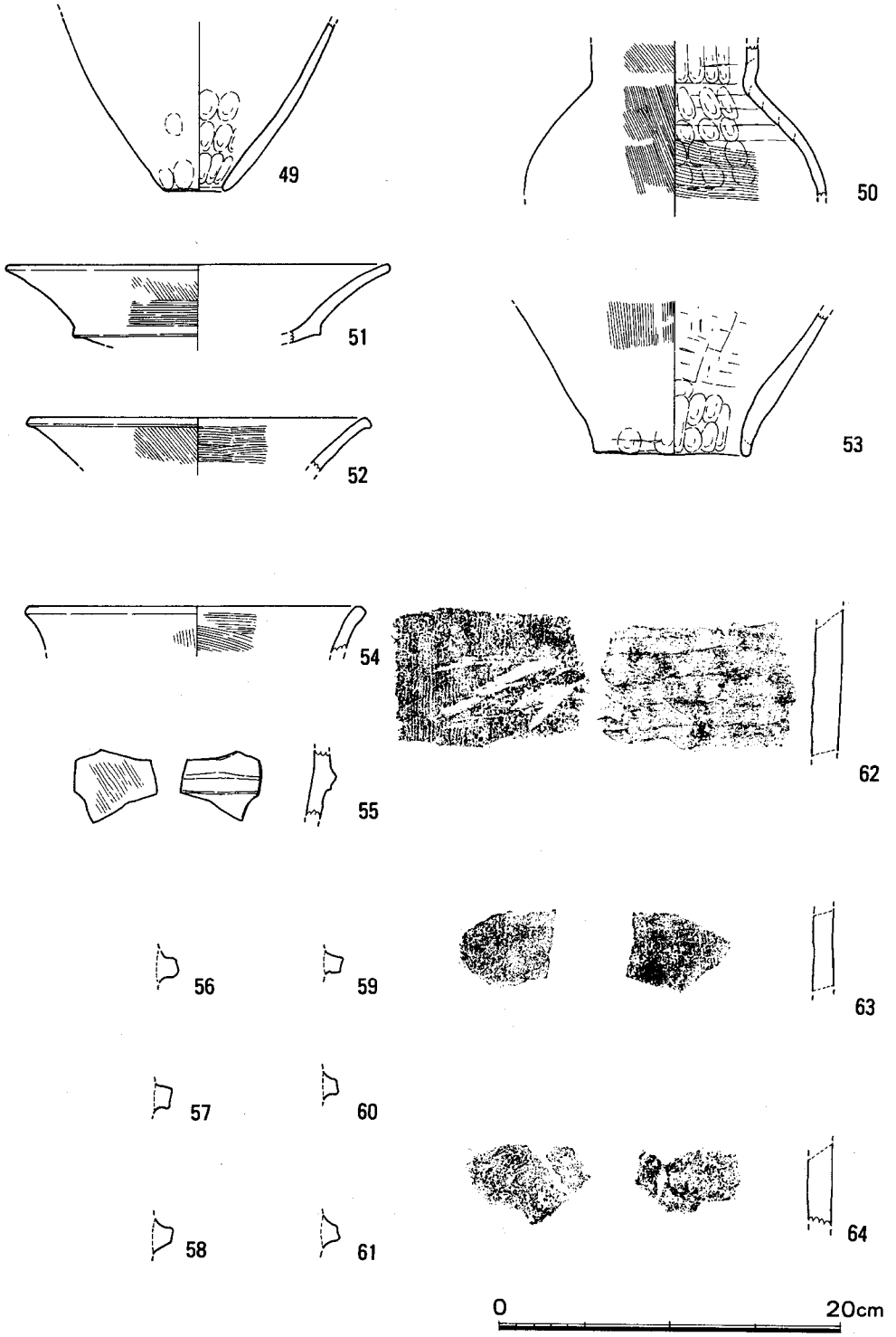


図30.　墳丘出土の遺物(8)(壺形埴輪と円筒埴輪)　(縮尺1／4)

受部，立ち上り部において差異が多い。まず頸部は中央部がやや膨らむ形状を呈する。その中で上部径が大きいもの，ほぼ等しいもの，下部径が大きいものの3種がある。受部はほぼ水平のものと，外方に高いものがある。立ち上り部は直線的に拡がるものと，さらに外反するものがある。口唇部の調整は単口縁と共通するが，さらに口唇端部に窪みを持つものがある。外面調整は頸部が縦ハケ，立ち上り部が斜めハケ，内面調整は横ハケが主体であり，各屈曲部，口縁端部は指オサエ，ナデを用いている。これらの壺形埴輪は胎土には2㎜以下の砂粒（石英を主体，雲母，長石など）を少量含む。焼成は良好であり，胴部下半に黒斑を認めるものが多い。器壁の保存の良いものには外面に赤色顔料が見られる。しかし，下半部約1/3以下には赤色顔料の塗布は認められない。各個体の特徴については観察表を参考とされたい。

円筒埴輪と推定される破片は後円部墳頂，3号石室墓道内，R，T調査区，Kトレンチなどから出土している。また，1969年の調査で後円部二段目平坦部の東側，北側の2地点に，壺形埴輪の間に樹立状態で検出されている。これは取り上られていない。ここでは破片11点について報告する。内訳は口縁部1点，胴部4点，突帯部6点である。54は円筒埴輪と見るには疑問も残る。外面縦ハケ，内面横ハケである。直径は20cm弱と推定された。55は突帯の付く胴部破片である。突帯は5㎜と低い。外面はナデ，内面は斜めハケである。62は外面は荒い縦ハケ，内面横位のヘラケズリである。黒斑が見られる。小片であり，不明確ながら直径は40cm以上と推定される。63，64は外面ナデ，内面は細かい縦ハケである。突帯部は断面がひずんだ台形を呈し，中央が凹むM字状のものもある。各面を強くナデている。高さは1cm程度である。黒斑が見られるものもある。保存の良い56からは直径が40cm強と推定された。

形象埴輪の破片は後円部墳頂，3号石室墓道付近，R調査区から出土した。65～67は後円部頂から3号石室墓道付近で出土したものであり，同一の家形埴輪の可能性が強い。胎土には2㎜以下の砂粒を含み，焼成は良好である。器壁，割面は風化が進んでいる。65は屋根と壁材の接続部分であろう。屋根部外面には僅かに縦ハケが見られ，内面や接続部は指オサエやナデで調整している。屋根と壁は約135°の傾斜で連なる。66は壁材の破片であり，67は高さ5㎜程度の突帯が直線に走行している。突帯上面は横位のヘラケズリ，その他はナデである。壁下部の裾回り突帯ではないか。68は形態不明である。平板な破片であり，内外面共にヘラケズリである。69は形態不明である。ゆるく屈曲する鰭状のもので，基部の接合部から剝落している。割面や剝面以外に赤色顔料が塗布されている。（大西智和，吉留秀敏）

3．須恵器（図32～34，図版18・19）

須恵器は計57点の破片がある。そのうち7点は胎土分析に使用した。器種には器台，甕があり，不明のものが3点ある。

器台には8点の破片があり，類似した特徴をもつ。1は口縁部の破片である。口縁端は丸く

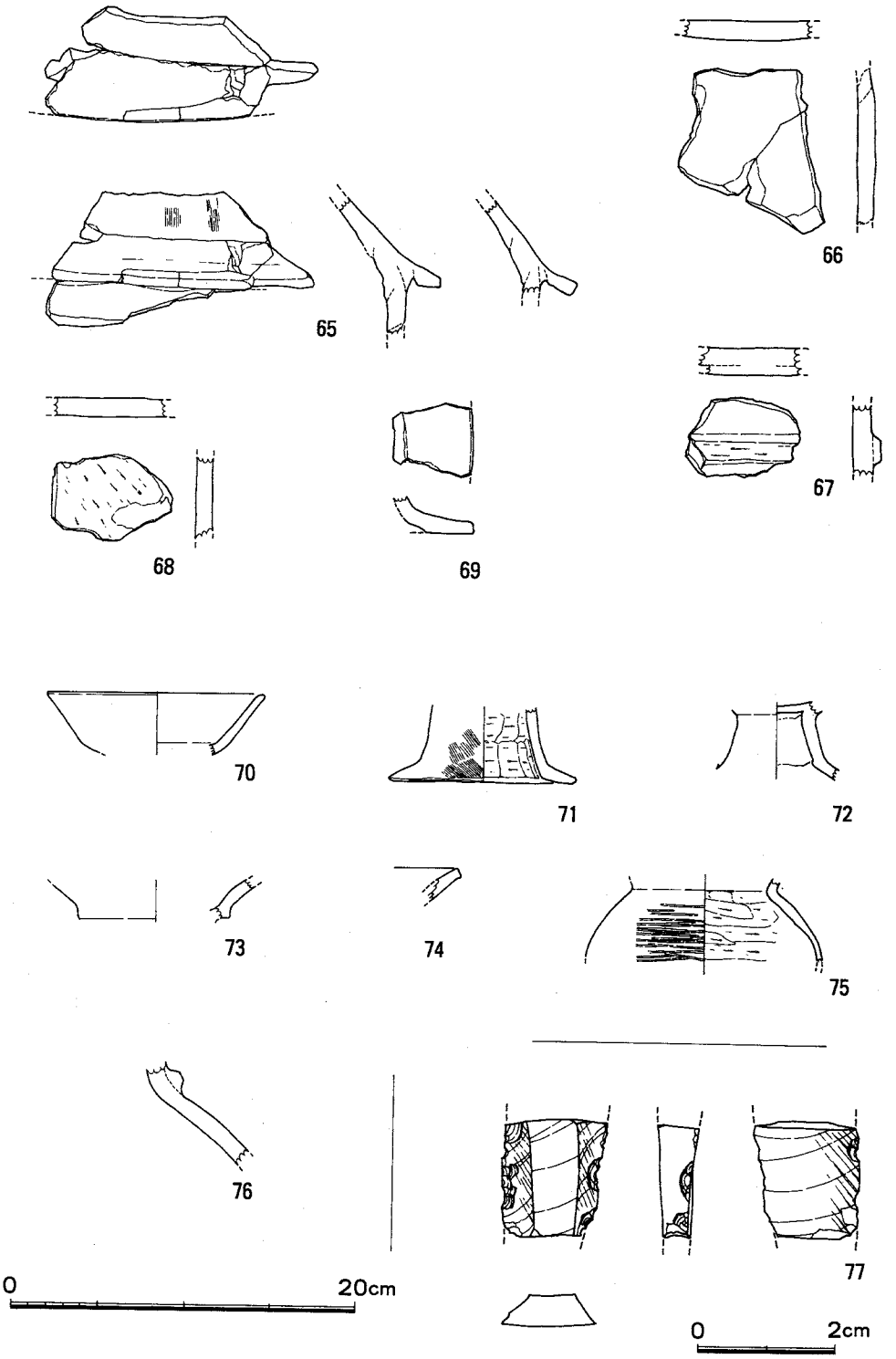


図31.　墳丘出土の遺物(9)(形象埴輪・土師器・その他)　(縮尺1／4・1／1)

仕上げられ，口縁下には一条の三角突帯を有する。突帯の下には６条以上の波状文が施される。２～５は坏部の破片である。２は３段の波状文が施される。上は４条以上，中は６条，下は３条以上の波状文である。波状文は上下にあまり広がらない。４には８条，６条の波状文，三角

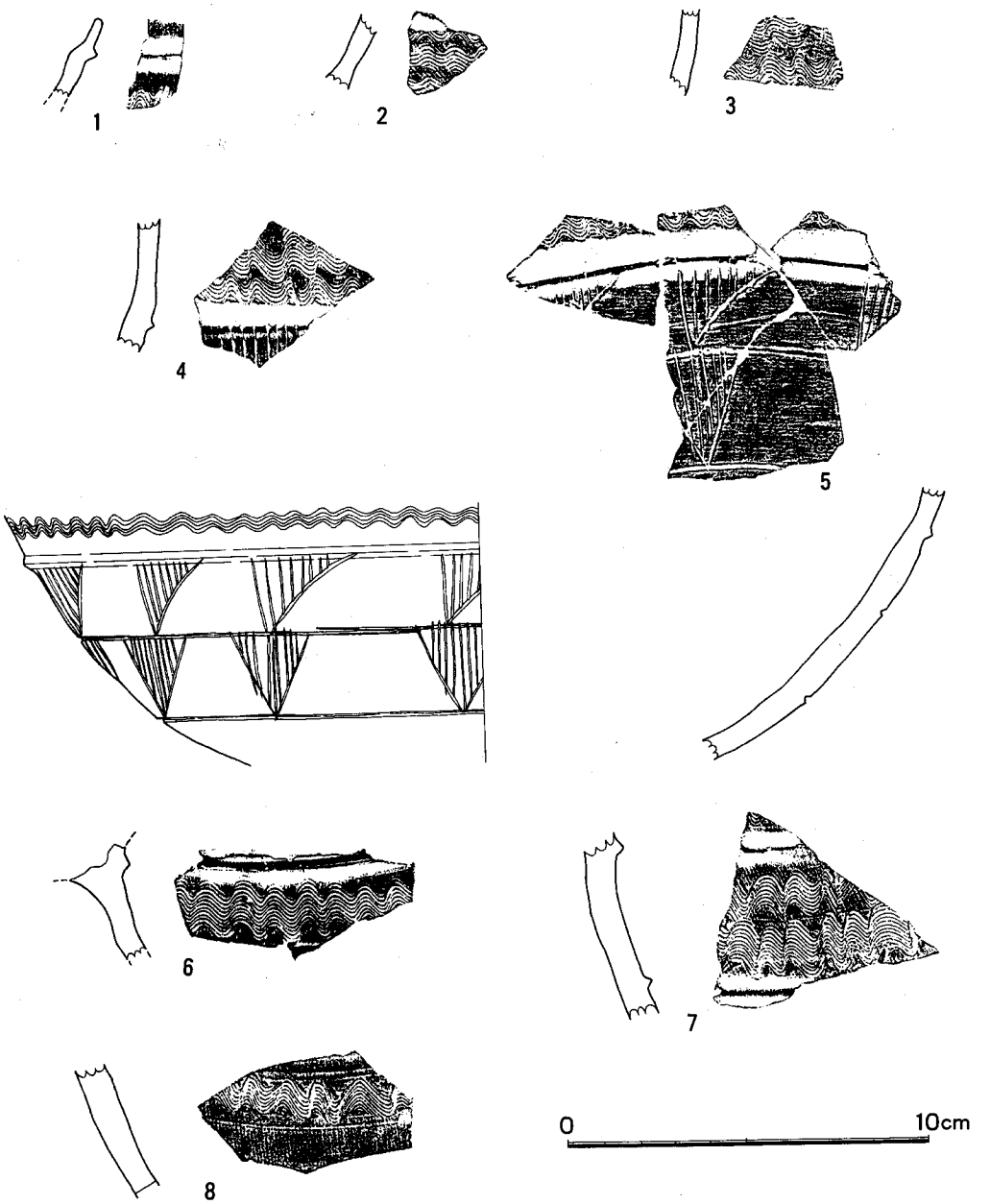


図32.　墳丘出土の遺物(10)(須恵器１)　(縮尺１／２)

突帯，鋸歯文がある。三角突帯は上下の凹線によりさらに強調されている。鋸歯文は突帯を切り込んで描かれ，縦に８本，斜めに１本の沈線で構成される。５は復元最大径25.8cmを測る。波状文は６条であり，その下に凹線で強調された三角突帯がある。三角突帯と沈線２本で２段

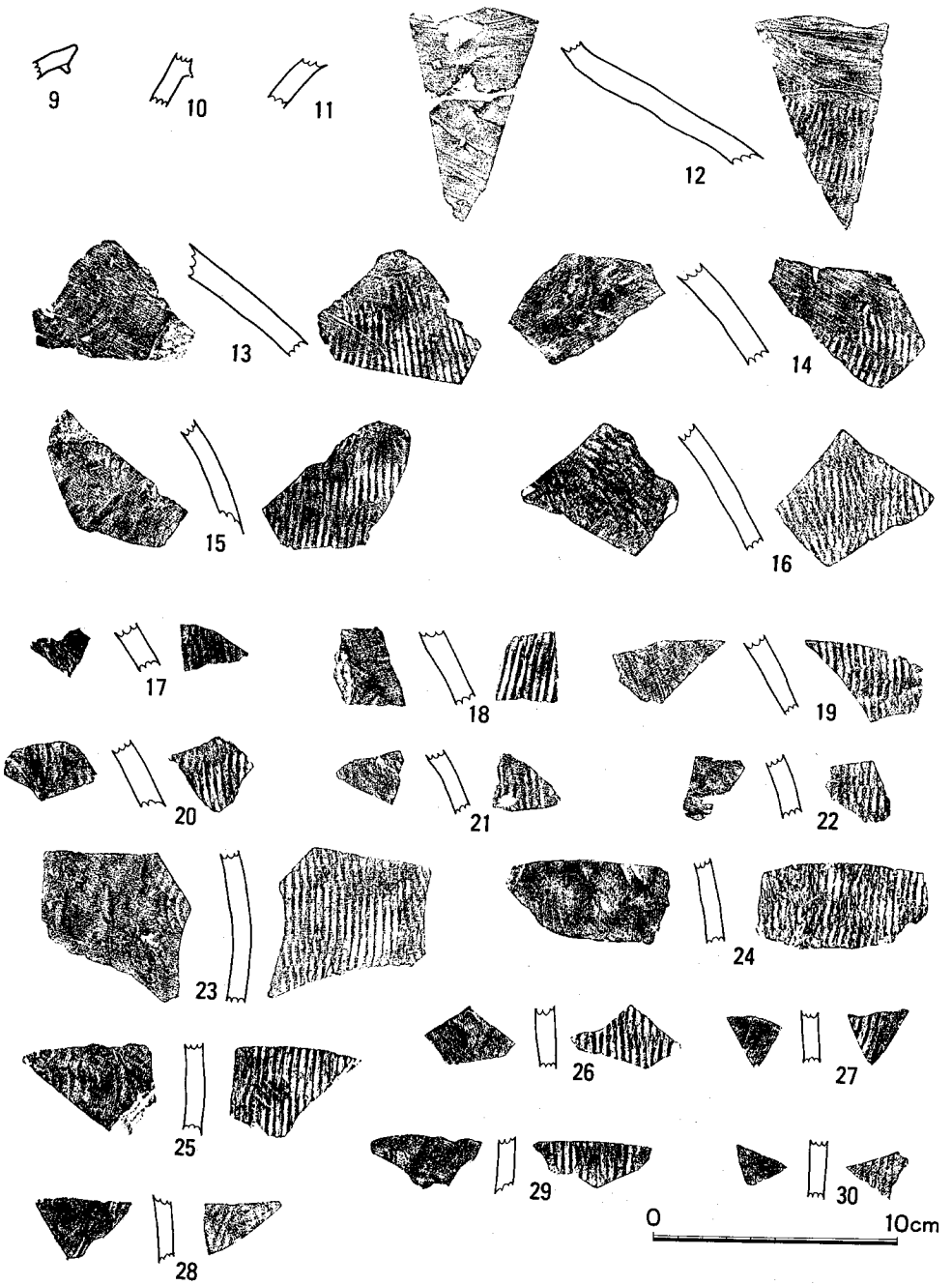


図33.　墳丘出土の遺物(11)(須恵器２)　(縮尺１／３)

に区分された中に鋸歯文が描かれる。鋸歯文は上段が縦に８本，斜めに１本の沈線で構成され，下段は縦に９本，斜めに２本で構成される。なお，これらの沈線は鋭利な金属器などで施されている。６～８は脚部の破片である。６は破片の上面が坏部との接合部となっている。突帯と

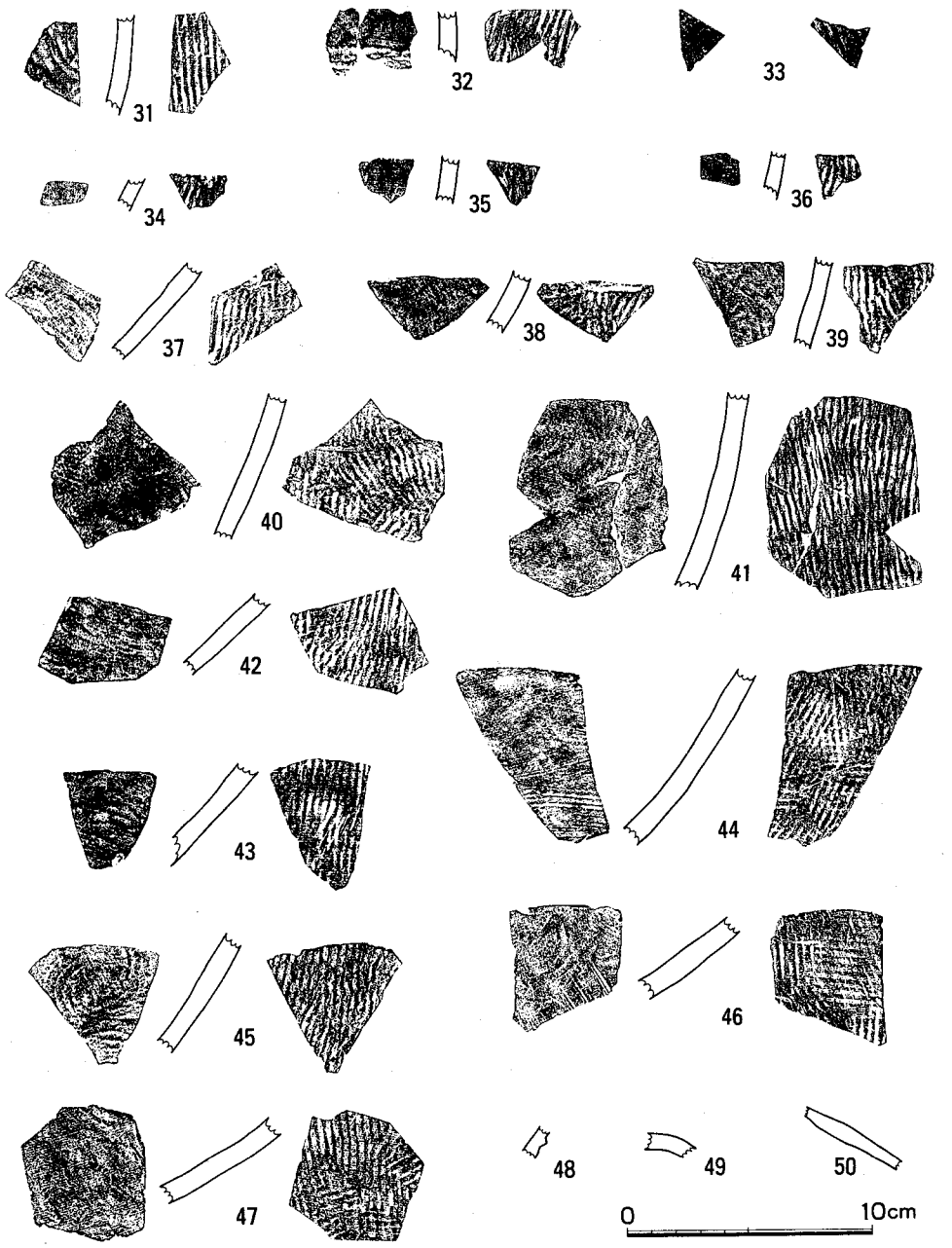


図34.　墳丘出土の遺物(12)(須恵器３)　(縮尺１／３)

突帯の間に12条の波状文を施す。7は2本の突帯によって3段に区切られる。上段は3条以上の波状文，中段は8条および11条の波状文を施す。上段と中段にはスカシ孔の痕跡がある。スカシ孔は長方形か台形を呈していたと思われる。8は8条の波状文が施され，下部にはスカシ孔の痕跡がある。色調は1～7は外面黒灰色，内面青灰色を呈するのに対し，8は内外面共に灰色を呈する。また，胎土は1～7は砂粒をほとんど含まず，8は砂粒を僅かに含む。これらのことから，1～7と8とは別個体の可能性がある。

甕には39点の破片がある。これらも類似した特徴をもっている。9は口縁部の破片である。口縁端はやや尖り気味に丸く仕上げられ，口縁下に三角突帯を有する。調整は横ナデである。10，11は頸部の破片である。低い三角突帯を有する。調整は横ナデである。12～14は肩部の破片である。12は頸部との接合部である。外面は平行タタキの後ナデ，内面はナデである。15～22は肩部から胴部の破片と思われる。外面は平行タタキで，内面はナデであるが，一部に青海波タタキ痕を残すものもある。外面に灰をかぶっている。23～39は胴部の破片である。外面は平行タタキ，内面はナデであるが，一部に青海波タタキ痕を残すものもある。40～47は底部付近の破片と思われる。外面は交差した平行タタキで，内面はナデであるが一部に青海波タタキ痕を残すものもある。色調は9～44は外，内面ともに青灰色，45～47は外面白灰色，内面青灰色を呈する。焼成は9～44は良好であるが，45～47はやや悪い。胎土は全体に砂粒をやや多く含む。その他に器種不明の須恵器片が3点ある。48は1条の突帯を有する。内外面共に自然釉をかぶっている。焼成は良好であり，胎土は砂粒を僅かに含む。49は外面に緑灰色の自然釉をかぶる。内面は青灰色を呈し，調整は横ナデである。焼成は良好で，胎土に僅かに砂粒を含む。48と49は同一個体の可能性がある。50は外面に灰をかぶっている。内面は黒灰色を呈し，調整は横ナデである。焼成は良好で胎土は砂粒をほとんど含まない。（太田睦）

4．土師器（図31，図版17）

土師器には坏1点，高坏2点，壺2点がある。この他にも少量の破片が後円部頂や4号石室の周辺において出土しているが，小片のため図化は困難であった。70は坏の口縁部である。直径は12.5～13.0cmであり，1/6程度が残存している。底部から口縁に向う稜が不明瞭で丸く内湾して立ち上がる。器壁が厚く，胎土には砂粒が少ない。内外面共にナデ調整である。71は高坏の脚部である。底部径は10.8cmを測る。約2/3が残存している。ほぼ垂直に下る軸部から急角に開き，脚端部に至る。胎土は砂粒が多く，焼成は良い。黒斑がある。外面は斜めハケ後ナデ，軸部内面は横位のヘラケズリ，脚部内面は横ハケ後ナデている。72は高坏の軸部である。軸部から脚端部に至る曲線はゆるやかである。胎土には砂粒が多い。外面の調整は風化のため不明であり，内面はナデが見られる。73，74は二重口縁壺の口縁部である。胎土に2㎜以下の砂粒を多く含み，焼成は良く，器面は黄灰色を呈する。この2点は同一個体と推定されるが接

合しない。受部から口縁部にはゆるやかに立ち上る。口縁端部は下方につまみ出す。外面調整はナデ，内面は不明である。75は壺の肩部である。全周の1/3が残存する。胎土は精製であり，0.5㎜以下の砂粒を少量含む。頸部はよくしまり，口縁部へ開く。外面はナデ後横位のヘラミガキを施す。胴部内面は横位のヘラケズリである。頸部は指オサエ後ナデている。76は大型の壺か，朝顔形埴輪の頸部と推定される。2点の破片があり，2㎜以下の砂粒を多く含む。焼成は良い。肩部の張りはなく，ゆるやかに頸部に達する。頸部外面に高さ8㎜の突帯が巡る。外面と頸部内面は横ナデ，内面は横ハケ後ナデである。

5．その他の遺物（図31）

77は使用痕ある剝片である。東側くびれ部の斜面で出土した。良質，不透明の黒曜石を素材とする端正な縦長剝片である。基部と端部を欠損する。背面の剝離に主要剝離面と逆方向の剝離がある。両側の側辺部に微小剝離が観察される。先土器時代に所属すると推定される。

（吉留秀敏）

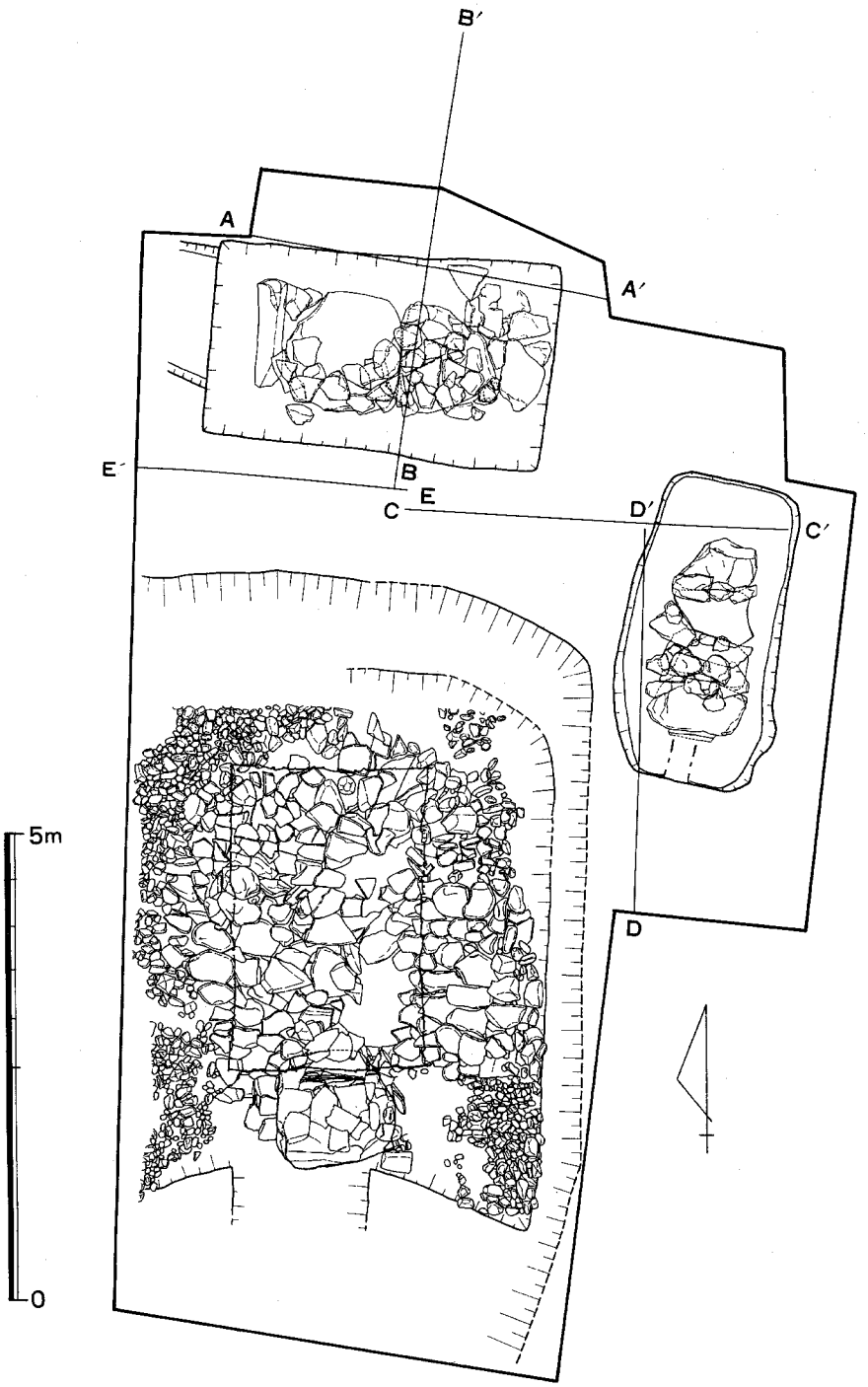


図35.　1～3号石室位置図　(縮尺1／80)

V　石室の調査

1．概要（図35, 図版20．21）

老司古墳では内部主体と考えられる石室を4基確認している。また，前方部墳端外に1基の石蓋土壙墓を確認した。4基の石室のうち1～3号石室の3基は後円部墳頂部に設けられており，4号石室は前方部墳頂部に設けられた壇状の施設上に設けられている。

1号石室は後円部墳頂部の中心より約2.5m北側に位置し，石室の主軸を古墳主軸にほぼ直交して設けられている。墓壙は後円部墳丘第3層群を切り，同層群上面に立ち上がる。墓壙底は地山に達している。墓壙と墓壙内埋土の上部を，墳丘盛土第6層群が覆っている。墓道は石室横口部のある墓壙西側に，墳丘西側斜面に向って付設されている。墓道内埋土には墳丘盛土第6層群起源とみられる小円礫が多数含まれている。

2号石室は後円部墳頂部の中心より約2.5m東側に位置し，石室の主軸を古墳主軸とほぼ並行して設けられている。墓壙は後円部墳丘盛土第3層群を切り，同層群上面に立ち上る。墓壙底は地山に達している。墓壙と墓壙内埋土の上部を，墳丘盛土第6層群が覆っている。

3号石室は後円部墳頂部の中心の約1.5m南側に石室奥壁が位置し，石室の主軸を古墳主軸にほぼ並行して設けられている。墓壙壁は後円部墳丘盛土第3層群上面に達する。墓壙は第1層群を切り，地山を深く掘り下げているが，第2，3層群を明瞭に切る部分はない。墓壙壁は第1層群の上部まで垂直に近い角度で立ち上がり，第2，3層群に入ると角度を緩く変化させる。第3層群の上面への立ち上がり部分は，特に南側で緩いカーブのために不明瞭となっている。第1層群の上面では墓壙南側に墓壙に向って下降する「斜道状遺構」が設けられている。第2層群上部の「あずき色」砂質土は墓壙を囲むようにレンズ状の堆積を見せる。その成因は地山深部土の二次堆積物と見られ，本石室の墓壙掘削は第1層群の上面から開始された可能性が高い。第2, 3層群は墓壙の周囲に土手状に盛土しながら構築されたと推定される。墓壙の規模は第1層群上面で長さ約6.5m, 幅約5.0mを測り，第3層群上面で長さ約8.5m, 幅8.0m以上を測る。墓道は横口部のある石室南側に，前方部頂平坦面に達する約8.8mの長さで付設されている。墓道は「斜道状遺構」の中央部を縦断し，第2～3層群を切り，地山に達している。墓壙内埋土は3小群に分離され，埋土の過程に墓壙内で石室の上部を土まんじゅう状に盛る段階があったとみられる。墓壙および墓壙内埋土上部は第6層群が覆っている。

4号石室は前方部頂平坦面に構築された壇状の施設の中央部に，古墳主軸に直交して設けられている。墓壙は地山を掘り下げて設けられているが，上部の墳丘盛土との関係は不明である。墓道は石室の横口部のある石室西側に，墳丘盛土を掘り切り設けられている。（吉留秀敏）

2．1号石室（付図2，図36～40，図版22～27）

1）墓道の構造（図版25）

第2次調査で第3号石室の墓道の存在が確認されたことから，西側小口に同様の大きな立石のあるこの石室にも墓道が付くものと考えられた。第1次調査ではこの部分の調査はなされていなかったので，第3次調査において墓道および立石周辺の調査を実施することとなった。

立石から発掘区の西壁まで125cmという限られた間での調査で墓道は長さ80cmを検出したにすぎない。墓道は墓壙の中央よりやや北側に寄ったところから，石室・墓壙の中軸線に対してやや北西にのびるものと考えられる。墓壙につく部分では幅は153cmで西側に行くにしたがい狭くなる。検出部の西端で137cm，深さは18～27cmを測る。

2）石室の構造

主軸をほぼ東西にとる長さ368cm，幅211～227cmの墓壙内に板石小口積の竪穴系横口式石室を設けている。竪穴系横口式石室の最も顕著な特徴を示すところは，なんといっても横口部分であるのでまずこの部分の説明を行ないたい。横口部すなわち西側小口壁は墓道底と同レベルで，側壁と比べ一段低くつくられている。横口部は高さ32～37cm，側壁西端の高さは約70cmで側壁高の約半分である。横口部の幅は75cm。石室の裏込には墓壙一杯に灰白色粘土をつめているが，横口部分は灰白色粘土の上に板石を置き，これを支えとして115cm×80cm×15cm程の大きな立石すなわち横口の閉塞石が天井石と側壁をおおうようにたてかけてある。この立石の裏込は墓道と同レベル以下は灰白色粘土であるが，それより上は赤褐色粘土を用いており，又その形状は立石の大きさに合わせ浅いU字状となっている。この赤褐色粘土の部分は追葬時の閉塞石を開く際の掘り込みであろうと考えられる。又この赤褐色粘土中より手鎌2点，櫛1点が出土した。これらは灰白色粘土より7～8cm程浮いた状態であった。この遺物は当初より閉塞石の前に置かれたというよりも追葬時にこの部分に置かれたものと考えられよう。

この階段状に入る横口部をのぞけば石室そのものは，まさに竪穴式石室といってもよかろう。石室は長さ214cm，幅は横口部で100cm，中央部で87cm，奥壁で103cmを測る。石室の高さは奥壁で90cm，横口部で70cm程である。石室には奥壁側に103cm×115cm，厚さ12cm程の，横口側には121cm×128cm，厚さ11cm程の大板石を用いて蓋石とし，横口部は前述のとおり115cm×80cm，厚さ15cm程の大板石で閉塞している。又奥壁の石室外には78cm×47cm，厚さ9cm程の石室に用いられた石よりもやや大き目の板石が蓋石とならぶように置かれている。

この石室は北側側壁の蓋石直下を掘られて盗掘を受けており，とくにこの部分は壁面のせりだしが激しく，又，破壊の状態が著しかった。

石室の主軸はN－69°－Wである。

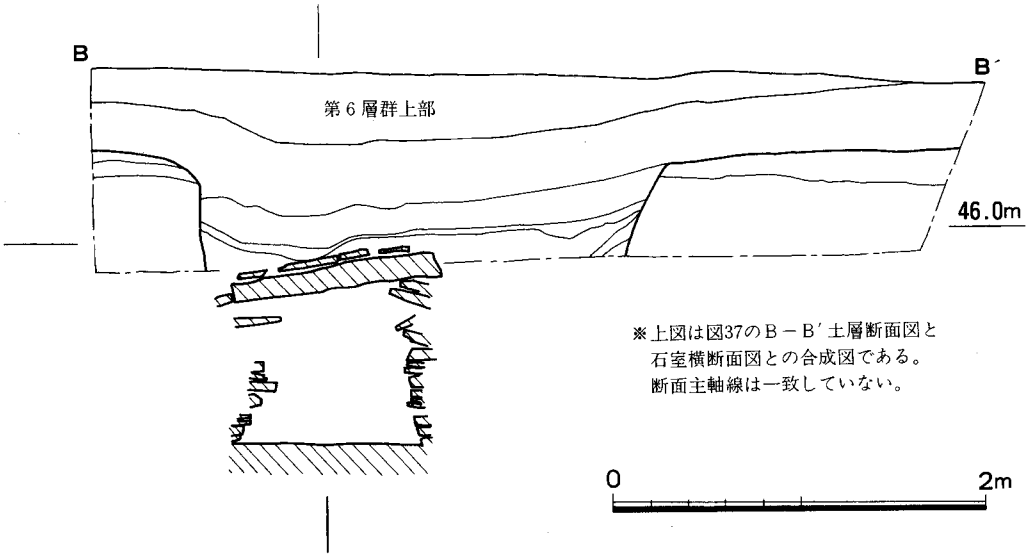


図36.　１号石室横断面土層図　（縮尺１／40）

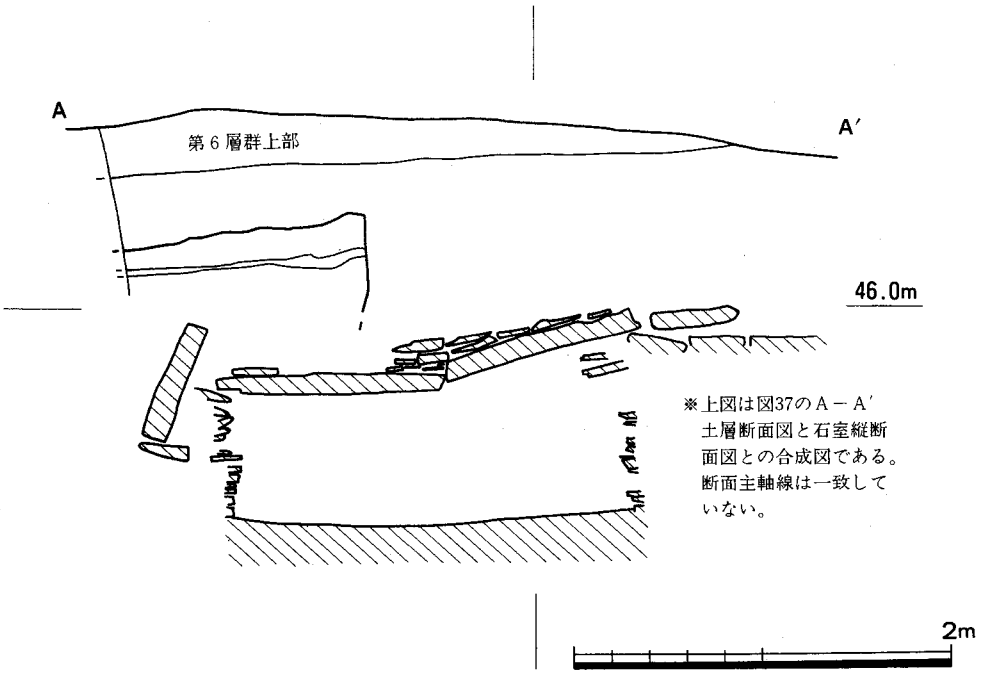


図37.　１号石室横断面土層図　（縮尺１／40）

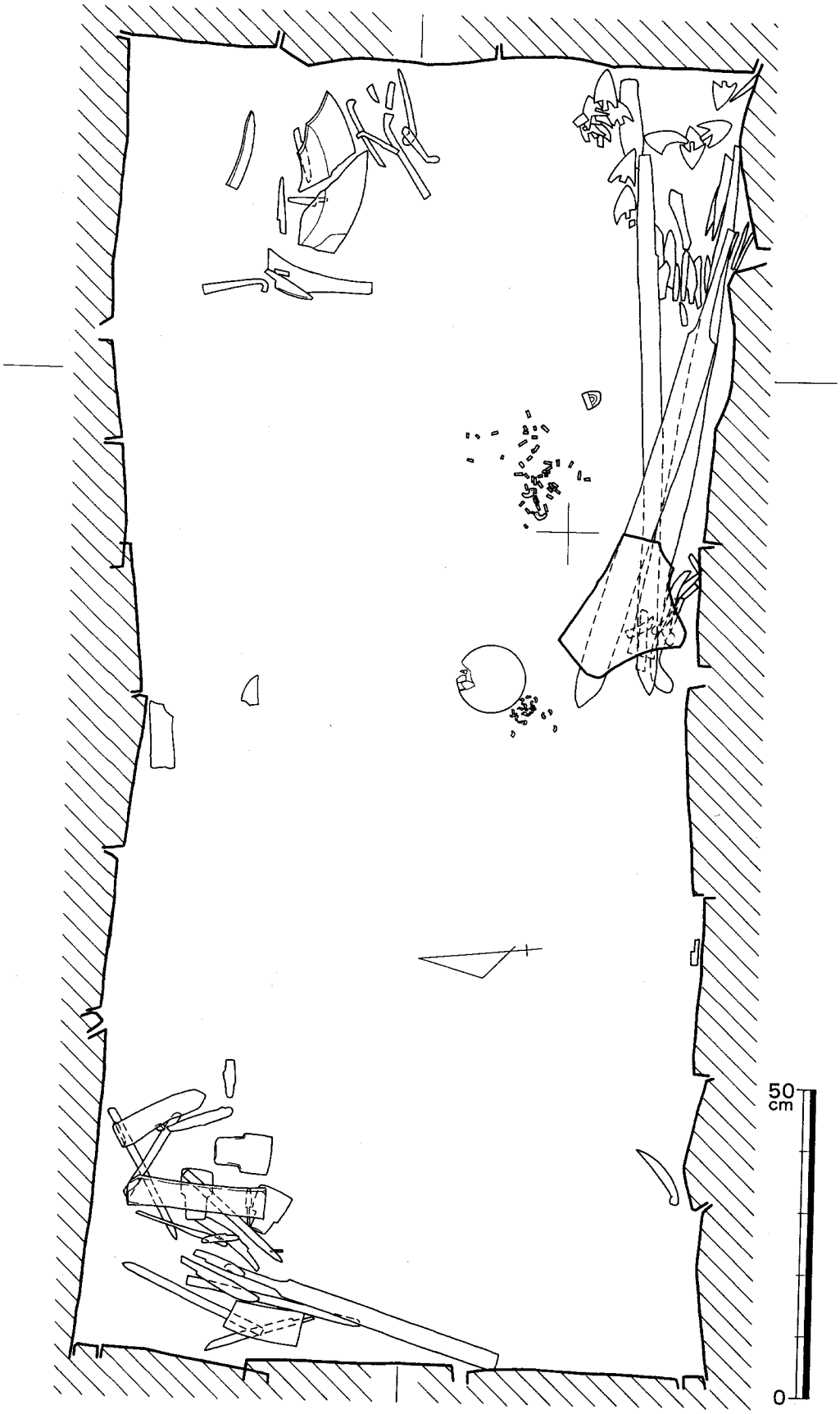


図38.　1号石室遺物出土状況図　(縮尺1／10)

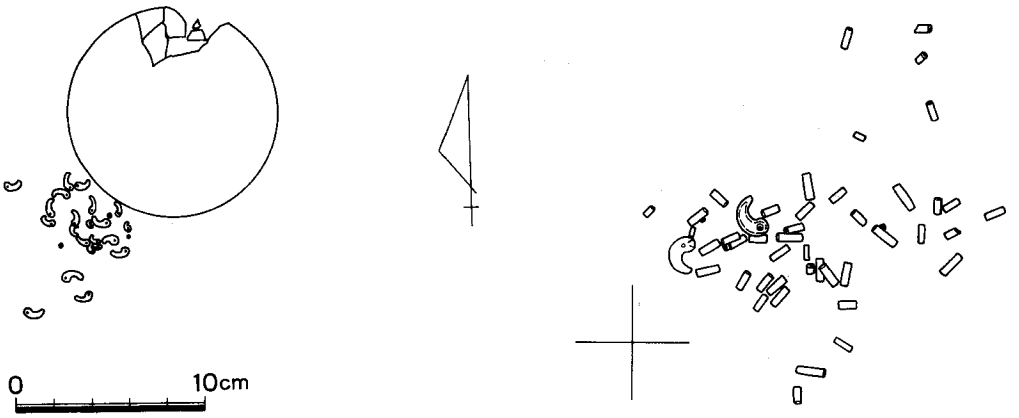


図39.　1号石室玉群A・B出土状況図　（縮尺1／4）

3）遺物の配列（図38～40，図版26～27）

この石室は盗掘を受けていたとはいえ遺物の残存状態は比較的良かったといえる。

石室の東南隅，南側側壁に沿って，刀1本，剣2本が切先を西に向けて置かれ，柄の部分すなわち石室の東南隅には鏃多数，切先の部分には蕨手刀子5本，刀子1本が置かれていた。又石室東南部の刀の中央付近に櫛1が，南側側壁沿のやや西に寄った部分である刀子1，さらに西南隅近くに蕨手刀子1が発見された。

石室東北部では土師器器台片とともに蕨手刀子6，刀子4，鎌1等が検出さたれ。

中央部のやや南寄りのところで，鏡と多数の滑石製の小形勾玉および小玉が，そのやや東側で硬玉製勾玉2とともに碧玉製の管玉多数が検出された。中央部の北側側壁沿いには剣片2も検出された。

石室の西北隅すなわち横口部の左側袖にあたる部分では，鉄製工具類・砥石および切先のない剣が出土した。この剣は床面よりやや高い位置で発見されかつ切先がないこと等から盗掘時に2次的に動かされた可能性も考えられる。この部分から出土した鉄製工具類には斧3・鉇6・刀子7・鋤先1等がある。

横口閉塞石周辺の調査からは確実に追葬が行なわれたものと考えられるが，以上の遺物の配置からみて，どのグループが初葬時のもので，どのグループが追葬時のものであるかは判断し難い。　（橋口達也）

1号石室遺物出土状況（数字は図面番号と同じ）

I群

〔鉄器〕剣；1，剣＋刀；2，刀；10,鏃；11～101,鑿；110,刀子；114・117・118・121～124・130・131・137～140・142

〔玉〕A群；滑石製勾玉；1～3，滑石製小玉；4～6

〔銅鏡〕方格規矩鏡

II群

〔鉄器〕刀子；112・113・115・116・119・120・126・129・132・133

不明鉄器；147

〔土器〕器台

III群

〔鉄器〕剣；3・7・8，斧；102～104，鉇；105～108，鑿；109・111，

刀子；125・128・136，鍬先；144，鎌；146

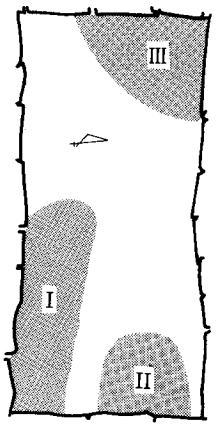


図40. 1号石室の遺物群（縮尺1／40）

3．2号石室（付図3，図41～44，図版28～30）

予備調査に次ぐ，第一次調査（1966年8月5日～同8月14日）で発見された。1号石室調査のために設けられた発掘区の東南隅に石室の北端がみつかったので，これを2号石室としたのである。後円部に存する三基の石室のうち，東端に位置する。1号石室の東南1.10m，3号石室の東約2.8mにあり，主軸は1号石室に対し直角，3号石室とは併行関係にある。1号石室調査区の東南に連続して長さ2×4mの南北の発掘区を設けた。

1）石室の構造（図41・42，図版28・29）

石室掘方は帯紅色砂質粘土層を主とする墳丘版築土を掘割っており，この石室が墳丘形成後に築かれたことを示している。もっとも表層には葺石層が存在しているので，この石室は墳丘形成後，葺石貼付前に設けられたとするのが妥当であるが，葺石のこの部分が後補でないことを前提とした上のことである。その点は確認していない。

葺石層下から，石棺上面までの充塡土は，90cmの厚さをもつ。上部の50～60cmは，黄褐色砂質粘土層で，下半の30～40cmは灰黄色粘土層である。下部粘土層は上部に比べより粘性の強いもので，石棺の直上近くになると，葺石と同じグリ石をこの粘土に混ぜ，積みあげている。石棺直上のこうした充塡土法は，1号石室にもみられた。

石室は南北主軸に築られているので，墓壙も南北方向の長方形をなしている。南北327cm，東西168cmの隅丸をなし，長側はやや胴張りをなしている。西長側にその傾向はより強い。墓壙壁の傾斜は南北の短側に起ち上りが強く，東西の壁にゆるやかである。深さ30cmを測る。石室と墓壙外壁との間隙は粘土とグリ石で充塡されている。

墓壙の四周は完結しており，1・3・4号にみられるような石室に通じる墓壙外からの墓道の掘割はみられない。この石室の場合，石室の内部構造からみて，南方にその存在が予測されたので，南辺域の精査を行ったが墓道の存在は確認できなかった。

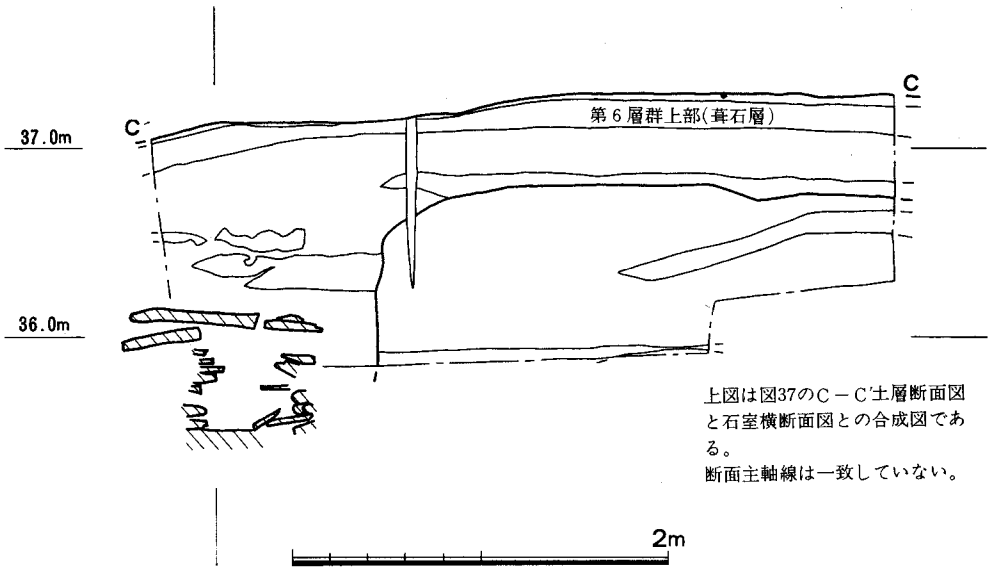


図41.　２号石室横断面土層図　(縮尺１／40)

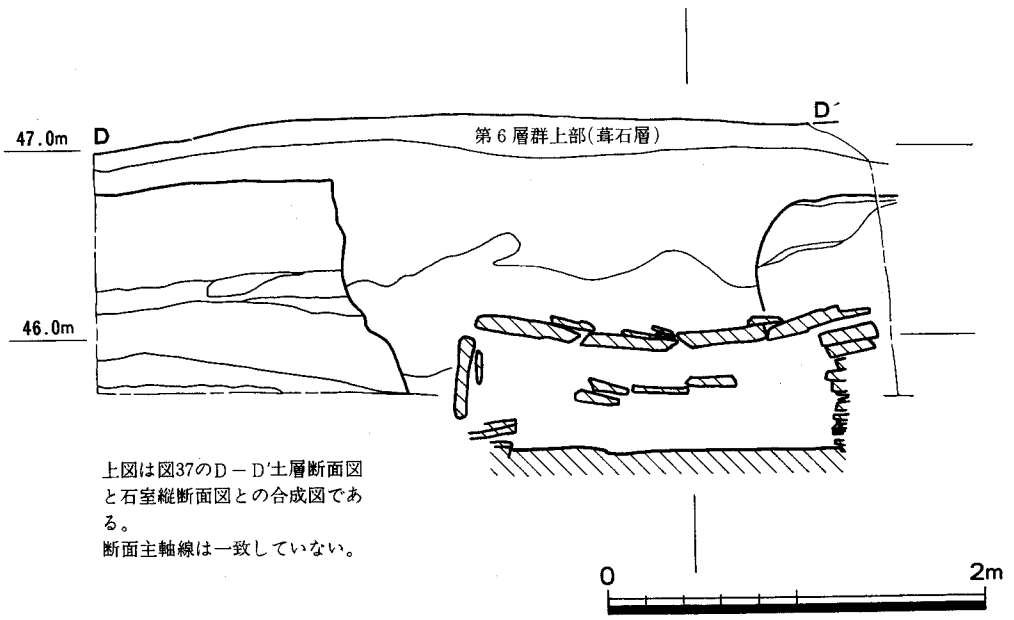
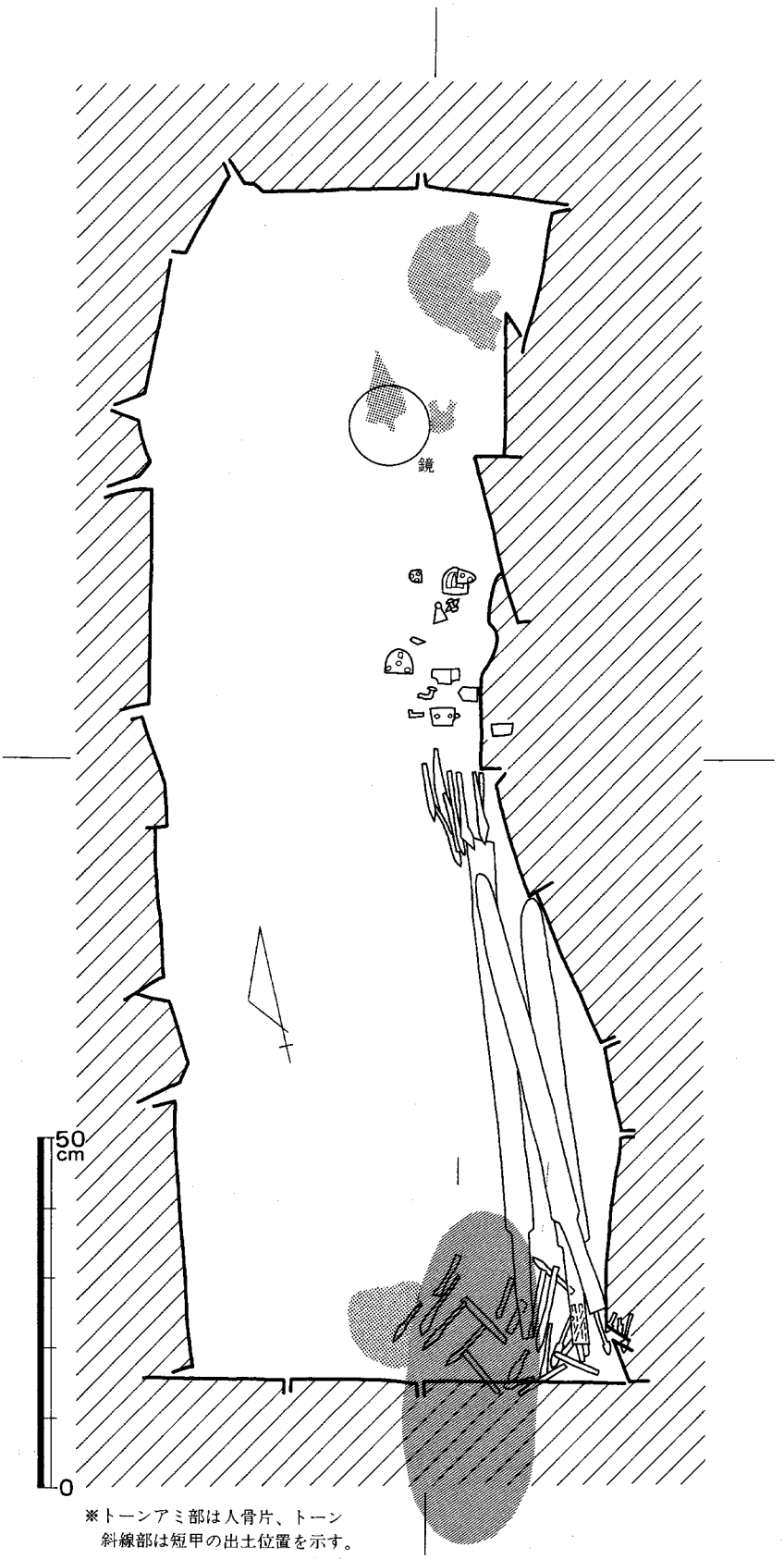


図42.　２号石室縦断面土層図　(縮尺１／40)



※トーンアミ部は人骨片、トーン
斜線部は短甲の出土位置を示す。

図43.　2号石室遺物出土状況図　(縮尺1／10)

石室の主軸は南北に近いN7.5°Wを向いている。天井石は粘板岩の四枚の板石が連続的に並べられている。板石は若干の大小はあるがおおよそ長さ50～60cm，幅80～90cm，厚さ10cm弱の長方形状のもので，南端のそれは，南壁小口立石の上端に水平に架かっている。三ケ所の天井石接合部には，その上部に20～40cm大の同質の長方形の小板石を並べ，その間や上部を粘土で封じている。北二枚の接合部は小口面が合わさっているので，その上部を3枚の板石と粘土で覆っている。中二枚は，南から天井石がもぐっているので，北のそれとの間隙を塞ぐのに，横から詰め込み状にしている。南端のそれは，上部から被覆にしているが，他と異なって8枚をかぶせる丁寧さである。粘土の被覆も顕著である。1号や3号では，石室内棚部の上部天井石には(2号石室では南端部)，直立または斜立の立石を置き，これを閉塞石とし，これを墓道と連動させて，この石を取りはずすことによって追葬時の入室を可能としているが，2号石室には，この立石は存在していない。

石室本体は南北に長軸をもつ，平面長方形の竪穴式石室である。石室の高さ60cm，下底部で長さ175cm，幅60cm，上部で長さ180cm，幅40cmを測り，中央部は土圧による東壁の内部へのせりだしによって，幅45cmを測るにすぎない。壁面は，粘板岩の板状石の小口積によって築かれている。南北の短壁は比較的原状をよく保っているが，長壁は両側とも自然的作用によって大きく改変されている。東長壁は土圧によって，基底部から大きく内部にせりだし，旧状は端部において確認されている。西長壁の基底部は比較的よく旧状を保っているが，上部はかなりの崩壊が進行している。

壁は10段前後に積まれているが，東長壁は垂直に近い起ち上がりで，北短壁は，上方がややせりだしている。南短壁は，基底部を小口積の四段でつくり，最上面を棚とし，その奥に一枚石の立石を垂直にたてて上部壁としている。基底部の高さ20cm，棚の奥行20～25cmで，上部立石は高さ45cmである。

このような短側壁の1つに棚を設ける石室構造は，1・3号石室や福岡市西区鋤先古墳などの初期竪穴系横石式石室にみられる特徴である。本石室の場合，上記例のように，この棚の上部を塞ぐ閉塞石や，これに通じる外からの墓道はもっていないが，しかしまた，一般の竪穴式石室と異なって，竪穴系横口式石室と直結する石室構造をもっている点は注目すべきであろう。この棚が，実際に階段等として機能したかどうか，その効果があるかどうか即断できないとしても，追葬を可とする型式的準備が石室内に保障されていることは注意すべきである。

石室南端には，石室と立石壁の間から石室外に東と西にのびる立石がある。単なる外部保護石か，他の特殊の用途をもったものかは判らない。

2）遺物の配列（図43・44，図版30）

遺物には，男性頭骨二体，鏡一面，鉄剣三本，三角板革綴短甲一領，多数の鉄鏃と尾錠がある。頭骨は北壁と南壁に接して各一が床上にあり，二人の男性被葬者が差し違いに葬られてい

たことが判る。北の被葬者は棺中軸よりやや東側に，南の被葬者はほぼ中軸線状にある。北の被葬者が，追葬などによって東壁側に寄せられたどうかは明らかでない。この頭骨の南々西20cmの棺中軸上に鏡面を上にした一枚の鏡がある。鏡と人骨の埋葬時の通例の位置関係からみて，北の被葬者に副葬されたものとみて間違いない。この鏡は中軸線状にあって原位置を保っているものとみられる。南の頭骨に接しては鉄鏃Ⅰ群（68本）があり，南の被葬者に伴ったものとみられる。南頭骨の直上の石棚には，短甲一領が本来正位置に置かれていたらしい。ところが東側からの土圧によって東壁が棺内にせりだした際横向きとなり，短甲の半分は石棚からはみだした状態になったらしい。そのため，短甲の革綴が腐植すると，支えを失い上半は石棚に残ったが，下半は棚から崩落し，南頭骨に被さるような状態で出土している。

その他の遺物は，すべて東壁基底部沿いに出土し，西壁には一点も出土していない。東壁の遺物も壁の張りだしによって棺内部へ押し出され，厳密には旧状を保っていない。ただし配列そのものは本来のものに近いとみていい。東壁の南には鋌を北にむけた三本の鉄剣が重なるように出土しているが，把部を壁の旧状に，鋌を張り出し部に合わせているのは，張り出し部分のみが動いたことを示している。剣の北側には鋒を南にむけ，剣先と対峙する鉄鏃Ⅱ群（７本）がある。鉄鏃の北，東壁のほぼ中央には尾錠が出土している。東壁の副葬品の多くは，大略北の被葬者に伴うものと考えられる。

（下條信行）

２号石室遺物出土状況（数字は図面番号と同じ）

Ⅰ群

〔鉄器〕鏃；４～10・12～29・31～35・37～74，短甲

Ⅱ群

〔鉄器〕剣＋鏃；１，剣：２・３

Ⅲ群

〔鉄器〕鋲状鉄器；75・76

図44.　２号石室の遺物群（縮尺１／40）

４．３号石室（図45～54，図版31～41）

１）墓道の構造（図46，図版35・36）

1969年度発掘調査時の所見では，No.１線が墓道の掘り方であろうと考えられた。No.１線内の土層は線外に比して不明瞭であり，これは線内の土が墓道の埋土であるゆえと考えられたためである。従って，以後の作業は，No.１線を墓道の掘り方であるとして進められた。No.１線内の土層観察がおろそかになったのは，このためである。

No.１線内の土層は観察記録が不備にしても，この時の所見しかない。土層は，最下層があずき色花崗岩媒乱土壌，その上が黄褐色土混りのあずき色花崗岩媒乱土壌，次が黄褐色花崗岩媒

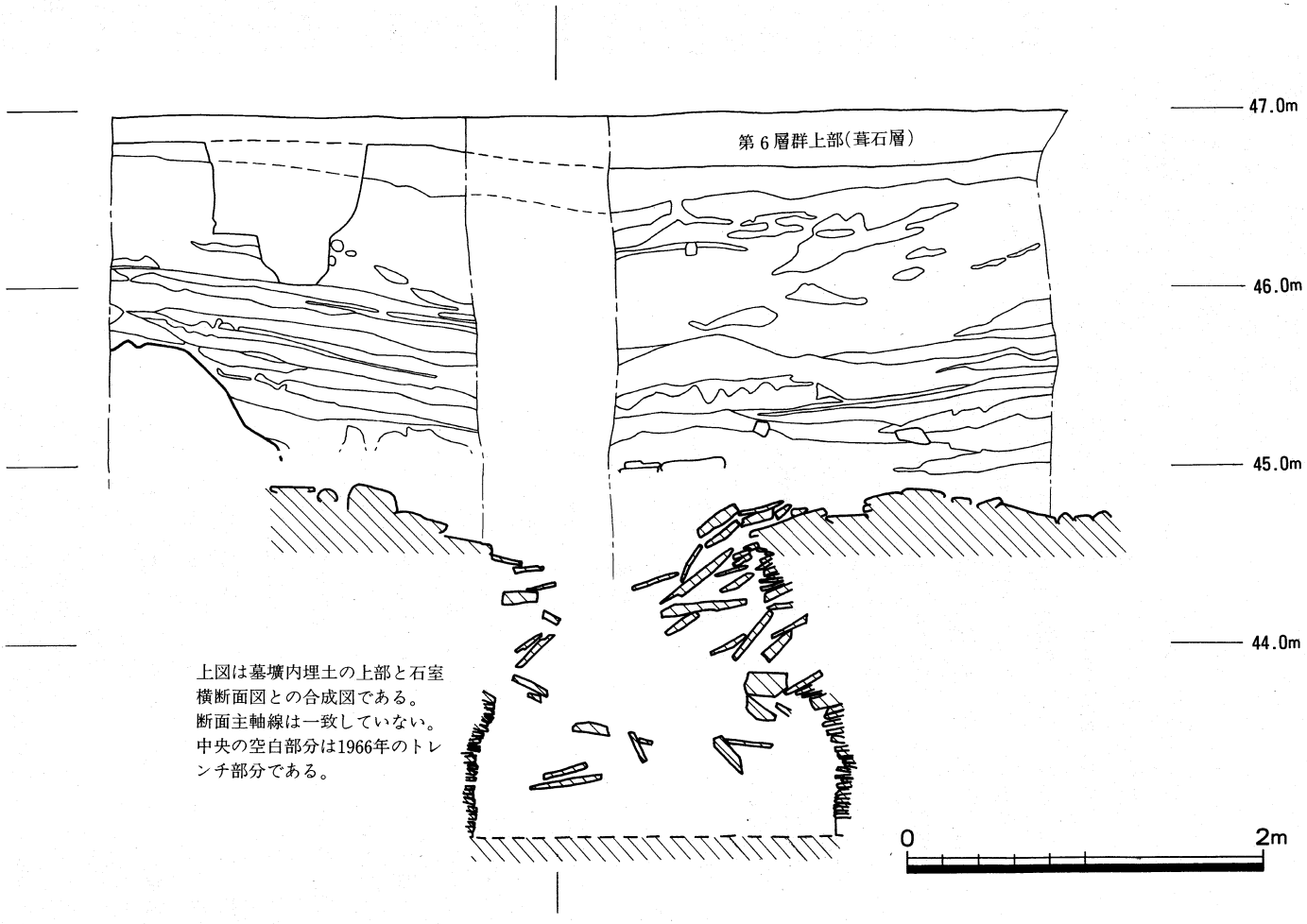


図45.　３号石室横断面土層図　(縮尺１／40)

乱土壌で不明瞭とある。これら3層より上層については，最上層西側，つまりNo.3線内の上層が青灰色粘土と礫（葺石）を混入するとの記載を除き，土層観察の記録がない。最下部からの二層は，第1・4・5・層に類似するという認識があり，かつ，No.2線の底部が図面に実線で書かれていることからも，No.2線の上下の土層が類似した土壌であるが，明瞭に区別できたことを示そう。最下部から3層目は，不明瞭であるという点で下部の二層と区別され，No.3線内最上層が青灰色粘土と礫（葺石）を混入することから，その東側の土層，つまりNo.2線とNo.3線間の最上層に土層観察の記録がないものの，両者は区別できるという認識があったことを示そう。また，No.2線底部の曲線は東側では第8層，西側では第8層とそれ以下の壁面の曲線になめらかに接続し，それより上の両壁面がかなり屈曲する点も注意されよう。

なお，1987年度の調査で，墓道西壁面に墓道の埋土と思われる堆積物が遺存していた。これは，前方部頂平坦面と後円部三段目墳丘の地山変化点（b点）から1.5mの位置よりはじまり，4.7mの間に見られる。西側への拡がりは確認されていない。土層断面で見る限り，前方部に向ってしだいに床面が上っている。最下面は標高44.6mを測る。埋土は三群に分離される。下部が黄褐色の砂質土で地山土塊を多く含む。中部は明るい黄褐色土で青灰色粘土塊を多く含む。上部は暗黄褐色土でやや粘質に富み，固くしまっている。中部と同様に青灰色粘土の小さな固まりを含んでいる。この埋土は礫と青灰色粘土塊を含むことから，No.3線内の埋土と類似している。

墓道外の土層については。1987年度の調査成果に詳しいのでそれにゆずる。ただ，1969年度当時は第7層まで地山と考えていたが，1987年度の調査では第8層を地山としている。墓道の東壁に見られる第7層の落ち込みは，二段掘りの墓道であるという指摘が当時あったが，1987年度の調査では「斜道状遺構」の掘り方とされている。1969年度と1987年度の土層の比較を簡潔に記す。「斜道状遺構」東側の第7層が第1層群。「斜道状遺構」下の第7層と第5層，第4層最下部の一部が第2層群，第4層の大部分と第2層下半分が第3層群，第2層上半分，第1・3層が第4層群に相当しよう。

土層断面の所見から，以下の諸点を指摘できよう。①最初の掘り方はNo.1線で底部しか残存していない。最下層はNo.1線が掘られて以降の堆積である。「斜道状遺構」が3号石室墓壙を掘る施設であったとして，これが第2層群で埋められた状態で石室が構築されたのであれは，No.1線は最初の墓道であろう。No.1線の床面が汚れていたという所見もあり，石室構築のための作業道も兼ねていた可能性が残されている。②No.1線が埋めもどされて後にNo.2線が掘削される。当時No.2線は第1層から掘り込まれていたと考えていたが，1987年度の調査では，第2・3層群を掘り込んでいることは明確であるが，第4層群から掘り込んだか否か不明という。No.2線掘削後に溜まった土が最下部から二層目で両側壁の荒れは掘削の際か，それ以後放置された間にできたものであろう。No.2線は二度目の埋葬時の墓道であろう。No.2線の掘り方内の埋土に

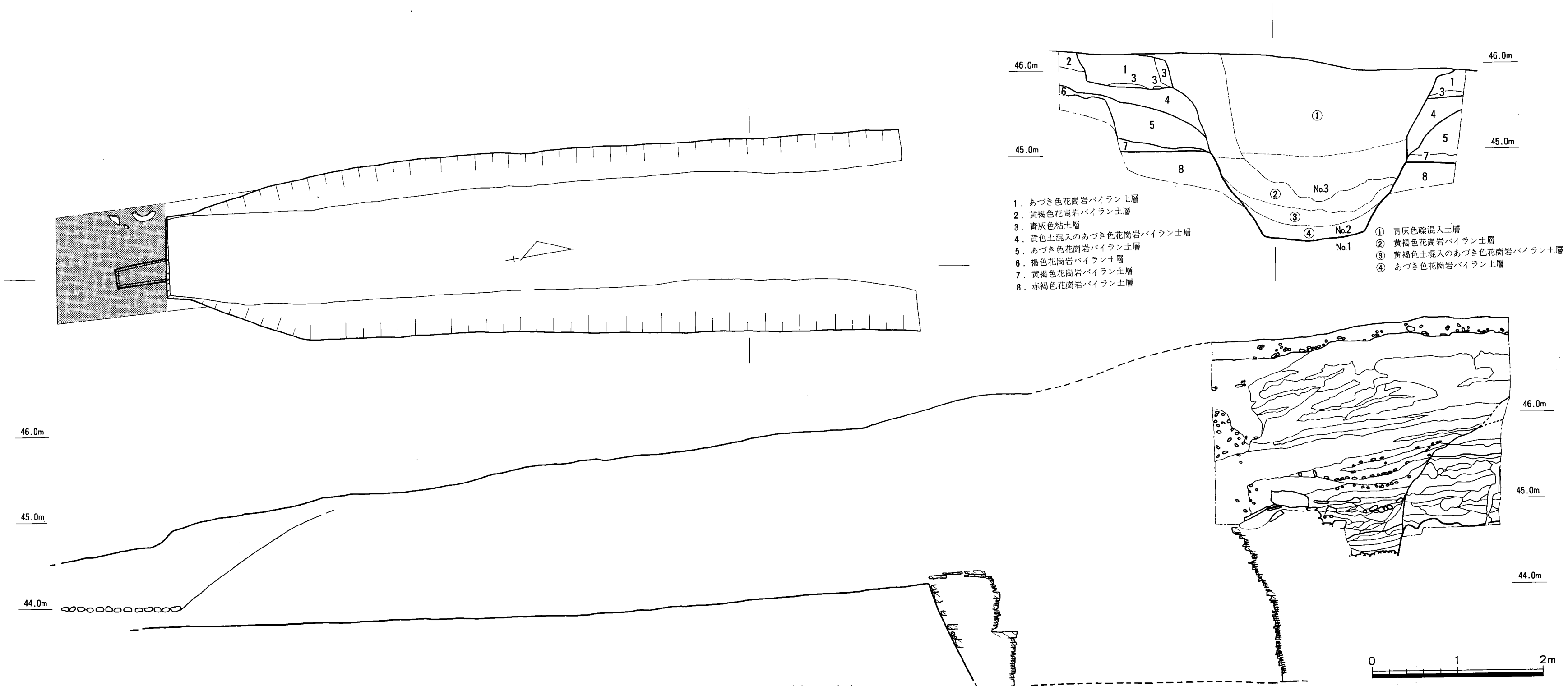


図46. 3号石室墓道実測図 （縮尺1／40）

礫が含まれないのであれば，それまで葺石が葺かれなかった可能性があろう。従って最初の墓道とこれは、比較的近接した時間に掘削されたと推測されよう。No.2線とNo.3線間の土はNo.2線の埋土と考えられる。③No.3線の埋土上部に礫を含むことは，3度目の墓道が葺石が葺かれた後に掘られたと考えられる。墓道西壁の墓道埋土の残存状況からも，3度目の墓道が，それ以前の墓道より西寄り，しかも後円部墳丘から掘られたと考えられよう。以上，墓道縦断面図を作っておらず，もはや知り得ぬ点も多く，あまりにも推測に過ぎるかもしれない。

墓道の平面図は，上縁が当時地山と考えていた第7層上面端部でとったものと思われ，床面のみに意義があり、従って，No.1線の掘り方の床面のみを知りえよう。床面での墓道の長さは，3号石室の主軸上で，同石室の墓壙からb点まで8.76mを計る。底部の幅は，3号石室墓壙沿いに1.54m，墓道中央部で1.22m，b点で0.94mを計る。標高は石室墓壙上で44.06m，断面図をとった地点で44m，b点で43.78mを計る。（西健一郎）

2）石室の構造（図版33～35）

3号石室は墓道と階段状に構築された横口部の存在によって竪穴系横口式石室の初源的なものであることが判明した。また既知の竪穴系横口式石室が墓道および横口部が石室床面より高いものが多く，近年調査された福岡市鋤崎古墳等も同じく横口部が階段状に造られている等，初源的なものであると同時に構造的にも竪穴系横口式石室の典型的なものであるといえよう。

石室は主軸をほぼ南北N－15°－Eにとり古墳の主軸ともほぼ一致する。墓壙の大きさは長さ840cm，幅800cm以上を測る。石室は長さ323cm，幅は奥壁で210cm，中央部で200cm，横口部210cmのほぼ長方形を呈する。石室の墓壙底には薄く粘土を張り，その上に約10cm程の礫を敷きつめ石室の床面としている。礫は下にやや大きめのものを用い，床面は小さめのものを用いている。壁面は板石小口積で一見竪穴式石室と同じつくりといえよう。石室の高さは礫床から170～180cmを測るが，側壁は崩壊がいちじるしく，又調査時の危険防止の為やむなく石を取り除いた部分もあり，残存状態が悪い。奥壁・横口部の残存状態は比較的良好といえる。石室の石組の基底部，ほぼ礫床と同レベルにおいては約10cm程灰白色の粘土が敷かれており，石室構築の際の基礎とされたものかとも思われる。

横口部は南側小口のほぼ中央部に幅85cm、長さ32cmの階段状につくられている。階段の床部は小礫を粘土で固めており，また階段の南側壁の石組の基底部は石室と同様灰白色粘土がみられた。東西両側壁との関係でいえば階段は2段となるが，墓道との関係からは実質的には1段といえる。階段の高さは上から約70cm、石室床面から約55cmである。横口部の上面は墓道底よりわずかに高い位置にあるが，さらにその上に灰白色粘土層があり，その上に125cm×150cm×15cm程の大きな板石が斜めにおおいかぶさっている。これを天井石とみるか否かについて調査中には諸々の議論があったが，竪穴系横口式石室と認定したうえは閉塞石であることはいうまでもない。この閉塞石下の灰白色粘土は一部墓道にまでみられるが，基道底からはやや浮いて

いる。又灰色粘土の下部は赤色粘土があり、初葬の際のもので，灰白色粘土は追葬時の閉塞に伴うものと考えられる。又横口部の裏込めは墓壙底まで掘ったが，板石・礫・粘土を用いて丁寧なものであった。

側壁とくに西側側壁の崩壊が著しく，天井石および裏込めの板石も石室内に多く流入していた。天井石は２枚が認められた。天井石が崩れ落ちた際，上部の盛土も同時に崩れ落ちており，ふき石の落ち方からみると深いところでは150cmも落ちこんでおり，崩落当時は後円部に盗掘壙のごとき大穴が形成されていたものと考えられる。発掘直前の段階では後円部頂は約25cm程凹んでおり，盗掘を受けているのではないかと思われた。（橋口達也）

３）石室墓壙内埋土（1987年度調査所見）（図46，図版32）

３号石室の墓壙内の裏込め土と石室被覆土について概観する。これの検討にあたっては1966年（下部は1987年）の奥壁後方のトレンチ（付図１），さらに1967年に３号石室の石室上部に設けられたトレンチ(同)，さらに1987年に作成した３号石室西側断面，Ｏトレンチの延長として３号石室の墓壙壁に沿って設けた深掘り部分などの観察結果がある。

３号石室裏込め土は東側で底部まで検出し，南北両側で上半部を検出した。まず，石室の開口レベルである標高44.5m以下の石室壁の裏込めを見る。東側では標高42.8mで墓壙床面に達する。その上に１)黄～茶灰色砂質土，２)青灰色粘土，３)直径10cm以下の花崗岩円礫を交互に丁寧に積み上げている。２)は堅固であり，１)は軟質である。各層の上面は墓壙壁に向ってゆるく立ち上るものの，ほぼ平坦である。そのなかで原則として１）の上部に２)を敷いている。石室天井部に近い標高44.6mまでの間に，１)が７層，２)が６層，３)が５層ある。２)は裏込めの下半部で厚く堆積し，単層で15～20cmに達する。また，標高43.4m，44.0m，44.3mの各２）の上面において，裏込め石と見られる花崗岩角礫が墓壙壁に接する位置にまでみられた。このうち上位二面は石室南側，すなわち開口部の裏込め部分で同様の状況を同レベルで確認した。他の部分で標高43.5m以下を調査していないために断定はできないが，石室裏込めの構築が共通の作業面を設けながら進められた可能性が強い。次に天井部に近い標高44.5m以上について見る。北側（奥壁側）の裏込め部分では，標高44.6～44.7m付近に明瞭な不整合線を確認した。この線より下位では１）から３）の互層である。それより上位ではやや不規則な堆積状態となっている。まず，墓壙壁の隅部に三角状の堆積がある。この層には水平の薄層理状の構造が認められる。水成作用などの自然流入により形成されたと見られる。同様の層は３号石室西壁の同層順にもある。これより上部は標高約45.0m付近まで，黄～赤褐色土を主体とするレンズ，小ブロック状の堆積となっている。さらにそれより上部は再び青灰色粘土と赤～黄褐色土と花崗岩円礫の互層となっている。この互層は西壁や石室上部の土層観察から石室天井部構築後の被覆土となっている。ところで，先の標高44.6～44.7m付近の堆積状況は石室裏込めの埋土がこの位置まで達した段階に，墓壙壁面上部からの土砂の流入があったことを示している。

偶然の産物かも知れない。しかし，その上部の埋土の形態が異なることや、石室構築の段階から，工程上の，ある程度の間隙が存在する可能性も残る。石室上部を被覆する土層はおおまかに３群に分れる。下位は石室裏込めと同様に黄～赤褐色土，青灰色粘土，花崗岩小円礫の互層であり，水平堆積である。中位は赤褐色粘質土と橙褐色砂質土の互層であり，レンズ状の堆積を示す。上位は中位と同様の性状を示すが，水平堆積である。これらは一連の構築と見られる。なお，西壁でみると，下位層の途中から墓壙中央部を一段高めるように盛土しており，その傾向は中位に明確となる。上位はその高まりを埋めるように構築されている。　（吉留秀敏）

４）遺物の配列

３号石室からは多種多数の遺物が出土した。天井石の落下や側壁の崩落にともなう若干の乱れはあるものの，遺物のほとんどは原位置をとどめている。その配置をみると，南側小口壁を除く３壁に沿って，いくつかの群に分けて副葬されている。それは後に述べるように，この石室には追葬がみられ，前後数回の埋葬が行なわれていることによる。以下，遺物の配列を述べるが，便宜上Ⅰ～Ⅷの８群（図47・48）に分けて記すことにする。

Ⅰ群（図版37）　土師器盤１個，土師器壷形埴輪片１個，鉄剣１口，鉄鉇５本および鉄鏃一括で，石室の北西隅付近から出土した。この群で目を奪う遺物は，長辺を北壁に，短辺を西壁に接するように置かれた39cm×74cmの大きな土師器盤である。盤の大きさにもかかわらず，その上には何もなかったが，ただその東端部に土師器片が載せられていた。墳丘にめぐらされた壷形埴輪の底部破片で，追葬時に墓道入口付近のものが持ち込まれたのであろう。鉄器は器種ごとに３群に分けられて，盤とその下に薄く敷かれた粘土の間に置かれていた。すなわち，石室北西隅（盤の北西角下）に刃先を北に向けた鉄鏃塊，盤の北側長辺下に鋒部を西に向けた鉄剣１口，そして盤の北東角付近の鉄鉇５本である。

Ⅱ群（図49，図版38）　石室の北東隅付近の遺物で，鉄剣１口，鉄鏃多数からなる。鉄剣は北壁に沿って置かれ，鋒部を西に向ける。鉄鏃は２群に分かれる。１群は剣の身部の両側，他の１群は石室の北東隅にあった。両群とも先端を東に向けている。

Ⅲ群（図50，図版38）　Ⅰ群の盤の南東付近から玉類Ａ群が一括して出土した。硬玉製丁字頭勾玉２個，碧玉製管玉29個，硬玉製棗玉１個からなる。ほかには何も認められていない。

Ⅳ群（図51・52，図版39・40）　東壁の北半部に沿う一連の遺物で，銅鏡６面のほか，玉類82個や環頭刀などの鉄製品が出土した。３号石室の中でもっとも注目される一群である。

まず鉄製武器は東壁に沿って置かれている。刃部を東壁に

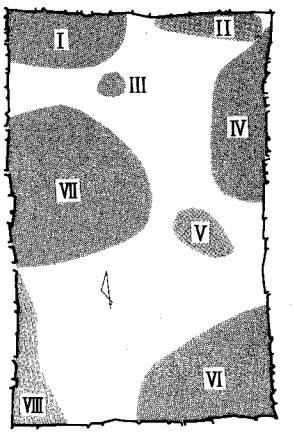


図47.　３号石室の遺物群（縮尺１／60）

図48.　3号石室遺物出土状況全体図　（縮尺1/15）

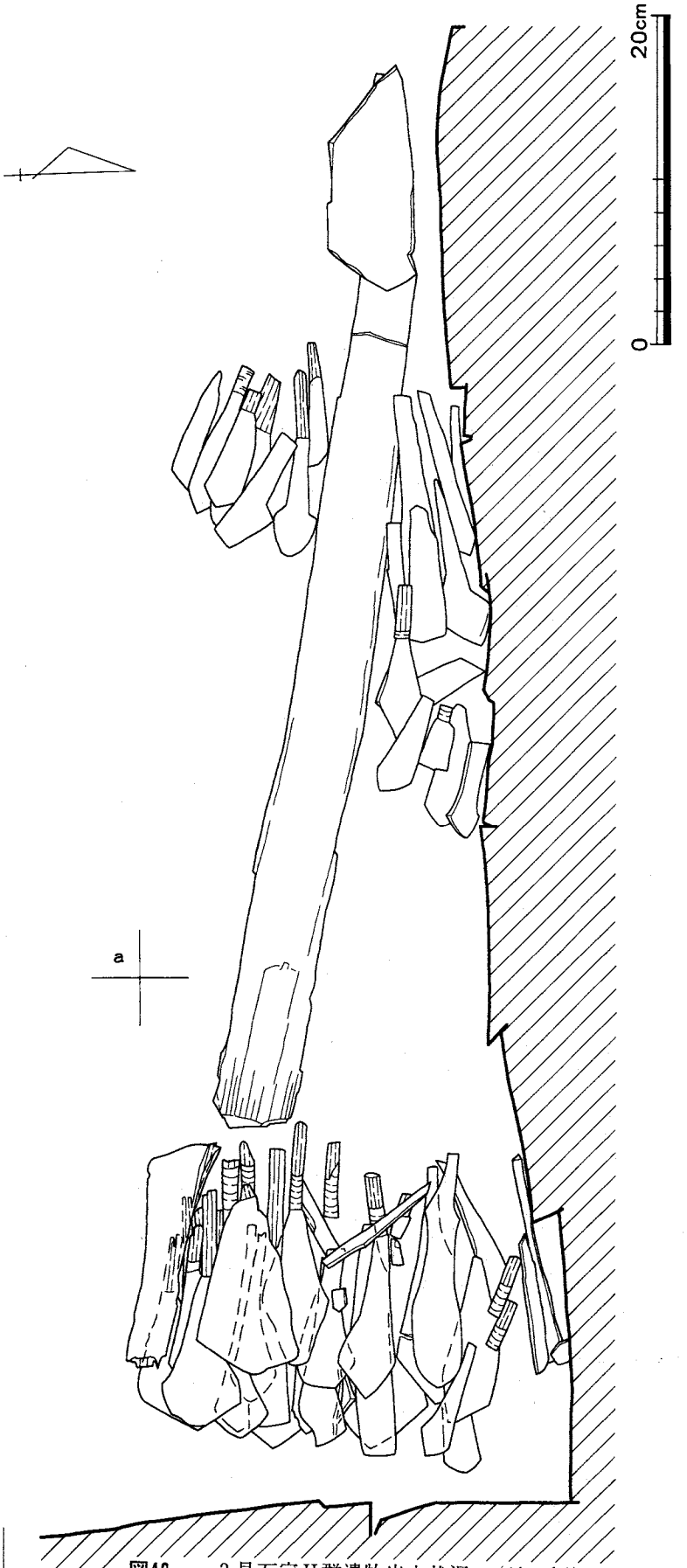


図49.　3号石室II群遺物出土状況　（縮尺1/4）

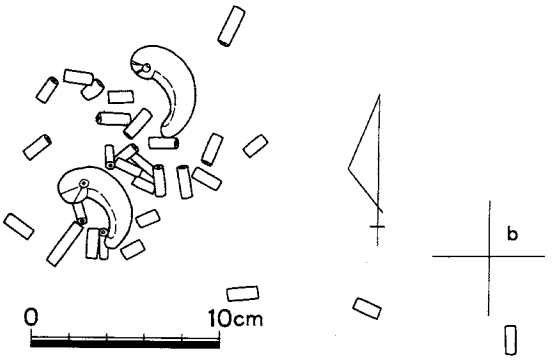


図50.　3号石室玉類A群出土状況図　（縮尺¼）

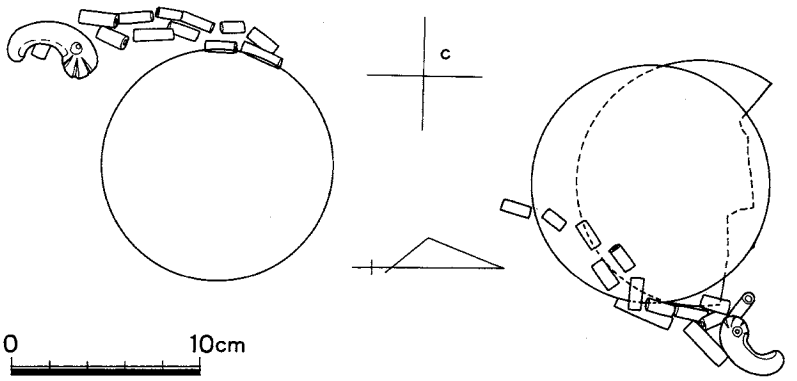


図51.　3号石室玉類B・C群出土状況図　（縮尺¼）

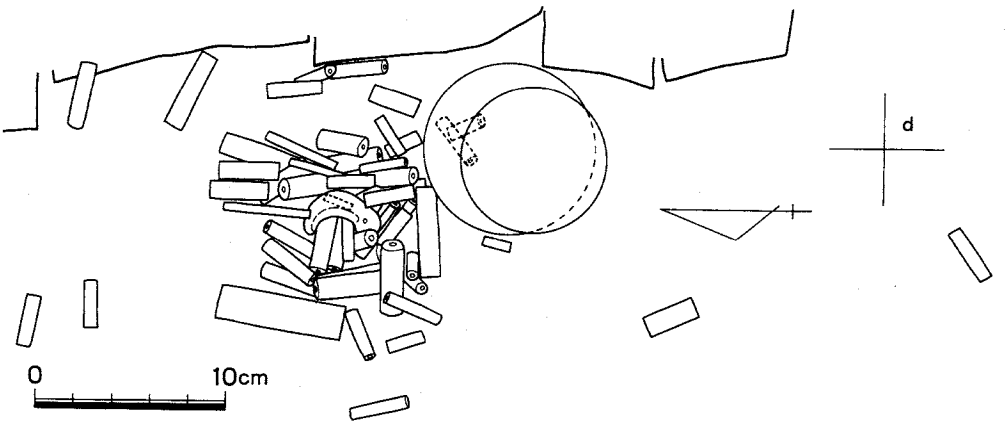


図52.　3号石室玉類D群出土状況図　（縮尺¼）

向け，切先を北東隅の鉄鏃群に接するようにした三葉環頭大刀が目につく。その下半，環頭部の両側にはこれも鋒部を北にした鉄矛が２口ある。環頭部の南には鉄剣３口と大形の鉄刀子１本が固まっているが，刀・矛とは異なり，一例を除いて鋒部を南に向けている。うち２口は茎部が側壁に架かっていて，本来は鋒部を下に向けて側壁に立てかけられていたのであろう。剣・刀子の南には鉄鏃４本が，さらにその南に鉄鎌と鉄刀子が１本づつ置かれている。このようにII・IV群の鉄器，つまり石室の北東隅部および東壁沿いの北半部から出土した鉄器は武器を主体とするが，わずかながら農具・工具を含んでいる。

IV群の特色は６面を数える銅鏡の出土である。

１号鏡（三角縁神獣鏡片）は環頭大刀とその西の鉄矛の間に置かれ，一部を刀に覆われていた。鏡面を上に向けている。他の鏡は玉類をともなっているが，１号鏡のみは認められなかった。２号鏡（君宜高官銘内行花文鏡）・３号鏡（方格規矩鏡）は鉄矛を挟んで１号鏡とは対称の位置にある。２面は重複しているが，２号鏡が完存するのに対し，下の３号鏡は外縁および内区の一部を欠き，しかも破砕していた。埋納時にはすでに破損していたと判断される。２・３号鏡の南約10cmのところに４号鏡（方格規矩四神鏡）がある。やはり鏡面を上にしている。鏡背に布が付着しているが，周囲や鏡の下にみられる黒色の炭化物とともに，絹織物に包まれていたことを示している。２号鏡の上には硬玉製丁字頭勾玉１個・碧玉製管玉13個からなる玉類B群が置かれていた。４号鏡もやはり玉類C群をともなっている。硬玉製丁字頭勾玉１個・碧玉製管玉12個からなり，２号鏡のそれと配置・数ともにほぼ一致している。ただ，B群は鏡の上に置かれていたが，C群の場合には玉類が下になっている。両例とも勾玉を中心としてと管玉を配して一連にした状態が良く残り，本来の形状をうかがわせている。ともに玉の数や大きさがほぼ同じであり，偶然であろうが180°の位置に置かれていた。

５号鏡（捩文鏡）・６号鏡（方格規矩鏡）は鉄剣の下部からいずれも鏡面を上にして出土した。５号鏡は検出時から二折しており，もともと割れていたと思われる。硬玉製勾玉１個・碧玉製管玉53個・ガラス製管玉１個の玉類D群をともなう。ほとんどは鏡の北側にあるが，下に２個，南にやや離れて２個があった。III群および２・３号鏡，４号鏡にともなう玉類は管玉の大きさがととのい，紐を通して一連に繋いでいた状況を示していた。ところがこの部分は大小さまざまの管玉が，積み重ねられたような状態で検出され，違和感がある。

V群（図48）　IV群の南にある小鉄器の一群で，鎌３個や鉄鏃などの小鉄器がみられる。

VI群（図49）　石室の南東隅に散在する一群の遺物である。V・VI両群は落石や追葬時の取り片付けのために配列に乱れが生じている。VI群では斜交して置かれた３口の鉄剣が目につく。鋒部を東に向け、東西方向に置かれた１口は原位置にあるが、南東隅に鋒部を向けた２口は落石で乱れ，その茎部ははじきあげられて側壁の石の隙間に挟まれていた。鉄剣のほかはいずれも小鉄器で，農具（鋤先１）や工具（蕨手刀子６・刀子９・ノミ状製品２）に混在して，馬具

の部品と判断される鎖状や鑷子状の鉄製品がそれぞれ６個・３個認められる。また東壁沿いの蕨手刀子の切先に接するようにして，櫛１点が検出されている。

Ⅶ群（図53，図版40）　西壁沿いの中央よりもやや北側に置かれていた一群の遺物で，短甲１領が目を奪うが，ほかに鉄製の武器（刀４・剣１・矛２・鏃７）や農具（U字形鋤先１）・工具（斧２・鉇２・刀子１）がある。出土状態からみて，まず武器を，次いでその上に短甲を置いたことがうかがえる。その配列をみると，短甲の下から南に西壁沿いに，切先を南に向けた鉄刀と鉄矛を基部を揃えて置く。矛のうちの１口の出土位置は記録に洩れ，明確でない。やや離れて置かれた素環頭刀も基部を揃えるが，刀身は大きく東に振れ，切先が南東を向く。素環頭部の南側には鉄斧１個がある。素環頭刀の北側約30cmには先端を正反対に向けた鉄剣・鉄刀各１口，それとX状に交差した鉄刀１口がある。鉄刀の間には，素環頭刀に沿うように，東から鉄刀子・鉄鏃・U字形鋤先がある。短甲はこれらの武器・農工具の上に東向きに置かれてい

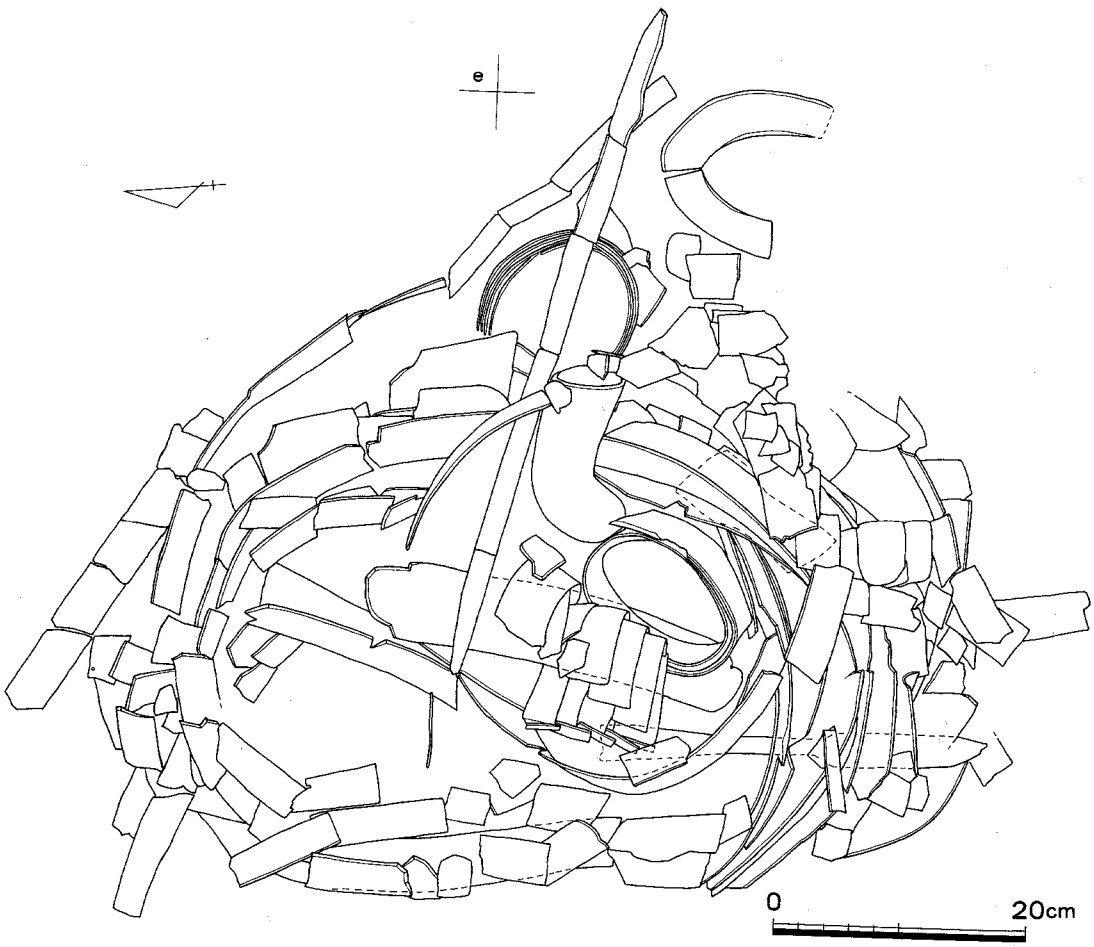


図53.　３号石室Ⅶ群遺物出土状況図　（縮尺1/6）

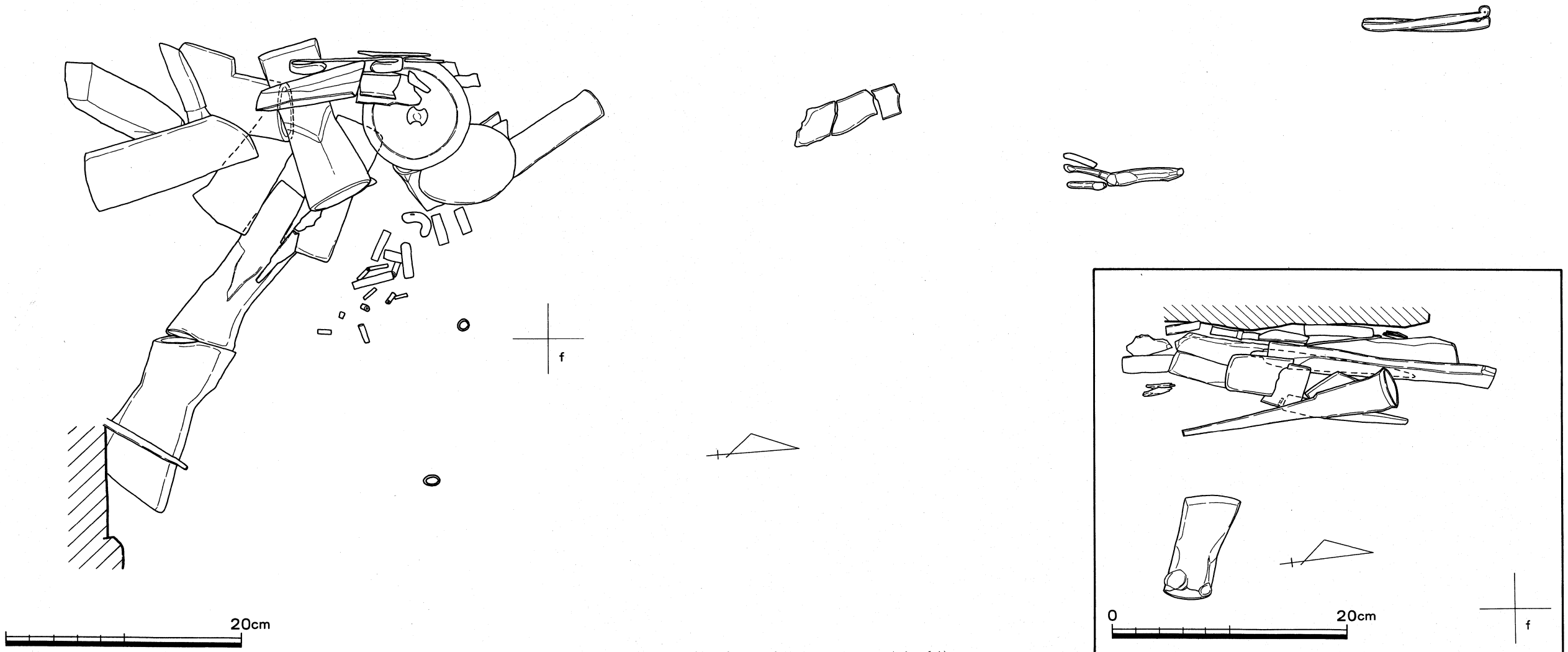


図54.　3号石室Ⅷ群遺物出土状況図　（縮尺¼）

（左図の下部出土遺物、＋印で重さなる。）

た。鋤先の北には鉄鉇２本があるが、短甲の胴部に差し込まれた状態で検出されている。また鉄斧１個が載せられていた。このほかに短甲の下に碧玉製管玉１個があった。

Ⅷ群（図54，図版41）　西壁から南西隅にかけての一群で，仿製鏡２面，金環一対，玉類のほかに，積み重ねられた状態で鉄製農工具が出土した。南西隅に砥石１個が立てかけられ，その周りには鉄斧10個が固まっていた。斧の下には鹿角装１個を含む鉄鑿６個と鹿角製柄３個，および鉄鋸２個がある。斧とその北に接して置かれた７号鏡の上には鉄鋤先３個が載っていた。このほかに鏡下のＵ字形断面をもつ不明鉄器や，Ⅶ群の西壁沿いの鉄刀の切先に接するように置かれた蕨手刀子２個，その南の二叉状鉄器などの鉄製品がみられる。

７号鏡（内行七花文鏡）・８号鏡（内行五花文鏡）の２面の鏡はこれらの鉄製品群の北側に置かれていた。一部重複しているが，７号鏡は鏡背，８号鏡は鏡面をそれぞれ上にしていた。周辺に黒色化した布の残片がみられ，布に包まれていたことを示している。鏡の東には硬玉製勾玉２個・碧玉製管玉16個・小玉１個からなる玉類Ｅ群がある。勾玉２個を中心に一連に繋がれていたとみられるが，管玉は不揃いである。玉類の東側には12.5cmの間隔をもって一対の金環があり，その間から歯牙６個を検出した。したがってこの部分に埋葬された人物の頭部を推定することができる。

以上，Ⅰ～Ⅷ群に分けて３号石室からの出土遺物を紹介した。これらは埋葬の回数にともなって３もしくは４群にまとめ直すことができそうである。

３号石室にはあまり人骨が遺存しなかった。ただ南西隅のⅧ群で検出された耳環とその間の歯牙は，この成年女性と推定されている被葬者が南枕に埋葬されていたと判断する手懸かりとなる。この被葬者の頭部には仿製鏡２面と玉類，それに鉄製農工具がある。足元のⅦ群にまとめて置かれた短甲や鉄製武器類は女性の被葬者にはそぐわないようである。そぐわないといえば鉄製農工具もそうであるが，これは位置的に疑えまい。つまりⅧ群の遺物は西壁に片寄って南枕に埋葬された成人女性への副葬品とみることができる。

埋葬が２回であれば，Ⅰ～Ⅶ群は他の被葬者への副葬ということになる。つまり，Ⅲ・Ⅳ群の鏡や玉類からみて，頭位を北枕にとる被葬者を推定できる。東壁沿いの北半部，すなわち被葬者の頭部から肩部にかけてⅡ・Ⅳ群の銅鏡６面と鉄製武器，腰部と推定できる部分にⅤ群とした鉄鏃などの小鉄器，足元のⅥ群に武器および馬具・農工具などの小鉄器が置かれていたことになる。しかしこれを１体分とみるにはいくつかの問題がある。まず北半のⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ群が基本的に短甲や環頭大刀・剣・矛などの大形の鉄製武器，それに鉄鏃の組合わせであるのに対し，南半のⅤ・Ⅵ群は鉄剣を含むとはいえ小形の鉄製農工具を主にしている点がある。それは単純に器種別に置かれたとみることもできようが，それにしてはⅦ群の刀・剣の方向性が説明できなくなる。次ぎにⅢ群の玉類Ａ群，Ⅳ群の玉類Ｂ・Ｃ群はいずれも勾玉・管玉の大きさがととのい，一連に繋がれた様を彷彿とさせる。しかも勾玉と管玉の数が一定である。とこ

ろがⅣ群の玉類Dのそれは大小さまざまの管玉が乱雑に積まれていた。これらの玉の不揃いはⅧ群の玉類に通じる。さらにⅣ群の銅鏡は北の4面が舶載鏡であるのに対し，南の2面は仿製鏡である。玉類にみられた違和感もあってこれを偶然とみることはできない。

このようにみるとⅣ群の遺物は舶載鏡4面・玉類2群および刀・剣・矛と，仿製鏡2面・玉類D群および剣を含む鎌・刀子などの小鉄器に分けることができよう。つまりⅠ～Ⅶ群の遺物は2体もしくはそれ以上の被葬者にともなう副葬品であろう。

この場合1体はいささか窮屈ではあるが，おそらく北側小口壁に沿って東枕に埋置されたと推測される。頭部には玉飾りをともなう銅鏡4面などが置かれる。右側，つまり北壁沿いにみられるⅠ・Ⅱ群の鉄剣や鉄鏃・鉄鉇，さらに土師器盤が壁と併行して置かれているのは，その南に遺骸が横たわるからであろう。Ⅰ群北東隅の鉄鏃は北を向くが，足元に併行することになる。Ⅶ群の短甲ほかの武具・武器なども被葬者の左側に沿って置かれたことになる。Ⅲ群の玉類の位置は腰部にあたる。以上の副葬内容からこの被葬者を男性と推定することができる。

北壁沿い・西壁沿いの2体の被葬者にともなわないとしたⅣ群南～Ⅵ群の遺物からもう1体以上の被葬者が浮かんでくる。Ⅳ群南の2面の銅鏡や玉類の位置からみて，被葬者は東壁沿いに北枕で埋葬されたことになる。この場合，Ⅵ群の鉄剣や馬具・農工具などの鉄器は足元に置かれた副葬品であろう。ただ，東壁に沿いの蕨手刀子の付近から櫛が検出されており，南壁沿いに東枕の被葬者をもう1体推測しうる可能性もでてくる。

以上のように，3号石室の出土遺物はⅠ～Ⅳ北・Ⅶ，Ⅳ南～ⅥとⅧの3群に大別でき，その種類や配列から3～4体の被葬者が浮かぶ。奥の北壁に沿い東に頭位をとる被葬者が初葬であり，東壁沿いおよび南に頭位をとり西壁の南半に安置された他の2～3体は追葬であろう。強いていえば，副葬品の内容から，東壁沿い，西壁沿いの順に埋葬され，4体目があるとすれば墓道へ通じる階段に面することもあって南壁沿いが最終ということになろう。初葬には舶載鏡や鉄製武器主体の副葬がみられ，農工具主体の内容に追葬された遺物の特徴がある。

（高倉洋彰）

3号石室遺物出土状況（数字は図面番号と同じ）

Ⅰ・Ⅱ群

〔鉄器〕鏃；33・45～93・99・100・108～110・112～116・128，・133・135・137・147

Ⅰ群

〔鉄器〕剣；14・鉇172・174～180・不明鉄器：230

〔土器〕盤状土器・土器片枕

Ⅱ群

〔鉄器〕剣；13，不明鉄器；233

Ⅲ群

〔玉〕A群；硬玉製丁字頭勾玉；1・2，硬玉製棗玉；3，碧玉製管玉；4～33

IV群

〔鉄器〕刀；3・27，剣；7・9・12，矛；26・27，鏃；94～97，刀子；198・202・203

針状鉄器；225・226

〔玉〕B群；硬玉製勾玉；34，碧玉製管玉；35～47

C群；硬玉製勾玉；48，碧玉製管玉；49～60

D群；硬玉製勾玉；61，碧玉製管玉；63～92・94～106・ガラス製管玉；93・特殊勾玉；62・107

〔銅鏡〕三角縁神獣鏡辺・君宜高官銘内行花文鏡・方格規矩鏡・捩文鏡・方格規矩四神鏡

V群

〔鉄器〕刀；16・鏃；29～32・34～44，刀子；206・212，鎌；222～224

VI群

〔鉄器〕剣；8，刀子；187～189・192～196・200・201・204・205，馬具

鍬先；219，不明鉄器；220・227・231

VII群

〔鉄器〕刀；1・2・4・5・15・17・18・19～24（同一固体）剣；5・11，矛；25，鏃；101～106・120～127・129・130，斧；165・167，鉋；170・171・173，刀子；197・199・208・213，U字形鋤先；221，不明鉄器；229，甲冑

VIII群

〔鉄器〕鏃；98・107，斧；158～164・168，鑿；181～186，刀子190・191，鋸；214・215，鍬先；216～218，三尾鉄，不明鉄器；169・228

〔玉〕E群；碧玉製管玉；108・109

5．4号石室（付図5，図版42～44）

1）墓道の構造（図版43）

石室をつくるために，まず，長さおよそ3.4m，幅1.9mの墓壙を掘り下げ，そのなかに竪穴系横口式石室をつくっている。そして，その後に埋葬に必要な墓道をつくっているようだ。墓道は石室の構築後に，横口部から前方にU字形の溝を掘ってつくっている。横口部の棚状構造と閉塞のために立てた板石から，上面で2.5m離れたところまでまっすぐのび，そこから段々浅くなりながら，前方部の方へほぼ直角にまがり，50cm程のびて終っている。

墓道の底面は，斜めに上がっているが，，まっすぐのびるのではなく，墓壙のところで段がつき，さらに墓壙端から1mのところで，もう一度段がつくような格好となっている。最初に横口から1mのところまでの短かい墓道を掘り，その後にさらにゆるやかに上がる墓道の先端部

分を掘ったのではないかと思われる。2段掘りのような墓道をなぜつくったのかはよくわからないが，切り合い関係のわかるところからすれば，初葬の時に，横口から1m程のところまでの墓道を掘り，追葬時にさらに長い前方部にまがる墓道をつくったと考えるのが妥当であろう。

墓道と石室は，当初から一貫した計画にもとづいたものとは考えられなくて，長方形の墓壙を掘り，石室を構築し，実際の埋葬に際して，1段目の短かい墓道を掘っている。そして，一次埋葬が終ると，多分閉塞のための立石のうしろを黄白色の粘土で埋めたのであろう。ただし，この一次埋葬で使用した粘土は残っていない。さらに二次埋葬に際して，一次埋葬の時よりも傾斜のゆるやかな墓道を掘ったと考える。そして，先端が前方部に曲がっていることは，前方部の正面を意識して，正面から埋葬儀式が行なわれたことを示しているのかも知れない。

2）石室の構造（図版42・43）

前方部に構築された4号石室は，老司古墳の発掘調査では最終の段階に行なわれたもので，保存を前提とした調査であったために，天井石をとりさり，内部を調査するにとどめたので，石室構築の状況を十分に解明できなかったところもある。

表土を30cm程掘り下げると墓壙のラインが検出され，すぐに粘土のひろがりが認められた。被覆されている粘土を注意深くとりさると，石室の天井石がみつかり，周囲の墓壙内には10cm前後の礫が一面にふかれていた。墓壙内の入口側の玄門ぐらいまでの50～70cmほどの間には礫はふかれてなく，地山の土がそのまま埋められている。天井石は4枚のせられ，入口のところには，それにかぶせるかのように2枚の板石が斜めにのせられていた。天井石ののせ方は重ね合わせるのではなく，3枚がほぼ同じ高さで並べられ，入口側の1枚は一段高く，雑にのせられているような感じがし，構築時そのままではなく，何か2次的な感じが与えられる。おそらく，この1枚だけは追葬の時に動かされたのであろう。

石室は竪穴系横口式石室と呼ばれるもので，玄室の大きさは奥で幅70cm，中央で80cm，入口で幅75cm，長さ2.25mをはかる。長方形プランを呈し，基石の出入りもあまりみられない。高さは80～90cmで，床面は真中がすこしへこんだ格好になっているが，顕著ではない。床面には礫，粘土などは敷かれていない。

側壁には厚さ5～10cm程の板石を使用している。ことさら異なった石の積み方をしているのではなく，普通に積み上げているが，石の間隙に小さな石をつめ込んで仕上げてはいない。石を積み上げるに際しては，石を各壁ともに10～15cm程積み上げては，粘土ですき間をつめ，さらに同じように石を積み，粘土でうめるという方法で作業を行なっている。側壁では石の量も多いことから互層になった感じは弱いが，奥壁では石積みと粘土層が互層になっていることがはっきりとわかる。両側壁，奥壁ともすこし持送りがなされており，床面では幅80cmなのに天井石直下では33cmとずっと狭くなっている。

横口部は，下半分は石が3層。粘土が3層までは側壁と同じにつくり，そこで段を設けてい

る。段の高さは床面から37cmになっている。そのために，ことさら袖石を立てるというようなことはなせずに，ほぼ板石１枚分の幅20cmぐらいを引っ込めたようになり，横口封鎖のために板石を立てている。横口部の側壁は粘土ですこし形をととのえたような感じで，はっきりと袖を意識してはつくりあげていない。横口部の特徴としては，袖石を明確に意識せずに，段をつくることに主眼が置かれていることをあげることができよう。

３）遺物の配列（図55・56，図版44）

石室内には，３体の遺体が葬られていた。中央に熟年男性，南壁に沿って成年男性が葬られており，互いに錯相することなく，ほぼ全体の骨が残っていた。さらに，南壁沿いの成年男性骨の頭の上の方，奥壁寄りのところから，左上腕骨と残りの悪い脊髄骨が出土している。よく残っている２体の遺体は骨格の移動がほとんどなく，時間的にも大きな差はなく，南壁沿いの成年男性がはやく，中央の熟年男性が次に葬られたと考えることができる。同時埋葬か、もしくは，ほとんど時間的な差のない追葬なのかはにわかには決しがたいが，次葬の遺体が中央におかれていることからすれば，常識的には追葬の形態をとっているものであろう。

内容的にみて，興味を持たせるのは，成年男性骨の頭上にあった上腕骨の存在である。痕跡的に脊髄骨が残っているところから，もう１体埋葬されていたと考えるのが妥当であるが，この遺体はほかの２体にくらべて、風化がはげしい。九州大学医学部の田中良之氏の鑑定によれば，その時間的な差は短かくても15年ということで，風化の激しい初葬遺体と，２，３次埋葬遺体との関係は２世代にわたるものと考えるのが妥当ではないかということである。

出土遺物の配列をみてみよう。奥壁のそばに土師器の大形器台がある。どちらの遺体にともなうのかは，簡単には決められないが，位置からすれば，最終埋葬と思われる中央の遺体にともなう可能性が強い。

南壁沿いの成年男性骨にともなうと思われるのは，左脇に置かれた鉄剣１と腹部もしくは腰部と思われるところにある蛇紋岩製の勾玉群，足部に置かれている鉄斧，鉄鏃，のみ，鎌がある。鉄鏃には矢柄の残っているものもあり，壁に立てかけていたのかも知れない。頭骨には櫛が３枚張りついており，頭髪に櫛をさし，腰に巻いた紐に勾玉を下げた姿で葬られた被葬者の姿をしのぶことができる。

中央の熟年男性では，腹部，腰部と思われるところに蛇紋岩製の勾玉群があり，右脇に矛先を頭の方に向けた鉄矛１本と，左脇に足の方に剣先を向けた鉄剣２本と鈍１本，足部の石室北西隅のあたりに，鹿角装刀子，刀子，鉄鏃が置かれている。腰のところにある勾玉群は南壁沿いの遺体と同じく，腰に巻いた紐につけられていたものであろう。そして，先に述べた土師器の器台が頭上に置かれていたのであろう。

遺物の出土状態からすると，初葬にともなうと思われるものはほとんどなく，２，３次埋葬にともなうと思われるのは，非常に秩序よく出土しており，二次的に移動したような感じのも

図55.　4号石室遺物出土状況図　(縮尺 1/10)

のはほとんどない。1号，2号，3号石室との違いは鏡が副葬されていないことで、その変りに，土師器の器台が副葬されているところに，被葬者の性格の違いをあらわしているのかも知れない。

（佐田　茂）

4号石室遺物出土状況（数字は図面番号と同じ）

I群　〔鉄器〕鏃；8・10，刀子；15・16

II群　〔鉄器〕鏃；5～7・9・11，斧；12，鉈；14，鎌；：18，不明鉄器；13

III群　〔鉄器〕剣；1・2・3，矛：4

IV群　〔土器〕器台

棺外出土　〔鉄器〕手鎌；17

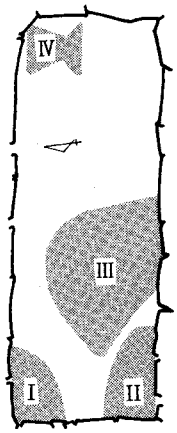


図56.　4号石室の遺物群（縮尺1／40）

6．石蓋土墓壙（図57，図版45）

前方部東側墳丘外のAトレンチ内に検出された石蓋土壙墓である。この地点は前方部から東へのびる丘陵頂部にあたり，丘陵の地形に沿って前方部東側斜面の葺石が鍵状に屈曲している部分である。丘陵頂部は古墳構造に伴っておおよそ平坦に削平されているが，石蓋土壙墓はその平坦部のほぼ中央に設けられている。石蓋土壙墓は葺石の根石から0.4m離れ，そのラインに直交し主軸をほぼ東西に設けられている。検出以前の地形は前方部墳丘斜面に沿って，西から東へ約10°の傾斜をみた。石蓋土壙墓は，発掘調査の際に墳丘に直交して設けた土層観察用ベルトのなかにちょうど隠れてしまい，ベルトの除去後に確認した。そのために両側の土壙掘方を痛めてしまった。土壙の掘方は削平された平坦面の地山上ではなく，その上部に堆積した軟質の花崗岩風化土中から掘削されている。この堆積物は墳丘側からの流土を主体にすると推定された。土壙墓は二段の掘方を有し，その主軸はN－100°－Eにとる。一段目の掘方は検出困難であったが，西側から南側に一部残存し，それによると規模は不明であるが隅丸長方形の掘方をもつと推定された。石蓋を架構する面より大きいとすれば長軸1m，短軸0.5m程度であろうか。石蓋は花崗岩3を用い，さらに隙間を壷形埴輪の破片で塞いでいる。後述するが壷形埴輪は復元の結果，2個体の埴輪からなることが判明した。主体部をなしている土壙は上面で長軸約83cm，幅は西側で約36cm，東側で約30cmを測る。深さは架構面から約30cmを測り，東端やや高いもののほぼ平坦な床面を呈する。小口の幅は西側の方が広く，頭位になると推定される。土壙内の埋土は花崗岩風化土が流入していた。埋土の上部は淡褐色であり，炭化物を少量含む。下部はややしまり，砂粒が荒くなる。土坑内からは遺物の出土はなく，また分析の結果赤色顔料は検出されなかった。

（吉留秀敏）

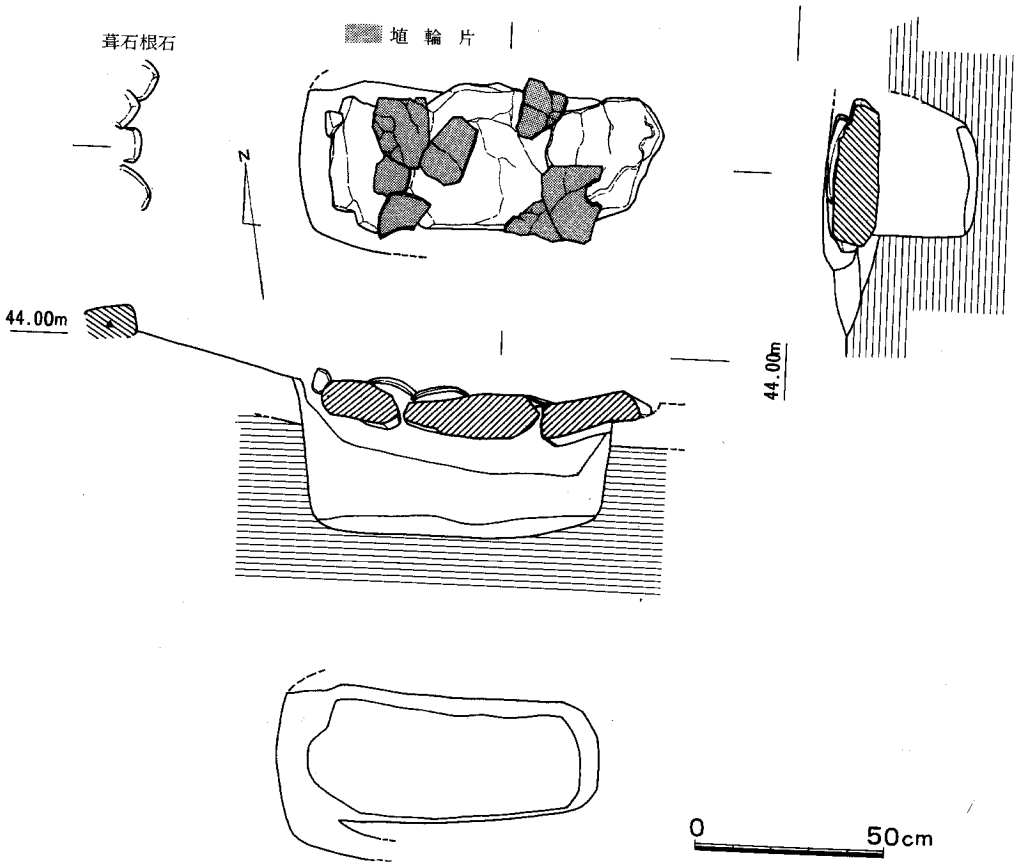


図57.　石蓋土壙墓　平面図および断面見通図　(縮尺 1／20)

VI　石室出土の遺物

1．銅鏡

舶載方格規矩鏡（図58　図版48－4）　落石を受け若干破損しているが，面径11.39cm，現状での重さは122gをはかる。白銅質で，灰緑色～淡緑色を呈する部分もあるが，半径は淡黒色化している。鏡背の全面に薄く朱が付着している。

鏡背は歪みながらも大きく配された方格が主文として目立っている。方格の中央には径2.12cm，厚さ0.18cmの，大きさを感じさせる円鈕がある。鈕座は作られていない。幅6.5mm，高さ4.0mmの断面長方形の円孔が通じている。鈕と方格の間には高さ1.5mmの円座乳があるが，鈕孔方向の左右各3個のみで，孔の前後にはみられない。方格の外には規矩文のT字形のみが置かれる。上方のT字形文はみえないが，破損部にあったと推測される。T字形文の左右には小さな円座乳各1個，計8個がある。内区の文様は方格・T字形文・円座乳14個のみで，四神文や渦文など他の文様は痕跡も認められない。外区は厚さ3.3mmの薄い平縁で，内面から目の粗い直行櫛歯文帯と内向する鋸歯文帯を配している。3mmの反りをもつ。直行櫛歯文は内区の外周に置かれる文様であり，鋸歯文もまた外向するのが通例である。ところが本鏡ではこの異例の組合せで外区を構成している。内外区ともども特異な背文の鏡で，類例を聞かない。

規矩文のうちのL・V文形，時には中国広東省広州市広州5028号漢墓出土鏡のように方格やT字形の一部までを欠く簡化された方格規矩鏡であっても，内区に若干なりとも渦文を配している。ところが本鏡は内区に十分な空白があるにもかかわらず，円座乳を配するのみである。平縁を飾る直

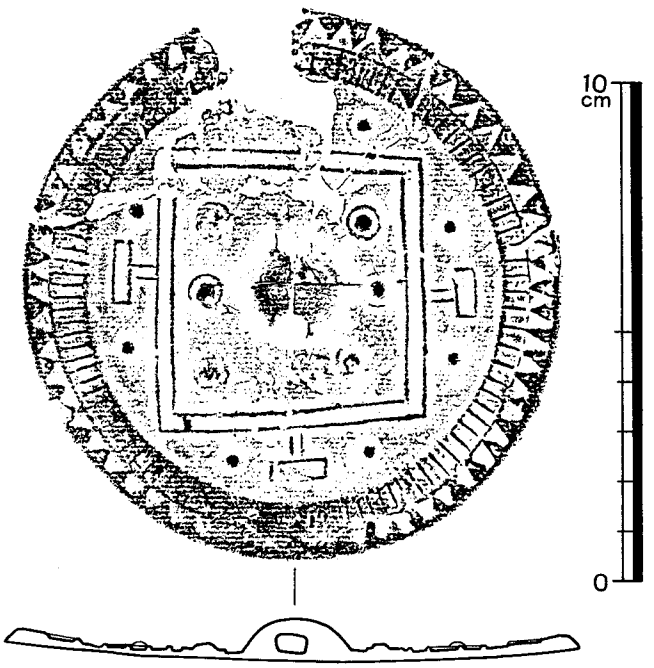


図58.　1号石室出土舶載方格規矩鏡拓影・実測図　（縮尺2/3）

行櫛歯文と内向する鋸歯文の組合せも例をみない。ただ，内向する鋸歯文は『小校経閣金文拓本』巻15－90の流雲文縁方格規矩四神鏡や中国湖南省衡陽市公行山14号墓出土の細線式六乳獣帯鏡などに例がある。また若干ではあるが福岡県筑紫野市の原口古墳出土鏡などの舶載・仿製の三角縁神獣鏡にも例がある。もちろん銅質は他の舶載鏡同様に良いが，仿製の捩文鏡もこれに劣らないから，決め手にはならない。このように本鏡を舶載・仿製のいずれとするか検討を要するが，ただ仿製の方格規矩鏡とは簡化の傾向が異なっており，舶載鏡と判断しておく。

仿製変形文鏡（図版48－5）　完存していたが，大学紛争時に考古学研究室を占拠した学生によって3号石室出土の6・8号鏡とともに持ち去られ，所在不明である。小田富士雄氏が撮影されたこの写真が本鏡の内容を知る唯一の資料である。10分の1で作成した出土状況実測図からでは正確を期しがたいが，面径11.5cm前後の鏡である。

鏡背の文様は，鈕座をもたない円形鈕，変形文を主文とする内区，平縁の外区からなる。内区は鈕孔方向の左右に配された4乳とその間のS字状や蕨手状に表現された細線変形文からなる。変形文は乳間を1単位としつつも，互いに連接している部分がある。四乳変形文の外周に斜行櫛歯文帯を置く。外区の平縁には幅広の凹帯がめぐり，その中に複線波文が配される。

概報では本鏡を仿製としている。しかし，内区外周に斜行櫛歯文帯，外区の凹帯に複線波文をめぐらす例はいったいに古墳時代の仿製鏡にはみられない。むしろそれは後漢の方格規矩鏡や細線式獣帯鏡にみられる特徴である。もっとも内区の変形文は中国鏡に類例を欠くが，仮に抽象化の進んだ黒川古文化研究所蔵の素縁獣帯鏡（『古鏡』89）のような文様から，禽獣文あるいは四神文のさらに変形したものとみることもできそうである。つまり，簡化した細線式獣帯鏡のさらなる簡化形である可能性が生じてくる。

ところで本鏡によく似た変形文鏡に岡山県笠岡市双つ塚古墳出土鏡がある。面径11.8cmで，背文の構成が外区を含め酷似している。また内区の変形文がやや簡単になっているが，大分市野間3号墳出土鏡もよく似ている。面径11.4cmである。2面とも面径の大きさを含め，本鏡に近いが，いずれも仿製と判断されている。その判断にしたがっておくが，その祖型は簡化した細線式獣帯鏡にあろう。

舶載三角縁四神四獣鏡片（図59－1，図版46－1）　縁部を5分の2残すのみの破片で，面径22.9cmに復原できる。現状で重さ387.5g。全面が縁錆で覆われている。破損面および5カ所にみられる穿孔のいずれもが研磨および磨れで著しく滑らかになっている。内区から外区にかけて一段高くなるが，その斜面に鋸歯文帯をめぐらす。外区は内側から鋸歯文帯・複線波文帯・鋸歯文帯をめぐらし，三角縁で終わっている。外区幅3.58cm，三角縁厚1.08cmをはかる。内区を欠くが，その外縁にそって銘帯があり，さらにその外側に斜行櫛歯文帯がめぐる。銘帯に1カ所，斜行櫛歯文帯には4カ所の穿孔があるが，銘帯のそれは欠けて孔をなしていない。銘文は左回りに配される。「□氏作竟甚大□□□……□……」の10字分が残るが，残った文字の配置

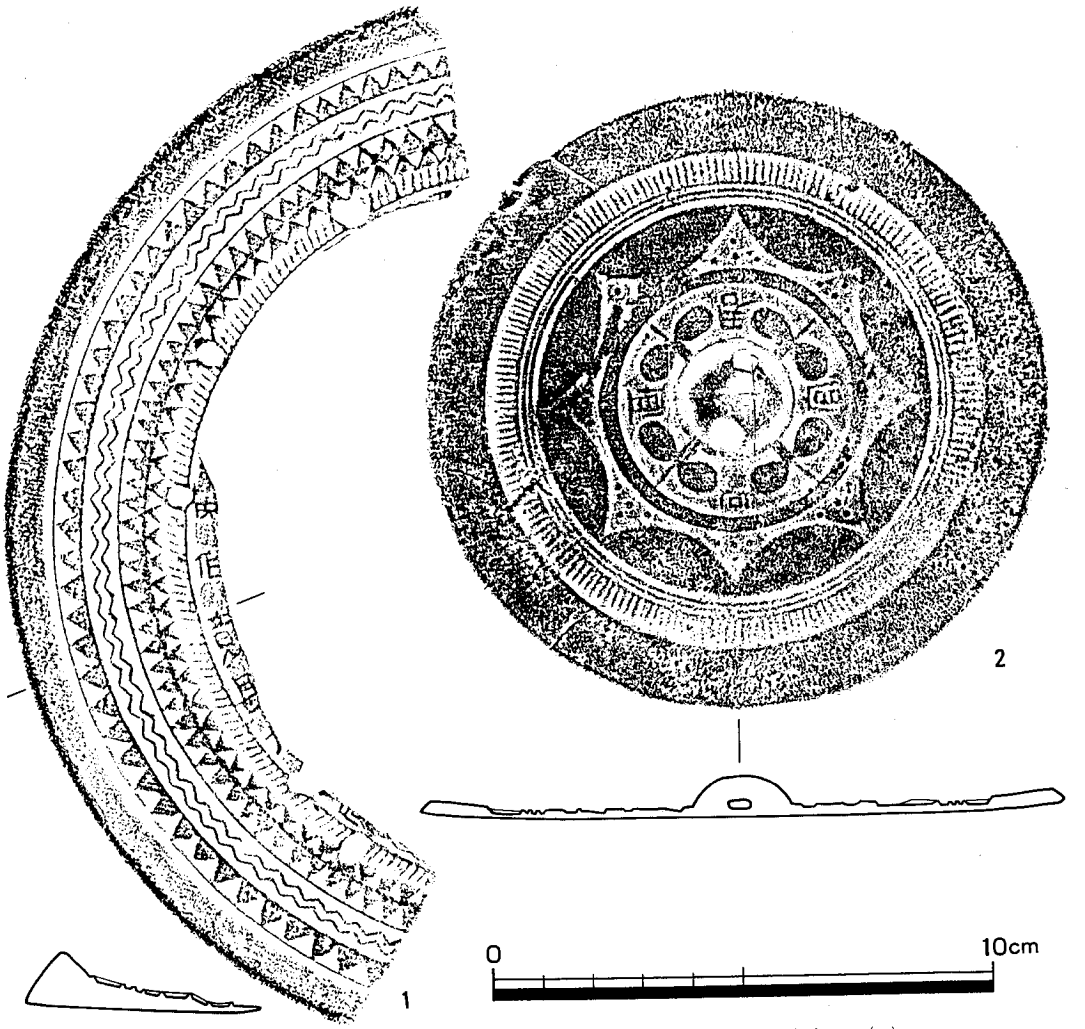


図59.　3号石室出土銅鏡拓影・実測図(1)　(縮尺2/3)

からみて，全文は36文前後となり，7言句35字の銘文であろう。第1字目は鋳鏡工人もしくは発注者の姓がくるが，左下に太目の残画のごく一部が認められ，王・陳などの文字を推定できる。第7字目は穿孔のため欠けている。第8字目は，位置からすれば類例の多くは「上」であるが，残画からみて明らかに異なる。F字状とその右下の逆コ字状の残画から推定できる文字は「同」である。図の上端に残る1字は「目」のような文字の左上の一部である。つまり銘文は「(王または陳) 氏作竟甚大□同□……□……」となる。

なお，小林行雄氏は本鏡をアメリカ合衆国フリア美術館蔵鏡(図版46－2)・滋賀県野洲郡野洲町古富波山古墳出土鏡と同笵の王氏作竟徐州銘四神四獣鏡（単像式）とされる。同じく両鏡と同型とされる樋口隆康氏は，本鏡の内区を4乳によって分割された各区画のなかに一神一獣を置きそれを交互に配する文様に復原され，氏の三角縁銘帯交互式四神四獣鏡に分類されてい

る。

舶載君宜高官銘蝙蝠座鈕内行花文鏡（図59－２，巻頭原色図版５－１，図版47－１）　面径12.77cmをはかる銅鏡で，若干のヒビがはいっているが，完存している。重さ190g。鏡面・背面ともに緑錆に覆われているが，一部に光沢をもつ白銅質の部分があり，顔を写すことができる。内区はやや黄色味をおびている。朱がかすかに付着している。鏡背には布の残片がわずかながら認められる。鏡面を上にして置かれていたから，下位に置かれた３号鏡とは別に包まれていたことを知ることができる。

径2.00cmをはかる鈕は円形で，周りに径2.44cmの隆起部をもつ。鈕の厚みは0.85cmである。鈕孔は幅５mm，高さ２mmほどの大きさに作られ，断面は方形に近い。図の下側の孔口は摩滅している。鈕孔の向きは主軸よりもやや振れている。蝙蝠座鈕で，鈕を載せる円形隆起部から四方に派生する蝙蝠文の間に「君宜高官」の４文字を左回りに配する。蝙蝠座を囲む平頂の素圏帯の外側には内区主文の８弧からなる内行花文帯がめぐる。花文の連接部に生じる空間には小さな珠文４個がそれぞれに配される。その外側には二重の同心円細線文，直行櫛歯文帯をめぐらす。外区は幅1.3cm，厚さ2.9cmの素縁である。反りは2.5cm。

背文は簡潔でととのった意匠にまとめられていて，残りの良さもあって，この鏡を引き立たせている。しかし詳細にみると，図の左上の花文の先端にある長方形状の２カ所の隆起や，その付近の同心円文や直行櫛歯文帯にみえる小隆起は笵型に生じた傷痕であり，右斜め下では同心円文・櫛歯文が不鮮明になっている。ともあれ，内行花文帯と平縁の間が素文の凹帯となる例の多い蝙蝠座鈕内行花文鏡にあって，本鏡は数少ない背文構成をとっている。

舶載方格規矩鏡（図60－３，図版47－２）　上述の舶載内行花文鏡の下部に置かれていた鏡で，４分の１ほどを欠く。破面をみると鈍く磨れていて，破損後の使用がうかがえる。出土の部分も小片に割れていた。下を向く鏡背には布が付着し，包装して副葬されたと推測できる。面径12.95cm，現状で重さ227gをはかる。破損側を中心に緑錆に覆われているが，左半分は白銅質を良く残し，銀白色に光沢を放っている。

鈕は径2.05cmの円形だが，鋭く高く作られ，1.31cmの厚みをもつ。鈕孔は主軸と同方向を向き，幅６mm，高さ3.5mmほどの断面長方形に作られている。鈕座は四葉文であるが，湯回りの悪さから明瞭でない。四葉文の間にも文様がありそうだが，不鮮明で要を得ない。四葉座を囲む方格と直行櫛歯文帯の間に内区主文の規矩文が配される。ＴＬＶ字形とその間を埋め８個に復原できる円座乳が主文の大部分を占める。Ｔ字形とＬ字形に挾まれる部分に禽獣状の文様，円座乳の回りには渦文がある。Ｌ字形の向きが通例とは反対になっている。外区は複波鋸歯文を配する上端幅1.8cmの平縁で，内側から鋸歯文帯・複線波文帯・鋸歯文歯をめぐらしている。

本鏡は背面の文様が内外区ともに不鮮明である。使用による磨耗もあろうが，笵型そのものの傷みがいちじるしく，そのため方格や規矩文の線が乱れ，文様の内容を不明瞭にしている。

概報では方格規矩四神鏡とされているが，本来四神文や禽獣文の置かれる位置には円座乳がみられ，T・L字形の間にも四神文は認められない。方格規矩鳥文鏡の可能性はあるが，文様の不鮮明さもあって，単に方格規矩鏡としておく。

船載方格規矩四神鏡（図60－4，巻頭原色図版5－2）　面径12.45cmの完形の鏡で，面径のやや大きな船載内行花文鏡よりも鏡体が3.25mmと1.45mm厚く，そのため318gの重さをはかる。鏡面を上にして出土したが，朱が多量に付着していた。朱は背面にもおよんでいる。錆で緑色を呈する部分もあるが，白銅質を良く残し，銀白色に光沢を放っている。背面にくらべ鏡面の錆は少ないが，漆黒色化が進んでいる。使用による磨れがみられ，全体に丸味をもっている。また背面に布痕が認められ，布に包まれていたことがうかがえる。

鈕は径2.06cmの円形で，1.05cmの厚みをもつ。鈕孔は主軸と同方向を向く。断面蒲鉾形に作られ，幅3.5mm，高さ3mmほどをはかる。鈕孔には紐の残痕と思われる異物が詰まっている。孔口の大きさからすれば，もう少し大きくなろう。鈕座は方格の隅角に向かう四葉文で，四葉文の間に葉の単位を区画するように直線文，葉の先端に沿うように「ハ」字状文がみえる。鈕座を囲む方格と内区外縁の斜面櫛歯文帯の間に規矩文と四神文からなる主文が配される。四神文は内区を4分割して大きく描かれる。つまり各像は四方のV字形の間を占める。玄武はT字形とL字形に挟まれるようにして左手に置かれた亀に巻きついた蛇がV字形の間に大きくのびる。青龍と白虎は胴部をT・L字形で挟み，頭部と前肢を右側に，尾部と後肢を左側に置く。朱雀は右側に体部を作り，中間から左側にかけて尾羽を大きく広げている。空白部を埋める渦文もわずかに認められるが，ほとんど規矩文と四神文からなっている。乳はみられない。外区は上端幅1.5cmの平縁で，幅4～5mm前後の2条の凹帯をめぐらし，その中に双線三角文を配している。2.8mmの反りをもつ。

本鏡は鏡背を覆う布痕で文様の観察が妨げられ，概報では単に方格規矩鏡とされた。しかしそれを取り除くと明瞭に四神文が認められ，方格規矩四神鏡であることが知られる。手磨れのため文様に鋭さを欠くが，本来鋳上がりの優れた好鏡である。

仿製捩文鏡（図60－5，図版47－3）　面径7.78cmをはかる精良な銅質の小形鏡で，鏡面を上にして出土した。二折していたが，破面は鋭く，埋納後の破損の可能性が強い。重さ73g。白銅質で緑錆に覆われているが，鏡面は灰黒色，背面は銀白色を呈し，光沢をもつ。

鈕は径1.46cm，厚み0.62cmの円形で，鈕座をもたない。鈕の周りには細線の同心円文をめぐらす。その外側の内区主文はいちじるしい手磨れのため丸味をもった平頂素圏帯状をなしている。その外側にさらに二重の細線同心円文がめぐり，目の細い直行櫛歯文帯が内区の外縁を飾る。外区は上端幅1.2cmの素文平縁である。1.5mmの反りをもつ。

内区の主文帯はいちじるしく磨れていて，一見平頂素圏帯状をなすが，詳細にみると文様帯である。ことに図の鈕孔の上下方向で，横走する6本の線を直交気味の2本の線で縛るように

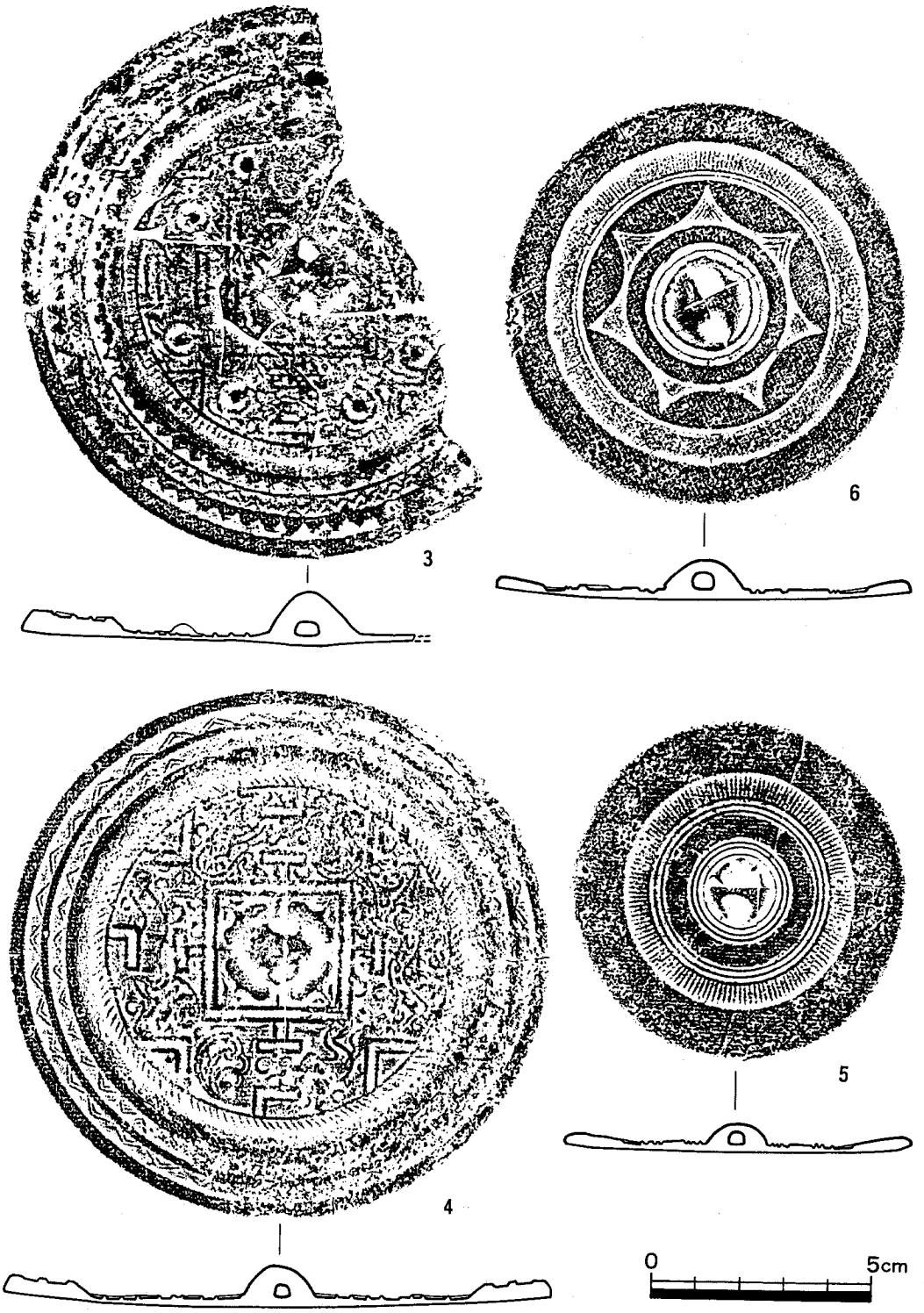


図60.　3号石室出土銅鏡拓影・実測図(2)　(縮尺2/3)

して区切っている様を，良く観察できる。つまり，太目の縄を２本の紐で縛った形であり，捩り紐状の文様帯となっている。既知の鏡の背文構成に類似した例を欠くが，これは捩文鏡の特徴である。鈕孔の右斜め上，折損部の右はことに磨れがいちじるしく，円形状に隆起している。鈕の反対側にも同様の個所があり，乳とも思える。しかし他にはそのような個所はなく，乳を欠く類の捩文鏡であろう。

本鏡はこれまで舶載重圏文鏡とされてきた。手磨れのため捩文を確認できなかった点と，上述の４面の３号石室出土舶載鏡に遜色ない銅質が，判断の大きな根拠となっていた。しかし報告したように，今回，捩り紐状の文様帯を確認できた。すなわち本鏡は捩文鏡の範疇で考えられる仿製鏡である。

仿製方格規矩鏡（図版47－４）　完存していたが，盗難に遇い紛失した。小田富士雄氏が撮影されたこの写真が唯一の資料である。重なって副葬されていた捩文鏡とともに写されていて，その比較から面径は9.12cmに復原できる。また実大で実測した出土状況図ではかっても9.2cmになる。したがって面径は9.2cm前後をはかることになる。

鈕は円形で，大きく作られた鈕孔が通る。鈕は二重の円圏と単線の方形区画で囲まれ，その四隅に文様がみえる。鈕孔は主軸よりも方形区画の対角線に向いている。方形区画と方格の間には一辺４個，計12個の円圏小乳を置く。内区主文の規矩文はＬ・Ｖ字形を欠く簡化された背文構成をとる。方格の外辺中央にＴ字形があり，その両側に２個，計８個の円圏小乳をともなう。Ｔ字形と円圏小乳の間を渦文で埋めているようであるが，はっきりしない。内区の外縁にはやや斜めになった直行櫛歯文帯がめぐらされる。外区は平縁で，内側から鋸歯文帯，１単位の横幅が広くなった複線波文帯を配している。

本鏡は以上のような特徴をもつ。類例からみて仿製の方格規矩鏡である。銅質を知る手がかりはないが，概報では舶載鏡とされていて，おそらく白銅質であったと思われる。

仿製内行花文鏡（図60－６，図版47－５）　３号石室出土鏡の中で本鏡のみが鏡背を上にしていた。面径9.38cmで，完存する。大きさの割りには重みがあり，127.5gをはかる。表裏全面が錆のために緑色となり，また鉄錆が付着している。

鏡背の中心を占める鈕は径1.84cmの円形で，6.2mmの厚みをもっている。幅・高さともに4.5mmの丸味をもった方形断面の鈕孔が通るが，孔口に向けて広がり，大きさを増している。径2.21cmの円座鈕の周りを細線同心円文が一周し，その外側を幅4.8mmの平頂素圏帯がめぐる。主文の内行花文帯は７弧で，素圏帯との間の空白部に三～四重の細線文を弧状に配している。内行花文帯の外側は細線同心円文一圏，さらに目の細かな直行櫛歯文帯となる。全体に手磨れによると思われる磨耗がみられるが，直行櫛歯文・同心円文の半分近くの消失は湯回りの悪さによるものであろう。外区は上端幅8.5cmの素文平縁で，２mmの反りをもつ。

仿製内行花文鏡（図版47－６）　上述の仿製内行花文鏡と重なり，その下から鏡面を上にし

て出土した。盗難に遇い紛失した鏡の一面である。完存した。面径は小田富士雄氏の写真から9.24cm，実測図から8.85cmの数値が得られる。斜めに傾いて出土しており，9.2cmと復原しておく。

円形鈕で，周りに同心円文を一圏めぐらす。鈕の外に5弧からなる内行花文帯を配して主文にしている。円圏との間の空白をそれぞれ小さな珠文で埋めているが，数は一定しない。内行花文帯の外側には目の細かな直行櫛歯文帯がめぐる。外区は素文の平縁である。図版でみると，内行花文の1弧が型崩れを起こして直行櫛歯文帯から平縁におよんでいるようだが，確認できない。日本化の進んだ仿製鏡である。

（高倉洋彰）

2．武器

1号石室

剣　（図61－1～4・7・8，図版49）

3口ある。1は全長77.5cm，最大刃幅3.5cm，刃厚0.55cm，茎幅2.0cm，茎厚0.6cmを測る完形品である。関は角をなさないが，茎端から11.9cmの所に刃部と茎部の境目がある。木質の付着は見られず，目釘穴は銹のため判明しない。

2は刀と銹着している。全長81.7cm，刃長66.1cm，最大刃幅4.3cm，厚さ0.8cm，茎幅1.3～3.3cm，茎厚0.6cmを測る完形品である。両角関で鞘の木質が遺存し，目釘穴が1つ開く。

3は現存長36.7cm，最大刃幅3.8cm，刃厚0.8cm，茎幅1.9cm，茎厚0.6cmを測る。裏面には鞘や柄の木質が一部に遺存する。関は角をなさない。

4は現存長44.6cm，最大刃幅3.3cm，刃厚0.8cm，茎幅1.9cm，茎厚0.6cmを測り，茎端部を欠くが推定で全長50cm位になると思われる。関は角をなさない。

7と8は刃部の破片である。それぞれ現存長6.7cm，最大刃幅3.1cm，刃厚0.5cm，現存長5.6cm，最大刃幅3.3cm，刃厚0.8cmを測る。

刀（図61－2・5・6・9・10，図版49）

3口と考えられる。2の剣に銹着した刀は現長69.0cm，最大刃幅3.2cm，背厚0.7cm，茎幅0.9cm，茎厚0.7cmを測る。刃は出土後の接合の具合によるのか一部で急に内反りし，関は刃から弧を描くように細まりながら茎へと続く。鞘木が遺存する。

5は現存長48.8cm，最大刃幅3.0cm，背厚0.7cmを測る刀の上半部である。鋒は山形になっている。

6は全長44.1cm，刃長34.0cm，最大刃幅3.05cm，背厚0.9cm，茎幅2.6cm，茎厚0.5cmを測る小刀である。鞘や柄の木質が多く遺存しており，鋒から15cm位の所で急激に内反りしている。

9は鋒部付近の破片である。現存長15.0cm，最大刃幅3.15cm，背厚0.8cmを測る。

10は刃部の破片で，蕨手刀子が2本銹着している。現存長15.6cm，最大刃幅2.7cm，背厚0.9cm

を測る。出土状況から2と同一個体と考えられる。

鏃（図62～65－11～76，図版49・50）

合計で70本以上が確認され，形態は多様で細かく8つに分けられる。遺物の観察は一部をとりあげて解説を加えていくことにする。

11～13は全長が20cm前後になる大型品で，逆刺を有する。3本が存在する。11は全長20.45cm，鏃身部長10.3cm，同幅3.5cmを測る。11の逆刺は深いが，13は浅い。すべてに矢柄の木質と樹皮巻が遺存する。

14～16は大きめの鏃身部に比較的浅い逆刺と短い頸部がつくもので3本ある。14は推定全長7.8cm，鏃身部幅4.1cmを測る。

17～25は頸部より長く深い逆刺を有するもので9本ある。18は全長6.3cm，鏃身部

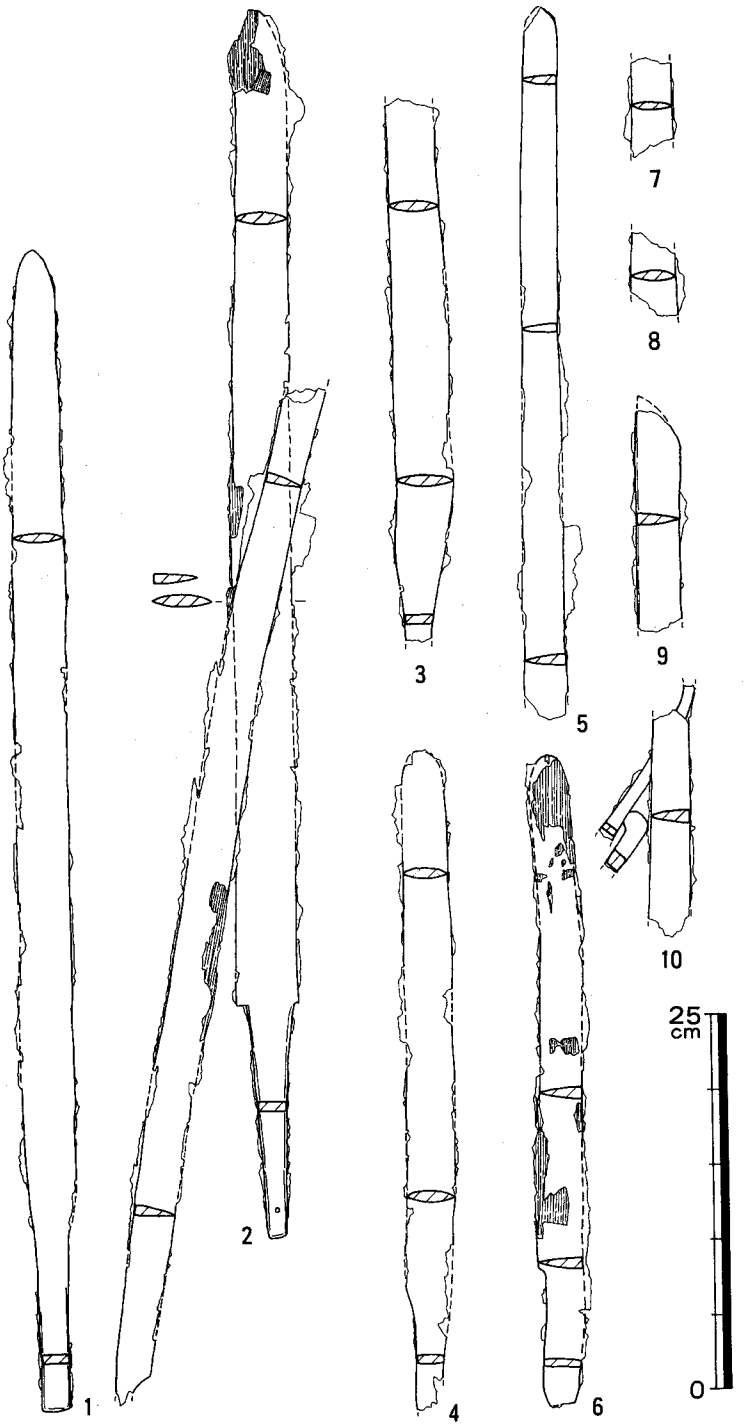


図61.　1号石室出土鉄器（1）（縮尺1／5）

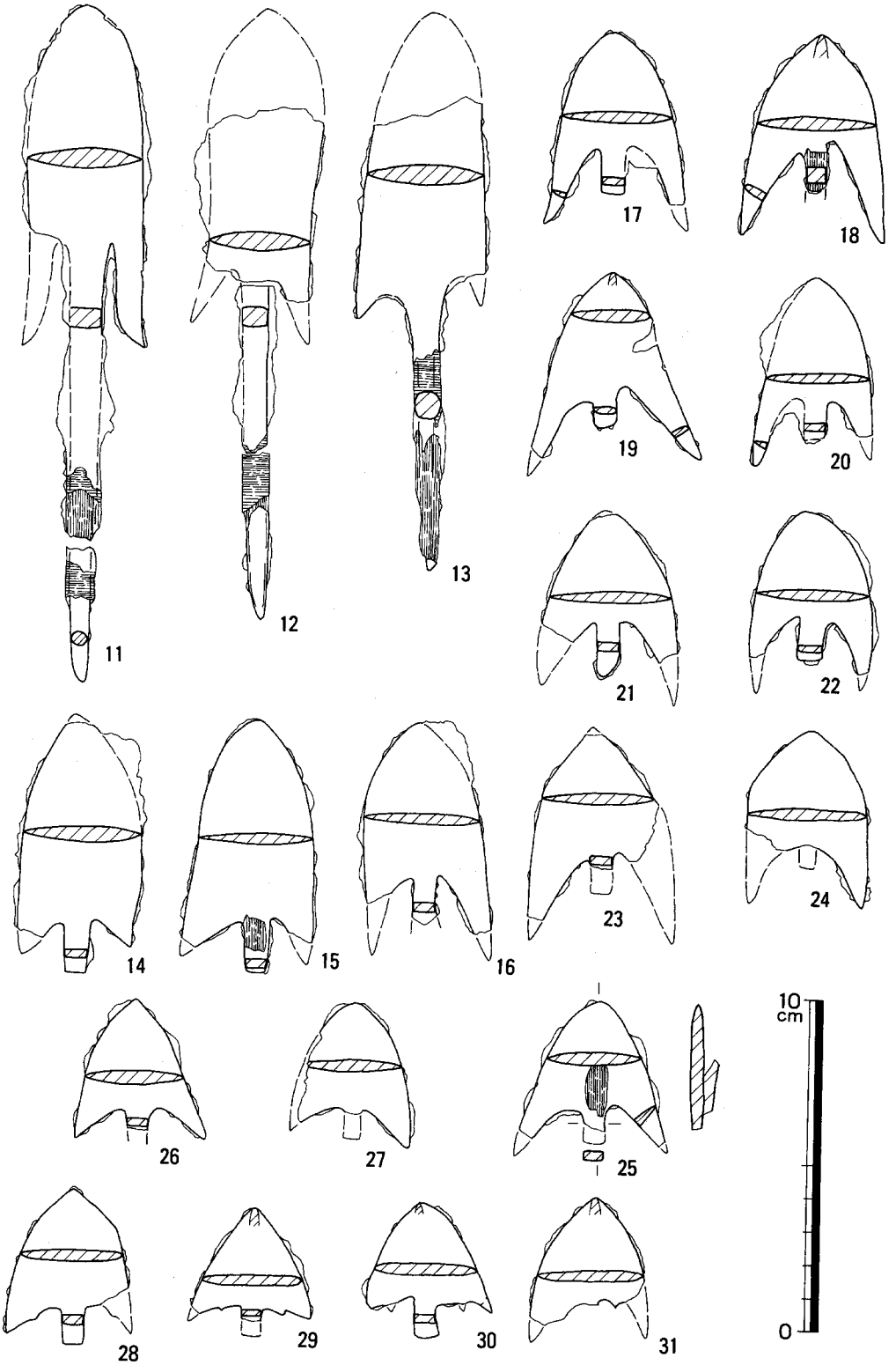


図62.　1号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)

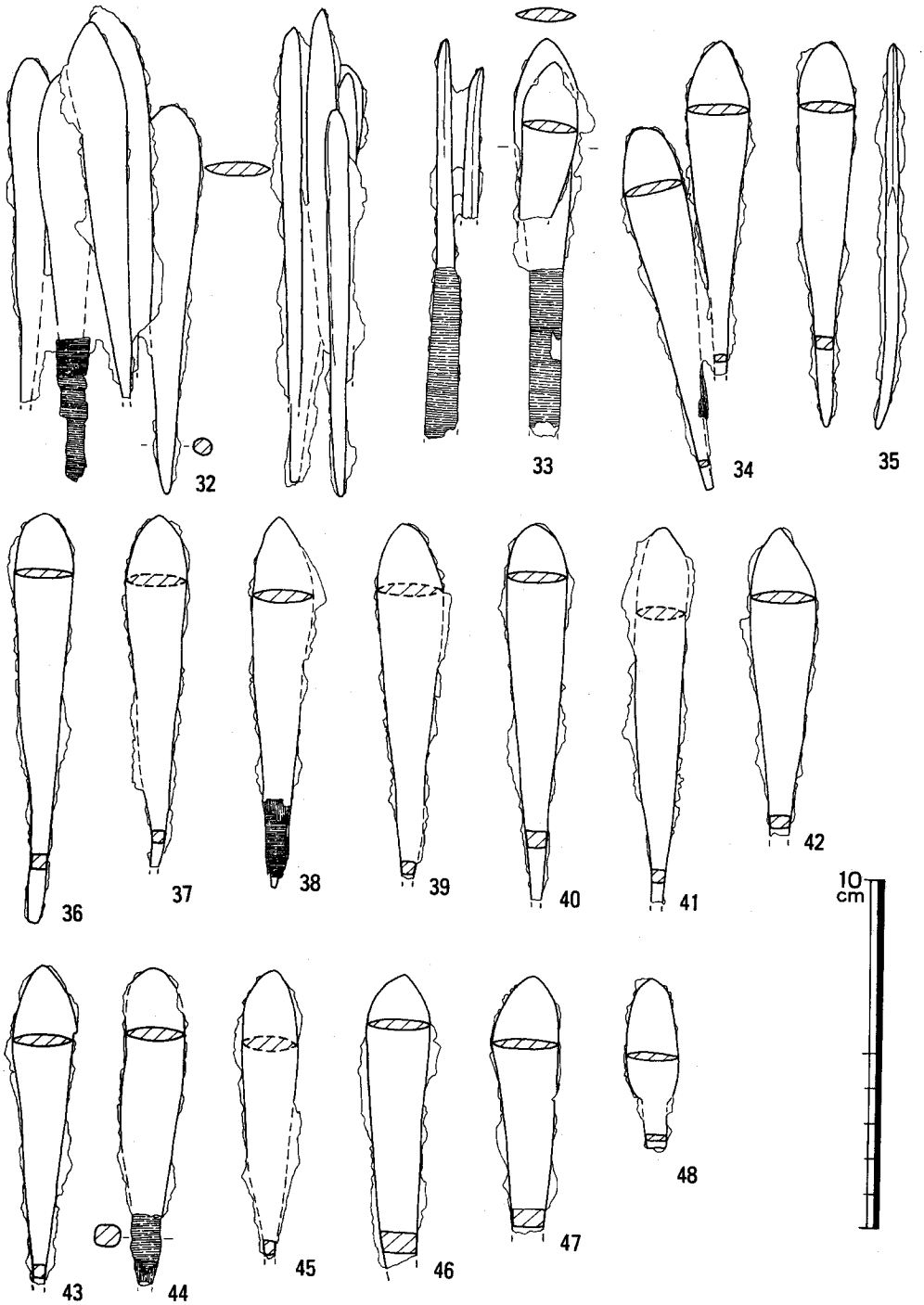


図63.　1号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)

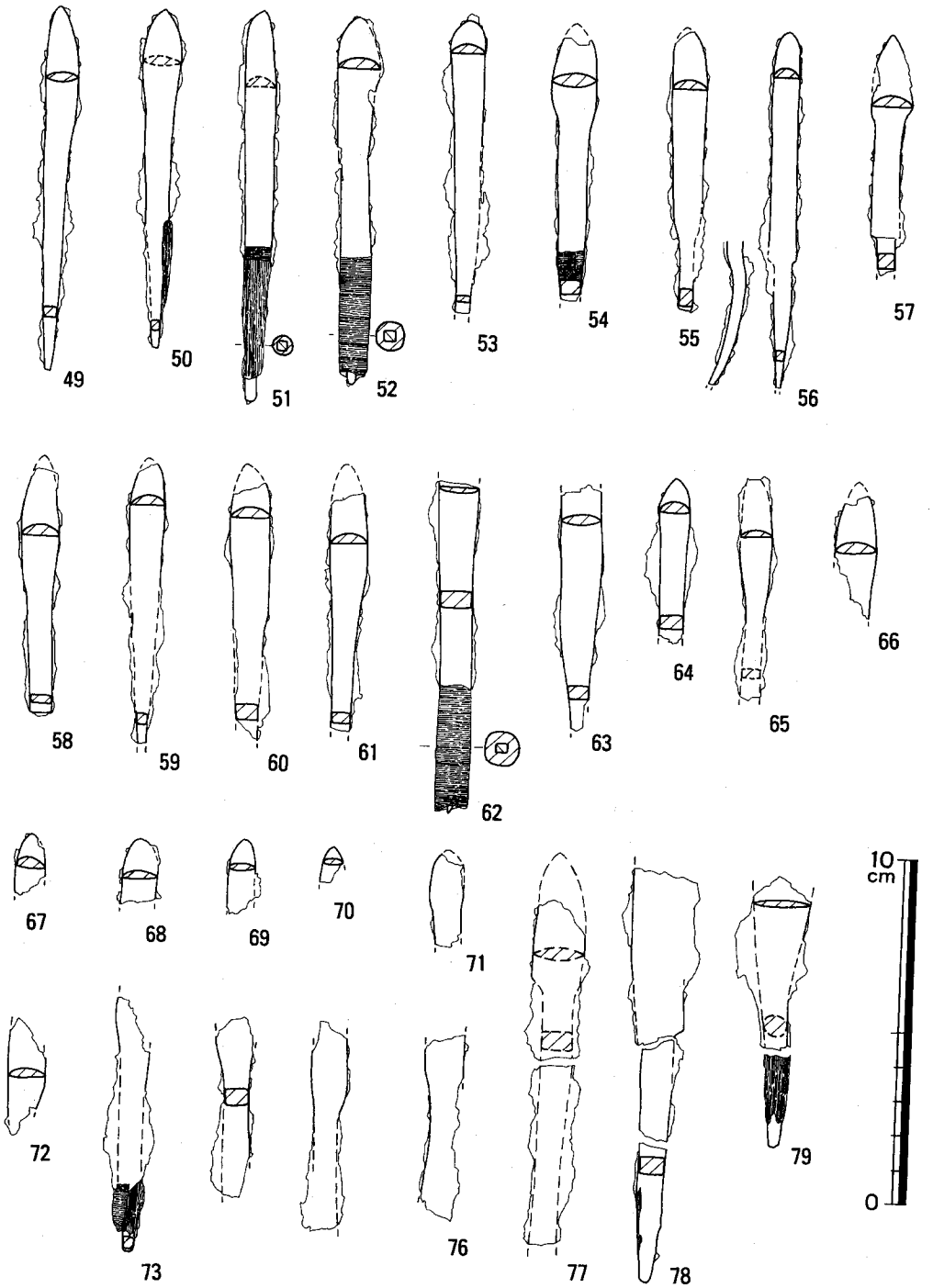


図64.　1号石室出土鉄器(4)　(縮尺1／2)

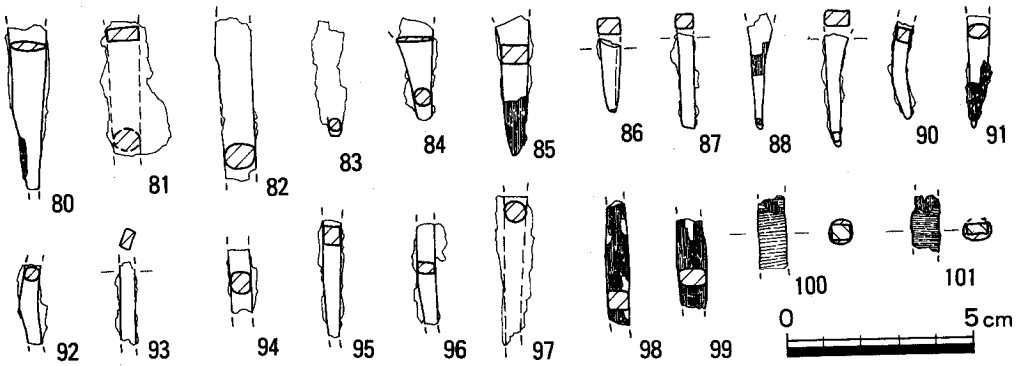


図65.　1号石室出土鉄器(5)　(縮尺1／2)

幅4.4cmで，19は推定全長6.2cm，鏃身部幅5.3cm，鋒から頸部端までの長さ4.7cmを測る。25は矢柄の端部を縦に2つに割ってその間に鏃をはさんだような状況で木質が遺存している。

26･27は17～25に比べ逆刺が浅いもので2本ある。26は鏃身部長4.3cm，鏃身部幅3.95cmである。

28～31は26・27に重抉をつけたもので4本ある。重抉部は逆刺の内側にわずかな突起となって見られる。30は全長4.1cm，鏃身部幅3.1cmを測る。

32～47は鏃身部幅が1.6～1.8cmを測る柳葉形を呈するもので23本が数えられる。35は全長11.0cm，鏃身部幅1.6cmを，36は全長11.7cm，鏃身部幅1.75cmを測る。32は6本が銹着している。41は側面から見て波形に曲っている。いずれも明瞭な関をもたず，頸部へと直線的にあるいは内湾しながらすぼんだりしている。

48は柳葉形の鏃身部に短い頸部のつくもので，全長4.85cm，鏃身部幅1.5cmを測る。

49～76は鏃身部幅が0.8～1.2cmで長頸鏃に含めうると考えられるもので21本以上ある。鏃身部の形には関が角をなしたり，なだらかな曲線を描いたり，直線状に伸びていたりするものなどがあり，断面は片丸造りのものが多い。篦被も明瞭でないものが多いが，中には56・57のように角をなすものが存在する。50は全長9.8cm，鏃身部幅1.1cmで，56は現存長10.5cm，鏃身部幅0.8cmを測る。

2号石室

剣（図66－1～3，図版52）

3口ある。1は復原長81.0cm，最大刃幅3.95cm，刃厚0.8cm，茎長15.8cm，茎幅2.3cm，茎厚0.8cmを測る。目釘穴が1つあき，鋒部には剣の鋒の向きと逆の方向に揃えて重ねられた鏃が10本銹着している。鞘の木質が遺存している。

2は現存長65.1cm，推定全長65.8cm，最大刃幅3.9cm，刃厚0.7cm，茎長16.3cm，茎幅2.2cm，茎厚0.5cmを測る。目釘穴が2つあき，鞘や柄の木質が遺存する。

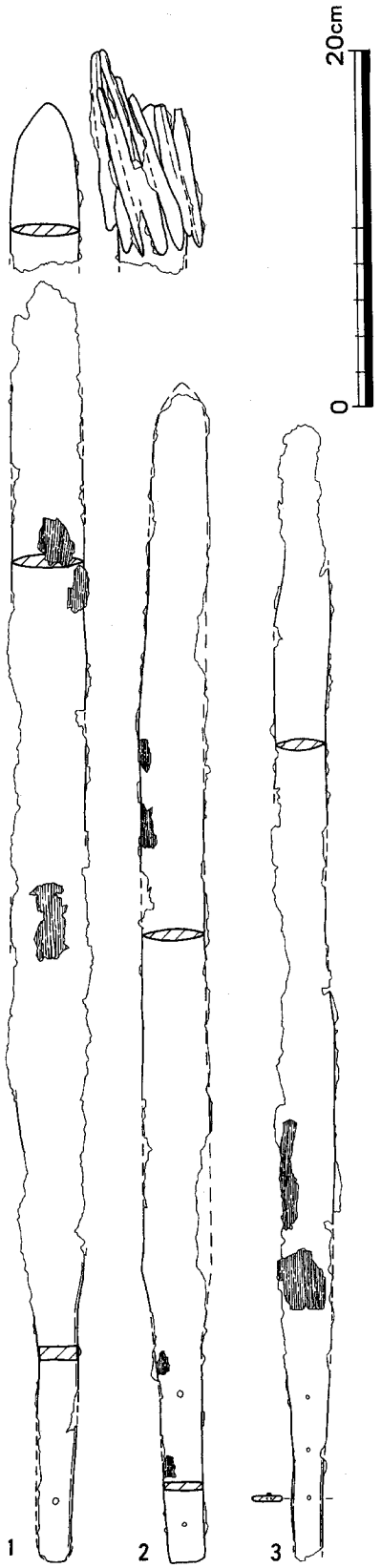


図66.　2号石室出土鉄器(1)
(縮尺1／4)

3は鋒と茎端を欠くもので，現存長63.4cm，最大身幅4.1cm，刃厚0.7cm，茎幅1.7～2.5cm，茎厚0.3cmを測る。目釘穴が3つあき，うち1つには目釘が遺存する。付着する木質には一辺がきれいな直線となって残っている部分があり，ここが鞘口端であろう。

鏃（図67・68－4～33，図版52）

61本が数えられ，すべて同じ形態に属すると考えられる。基本的には幅0.8～1.3cmの長楕円形の断面片丸造りの鏃身部に7cm前後の茎部をつけるものであるが，細部にはいろいろな違いが見られる。鏃身部について言えば，関が角をなすもの（13），関が明瞭でないもの（28），小型のもの（22・23），歪んでいるもの（10）等があり，篦被には両側が撫角のもの（4・5・6・22），片側だけ角をなしてすぼむもの（15・30・31），叩きつぶされて片丸造り状になったもの（14），棘状に張り出すもの（33）等がある。

3号石室

素環頭大刀（図69－1，図版53）

鋒部が欠けており，現存長81.8cm，刃幅1.95～2.5cm，背厚0.55～1.0cm，茎長21.4cm，茎幅2.3～2.5cm，茎厚0.9～1.1cmを測る。関部は段をなさないが，その辺から刀身が急に内反りになる。素環部は外径6.3×5.1cmの楕円形で，茎端を刃側に折り曲げて茎に密着させている。素環部の断面径は1.2×1.4cmを測る。鞘木の他に，茎側にも一部木質が遺存し柄がついていた可能性が高い。しかも，関部付近に幅1.2cmの木質が刃側から背側まで遺存しており，木製刀装具様のものがはまっていたと考えられる。

環頭大刀（図69－3，図版53）

刀身部の半分を折れて欠くが，現存長52.3cm，

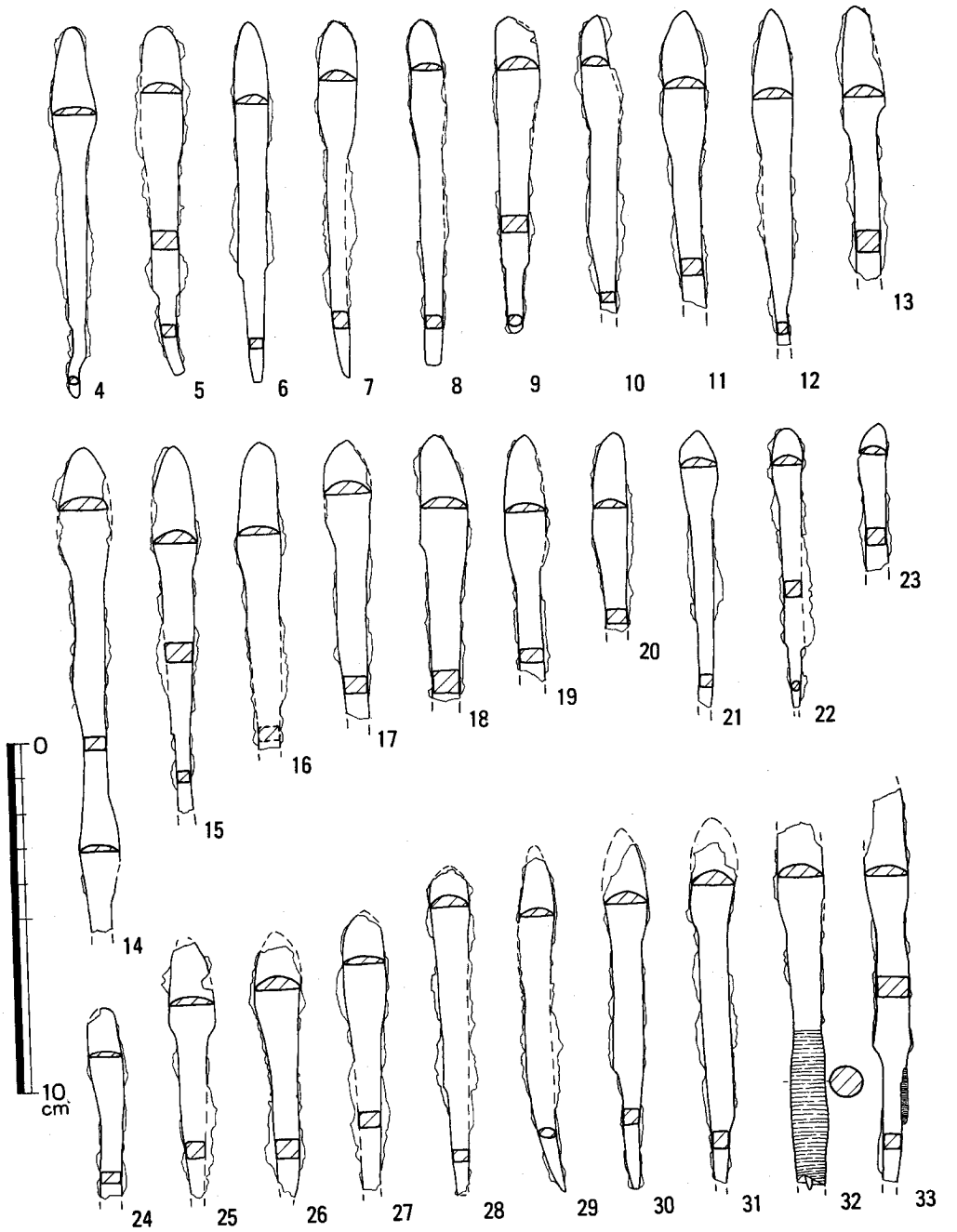


図67.　2号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)

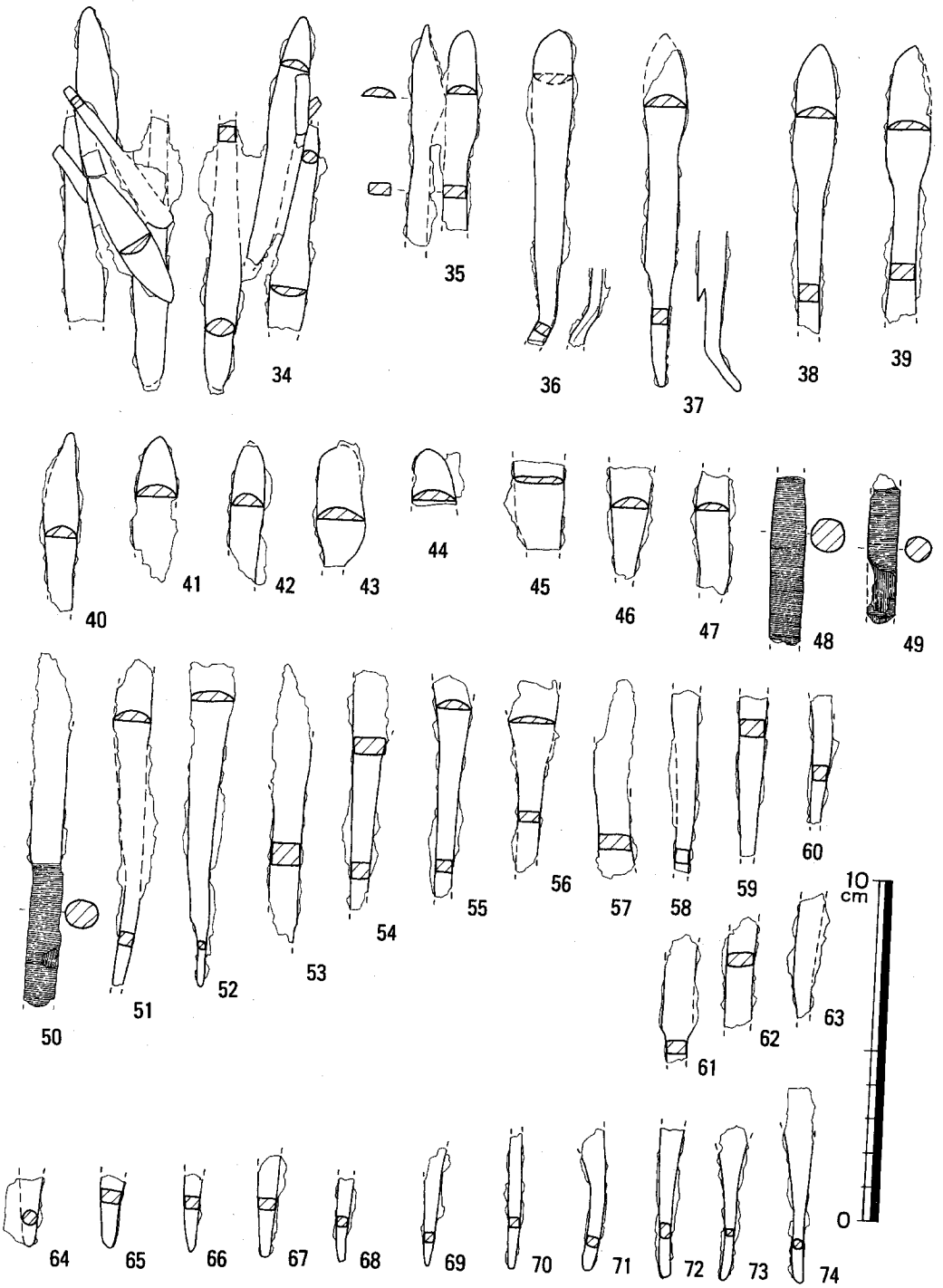


図68.　2号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)

刃幅2.6cm，背厚0.8cm，茎幅1.8～2.1cm，茎厚1.1cmを測る。刀身部は若干の内反りを見せる。関は木質に覆われているため不明である。環頭部は外径6.0×4.8cmの楕円形で，三葉環の部類に含めうるものであるが，環内の造りは粗雑で平べったく，表面の鉄分がはがれているため観察は困難であるが装飾もないようであり，三葉のうちの中央の葉の部分が表現されてなく二葉とも言うべきで，突起は環内の空間を大きく占める。環頭部と茎は一体で造られ，刀身部との接合法は木質の付着のため不明瞭だが，鍛造で刀身部まですべて一体で造られているようである。また，肉眼では観察できないが，X線透視の結果，環頭部端から5.5cmから14.3cm位の所まで螺旋状に幅2㎜の紐状のものが巻かれているのが確認された。その材質は不明であるが，鞘木の遺存部に少くとも幅2.5cmは覆われていることから，呑口式の拵えであったことがわかる。茎の環頭部側にも木質が少し遺存するが，これと紐状に巻いたものとの関係は不明である。

刀（図69－2・4・5・15～24，図70－27，図版53）

少なくとも4口ある。2は現存長28.4cm，刃幅2.2～2.6cm，背厚0.6cmを測る。鞘木が遺存している。

4は全長73.0cm，刃幅2.1～2.4cm，背厚0.7cm，茎幅1.5～2.0cm，茎厚0.4～0.7cmを測る。刃こぼれしている部分が多く，関も不明である。柄の木質が遺存する。

5は剣と銹着している。全長98.2cmを測る完形品である。刃幅2.0～3.1cm，背厚0.6～0.8cm，茎幅2.3cm，茎厚0.4～0.9cmを測る。関は段をなさず，どの部位にあったのかも判明しない。4同様ほとんど反らずに直線的に刀身部は伸びている。

15～24は刀片である。15は現存長2.95cm，刃幅3.0cm，背厚0.8cmを測る。16は現存長7.2cm，刃幅1.9～2.05cm，背厚0.6cmを測る。17は現長16.8cm，刃幅1.85～2.15cm，背厚0.9cm，茎幅2.1～2.4cm，茎厚0.4～0.8cmを測る。18は現長8.05cm，茎幅1.1～2.0cm，茎厚0.2～0.3cmを測る。17・18は柄の木質が残り，同一個体である。また，19～24も同一個体である可能性が高い。19は鋒部で，現長10.5cm，刃幅2.0cm，背厚0.8cmを測る。20は現長17.7cm，刃幅2.1～2.95cm，背厚0.6～0.9cmを測る。21は現長19.85cm，刃幅2.8～2.9cm，背厚0.7～0.9cmを測る。22は現長14.6cm，刃幅3.1～3.2cm，背厚0.6cmを測る。23は現長13.45cm，刃幅2.8～3.05cm，背厚0.9cmを測る。24は現長5.05cm，茎幅1.25cm，茎厚0.8cmを測る。

剣（図69－5～14，図版53）

6口ある。5の刀と銹着した剣は現存長28.2cm，刃幅3.5～4.2cm，刃厚0.7cm，茎幅2.45～3.1cm，茎厚0.6cmを測る。両角関で，内湾するように茎に続く。

6・7は刃部片で，6は現存長9.7cmで銹のために内容は不明である。7は現存長10.9cm，刃幅2.1～2.4cm，刃厚0.6cmを測り，木質が遺存する。

8は復原長66.6cm，刃幅2.5～3.0cm，刃厚0.5cm，茎長9.0cm，茎幅1.45～1.65cm，茎厚0.4cmを測る。目釘穴が1つあく。

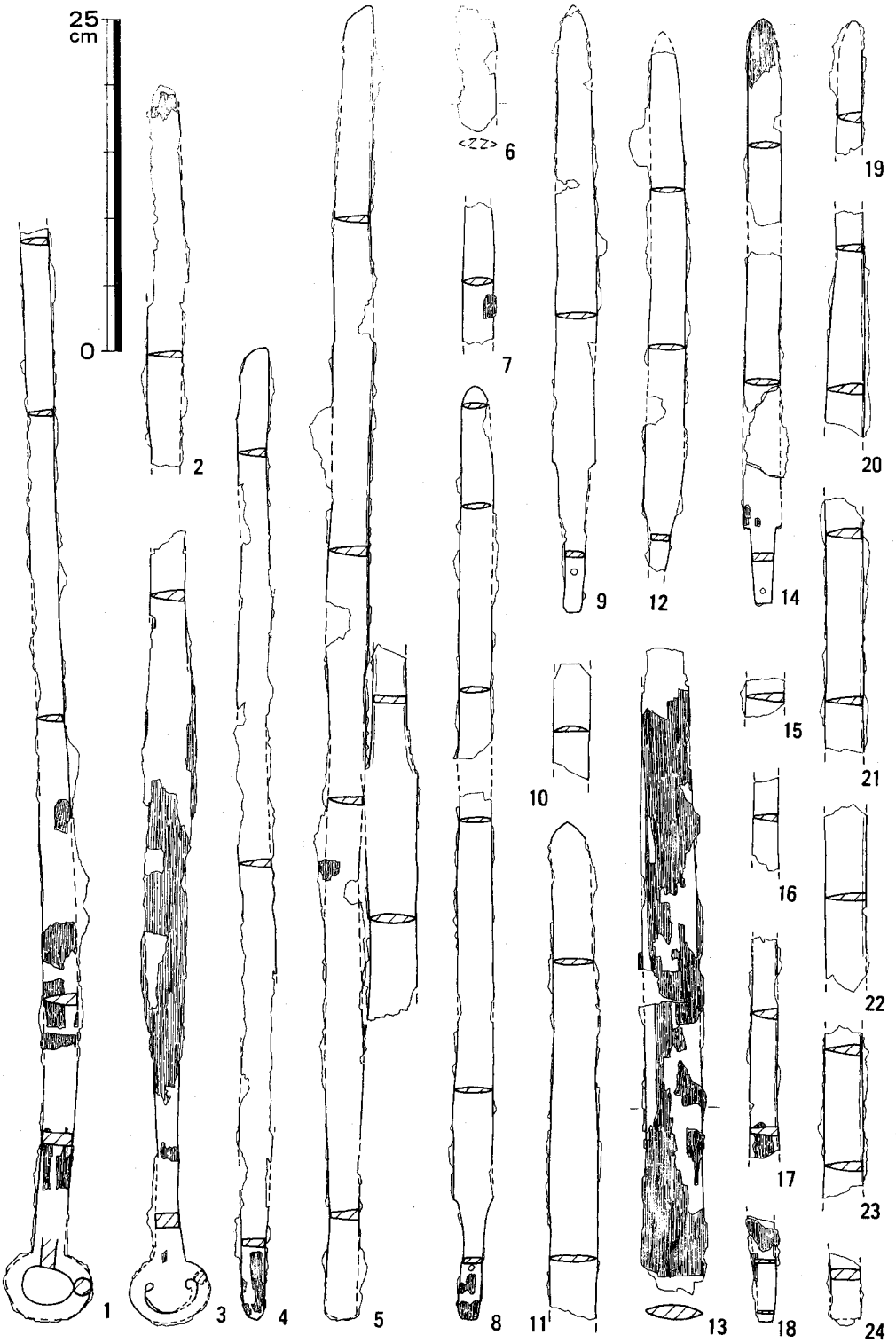


図69.　3号石室出土鉄器(1)　(縮尺1／5)

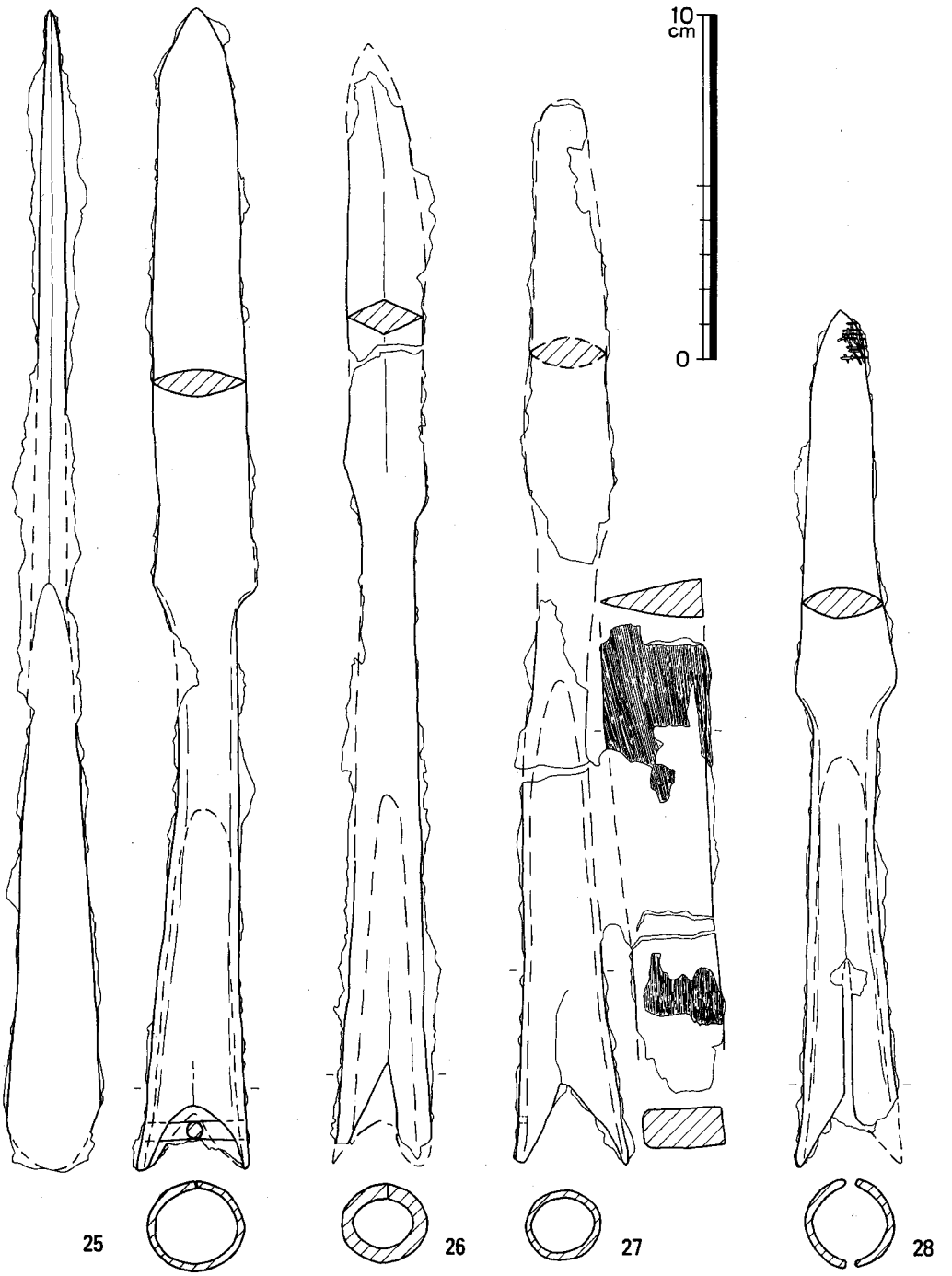


図70.　3号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)

9は現存長44.9cm，刃幅2.5～3.2cm，刃厚0.5cm，茎長11.3cm，茎幅1.3～2.6cm，茎厚0.5cmを測る。目釘穴が1つあき，裏面には鞘の木質が残る。

10は刃部片で，現存長9.0cm，刃幅2.9cmを測る。裏面は鉄が全く剝離してしまっている。

11は刃部上半である。現存長36.8cm，刃幅2.9～3.65cm，刃厚0.5cmを測る。

12は現存長39.4cm，刃幅1.8～2.9cm，刃厚0.4cm，茎幅1.25～1.6cm，茎厚0.5cmを測る。剣身部が若干片側に曲がっている。

13は太身の剣片で現存長48.6cm，刃幅3.5～4.45cm，刃厚1.2cmを測る。全体に木質が遺存し，関から0.4cmの所に鞘口の線が残っている。

14は9・12同様全長50cm以下の短剣である。復原長41.5cm，刃幅2.3～2.9cm，刃厚0.6cm，茎長5.85cm，茎幅1.3～1.9cm，茎厚0.55cmを測る。目釘穴が1つあき，鞘木が遺存している。

矛（図70－25～28，図版53）

4本ある。25は全長33.7cm，関部刃幅2.95cm，刃厚0.8cmを測る。袋部は外径3.2×2.65cmで，2ケ所に抉りが入り，袋の合わせ目は0.7cm程が判明する。袋内には木質は遺存しないが，目釘が遺存することから柄が差し込まれていたと推定される。

26は現長31.5cm，最大刃幅2.3cm，刃厚1.0cmを測る。身部は断面菱形で鋒は片側に若干曲がる。袋部は外径2.8×2.3cmで，抉りが2ケ所に入り，内部には木質が遺存する。

27は現長30.85cm，最大刃幅2.5cm，刃厚0.9cmを測る。関は角をなさずなだらかな曲線を描くようである。袋部は外径3.2×2.0cmで，2ケ所に抉りが入り，目釘穴が1対向い合ってあくが，袋内には木質は残っていない。

28は全長24.8cm，関部刃幅2.9cm，刃厚0.9cmを測る。刃部は中程から関へと急に外湾する。鋒付近と袋部合わせ目付近には目の粗い布片が遺存する。袋部は外径3.0×2.6cmで，2ケ所に深い抉りが入り，合わせ目も長く残る。目釘穴が1対あいている。

鏃（図71～76－29～157　図版54～56）

合計で104本が確認されるが，形態は多様であり，細かく11の形態に分けた。

29～44はいわゆる圭頭鏃に属する小型品である。いずれも鏃身部幅が1.9～2.6cmの間にあり，全長も7～9cm前後である。29は長さがやや短く全長6.7cm，鏃身部幅2.6cmで，31は全長9.6cm，鏃身部幅2.1cmを測る。矢柄の木質や樹皮巻が遺存している。

45～59も圭頭鏃に属するものであるが，29～44より大型のものであり，鏃身部幅は3cmを越し，全長も13cm以上ある。このグループを更に細分するなら45・46・50・53のような鋒が尖り鏃身最大部より茎部に直線的にすぼんでゆくものと47・49・51・55・56のような鋒が丸味を帯び鏃身最大部より茎部に内湾しながらすぼんでゆくものとなろう。前者は鏃身部中央に1つ小さな穿孔がなされている。46は現存長13.5cm，鏃身部幅3.8cmを測る。47は全長13.7cmである。矢柄の木質や樹皮巻が遺存している。50は11本が銹着している。

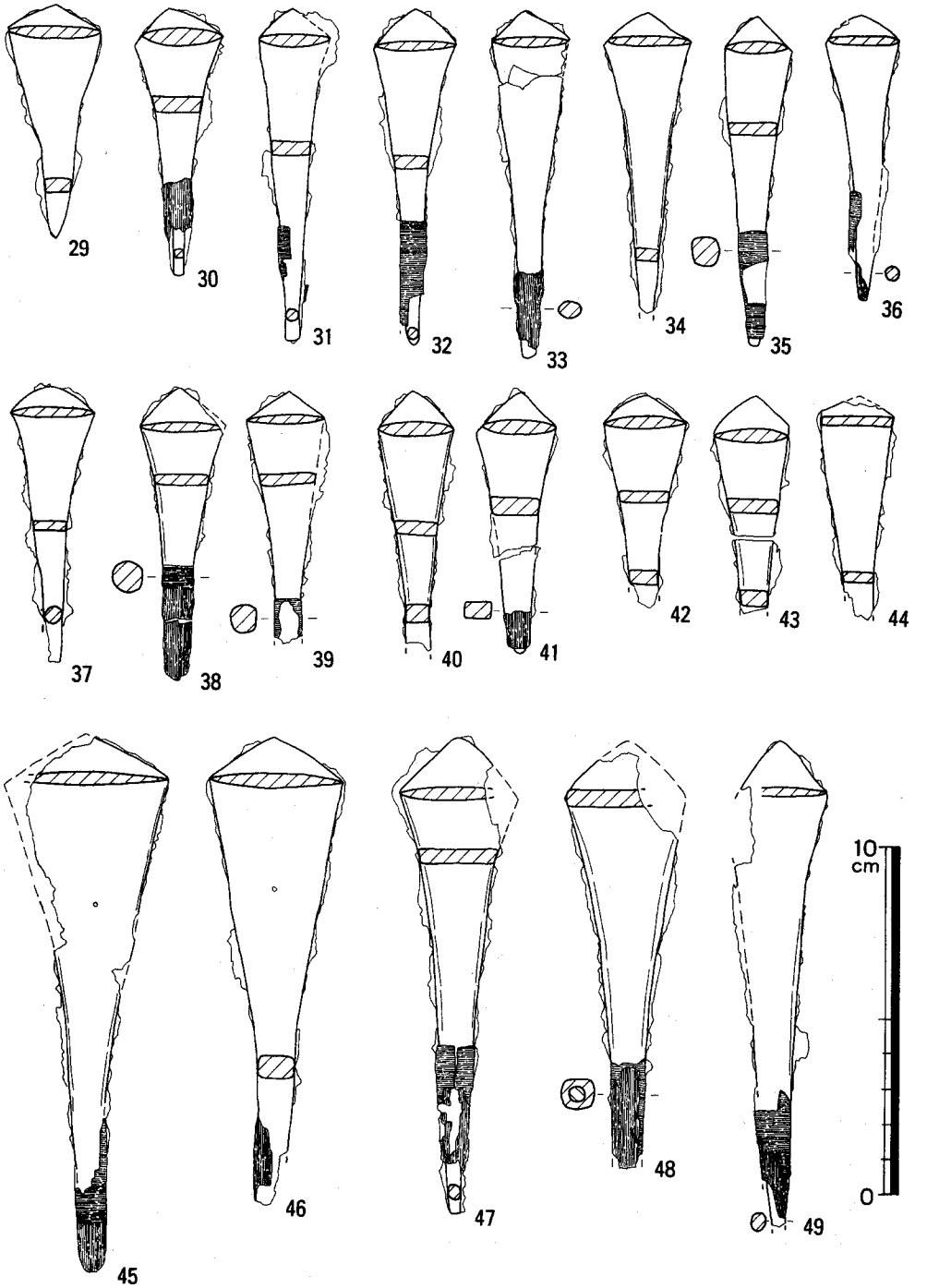


図71.　3号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)

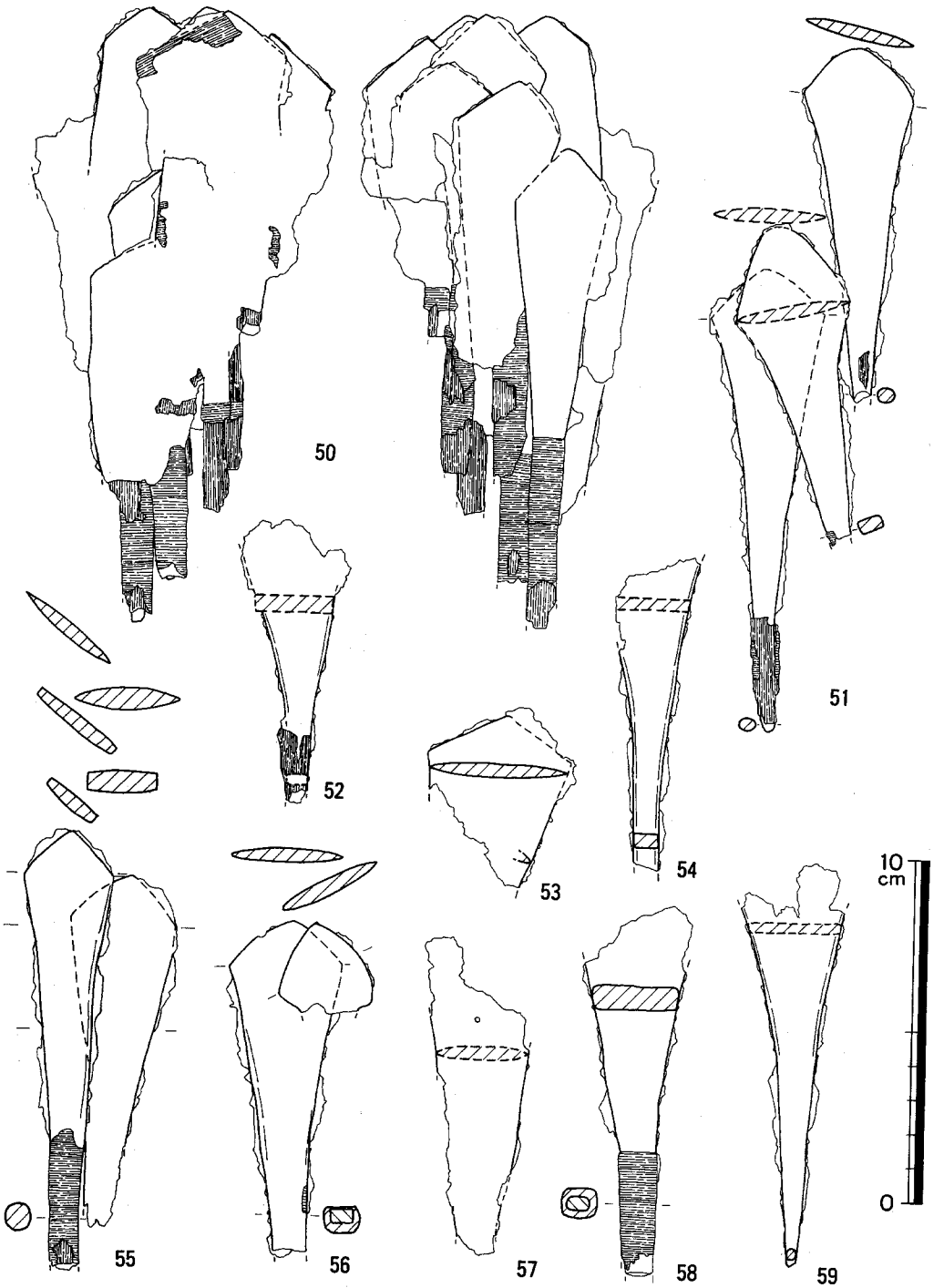


図72.　3号石室出土鉄器(4)　(縮尺1／2)

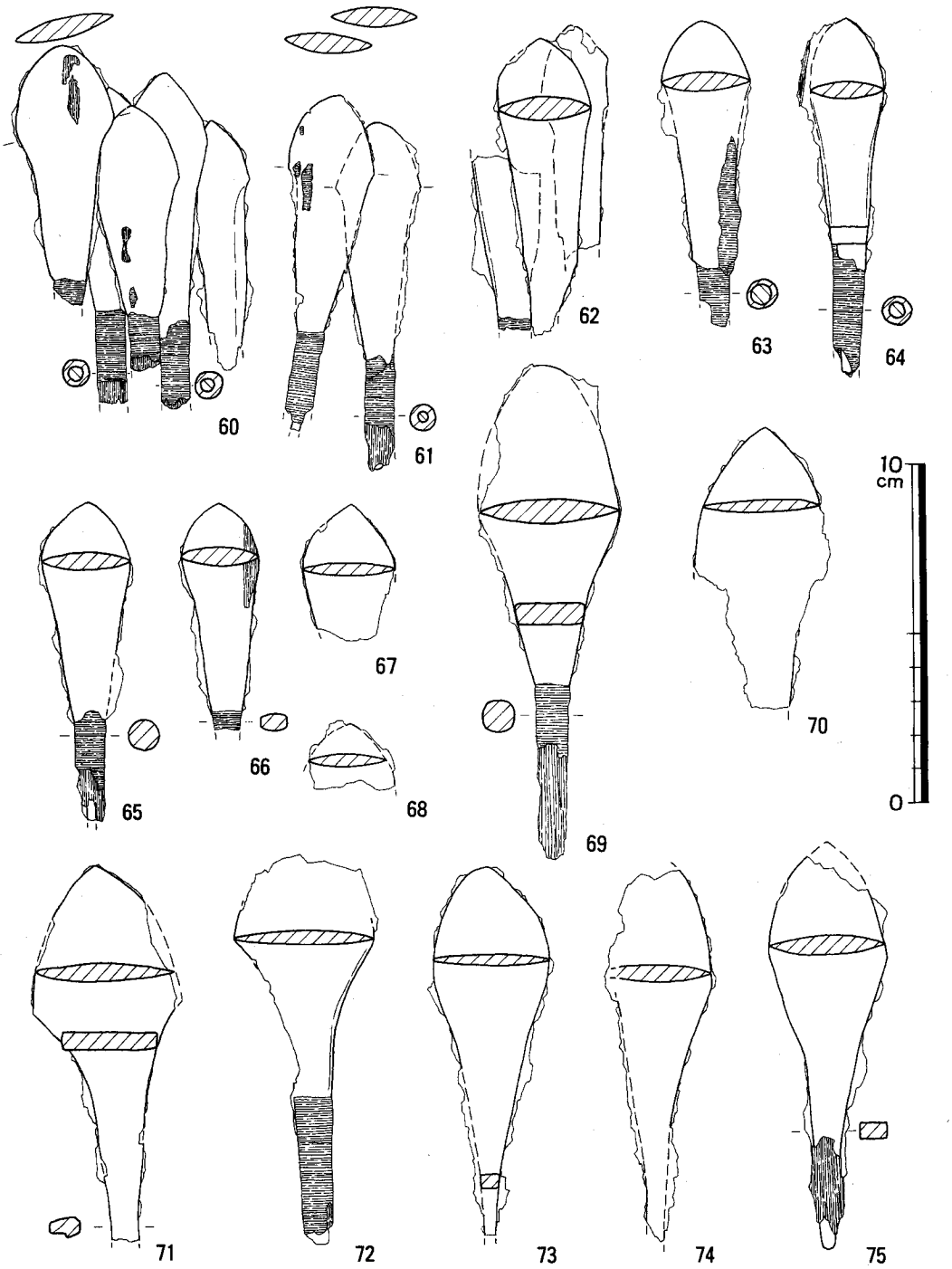


図73.　3号石室出土鉄器(5)　(縮尺1／2)

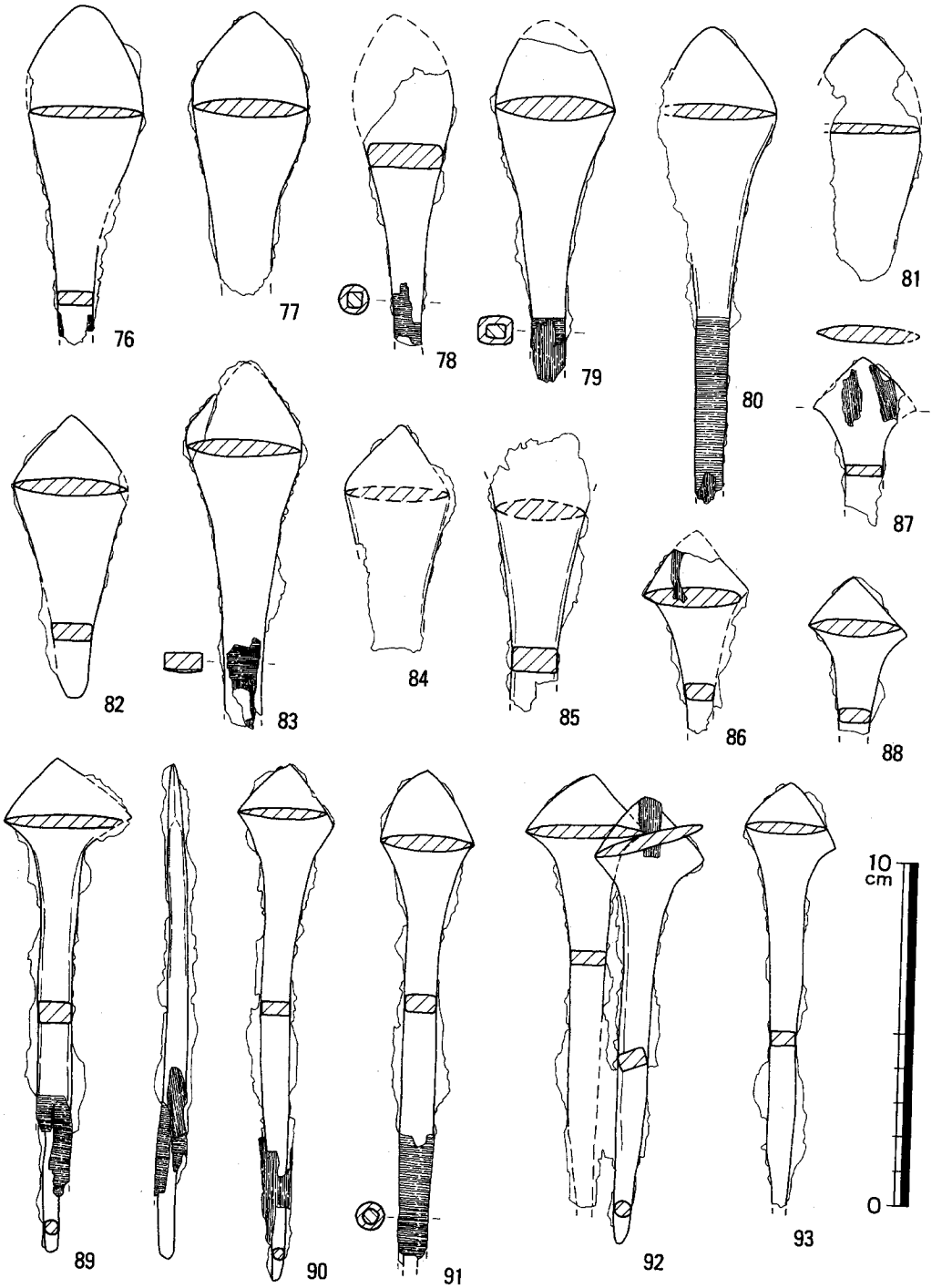


図74.　3号石室出土鉄器(6)　(縮尺1／2)

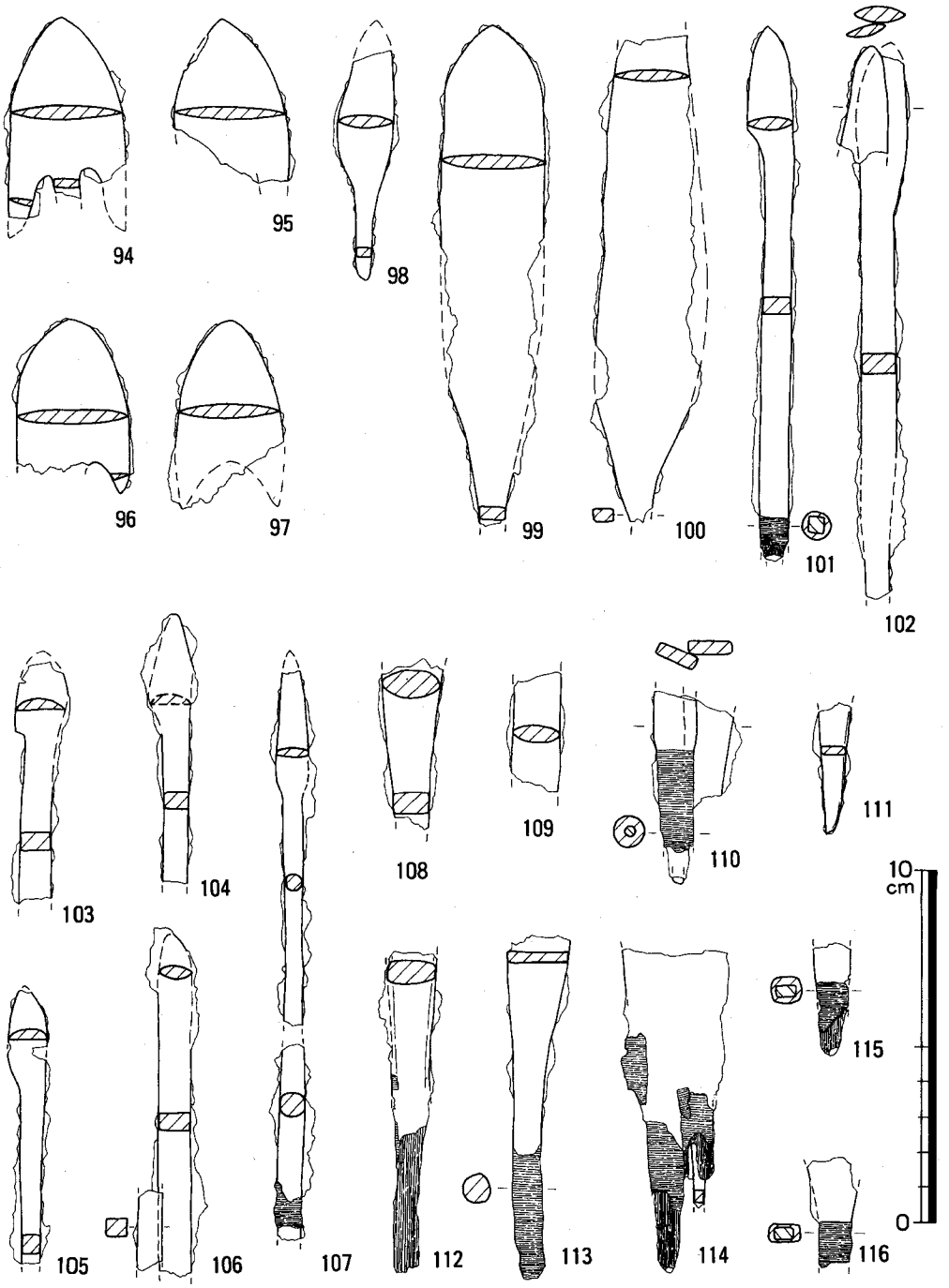


図75.　3号石室出土鉄器(7)　(縮尺1／2)

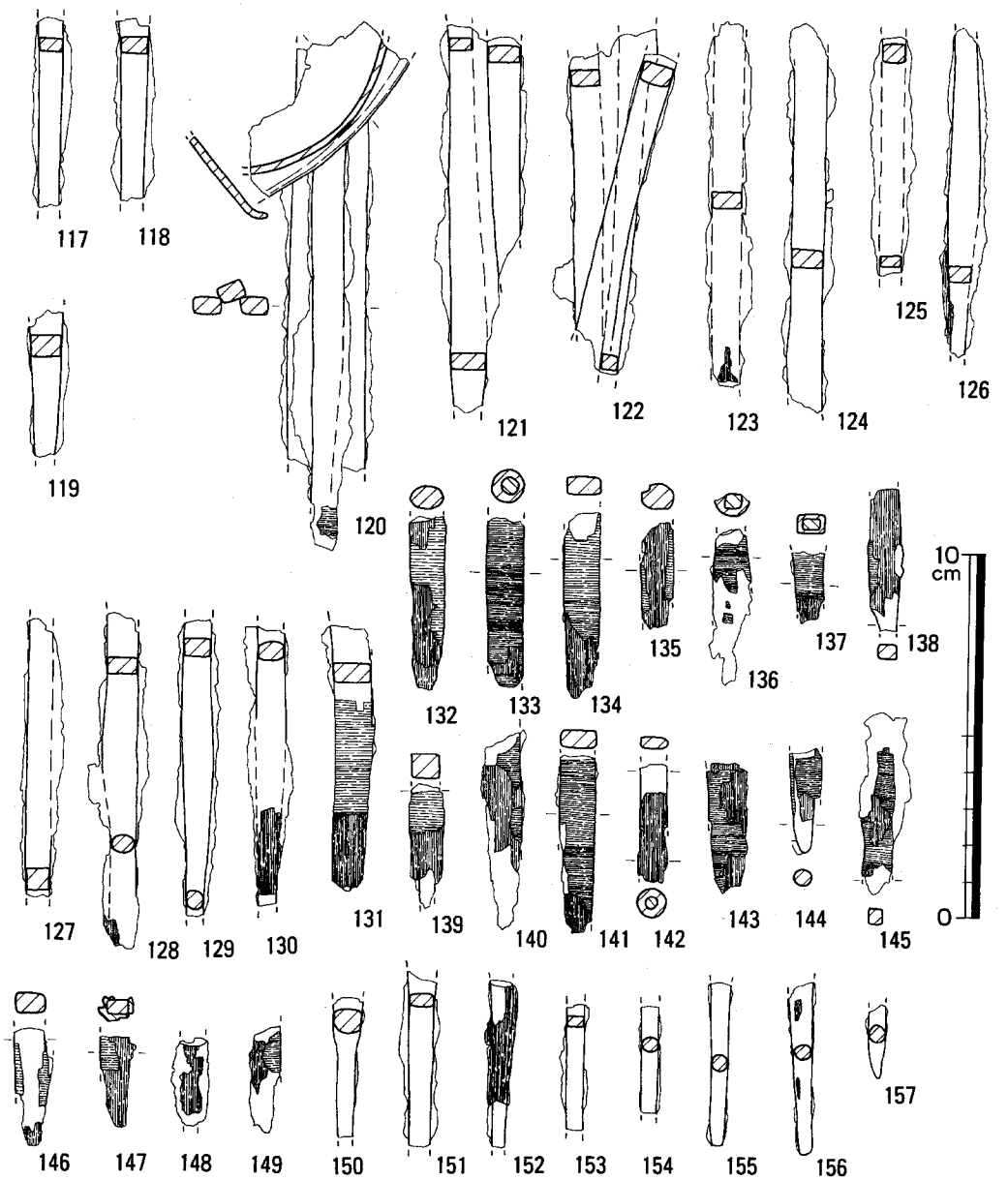


図76.　3号石室出土鉄器(8)　(縮尺1／2)

60～68も圭頭鏃に属すると思われるが，鋒付近が丸味を帯び，鏃身最大部より下はわずかに内湾するものである。鏃身最大部が尖るものと丸いものがある。64は全長10.5cm，鏃身部幅2.2cmである。

69～85は60～65と同じ形態のものであるが，鏃身部幅が3cmを越える大型品である。いずれも篦被はない。69は全長14.55cm，鏃身部幅2.2cmを測る。71・72は鏃身最大部が尖り，茎部へかけての内湾が特に強い。80は全長13.7cmを測る。82は茎部が短く，全長8.2cm，推定鏃身部幅

3.2cmを測る。

86～93も圭頭鏃に属するもので，鏃身最大部より茎部へ急激にすぼまっており，篦被はない。89は全長14.5cm，鏃身部幅3.55cmで，90は全長15.15cm，鏃身部幅2.8cmを測る。86・87・92には他の鏃の矢柄の木質が遺存している。

94は逆刺を有するもので，１本のみ出土している。現存長5.8cm，鏃身部幅3.3cmを測る。

95～97は銹のため観察が困難であるが，無茎鏃と考えられるもので，３本出土している。97は全長5.3cm，鏃身部幅3.1cmを測る。

98は柳葉形の鏃身部に短い茎部がつくもので，現存長6.1cm，刃幅1.6cmを測る。

99・100は大型の柳葉形鏃である。99は現存長14.25cm，鏃身部幅3.0cmを測る。100は下半部が幅広でやや歪んだ形をしている。現存長13.9cm，推定刃幅3.1cmを測る。

101～106は長頸鏃で，101～105は片関である。101は現存長15.3cm，鏃身部幅1.3cmを測る。101・103は片関が角をなし，104・105は曲線を描いている。106は現存長9.7cmで，鏃身部も茎部も同じ幅で続いている。

107も長頸鏃に含まれると考えられるが，鏃身部幅の狭い鋒の尖った形態をしていて，茎部は復原現存長16.1cm，鏃身部幅0.9cmを測る。樹皮巻が遺存している。

108～157は鏃の破片である。120は籠手の一部と考えられる鉄片が銹着している。

追葬時に副葬されたものは，101～106・120等の長頸鏃のみであり，他はほとんどすべて初葬時の副葬品である。初葬時の鏃に長頸鏃が含まれず，追葬時の鏃が長頸鏃のみで構成されていることは，ある程度の時期差を想定させるものと考えられる。

４号石室

剣（図70－１～３，図版59）

３本ある。１は全長58.6cm，刃長46.5cm，刃幅2.3～3.7cm，刃厚0.6～0.8cm，茎幅1.4～1.7cm，茎厚0.5cmを測る完形品である。柄の木質のみ多く遺存しているが，関部に幅0.9cmの鞘口と柄口の痕跡と思われる線が残っている。その間には刀装具がはまっていたのかもしれない。

２は現存長26.9cm，刃幅1.1～2.0cm，刃厚0.4cm，茎幅1.7cm，茎厚0.4cmを測る。片関と考えられ，茎端部を欠く。

３は全長33.0cm，刃長24.3cm，刃幅2.2～2.6cm，刃厚0.6cm，茎幅0.9～1.7cm，茎厚0.5cmを測る完形品である。裏面にも木質が一面に遺存しており，鞘口の痕跡と考えられる線が残る。

矛（図77－４，図版59）

全長30.1cm，刃長12.9cm，関部刃幅2.45cm，刃厚1.4cmを測る。刃部は断面菱形で，鋒は平面・側面ともやや曲がる。袋部は外径2.9×2.8cmで，２ケ所が抉れ，長さ10.2cmの合わせ目が見られる。袋内には木質が多く遺存し，はめられた目釘は両側が折り曲げられている。

鏃（図78－５～11，図版59）

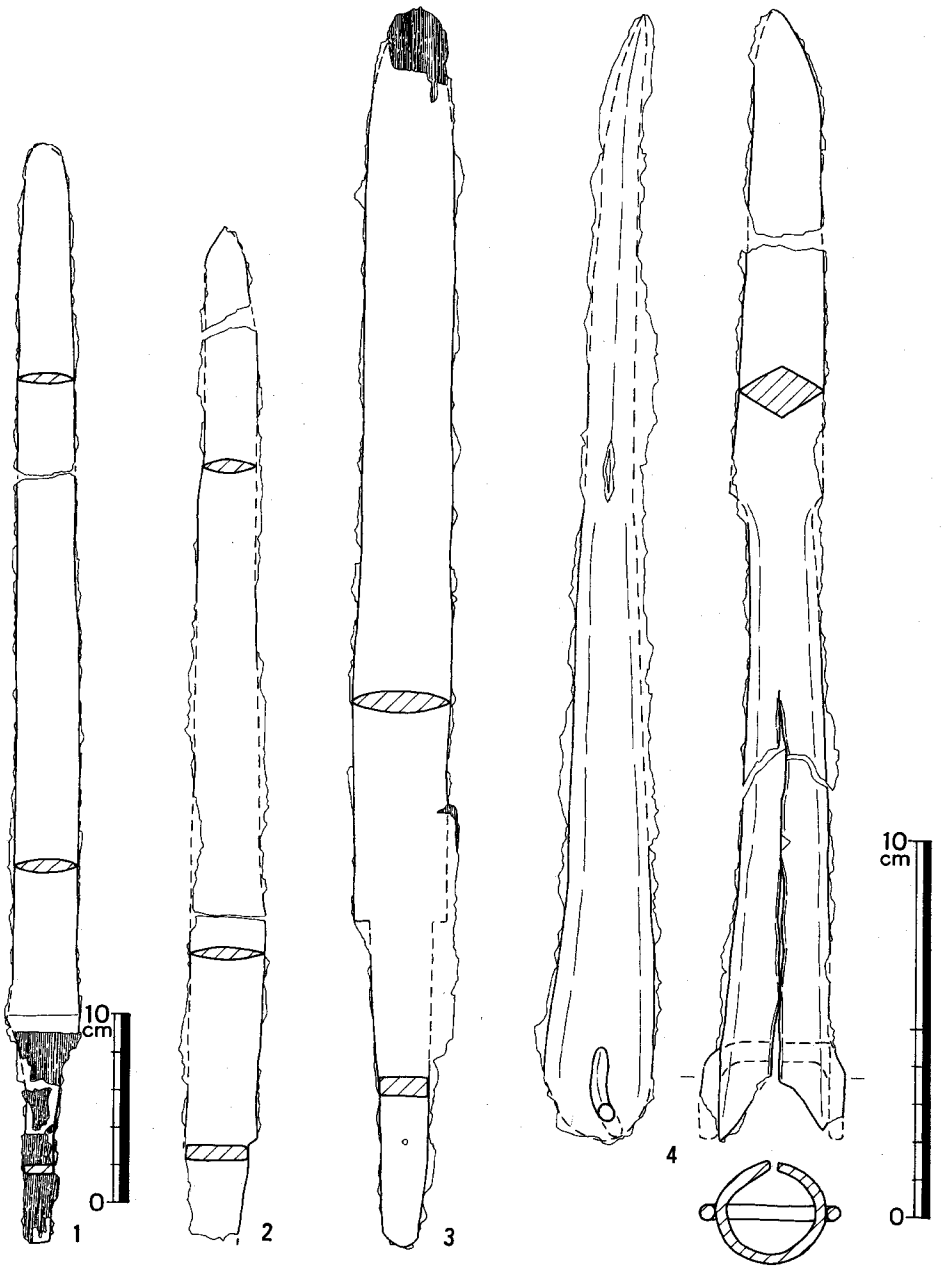


図77.　4号石室出土鉄器（1）（縮尺1／2）

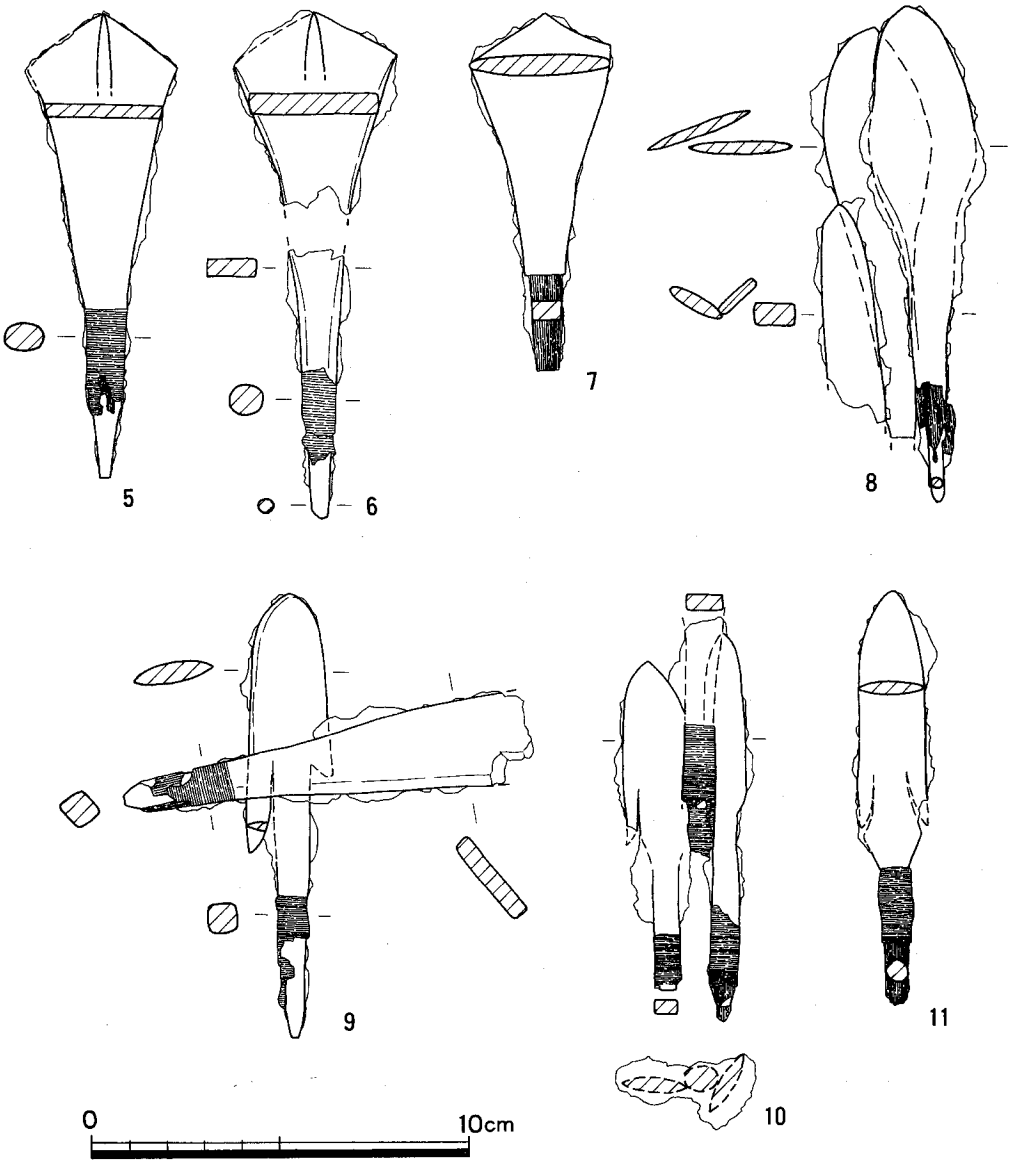


図78.　4号石室出土鉄器(2)　(縮尺1／2)

12本あり，3つの形態に分けられる。5～7はいわゆる圭頭鏃である。いずれも全長10～12cm，鏃身部幅4cm前後である。7は全長9.6cm，鏃身部幅3.8cmを測り，篦被は直角をなしている。

8も圭頭鏃に属するもので，全体に丸味を帯び，鏃身最大部より茎部に内湾しながらすぼむ。3本が銹着し，右のものは全長13.3cm，鏃身部幅2.8cmを測る。

9～11は逆刺を有するものである。9は全長11.75cm，鏃身部幅2.35cmである。銹着している

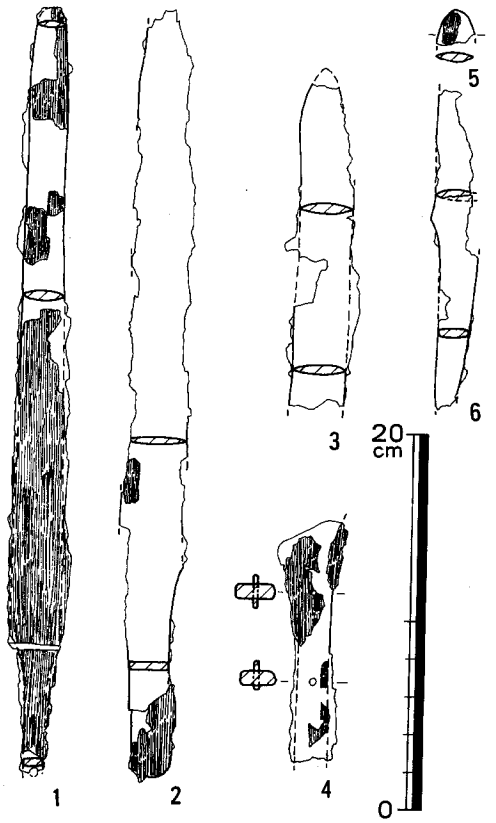


図79.　出土鉄器(石室不明)(1)　(縮尺1／4)

鏃は圭部鏃と思われる。11は柳葉形鏃に鏨で切れ込みを入れたような形をしている。

石室不明

剣（図79－1～6）

3本以上ある。1は現存長40.9cm，刃長34.0cm，刃幅1.5～2.6cm，刃厚0.5cm，茎幅1.0～1.2cm，茎厚0.4cmを測る。全体に木質で覆われ，鞘口と柄口の痕跡の線が残っている。目釘穴が1つあいている。

2は現存長40.5cmを測るが，銹のため刃線等は不明である。木質が遺存している。

3は刃部上半の破片である。現存長17.75cm，刃幅3.1cm，刃厚0.55cmを測る。

4は茎の部分である。現存長13.1cm，茎幅1.7cm，茎厚1.0cmで，目釘穴が2つあき，共に目釘が残っている。一端が広がり，両関の剣を構成すると思われる。

5は鋒片で現存長2.0cm，刃幅1.95cm，厚さ0.5cmを測る。木質が遺存している。

6は関部を中心とした破片で，現存長17.2cm，刃厚0.6cm，茎幅1.25～2.05cm，茎厚0.5cmを測る。

鏃（図80－7～22）

14本存在し，形態により3つに分けられる。7は柳葉形鏃で，現存長12.4cm，鏃身部幅1.8cmを測る。箆被はなく，矢柄の木質や樹皮巻が遺存する。

8は鏃身部が幅広で短い頸部がつくものである。現存長3.45cm，鏃身部幅2.9cmを測る。

9～17・19は長頸鏃である。全長11cm前後，刃幅1cm前後で，箆被はない。9は全長10.75cm，鏃身部幅0.9cmで，11は復原長10.8cm，鏃身部幅1.05cmを測る。これらは1号石室か2号石室から出た可能性が高い。

（古野徳久）

3．農工具

1号石室

斧（図81－102～104，図版50）

3点とも有肩の袋状鉄斧で，いずれもやや小形のものである。袋部の断面は長楕円形を呈し，袋の合わせ目はぴったりと閉じる。刃部はいわゆる「蛤刃」を呈する。しかし，細かくみると，袋部・肩部の形態と柄の着装・固定方式から二つのグループ(102・104と103)に分けられる。102・104は袋部の上下端が閉じる完全な袋部をつくっており，上向きもしくは水平に突出する肩をもつ。103は袋部の下端が開き，斜めにナデ落ちる肩を有している。袋内部の木質は3点いずれもほとんど残っていない。

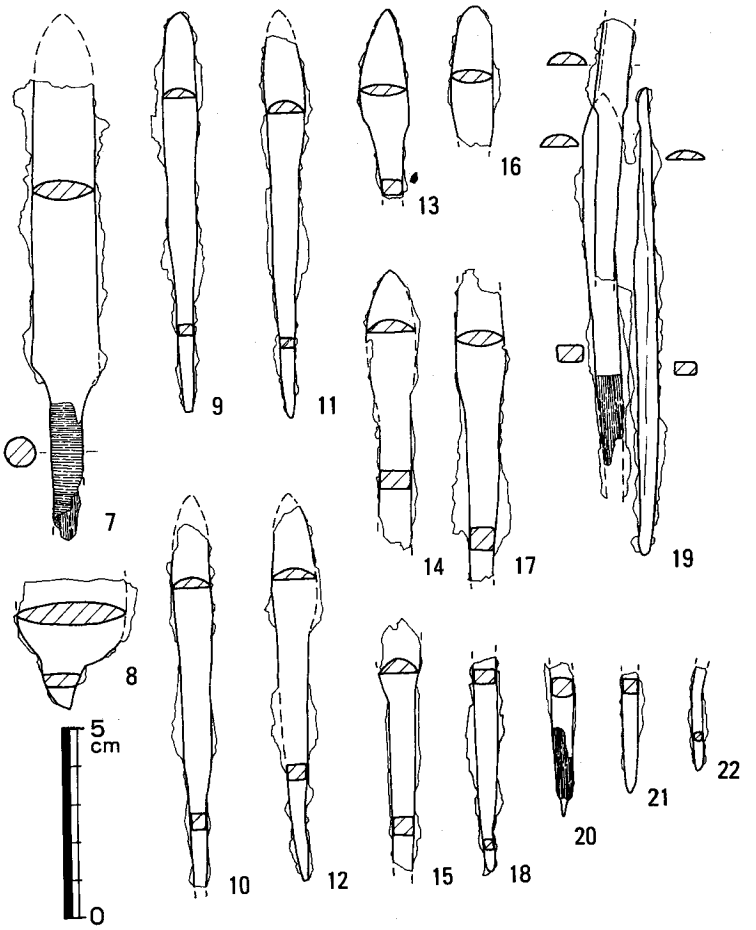


図80.　出土鉄器(石室不明)(2)　(縮尺1／2)

鉇（図82－105～108，図版51）

4点が確認され，その中には刃部と茎部とがつくりわけているものといないものとの二者がある。106・107・108は刃部の長さが3cm未満で，刃部は断面が三日月形を呈する。茎部は断面長方形を呈し，107には茎部の下方に反りのようなものがあるが，本来のものか錆による変形かは明らかでない。茎部に着装した木材の痕跡は4点いずれも看取されない。

鑿（図82－109～111，図版50）

3点出土しており，いずれも刃先を欠く。身部の上方で最大幅をはかり，刃先へ向かって狭くなる。109の柄部には木質が，111には鹿角の一部が遺存する。110に着装された鹿角柄の外面には面取りや研磨が施されているが，鹿角に特有な縦方向に走る雛状の自然面も一部残ってい

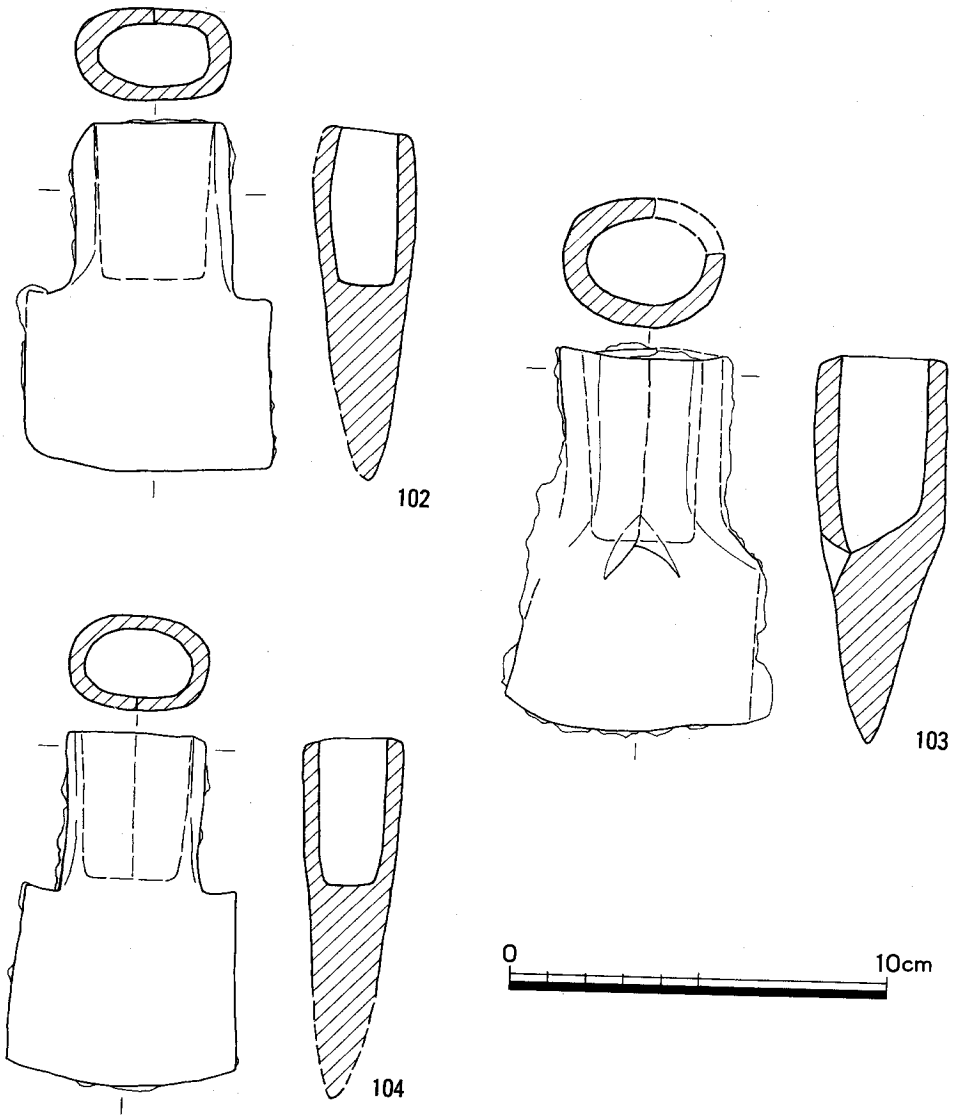


図81.　1号石室出土鉄器(6)　(縮尺1／2)

る。

刀子類　蕨手刀子13固体分と茎刀子21固体分が確認されている。

a，蕨手刀子（図83－112～122，図版51）

各固体の形態，作り出し法，法量などは細部にちがいがある。刃部は片刃で直背のものが多い。とくに112は刃部に関をつくっている。茎部は断面が長方形・円形・楕円形を呈する。把部の反りはそれぞれ緩急が異なる。把頭は斜めあるいは直角に近く立ち上がっているものから，117のように頭端を曲げて円鐶を作り，把部の背面へ完全に密着させたものまでがある。

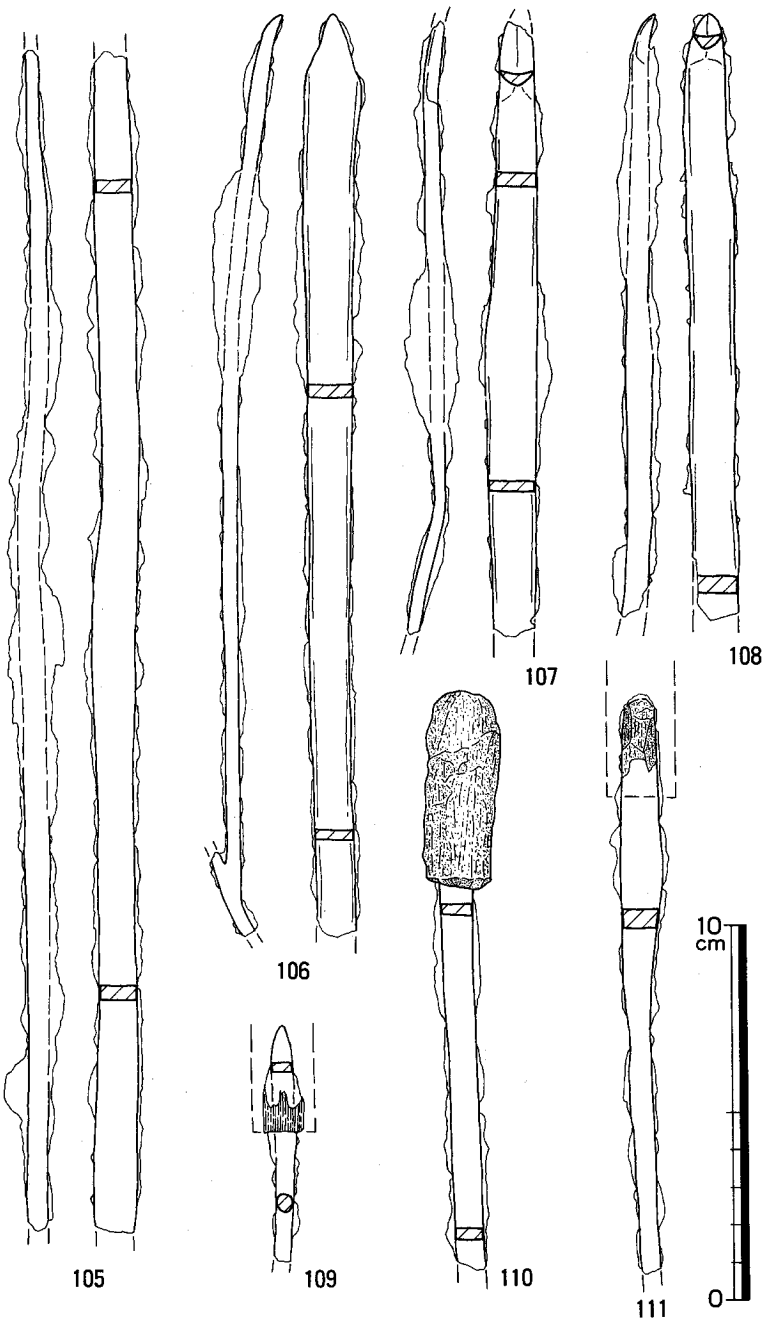


図82.　１号石室出土鉄器（７）（縮尺１／２）

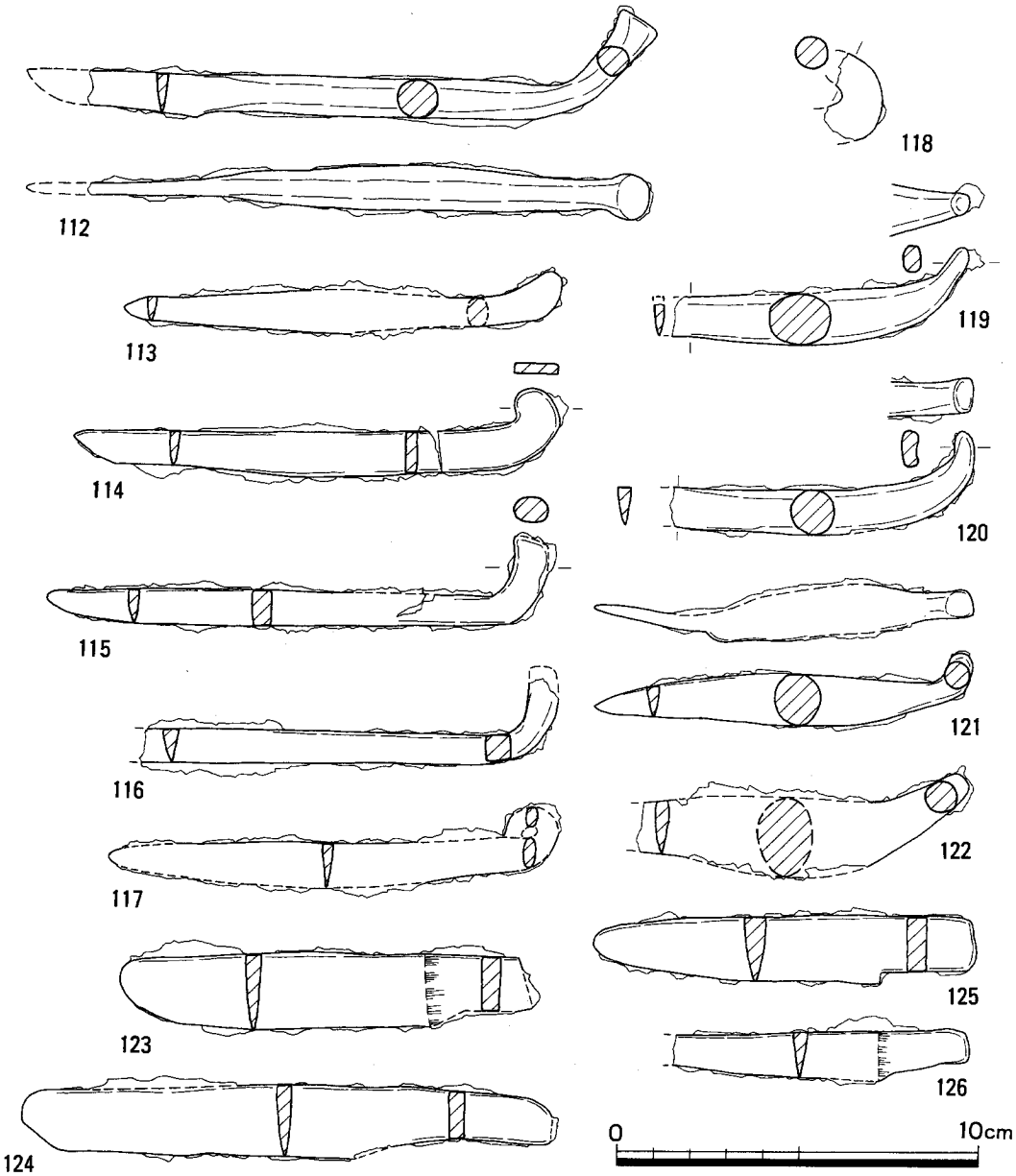


図83.　１号石室出土鉄器（８）（縮尺１／２）

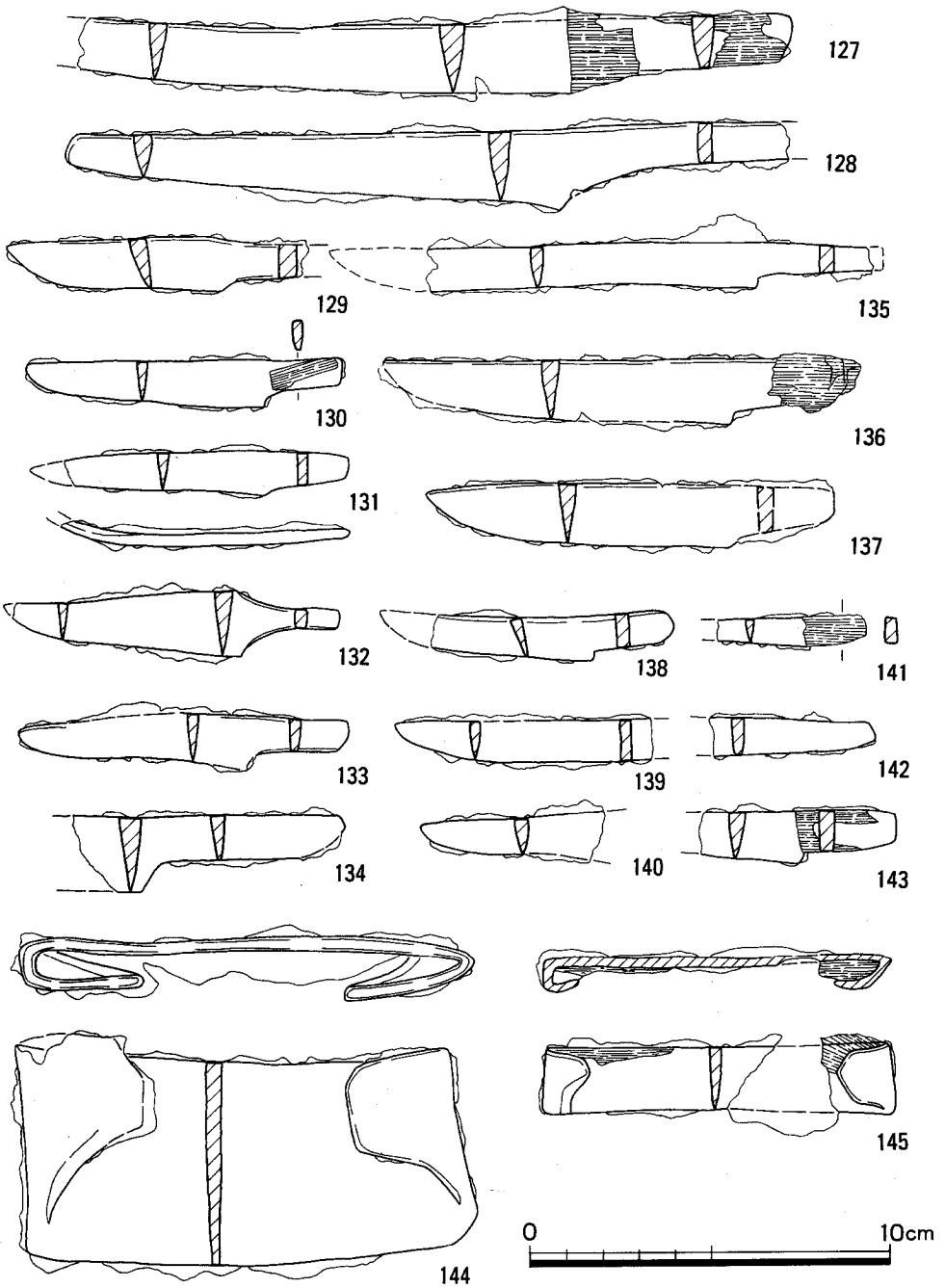


図84.　1号石室出土鉄器(9)　(縮尺1／2)

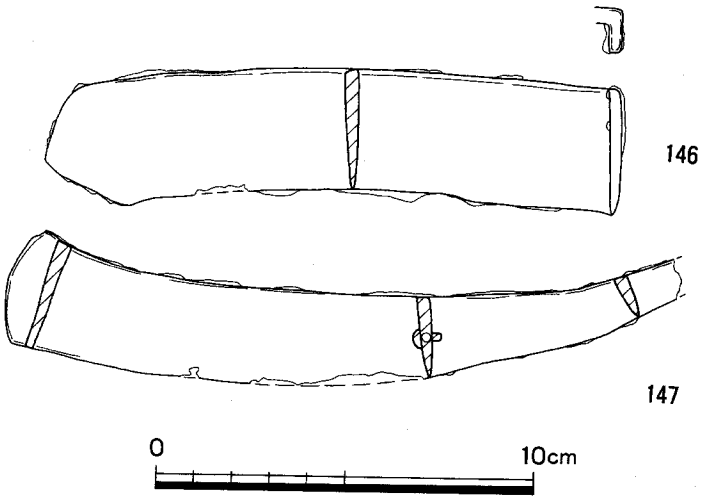


図85.　1号石室出土鉄器(10)　(縮尺1／2)

b，茎刀子（図83－123～126，図84－127～143，図版51）

蕨手刀子と同様に，形態，法量などが多様である。刃部の幅は関に向かってほぼ一定のものと広がるものとがある。関は刃部に対して斜行するものと直角のものとがあり，とくに132は刃部・背部ともに関をつくっている。柄の着装範囲は茎部に遺存する鹿角や木質からみて，ほとんどが刃部の関のところまでである。

クワ・スキ先（図84－144，図版51）

やや湾曲する長方形鉄板の両端を断面楔形に折り曲げて耳部（袋部）をつくっている。木製台部の木質痕は遺存しない。

鎌類

a，「手鎌」（図84－145，図版51）

横は細長い鉄板の両端を断面楔形に折り曲げて耳部をつくっている。耳部と身部の正面には横方向に走る木目を持つ木質が遺存している。

b，曲刃鎌（図85－146，図版51）

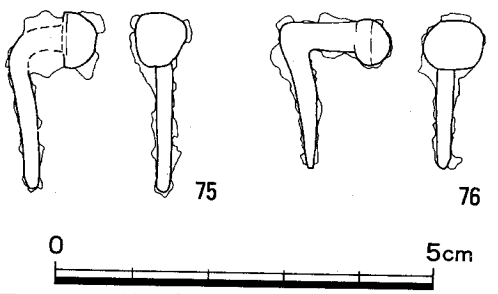


図86.　2号石室出土鉄器(4)　(縮尺1／1)

身はやや内反りし，刃先は長三角形を呈す。刃部と木柄着装部との境には関のようなわずかな段があり，木柄着装部は身に対して直角に折り返している。木柄着装部の木質痕は銹化のためはっきりとしない。

不明鉄器（図85－147）

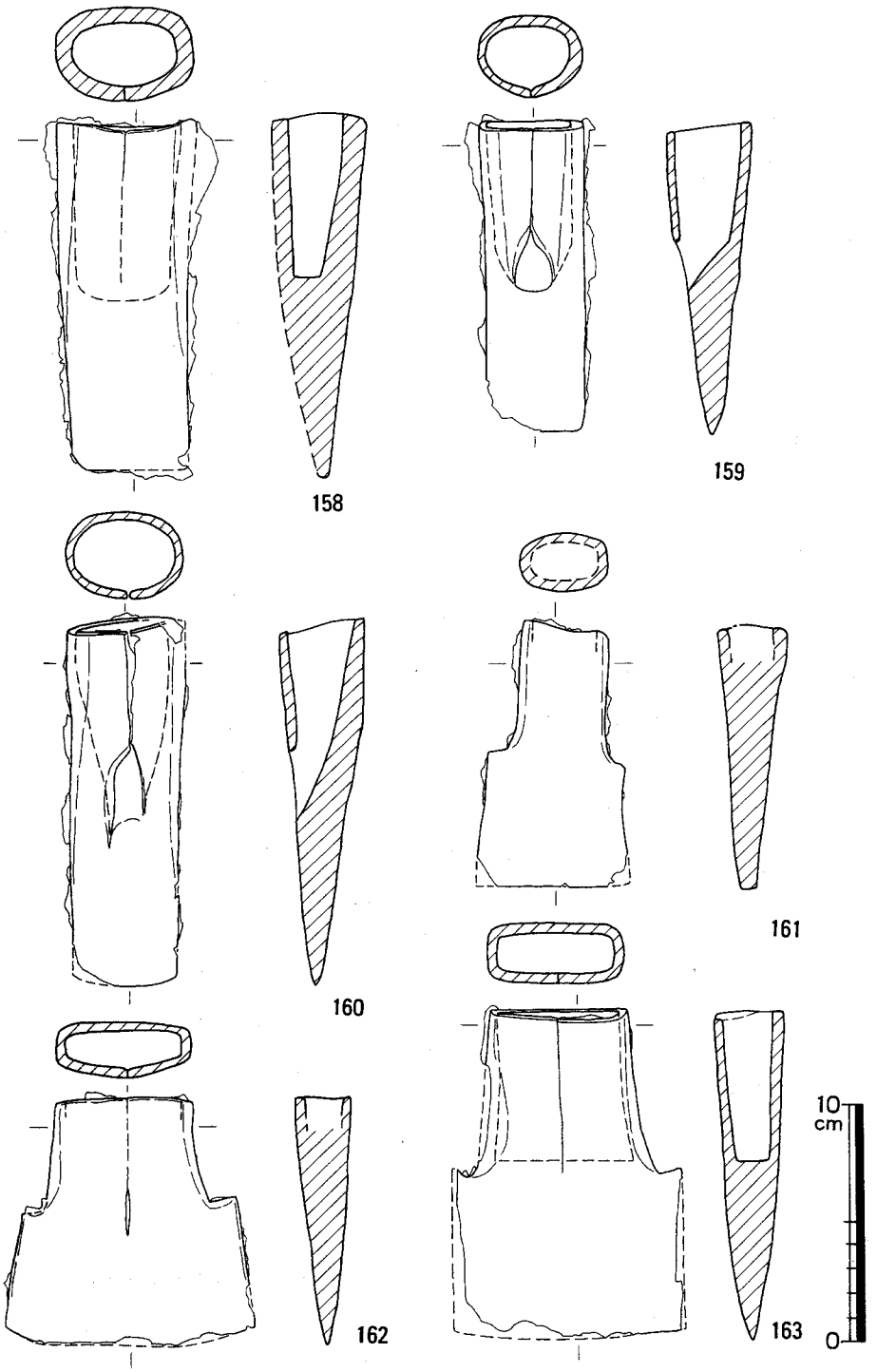


図87.　3号石室出土鉄器(9)　(縮尺1／3)

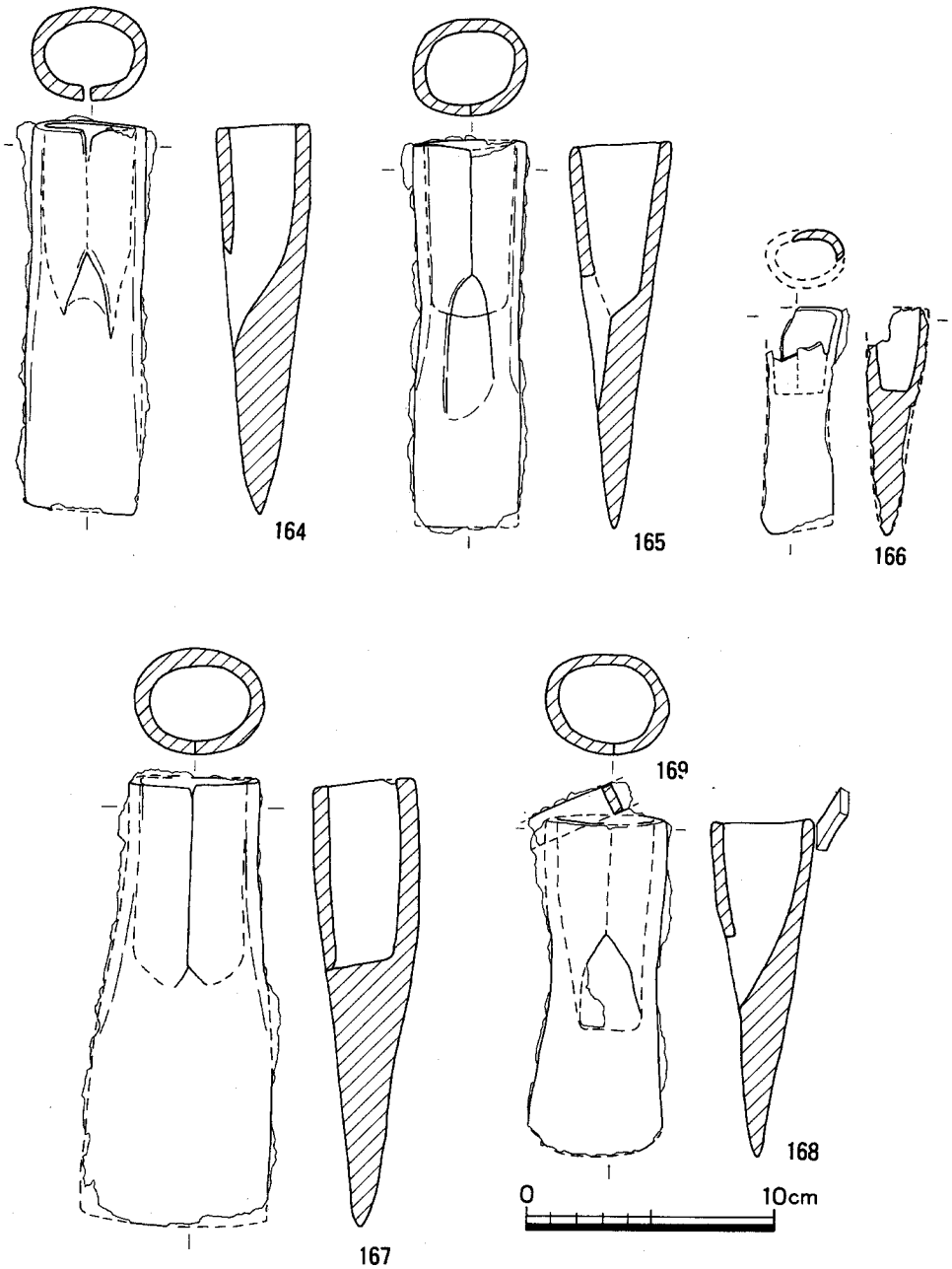


図88.　3号石室出土鉄器(10)　(縮尺1／3)

147は身が外に反り，身中位付近から片刃（下刃）をつける。先端部は扇形を呈し，また基部に向かって身の幅が細くなる。先端部と刃部に1ケ所目釘が遺存する。形態は鎌に類似しているが，刃を着ける部位と釘の遺存などから判断して，鎌とは異なるものであると考えられる。

2号石室

鋲状鉄器（図86－75・76，図版52）

2点出土しており，いずれも使用のさいほぼ直角に曲げられている。

3号石室

斧（図87－158～163，図88－164～168，図版56）

袋状鉄斧が11点確認され，166を除いていずれも1号石室の鉄斧よりも大型である。形態によって大きく2つのグループに分けられる。1つは無肩のもの（158・159・160・164・165・166・167・168）で，平面形が長方形を呈し，袋部は長楕円形もしくは楕円形である。袋部の合わせ目は閉じるものとぴったりと閉じないものとがある。全体の形は，袋部から刃先部に向かって幅が狭くなるもの（158），袋部から刃先へまっすぐに伸びるもの（159・160・164），刃先部に向かって緩く弧を描きながら広がるもの（167），袋部と刃部との境で幅がいったんすぼまってから，再び広がるもの（165・168）とにわけられる。168の袋部上端には鉇あるいは鑿の茎部破片と思われるものが銹着している（169）。166は無肩であるが，その法量は他に比べ非常に小さい。遺存状況が悪いため詳細は不明である。ただ刃先部が若干斜行する可能性がある。もう1つは有肩のもの（161・162・163）である。強く張り出す肩をもち，袋部の断面形は楕円形もしくは長方形を呈する。161は断面長楕円形の袋部で，斜め下方に強く張り出す肩をもち，緩やかに弧を描きながら直線刃につながる。162・163は断面長方形の袋部で，斜め上方へ突出する肩を有している。刃部は平面台形・長方形を呈し，刃先部はやや内湾する。

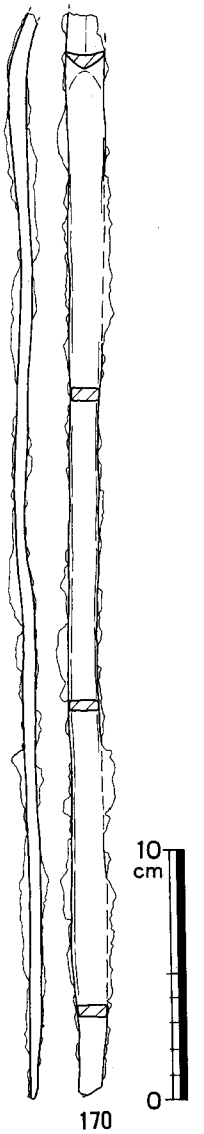


図89. 3号石室出土鉄器(11)（縮尺1／3）

鉇（図89－170，図90－171～180，図版57）

大型から小型のものまで11個体が確認される。刃部は反りをもつ断面三日月形のもので，裏に鎬を作り出しているのもある。ほとんどのものは幅狭で短いが，173のように刃部長3cmを超えるものもある。175は刃先が右に，176は左に傾く。また，171・173・174・177の茎部には木質が依存している。171・173・174の木質遺存状況からみると，身下方部は露出していた可能性もある。一方，177は茎部全体の両側面と裏面に木材をあてた後，樹皮（？）を横巻きして固定

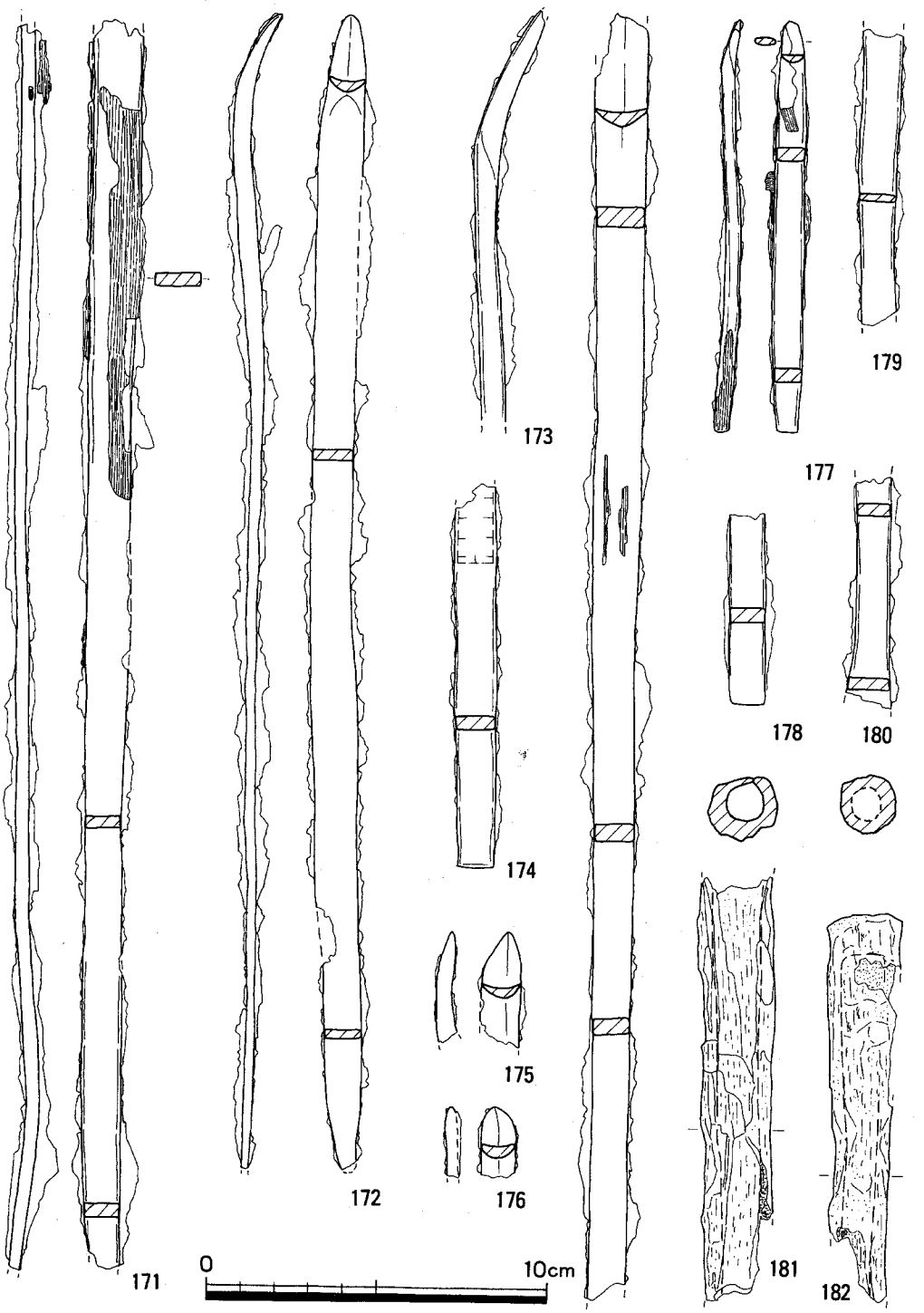


図90.　3号石室出土鉄器(12)　(縮尺1／2)

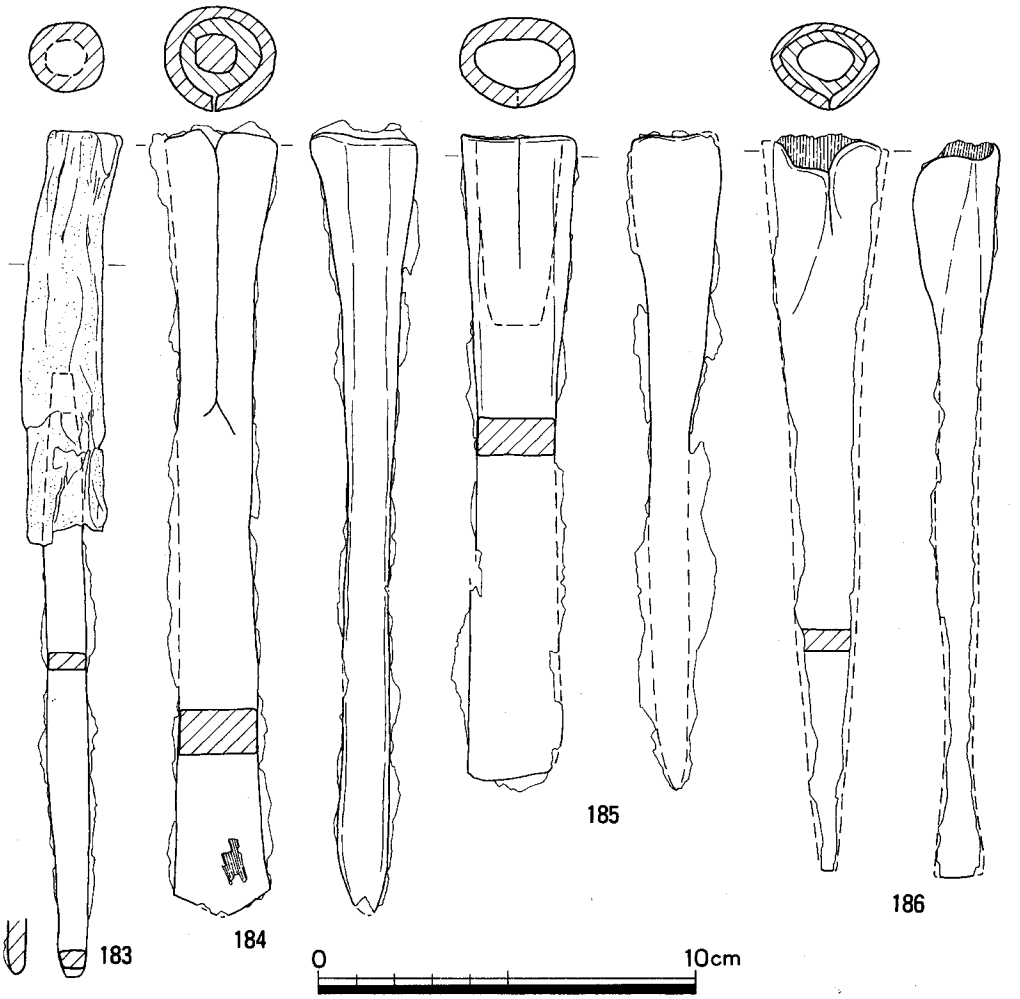


図91.　3号石室出土鉄器(13)　(縮尺1／2)

する方法がみられた。

鑿類　茎鑿3点と袋鑿3点が確認された

a，茎鑿（図90－181・182，図91－183，図版57）

181・182は鹿角柄の残欠で，ほとんど面取りの痕は看取されない。183は有茎式の鑿で，刃先へ向かって徐々に身幅が細くなり，茎部には完形に近い鹿角柄を装着している。鹿角柄の外面は部分的に縦方向の面取りまたは研磨を施しているが，大部分は自然面を残している。

b，袋鑿（図91－184～186，図版57）

平鑿で，袋部は断面円形・楕円形を呈する。184・185は幅広の厚い身に三角形もしくは長方形の刃部がつく。186は刃先へ向かって狭くなり，さらに刃先付近で若干開く形のものである。184の袋内部には鹿角が，186には木質の一部が遺存している。

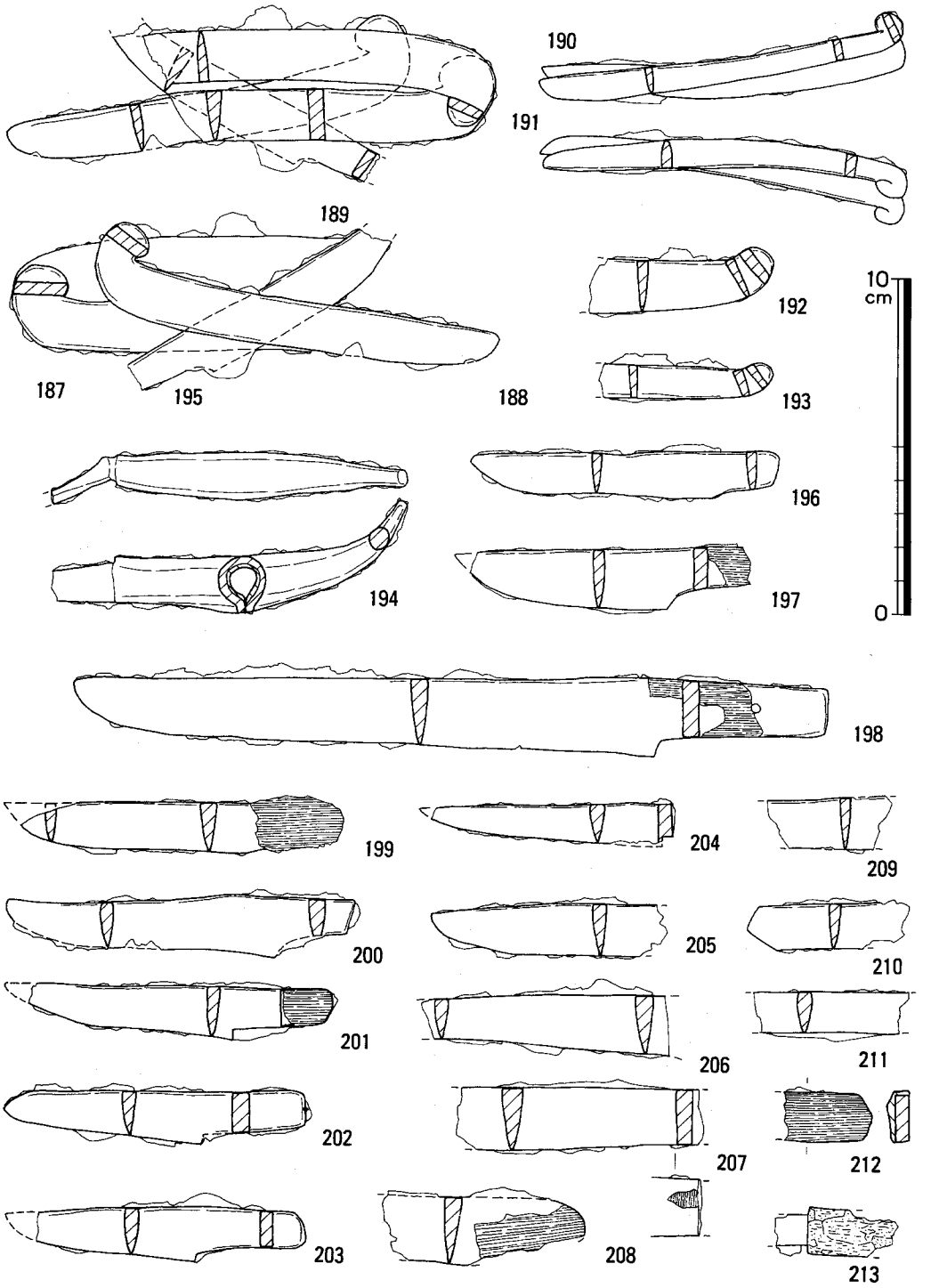


図92.　3号石室出土鉄器(14)　(縮尺1／2)

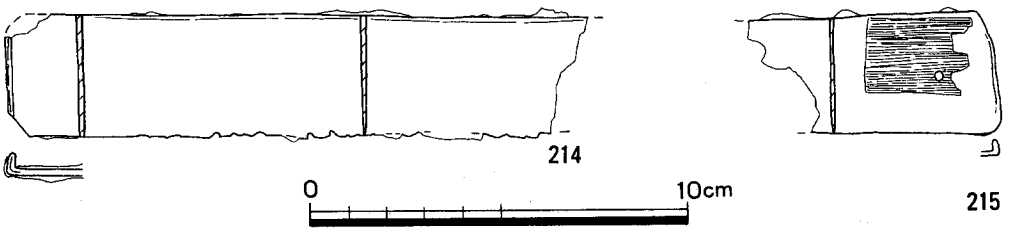


図93.　3号石室出土鉄器(15)　(縮尺1／2)

刀子類　蕨手刀子8個体と茎刀子19個体分が確認される。

a，蕨手刀子（図92－187～194，図版58）

把の断面が長方形・三角形のもの（187～193）と鉄板の両端を折り曲げて縫わせた断面円形のもの（194）と2種類がある。把頭の先端は斜め上方にのびるものから完全に巻き込むものまである。191の表面にはなにかを巻いているような痕跡と目の細かい織物（織布）の一部が遺存する。

b，茎刀子（図92－195～213，図版58）

小刀に近い大型のものと小型のものと2種類がある。直背で刃部には関をつくる。関は刃に対して直角もしくは斜行する。茎には木柄か鹿角柄が着装される。198には目釘穴があり，207には目の細かい織物（織布）が付着している。

鋸（図93－214・215，図版58）

2個体分が確認され，いずれも長方形の薄い鉄板である。214は片刃であるが，刃形は確認できない。木柄着装部は刃に対して直角に折り返すが，木質痕は遺存しない。215は基部の残欠である。木柄着装部は刃に対して直角に折り返す。木質と目釘穴から，基部に木柄をつけて目釘と端の折り返しで鋸身と木柄を固定させていると考えられる。

クワ・スキ先　クワ・スキ先4点とU字形スキ・クワ先1点が確認されている。

a，クワ・スキ先（図94－216～219，図版57）

身の形態は，長方形のもの（216・217・219）と正方形のもの（218）と2種類がある。いずれも長方形の鉄板の左右を折り曲げて耳部をつくり，その下方を身へ丁寧に鍛接させている。耳部は断面楔形を呈し，耳内部に着装した木製台部の木質痕は遺存しない。刃先はわずかに外湾する形を呈する。ところで，218・219は鉄身の正面・裏面・側面の一部にあまった鉄素材を鍛打・接合処理していることが確認できる。また，鉄身の正面・裏面・側面の一部に平織りの目の粗い織物（216・217）と目の細かい織物（219）が付着している。219には不明鉄器の破片（220）が銹着している。

b，U字形スキ・クワ先（図95－221，図版58）

刃部が大きく曲線を描いてU字形を呈しており，右耳部の先端は丸くなっている。刃先部の幅は耳部の幅とほぼ等しい。

鎌（図95－222～224，図版58）

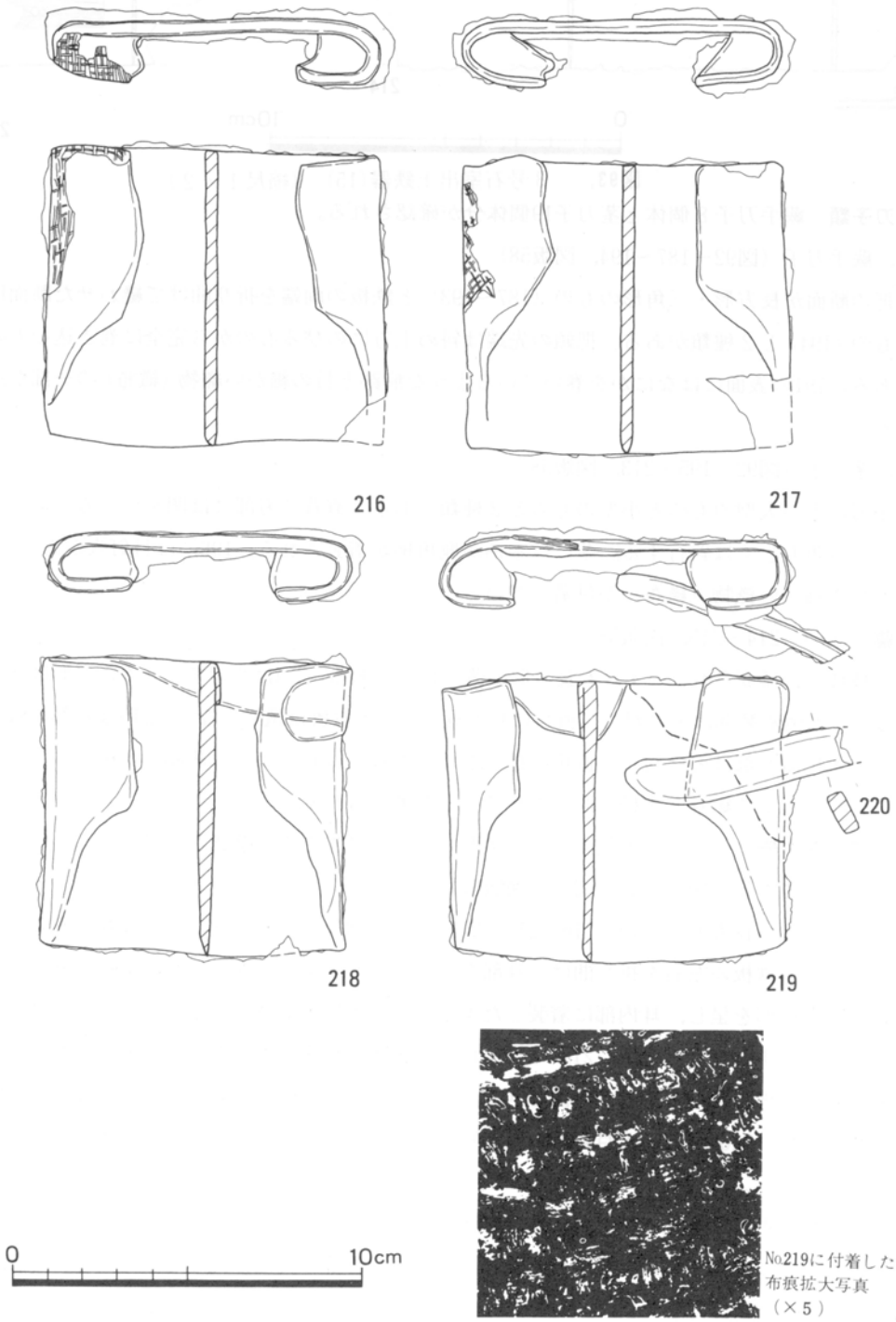


図94.　３号石室出土鉄器(16)　（縮尺１／２）

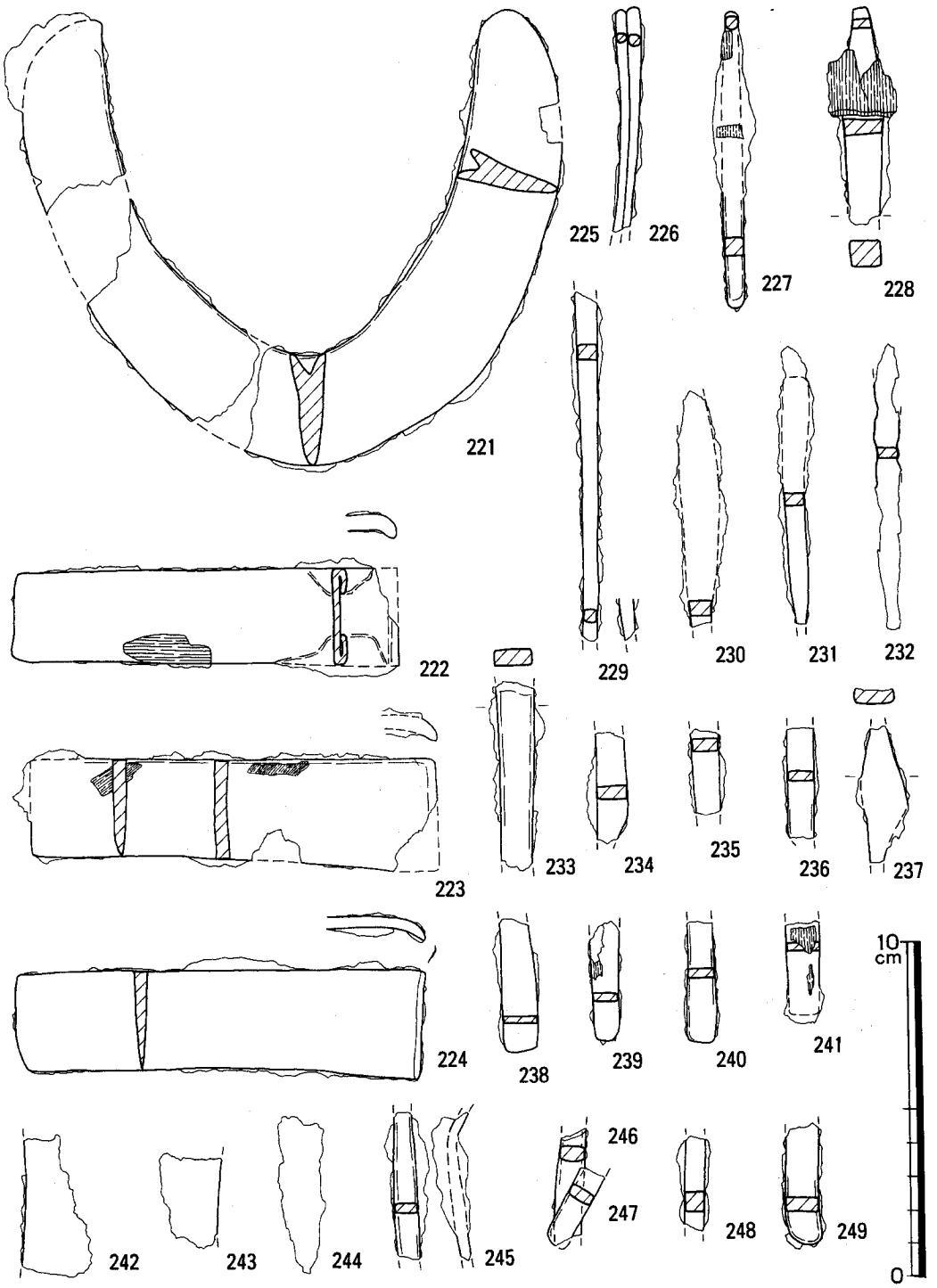


図95.　3号石室出土鉄器(17)　(縮尺1／2)

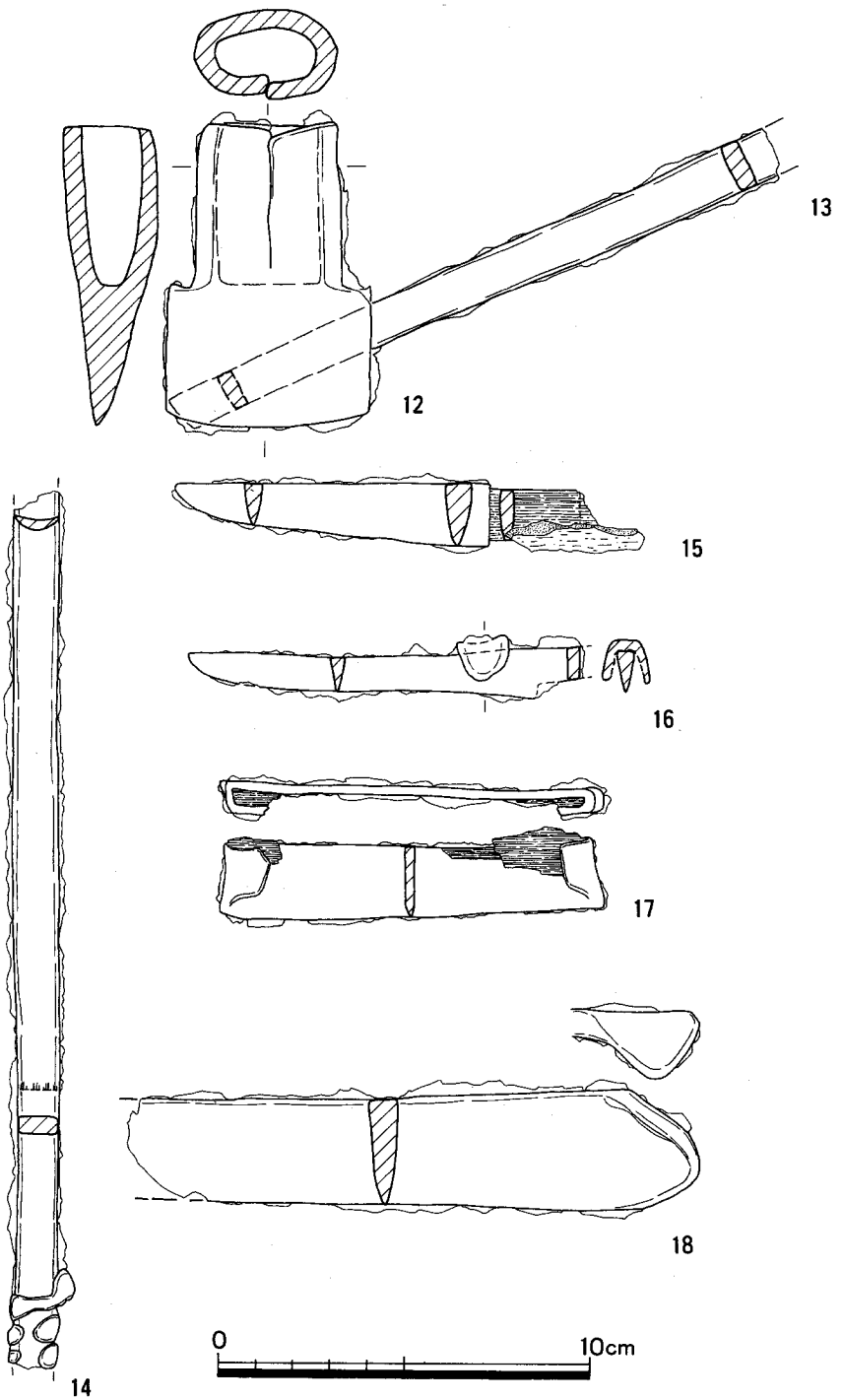


図96.　4号石室出土鉄器(3)　(縮尺1／2)

直刃鎌が3点出土し，いずれも小型である。長方形の鉄板の一端をわずかに折り返して木柄着装部をつくっている。刃部はわずかに内湾している（222・223）。222は基部の上下方にあまった鉄素材を鍛打・接合させたためか，刃部との境に段がみられる。222の刃先部には木質が遺存しており，223・224にはそれぞれ目の細かい織物と目の粗い織物（織布）が付着している。

針形鉄器（図95－225・226，図版58）

銹着している2点はいずれも断面が円形で，針先を欠く。

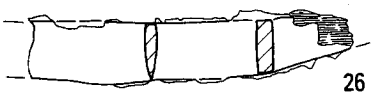
不明鉄器（図88－169，図94－220，図95－227～249）

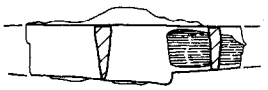
24個体分が確認されている。そのうち，227・228・229は現存形態と断面形，鹿角柄の存在からみて鑿の可能性がある。

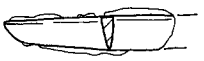
4号石室

斧（図96－12，図版59）

有肩の袋状鉄斧で，袋部断面は長楕円形を呈する。袋部の合わせ目は閉じる。刃部はいわゆる「蛤刃」を呈する。肩はやや上方に突出する。袋部内に木質部はほとんど残っていない。鉇あるいは鑿の茎部破片（13）が錆着している。







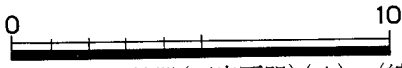


図98. 出土鉄器（石室不明）（4）（縮尺1／2）

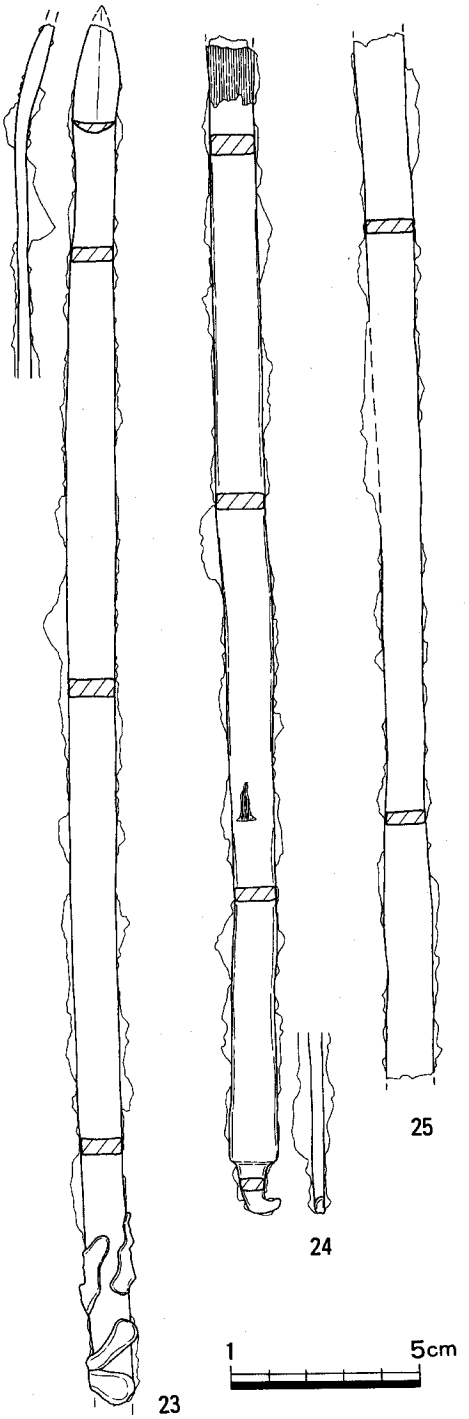


図97. 出土鉄器（石室不明）（3）（縮尺1／2）

鉇（図96－14，図版59）

刃部と茎部の両端が欠けている。茎部の裏面にはわずかながら木質が残っており，その下方には革製（？）の紐のようなもので巻いた痕跡がある。

茎刀子（図96－15・16，図版59）

2は直背で，背部と刃部に直角の関をつくる。茎部には鹿角柄の一部が依存している。16は細身で，背部の一部に鉄片をかぶせている。

鎌類　「手鎌」1点と直刃鎌1点が出土した。

a，「手鎌」（図96－17，図版59）

細長い長方形鉄板の左右を折り返して耳部をつくり，耳部の断面は長方形を呈する。耳内部と身の表面には横方向に走る木目をもつ木質が遺存している。

b，直刃鎌（図96－18，図版59）

刃先部へ向かって身の幅がわずかに狭くなる形で，木柄着装部は上方隅だけを折り返し，刃に対して鈍角になっている。木質痕は遺存していない。

不明鉄器（図96－13，図版59）

13は鉄斧（12）に銹着したもので，長さと断面の形・厚さなどからみて，鉇あるいは鑿の茎部破片とみられる。

石室不明

鉇（図97－23～25）

23は刃部と茎部の両端部が欠けており，茎部下端には革紐（？）で巻いたような痕跡が遺存している。24の茎部には木材着装の痕跡が残っており，その下端には鉤状のフックがつく。25は刃部と茎部の両端が欠けている。

茎刀子（図98－26～28）

3点いずれも破片である。26・27は直背・片関で，茎部には木質が一部遺存している。

（郭・鐘喆・五百路裕之・高久健二）

4．装身具

1）玉類　1号石室

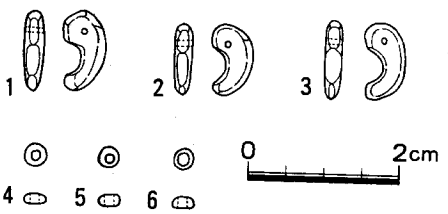


図99.　1号石室玉群A　（縮尺1／1）

1号石室から出土した装身具には以下のものがある。

硬玉製勾玉	2
滑石製勾玉	23
碧玉製管玉	47
滑石製小玉	多数

櫛　　1

［出土状況］ 滑石製小玉以外の各玉群の出土位置は２ケ所に大別される。石室中央やや南壁寄りに位置する方格規矩鏡に伴う一群と，その東側約30cm付近に存在する一群である。各々を玉群Ａ，玉群Ｂとする。

玉群Ａは滑石製勾玉23点及び滑石製小玉４点から成る。勾玉は鏡の南西に接する約７×８cmの範囲に散在し，特に鏡縁に接する約５×５cmの範囲に集中している。小玉は勾玉の間に点在し，１点は鏡の下から出土している。

玉群Ｂは硬玉製勾玉２点及び碧玉製管玉47点から成る。勾玉は頭部をそれぞれ北と南東の方向に向け，約3.5cm離れて存在する。管玉は勾玉の北東～南東方向にかけて散在し，その範囲は22×19cm程であるが，特に勾玉周囲とその東側に集中している。以上のように両群とも配列に規則性は見出せない。

なお滑石製小玉群については玉群Ａに含まれる４点を除いて，出土位置，出土状況等は不明であるが，石室内に散在していたものと思われる。また，櫛は南壁付近より出土している。

［内容］ １号石室から出土した装身具中現存するのは，玉群Ａにおける勾玉５点（破片２点を含む），小玉３点，櫛１点のみである。以下，これらを中心に内容を記してゆく。

玉群Ａ　滑石製勾玉（図99－１～３，図版60－５）

現存する５点中，完形３点の法量等については一覧表としてまとめている(表16)。これらは法量的に近い値を示し，形態的にも扁平で頭部をやや大きめに作る等，共通した特徴を有している。また色調には差異が見られるものの，いずれも表面は丁寧に磨かれている。

１は半透明濃緑色を呈し，頂部をやや尖頭気味に作るものである。２は淡緑色を呈する。３は淡緑灰色を呈し，表面の一部が剝離している。また他の２点に比べやや軟質気味のものである。破片２点はともに尾部片であり，灰白色を呈する。玉群Ａを構成する他の勾玉も基本的にこれらと同大，同形態を成すものであるが，さらにやや小形のものも含まれるようである。

滑石製小玉（図99－４～６，図版60－５）

小玉はいずれも径0.3cm，厚さ0.12～0.15cm，穿孔径0.13cm程を計るものである。側面観によれば，中膨らみを呈するもの（４・５）と台形状を呈するもの（６）とに分けられる。

玉群Ｂ　硬玉製勾玉

ともに長さ２cm強の定形勾玉であり，１点は頭部に２条の刻線を有する丁字頭勾玉である。

碧玉製管玉

大小のものがある。概して長さ1.5cm，径0.5cm前後のものが最も多く，それ以下のもの，あるいは欠損しているもの等も存在するようである。

３号石室

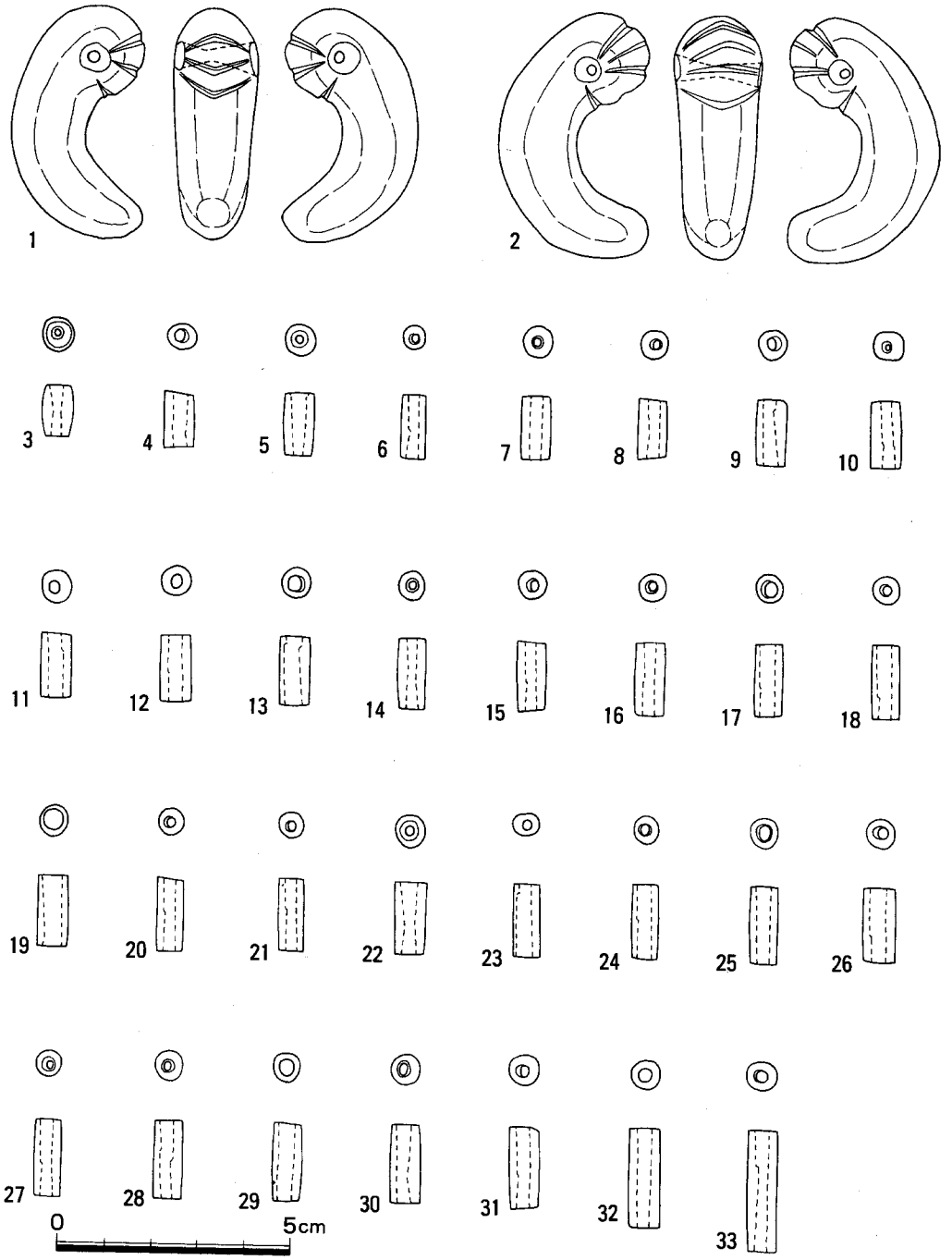


図100. 3号石室玉群A （縮尺2／3）

3号石室から出土した装身具には以下のものがある。

硬玉製勾玉	7
碧玉製管玉	125
ガラス製管玉	1
硬玉製棗玉	1
小玉	1
金環	2
櫛	1

〔出土状況〕

装身具は石室内において5つの群を構成している。各々を玉群A～玉群Eと呼称し，群ごとに状況を記してゆく。最初に各群の構成内容を示しておこう。

玉群A	硬玉製勾玉	2
	碧玉製管玉	30
	硬玉製棗玉	1
玉群B	硬玉製勾玉	1
	碧玉製管玉	13
玉群C	硬玉製勾玉	1
	碧玉製管玉	12
玉群D	硬玉製勾玉	1
	碧玉製管玉	54
	ガラス製管玉	1
玉群E	硬玉製勾玉	2
	碧玉製管玉	16
	小玉	1

玉群Aは，石室北西隅に置かれた盤の南東隅から南東方向約25cmの所に存在する一群である。2個の勾玉は，ともに頭部を北西に向け約3.5cm離れて平行に並ぶ。管玉は勾玉間を中心に約14×14cmの範囲に散在し，一部南東方向へ散逸している。また南西方向約70cmの地点，短甲の下部からも管玉が一点出土している。位置的には離れているが，法量その他の特徴から玉群Aに含まれるものとしておきたい。

次に東壁に沿って，北からそれぞれ鏡を伴う3つの玉群があり，これらを玉群B～玉群Dとする。

玉群Bは北壁より約50cm，東壁より約18cm内側の地点に重ねて置かれた「君宜高官銘」内行花文鏡と方格規矩鏡の東縁に接して位置する。最も北側に頭部を南西に向けた勾玉があり，そ

こから南西方向に一部鏡縁に乗る形で管玉が連なっている。

玉群Cは，玉群Bの最も南端の管玉から南約10cmのやや石室中央寄りに位置する方格規矩四神鏡の西縁に接して存在する。最も南側に頭部を北に向けた勾玉があり，そこから北側に向って一部鏡縁の下に入る形で管玉が連なっている。

玉群Dは，玉群Cの勾玉からさらに約20cm南側の東壁に接して位置する捩文鏡と方格規矩鏡に伴う一群である。これらは鏡の北縁に接し，勾玉を中心とする約12×14cmの範囲に密集する他，その周囲，また鏡の下部にも点在している。

最後に玉群Eは，石室の南西隅に重ねて置かれた内行七花文鏡と内行五花文鏡に伴う一群である。これらは弱干乱れてはいるが，北西－南東方向に2個の勾玉を含む管玉が連なるものであり，さらに内行七花文鏡の下部からも2個の管玉が出土している。またそこから北東方向に数点の歯が遺存しており，最も北側のものの左右に約13cm離れて2個の金環が位置している。

櫛は南壁より北側約65cmの東壁沿いで検出されており，各玉群から独立した出土位置を示している。

[内容]

先述のように3号石室からは豊富な装身具類が出土しており，玉群Eを除きその大部分が現存している。以下玉群ごとにその内容を記してゆくが，法量その他については一括して表示している（表17・18)。

玉群A　硬玉製勾玉（図100－1・2，図版60－1）

ともに大形の丁字頭勾玉である。表面は稜線を残さず良く研磨されており，光沢を放っている。1は半透明濃緑色を呈し，全体的に白色斑文を含むものである。穿孔は両側から成されており入口径は各々0.65cm，0.6cm，中心径は0.2cmを計る。頭部には孔に向う3条の刻線が施されており，最も下方のものは頭部の括れを形成している。頭部に比べ尾部はやや細味に作られている。2は老司古墳出土勾玉中最大のものである。半透明濃緑色を呈し，部分的に白色斑文が見られる。穿孔は両側から成されており，入口径は各々0.55cm，0.5cm，中心径は0.25cmを計る。頭部には孔に向う4条の刻線が施されているが，頂部より2条目のものは浅く，また孔縁にまで達していない。また最も下方のものは，より深く刻まれており，頭部の括れを強張している。さらにその上方正面には逆三角形状の窪みが施されている。頭部に比べ尾部はかなり細身に作られており，また頭部から背部にかけてわずかに直線気味となり胴長の印象を受ける。

碧玉製管玉（図100－4～33，図版60－1）

管玉は長さ1.21cm～2.6cmのものがある。2cmを越えるのは2点のみで，大部分は1.2～1.8cmの範囲に属し，特に1.5cm内外のものが中心を占めている。径は0.52～0.69cmのものがあり，0.6～0.69cmに集中している。形態的には多くが体部に反りを有し，両小口面が体部に対して斜めに切られるものである。全体的に表面は良く研磨されており，端部も丸味を有するものが多い

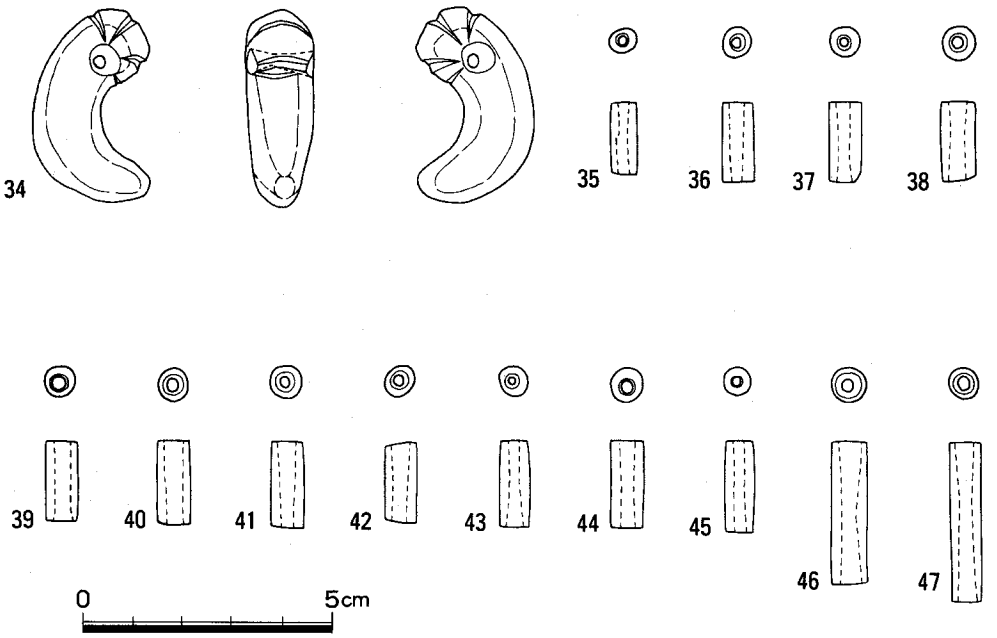


図101.　3号石室玉群B　（縮尺2／3）

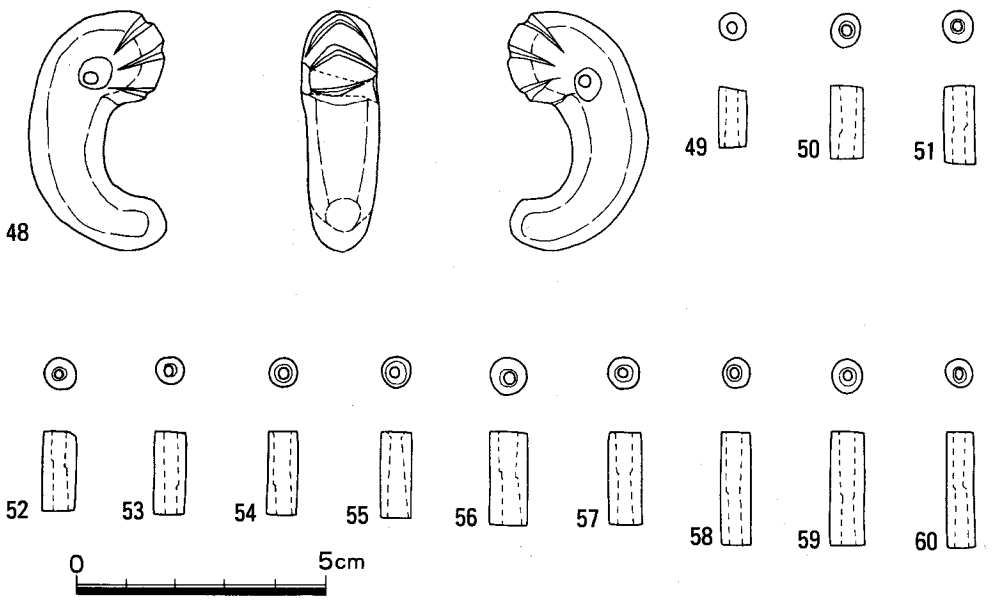


図102.　3号石室玉群C　（縮尺2／3）

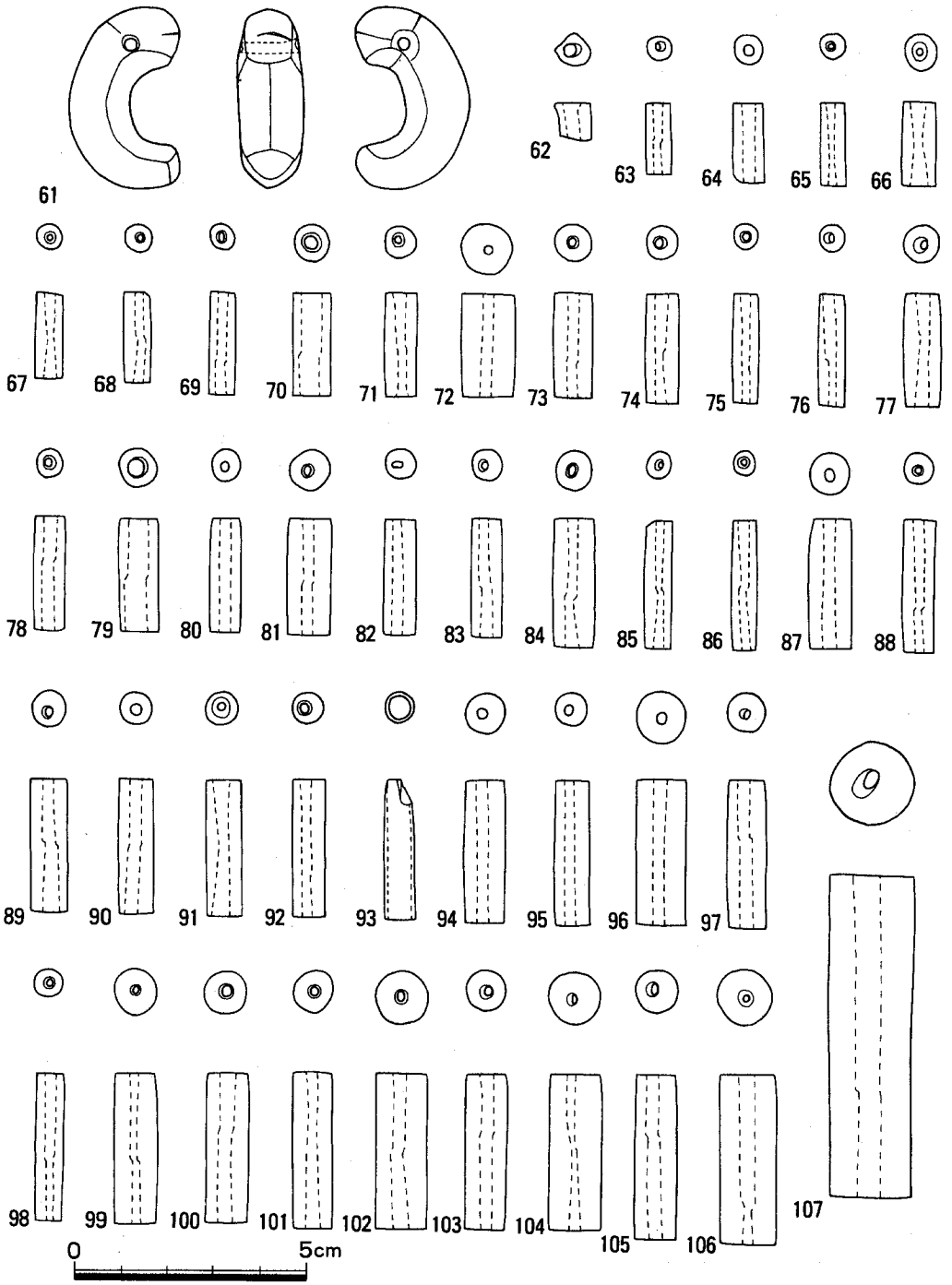


図103. 3号石室玉群D （縮尺2／3）

が，稜線を残すものも数点見られる。色調は2cmを越える2点のみ淡白緑色，他は全て青緑色を呈する。穿孔は片側からと思われるもの1点を除き全て両側穿孔であるが，そのうち4点は「迎え孔」によるものである。穿孔径は0.2～0.4cmのものがあり，特に0.35cmまでに集中する。また，穿孔の入口が端に寄るものが6点あり，そのうち1点は両側からの孔がかなりずれて貫通している。全体的に見れば規格性のある一群と言えよう。

硬玉製棗玉（図100－3，図版60－1）

長さ1.1cm，中心径0.7cm，端部径0.55cmを計る。乳白色を主体とし，明緑色の縞が入る。丁寧な研磨がなされており，光沢を有している。穿孔は両側からなされており，孔径は入口部がともに0.2cm，中心径は0.1cmを計る。

玉群B　硬玉製勾玉（図101－34，図版60－2）

頭部に4条の刻線を有する丁字頭勾玉である。頸部の1条は浅く，頭部の括れは小さい。全体的には深緑色を呈し，部分的に淡褐色縞文，淡白色斑文が入る。また丁寧な研磨がなされており光沢を有する。穿孔は両側から成されており，入口径は右側0.6cm，左側0.5cm，中心径は0.25cmを計る。中心径に比べ入口径が大きく摺鉢状を呈している。また，両孔の接点が左側に寄っており，左側のものを「迎え孔」と考えることも出来よう。

碧玉製管玉（図101－35～47，図版60－2）

長さ1.37～3.17のものがあり，2cmを越える2点を除けば1.6～1.7cmに集中する。径は0.55～0.7cmのものがあり，特に0.6～0.7cmのものが多く安定している。形態的には玉群Aと同様，体部に反りを有し，小口面を斜めに切るものが多く，良く研磨されており，端部も丸味を有する。色調は全て青緑色であるが，濃淡により2大別される。穿孔は，片側からと思われる3点を除き，全て両側からによるものである。孔径は0.2～0.5cmのものがあり，0.35cm内外のものが約半数を占め，0.3～0.4cmの範囲に大部分が含まれる。また最も大きい0.5cmのものは穿孔後，孔内を研磨していると思われる。穿孔部が端に寄るものや，稜線を残し不整形を呈するものも数点見られるが，全体的には規格性のある管玉群であると言えよう。

玉群C　硬玉製勾玉（図102－48，図版60－3）

頭部に4条の刻線を有する丁字頭勾玉である。孔周囲がわずかに白味を帯びるものの，全体的に深緑色を呈し，丁寧な研磨により光沢を生じている。刻線は深く明瞭に刻まれており，頭部は大きく括れ，尾部にかけて細身に作られている。穿孔は両側から成されており，入口径は左側0.6cm，右側0.45cm，中心径は0.25cmを計る。中心径に比べ，入口径が大きく摺鉢状を呈している。また両孔の接点が右側に寄っており，右側を「迎え孔」と考えることも出来よう。

碧玉製管玉（図102－49～60，図版60－3）

長さ1.21～2.3cmのものがあり，1.6～1.8cmのものが中心を占めるが全体的にややばらつきが見られる。径は0.59～0.77cmを計り，最も太い0.77cmの1点を除くと0.6～0.7cmに集中する。

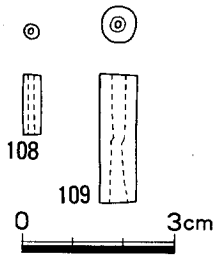


図104. 3号石室玉群E（縮尺2／3）

形態的には前二群同様体部に反りを有し，小口面が斜めに切られるものが中心を占める。また研磨も丁寧に成されており，端部に丸味をもつものが多い。色調は淡黄緑色の2点を除き，他は青緑色を呈するが，やや淡い色のものを1点含んでいる。穿孔は片側からと思われるものが1点ある他は全て両側からであるが，そのうち1点は「迎え孔」によるものである。孔径は0.2～0.4cmのものがあり，大部分が0.3cmを越えるものである。また穿孔の入口が端に寄るもの，両孔の接点がずれているもの等が若干存在する。

玉群D　硬玉製勾玉（図103－61，図版60－4）

表面の錆により不明瞭であるが，2条の刻線が認められる丁字頭勾玉である。刻線は浅く，1条は孔の背後に施されている。黒緑色を呈し，良く研磨されているようであるが，腹部中央に1条，両側面との境に各1条の明確な稜線を残している。また頭部に括れは見られず，尾部も頭部と同様の厚みを有している。穿孔は両側からによると思われる。

碧玉製管玉（図103－63～92，94～106，図版60－4）

管玉は総数54点を数えるが，このうち最小のものと最大のもの各1点はやや趣きを異にするものである。この2点は特殊管玉として後述することとし，他の52点について記しておく。

これらは長さ1.53～3.68cmと大小の差が著しく，2～3cmのものが大部分を占める一方で，3cmを越えるものも14点あり，全体的に大形であると言える。必然的に径についても大小の開きがあり，0.5～1.22cmのものがある。多くは0.6～0.9cmに含まれるが，長さと同様にばらつきが見られる。形態的には玉群A～Cと異なり，体部は直線をなし，小口面は体部に対してほぼ垂直に切られるものが大部分である。また玉群の上部に鉄器類が置かれていた為，全体的に錆の付着が著しい。穿孔は全て両側からによるものである。穿孔径は.0.15～0.4cmのものがあり，0.2～0.3cmに大部分が含まれる。穿孔に関する特徴としては，穿ち直しにより孔が楕円形を呈するもの，穿孔位置が中心をはずれるもの，両孔の接点にずれを生じるものが多い点があげられる。半数以上のものが上記のいずれかに当てはまり，特に大形のものにその傾向が強い。反面，穿孔後に孔内を研磨したと思われるものも多く，特徴ある様相を呈している。色調については2大別され，濃緑色を呈するもの4点，淡黄緑色を呈するもの41点がある。前者は濃淡に分けられるがいずれも硬質で重量感がある。後者もやはり濃淡に分けられるが，色調による法量その他の特徴に明確な差異を見出すことは出来ない。

特殊管玉（図103－62・107，図版60－4）

62は長さ0.81cm，最大径0.72cmを計る不整形管玉である。穿孔は片側からかと思われ，孔径0.3cmを計る。半透明明緑色を呈し，やや軟質気味である。107は形態的には通常の管玉に類似するものの大形で長さ6.91cm，径1.81cmを計る。両側穿孔で一方は穿ち直しており楕円形を呈

する。入口径は各0.45cm，0.4cmであるが，孔同士の接点がずれており，中心径は0.25cmを計る。淡黄緑色を呈し，体部は直線に，また小口面は体部に対しほぼ垂直に作られている。

ガラス製管玉（図103－93，図版60－4）

欠損品で現長3.1cm，径1.1cm，厚さ0.08cmを計る。明緑青色を呈する。

玉群E

本群については碧玉製管玉が2点現存するのみである。

碧玉製管玉（図104－108・109）

ともに淡黄緑色を呈し，形態その他の特徴は玉群Dのものに共通する。108は長さ1.2cm，径0.33cmを計り，3号石室出土管玉中最小のものである。

出土状況実測図によれば各管玉の法量にはかなりの差異が見られ，最も大きいものは3.6cm程あるものと思われる。ただ108の管玉を含め，全体的には小形のもので構成されているようである。

4号石室

4号石室から出土した装身具には以下のものがある。

滑石製勾玉	42
櫛	3

第4号石室出土の玉類は全く現存せず，ここでは出土状況を述べるに留めておく。

勾玉の出土位置は大きく2群に分かれる。石室中央南壁沿いの鉄剣先端部の北側に接して16個（A群），さらに石室中央やや西寄りに位置する鉾と剣の間に26個（B群）が出土している。A群は12×8cmの範囲に集中して，B群は16×14cmの範囲に散在するが特に鉾の南側近くの6×5cmに16個が集中し，そこから南側へ散った状況を示している。両群ともに配列に規則性は見出せない。

（久保　寿一郎）

2）櫛

1号石室　1は石室中央より東南側で出土した。結束部から頂部にかけての破片で，漆の被膜のみが残っている。結束部で櫛の外側まで残った部分があり，歯幅1mm前後で片側に10本前

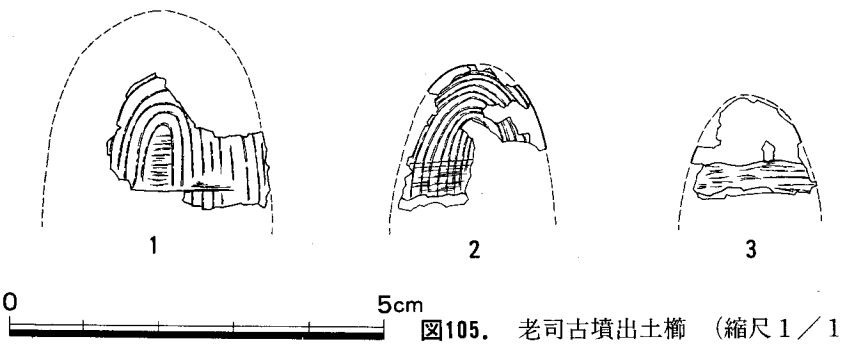


図105.　老司古墳出土櫛　（縮尺1／1）

後の歯があったと思われ，総数は約20本，幅は結束部で約30㎜であろう。結束部の幅は約10㎜，材質は桜の皮であろう。

3号石室　石室の東南角付近から1点出土している。現物はない。日誌によれば，結束部から頂部にかけて漆の被膜のみが残り，結束部で幅約2㎝という。

4号石室　石室南側の2号人骨（男性）頭部に貼り付いて3点出土した。2は前頭骨の正面より見てやや左寄りにあり，歯を頭頂部へ向けていた。結束部から頂部にかけて漆の被膜が残り，外側の一部は旧状を保ち，厚さがわかる唯一の例である。歯の数は片側10本前後で，結束部で幅約21㎜，頂部近くの厚さ約2㎜，結束部の幅は約4㎜で材質は桜の皮であろう。3は頭骨のこめかみ寄りにあり，歯を下に向けていた。結束部から頂部にかけて漆の被膜のみが残っている。2，3は1よりやや小型である。もう1点は，前頭の正面より見て右側，2より頭頂部寄りにあった。人骨を取り上げる前に，現物は失われたらしい。　（西　健一郎）

5．土　　器

1号石室

器台（図106，図版63）

器台形土器である。器高19.9㎝，口縁部最大径22.6㎝，裾部最大径25.9㎝を測る。いわゆる複合口縁壷形土器の口縁部を口縁部と裾部に用い，それらを筒状部分で接合した形態を呈する。口縁部上部はゆるやかに外弯しつつ外傾する。口縁部端部は上方にわずかにつまみあげられる。口縁部はわずかに外弯する。両者の接合は擬口縁部接合によるものと思われるが完形品のため確認は困難である。筒状部はわずかに外弯し，いわゆるエンタシス状を呈する。口縁部下部との接合部位は粘土紐積み上げののち，器壁内面にさらに粘土を付加することにより補強されていることが，胴部位の器壁厚の増大から想定されるが完形品のため確認は困難である。裾部上部はわずかに内弯しつつ外方に広がる。裾部下部はゆるやかに外弯しつつ外方にに広がる。筒状と裾部上部との接合，裾部上部と下部との接合は，口縁部におけるそれらと同様の考察が可能である。器

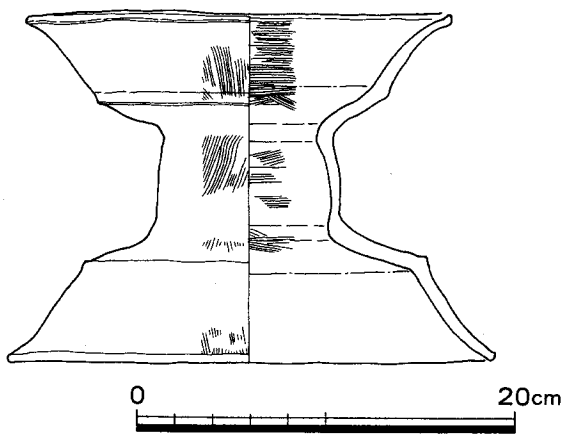


図106.　1号石室出土器台　（縮尺1／4）

壁内面には横方向，外側には縦方向の刷毛目が施される。原体は1cmあたり7～8本の条線を残すが，原体そのものの法量の確認は困難である。口縁部外面には，刷毛目調整ののち，さらに横方向のナデが施される。いわゆるミズビキ痕に類似したこまかな水平方向の平行条線が観察され，回転台上におけるナデ調整を想定させる。筒状部と口縁部下部，裾部上部との接合部位には，明瞭な指痕が観察できる。胎土は1～2mm大のものをまじえた砂粒を含むが，調整のため器壁面において観察可能なものは少ない。色調は内外面とも明褐色を呈する。焼成は良好である。器壁内外面全面に赤色顔料の塗布が認められるが，出土状況と関連から器壁全周の1/2は剝落が著しい。

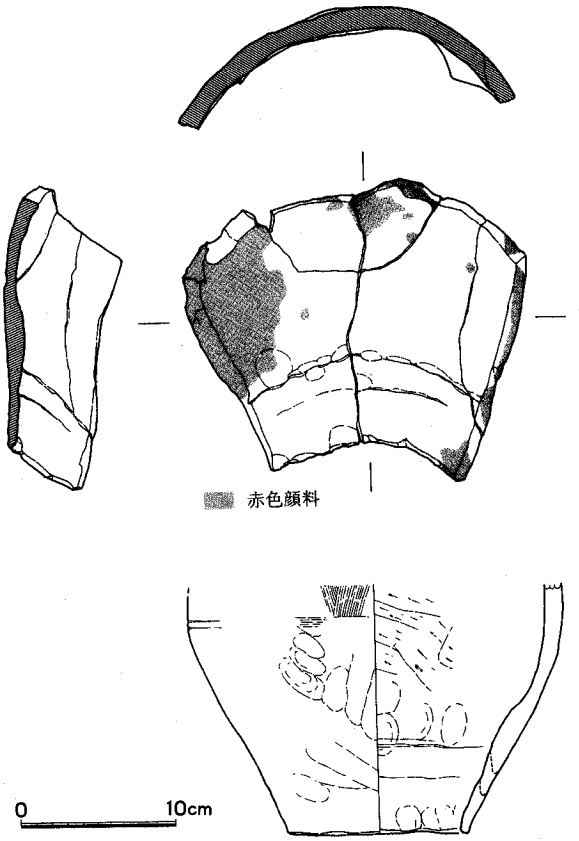


図107. 3号石室出土土器片枕 （縮尺1／4）

3号石室

盤状土器（図108，図版63）

いわゆる盤状土器である。主軸長70.2cmを測る。正面観は椀形を呈し，縦断面形は船形を呈する。横断面形は約1/3円弧状を呈し，縦断面形はゆるやかな弧を描く底部に一方はゆるやかに，他方は急角度でたちあがるたちあがり部を有す。器壁凸凹の観察から，主軸に直行する形でかなり幅広の粘土帯を接合し，成型したことが看取される。器壁外面には主軸に平行する刷毛目が施される。原体には1cmあたり6～7本の条線を残すもの，同じく4～5本の条線を残すものの二者が認められ，それぞれ約3cm，4cmの原体幅が想定されるが，両者の明瞭な使いわけは確認できない。刷毛目調整は基本的に図108下方から上方へ，右から左へ施されていったことが看取されるが，粘土帯幅と刷毛目との明瞭な相関関係は確認できない。図108下方器壁外面は板状工具によると思われるケズリにより成型される。器壁内面には主軸に平行する刷毛目が施されたのち，板状工具によると思われるケズリが施される。刷毛目原体は1cmあたり4～5本の条線を残すものであり，外面調整に使用されたものと同一の原体が使用されたことが想定される。胎土は2～3cm大のものもまじえた砂粒を含むが，調整のため器壁中に

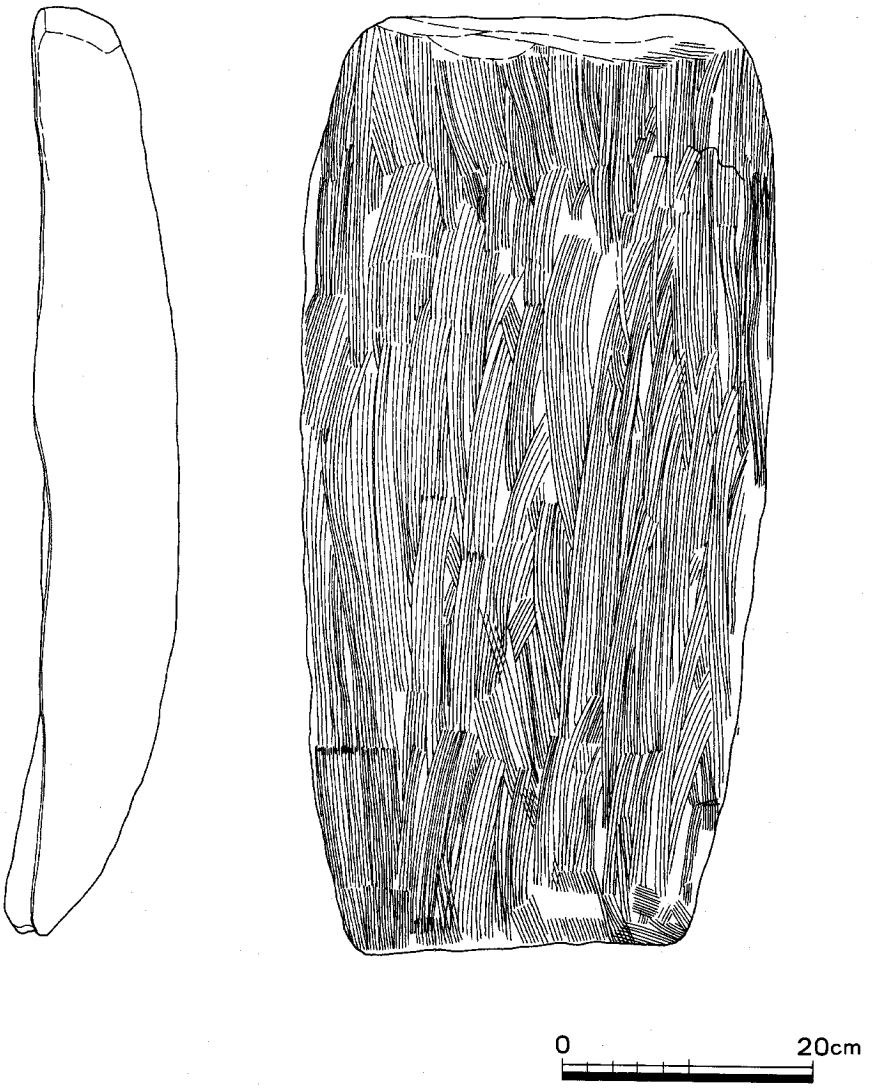
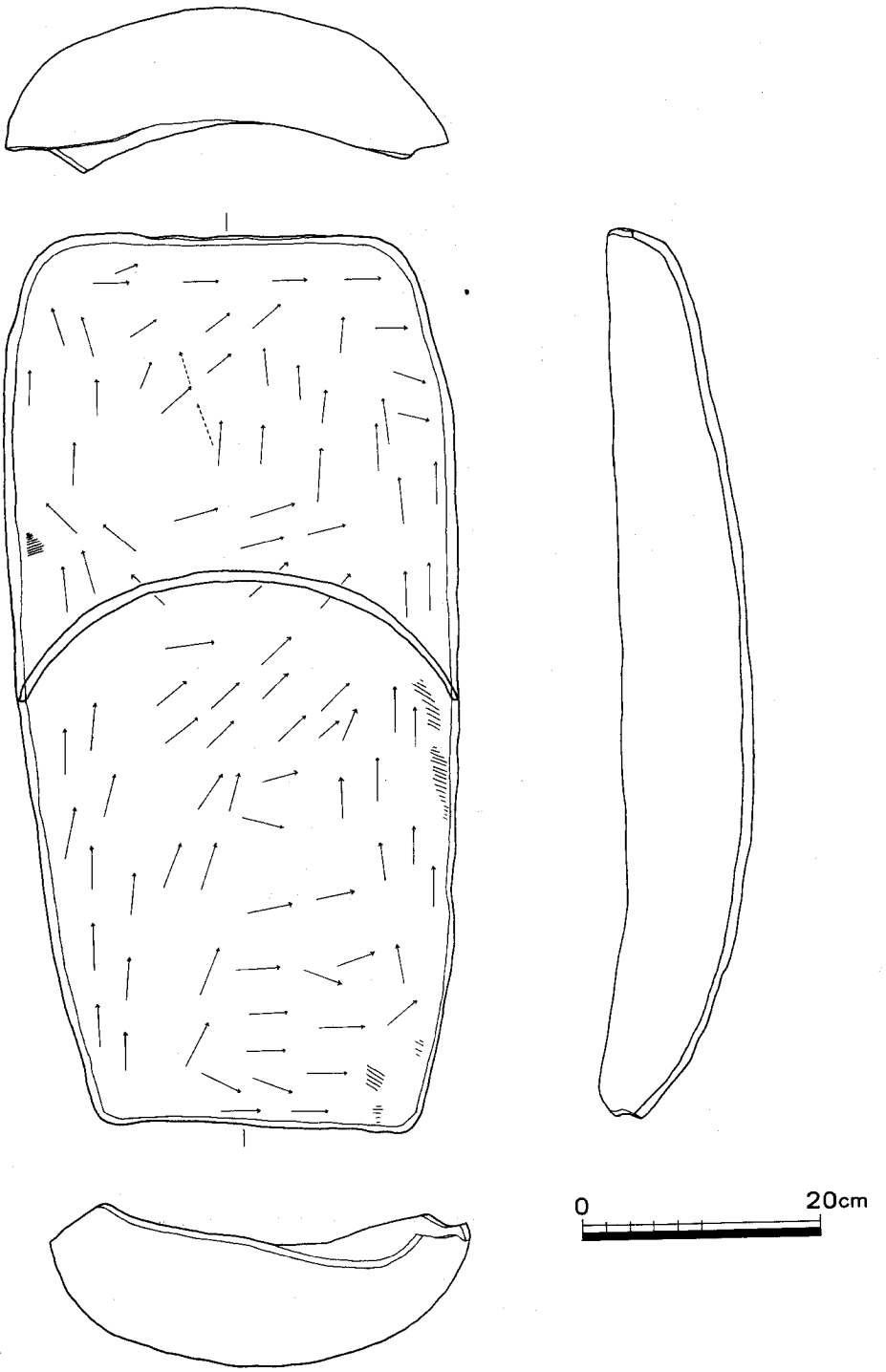


図108.　3号石室出土盤状土器　（縮尺１／６）


0
20cm

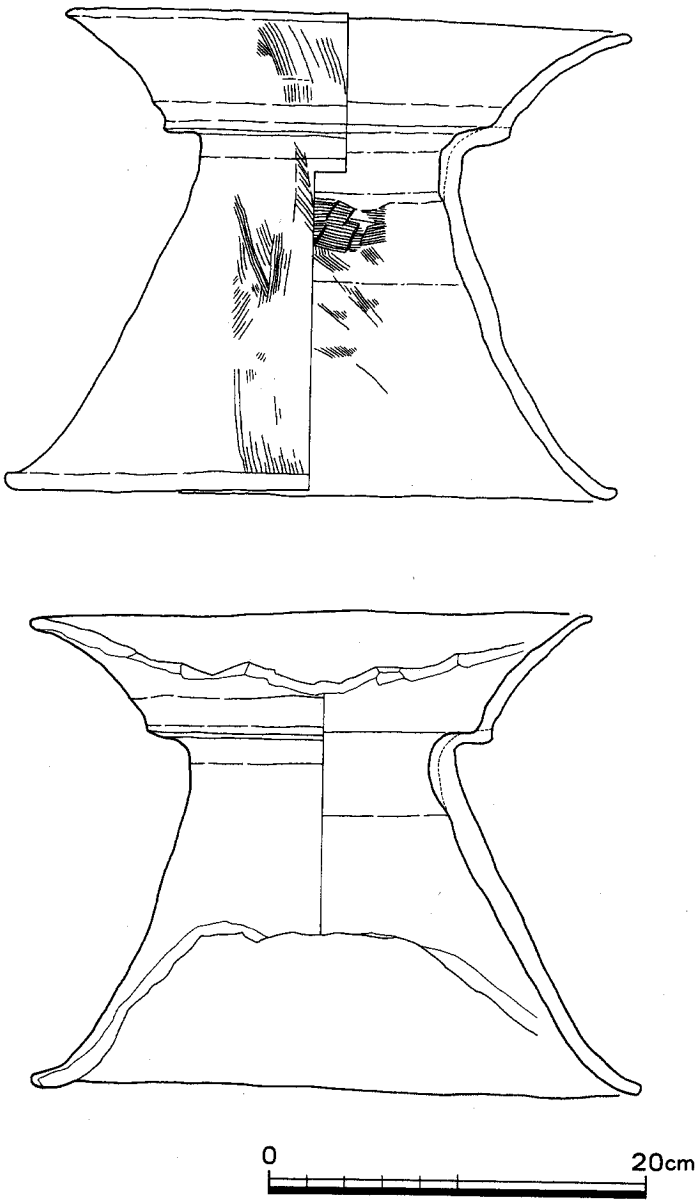


図109.　4号石室出土器台(縮尺1／4)

沈み，器表面において観察可能なものは少ない。色調は内外面とも明褐色を呈する。焼成は良好である。（溝口　孝司）

土器片枕（図107，図版63）

壷形埴輪の底部付近の破片を使用している。主軸の長さは約17cm，幅約22cm，高さ7cmを測る。埴輪としての特徴は墳丘出土のものと共通し，胴部内面斜めヘラケズリ，外面縦ハケ後ナデ，底部付近は粘土を継ぎ足した後，拡張し内外面ともに指押さえ後ナデている。胎土に1mmの砂粒を含み，焼成は良好である。黒斑がある。枕は底部から約16mmまどの高さで，全周のおおよそ⅓程度の破片である。枕は破片の周囲を荒く整えた後，赤色顔料を全面に塗布している。破片の割面にも顔料が塗布されている。内面中央付近だけ風化が進み，表面が細かく剥落している。（吉留　秀敏）

4号石室

器台（図109，図版63）

器台形土器である。器高25.9cm，口縁部最大径31.1cm，裾部最大径32.6cmを測る。いわゆる複合口縁壷形土器の口縁部を口縁部に用い，ゆるやかに広がる脚部にのせた形態を呈する。口縁部上部はゆるやかに外弯しつつ外傾する。口縁部端部はヨコナデによりナデおさめられる。口縁部下部はわずかに外弯する。両者の接合は擬口縁接合によるものだと思われるが完形品のため確認は困難である。脚部はわずかに外弯しつつゆるやかに広がる。口縁部下部との接合部位は，粘土紐積み上げののち器壁内面にさらに粘土を付加することにより補強されていることが，同部位の器壁厚の増大および器壁のヒビから確認される。器壁内面には横およびナナメ方向の，外面には縦方向の刷毛目が施される。原体は1cmあたり6～7本の条線を残すが，原体そのものの法量の確認は困難である。器壁外面，裾部上部を除く内面には，刷毛目調整ののち，さらに横方向のナデが施される。いわゆるミズビキ痕に類似したこまかな水平方向の平行条線が観察され，回転台上におけるナデ調整を想定される。胎土は細砂粒を微量含むが，調整のため器壁中に沈み，器表面において観察可能なものは少ない。色調は内外面ともに明褐色を呈する。焼成は良好である。器壁内外面全面に赤色顔料の塗布が認められる。口縁部上部，裾部下部は器壁全周の約⅓にわたって意図的に打ち欠かれている。このことは欠失部分への赤色顔料の塗布からも確認される。出土状況（図55）から，横置した場合の安定のため打ち欠きが行われたものと考える。

調整技法の酷似から，1号石室出土器台，4号石室出土器台はごく近接した時期あるいはほぼ同時期に同一の製作単位において製作されたものと考えられる。また，1号石室出土器台の口縁部，裾部，4号石室出土器台の口縁部は，製作技法・法量においてもそれぞれ本古墳出土壷形埴輪に酷似する。このことは両器台，壷形埴輪の製作時期・単位に関しても上と同様の想定がなりたつことを示す。この事実は1・4号石室の築造時期の問題と関連し，重要である。

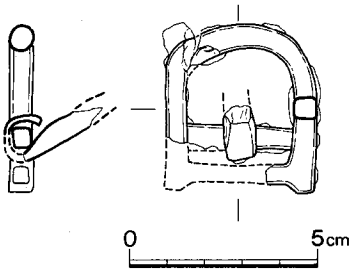


図110. 2号石室出土尾錠
（縮尺1／2）

（溝口　孝司）

6 馬具

2号石室

鋏具（図110，図版64－6）出土時においては完形品であったが，現状では一部を欠失している。輪金の下位に刺金用の横棒のある形態のものである。輪金の長さは4.5cm，幅4.0cm，刺金は現状で一部を欠失するが復原長は3.5cm程のものである。輪金の下半分の断面は方形に近く，上半分の断面は円形に近い。出土状態からいえば北側にあり，南側横口部にある短甲の付属品とは考えられない。北側の頭位にある被葬者の帯金具の可能性もないことはないが，3号石室の馬具等の存在からみて，おそらくは鞍であろうと考える。

3号石室

3号石室から出土した馬具は轡および鞍橋金具である。（図111・112，図版63－1・2）

1は銜で，径約4㎜の鉄棒を2本合わせて捩り，両端に環をつくり出している。一端の環は欠失し，一端の環には連結していた別の環の一部が銹着している。現存長96㎜，復原長102㎜，径は約8㎜で，連結している環の外径は約14㎜を測る。また，鏃の茎とおもわれる金具2個が連結部すなわち銜の中心からやや外側よりに銹着している。

2は銜で，径約4㎜の鉄棒を2本合わせて捩り両端に環をつくり出しているが，一端の環は欠失している。欠失した部分がおそらく銜の中心の連結部と思われる。現存長85㎜，復原長97㎜程，径は8～9㎜，連結部の外径は18㎜程を測る。

1・2はともに東南隅からの出土で，形状，大きさともにほぼ同一個体のものと考えられるので，図112に連結して図示した。復原長は約19㎜である。

3は銜で，径約3㎜の鉄棒2本を合わせて捩り両端に環をつくり出している。一端の環には連結していた環の一部が銹着している。現存長75㎜，復原長は79㎜程，径は5～6㎜，環の外径は約9㎜を測る。

4は銜で，径約3㎜の鉄棒を2本合わせて捩り両端に環をつくり出しているが，一端の環は欠失している。現存長76㎜，復原長75㎜，径は5～6㎜，環の外径は約13㎜を測る。

5は捩り金具である。径約2㎜の針金2本を合わせて捩り，両端に環をつくり出しているが，環は両者ともに欠失している。現存長46㎜，復原長54㎜，径3～4㎜，環の復原長径は9～10㎜程のものであろう。銜としては短小にすぎるが福岡県鞍手郡若宮町西の浦古墳[1]，福岡県甘木市池の上6号墳[2]出土品等に類例があり，用途を確定するにはいたらないが，馬具の一部と考えてよかろう。

6はいわゆる鑷子と呼称されているものである。平たい鉄棒の中心で折り曲げ，頂部を環状

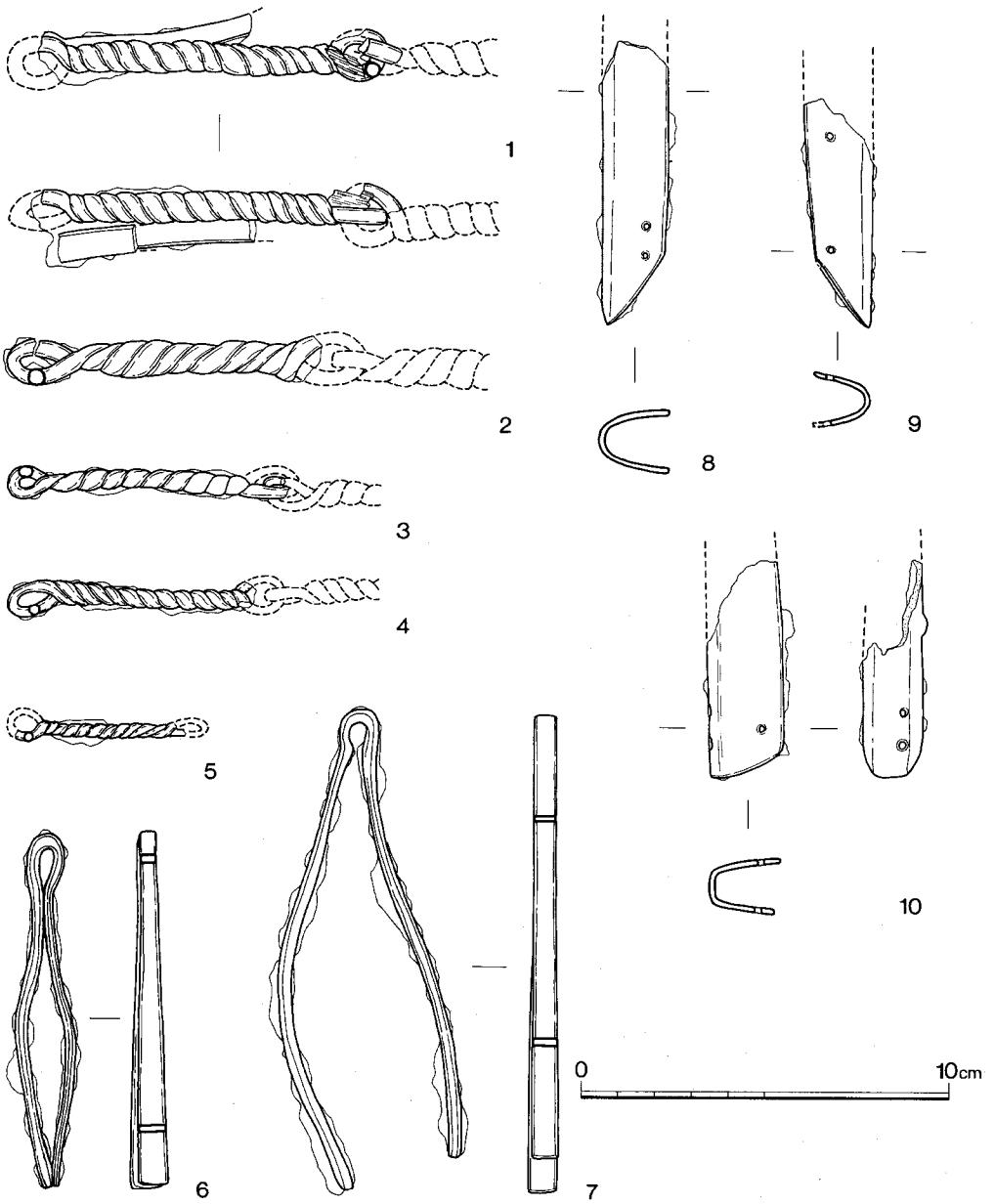


図111. 3号石室出土馬具 (縮尺1／2)

につくり，頚部と先端部で合わせるようにつくられている。長さ95㎜，頂部の幅10㎜，頚部の幅5㎜，脚部の幅約15㎜を測る。又頂部は狭くて厚く4㎜×2㎜，先端はややひろくて薄く7㎜×1.8㎜程につくられている。

7はいわゆる鐇子と呼称されているものである。平たい鉄棒の中心で折り曲げ，頂部は環状につくられようとしているが，頚部で両者が合っていない。先端部でもひらき，くっついてい

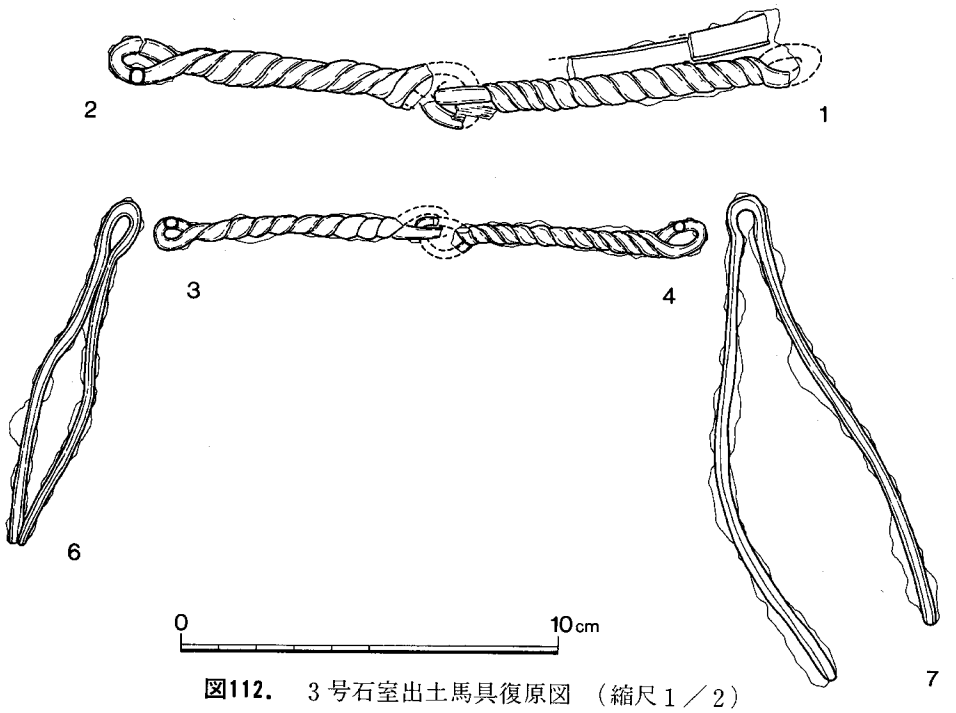


図112. 3号石室出土馬具復原図 （縮尺1／2）

ない。長さは一方の脚で120㎜であるが一方の脚は112㎜と若干短い。頂部から脚部にかけて鉄棒の幅がややひろくなるのは前者と同様であるが，厚さは頂部で薄く，脚部で厚い。頂部の断面は6㎜×約1.8㎜，脚部の断面は7㎜×約2㎜を測る。

6・7等はいわゆる鑷子と呼称され「毛抜き」と考えられることが多い。詳細は別の機会にゆずるが筆者は鑣と考えており，又3号石室での出土状態も東南隅にあり，3・4の銜と近接して出土しており，この見解はただしいものと考えるので図112に3・4・6・7を復原し，もしくは復原的に配置して図示した。3・4は復原長14.7㎝を測る。

8は鞍橋金具の端部で9と同一固体の対になるものと思われる。断面U字形をなし，下端近くに2個の孔を確認できたが，他は不明である。現存長は76㎜，幅は18㎜，厚さは17㎜，鉄板の厚さは1.7～1.8㎜程を測る。

9は鞍橋金具の端部で8と同一個体の対をなすものと思われる。断面はU字形をなし，内面には木製の付着する部分もある。孔は内側の両面に認められている。現存長は51㎜，幅は18㎜，厚さは15㎜，鉄板の厚さは1.7～1.8㎜程度のものである。

10は，8・9とは別個体の鞍橋金具の端部である。断面はU字形を呈する。下端に一対の孔，背に2孔を確認したが他は不明。現存長58㎜，幅20㎜，厚さは15㎜，鉄板の厚さは1.7～1.8㎜程を呈する。

〈参考文献〉

1．佐野　一・亀井明徳「福岡県鞍手郡若宮町西の浦古墳調査概報」『九州考古学』36・37　1969九州考古学会
2．橋口達也編「池の上墳墓群」甘木市教育委員会　1979

（橋口　達也）

7．石製品

1号石室

砥石（図113－1，図版62－6）　断面が長方形を呈するもので，四面にはいずれも極めて細くて浅い砥ぎ溝が多数認められ，使用痕を示す。粘板岩製で，長さ24.2cm，幅4.15cm，重さ700.5gである。

3号石室

砥石（図113－2，図版62－7）　器面は二面が丸みのある断面と呈するが，それぞれの面には部分的に使用の痕跡が認められる。他の二面にはほぼ全面にわたって砥ぎ痕がある。この砥石の両端には加工痕が残る。頁岩製で，長さ26.0cm，幅26.0cm，重さ665gである

（林田　憲三）

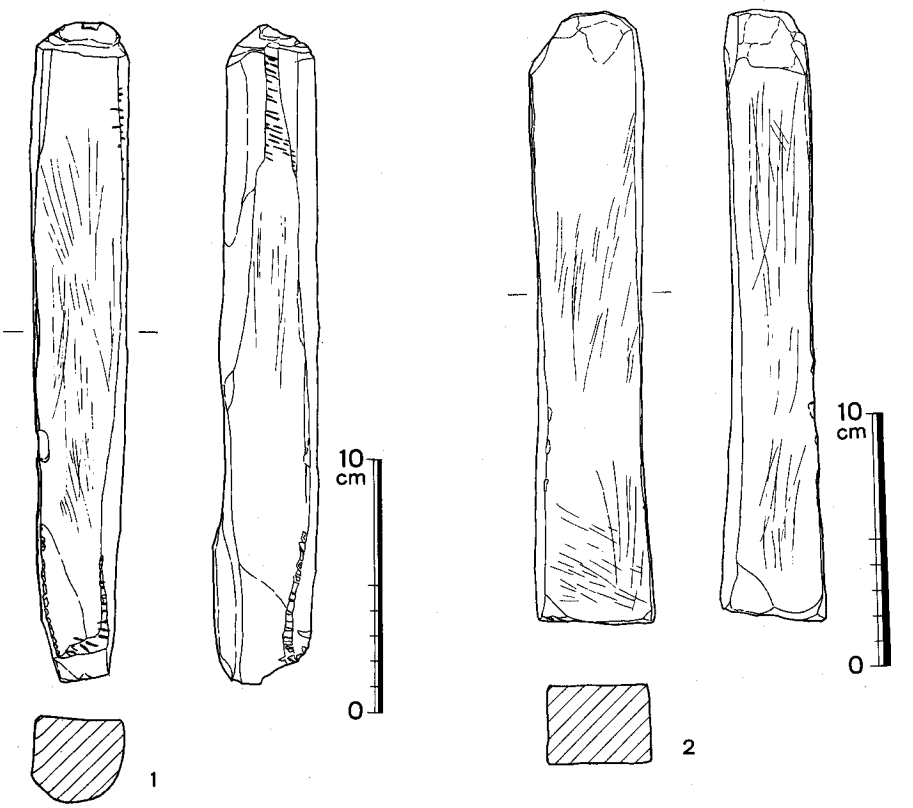


図113.　1・3号石室出土砥石　（縮尺1／3）

8．武具

1．2号石室

短甲（図114・115，巻頭原色図版6，図版65）　三角板革綴短甲である。出土時の保存状態は比較的良好なものであったが，発掘後長時間を経てやや損傷が進行した部分もある。胴一連の短甲で左引合板の上端に革組覆輪の痕跡が認められるので，合わせ方は左前であったといえる。前胴の高さ35.1cm，後胴の高さは42.8cm，押付板の幅46.3cm，胴部は長側3段目で36.5cm×28cm程を測る。引合板は幅3.3cm～3.5cm，長さ33.5cm～34.0cmで各々14カ所を革紐で綴じている。前胴の竪上1段は両脇で押付板の上に重ね3カ所を革紐で綴じる。竪上1段・押付板ともに上縁は革組覆輪が施されている。前胴竪上2段はほぼ方形を呈し，その中央部にワタガミ受緒用の2孔が左右ともに存在し，左側の2孔には革紐が残っている。後胴の竪上2段は3枚の鉄板を用いている。中央は三角板で両側は押付板に合わせた形をしている。両側の板にはワタガミ懸緒用の2孔が各々穿たれている。竪上3段は前胴・後胴ともに帯状鉄板を用いる。長側1段は前胴の左右に小さな目の三角板各2枚，後胴には5枚の三角板を用いている。そのうち通常の三角板3枚，押付板に重なる部分は形に合わせた小さ目の三角板が左右に各1枚である。前胴・後胴を結ぶ両脇に

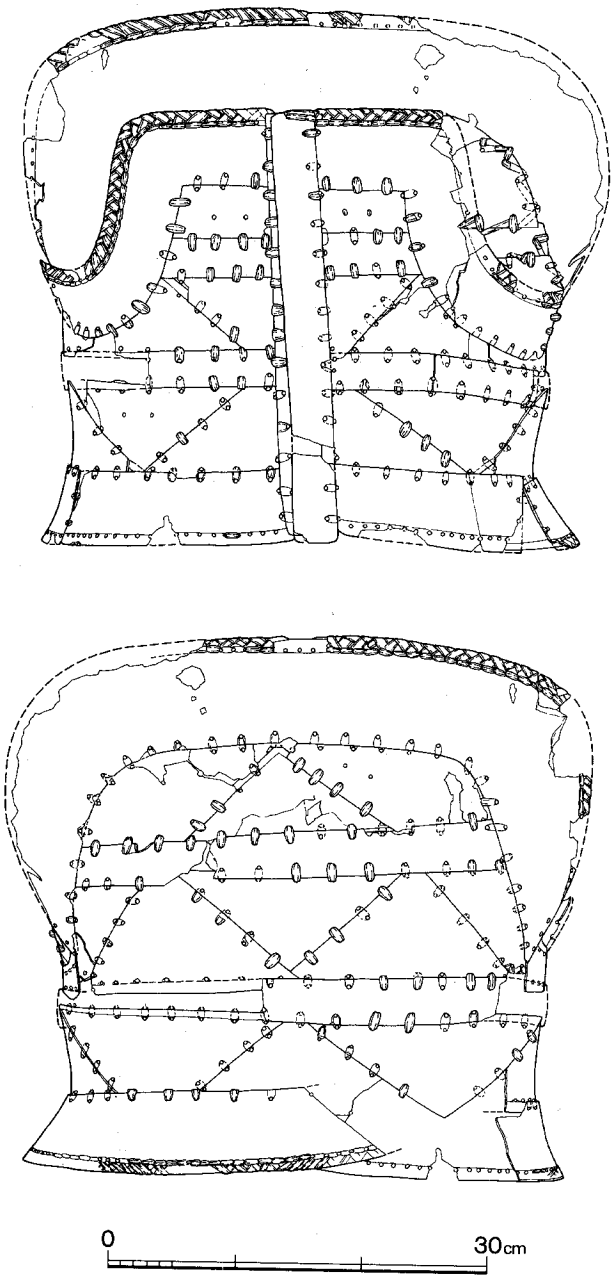


図114.　2号石室出土短甲(1)（縮尺1／6）

は上下左右の形に合わせた帯状に近い鉄板を用いている。長側2段は帯状鉄板を用い，前胴の左右各1枚，後胴に1枚の計3枚を脇で合わせている。長側3段は前後胴9枚の三角板を合わせている。前胴右側の引合板より2枚目の三角板には横に並んだ腰緒用の2孔が認められたが，左側の三角板では銹のためもあって孔は不明であった。長側4段目は前胴の左右各1枚，後胴に1枚，計3枚の6cm前後の幅広の帯状鉄板を脇腹のところで合わせている。下端は革組覆輪を施すが，前胴部はほとんど残らず，後胴部も竪上の覆輪に比し銹化のためやや不鮮明といえる。

この短甲は現状で4,050gを測る。同様の保存状態とみて，3号石室出土草摺で算出した比率から計算してもともとの重量は4,700g前後のものかと推定される。

図115. 2号石室出土短甲(2)（縮尺1／6）

短甲の復原にあたっては九州歴史資料館の横田義章氏に多大のご協力をいただいたことを付記し，謝意を表したい。

2. 3号石室

甲冑類（図116～118，図版66・67）

三尾鉄（図116，図版66－4・5） 全長10.4cm，胴部長6.3cm，尾部長4.1cm，胴部の幅2.9～3.6cmを測る。三尾鉄は衝角付冑の頂辺の飾りとされるものであるが，胴部は衝角付冑の頂辺の形態に合せてやや内彎している。胴部の厚みは2mm程で，中央部より少し前方に寄って径2mm程の孔2カ所が穿たれている。胴部の内面には木質の付着と布片と思われるものの付着が認められた。尾はやや斜上方にたちあがり，両側の尾は広がっている。断面は4.5mm×6mm程の隅丸方形を呈する。

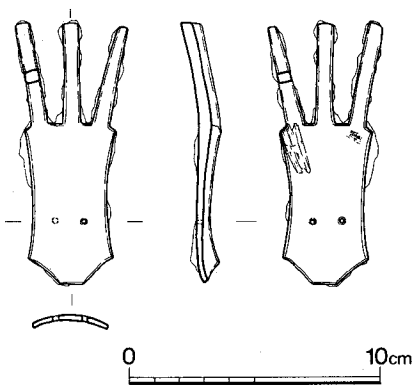


図116. 3号石室出土三尾鉄（縮尺1／6）

肩甲（図117－1・2，図版66－1） 上面観三ヶ月状を呈し，一見帽子の鍔に似た金具が2枚ある。一枚

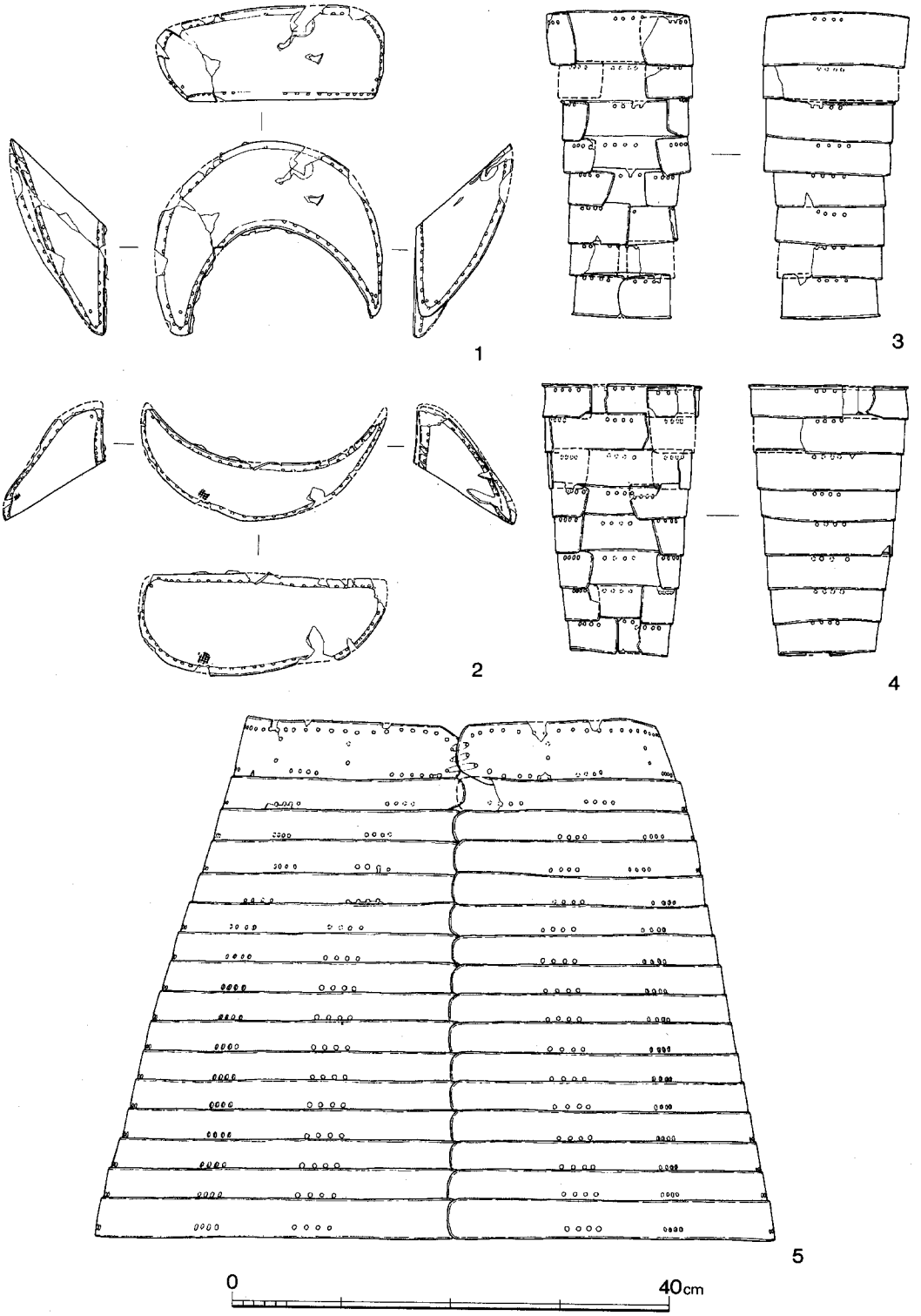


図117.　3号石室出土甲冑　（縮尺1／6）

づくりのものは類例は少いとはいえ，この金具が肩甲であることは疑いを得ない。この甲冑を着用していた被葬者が右利きと想定して肩・腕を動かしやすいためにはやや小ぶりのものが右側であろうと考えた。1は左肩甲と思われる。前後長20.7cm，左右幅17.8cm，上縁を水平にした高さ7.9cmを測る。縁は全周を革組覆輪を施しているがほとんど残っていない。前後の両端に他の部分と連結もしくは懸垂するための孔，1個ずつが認められる。現状での重さは280gであるが，草摺で算出した比率からもともとの重量は330g前後と推定される。

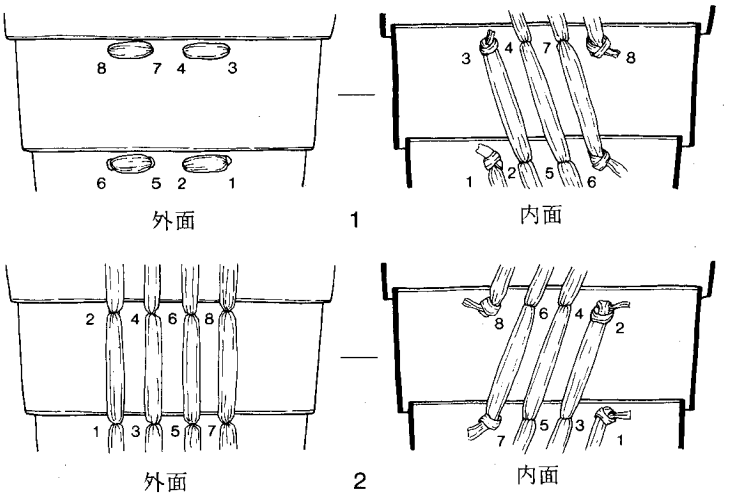


図118. 篭手威法想定図

2は右肩甲と思われる。前後長22.4cm，左右幅10.5cm程，高さ9.4cmを測る。縁の全周は革組覆輪を施しているがほとんど残っていない。前後の両端には他の部分に連結もしくは懸垂するための孔が1個ずつ認められる。また一部に目の粗い布の銹着が認められた。現状での重量は230gであるが，もともとの重量は前者同様に算出して270g前後のものと推定される。

籠手（図117－3・4，図版66－2・3，67－1・2）　帯状鉄板を用いた玦状の環が計16個分出土している。籠手であることはまちがいないものと考えられる。4個，3個，2個と銹着したものがあり，片腕分8個ずつと考えた。4個，3個と銹着したものは同一腕分とみられ，それに1個を加え，他は大きさの順に並べて図117－3・4のごとく図示した。

3は最小の環の内径7.7cm×8.3cm，外径8.7cm×9.1cm，高さ4.0cmを測る。下端部の2mm程を外方へ折りまげている。最大の環は内径12.4cm，外径13.3cm，高さ4.7cmである。他の径はその間で順次大小があるが，高さは3.5cm前後でほぼ一定している。図示した状態は最大限に伸びた時のものであり28.0cmを測る。帯状鉄板でつくられた篭手は類例は少いと思われるが，ある程度腕の自由が保たれねばならない。環8個を威して籠手とし，かつある一定の動きを保つためには如何なる威法が考えられるであろうか。各々の環には上端に3カ所，各4個ずつの威孔が穿たれている。これから復原して最も有効なものとして図118－1に示した威法が最も自由に動き，使用しない際には8個すべてをほぼ1個分の高さに収納できる。しかし1の外面に示した

ように環に密着して遊びのない部分ができるので一片ぐらいは短甲の綴じ革の如く銹着したものがあってもおかしくはないと考えるが，このような痕跡は認められない。２に示した威法は比較的自由がきく。使用しない際には各々が2/3程ずつ重なり，10cm程の高さには収納できるものと考えられる。しかし戦闘の際，表に出た綴じ革を切られればはずれるという欠点をもつが，綴じ革が遊びをもち，前述したごとく綴じ革の銹着が認められない点，および装飾的効果等，２の威法もあった可能性はすてきれない。最上段の環に他に連結もしくは懸垂するための孔は認められなかった。

４は最大限に伸ばした状態で24.7cm，最下段の内径8.6cm，外径9.3cm，高さ3.3cm，下から４段目が外径11.8cm，高さ4.0cmを測る。最上段は復原径14.2cm程，高さ3.0cmで上端４mm程を外方へ折りまげている。下から１～４段目の銹着状態を図版67－２に示した。使用しない際の収納の状態が想定できよう。

篭手の現状での重量は両者合わせて1170ｇであり，草摺で算出した比率から1370ｇ前後と考えられ，片腕で685ｇ程のものと推定される。

草摺（図117－５，図版67－３）　草摺の最上段すなわち懸板が前２枚，後１枚の計３枚あり，帯状鉄板の端部が30個あった。したがって帯状鉄板も１段３枚ずつと考え，当初懸板をいれて６段の草摺と考えた。そして孔の位置・彎曲等を考慮しつつ６段目までの図を作成したところ，帯状鉄板の残りがそれ以上であった。それですべての帯状鉄板の長さを測ると計2,300cmとなった。草摺出土状態の1/2実測図から最上段の周120cm，最下段の周190cmを計測し，その平均値155cmで割ると14.84，150cmで割ると15.3となり15段前後のものと思われた。帯状鉄板の端部が30ということと合わせ考えると草摺の１段は一連で15段，懸板を入れて16段となるものと思われる。したがって上から７段目以下は模式的に復原して図示した。草摺懸板は高さ5.8cmの幅広の帯状鉄板３枚からなり，上端は革組覆輪を施すための孔が，両端には連結するための孔が並ぶ。下端には威孔４個ずつが各３ヶ所ずつ穿たれている。したがって威孔は１段で９ヶ所ずつと考えられる。又各懸板には２ヶ所ずつ，上下に並んだ懸緒用の２孔が穿たれている。威法は篭手の場合とは逆に下と下とを結ぶようになっており，篭手で示した１の方法で威すと座った時には草摺懸板まですべての鉄板がもちあがる。２の方法で威すと，高さ47cm程に復原されるが20cm程には縮むものと考えられ，座った際にも大きな支障はないと考える。径は正確には出せないが，上端で28cm×37.5cmに程，下端で46cm～48cm×62cm程のものと思われる。

草摺の現状での重量は5,970ｇを測る。もともとの重量を推定すると，草摺懸板は周120cm程，高さ5.8cm，15段の帯状鉄板の長さ2,300cm，高さ3.3cm前後，厚さはノギスで測ったところ1.3mm程が薄い部分であるが，さらに銹等も考慮して1.1mm～1.2mmと考えた。孔は威孔４×９×16に懸板の覆輪用他の孔を加えて総計680前後，孔径３mm平均とした。そして長さ×高さ×厚さから孔の分を引き，鉄の比重7.6をかけると7,000ｇ前後となる。したがって草摺の現状の重さの

1.15～1.20倍がもともとの重量と推定した。他の部分についても保存状態が同様のものとして，これに準じて重量を推定した。

以上３号石室出土の甲冑には甲冑本体が遺存せず，付属品ばかりであるが，これらの総重量は現状で7,650ｇあり，もともと9,000ｇ前後と推定される。本体は革製品もしくは木製品の如きもので，鉄製品に比べると軽いとは思われるが，もし本体が鉄製品であるならば，２号石室出土の短甲から類推して甲冑の装備のみでも14kg前後，刀剣類を加えるとおよそ15kg前後のものを身につけていたと考えられる。

３号石室出土の甲冑類は２号石室の短甲の威孔に比し，大きさが一定せず，かつやや大き目であり，穿孔技術に稚拙さが認められる。この点からいっても２号石室出土の短甲よりは古い時期のものと考えられる。

また２号石室出土短甲・３号石室出土草摺については新日鐵八幡製鉄所の大澤正己氏によって鉄鉱石原料の鉄を用いているとの分析結果が出されているが，今回は紙面の都合上割愛せざるを得なかった。

（橋口達也）

出土遺物＼石室		1号石室	2号石室	3号石室	4号石室
鉄器	斧	3		11	1
	鉇	4		11	1
	鑿	3		6	
	蕨手刀子	13		8	
	茎刀子	21		19	2
	鋸			2	
	クワ・スキ先	1		4	
	U字形スキ・クワ先			1	
	手鎌	1			1
	曲刃鎌	1			
	直刃鎌			3	1
	その他	1	1	26	1
	刀	3		6以上	
	剣	3	3	6以上	3
	矛			4	1
	鏃	70以上	61以上	104	12
	短甲・甲冑		1	1	
	馬具		1	2	
	その他	この他に出土石室不明の剣3以上、鏃14がある。			
装身具	硬玉製勾玉	2		7	
	滑石製勾玉	23			42
	碧玉製管玉	47		125	
	ガラス製管玉			1	
	硬玉製棗玉			1	
	小玉			1	
	金環			2	
	櫛	1			3
土器	器台	1			1
	盤状土器			1	
	土器片枕			1	
銅鏡	舶載方格規矩鏡	1		1	
	舶載三角縁四神四獣鏡			1	
	舶載内行花文鏡			1	
	舶載方格規矩四神鏡			1	
	仿製変形文鏡		1		
	仿製捩文鏡			1	
	仿製方格規矩鏡			1	
	仿製内行花文鏡			2	

表20. 各石室出土遺物一覧

Ⅶ　自然科学的調査

1　老司古墳出土人骨について

老司古墳は，福岡市南区老司に所在し，５世紀初頭に属する４基の竪穴系横口式石室をもつ前方後円墳である。これらの石室のうち，２号，３号および４号石室から人骨が検出された。人骨の保存状態は全体的に悪いが，２号石室１号人骨，４号石室１・２号人骨についていは頭骨および歯牙の計測が可能であった。また，３号石室については歯牙の計測が可能であった。これらは，数少ない前方後円墳からの出土人骨として，また地域的にも福岡平野出土の古墳人として，非常に貴重な資料であると考えられる。そこで，以下に，人骨についての報告を行い，併せて若干の考察を試みたい。

１）出土状態（図版68）

２号石室（図119）

２体の男性人骨が出土している。１号人骨（成～熟年）は石室北端にあり，原位置を動かされている。すなわち，頭蓋底は側壁に接しており，右脛骨も遠位を北に向けて，鏡の上にのる。この位置関係は，明らかに原埋葬のそれではなく，埋葬後二次的にこの場所へ片付けられたものとみなされる。これに対して，２号人骨（成人）は，頭のみではあるものの，石室南端のほぼ中央に位置することから，原位置である可能性は強い。

以上から，２号石室における埋葬は，１号人骨が先に葬られ，その軟部組織が腐朽するまでの一定期間をへて２号人骨が追葬され，その際に１号人骨は石室東北側に片付けられたと推定される。ただ，鏡が原位置を保つかそれに近い位置にあるのならば，１号人骨は本来，北に頭位をとって埋葬されていたと考えられる。

３号石室（図120）

人骨の保存は良くないが，石室の西南隅に成年の女性と思われる歯と右の肩甲骨・上腕骨が検出された。肩甲骨と上腕骨は関節状態にあり，歯の両脇には一対の金環が認められたことから，南に頭位をとり南北方向に埋葬されていたものと推定される。

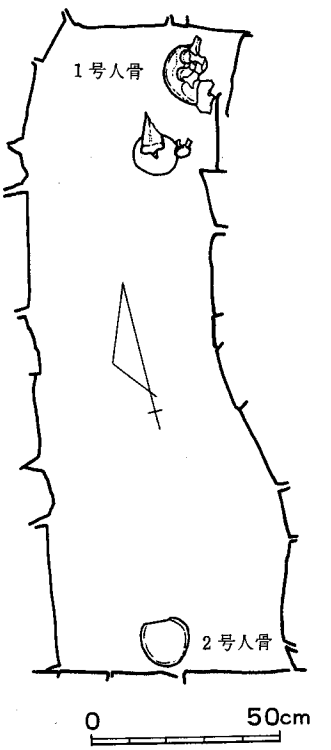


図119.　２号石室人骨出土状態
（縮尺１／20）

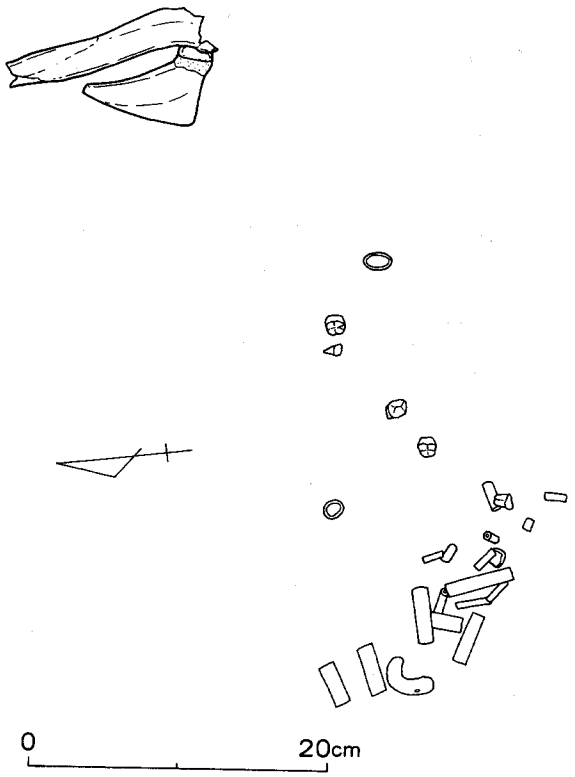


図120.　3号石室人骨出土状態　(縮尺1／5)

3号石室にはこの外にも2体以上が埋葬されていたと考えられるが，遺存していたのはこの1体のみである。

4号石室（図121）

3体が埋葬されていた。1号人骨は，東に頭位をとり，石室中央部に埋葬された，熟年男性である。全身の骨に大きな乱れはなく，原埋葬の位置関係を保った仰臥伸展葬であるが，顔は北に向け，頭が東側に下顎が西側へと動いている。頭部の北には土師器の器台があるが，これは，横転させて安定するように坏部と脚部の一部を打ち欠いてあり，倒れたものでなくはじめからこの位置に置かれていたものである。したがって，1号人骨はこの器台の坏部に顔面を入れた状態で埋葬されたと考えられ，頭部の乱れも軟部腐朽後に頭と下顎が別方向にずり落ちたことによると思われる。他の2体がいずれも片付けられていることから，最後に埋葬されたと考えられる。

2号人骨は，頭位を東にとる成年男性であるが，全ての関節が外れており，石室の南壁へと寄せられた状態である。また，全体が西側へと寄っており，とくに頭は大きく動かされている。したがって，これらの所見から，2号人骨は軟部組織が腐朽した後，追葬の際に壁ぎわへと片付けられたものと考えられる。なお，前頭骨には櫛2個が付着している。

これら2体のほかに，1号人骨左上腕骨の南隣に女性のものと思われる別個体の左上腕骨があり，これを3号人骨とする。そして，1号人骨の左肋骨に沿って胸椎2個，肋骨と左上腕骨の間に第6・7頚椎と第1胸椎がそれぞれ関節した状態で検出された。これらの椎骨は，部分的には関節しているものの，正常な位置関係をなすものではなく，とくに第6・7頚椎と第1胸椎は頭側が南西に向いている。これらは，椎体にlippingが認められるので熟年の椎体と推定されることと，1号人骨の頚椎と上位胸椎が遺存していないことから，あるいは1号人骨の頚・胸椎が動かされたものと考えるべきかもしれない。しかし，1号人骨の頚・胸部の他の骨に大

きな乱れがなく，頚・胸椎とも関節状態にあることから，落石等による移動は考えがたく，写真から判断すると左肋骨よりもレベルが下のようであるので，これらは1号人骨埋葬時にはすでにこの位置にあった別個体のものとすべきであろう。そして，熟年と推定されることから，2号人骨のものではなく，したがって，3号人骨の椎骨である可能性が強いといえる。そうすると，3号人骨は，靴帯等が一部に残っていた状態で石室の南東隅に片付けられたと考えられるのである。

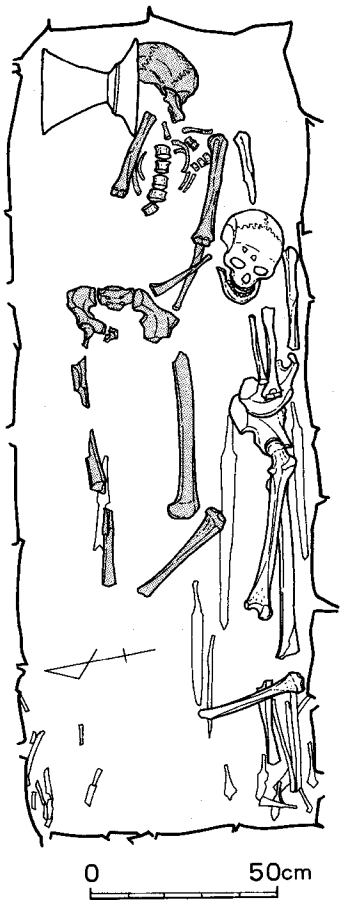


図121. 4号石室人骨出土状態
(縮尺1／20)

さて，これら3体の埋葬順位は1号人骨が最終埋葬であることは明らかである。2号人骨と3号人骨の先後関係については，前者が石室南東部を避けるようにして西側へと寄せられており，3号人骨の上腕骨が完存していれば2号人骨の頭の下になってしまうことなどからみると，1号人骨埋葬時にはすでに3号人骨が片付けられていた可能性が強い。したがって，4号石室における埋葬は，3号人骨が最初に葬られ，数年のうち，まだ一部に靴帯などが残っている時点で2号人骨が追葬され，さらに，2号人骨の軟部組織が腐朽してしまってから，3号人骨が最後に埋葬されたと考えられる。なお，石室内のような空間における靴帯等の腐朽については，現代のカメ棺を用いた改葬例をみると，おおよそ10年程の時間が必要なようであり（伊東，1974），2号人骨と1号人骨の埋葬間隔も10年かそれ以上の時間を見込む必要があるだろう。

2）人骨所見

2号石室出土人骨

2体分の保存不良頭蓋骨と脛骨片・肋骨小片が検出された。下記の所見より2体とも男性と考えられる。

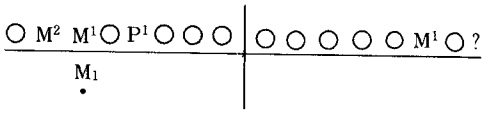
2号石室1号人骨（男性・成～熟年）

【保存状態および性別・年齢の推定】

頭蓋骨顔面部と右側頭部，右脛骨上端部，肋骨小片が残存し，頭蓋骨には赤色顔料の付着がみられる。

乳様突起の発達は著明ではないが，前頭骨の形状等は男性の特徴を示している。また，冠状

縫合の内板が閉鎖し外板の閉鎖も始まっていること，残存歯の咬耗度がBrocaの2度を示すことから，年齢は成年後半～熟年前半と推定した。風習的抜歯の所見は上顎には見られない。歯式は以下のとおりである。



【形質】

頭蓋骨主要計測値を表1に示す。顔面の高径が低い傾向を示し，上顔示数（V）（66.3）は広上顔型（Hol1），眼窩示数（r.78.6，1.80.5）は中型，鼻示数（54.3）は広鼻型であった。鼻根部の陥凹は著明でない。非計測的小変異としては，眼窩上縁孔が両側に観察された（表2）。また，歯冠計測値を表4に示す。

Martin No.	項　目	2号石室 1号人骨	4号石室 1号人骨	4号石室 2号人骨
1	頭蓋最大長	—	188	185
8	頭蓋最大幅	—	—	137
9	最小前頭幅	92	(100)	97
11	両耳幅	—	—	123
17	Ba－Br高	—	—	131
23	頭蓋水平周	—	—	(528)
24	横弧長	(300)	—	328
25	正中矢状弧長	—	(395)	—
26	正中矢状前頭弧長	112	(133)	136
27	正中矢状頭頂弧長	—	138	130
28	正中矢状後頭弧長	—	124	—
29	正中矢状前頭弦長	102	(111)	117
30	正中矢状頭頂弦長	—	124	117
31	正中矢状後頭弦長	—	—	99
40	顔　長	—	—99	
45	頬骨弓幅	(132)	—	(136)
46	中顔幅	(98)	—	108
48	上顔高	(65)	—	69
51r	眼窩幅（右）	43	—	42
51l	（左）	41	—	42
52r	眼窩幅（右）	33	—	33
52l	（左）	(33)	—	33
54	鼻　幅	25	—	26
55	鼻　高	47	—	48
61	上顎歯槽幅	—	—	62
72	全側面角	—	—	82
73	鼻側面角	—	—87	
74	歯槽側面角	—	—	69
8/1	頭長幅示数	—	—	74.1
17/1	頭長高示数	—	—	70.8
17/8	頭幅高示数	—	—	95.6
48/45	上顔示数（K）	49.2	—	50.7
48/46	上顔示数（V）	66.3	—	63.9
52/51r	眼窩示数（右）	78.6	—	78.6
52/51l	（左）	80.5	—	78.6
54/55	鼻示数	53.2	—	54.2
Frontal	chord	97	—	95
	subtense	14.1	—	15.6
	index	14.5	—	16.4
Simotic	chord	8.8	—	8.0
	subtense	3.8	—	1.9
	index	43.2	—	23.8
Zygomax.	chord	—	—	105
	subtense	—	—	25.8
	index	—	—	24.6

計測はMatin & Saller (1957), Yamaguchi (1973) に従った。

表1．頭蓋骨主要計測値・示数　(mm)

2号石室2号人骨（男性・成人）

【保存状態および性別・年齢の推定】

頭蓋骨片（左後頭部）と前頭骨小片が残存しており，これらには赤色顔料の付着が認められる。

外後頭隆起がよく発達しており，性別は男性と考えられる。また，矢状縫合の内板・外板ともに閉鎖

Traits	2号号人骨 1号人骨			2号石室 2号人骨			4号石室 1号人骨			4号石室 2号人骨		
	r	m	l	r	m	l	r	m	l	r	m	l
1 Ossicle at the lambda		/			-			-			-	
2 Os incae		/			+			-			-	
3 Biasterionic suture(10mm≦)	/		/	/		+	-		-	-		-
4 Superior sagittal sinus groove, turning to the left		/			/			-				
5 Asterionic ossicle	/		/	/		/	/		-	-		-
6 Occipitomastoid ossicle	/		/	/		/	/		-	/		/
7 Pterygospinous foramen	/		/	/		/	/		/	-		-
8 Tympanic dehiscence(1mm≦)	-		/	/		/	/		/	+		/
9 Parietal notch bone(5mm≦)	-		/	-		/	/		/	-		-
10 Squamous ossicle	-		/	/		/	/		/	-		-
11 Epipteric ossicle	/		/	/		/	/		/	-		-
12 Erontotemporal articulation	-		/	/		/	/		/	-		-
13 Metopism		-			/			-			-	
14 Supra-orbital foramen (incl.frontal foramen)	+		+	/		/	/		-	-		-
15 Accessory infraobital foramen	/		/	/		/	/		/	-		-
16 Medial palatine canal	/		/	/		/	/		/	-		-
17 Maxillary torus	-		-	/		/	/		/	-		-
18 Posterior vestige of transverse zygomatic suture(5mm≦)	-		/	/		/	/		/	/		-
19 Zygo-facial foramen absent	-		/	/		/	/		/	/		-
20 Multiple mental foramina	/		/	/		/	-		-	/		-
21 Mandibular torus(incl.trace)	/		/	/		/	-		-	-		-
22 Aural exostosis	-		/	/		/	/		/	-		-
23 Supra-orbital nerve groove	-		/	/		/	-		-	/		-

表2　頭蓋非計測的小変異の観察

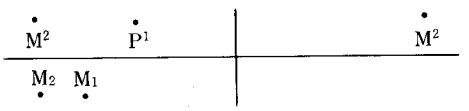
が進行し，ラムダ縫合は内板の閉鎖が進行していることから，年齢は成人に達していたと考えられる。

【形質】

非計測的小変異の観察の結果，インカ骨が認められた（表2）。

3号石室出土人骨（女性・成年）

骨の保存状態は非常に悪く，西南隅から右肩甲骨片・右上腕骨骨体上半部・歯牙5本が検出されているのみである。これらは出土状態からみて，同一個体と考えられる。残存歯牙は下記のとおりである。すべて遊離した状態で出土している。



・遊離歯

上腕骨・肩甲骨とにも華奢であり，性別は女性の可能性が強い。また，残存歯牙の咬耗は弱くBrocaの1度であることから，年齢は成年と考えられる。歯冠計測値を表4に示す。

4号石室出土人骨

保存状態の比較的良好な人骨２体分とこれらとは別個体の左上腕骨１本が残存しており，３体分の人骨が検出されている。

４号石室１号人骨（男性・熟年）

【保存状態及び性別・年齢の推定】

ほぼ全身骨が残存しているが，頭蓋骨顔面部・頭蓋底・頚椎は失われている。

性別は，眉弓・乳様突起・外後頭隆起の発達が良好で骨質も頑丈であること，四肢骨のサイズ・筋付着部の発達が良好なことから，男性と推定した。年齢は，歯牙の咬耗度(Brocaの２度)および頭蓋骨主縫合の閉鎖の程度から，熟年と推定した。残存歯牙の歯式を以下に示す。上顎はすべて失われており，下顎歯牙のみである。風習的抜歯の所見は下顎には認められない。

M_3 △ M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 △

△ 歯根のみ

【形質】

頭蓋骨の保存状態が悪く，顔面部の特徴等は不明である。四肢骨は筋付着部の発達が良好である。上腕骨最大長(表３)よりピアソンの式を用いて求めた推定身長は158.3cmであった。歯冠計測値を表４に示す。

Martin No.	項　目	４号石室 １号人骨 l	４号石室 ２号人骨 r	l
上腕骨				
1	最大長	303	–	–
2	全　長	302	–	–
5	中央最大径	24	–	–
6	中央最小径	19	–	–
7	骨体最小周	65	63	(60)
7a	中央周	71	–	–
6/5	骨体断面示数	79.2	–	–
7/1	長厚　示数	21.5	–	–
尺骨				
11	尺骨矢状径	–	11	–
12	尺骨　横径	–	16	–
11/12	骨体断面示数	–	68.8	–
大腿骨				
1	最大長	–	(422)	(425)
6	骨体中央部矢状径	30	–	–
7	骨体中央部横径	26	–	–
8	骨体中央周	90	–	–
9	骨体上横径	–	30	–
10	骨体上矢状径	–	24	–
6/7	骨体中央断面示数	115.4	–	–
10/9	上骨体断面示数	–	80.0	–
脛　骨				
8a	栄養孔位最大径	36	33	–
9a	栄養孔位横径	27	25	–
10a	栄養孔位周	(99)	94	–
10b	最小周	–	68	–
8a/9a	栄養孔位断面示数	75.0	75.8	–

表３．四肢骨主要計測値・示数　(mm)

【特記事項】

脊椎骨に，福島(1988)のGrade2～3に属する骨棘の形成が認められる。また，第５腰椎左肋骨突起と仙骨左外側部の間には明瞭な関節が形成されている(図版６９)。神中による２型の移行椎(天児改編，1982)と考えられるが，これは腰仙部疼痛の原因にもなるといわれており，具体的な被葬者像に結びつく興味深い所見で

ある。

4号石室2号人骨（男性・成年）

【保存状態および年齢の推定】

保存状態は比較的良好で主要な部分はほとんど残存しているが，軀幹部の骨は腰椎が3個検出されただけである。頭蓋骨に僅かではあるが赤色顔料が付着している。

年齢は，歯の咬耗度(Brocaの1～2度)および頭蓋骨主縫合の閉鎖の程度から成年と推定した。歯式を以下に示す。風習的抜歯の痕跡は認められない。咬合型式は鋏状咬合である。

? M^2 △ P^2 C I^2 I^1	I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2 ?
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C ○ I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 × M_3

△ 歯根のみ　　× 歯槽閉鎖　　○ 歯槽開放

【性別の推定】

概報では，性別は男性と報告されている。しかし，頭蓋骨の形態は1号人骨と比較すると華奢な印象を受け，前頭結節の発達が良好な点など，女性的特徴も有している。そこで，ここで改めて，性判定について種々の観点から再検討を行った。

頭蓋骨：眉弓の発達は弱く，全体的な印象は華奢である。乳様突起は破損しており，積極的に女性の可能性を否定する特徴は見あたらない。

骨盤：大坐骨切痕角はやや大きいが，前耳状溝は認められず，寛骨臼のサイズも大である。全体的に頑丈で男性的である。四肢骨：本人骨の計測値を現代九州人（阿部，1955，鋳鍋，1955：専頭，

			2号石室 1号人骨 (♂Ad.) l	2号石室 1号人骨 (♂Ad.) r	3号石室 (♀Ad.) l	3号石室 (♀Ad.) r	4号石室 1号人骨 (♂Mat.) l	4号石室 1号人骨 (♂Mat.) r	4号石室 2号人骨 (♂Ad.) l	4号石室 2号人骨 (♂Ad.) r
上顎	近遠心径	I1	–	–	–	–	–	–	8.3	8.8
		I2	–	–	–	–	–	–	7.4	7.6
		C	–	–	–	–	–	–	8.4	8.8
		P1	–	7.2	–	7.0	–	–	8.2	8.0
		P2	–	–	–	–	–	–	7.6	7.5
		M1	11.0	11.3	10.5	–	–	–	10.7	–
		M2	–	10.1	–	10.2	–	–	9.8	10.2
	頬舌径	P1	–	9.9	–	8.9	–	–	10.2	9.8
		P2	–	–	–	–	–	–	10.6	10.0
		M1	11.5	11.3	11.6	–	–	–	12.4	–
		M2	–	11.2	–	11.2	–	–	12.0	12.4
下顎	近遠心径	I1	–	–	–	–	5.4	6.0	5.4	5.8
		I2	–	–	–	–	6.3	6.5	6.4	6.8
		C	–	–	–	–	7.5	7.3	7.4	7.5
		P1	–	–	–	–	7.9	7.5	7.6	7.8
		P2	–	–	–	–	6.8	7.3	7.7	7.8
		M1	–	11.4	11.8	–	11.7	11.3	12.6	12.2
		M2	–	–	–	11.1	–	11.2	–	–
	頬舌径	P1	–	–	–	–	7.8	7.6	8.4	8.5
		P2	–	–	–	–	7.5	8.0	9.2	9.3
		M1	–	11.1	10.9	–	11.3	11.3	11.6	12.2
		M2	–	–	–	10.7	–	10.9	–	–

表4　老司古墳被葬者の歯冠計測値　(mm)

老司4－1	(158.3)	(上腕骨より)
4－2	(161.2)	
谷口	162.1	
筑前古墳人1)	163.7	
金隈弥生人2)	162.7	

1) 永井(1985)　2) 中橋他(1985)

表5．推定身長の比較　(cm)

Martin No.	項　　目	現代九州人1) 男性	現代九州人1) 女性	土井ケ浜弥生人2) 男性	土井ケ浜弥生人2) 女性	老司4号石室2号人骨(右)
上腕骨						
7	骨体最小周	62.91	55.54	64.7	59.1	63
尺骨						
11	尺骨矢状径	13.11	10.98	13.4	11.7	11
12	尺骨横径	16.46	14.17	17.8	16.5	16
大腿骨						
9	骨体上横径	29.21	26.62	31.8	30.4	30
10	骨体上矢状径	24.19	21.23	25.6	22.8	24
13	上　幅	89.88	79.68	100.1	91.6	97
15	頸垂直径	31.84	28.23	33.6	29.8	34
16	頸矢状径	26.03	21.77	27.2	23.6	26
17	頸　周	95.01	83.69	99.0	88.3	98
18	頭垂直径	45.32	39.96	45.4	41.6	48
19	頭横及至矢状径	44.64	39.35	45.8	42.1	(47)
20	頭　周	142.61	125.62	146.4	134.5	147
脛　骨						
8a	栄養孔位最大径	30.5	27.3	33.8	30.1	33
9a	栄養孔位横径	23.8	21.1	24.0	21.5	25
10a	栄養孔位周	88.5	78.0	92.3	82.2	94
10b	最小周	71.0	63.7	75.2	67.3	68

1) 以下の文献より引用，上腕骨；専頭(1957)，尺骨；溝口(1957)
大腿骨；阿部(1955)，脛骨；鋳鍋(1955)
2) 財津(1956)より引用

表6．老司4号石室2号人骨四肢骨計測値の比較(mm)

1957：溝口，1957）および土井ケ浜弥生人（財津，1956）のそれと比較してみると（表6），明らかに男性に傾いている。

以上の所見を総合すると，概報で男性とした鑑定結果は妥当であると思われる。また，本人骨に武器類が副葬されていることも，この結果と矛盾しない。

【形質】

表1に示すように，脳頭蓋の形態を示す示数はそれぞれ長頭（M8/1）・正頭（M17/1）・中頭（M17/8）に属している。顔面は中上顔（M48/45）・中型（M52/51）・広鼻型（M54/55）を示し，全体的に平坦である。また，歯槽性突顎の傾向が認められる。

脛骨の扁平性は認められない。人骨採取時に計測された大腿骨最大長からピアソンの式を用いて求めた推定身長は161.2cmであった（表5）。また，歯冠計測値を表4に示す。

【特記事項】

眼窩上壁に，鉄欠乏性貧血との関連が指摘されている（El-Najjar et al,1976；Lallo et al., 1977），cribra orbitaliaの所見が認められた（図版69）。本人骨の死亡年齢がかなり若いことも，これらの疾患との関係を考えると興味深い。

4号石室3号人骨（性別・年齢不明）

左上腕骨骨体部が残存している。保存状態は悪く，骨端部は消失している。全体的に華奢である。上腕骨だけからの性別・年齢の推定は困難であるが，成人に達していたとすれば女性の可能性が強い。また，出土状態の項で述べたように椎骨が3号人骨のものだとすると，明らかに成人に達しており，しかも骨棘の形成などからみて熟年女性の可能性が強い。

3）老司古墳被葬者の形質的特徴

老司古墳の位置する旧筑前地方からは，すでに多くの古墳人骨資料が得られており，その形質はいわゆる「渡来人的」（金関，1966）な特徴を持っていることがしられている（永井，1985，Doi & Tanaka,1987）。しかし，一般に弥生文化の中心地域であったと考えられている「福岡平野」からの出土例は少ない。老司古墳人骨はこのような点で貴重な資料といえる。また，老司古墳は鏡・武器・勾玉等の豊富な副葬品を伴う前方後円墳で，その被葬者はこの地方の首長級の人物であったと考えられるため，形質の階層差という観点からもその資料的価値は高い。そこで，以下に老司古墳人骨の形質的特徴を概観し，周辺の同じく首長級のものと考えられる古墳人骨との比較を行った。

老司古墳人骨のうち，計測が可能であったものは2号石室1号人骨（男性）と4号石室1・2号人骨（いずれも男性）の3体であった。図122・123は筑前古墳人骨のデータも同様にプロットしている。用いた資料は佐賀県谷口古墳人骨（永井，1982），大分県下山古墳人骨（九州大学医学部解剖学第二講座編，1988），大分県猫塚古墳人骨（内藤，1968）である。さらに，X1・X2・X3・X4・X5・X6はそれぞれ，筑前古墳人（Doi & Tanaka,

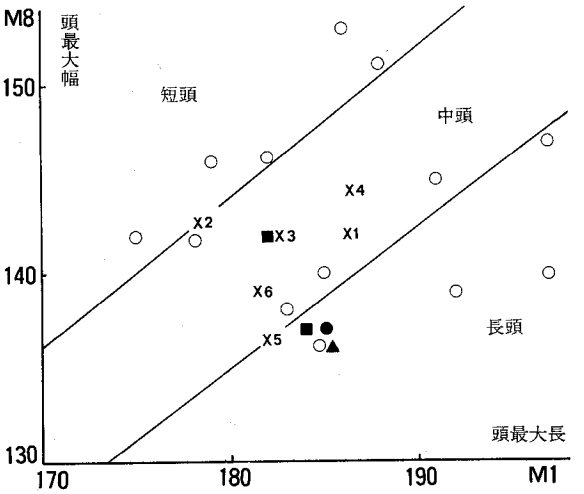


図122. 頭最大長・頭最大幅　頭長幅示数

● 老司古墳人，■ 猫塚古墳人，▲ 谷口古墳人，○ 筑前古墳人，×1 筑前古墳人，×2 近畿古墳人，×3 金隈弥生人，×4 津雲縄文人，×4 津雲縄文人，×5 吉母浜中世人，×6 西南日本現代人，（×1～6 は平均値）

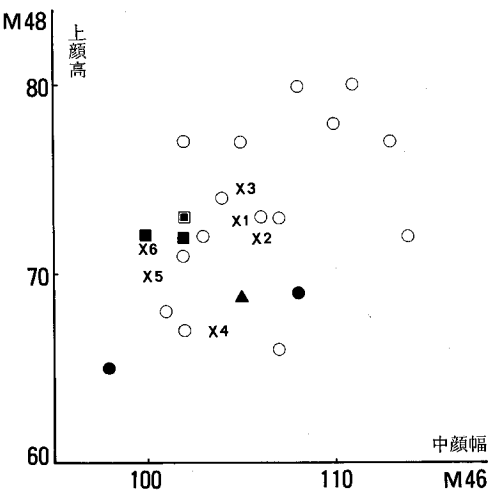


図123. 上顔高・中顔幅　上顔示数

● 老司古墳人，■ 猫塚古墳人，▣ 下山古墳人，▲ 谷口古墳人，○ 筑前古墳人，×1 筑前古墳人，×2 近畿古墳人，×3 金隈弥生人，×4 津雲縄文人，×5 吉母浜中世人，×6 西南日本現代人，（1～6 は平均値）

1987)・近畿古墳人（島・寺門，1957)・金隈弥生人（中橋他，1985)・津雲縄文人（清野・宮本，1925)・吉母中世人（中橋・永井，1985)・西南日本現代人（原田，1954）の平均値を示す。

図122は，頭蓋骨最大長・最大幅・長幅示数の分布を示したものである。老司古墳人骨（4号石室2号人骨）は筑前古墳人全体の頭型分布の中では頭幅の狭い方に分布しており，長頭型である。また，同じく首長級と考えられている佐賀県谷口古墳人骨や大分県猫塚古墳人骨にも同様の傾向が認められる。

次に，顔面の特徴をみてみると，老司古墳人骨は平均的筑前古墳人からは少し外れた分布を示すことがわかる（図123)。即ち，いわゆる「渡来人的」な面長な顔立ちというよりは，顔面の高径が低く一般に縄文人的といわれるような特徴をも保有している。これについては，弥生時代以来の混血を経た形質（Doi & Tanaka,1987）という解釈が成り立つであろう。また，特に2号石室2号人骨については，顔面のサイズが全体的に小さくなっている。興味深いことには，他の首長級と考えられる人骨の分布を見ても，同様の傾向が見られるようである。以上のように，首長級とされる被葬者の形質には，長頭に傾き全体的に小づくりであるという傾向が見られた。例数が限られているため，これらが一般化できる傾向であるかどうかは今後に待たねばならないであろう。しかし，図122・123をみてもわかるように，中世人は一般的に長頭で低顔の特徴を持ち歯槽性突顎を示すといわれており（鈴木他，1956；中橋・永井，1985；佐熊，1986)，形質の時代変化を考える上で非常に重要な示唆を含んでいるように思われる。

4）被葬者の親族関係について

老司古墳からは4基の主体部のうち3基から人骨が検出されたが，これら被葬者のかつての社会的・血縁的関係についても関心がもたれるところである。

我々は，考古学的情報に基づいて被葬者の親族関係モデルを抽出し，歯冠計測値を用いた血縁者推定法（土肥他，1986）および頭蓋非計測的小変異によって検証を行うという方法で，当時の親族構造にアプローチしている。そこで，老司古墳の被葬者たちに対しても検討してみたい。

人骨が出土した3基の石室のうち，3号石室については，数体の被葬者のうち1体が遺存していたのみであるので，モデルの抽出は不可能である。2号石室は，男性2体の埋葬で，1号人骨が片付けられていることから，2号人骨の追葬までに相当の時間を見込むことができる。しかし，2号人骨の保存が不良で詳しい年齢が推定できないため，この2体の男性が生前には同世代であったのか，それとも二世代におよぶものであったのかは推定しえない。

これらに対して，4号石室における情報量は多い。すなわち，3体の性・年齢が推定されているうえに，追葬の間隔もある程度は推定しうるからである。まず，3号人骨は熟年の女性である可能性が強く，頚・胸椎が関節していたことから，一部に靱帯が残っていた時点，すなわち埋葬後数年以内に追葬によって片付けられたと考えられる。そして，次に葬られた2号人骨

（成年男性）も関節の全てが外れた状態で片付けられていることから，軟部組織の腐朽がかなり進行した時点，おそらくは十数年をへてから1号人骨（熟年男性）が埋葬されたと推定される。そこで，初葬の3号人骨の死亡時における1・2号人骨の年齢を求めると，2号は数年を引いて成年の前半，1号は数年と十数年を引いて成年の前半から半ばとなる。したがって，これらは，熟年の3号人骨と同世代とするには無理があり，二世代のモデルが抽出される。

さて，次に，形質人類学的検証を試みるわけであるが，4号石室3号人骨は歯が残っていないので，分析不能である。さらに，表4に示したように，2・3号人骨も共通して得られる歯は下顎の$I_1I_2CP_1P_2M_1$のみであり，我々が示した血縁者推定に有効な歯の組合せ（土肥他，1986）は得ることができなかった。試みにこの組合せでQモード相関係数を求めると，0.01という値が得られた。この値はもちろん血縁者であると推定しうるものではないが，組合せ自体がさほど有効なものでないので，積極的な評価はできない。石室間の関係については，$P^1M^1M^2M_1$の組合せで2号石室1号人骨，3号石室人骨，4号石室2号人骨の間で計算が可能であった。結果は，2号石室1号人骨と3号石室人骨間が0.265，4号石室2号人骨との間が－0.303，3号石室人骨と4号石室2号人骨間が0.003という値であった。しかし，これについても同様な理由で積極的な評価はできない。また，頭蓋非計測的小変異も，4体で共有する変異は一つもないものの，観察不能であった項目のほうがむしろ多く，関係については不明であるといわざるをえない。

このように，人骨の保存がかならずしも良好でなかったために，十分な形質人類学的検証は行えなかった。4号石室におけるモデルは女性とその子供の世代の男性二人というもので，我々が大分県上ノ原横穴墓群で示した父系の血縁者モデル（田中他，1985）を反転したかのようなものであった。その意味でも検証が十分に行えなかったことは惜しまれよう。しかし，同じ老司古墳の他の石室，例えば2号石室では男性2体という構成であり，3号石室でも，副葬品からみて女性の他に一人もしくは複数の男性が葬られていたようであり，4号石室のモデルが基本的でないことは明らかである。そして，複数埋葬における構成の多様性こそが4～5世紀代の特徴でもあるのである。我々は，このような多様性を包摂する基本モデルとして，兄妹（姉弟）を中心とした血縁者モデルを提示しているが（田中・土肥，1986・1987），これについては機会を改めて論じることにしたい。

参考文献

阿部英世，1955：現代九州人大腿骨の人類学的研究．人類学研究，2（2-4）：301-346．

天児民和（改訂編集），1982：神中整形外科学．20版，南山堂，東京，581-583．

土肥直美・田中良之・船越公威，1986：歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用．人類学雑誌，94（2）：147-162．

Doi, N. and Y. TANAKA,1987：A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. J.Anthrop.Soc.Nippon, 95（3）：325-343.

EL-NAJJAR,M.Y.,RYAN,D. J., TURNER,C.G.,AND LOZOFF,B.,1976：The etiology of porotic hyperostosis among prehistoric and historic Anasazi Indians of southwestern United States. Am. J. Phys. Anthrop. 44： 477-488.

福島一彦，1988：西南日本弥生人の骨病変について．福岡医学雑誌 79 (2)：227-248.

原田忠昭，1954：西南日本人頭骨の人類学的研究．人類学研究1 (1-2)：1-51.

鋳鍋勝登，1955：九州人下腿骨の人類学的研究．人類学研究2 (1)：1-41.

伊東　宏，1974：人骨改葬を伴う愛知県渥美町（高木）と旭町（浅谷）の両墓制．葬送墓制研究集成1.名著出版，東京，277-280.

金関丈夫，1966：弥生時代人．日本の考古学III，雄山閣，東京，460-471.

清野謙次・宮本博人，1925：津雲貝塚人々骨の人類学的研究　第2部　頭蓋骨の研究．人類学雑誌，41：95-140,151-208.

九州大学医学部解剖学第2講座編，1988：2．九州大学医学部解剖学第2講座所蔵古人骨資料集成．日本民族・文化の生成，六興出版，東京，181.

LALLO, J. W., G. J. ARMELAGOS, and R. P. MENSFORTH, 1977：The role of diet, disease and physiology in the origin of porotic hyperostosis. Human Biology 49： 471-483.

MARTIN,R. und K. SALLER,1957：Lehrbuch der anthropologie, dritte auflage, Band 1 Gustav Fischer Verlag, Stuttgart, 429-518.

溝口静男，1957：現代九州日本人前腕骨の人類学的研究．人類学研究，4 (1-4)：237-272.

永井昌文，1982：前方部人骨．末盧國，六興出版，東京，492－495.

永井昌文，1985：III，北部九州・山口地方．シンポジウム 国家成立前後の日本人一古墳時代人を中心にして，季刊人類学，16 (3)：47－57.

内藤芳篤，1968：猫塚古墳の人骨，中ノ原・馬場古墳緊急発掘調査，大分県文化財調査報告第15輯，大分県教育委員会，31－39.

中橋孝博・永井昌文，1985：人骨．吉母浜遺跡，下関市教育委員会，154－225.

中橋孝博・土肥直美・永井昌文，1985：金隈遺跡出土の弥生時代人骨．史跡 金隈遺跡，福岡市教育委員会，43－145.

佐熊正史，1986：中世九州人頭蓋の人類学的研究．長崎医学会雑誌，61 (1)：4－21.

専頭時義，1957：現代九州日本人上腕骨の人類学的研究．人類学研究，4 (1－4)：273－301.

島　五郎・寺門之隆，1957：近畿地方古墳時代人頭骨について（略報）．人類学雑誌，66 (2)：57－64.

鈴木 尚・林 都志夫・田辺義一・佐倉朔，1956：頭骨の形質．鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨，岩波書店，東京，75－148.

田中良之・土肥直美・船越公威・永井昌文，1985：上ノ原横穴墓被葬者の親族関係について，上ノ原遺跡群IV．大分県教育委員会，大分，10－16.

田中良之・土肥直美，1986：古墳被葬者の親族関係について，日本考古学協会第52回総会研究発表要旨．日本考古学協会，東京，43.

田中良之・土肥直美，1987：古墳時代の親族関係について，九州人類学会報，15：10－12.

YAMAGUCHI,Bin,1973：Facial flatness measurements of the Ainu and japanese crania. Bull.Natn.Sci.Mus.Tokyo,16：161－171.

財津博之，1956：山口県土井ケ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて．人類学研究，3(3－4)：320－349.

（土肥直美 田中良之 永井昌文）

2．老司古墳出土の赤色顔料

老司古墳出土の赤色顔料について，光学顕微鏡による観察とX線分析により，その種類を明らかにした。また，朱についてはその粒子径分布の測定も行い，併せて赤色顔料の使用情況について若干の考察を試みた。

試　料

昭和40～44年の調査では，特に赤色顔料の試料採取は行われてはいなかった。3号石室では，巻頭カラー写真に見られるように，放格規矩四神鏡の出土位置周辺に鮮かな赤色顔料が認められる。これは現在も鏡に大部分が付着しており，今回はこれより採取した。昭和62年の調査時には1～4号石室の壁体石材の赤色塗彩面により採取が行われたが，石室内床面からのサンプリングは撹乱のため不可能であった。そこで，現存している遺物に付着した赤色顔料を採取することにした。玉類，特に管玉の穿孔内と鏡から行い，鏡の場合は肉眼ではっきり赤色と認められる部分の他に，鏡背の文様凹部の付着物も何ケ所か採取した。また，2，4号石室については人骨に微量が付着していたので採取し，2号石室2号人骨は微小片をそのままで試料とした。

赤色鉱物の同定

表7に試料とその採取位置，および検鏡結果，螢光X線分析とX線回折の結果，そしてこれらによって明らかになった赤色顔料の種類を示した。

検鏡は，光学顕微鏡により反射光・透過光40～400倍で行った。朱とベンガラは独特な粒子の形状を示すため，特に微粒の両者が混在していない限り，光学顕微鏡による検鏡で容易に判断がつく。

No.	出土遺構	試料の採取位置	分析結果			赤色顔料の種類	備考
			螢光X線分析	X線回析	光学顕微鏡		
1	1号石室	壁体石材	Fe	Fe_2O_3	ベンガラ	ベンガラ	昭和62年調査
2	〃	方格規矩鏡			ベンガラ・朱	ベンガラ・朱	極めて微量が付着
3	2号石室	壁体石材	Fe	Fe_2O_3	ベンガラ	ベンガラ	昭和62年調査
4	〃	1号人骨			ベンガラ・朱	ベンガラ・朱	微量が付着
5	〃	2号人骨	Hg,Fe		〃	〃	人骨片のままで試料とした
6	3号石室	壁体石材	Fe	Fe_2O_3	ベンガラ	ベンガラ	昭和62年調査
7	〃	「君宜高官」鉄内行花文鏡			朱	朱	微量が付着
8	〃	方格規矩鏡	Hg,Fe	HgS	朱の粗粒	朱の粗粒	肉眼では黒紫色
9	〃	玉群Bの管玉			朱	朱	管玉5ケ穿孔内に微量が残る
10	〃	方格規矩四神鏡	Hg,Fe	HgS	朱	朱	多量，巻頭カラー写真
11	〃	玉群Cの管玉			朱	朱	管玉5ケ穿孔内に多量が残る
12	〃	三角縁神獣鏡			朱	朱	極めて微量が付着
13	〃	捩文鏡			ベンガラ	ベンガラ	微量が付着
14	〃	玉群Dの管玉			ベンガラ?	ベンガラ?	管玉2ケ穿孔内に微量が残る
15	〃	内行花文鏡(七花文)			朱	朱	極めて微量が付着
16	〃	玉群Eの管玉			鉄錆		赤色顔料ではないと判断した
17	4号石室	壁体石材	Fe	Fe_2O_3	ベンガラ	ベンガラ	昭和62年調査
18	〃	2号人骨					赤色顔料ではないと判断した
19	5号石蓋土壙墓	床面	Fe	?	?		昭和62年調査

表7．試料の採取位置と分析結果

20試料のうち量的に充分なものについて螢光X線分析（赤色顔料の主成分元素の検出）とX線回折(赤色の由来となる鉱物成分の検出)を行った。測定条件を下記に示す。螢光X線分析：宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製螢光X線分析装置，X線管球；クロム対陰極，印加電圧；40kV，印加電流；20mA．分光結晶；フッ化リチウム，検出器；シンチレーション計数管，測定雰囲気；大気，ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°，ゴニオメーター走査速度；2θ4°／分，記録紙速度；40mm／分，フルスケール；2000cps，時定数；0.5秒。X線回折：宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製文化財測定用X線回折装置，X線管球；クロム対陰極，フィルター；バナジウム，印加電圧；25kv，印加電流；10mA，検出器；シンチレーション計数管，発散および受光側スリット；0.34°，照射野制限マスク(通路幅)；ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～60°，ゴニオメーター走査速度；2θ4°／分，記録紙速度；20mm／分，フルスケール；400cps，時定数；2秒。何れの試料も顔料以外の夾雑物などを含み，その存在に基く元素や鉱物が検出されているが，それらについては記していない。螢光X線分析により鉄，X線回折により赤鉄鉱が確認され，検鏡でもベンガラ粒子が認められたものをベンガラと同定した。螢光X線分析により水銀，X線回折により辰砂が確認され，検鏡でも朱粒子が認められたものを朱と同定した。X線分析を行っていない試料について，今回は検鏡結果のみからその種類を判断した。

朱の粒子径分布

3号石室の方格規矩鏡より採取したNo.10は朱と同定されたが，これについて顕微鏡法(光学）により粒子径分布を測定した。透過写真上の朱粒子500個について二軸平均径を測り粒度分布曲線・累積曲線を求め第1図に，透過写真を図版　に示した。また粒子の均一性を表す算術四分偏差Qaを求め，粒子径と均一性の相関関係を図に示した。粒径範囲は0.5～16.5μ，最多頻度径dmodは4.5μ，中位径dmodは4.3μである。No.10は図ではほぼ中央に位置し，上方の三者よりその粒径範囲は一段と狭くなり，16.5μ以上の粒子は除去され，より均一な赤色顔料となっている。

No.8は粒径範囲6μ～380μ，dmod180μでり，従来の出土朱とは比較できない大きさである。顔料の色はまずその成分で決まるものだが，

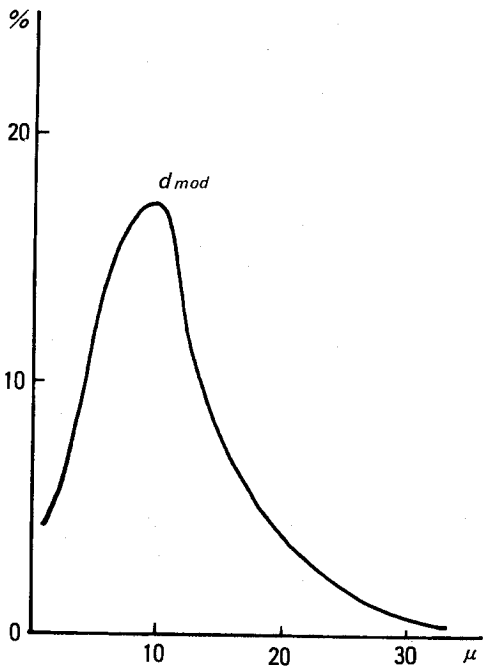


図124． No.10の粒度分布曲線

顔料粒子の大きさは色に関する重大な要素である。特に朱は粒度によって色の変化を示す代表的な顔料の一つであり，粒子が大きくなるにつれ暗色化し紫色に近くなる。No.8は黒紫色で，到底「赤色」顔料と言える色ではない。しかしながら，6～380μという限定された粒径を持つ以上，何れかの目的と方法により分級された製品（粗粒の朱）であることに注意したい。

赤色顔料使用状況の推定

堅穴式石室の構築過程で作業の区切りごとに赤色顔料の塗布・散布が行なわれたことは多くの例から指摘されており，埋葬儀礼に伴うものであることが広く理解されている。横穴式石室内面の赤色塗彩は堅穴式石室のそれとは異なり，石室構築後に行なわれるものである。本古墳の1～4号石室の内面はベンガラで塗布されていた。4号石室については石室構築後の塗布が観察されており，他の石室もその状態から見ておそらく同様と考えられる。

埋葬施設を赤色にする風習と共に遺骸にも赤色を施す行為があり，ベンガラと朱を使い分ける。1号石室では，中央部で出土の鏡にベンガラと朱が微かではあるが付着していたことから，ベンガラは床面に塗布あるいは遺骸に散布され，朱は遺骸の頭胸部周辺に施されたものと考えられる。2号石室の二体の人骨からもベンガラと朱が検出されたので，遺骸には1号石室同様二種の赤色顔料が使い分けて用いられていたと考えられる。これに対して4号石室の場合，2号人骨に認められた薄い赤色部分は顔料とは認められず，床面の

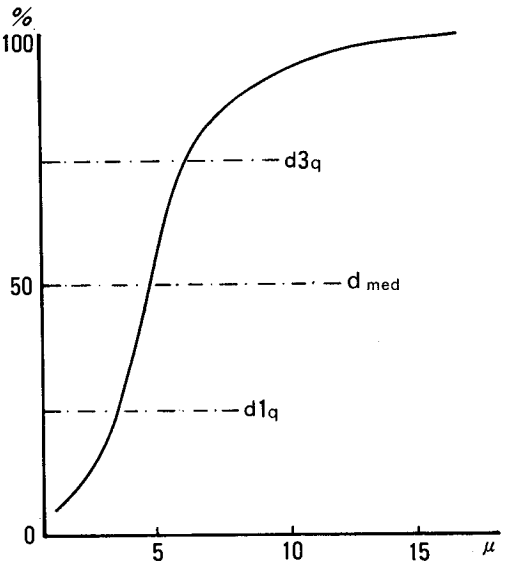
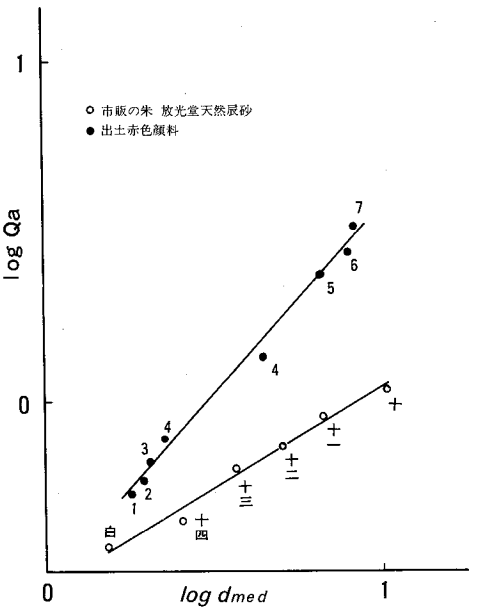


図125. No.10の粒度累積曲線



1 春日市門田K23
2 春日市門田K21
3 前原町三雲南小路K1
4 老司古墳3号石室No10
5 小郡市津古生掛古墳
6 福岡市井尻B SK2
7 福岡市野方塚原SⅢ

図126. 出土朱の粒子径と均一性の相関関係

状況も不明であるため，床面や遺骸に赤色顔料が施されていたかどうかは推定できない。５号石蓋土壙墓は特に赤色が認めされたわけてはなく，微量の朱が施された場合を考えて床面の土をサンプリングしたものだが，今回の分析では赤色顔料は検出されなかった。

３号石室床面には方格規矩四神鏡の出土位置周辺に鮮やかな朱が残り，これに近接する玉群Ｃにも朱が残存していた。この北側では「君宣高官」内行花文鏡と方格規矩鏡が重なって出土しており，前者には微量の朱，後者には粗粒の朱が付着していた。三角縁神獣鏡，玉群Ｂにも朱のみが認められた。これに対して，南に位置する捩文鏡からはベンガラのみで朱は見出せず，玉群Ｄにも朱は認められず，ベンガラ？のような赤色顔料が認められた。また西南隅で出土した内行花文鏡からはベンガラはなく極めて微量の朱が認められた。以上の検出結果から３号石室の埋葬は少なくとも３体は行なわれたと考えられる。１体は朱のみが多量に，１体は朱のみが微量，他１体はベンガラのみが（あるいは非常に微量の朱が使われていたのだが鏡等に付着するほどではなかった）各々の遺骸に施されていたと推定される。

３号石室の初葬と考えられる遺骸には方格規矩四神鏡側に鮮やかな朱が，方格規矩鏡には赤くない「黒い」粗粒の朱が付着していた。粗粒の朱は辰砂から朱を精製する過程の最終段階であり，これを軽く磨れば直ぐに赤くなる状態である。前期古墳に副葬される平坦な磨面を持つ石杵と石臼はこの「黒→赤」の工程に用いられたものかもしれない。粗粒の朱は鮮やかな朱を作った時の残りなのだろうか。石室面に見られた赤色顔料の拡散状況を実見できず非常に残念である。今後，この粗粒の朱の類例に期待したいが，赤くないため見逃されることも考えられる。墳墓での調査には床面の土のサンプリングを望むものである。

〈文献〉

市毛　　勲　『朱の考古学』雄山閣，1975

小口　八郎　「日本画の着色材料に関する科学的研究」『東京芸術大学美術学部紀要』５　1969

久保輝一郎　『粉体―理論と応用』丸善，1979

見城　敏子他　「古代赤色顔料について」『考古学雑誌』73－３　1988

神保　元二　『粉体の科学』講談社，1985

本田　光子　「赤色顔料の分析について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』９，福岡県教育委員会，1978　「墳墓出土の赤色顔料小考」『肥後考古』　６　1987

「弥生時代の墳墓出土赤色顔料」『九州考古学』62　1988

「井尻Ｂ遺跡出土の赤色顔料について」『井尻Ｂ遺跡』福岡市教育委員会，1988

（本田光子・成瀬正和）

3．石材

老司古墳において石材が使用されている部分は，a）石室の側壁；b）石室の蓋石；c）墳丘表面のふき石と石室の裏込め石である。今回，その石材の産地を探る目的をもって研究を行った。そのためにとられた方法は，1）古墳石材の岩石学的性質の研究；2）その岩石に関するこれまでの地質学的・岩石学的研究結果との比較・考察である。

研究の結果，十分とはいえないが次のことがわかった：a）石室側壁の岩石はすべて，粗面玄武岩の溶岩で，相ノ島や能古島，それに玄界島，津屋崎などから運ばれてきたものと考えられる。b）4号石室の蓋石は，斑状カリ長石をもつ花崗岩で，ここ老司から那珂川上流の筑紫耶馬溪を含む福岡市の南部地域に広く分布する早良花崗岩に相当する。c）ふき石と裏込め石に使われた円礫は，上記の早良花崗岩と，ペグマタイト，石英岩，閃緑岩などである。これらの礫は付近の那珂川の河原から集められたものであろう。

なお，a）の推定を裏付けるためには，粗面玄武岩の採石候補地の現地調査と岩石学的研究が必要である。

1）石室側壁の岩石（粗面玄武岩）

小口積みにされた側壁の岩石は，1～4号石室すべてにわたって同じ種類で，板状の粗面玄武岩である。1号石室から1個，3号石室から2個，4号石室から1個のサンプルを採集した。岩石は，暗灰色，緻密であり，cmオーダの厚さで板状に割れ易く，その板状節理面に平行で不明瞭な縞模様が認められる。これは溶岩にみられる一種の流理構造である。そして，緻密な基質の中に，小さい黒色斑点が散点する。その大きさ・量は岩石片ごとに異なり，一般には1㎜以下の大きさで，まばらであるが，1号石室のサンプルでは最大2～3㎜の大きさにも達し，量も多い。

（1）偏光顕微鏡による観察

一般に火山岩は，結晶の形が大きい斑晶と，小さい結晶の集まりである石基から構成され，斑状組織を呈する。石基は，短冊状斜長石の準平行的配列によって粗面岩質組織を示す（図版70・71）。

この岩石の斑晶鉱物は，主としてかんらん石で，まれに単斜輝石，ときに磁鉄鉱が認められる。石基鉱物は斜長石，アルカリ長石，単斜輝石，黒色鉄鉱，褐色角閃石，金雲母質黒雲母，燐灰石などである。

（2）斑晶鉱物

1）かんらん石：大きさは，ふつう0.2～0.6㎜大で，まれに1㎜に達する。ほとんど無色に見える。単独結晶のこと，あるいは数個の結晶が集まって集斑晶をつくることがある（図版72－5）。一方にやや伸びた多角形断面を示す（半自形～他形）（図版70－1など）。あるものは，結晶

の周縁あるいは割れ目に沿って，赤褐色のイディングス石に変質している。

2）単斜輝石：かんらん石よりやや小形で，短柱状の微斑晶をなす。この鉱物の出現はまれである。淡黄緑色を呈し，結晶の方向によって色が変化する多色性という性質はきわめて弱い。

3）黒色鉄鉱（磁鉄鉱およびチタン鉄鉱）：ときどき0.2㎜大の微斑晶として現れる。正方形あるいは不規則な断面を示す（図版72－1･3･5など）。ときにかんらん石と集斑晶をつくる（図版70－3,71－5など）。

4）オパサイト：0.01㎜以下～0.05㎜大の細粒単斜輝石と黒色鉄鉱の集合体である。ときに，長石，かんらん石，隣灰石などが伴う（図版72－1・2・3・4）。形は不規則～柱状で，大きさはかんらん石斑晶大から大きいものは長さ2～3㎜にも達する柱形をなすことがある。1号石室のサンプルはオパサイトを多量に含み，大形のものも多い。

（3）石基鉱物

1）斜長石とアルカリ長石：　斜長石は長さ0.1～0.2㎜の短冊状をなす。双晶がふつうで，十字ニコル下では，明るさの違う細いバンドが繰り返し現れる（図版70－2・4・6,71－2・4・6）。1つの結晶の中で，石灰質の中心部からソーダ質の周縁部へ化学組成が漸移的に変化する現象（累帯構造）がしばしば観察される。アルカリ長石は斜長石結晶をとり巻いたり，それらの間を充塡している。屈折率が斜長石より低い。

2）単斜輝石：長さ0.03～0.15㎜の短柱状～粒状をなす（図版70－1・3・5,71－1・3・5）。その方向は斜長石短冊の方向と平行なことが多い。色は淡黄緑色で，多色性をほとんど示さない。

3）かんらん石：0.04㎜±大の粒状をなし，ときにイディングス石に変化する。量は輝石より少ない。

4）黒色鉄鉱：0.02～0.1㎜大で，正方形あるいは不規則な断面を示す。単独で，またはかんらん石，輝石結晶に伴って産する。

5）褐色角閃石：石基の長石やかんらん石，輝石の粒間をうめて現れ，形は不規則である（図版72－6）。量はきわめて少ないが，つねに存在する。角閃石に特有な規則的な割れ目（110面のへき開）が不明瞭である。鉱物の色は，結晶の方向により，きわめて淡い黄色から赤褐色，緑褐色に変化し，多色性が強い。

6）金雲母質黒雲母：石基の長石やかんらん石，輝石の粒間をうめ，不規則な形を示す（図版72－6）。褐色角閃石と随伴することがある。量は少ないが，つねに現れる。多色性は，X＝きわめて淡い褐黄色，Y＝X＝赤褐色である。

7）燐灰石：針状結晶をなし，石基に伴われる。

2）4号石室の蓋石（早良花崗岩）

この岩石は，2㎝前後の大きさの斑状カリ長石をまばらに含む花崗岩（早良花崗岩）（西日本

新聞社，1982）である。肉眼的に，基質部は，中～粗粒の斜長石，石英，カリ長石，そして細かい鱗片状の黒雲母からなり，全体として灰色を呈する。黒雲母，斜長石などの平行配列は認められず，岩石は塊状構造を示す。

3）墳丘表面のふき石と4号石室の裏込め石（早良花崗岩，ペグマタイト，アプライトなど）

よく円磨された拳大の円礫で，裏込め石ではときに径20cmに及ぶものもある。岩石種は，斑状カリ長石をもつ早良花崗岩，アプライト，ペグマタイト，石英岩，閃緑岩などで，量的に花崗岩が多い。

4）考察

ここでは，前述の観察に基づいて，それぞれの岩石の産地について考察する。

（1）石室側壁の粗面玄武岩

山陰から北西九州にかけての沿岸地域には，新生代の玄武岩を主とする各種の火山岩類が分布し，古くから環日本海アルカリ岩石区とよばれている。その中で，粗面玄武岩は，中新世末期ごろ（KARAKIDA,1967）に，アルカリ岩系の第2期火山活動時に噴出している（OJI,1961）。そして，北九州－福岡地域では，東から六連島，津屋崎，相ノ島，玄界島，能古島，毘沙門山，

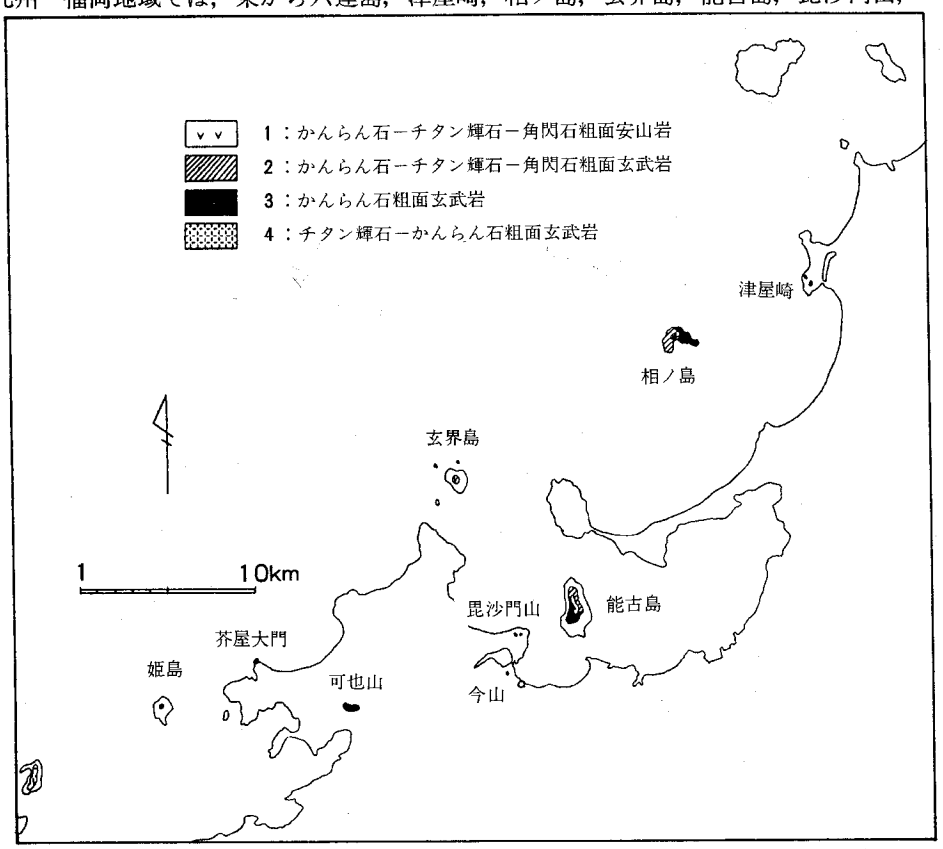


図127. 福岡付近における新生代玄武岩質岩石の分布（OJI,1961による）

今山，芥屋大門，可也山，姫島などに分布している（図127）（OJI,1961；西日本新聞社，1982，地質図）。

これらのうち，毘沙門山・今山・芥屋大門では，旧火山の下の火道をうめた岩石（岩頸）が侵食作用によって露出した部分が主に分布し，溶岩はほとんど見られない。一方，石室の岩石は，前述のように，板状節理や流理構造を示す溶岩であると考えられるので，毘沙門山・今山・芥屋大門は石材の採石候補地から一応除かれうるであろう。

能古島および可也山の粗面玄武岩サンプルを検鏡すると，鉱物組成，組織などが石室のものによく似ているが，詳しくみると，とくに能古島のものでは，石基の粒度が石室のものより細粒であって（図版71－5），両者は完全には一致しない。しかし，たまたま手持ちのサンプルはそうであるが，能古島や可也山におけるほかの場所には石室のものと同じ岩石が存在するかもしれない。

石材の運搬方法としては，那珂川を利用した船の可能性が最も強いと考えられる。そこで，遠方の六連島・姫島を一応のぞくと，能古島・相ノ島・玄界島・津屋崎が採石候補地として残る。

これ以上に岩石の産地を特定するためには，現地調査とサンプリングを行い，より詳しい岩石学的性質を調べて，石室の粗面玄武岩と比較・検討することが必要である。

なお，前回の老司古墳調査概報（1969）によれば，1～4号石室の構築時期は，3号が最も古くて「5世紀初頭」，1号は「5世紀前半代」，2号は「5世紀中葉頃」と推定されている。したがって，それに応じて，各石室石材の採石時期も異なっていたと考えられる。しかし，岩石はいずれも，性質がきわめて類似した粗面玄武岩である。これには次の3つのケースが考えられる：1）口伝により同一場所から採石した；2）それぞれ違った場所から採石したが，同じ構造の石室をつくるために選んだ岩石として，たまたま類似の粗面玄武岩を捜しあてた；3）後期の石室構築を考慮して，最初に大量の石材を採石し，保存しておいた。

石材の“置き場跡”などが発見されれば3）のケースも考えうるが，構築の年代差から推して，個人的には，1）の可能性が最も強いと推定している。

（2）4号石室蓋石の花崗岩

この岩石の性質は早良花崗岩と一致する。早良花崗岩は，西が長垂，東が三郡山，南が筑紫耶馬溪南方の七曲峠付近で画される福岡市南部の地域に広く露出する（唐木田，1985；西日本新聞社，1982）。老司古墳は，この花崗岩の風化土壌の上につくられたものであり，老司から約3Km南東の片縄山には，早良花崗岩の石切り場がある。

したがって，老司付近のどこかに出ていた板状に割れた早良花崗岩が，この蓋石に利用されたと考えられる。

（3）墳丘表面のふき石と4号石室の裏込め石

岩石の性質からみて，円礫は明らかに早良花崗岩地域から由来し，河川の作用によって円磨されたものである。老司のすぐ東を北流する那珂川は，早良花崗岩地域の南限付近に源を発し，筑紫耶馬溪を刻みながら早良花崗岩岩体の中央部を横断している。

したがって，ふき石，裏込め石の円礫は，老司に近い那珂川の河原から集められたものであろう。

引用文献

福岡市教育委員会（1969）：老司古墳調査概報。17頁，福岡市。

KARAKIDA,Y.(1967)：Color changes in xenolith zircons. Jour.Geol.Soc.Japan,Vol.73，419-428.

唐木田芳文（1985）：北九州花崗岩の地質学的分類。日本応用地質学会西日本支部会報，6号，2-12。

西日本新聞社（1982）：福岡県百科事典。西日本新聞社。

OJI,Y.(1961)：Petrology of the Cenozoic rocks of western San-in and North Kyushu, Japan. Bull. Fukuoka Gakugei Univ., Special Volume, 89p.

図版の説明

図版写真はすべて，石室側壁および可也山・能古島の粗面玄武岩の偏光顕微鏡写真である。図版70の下部のスケールバーは0.5㎜で，図版71・72にも共通。

図版70

1・2：1号石室

3・4：3号石室－1

5・6：3号石室－2

奇数番号は平行ニコル，偶数番号は十字ニコル下での写真を示す。図版71についても同様。

平行ニコル下での写真（1・3・5）の灰色部は斜長石とアルカリ長石からなり，そこを十字ニコルで見ると（写真2・4・6），短冊状の斜長石が，双晶していること，そして準平行的に配列して，粗面岩質組織を呈していることがわかる。また，灰色部のあちこちに，燐灰石の針状結晶が存在する。

写真1・3・5の長石の間に散らばり，浮き上がって暗灰色に見える短冊状～粒状結晶は，主として単斜輝石で，粒状のあるものはかんらん石である。平行ニコル，十字ニコルともに真っ黒に見える大小の結晶は黒色鉄鉱である。

写真1～6の中の大形結晶はかんらん石斑晶である。写真3・4では，かんらん石と黒色鉄鉱が一緒になって集斑晶をつくっている。

図版71

1・2：4号石室

3・4：可也山粗面玄武岩

5・6：能古島粗面玄武岩

岩石の構成鉱物や組織は，図版70のものと同一である。しかし詳細に見ると，可也山の粗面玄武岩は3・4号石室のものと全般的によく類似しているが，能古島のものは，それらより細粒である。

図版72

すべて平行ニコル下の写真。

1：1号石室　　2：3号石室－2

3：可也山　　4：能古島

5：4号石室　　6：1号石室

写真1～4はオパサイト，主として細粒の単斜輝石と黒色鉄鉱の集合からなり，長石などを伴う。輝石と鉄鉱の量比は個体ごとに異なる。

写真5は，かんらん石の集斑晶。黒色鉄鉱を伴う。

写真6は，石基の褐色角閃石（H）と金雲母質黒雲母（P）。いずれも，石基をつくる長石と輝石結晶の間をうめており，形が不規則である。

（唐木田 芳文）

4．老司古墳出土須恵器の螢光X線分析

1）はじめに

胎土分析によって土器の産地を推定するためには，各地の土器の化学特性に関する莫大な数の基礎データを必要とする。長年にわたる基礎研究により，粘土を高温で焼成しても化学特性に変動がないこと，須恵器を分析して得られる化学特性は素材粘土の化学特性であること，そして，窯跡出土須恵器の化学特性には地域差があること，その地域差は地質構造に関連があることなどが明らかにされて以来，遺跡出土須恵器の分析結果を窯跡出土須恵器の化学特性に対応させることによって，その産地を推定することが可能になった。

これまでに知られている地域特性因子のうち，K，Ca，Rb，Srの4因子は母岩の長石類の化学特性に関連したものであると推定されている。九州北部では佐賀市周辺から東へ，牛頸窯跡群を経て天観寺山窯跡群に至るまで，上記4因子からみて同一岩帯とみられる花崗岩帯が走る。この花崗岩はCa，Sr量が多いという特徴をもつ。したがって，この岩体沿いに分布する神篭池窯，新貝窯，牛頸窯跡群，天観寺山窯跡群などの須恵器は類似した化学特性をもつことが理解される。この花崗岩帯の南限は甘木市付近にあり，この辺りから南へ堆積層が拡がる。そのため，甘木市の朝倉窯跡群（小隅，山隅，八並窯）の須恵器は前記，九州北部の窯跡出土須恵器とは胎土分析によって容易に識別される。一方，5～6世紀代の全国各地の古墳からは，その胎土が大阪陶邑産須恵器と同質である須恵器が多数検出されている。大阪層群の粘土はCa，Sr量が少ないという化学特性をもち，この点で九州北部産の須恵器とは容易に識別される。また，朝倉窯跡群の須恵器はK，Rb量が少なく，Ca量が多い点で，大阪陶邑産の須恵器とも容易に識別される。この結果，九州北部の古墳出土須恵器の産地は地元，九州北部産か，朝倉窯跡群産か，それとも，大阪陶邑産かを胎土分析によって容易に推定することができる。本報告では老司古墳，井尻B1号墳から出土した須恵器の胎土分析の結果について報告する。

2）分析結果

はじめに，生データを分布図上にプロットしてデータ解読した結果から説明する。

図128には井尻B1号墳出土須恵器のRb－Sr分布図を示す。この図にはまた，朝倉窯跡群（小隅，山隅，

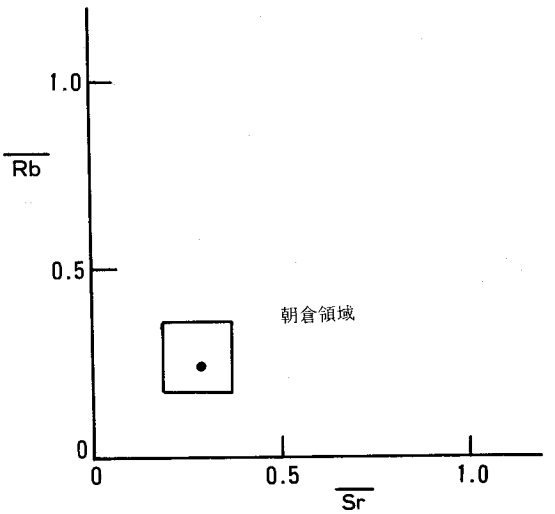


図128． 井尻B1号墳出土須恵器のRb－Srプロット

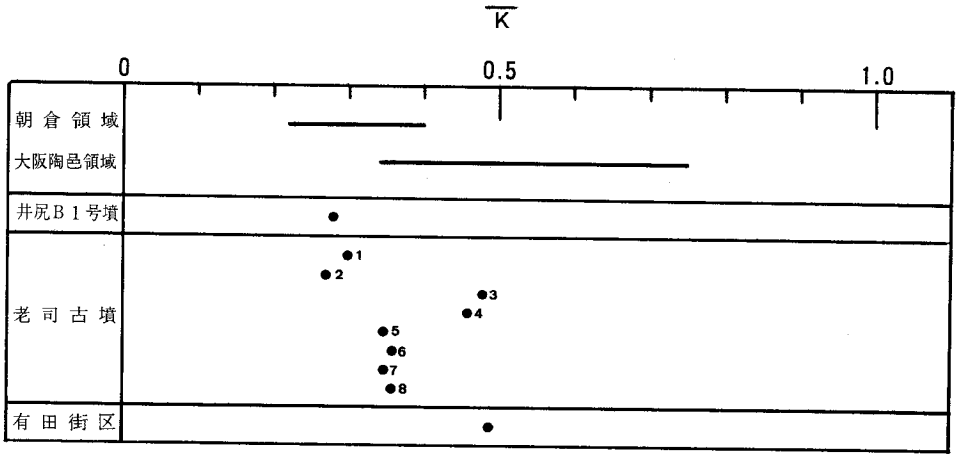


図129. K因子の対比

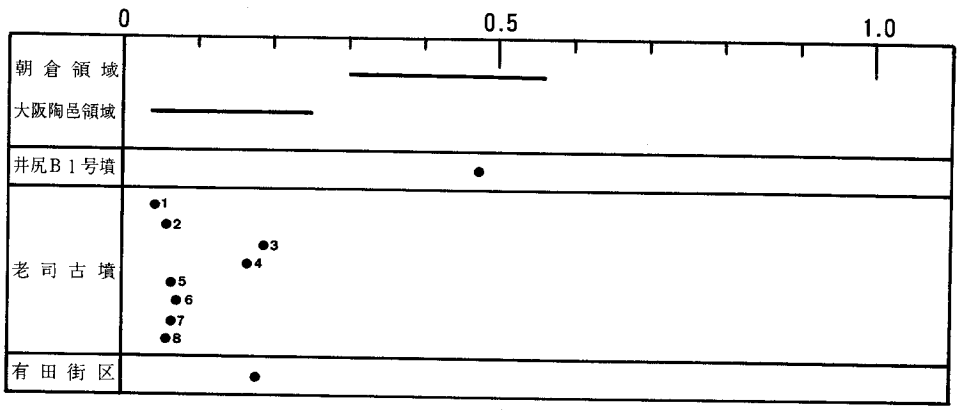


図130. Ca因子の対比

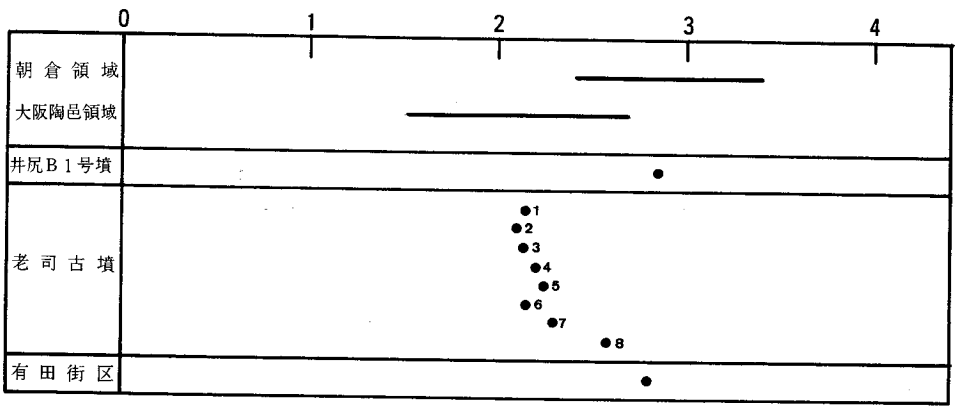


図131. Fe因子の対比

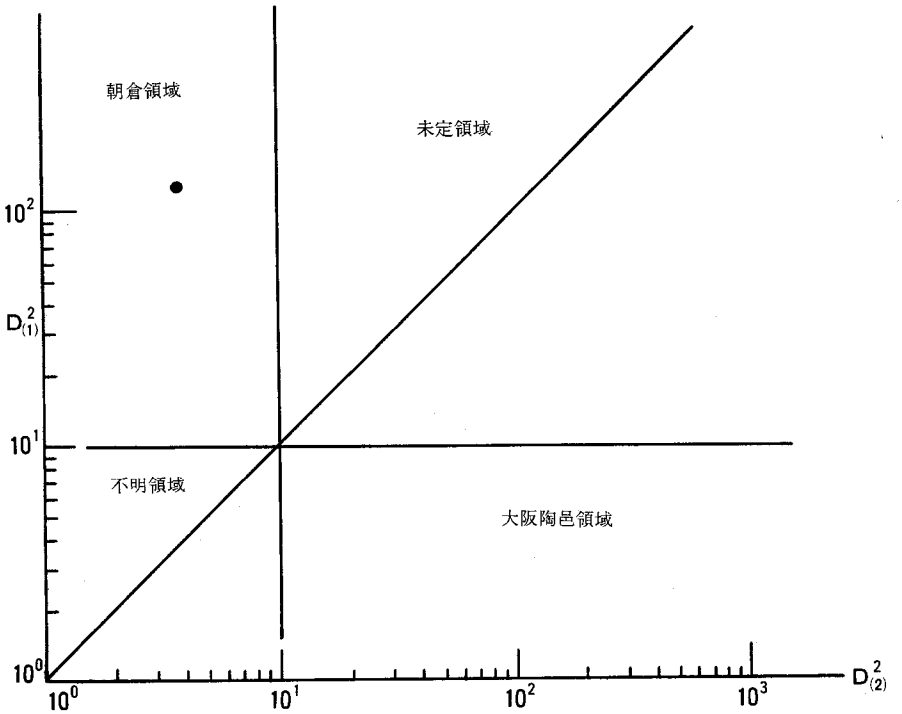


図132. 井尻B１号墳出土須恵器のD－Dプロット

八並窯)出土の約100点の須恵器の分析値を全て包含するようにして朝倉領域を示してある。勿論，この領域は定性的なものであるが，朝倉窯跡群産であるかどうかの可能性を探る上では有効である。図128より，井尻B１号墳の須恵器は朝倉領域に分布し，朝倉窯跡群産の可能性が出てきたので，次に，他の因子についても対比してみた。図129～131にはそれぞれ，K，Ca，Fe因子を対比してある。井尻B１号墳の須恵器は全因子で朝倉領域に対応していることがわかる。

この結果をさらに定量的に確認するため，マハラノビスの汎距離を計算し，大阪陶邑群，朝倉群の２群間判別分析を行った。結果を図132に示す。$D^2_{(1)}$，$D^2_{(2)}$はそれぞれ，K，Ca，Rb，Srの４因子を使って計算した大阪陶邑群，朝倉群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗である。これまでのデータより，自群に帰属する経験的帰属条件は$D^2_{(自群)}<10$であり，かつ，他群に帰属しないための条件，$D^2_{(他群)}>10$が必要である。図132より，$D^2_{(1)}<10, D^2_{(2)}>10$が大阪陶邑群に帰属する条件であり，$D^2_{(1)}>10$，$D^2_{(2)}<10$が朝倉群に帰属するための条件となる。井尻B１号墳の須恵器は朝倉群に帰属することは明らかである。したがって，この須恵器は朝倉窯跡群産と推定できる。

次に，老司古墳出土須恵器のRb－Sr分布図を図133に示す。この図には約100点の大阪陶邑産須恵器を包含するようにして大阪陶邑領域を示してある。８点とも朝倉領域をずれており，朝倉窯跡群産の可能性は少ないことを示唆している。また，これらの須恵器は図130のCa因子でも，図131のFe因子でも朝倉領域には対応せず，むしろ，大阪陶邑領域によく対応している。判

別分析の結果は図134に示してある。８点とも，大阪陶邑群への帰属条件を十分満たしており，大阪陶邑窯跡群産と推定される。

なお，最近，百済，新羅地域の窯跡出土陶質土器の分析値が相当数出されており，そのデータをみると，従来から言われていたように陶質土器にはCa, Sr量が多いことが再確認された。また，K,Rb量が多い陶質土器も新たに確認された。このデータを参考にすると，老司古墳の８点の須恵器のうち，No.３，４以外の６点はCa, Sr量が少なく，陶質土器ではあり得ない。やはり，大阪陶邑産と言えよう。しかし，No.３，４は大阪陶邑領域と朝鮮領域の重複する領域に分布し，他の因子（Laなどの希土類元素）をチェックしない限り，胎土分析からは陶質土器ではないとは言い切れない。この点については考古学的にも外見観察

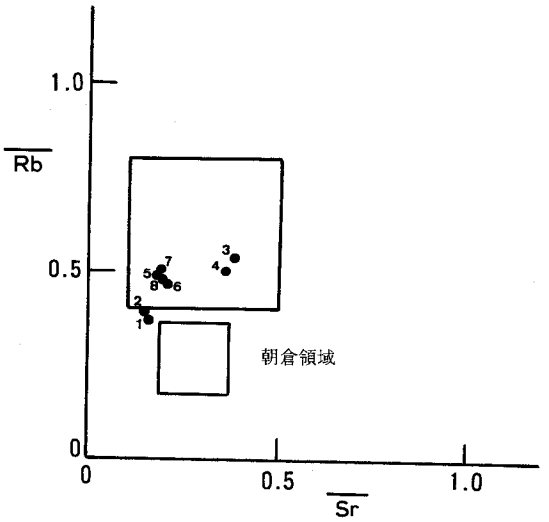


図133. 老司古墳出土須恵器のＲｂ－Ｓｒプロット

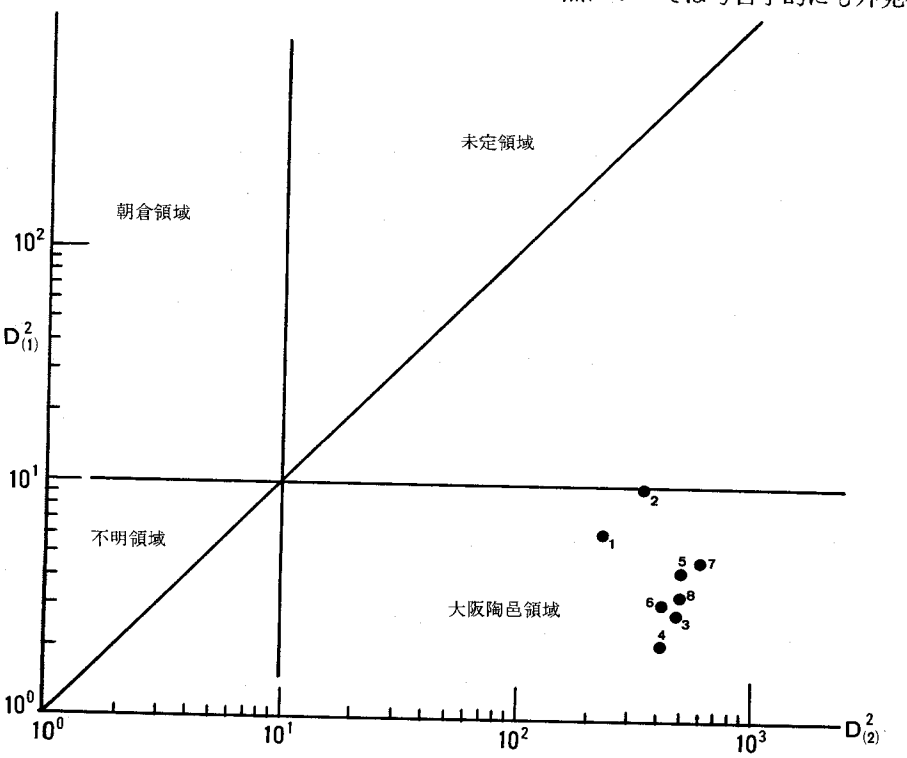


図134. 老司古墳出土須恵器のＤ－Ｄプロット

でチェックしておく必要があろう。

図135には，有田街区から出土した須恵器のRb－Sr分布図を示す。朝倉領域には分布せず，大阪陶邑領域に分布することがわかる。そのことは図129，130のK，Ca因子でも確かめられる。図136の判別分析の結果でも大阪陶邑群に帰属することがわかる。ただ，この須恵器も老司古墳のNo.3，4と同様，胎土分析では目下のところ，陶質土器であることの否定はできない。後日，放射化分析によりLa因子で確認してみる予定である。

なお，分析結果は表8にまとめておく。

（三辻　利一）

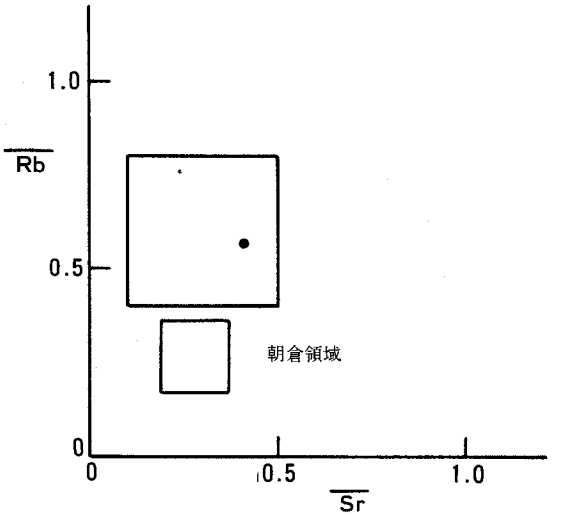


図135.　有田街区出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図

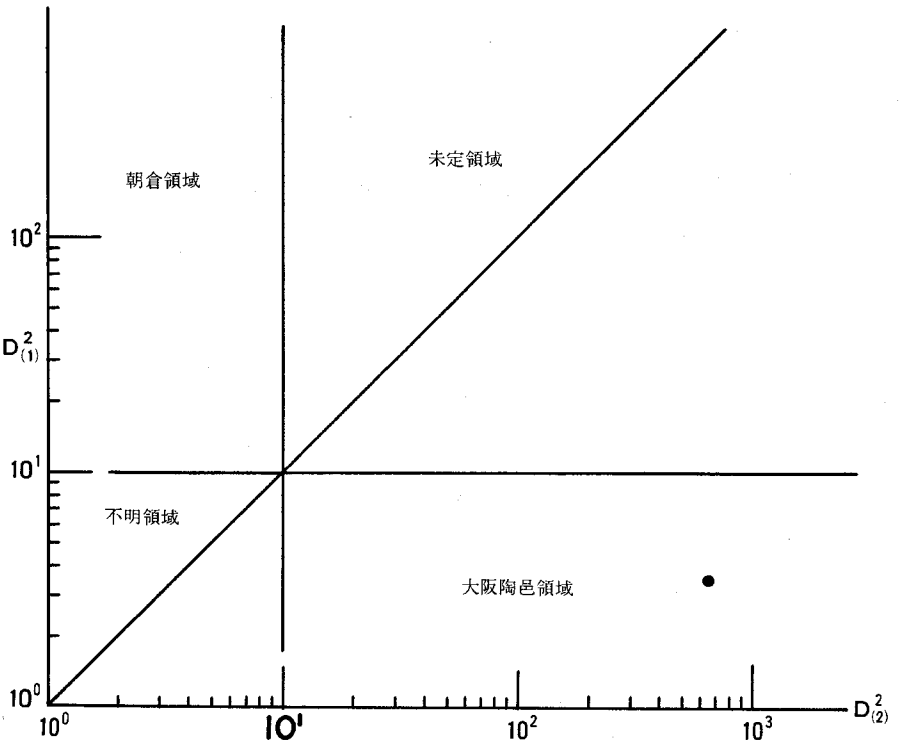


図136.　有田街区出土須恵器のＤ－Ｄプロット

遺　跡　名	試料番号	試　　料	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
井尻B1号墳※1	(甕)	井尻B１号墳周溝内	0.283	0.475	2.85	0.234	0.287	朝倉窯跡群
老司古墳	1	RZKII29	0.298	0.043	2.15	0.370	0.162	大阪陶邑
	2	RZKII 4　　前方部上	0.269	0.058	2.11	0.358	0.149	〃
	3	RZKII　　クビレ西半	0.478	0.192	2.14	0.539	0.377	大阪陶邑又は朝鮮半島
	(器台)							
	4	RZKII 5　　クビレ部	0.458	0.167	2.21	0.504	0.355	大阪陶邑又は朝鮮半島
	(器台)							
	5	RZKII11　クビレ西半	0.345	0.067	2.25	0.479	0.192	大阪陶邑
	6	〃　　墓道西断面	0.359	0.076	2.16	0.468	0.200	〃
	7	RZKII17　クビレ西半	0.351	0.067	2.30	0.501	0.187	〃
	8	RZKII24　クビレ西半	0.360	0.059	2.59	0.485	0.192	〃
有田１号住居址※2								
(須恵器)			0.486	0.183	2.80	0.565	0.411	大阪陶邑又は朝鮮半島
5世紀前半代								

表８．分析値　(岩石標準試料JG－１による標準化値で示す)

※１　井尻B１号墳は福岡市南区井尻五丁目1715に所在する古墳である 分析した資料は報告書36頁のFig.27-2の須恵器である。
山口譲治他編1988「井尻B遺跡」福岡市教育委員会

※２　有田１号住居址は1977年に福岡市教育委員会によって調査された、有田遺跡群第６次調査地点(31街区)において検出された遺構である。調査報告書は未刊である。

Ⅷ　考察

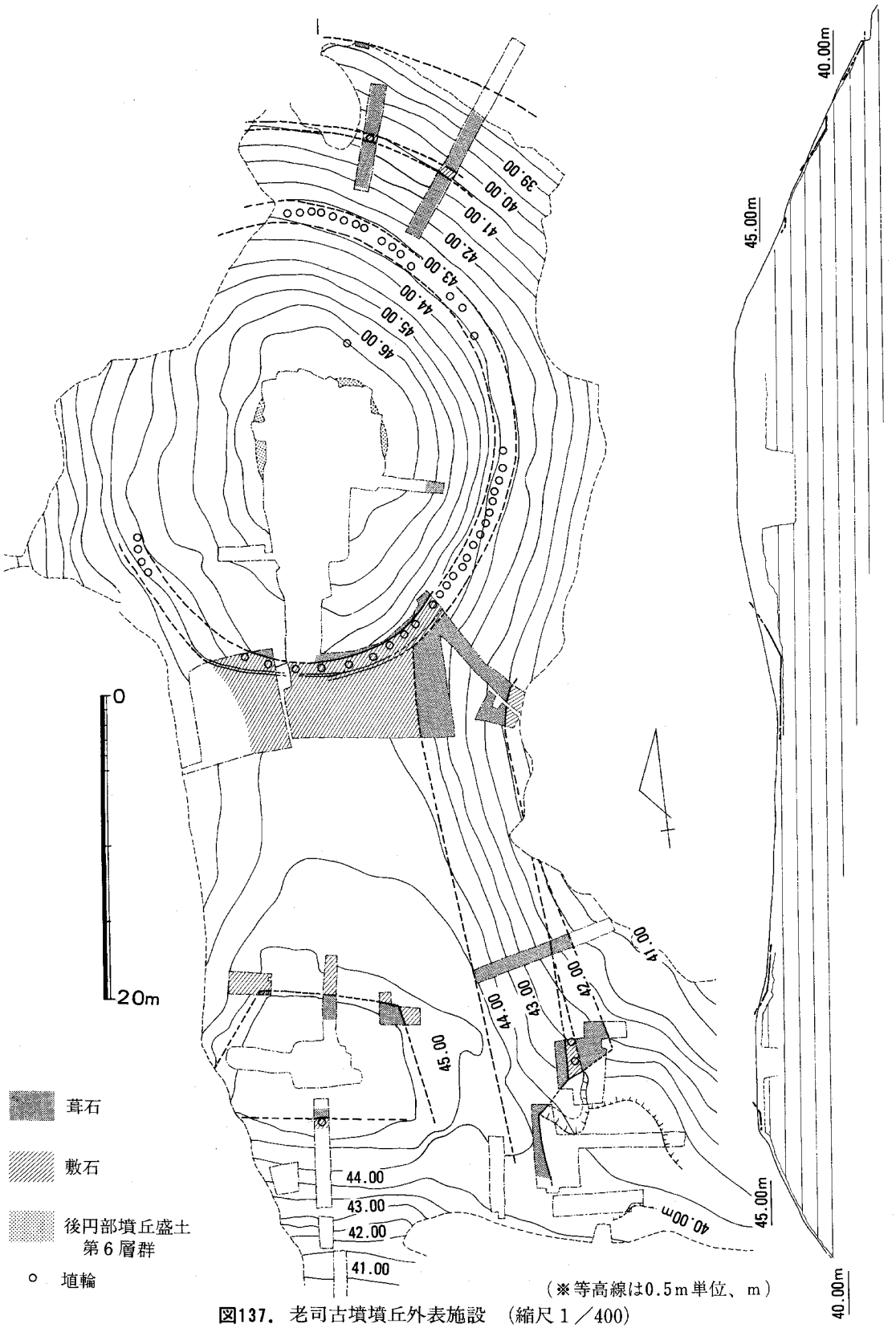
1．老司古墳の墳丘復元

1）墳丘形態について

老司古墳は那珂川西岸の丘陵上に築造されている。丘陵は花崗岩の風化媒乱土を基盤としている。古墳が選地するのは，おおよそ東西に500m程連なるこの丘陵の西端であり，丘陵西端が北方に屈曲するその先端部である。東～北側に広がる沖積地との比高差は約30mである。古墳の主軸は丘陵の屈曲して延びる方向と一致しており，N－06°－Eを測る。したがって主軸はほぼ真北を向いている。後円部を丘陵先端にし，前方部を丘陵の連続する南側に向ける。そのため前方部の南東側は本来の丘陵へと連なる。また，後円部北東側には沖積地を挟んで福岡平野や遠くに博多湾を望む広い視界を得ている。

老司古墳の調査前の状況は周囲を造成や土砂採掘，また植栽，道路，第２次大戦時の防空壕などの掘削で相当の破壊を受けていた。特に墳丘西側の斜面，墳端線は完全に失われていた。墳丘形態については墳丘東側～南側の調査成果から検討する。すでに1969年までの調査成果によって全長90m，後円部径45m，前方部長30m以上とされている。この数値はトレンチ調査の結果など墳端の確認を通じて求められたものではなく，残存した地形変換点に墳端の可能性を求め，推定されたものである。したがって今回示した数値を以ってその修正としたい。

前方部は東辺側の墳端と形態が把握できた。くびれ部であるKトレンチ，Ｊ調査区での墳端はＦトレンチの下部石列を経由しＢトレンチの二段目葺石の根石列に連続する。その間Ｂトレンチの向って3.5～５°の傾斜でゆるく上る。B，Ｆトレンチではその外方に最大３m拡がる葺石を設け墳端を拡張している。そこでの墳端線を示す石列はほぼ水平であり，その方向とＦトレンチでの状況からＪ調査区から延びる墳端線に直接接続すると推定される。次に前方部前面から東側隅部は丘陵との連続部分における墳端はA，Ｂトレンチで確認できたが，前方部を丘陵の自然地形から掘割りなどで断ち切ることなく，僅かな地山整形の後に葺石で区分している。東側くびれ部から延びる墳端線と前方部東側隅部付近の墳端線とは，比高において約２m，平面で約６mの段差が生じている。それは丘陵の屈曲部付近の斜面で直接接続している。そのためにこの部分での墳端線は平面で鍵形になっている。ちょうど前方部隅部が四角く削り取られた形となっている。前方部前面は植林などに伴なう造成で古墳に関係する施設は全く遺存しなかった。しかし，次の点で前方部前面の墳端は標高約44m付近にあった可能性が強い。まず，僅かに地山変換点があること，葺石の残骸と見られる円礫がこの付近まで比較的まとまって認められること，Ｇトレンチ下部の流土中に含まれる円礫が少なく，残存する前方部前面の斜面全面に



（※等高線は0.5m単位、m）

図137. 老司古墳墳丘外表施設　（縮尺1／400）

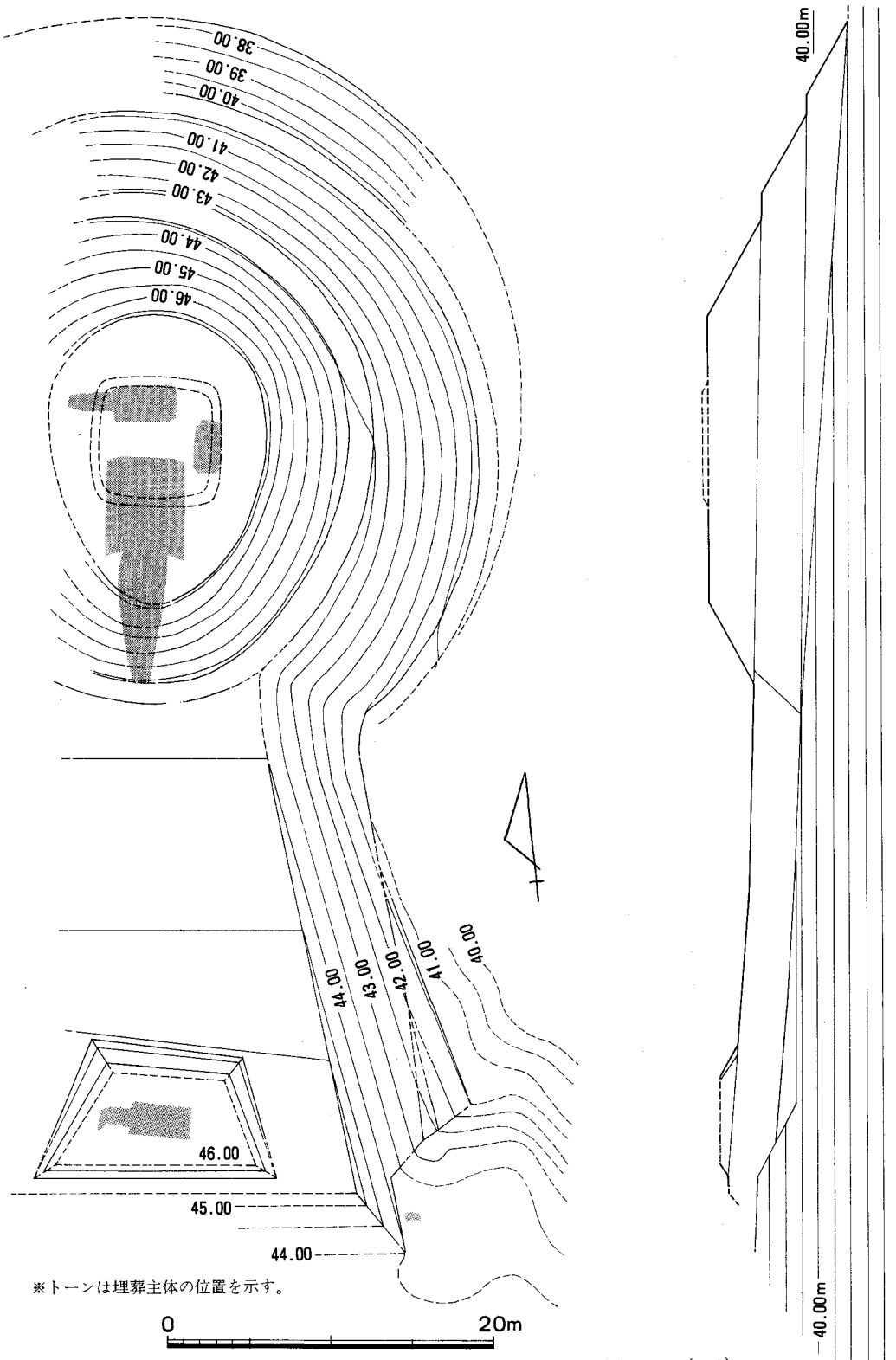


図138. 老司古墳墳丘復元推定図 (縮尺1／400)

かつて葺石が存在したとは考えられないことなどである。また，そうであるならAトレンチでの葺石による墳端線が無理なく屈曲，連続したと推定される。

前方部頂は広い平坦面と4号石室の構築された壇状の施設がある。平坦面といっても緩かな傾斜があり，後円部三段目付近から13mの位置まで前方部に向って約1°の傾斜で上り，さらに傾斜を約5°に換え，前方部前面線に達する。その間の比高差は約1.5mを測る。壇状の施設は前方部頂平坦面の先端部にあり，前方部に向って拡がる略台形を呈している。平面では主軸線に対して非対象形を呈する。その規模は基底面で下辺約15m，上辺約8.5m，長さ約7.5～8.5mを測る。壇状の施設の斜面全周が傾斜約30°で構築されている。高さは上面が削平されているために不明であるが，北側で1mを上まわる。

後円部は三段築成であるが，平面形は各段築面を通じて不正円形となる。二，三段目は卵形を呈し，その細い部分が前方部に接続する。まず，後円部一段目の墳端はNトレンチにおける標高37.8m付近の石列とみられた。その他の部分では撹乱のために不明である。くびれ部のKトレンチで墳端線の外側に幅1m以上の平坦面が設けられているが，この平坦面が前方部側に連続しないことから，後円部側の墳端線はこの平坦面の外縁線に連続し，くびれ部付近で解消していると推定される。この墳端線は側面観で約4°の傾斜で前方部方向に上がる。また，墳丘斜面の等高線の状況から，この一段目の平面形も正円をなさず，主軸方向に長い楕円形を呈するとみられる。一段目の高さは最大約2.5mを測り，墳丘斜面の傾斜約30°である。後円部二段目の基底線はL，Mトレンチで確認した。これは先の墳端から約6mの位置にあり，その方向からKトレンチのくびれ部石列に連続するとみられる。この基底線は側面観で約1°の傾斜を持つ。二段目の高さは2.7～2.9mを測り，墳丘斜面は27～30°の傾斜となる。後円部三段目の基底線はR，T調査区，Kトレンチにおいて確認し，1969年の調査における第4トレンチで概ね位置が推定された。Nトレンチの墳端線から約12mの位置にあたる。三段目の平面規模は主軸方向で長さ約28.5m，幅24～25mである。基底線は二段目と同様に側面観で約1°の傾斜をもつ。墳丘斜面は29～30°の傾斜であり，高さは3.2～3.0mを測る。墳頂部はほぼ平坦であり，遺存状態の良い部分で標高約46.7mを測る。復元される後円部頂平坦面は主軸方向で長さ約17.5m，幅約13.5mである。この平坦面の中央部には，1，3号石室西側壁の土層観察において第6層群とした円礫を積み上げた壇状の施設が設けられている。中央部分が3号石室の崩壊に伴って陥没しているためにその高さは不明であるが，残存する保存の良い部分で高さ0.3mを測る。平面形は残存部分が平坦面中央部に限られていることや，西側斜面を除いて墳丘斜面への流出土内にその崩落した円礫が認められないことから，後円部のほぼ中央に方形もしくは円形に設けられていたと推定される。その規模は一辺あるいは直径約8mと推定される。以上の状況から復元を試みたのが図138である。全体に不整形であるために，墳丘西側の復元は避けた。復元される墳丘形態，墳丘規模を以下にまとめておく。

(1) 墳丘形態，特徴

前方部変則二段築成，後円部三段築成の前方後円墳である。

後円部二段目平坦面と前方部平坦面が連続する。

前方部頂と後円部頂先端の平坦面に壇状の施設を付設する。

壇状の施設は前方部は台形，後円部は円形もしくは方形である。

(2) 墳丘企画，規模

主軸方向　N－06°－E

全長　　75～76m　後円部高さ約7.9m

前方部長　約33m　前方部高さ約４m

後円部頂と前方部先端の最高所との比高約1.1m

くびれ部幅　約24m　くびれ部高さ約3.2m

後円部一段目主軸長　約42m　　高さ約2.5m　　一段目平坦面幅約1.2m

〃　二段目　〃　　約36.5m　　高さ2.7～2.9m　二段目　〃　約1.5m

〃　三段目　〃　　約28.5m　　高さ3.2～3.0m

〃　墳頂平坦面主軸長約17.5m　幅約13.5m

前方部壇状の施設　幅8.5，15m　長さ7.5～8.5m　高さ１m以上

後円部壇状の施設　一辺もしくは直径８m　高さ0.3m

２）墳丘外表施設について

老司古墳では先に見た墳丘形態に，さらに外表施設として葺石，敷石，埴輪の樹立が認められた。さらに特異な例であるが，後円部墳丘盛土第６層群とした後円部墳頂部の小円礫からなる礫層もこれに含まれよう。これらの施設に使用された礫はほとんどが花崗岩円礫である。その大きさは，直径５cm以下のものから，長辺が30cmに達するものまで多様であるが，主体は葺石，敷石の材をなす直径10cm以下のものである。これらの円礫は転磨が進んだ河原石であり，唐木田芳文氏も触れるよう[(1)]に，東側の那珂川河床から入手したものと推定される。さて，各施設について詳細を見たい。まず，葺石は墳丘を構成する斜面のほとんどで確認された。前方部西側斜面からくびれ部付近は土取りにより不明である。また前方部前面は削平などにより遺存していない。ただし，G，Qトレンチにおいてその残骸と見られる円礫が多数分布していたことから，その存在は予測される。葺石は数ケ所の断面観察から共通の構築手法が認められた。地山整形か，その後の墳丘盛土により整えられた墳丘斜面の基底部に沿って，比較的大きな石の長辺を一重に並べ，石列として巡らせる。それを基底の根締め石とし，下方から円礫を積み上げている。その際裏込めの石や埋土はほとんど使用されていない。なお本古墳では浮羽郡塚堂古墳[(2)]で認められた作業単位を示すような縦方向の石列は認められなかった。敷石は本古墳で見られる特異な施設の一つである。前方部頂平坦面と段築ごとの各平坦面に認められた。前方

部先端の壇上は削平のためその有無が不明である。また後円部頂平坦面には先の壇状の施設があり，敷石は存在しない。敷石の構築はくびれ部のR，T調査区において，構築手法を知ることができた。まず，後円部三段目墳丘葺石の根締め石の石列と並行して，二段目平坦面の端部に沿って「二重石列」を巡らす。この「二重石列」の延長はKトレンチに接する所まで確認したが，後円部二段目平坦面に沿って全周していたかは断定できない。その後，その石列の間を埋めるように，また前方部頂の全域に亘って円礫を敷き詰めていく。敷石は単にばらまくというようなものではなく，石同志を巧みに噛み合せ，堅固にかつ表面が平坦になるように仕上げられている。また，二つの石列の間には敷石を分割する石列が認められた。これはT調査区において1.5m離れて4条が検出できた。二つの石列に直交せず，古墳主軸に近い略南北方向をとるものである。これは，敷石の作業過程，単位を示すとともに，この部分での敷石作業が前方部頂平坦面を意識したものであることを示している。この他には後円部段築一段目平坦面，前方部東側一段目平坦面でも敷石が設けられている。また，くびれ部に近いKトレンチ，J調査区においては，墳丘外の平坦面にも付設されている。

さて，墳丘外表施設に使用された資材について触れたい。老司古墳の墳丘斜面は全面に葺石が施され，平坦面には後円部墳頂部と前方部壇頂平坦面を除いて敷石が設けられている。葺石はT調査区において1㎡あたり200～240個が使用され，敷石はR調査区において220～280個が使用されている。墳端の未確認部分や未調査部分が多いために，これらの数値が平均的なものかは明確ではない。ここではある程度の誤差を無視してこれらの数値と墳丘規模を仮定し，墳丘外表施設の規模と内容を検討したい。

葺石が付設される墳丘斜面の面積は後円部側で約1,470㎡，墳丘西側を除いた前方部側で約320㎡，前方部の壇状の施設が約54㎡である。前方部西側の墳丘斜面を仮に東側と同様とすると，古墳の墳丘斜面は全体で2,090㎡となる。また，後円部頂平坦面と前方部壇状の施設を含まない墳丘平坦面と各段築面は全体で約800㎡である。さて以上の数値を基礎にしてみると，葺石は2090㎡×200～240個/㎡＝418200～501600個となり，敷石は800㎡×220～280個/㎡＝176000～224000個となる。全体でおよそ594200～725600個程度の円礫が使用されたと概算される。ところで葺石と敷石に使用されている円礫には差が認められず，円礫を特に区別して用いたとは考えられない。図139はT調査区の敷石に使用された円礫を無作為に抽出し，大きさと重量を度数化したものである。大きさでは7㎝×5㎝を中心とし，重量では80～160gに中心がある。重量の平均値は約167gである。この重量でみると先の葺石と敷石に使用された円礫の重量は約99～121トンと積算される。この他に葺石の基底部分などの石列に使用された円礫は長辺が20㎝を超えるものも多く使用されている。これらの重量は1個で1㎏を超えるものが多く，3㎏を超える例もある。現在確認される石列の延長は約408mあり，その重量は3～5トンになる。また，後円部頂の小円礫を積み上げた壇状の施設は15～19㎥あり，同様の小円礫は1.4～1.5トン/㎥であるこ

とから，その重量は21～29トンになる。以上の概算を通じて，墳丘外表施設に使用された円礫の総重量はおおよそ123～155トンになると推定される。

次に埴輪は各段築面と平坦面の端部に樹立されていた。また，前方部壇状施設の周囲に破片が多数出土していることから，この上の平坦面にも樹立が推定される。その中で樹立の形態や間隔が判明しているのは後円部二段面平坦面と，Bトレンチで1.5m離れて検出された例のみである。その他の地点はトレンチ内で１個体が底部のみを残して検出されている。後円部二段目平坦面では三段目基底部をぐるりと巡るように樹立されている。このうち前方部平坦面に接する部分では埴輪の間隔は1.8mと広く，くびれ部に向うとしだいに間隔を狭め，後円部に入ると0.6～0.7m間隔となる。こうした間隔で一周するとすればこの平坦面には約100個体が樹立される計算になる。その他の部分における埴輪の樹立状態は明確でないが，各所の幅１mのトレンチ内で連続して２本以上が検出されないことと，Bトレンチの状況からおおよそ1.5mおきに樹立されていたと推定される。この単位で単純計算すると後円部一段目と墳頂部に約90個体，前方部に約70個体の埴輪の樹立が予測され，全体で約260個体が使用されたと推定される[(3)]。なお，埴輪は後円部で二重口縁の壷形埴輪が主であり，少量の円筒埴輪と単口縁の壷形埴輪が含まれる。そのうち円筒埴輪は二段目平坦面と墳頂部に樹立され，後円部東側方と南側後方に配置されている。前方部では単口縁の壷形埴輪が主であり，壇状施設の周囲で少量の二重口縁の壷形埴輪片も出土している。

3）老司古墳の築造過程の復元

老司古墳は自然丘陵に大規模な地山整形と，後円部で２m前後，前方部で１m以下の墳丘盛土を行ない構築している。地山整形の深さは前方部側で大きく，後円部側で浅く行なわれている。しかし，後円部では段築三段目の中位まではほとんど地山整形であり，墳丘盛土はほとんどな

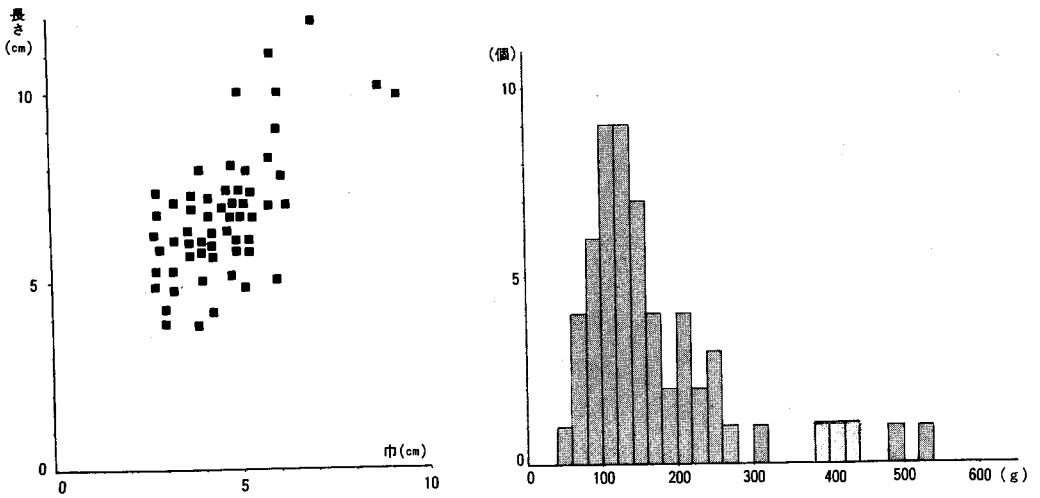


図139. 老司古墳の敷石に使用された円礫の大きさ(左)と重量分布(右)

い。逆に前方部では薄いながらも全体に墳丘盛土が認められる。後円部の墳丘盛土は三段目のほぼ中位以上に限られている。この墳丘盛土は周囲の土層との連続がなく，特に後円部と前方部の構築の関係，後円部下半の地山整形と上部の墳丘盛土の関係は直接検討することができない。ここでは後円部墳丘盛土の観察時に生じた問題について検討し，それを通じて築造過程を考えてみたい。すでに後円部の墳丘を構成する堆積物は7つの層群に分けて説明した。このうち第4層群と第5層群は石室構築時とそれ以降の埋め土であり，厳密には墳丘盛土でない。また，第7層群は墳丘形成以降に形成された流土と表土である。したがって，墳丘盛土を構成するのは第1～3層群と第6層群である。それぞれに墳丘築成と内部主体の構築に関する重要な問題を含んでいる。

(1) 第1層群上部の腐植土層の性格について

第1層群は地山整形後最初に構築された盛土である。後円部頂の広範囲に平坦面を造っている。層群内には地山土塊などを多数含み，本層自体は短期間に形成されたことを示している。[(4)] さらに本層群の上部には腐植土層が形成され，その下面は激しい凹凸が認められる。これは植物の根痕や動物生痕に由来するものと見られ，本層群形成後に一定期間植物等がおい繁る時間的間隙があったことを示している。これは古墳の築造が少なくとも二時期に分れて行われ，内部主体である石室の構築以前にある程度の墳丘形成が行なわれていたことを示すとみられる。いわゆる「寿陵」[(5)] 的な性格をここに認めたい。しかし，最初の段階で他の墳丘各部がどの程度構築されていたかは明らかにできない。

(2) 第1層群上面の「斜道状遺構」の性格について

第1層群の上位には第2層群が堆積するが，その堆積の直前の第1層群の上面において一種の整形がなされたり，溝状の遺構が掘削されている。前者は先の腐植土層の一部を除去するものであり，後者は前方部方向から3号石室墓壙に向って堀られた「斜道状遺構」である。この遺構はすでに断片的にしか残存しないが，幅約4.4m，深さ0.6～0.7mを測る。第1層群上面から墓壙に向ってほぼ北向きに約5°の傾斜で下り，残存部分で長さは約2.5mを確認している。1969年の調査時点にこの遺構を3号石室の最初の墓道と見る意見もあったが，掘削開始面やこの遺構内の埋土である第2層群の性格からもその理解は困難である。第2層群上部の「あずき色」砂質土は3号石室墓壙の周囲にレンズ状に堆積しており，この盛土の成因が地山深部土の再堆積であることから，墓壙掘削の最後段階に排出されたものである可能性が強い。そうであるならこの「斜道状遺構」は墓壙完成段階にすでに埋められていたことになる。。この遺構は3号石室墓壙掘削に伴い設けられた作業用の通路としての性格を持っていたとみられる。もちろん，その後第3層群や石室埋土である第4層群の盛土，埋土の過程でもこの遺構部分が溝状の凹地として遺存していることから，石室構築を始めとする各種の作業の通路として利用されたかもしれない。3号石室墓道掘削がどの段階になされたは重要な問題であるが，この凹地が完全に

失われるのは第4層群形成後であり，この遺構の中央をまさに縦断する墓道はその前後に掘削された可能性が高い。

(3) 第3層群上面における3号石室墓壙壁の形成について

前項目で3号石室の墓壙掘削開始面を第1層群上面とした。しかし，3号石室墓壙壁の観察される土層図ではその壁面は第2～3層群の上面に立ち上り，墳頂部に近づいている。また，第4層群は墓壙を覆いさらに広範囲に堆積している。第3層群上面での墓壙規模は主軸方向で長さ8.4m，幅8m以上であり，この面積は実に墳頂平坦面の⅓を上回っている。墓壙全体の空間は100m³を超え，後円部墳頂部に使用された盛土全体の約¼の容積に相当する。後円部墳丘盛土後に墓壙が掘削されたとするなら，これらの土量の2度にわたる移動を考えなければならない。しかし，なにより第1層群より上部の埋土が3号石室の墓壙壁に向って内傾し堆積している点や，墓壙壁が第2～3層群を切る，いわゆる不整合関係を示さない点から第1層群より上部の墓壙壁は墓壙掘削と共に盛土しながら形成されたものと考えられる。これは先の第2層群の形成要因とも矛盾しない。こうした前半期古墳における内部主体と墳丘築成を同時に進める構築手法は近年類例が増加しており，北部九州でも福岡市若八幡宮古墳[6]，小郡市三国の鼻古墳[7]などが知られている。

註

(1) 本報告書内で詳しく述べられているが，唐木田芳文氏には調査中に現地において検討いただき，また詳細な教示を受けることができた。記して感謝したい。

(2) 金子文夫，石山勲「塚堂古墳の調査」『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1集　福岡県教育委員会　1983

(3) この他に3号石室天井崩落に伴う流入土砂の中に壷形埴輪片（A1類を主とする）が数個体出土している。後円部墳頂平坦面の壇状の施設に壷形埴輪の樹立があったものと推定される。

(4) 第1層群の成因と形成条件については下山正一氏に詳細な教示を受けた。記して感謝したい。

(5) 茂木雅博「寿陵試論」『古代学研究』91　古代学研究会　1979
伊達宗泰「寿陵についての一覚書」『花園史学』2　花園大学史学会　1981
このなかではメスリ山古墳の石室構築と墳丘盛土の工程上の関係を中心にその存在の有無が論じられている。老司古墳の場合は石室構築以前に一定の造墓作業が行なわれ，その後長期間の時間的間隙をおいて再び造墓作業を行なうあり方である。これらを同次元に語ることはできないだろう。この問題については機会を見て再考したい。

(6) 柳田康夫「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第2集　福岡県教育委員会　1971

(7) 片岡宏二他「三国の鼻遺跡」1『小郡市文化財調査報告書』第25集　小郡市教育委員会　1985

（吉留秀敏）

2．石室の構造

老司古墳の発掘調査が行なわれて以来，この古墳の石室構造の特異さが強調されている。とくに，後円部の中央にある3号石室は，わが国横穴式石室の初現期のものであることと，横口部の構造の問題がさまざまな人によって追及されている。実測図が公開されていなかったこともあり，特異な構造を明確にするまでには至らなかった。横穴式石室の導入が，百済の漢城期に求められるのはあまり異論はないようだが，その後福岡市の鋤崎古墳，佐賀県浜玉町の谷口古墳の発掘調査が行なわれたことによって，時期的にもすこしさかのぼる可能性も指摘され[(1)]，石室構造の完成していない基壇積石室との関連も考慮されるようになってきつつある。

各石室の構造をみてみよう。1号石室は，内法が長さ2.13m，幅が0.89～1.02m，高さが0.94mの大きさに，横口部が付設されている。奥，側壁は厚さ5～10cmぐらいの板石を使用しており，直線的に立上がっている。石の積み方は丁寧ではないが，石相互はうまく連絡している。石室にかかる天井石は大きな板石2枚で，石の積み方が雑なせいか，側壁のこわれ方が大きい。

横口部は，床面から33cmのところまで，側壁と同じように，石を積み上げている。積みあげた石の上面を横口部の床面とし，墓壙とのすき間には粘土をつめている。この床面に，段の端から28cmのところに支え石を置き，その上に板石を立てて，閉塞としている。閉塞に使用している板石は，両側壁の端が支えるような形になっている。前面には墓道がつづいている。

2号石室は，四つの埋葬施設のなかでは，いちばん小形のものである。石室の規模は，長さ1.71m，幅0.60m，高さ0.62mほどの大きさで，石室というよりも石棺に近い大きさである。壁面の構成は1号石室と変りがなく，石相互がしっかりと結びついているようだが，やはりうまくないせいか，現状では内側にせり出している。さらに石室が小さいせいか，裏ごめもあまりなされていない。横口部は15cmの高さまで板石をつみあげ，そこで床面をつくり，板石を立てて閉塞している。そして，その後を粘土で埋めている。墓道はつくられていない。

3号石室は，この古墳の主埋葬施設で，後円部の中心にあり，埋葬位置もいちばん深い。石室の規模は，長さ3.23m，幅1.98～2.1m，高さ1.74mで，四つの埋葬施設のなかではとびぬけて大きい。石室はほかの石室に使用した板石より小さい板石を小口積みにしており，奥，側壁ともに持送りがなされている。竪穴式石室の石積みと同じように，すき間ができないように丁寧に積み上げている。壁面の状態は福岡市の丸隈山古墳などとよく似ている。石室の周囲はほかの石室と同じように板石を裏ごめとしているが，さらに墓壙との間はまるい石をつめて，裏ごめとしている。

特徴的なのは横口部の構造で，ほかに例をみない。幅2.1mの前壁の中央に，幅55cm，奥行30cmの棚状の構造がつくられている。床面から60cmのところでは棚となり，棚上部まで床面からの高さは1.35mとなり，天井との間に40cm程のあきがある。入口のところは，この棚上部に斜め

に板石をかぶせており，墓道床面から板石がかぶせられているような格好になっている。棚上部が墓道の床面となり，そのまゝまっすぐに前方部の方に延びている。墓道からはいることを予想すれば，墓道をまっすぐ進み，棚の上面まで行き，そこから棚に一段おり，さらに一段おりて，石室の床面につくという具合いになる。はっきりとした棚状構造をもつのが，この3号石室の特徴であり，竪穴式石室とも，横穴式石室ともいえない，不思議な構造である。

4号石室は，前方部に1基だけつくられた竪穴系横口式石室である。長さ2.25m，幅0.70～0.80m，高さ0.80～0.90mの大きさで，側壁は，上部がすこし狭くなるが，直線的である。横口部は1号石室と同じ構造で，床面から高さ37cmのところで段をつくり，そこから斜め上部に墓道が延びるようになっている。ことさら閉塞のために袖石を立てるようなことはせずに，板石1枚分ぐらい引っこめたような感じで，板石を閉塞のために立てている。その上にあらためて，板石をかぶせている。

以上，4基の石室の構造についてみたが，3号石室と，1号，2号，4号石室の間には大きな隔たりがあるといわざるを得ない。3号石室が主埋葬施設であることは疑いのないことではあるが，ほかの石室も同一墳丘につくられていることからすれば，大きな時間的な差はないと考えざるを得ない。

それでは，各石室の類似点と相異点をみてみよう。まず類似しているところは，3号石室と4号石室では，墓壙内の裏ごめに塊石を使用している。3号石室の棚状構造を上部壁に見たてると，4号石室の封鎖の立石が同じところとなり，3号石室の封鎖の板石と，4号石室の封鎖の立石の上にかぶせた板石が同じ用途をなすものだと考えることもできる。全ての石室ともに，長方形の墓壙を掘り，そのなかに石室をつくるが，最終的段階で墓道をつくっている。

基本的な構造が違う3号石室とほかの石室の類似点は以上のようになるが，同種の石室である1号，2号，4号石室ではどうなるのであろうか。同種の石室であるから，よく似ていることは当然のことであるが，なかには3石室に共通しない類似点もある。1号，2号石室はともに裏ごめ石の使用が少ない。1号石室と4号石室では，長さで10cm程度，幅で20cm程度の差のある同規模の石室である。1号，2号石室では，閉塞石の上にさらに石をかぶせるということをしていないなど，個別に類似したところがあるが，もちろん，それは本質的なことではない。

ほかの要素は共通したもので，同じような板石で壁を構成し，横口部も段を設けて，その上に板石を立てて封鎖をしている。前壁構造を待たないなどがみられる。

3号石室の構造については，ルーツが百済初期の横穴式石室に求められていることは，一般的であるが，柳沢一男氏は，韓国ソウル市の可楽洞5号墳のように，方形に近い玄室に，短い羨道を付設し，周壁は割石小口積みで，上部を内傾させ，4～5枚の天井石を水平に構架するタイプに求めている。そして，「老司3号石室は後続する丸隈山古墳の石室を介して，漢城期I類型の横穴式石室の構造がもっとも可能性の高い石室型と思われる。[(2)]」とのべている。その後，

福岡市の鋤崎古墳が調査されたが，基本的には変わらないであろう。

小田富士雄氏は，楽浪の永和9年墓，南井里119号墳と可楽洞古墳群の石室構築法に類似性が強く認められることを指摘した上で，「楽浪地域から漢江地域にかけての地方で4世紀後半から5世紀に成立した横穴式石室に直接の契機を求めるのが妥当であろう[3]」としている。

森下浩行氏は，百済漢城期の横穴式石室を3類に分け，Ⅰ類(可楽洞5号墳，可楽洞2号墳)が，前壁をもたない，平天井であるところが3号石室に類似しているとしている。一方，1号，2号，4号石室のように竪穴系横口式石室と呼ばれているもの（B類）に対しては，A類の影響を受けて成立し，以後朝鮮半島の影響を受けることが少なかったために，群集墳の内部主体に採用された[4]とされている。

このようにルーツについては考えられているが，それでも3号石室の生まれる背景については，的確な説明にはなっていない。とくに横口部と墓道の関係は全く例をみず，源流をたどることができない。

このように楽浪後期，百済漢城期の横穴式石室に源流が求められている。韓国ソウル市近郊の芳夷洞古墳群，可楽洞古墳群，石村洞古墳群のなかに類例を見出そうとしているが，残念ながら，横口部の構造については，全く異なっており，的確に説明できないのが現状である。老司古墳3号石室に次ぐ時代の構築とされる福岡市の鋤崎古墳，糸島郡前原町の釜塚古墳[5]では，平天井，前壁構造をもつ，羨道も段をもたないなど，百済初期の石室の影響を強く受け，その関係が十分に感じられ，交流史のなかに位置づけることは可能であり，諸氏によっても言及されている。

4世紀後半の竪穴式石室に，横穴式石室の知識を導入した横口部を付設した結果という考えがなされているが，それでもどうもしっくりしない。幅の広い竪穴式石室は，甘木市の神蔵古墳[6]，二丈町の一貴山銚子塚古墳[7]でみられる。3号石室が長さ3.23m，幅1.93～2.1m，神蔵古墳が長さ5.3m，幅1.6～2.0m，一貴山銚子塚古墳が長さ3.4m，幅1.4mというように若干の差はあるが，無視できない。しかも，神蔵古墳，一貴山銚子塚古墳ともに，石室の石積みが，狭長な竪穴式石室にくらべると粗雑で，何とはなしに不安な感じを与えるものである。そうした石積み技法の上に，3号石室を考えると，一見偏平な細かい石を丁寧に積み上げているようだが，調査時点での壁のこわれ方をみると，やはり完璧とは言いがたいところがある。これは鋤崎古墳での壁のこわれ方とも共通しており，石室の壁を支えるような石柱の存在も理解できるし，福岡県津屋崎町の勝浦14号墳[8]の石室内の石柱も，高句麗古墳の影響とみるよりも，補完の意味をもって立てられたと理解することもできるのではなかろうか。

3号石室の場合，本来は長大な墓道の延長上に床面を設定して横穴式石室を構築するはずであったが，竪穴式石室の技法を知っていたがために，さらに深く墓壙を掘り下げて，玄室，玄関のところは横穴式石室の感覚でつくり上げたが，入口のところで行き詰まり，壁でとじてし

まうという格好になり，その上に蓋石を斜めにかぶせるという結果になったのではないかと考えるのはいかがなものであろうか。石山勲氏の御教示による横穴式石室の製作技法の未消化という考えがうなづける。であるから，老司古墳3号石室のみが突出したような感じで，後にも継続しない石室形態をとったのであろう。それは，玄界灘沿岸のほかの初期横穴式石室が，朝鮮半島のそれと系統づけられることからもうかがわれる。形態はちがうが，佐賀県浜玉町の谷口古墳[9]，熊本県荒尾市の別当東塚古墳[10]の石室もこうした狭間に位置づけられるのではなかろうか。

3号石室の後につくられたのが，ほかの3基の石室であるが，似ても似つかわない構造になっている。部分的には類似したところもあるが，時期がすこし遅れることもあって，石室構築の技法がもっと明確な形で理解されていた結果ではなかろうか。前壁構造をもたずに，袖の構造もみられず，竪穴式石室の小口壁をとりさり，横口部を構築している。段差がついているが，段までは各壁と同じようにつくりあげており，その後に横口部をつくっている。長方形の墓壙を掘り，そのなかに石室を構築するのは，韓国釜山市の華明洞古墳群[11]など，伽耶地方の古墳と同様で，石材の大きさにも類似したところがある。

前方部の4号石室では，壁の構築に際して，粘土をつめることによって補強し，体裁をととのえているが，韓国洛東江流域の竪穴式石室でも同様のやり方が認められており[12]，竪穴式石室，竪穴系横口式石室の違いはあるが，技法的に濃厚な関係があったことは認められよう。1号，2号石室でも粘土の使用は認められ，彼地との関係はさらに強まる。

ほとんど持送りのない壁の構築，平天井の石室構造は，韓国伽耶地方の竪穴式石室，竪穴系横口式石室と同じで，老司1号，2号，4号石室が，この地方と密接な関係を持っていたことを示している。たゞ，現在のところ問題となるのは，竪穴系横口式石室の年代で，伽耶地方のものが，5世紀中頃までさかのぼるものが，ほとんどなく[13]，老司古墳が年代的に古くなっていることである。時期がさかのぼるのは，研究の深度とも係わる面もあり，同時代性が指摘されるのも，そう遠いことではなかろう。

3号石室と1号，2号，4号石室が異なっていることは，以後の展開からみても明らかである。3号石室が百済漢城期の横穴式石室に出自をもつことは言われているが，どうも完全に理解されて構築法が導入されたのではないようだ。竪穴式石室が幅広くなる時期に，横穴式石室の内容を知ったために，3号石室のように墓道と石室が同一面でとらえられない構造ができあがったのではなかろうか。そのために壁面の構築法も十分でなかったために，鋤崎古墳のように石柱の支えが必要になったこともあり，壁面のこわれ方にも共通しているのではと思われる。

導入のきっかけについては詳しい検討が必要になるが，広開土王碑にみえる辛卯年（391），倭が渡海して，百済と共同して，高句麗と争った記事と関係づけることも可能ではなかろうか[14]。こうした戦乱の時に得たものであるから，不消化の原因をつくったとも見れないこともない。

一方，１号，２号，４号石室は，政治的な交流はいざしらず，常時交流をもっていた伽耶地方の石室構造をほとんどそのまゝ取り入れたことによって成立したものであろう。その後も大きな変化を見せないのも，伽耶地方の石室の変化に対応している。

以上のように，３号石室を百済に，１号，２号，４号石室を伽耶に求めることも，ひとつの見解ではなかろうかと考える。

註

(1) 柳沢一男・杉山富雄『鋤崎古墳』（福岡市埋蔵文化財調査報告書　第112集）1984

(2) 柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982

(3) 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『日本古代史講座－朝鮮三国と倭－』1980

(4) 森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」（古代学研究　111）1986
森下浩行「九州型横穴式石室考」（古代学研究　115）1987

(5) 石山勲『釜塚』（前原町文化財調査報告書　第４集）1981

(6) 柳田康雄・木下修ほか『神蔵古墳』（甘木市文化財調査報告書　第３集）1978

(7) 小林行雄『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』1952

(8) 石山勲・川述昭人『新原・奴山古墳群』（福岡県文化財調査報告書　第54集）1977

(9) 唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』1982
谷口古墳は従来，竪穴式石室に長持形石棺をもつとされていたが，最近の佐賀県教育委員会の調査によって，横口部をもつことが明らかになり，初期横穴式石室の問題にあらたな光りを与えている。

(10) 柳沢一男「肥後型横穴式石室考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980

(11) 金廷鶴ほか『釜山華明洞古墳群』（釜山大学校博物館遺跡調査報告　第２輯）1979

(12) 川西宏幸「中期畿内政権論」（考古学雑誌　第69巻第２号）1983

(13) 亀田修一「朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室」『城２号墳』（宇土市埋蔵文化財調査報告書　第３集）1981

(14) 近年，渡辺正気氏によって強調されていることで，宗像・沖ノ島の祭祀なども同じ観点で考えてみてはどうかと提言されている。

（佐田　茂）

3．老司古墳出土の環頭大刀

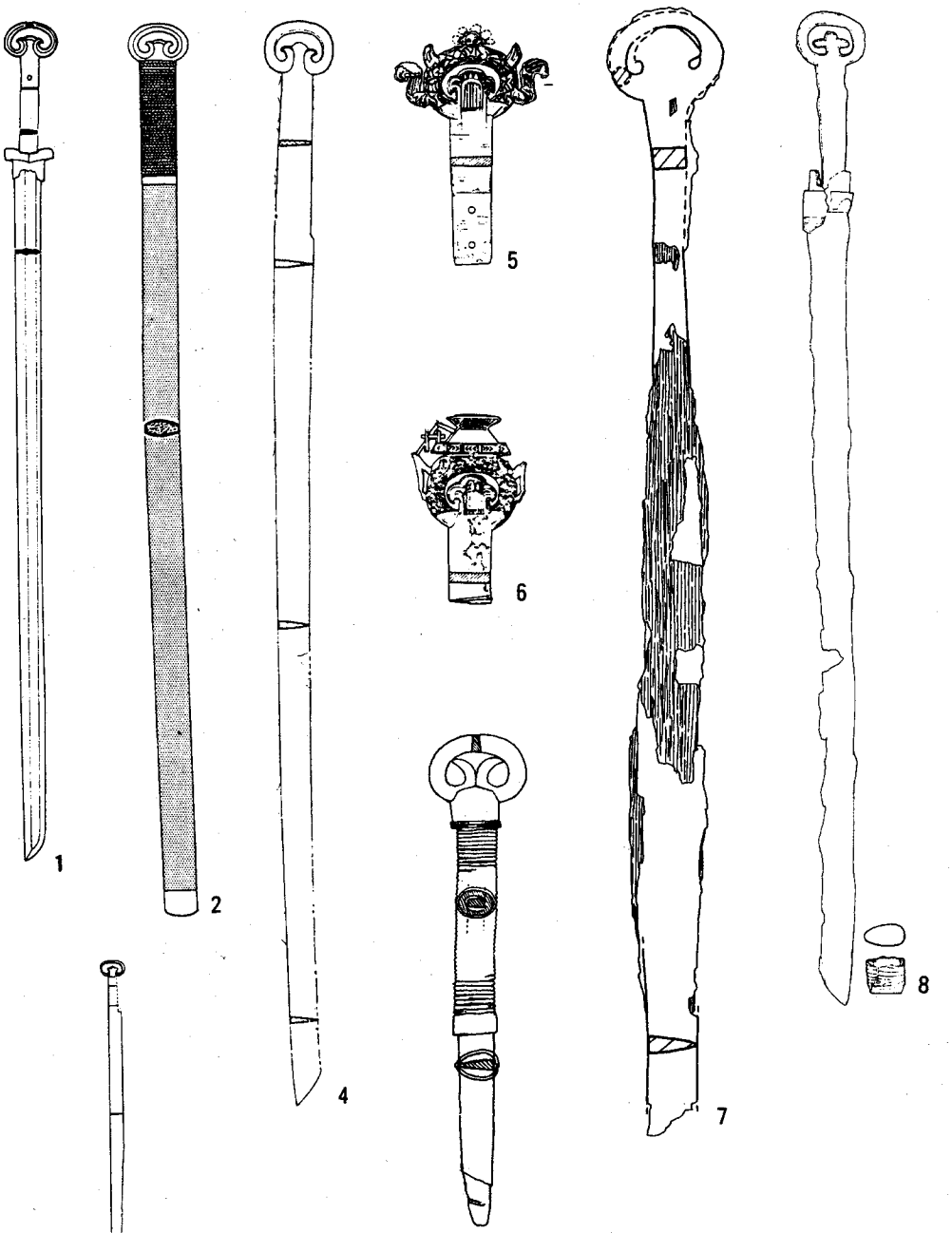
1）はじめに

老司古墳3号石室より出土した刀のうち，1本は素環頭大刀，1本は環頭大刀であった。その詳細な観察は，先に述べた通りであり，また，出土位置の違いから，両者は同時期に副葬されたものではなく，素環頭大刀の方は追葬時に副葬されたものと考えられる。このような副葬品からだけでも3号石室に埋葬された人々と他の石室に埋葬された人々との立場の違いがわかるが，特に環頭大刀の方は，三葉環頭大刀に含まれるものであり，5世紀代以前の物に限れば，日本での出土例は少ないものである。本稿では，この三葉環頭大刀の主として出自と系譜に関して考察を進めていきたいと考える。

2）他古墳出土例の検討

三葉環頭大刀をあつかった論文はこれまでにもいくつかある[(1)]が，今尾氏によると，三葉環頭大刀は中国で後漢代に出現する。この時期には，既に形態に2つの種類がある。1つは洛陽焼溝漢墓[(2)]や湖北省宣昌前坪2号墓[(3)]などに見られる中心の葉から左右の葉がわかれるものであり，もう1つは浙江省紹興漓渚206号墓[(4)]や平壌石巌里9号墳[(5)]などに見られる左右の葉が環体の両端を巻きこんで表現する形の環頭である。これらの環頭大刀の外装は抜身のものもある[(6)]が，一般に茎に木をあてその上に糸ひもを巻いて柄とし，刀身を木鞘に収める呑口式の形態をとっていたらしい[(7)]。

一方，日本では，三葉環頭大刀は素環頭大刀に遅れて古墳時代前期に出現する。5世紀代以前に限って言えば，奈良県東大寺山古墳[(8)]，福島県会津大塚山古墳[(9)]，福岡県若八幡宮古墳[(10)]，京都府産土山古墳[(11)]，大阪府津堂城山古墳[(12)]，兵庫県宮山古墳が出土地として他に知られている。東大寺山古墳例は後漢中平（184～189）の紀年名を刀背に金象嵌し，銅製の環体上端に花形，左右に鳥首形の突起によって飾られた三葉環頭大刀によって著名であり，全部で5口が出土している。環頭部の形態には2種類があり，うち2口は上述のもので，残り3口は環体上端に家形，左右に耳状形の突起がつくものである。後者の中には家形が奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡の家屋文と相似た表現がなされたものがあることから，5口ともともとの漢式の三葉環を模倣したものと考えられている。環内の突起は，中心の葉から左右の葉がわかれるタイプのものである。銘のある1口は刀身部と合鉄き仕口として目釘穴2本で留められている。外装の詳細は不明だが，実測図の示されている3口のうち2口はいずれも茎部に木質が遺存しており，うち家形のつくものは直下まで認められ，茎にも木の柄をつけていた可能性がある。若八幡宮古墳は三葉環頭大刀が大小2口出土しており，いずれも環の両端を巻き込み，左右の葉を形作るものである。共に抜身のまま副葬され布が付着しており，小さいほうは下に紐が巻きついているが，これが茎部にまで及ぶ可能性は小さい。会津大塚山古墳例はその詳細な形はわからな



1・2．楽浪付近古墳　3．宜昌前坪戦国両漢墓　4．若八幡宮古墳
5・6．東大寺古墳　7．老司古墳　8．宮山古墳　9．竹野産土山古墳

図140.　三葉環大刀の類例　（縮尺不同）

いが，環頭部は若八幡宮古墳例に近いらしい。外装については，刀身部は木鞘に収まり，茎部は柄木の上から繁巻きがなされていて，若八幡宮古墳例とあわせて，焼溝漢墓例の系譜上にあるものであろうか。産土山古墳例は環の両端を中に巻き込むが中央の突起の無い二葉形の刀子で，柄端の責金具が環の下端を覆っており，柄は銀線葛纏きがなされている。宮山古墳例は環内の突起が十字形をなすもので，環と茎とは一体に作り，接合の痕跡はない。柄元に鉄板の金具をはめ，半ばまで鞘口金具の内に収まる。鞘口金具下部には紐巻きの上に漆をかけ，鞘尻金具にも紐巻きの痕跡が残る。以上のような状況を，主として環頭部の形態の違いから，今尾氏はそれぞれの三葉形文が系譜的に不連続な状態にあるとされ,「日本国内独自で三葉形文が発展したものとは考えられず，中国や朝鮮においてその古い段階でわかれたか，あるいは元より別系譜として発展，成立したものが，そのつど日本に移入されたのではないか」と推測されている。

3）老司古墳例の位置付け

それでは老司古墳出土の環頭大刀はどのような系譜に位置付けられるのであろうか。ここでもう一度本例の特徴を掲げてみると，柄部に紐状のものを巻きつけている，環内の突起が二葉ともいうべき形でしかも環内の空間の大部分を占めており文様は一切ない，環頭から刀身までを一体に作り接合したらしい跡がないことが目につく。第一の点については，中国では漢代より糸紐の葛纏きがあり，朝鮮では百済に銀線を巻く例が見られ糸紐を巻くものは存在しないようである。しかし，一般的に茎に木をあてた上から紐を巻くようで，老司古墳例のように直接茎の上から紐を巻くものは少ない。日本においても状況は変わらない。第二の二葉形を呈するという点では，産土山古墳例が比較の対象となりそうであるが，実測図を見るかぎりでは二つの葉の間は筋が入り，一本の鉄の棒を曲げて環頭にしたと読める。とすれば，本例はもともと若八幡宮古墳例の中央の葉をはさむことによって環頭と茎を接合していたものが，それを省略し銀板の責金具を巻くことによって両者を接合していると理解したい。また，本例は全長25cmの刀子であり，古墳時代以降の環頭刀子は極めて少ないことや，伴出した大刀には環頭のつくものがなく鹿角製刀装具に似た木製刀装具が付くのみであることなどから，日本で製作されたと考えるのが妥当ではないだろうか。次に，第3の点を取り上げるなら，一般的な環頭の作り方としては茎の端部を丸めて環となすものや茎の端部を環の両端ではさみこむものや環から茎まで鋳造で一体に作り刀身に目釘で留めるものなどがあるが，鍛造で刀身と環を一体に作るものとしては宮山古墳と老司古墳が知られるのみである。もし，このような製作方法をとるなら，鏨等を用いてかなりの厚みのある円形の鉄板のなかに切り込みを入れていったと考えるべきかもしれない。逆に言えば，それ故に両者は環頭大刀としては極めて装飾性に乏しい作りとなっていると言えようか。いずれにせよ，中国・朝鮮半島側での資料の増加を待ちたい。

以上に述べてきたことからするなら，宮山古墳例・老司古墳例は，今尾氏の分類されるそれ

以前の三葉環頭大刀の２つの形態のいずれにも属するものでなく，突如として現われたものと考えられる。両例は更にその後も類例を見ず，系譜的にそれぞれ孤立した存在となっている。老司古墳の環頭大刀もまたこの時期の他の環頭大刀の例同様，中国よりの舶載品であろう。

註

(1) 町田章「環刀の系譜」『奈良国立文化財研究所研究論集』Ⅲ　1976
　新谷武夫「環状柄頭研究序説」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会　1977
　今尾文昭「中平記年銘をめぐる問題」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ　1982
　などが掲げられる。

(2) 『洛陽焼溝漢墓』中国田野考古報告集　考古学専刊丁種６号　中国科学院考古研究所　1959

(3) 「宣昌前坪戦国両漢墓」『考古学報』76－２　湖北省博物館　1976

(4) 「浙江紹興漓渚東漢墓発掘簡報」『考古通訊』57－２　1957

(5) 『朝鮮古文化綜鑑』第２巻　楽浪（乾）　1974復刻

(6) 註(1)前掲書

(7) 註(1)前掲書

(8) 金関恕「卑弥呼と東大寺山古墳」『古代史発掘６，古墳と国家の成立ち』所収　1975

(9) 『会津大塚山古墳』会津若松史出版委員会　1964

(10) 「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』２　福岡県教育委員会　1971

(11) 「竹野村産土山古墳の調査（上）」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第20冊　1940
　「竹野郡竹野産土山古墳の調査」『京都府文化財調査報告』第21冊　1965

(12) 大道弘雄「河内小山村発見の大石棺」『考古学雑誌』第２巻９号

（古野　徳久）

4．装身具

老司古墳においては1号，3号，4号の3基の石室より玉類を中心とする豊富な装身具が出土している。各石室における玉類の構成内容と材質の相違，あるいは群を構成する玉類の組み合わせと配列状況等重要な問題点を種々含んでおり考察すべき点は多い。ここでは主に3号石室出土の玉類を中心として若干の考察を行うこととする。

1）硬玉製勾玉について

3号石室からは7点の硬玉製勾玉が出土しており，そのうち現存する5点はいずれも大形の丁字頭勾玉で，濃淡の差は見られるが鮮やかな緑色を呈するものである。丁字頭勾玉を含む定形勾玉は，弥生時代中期頃成立した勾玉の一形式で，最も形の整った完成された勾玉とされている。ここでは老司古墳の勾玉の系譜を辿り，福岡県下における古墳出土の勾玉と比較しながらその位置づけを行ってみたい。

定形勾玉は弥生時代前期末頃を出現期とし，当初はガラス製の小形のものであったが，中期後半になると大形化し，特に丁字頭勾玉は長さ4cmを上回る硬玉製のものが主流となり，形態的にも完成された優美なものとなる。代表的なものとして前原・三雲小路2号甕棺墓，唐津・宇木汲田47号甕棺墓，平戸・根獅子石蓋石棺墓等の出土例があげられる。いずれも硬玉製で4cmを越えるものである。これらを完成された丁字頭勾玉の代表例とするなら，3号石室玉群A～Cにおける4点の勾玉はまさにそれらを忠実に継承した形態と言える。すなはち大きく括れた頭部，断面が正円をなし流麗な曲線に支配された外形，克明に刻まれた条線等は上記の勾玉と共通するものである。一方において玉群Dの勾玉はやや異質なものである。本例は腹部中央及び両側面との境に明確な稜線を残し，条線も浅く一条は孔の背後に施されている。形態的にも他と一線を画す存在であり，丁字頭勾玉の範疇には納まるものの，その退化した一形態としておきたい。

次にこれらを福岡県内における古墳出土の丁字頭勾玉と比較してみよう（表9）。詳細の知り得る例は少数であるが，大部分が硬玉製で長さは1.9～4.7cmのものがあり，4cmを越える2点を除けば3.5cmまでのものである。時期的には古野19号墳，岩長浦IW－1号墳の2例はやや下る可能性はあるものの，他は全て5世紀中頃までに属するものである。それ以降になると丁字頭勾玉は基本的に姿を消し，定形勾玉としても形態が多様化し，かなり変形したものも見られるようになる。法量的には長さ2～4cmのものが主

	材　質	長　さ	穿　孔	色　調
福岡・丸隈山古墳①	硬玉	2.7	両側	鮮緑色半透明
②	硬玉	2.8	両側	鮮緑色半透明
五島山古墳	硬玉	2.9	片側	淡緑色
二丈・銚子塚古墳	硬玉	2.1	両側	緑色半透明
津屋崎・奴山5号墳①	碧玉	3.5		
②	碧玉	4.7		
古賀・古野19号墳	碧玉	4.4	両側	濃緑色
宇美・岩長浦IW－1号墳	硬玉	3.4		淡黄緑色
八女・城の谷古墳	硬玉	3.1	片側	緑灰色

表9．丁字頭勾玉の類例一覧（cm）

流を占め，それ以下のものも多く作られている。材質的には硬玉を主体としながらもガラス，水晶，滑石等が原材料として選ばれている。このように見てくると，3号石室，特に玉群Aの勾玉は奴山5号墳例等と共に弥生時代から受け継がれてきた丁字頭勾玉の頂点に立つものとして位置づけられる。

木下氏によれば，丁字頭勾玉は弥生文化的な緊縛の呪術性が込められていたとされている。今ここでその内面性にまで立ち入ることは出来ないが，弥生時代中期から古墳時代へと受け継がれた丁字頭勾玉が5世紀前後にそのピークを迎え，その後衰退するという事実は勾玉に象徴されるひとつの呪術体系の終焉を物語っていると言えよう。その転換期における状勢に老司古墳とその被葬者が重要な位置を占めている点が指摘されるのである。

2）碧玉製管玉について

3号石室からは100点を越える管玉が出土しており，これらは5つの群を構成している。報文にて若干触れたように，玉群ごとに特殊性，あるいは共通性が見出せるものであり，特に玉群A～Cに対する玉群Dの異質性が指摘される。ここでは両者を対比させる形でいくつかの項目ごとにまとめを行い，その具体性を示すことにする。

(1) 色調

各管玉を肉眼により色別すると大きく4群に分けられる(表10)。すなはちⅠ類は濃緑色，Ⅱ類は青緑色，Ⅲ類は淡黄緑色，Ⅳ類は淡白緑色を呈するもので，このうちⅠ～Ⅲ類まではさらに濃淡により各々2大別（a・b）される。これらを実際の管玉に当てはめると，玉群AにⅣ類が2点，玉群CにⅢ類が2点それぞれ含まれる他は，玉群A～CはⅡ類に，玉群Dは全てⅠ・Ⅲ類に属するという明確な差異が見てとれる。

(2) 法量

次に各玉群の法量を見てみよう（表11)。

玉群A～Cの管玉は各々2cmを越えるものが数点ずつ存在する他は平均しており，1.5～1.7cmの間にその中心を置く。径についても0.5～0.7cmに大部分が納まり，特に0.6～0.7cm間に集中する傾向にある。また径と長さを対比するとその割合はいずれも数点を除き1：2～1：3という値が得られる。

これに対し玉群Dの管玉は異形の2点を除き，長さ1.53～3.68cm，径0.50～1.22cmと幅が見られ，大形のものが多い。径と長さの間に明確な相関関係は見られないが，その割合は大部分が1：2～1：5，特に1：3～1：5の値を示す。このように玉群Dに対し，玉群A～Cは長さに多少幅を有しながらも径については安定しており規格性を有する群であると言える。

色 / 群	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ
	a	b	a	b	a	b	
A			28				2
B			4	9			
C			9	1	2		
D	3	1			9	32	
E						2	

表10．第3号石室出土管玉色別表

(3) 形態

管玉の形態を特徴づける要素として，体部，小口面，角部の成形があげられよう。これらについても玉群A～Cと玉群Dのものとでは明らかに対比される特徴を有している。

前者は，体部が弯曲，あるいは中膨らみを呈し，小口面は一方，または両方とも体部に対して斜めに切られ，その角部が丸味を有するものに代表される。その他の特徴としては体部にわずかな稜線を残したり，全体的にやや不整形を呈するものが各群ともわずかに見られるのみである。

これに対し玉群Dの管玉は，体部が直線を成し，小口面が体部に対し明確な角を有してほぼ垂直に切られるものを基本形とし，全体的にシャープな印象を受けるものである。特に色調Ⅰ類に含まれる4点以下，玉群A～Cに比べ硬質で重量感を伴う一群である。

(4) 穿孔

管玉の穿孔方法には，片側，両側からによるものと，片側からの穿孔が到達する直前に反対

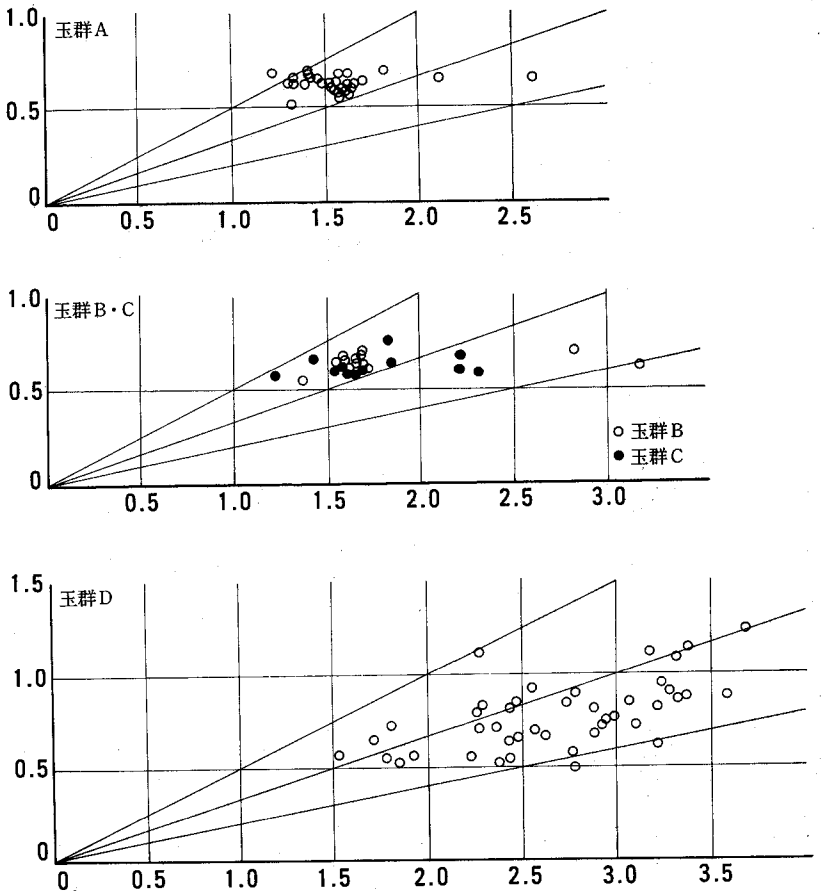


表11. 玉群別管玉計測表 （径／長さ 単位:cm）

側からの「迎え孔」によって貫通させる３通りの方法が見られる。玉群Ａ～Ｃは大部分が両側穿孔であるが，片側，あるいは「迎え孔」によると思われるものが10点程存在する。玉群Ｄは全て両側穿孔である。

また穿孔径は，玉群Ａ～Ｃのものは0.25～0.35cmの間にその中心を置くのに対し，玉群Ｄのものは0.2～0.3cmのものが多い。径に対する穿孔径の比率は，前者がほぼ２：１の割合であるのに対し，後者はそれ以下に集中しており，法量に対し穿孔径が小さい点が指摘される。

穿孔に関する特徴としては，穿孔の位置が中心をはずれるものや，穿ち直しにより孔形が楕円形を呈するもの，さらに両側からの孔が，かなりずれて貫通しているものの存在である。このような特徴は概して各群に見られるものであるが，特に玉群Dにおいて顕著であり，穿孔に関する粗雑さ，あるいは困難さに起因するものであろうか。反面同群は穿孔後に孔内を研磨したものも多く，以上のような点を補正する目的があったとも考えられる。

最後に穿孔具について付記しておく。管玉のみの観察から原石の大きさと，穿孔具の形状と大きさ等を推定するのは困難であるが，孔内観察によれば入口径と中心径がほとんど変わらないもの，入口径に比べ中心径が著しく細くなっているものの２種類あることが窺える。このことは穿孔具に円柱状または角柱状の先端がそれ程尖らないものと，円錐状または角錐状の先細りとなったものの２種類のものが存在した可能性を示すものであろう。実際の玉群に当てはめるなら玉群Ａ～Ｃは前者，玉群Dは後者の傾向が強い点が指摘される。また，先細り状工具の存在は，入口径が実際の穿孔具そのものの大きさを示しているとは言い難くなる。さらに両孔の接点がずれるものは当然，入口径に比して中心径が小さい値を示す。以上のような制約はあるが，全体的な傾向として玉群Ｄの管玉は他のものに比べ小形の穿孔具を用いたものと考えられる。

以上，各項目ごとに検討を試みたが，同石室内におきながら種々の点において玉群Ａ～Ｃと玉群Ｄが対比されることは明らかである。前者は長さよりも径を揃えることに比重が置かれ，なおかつ製作に際しては小口面を垂直に成形することにそれ程意識的できなかったと考えられる。後者は異形管玉２点を含み，全体的に大形で大きさに関する規性はそれ程働いていなかったものと思われる。また穿孔方向については問題を残すものの，これらのあり方から見る時，玉群Ａ～Ｃを玉群Dに先行する一群として位置づけることが可能であろう。

３）玉群の配列と埋葬状況について

３号石室における玉群は，いずれも勾玉を親玉とし，それぞれが独立して配置されている。特に玉群Ｂ，Ｃについては，セット関係と配列が明確に窺える好例と言える。一定の玉類が原位置を保って出土した例は限られているが，ここでは糸島郡二丈町銚子塚古墳，八女市城の谷古墳を中心とする福岡県下におけるいくつかの類例と対比させながら玉群の着装状況あるいは埋葬状況を考えてみることにする。

玉群A～Cと前2者の古墳出土の装身具について各々一連の玉類を連ねた場合，すなはち管玉の総延長と勾玉の最大幅を合計すると，これらの問題にはいくつかの共通点が見出せる(表12)。銚子塚古墳出土のものは，出土位置，他の遺物の配列状況等から左右の手首に巻かれた腕飾りと考えられているが，ともに総延長が20cm前後のもので，玉群B，Cと近い値を示しており，数値的にも玉群B，Cのものは腕飾りとして間違いないであろう。次に出土位置であるが，これらは奥壁寄りの側壁近くに長軸にほぼ並行に鏡を伴って配置されている。これは死者の安置後，両腕から玉類をはずし，頭部のやや上方両側に置いたものと思われるが，これについては城の谷古墳におけるあり方が参考となろう。ここでは鏡は右側1面のみであるが，頭部の両側にやはり勾玉を親玉とする一連の玉群を配するものである。鏡を伴う方は，その規模から首飾りと考えられるが，左側のものは玉群B，Cと同規模のもので，やはり腕飾りと考えられる。いずれにせよ埋葬の際着装していた玉類をはずして頭部付近に配する行為が読みとれるものである。埋葬時に於ける他の副葬品を含む玉類の組み合わせや配置にはいくつかの形があったと思われるが，特に4～5世紀代の古墳については，頭部を挟んで，あるいは頭部付近に鏡や玉類を配する例が少なからず認められる点は興味深い。これまで述べてきた例はいずれも勾玉を親玉とし管玉群を連ねるものであった。鏡や玉類が単独で，また玉類も内容が異なり櫛を伴う例等も見られるが，それまで着装していた玉類をはずして頭部付近に配することが，埋葬過程における行為のひとつとして特殊な意味を有していたことはじゅうぶん窺えよう。

	総延長	径	重　量	管玉の重量
老司古墳玉群B	25.05	8.0	31.53	14.88
玉群C	22.62	7.2	40.30	13.40
玉群A	50.67	16.1	105.95	27.90
玉群A/2	25.34	8.1	52.98	13.95
銚子塚古墳左側	20.76	6.6		
右側	19.29	6.1		
城の谷古墳左側	25	8	14	
右側	44	16	49	

表12. 各古墳出土装身具計測表（単位cm，g）

以上の点から見ると，3号石室には，まず玉群B，Cの中央やや西寄りに頭部を配し，北壁と並行して西へ向く遺体の存在が考えられる。ここで問題となるのが玉群Aの存在である。位置的には上記遺体の腰部に当たるものであるが，これを腰飾りとは即断しかねる。仮りに一連のものとするなら，規模的に首飾り，あるいは腰飾りと考えることも出来るが，玉群Aは勾玉を2個含み，単純計算によれば玉群B，Cの2倍量にあたる為，さらに1対の装着されたままの腕飾り，あるいは足玉が混在した可能性も否定出来ない。後者の場合位置的な問題もあり明確にはし得ないが，いずれにしても同一遺体に伴う玉群であると考えられる。

次に南西隅の玉群Eであるが，これは付近に1対の金環，数点の歯が存在することから首飾り用の玉群であったと考えられる。規模が確認し得ないのが残念であるが，やや乱れるものの，一連であった可能性が強く，恐らく着装されたまま埋葬され，形がくずれたものと思われる。

最後に玉群Dであるが，これらは集積された状況で鉄器類の下部から出土している。大形管玉を含むこれらは個々の法量が大きく，一連のものとは考えにくい面もあるが，親玉である勾

玉が1個であることから，二重にしての使用も考えられる。2面の鏡を伴っており，付近に頭部を配する遺体を安置し玉群を集積したものであろうか。王群Dの性格は不明であるが，これに伴う独立した遺体が存在し，それは東壁に沿って頭部を北へ向けて埋葬されたものと思われる。

このように3号石室においては，玉群A～C，玉群D，玉群Eを伴う最低3体の埋葬の可能性があり，出土位置，玉類の内容，鏡から見て玉群A～C→玉群D→玉群Eという先後関係が指摘される。東壁の南壁寄りに単独で出土した櫛については玉群Dを伴う遺体に帰属するものと思われるが，単独で別の遺体に伴う可能性もあり，3号石室には3～4体が埋葬されたものと考えられる。

3号石室の玉類を中心に検討を加えてきたが，最初に述べたように老司古墳の装身具に関する問題は数多い。特に各石室ごとの材質的な特質が注意される。3号石室は硬玉，碧玉を主体とし，1号石室にはそれに滑石が加わり，4号石室にはおいては滑石のみの玉類となる。滑石製品は硬玉に後出し，中には硬玉製玉類を祖型とするものも作られていることが指摘されている。3基の石室の先後関係を玉類のみから即断することは出来ないが，古墳時代における玉類の変遷を敏感に反映した結果という点において3号→1号→4号という流れも考えられよう。

多くの未解決の問題を残したままであるが、古墳における玉類のあり方を辿る際，老司古墳はひとつの指標となる意義を有する古墳であると言えよう。

〈参考文献〉

森貞次郎　「弥生勾玉考」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』　1980)。
木下尚子　「弥生定形勾玉考」(『岡崎敬先生退官記念論集　東アジアの考古と歴史－中－』　1987)
寺村光晴　『古代玉作形成史の研究』　吉川弘文館　1980。
河村好光　「玉生産の展開と流通」　(『岩波講座日本考古学』3　岩波書店　1986)。
福岡県文化財資料集刊行会　『史跡名勝天然記念物調査報告書　第16輯　福岡県糸島郡一貴山村銚子塚古墳』　1952。
八女市教育委員会　『城の谷遺跡』　1983。
福岡市教育委員会　『丸隅山古墳II』　1986。
亀井明徳　「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」　(『九州考古学』38　1970)。
津屋崎町教育委員会　『奴山5号古墳発掘調査報告』　1978。
福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告　XXI』　1978。
宇美町教育委員会　『宇美観音浦』　1981。

（久保　寿一郎）

5．銅鏡

老司古墳からは1～3号石室から合計10面の鏡が出土した。この中には1号石室の方格規矩鏡や2号石室の仿製変形文鏡，3号石室の三角縁神獣鏡・君宜高官銘内行花文鏡など類例の少ない鏡が多く，鏡の博物館の様相を呈している。実物を見ると全体に保存が良く，部分的にしろ光沢を放っている例が多いことに驚かされる。同時に各鏡とも摩耗が著しく，丸味をもった印象を受ける。以下，事実報告を補足しつつ，若干の考察を加えることにする。

各鏡の検討　1・2石室から出土した方格規矩鏡・変形文鏡については遺物各説の項で検討を加えたように，それぞれ舶載・仿製と判断したが類例の少ない背文をもっている。前者に近い例を知ることはできなかったが，後者については岡山県双つ塚古墳・大分市野間3号墳出土鏡との類似がすでに小田富士雄氏によって指摘されている[(1)]。区内の4乳間に配された変形文は，双つ塚古墳では「唐草文化したf字状竜文」，野間3号墳では「イビツな渦状文」と表現されているが，外区を含めた全体的な形制からみれば細線式獣帯鏡の禽獣文あるいは四神文の極端な変形とみることができそうである。

8面を出土した3号石室の鏡群（表14の上から順に1～8号鏡と略称する）もそれぞれに特色をもっているが，ことに1・2・5・6号鏡にそれがいちじるしい。

1号鏡の三角縁神獣鏡は小林行雄氏[(2)]や樋口隆康氏[(3)]によってアメリカ・フリア美術館蔵鏡および滋賀県野洲郡野州町古富波山古墳出土のドイツ・ベルリン民俗博物館蔵鏡と同笵ないし同型とされている。『欧米蒐儲支那古銅精華』[(4)]5の図版102・103に実大の写真が載せられているが，ことにフリア美術館蔵鏡は鮮明で，図版46の2でみられるように背文を詳しく観察できる。フリア鏡には7言句35文字からなる次の銘文がある。

王氏作竟甚大明　同出徐州刻鏤成　師子辟邪嬈其嬰　仙人執節坐中庭　取者大吉楽未央

この銘文と1号鏡に残る文字を重ねると，その形状・大きさと位置のいずれもが一致する。また三角縁にめぐらされた鋸歯文・複線波文の波長も一致する。したがって1号鏡とフリア鏡は同笵であるとしてよい。これによって1号鏡に残存する銘帯の文字は「王氏作竟甚大明　同出……取……」に復原できる。もう1面の古富波山古墳出土鏡は背文が不鮮明で比較がむつかしいが，銘文を「王氏作竟甚大好（以下同文）」と読んでおり，第一句の終わりが「明」ではなく「好」になっている。これが正しければ酷似はしていても同笵ではない。現物を実見する機会を得ない現在，同笵とすることを留保しておきたい。

2号鏡の君宜高官銘蝙蝠座鈕内行花文鏡は内行花文帯と平縁の間が素文の凹帯となることの多い蝙蝠座鈕式にあって，その部分に四葉座鈕式的に同心円文と直行櫛歯文を配している。比較的近い例が京都府八幡市美濃山王塚古墳（？）出土鏡[(5)]にあるが，珍しい背文といえる。

5号鏡が捩文鏡であることは今回の整理で初めて確認できた。文様の摩耗が著しく，詳細を

点検できないが，これまでに類例のない背文構成をもっている。北部九州出土の捩文鏡は佐賀県東松浦郡浜玉町谷口古墳[6]例がよく知られている。初葬にともなうものではないが，3号石室の年代を考える手懸かりとなろう。

5号鏡と同様に6号鏡の方格規矩鏡も舶載とされていた。実物を欠くが，図版に示したようにその背文の特徴と類例からみて，本鏡も仿製鏡である。樋口隆康氏の『古鏡』には類例が，福岡県宗像郡沖の島16号遺跡出土鏡，熊本県菊池郡泗水町久米若宮古墳出土鏡など13例あげられている。他に福岡県遠賀郡遠賀町高屋出土[7]鏡，長崎県南高来郡国見町高下古墳出土[8]鏡などがある。熊本県玉名市繁根木古墳出土鏡や香川県高松市猫塚古墳出土鏡では方格の内側の小乳の間に十二支銘が配される。方格・規矩文の構成や外区をめぐる横幅の間隔の広い複線波文，方格の対角線を向く鈕孔の方向に共通性があり，いずれもが仿製鏡と判断されている。類例に反して本鏡を舶載とみなす根拠はなく，本鏡は仿製である。

鏡副葬の順序　4基の石室はいずれも追葬可能の状態にあり，実際2・4号石室で男性2体ないしはそれ以上の人骨が検出されている。2号石室では2体の被葬者の一方に仿製変形文鏡が副葬されていたが，それは初葬にともなっていた。初葬の人骨は追葬にあたって取り片付けられていたが，鏡は頭部に接した位置で検出されていて，おそらくは埋葬時の位置関係をあらわすのであろう。つまり2号石室では初葬者の頭部付近に鏡の副葬が行なわれているが，追葬者には行なわれていない。この傾向は3号石室でも認められる。

8面もの鏡が出土した3号石室においても副葬遺物の配置から3～4体の埋葬をうかがえる。石室西壁沿いの1体は南に頭位をとるが，その頭部の左に7・8号鏡が副葬されていた。2号石室の初葬もそうであったが，一般に鏡は被葬者の頭部付近に副葬されている。1～6号鏡は近接して置かれていたが，1～4号鏡は初葬の北壁沿いの被葬者，5・6号鏡は東壁沿いの被葬者の頭部に副葬されたと判断できる。初葬にともなう4面は舶載鏡であるが，追葬の2体各2面はいずれも仿製鏡であった。4体目があるとすれば入口を塞ぐ形になる南壁沿いだが，これには鏡をともなわない。つまり3号石室では，舶載鏡→仿製鏡（おそらくは捩文鏡・方格規矩鏡→内行花文鏡）→無の順序で，鏡が副葬されたのであろう。

本古墳の石室の構築順は土層観察や副葬遺物から，3号→1号→2号になるとみられ，鏡の副葬のみられない4号石室が後出のグループにはいるとみられる。鏡の種類からみても舶載鏡（初葬），舶載鏡，仿製鏡，無に分けられ，3号石室で知りうる順序と一致してくる。それは副葬される鏡の時代性，鏡副葬にまつわる習俗の変容を如実にあらわしている。

鏡体の摩耗　多種多様な老司古墳出土の鏡群のもつ共通性に，各鏡ともにかなり顕著な摩耗が認められることがある。行方不明となっている3面の鏡は検討できないが，図版のようにいずれも平縁の外端に丸みがみられ，残りの7面と同じ傾向をもつと思われる。

3号石室の初葬にともなうと判断できる三角縁神獣鏡・君宜高官銘内行花文鏡・方格規矩鏡・

方格規矩四神鏡の4面のうち，三角縁神獣鏡は外区の5分の2のみを残す破片だが，ことに摩耗が著しい。斜行櫛歯文帯に沿って4カ所，銘帯に1カ所、径5㎜前後の大きさの穿孔がある。銘帯のそれは欠けて孔の用を果たさなくなっているが，それを含めて孔縁の摩耗が著しい。この孔の用途を補修のためとみるには大き過ぎるように思える。内区側の破損面は断面図にあらわしたように，鏡面側を研摩して薄く仕上げ，さらに刃部状にならないように丸みをつけている。この三角縁神獣鏡片と同様の形状をした鏡片で参考になる例として，大分県宇佐市本丸遺跡の弥生時代後期終末から古墳時代初めにかけての時期の石蓋土壙墓に埋葬されていた舶載内行花文鏡片がある[9]。鏡片は被葬者の首と思われる位置から検出された。区内の破損面が首のカーブに合うように整形されている。両端には穿孔が各1カ所みられ，その一方に勾玉と管玉，他方には管玉からなる二連の玉類をともなっている。この状態からみると，鏡片は首飾りであろうし，玉類はそれと組合う装飾かあるいは髪飾りであろう。これと酷似する形状の舶載内行花文鏡片が京都府福知山市寺ノ段2号墳からも出土している[10]。1号鏡片の内区側に認められる丁寧な調整と全体の顕著な摩耗は，このような例からみて，装身具にしろあるいは祭祀行為にともなうにしろ，それの首飾りとしての実用を意味すると考えられる。

他の9面にみられる摩耗は，1号鏡と同様に首飾りとしての性格をもった実用の結果とは，それらの形状からして考えられない。ただ，少なくともその顕著な摩耗はこれらの鏡が頻繁に磨かれながらかなりの長期にわたって実用されていたことをうかがわせる。4分の1ほどを欠き，残りの部分も小片に割れた3号鏡の破損面を丁寧に合わせ織物に包んで副葬していることなどもあって，頻繁であったろう実用の目的を具体化・一律化することはできないが，その如何にかかわらず日常的に使用されていた鏡の実態の一端を示してくれている。鏡を時期推定の資料とする場合には，かなりの実用の期間があったことに留意する必要があろう。

註

(1) 賀川光夫・小田富士雄・橘昌信『野間古墳群緊急発掘調査』（大分県文化財調査報告13，1966年）

(2) 小林行雄「三角縁神獣鏡の研究－型式分類編－」（『古墳文化論考』平凡社，1976年）の 同笵鏡目録では36番に挙げられている。その後，「三角縁波文帯神獣鏡の研究」（『辰馬考古資料館考古学研究紀要』1，1979年）で40番に改められ，これが現在使用されている。

(3) 樋口隆康『古鏡』（新潮社，1979年）

(4) 梅原末治『欧米蒐儲支那古銅精華』5（鏡鑑部第2冊，大阪中山商会，1933年）

(5) 梅原末治「美濃山ノ古墳」（『京都府史蹟勝地調査会報告』2，1920年）

(6) 梅原末治「玉島村谷口古墳」（『佐賀県文化財調査報告』2，1953年）

(7) 九州歴史資料館『田中幸夫寄贈品目録』（1982年），P93の144－1およびP152。

(8) 佐賀県立博物館『鏡・玉・剣－古代九州の遺宝－』（1979年），P117。

(9) 小倉正五「弥生人の豪華なペンダント」（『えとのす』29，新日本教育図書，1985年）

(10) 埋蔵文化財研究会第20会研究集会『弥生時代の青銅器とその共伴関係』Ⅳ（1986年），京都府№21。

（高倉洋彰）

6．老司古墳出土須恵器の編年的位置付け

1）はじめに

老司古墳における発掘調査において須恵器が出土し，調査所見から共伴するものと考えられる。また，三辻氏の分析によりそれらの須恵器が陶邑産であると判明した。このことは老司古墳の年代決定において重要な要素となる。須恵器の出土状態から見ると，くびれ部に近い前方部頂平坦面が最も多く，３号石室墓道上部，やや離れて前方部頂からも出土している。こうしたあり方から３号石室における何らかの祭祀に伴なって使用された可能性が強い。

しかし，３号石室では数回の埋葬行為が推定されており，どの段階に使用されたかは断定できない。以下では出土した須恵器の編年的位置付け及び年代観について検討したい。

2）出土須恵器の編年的位置付け

須恵器の器種としては器台，甕，その他がある。まず器台についてだが，図141は器台の復元想定図である。この図で出土している部位は，口縁部（図32—1），２段目の波状文帯（同2・3），３段目の波状文帯から鋸歯文帯下方(同4･5)，脚部側の接合部および１段目の波状文帯(同6)，２段目の一部，３段目の波状文帯および４段目の一部（同7・8）である。脚端は出土していないために他遺跡出土例を参考としたが，４段目としたところが脚端となる可能性もある。復元は破片の傾きや文様等を基準にして行ったが，破片の焼きひずみ等を考慮に入れると必ずしも正確な復元図とは言えない。復元の目的は文様構成とおおよその器形の感じをつかむためであるので，現段階の模式図として捉えていただきたい。この復元図によりもう一度簡単に特徴をまとめてみる。

まず杯部であるが，口唇部は丸く仕上げられており，突帯によって３段に区切られた中に波状文が施される。またその下方は沈線によって２段に区切られ，その中に鋸歯文を刻んでいる。鋸歯文は鋭い工具（金属器か）で刻まれ，上下の形は若干異なっている。脚部は突帯によって５段（あるいは４段）に区切られる。突帯間には波状文を施し，２～４段目には直線的に長方形または台形のスカシ孔が開けられている。この器台の編年的位置付けは，特徴となる鋸歯文について，鋸歯文を持つ須恵器の窯跡の点から検討してみたい。

現在このような窯跡としては，大阪の一須賀２号窯[(1)]，吹田32号窯[(2)]が知られており，出土須恵器は１型式１段階に位置付けられている。先述のとおり老司古墳出土須恵器は陶邑産であることがわかっているが，陶邑[(3)]からの出土は今までのところみられない。陶邑産である事が間違いなければ，陶邑におけるこういった須恵器の生産時期が問題となる。これについては，一つは，Ⅰ型式１段階の窯とほぼ同時期に別系統の須恵器工人が生産した場合と，Ⅰ型式１段階以前に生産が行われていた場合とが考えられる。前者については，同一窯跡群内において２系統の工人が存在した可能性は低いと思われる。むしろⅠ型式１段階以前の一時期に鋸歯文を持つ須恵

器が生産されていたと考えるほうが妥当である。そこで，老司古墳出土器台はⅠ型式1段階より古い型式として位置付けたい。甕に関しては全体の復元が不可能だが，口縁形態はⅠ型式1段階の古い時期の特徴を有している。胴部内外面叩きのスリ消し具合もこの時期の特徴に一致するため，器台とほぼ同時期に位置付けられよう。

3）老司古墳出土須恵器の年代観

ここで老司古墳出土須恵器の実年代観についてふれてみたい。まず，陶邑と北部九州のそれぞれの初期須恵器編年と実年代観について簡単にまとめてみよう。

陶邑の編年については，田辺昭三氏[4]，森浩一氏[5]，中村浩氏[6]らによりほぼ完成されており，改めて論ずる必要はないだろう。ここで問題となるのは，陶邑の生産開始時期である。この時期については，4世紀末から5世紀初頭[7]説と5世紀中頃[8]説の大きく2つの説にわかれている。前者の年代の根拠は，埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣の紀年銘である。稲荷山古墳出土鉄剣の辛亥年をAD471年とし，出土須恵器をTK43型式に比定する。TK43型式の前には4型式が存在することから，Ⅰ型式の時間幅を約20年程度と考え，4世紀末から5世紀初頭の年代が与えられるとする。後者の年代の根拠は，朝鮮半島における新羅土器の生産開始時期や，前者と同様稲荷山古墳出土鉄剣などがある。

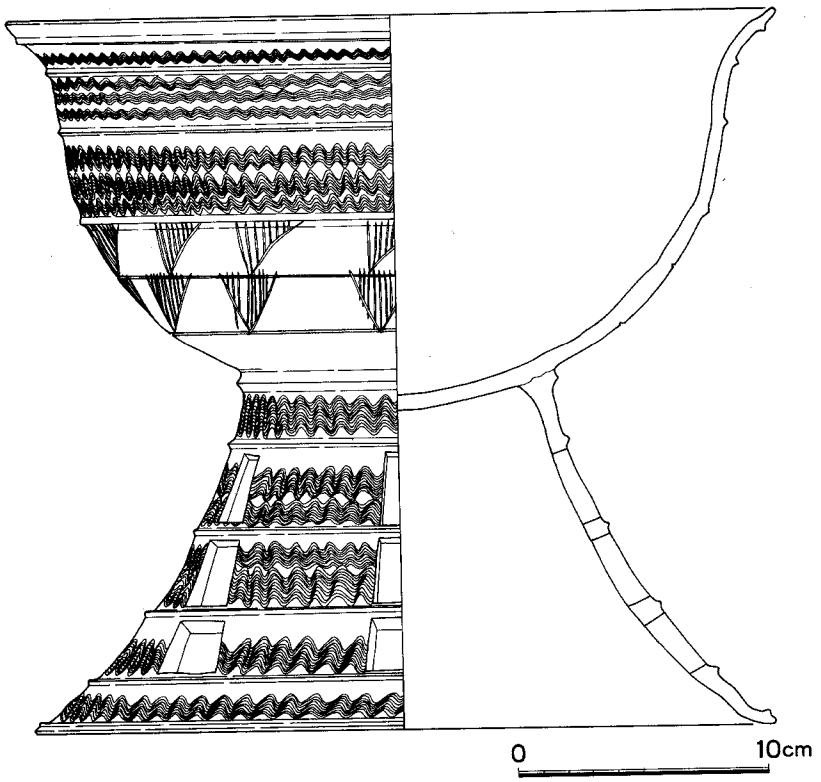


図141. 老司古墳出土須恵器器台の復元想定図（縮尺約1／3）

次に北部九州の編年については，古くは「対馬」[9]における水野精一，樋口隆康，岡崎敬氏らの編年や，小田富士雄氏の編年[10]があった。しかし当時期の資料数が少なかったこともあって明確な編年は組み立てられずにいた。ところが，近年「池の上墳墓群」[11]，「古寺墳墓群」[12]といった甘木，朝倉地方の遺跡を中心に資料の増加がみられ，また小隈窯や山隈窯など初期須恵器窯跡が確認されるに及んで新しく各氏の編年が提出されている。その中でもまずあげられるのが，橋口達也氏の編年[13]である。橋口氏は，「池の上墳墓群」において，広口壷を口唇部のつくりと波状文の精粗により4形態に分類した。この分類を基準にして共伴関係を調べ，その他の器種にも差が認められることから，先の分類を妥当としⅠ式～Ⅳ式を設定している。また，年代観については，その後の古寺墳墓群の調査結果も含めて，Ⅰ式を4世紀後半，Ⅱ式を4世紀末～5世紀初頭，Ⅲ式を5世紀前半代の前半，Ⅳ式を5世紀前半代の後半に位置付けている。

この編年に対しては，柳田康雄氏[14]，蒲原宏行，多々良友博，藤井伸幸氏[15]らの批判がある。柳田氏は，口唇部のつくりの変化は小差であり，4式に分類するのは無理があるとしている。またⅡ式に伴なう土師器甕を5世紀前半に位置付け，Ⅲ式とⅣ式の間には大差があるとし，Ⅰ式をⅠa式，Ⅱ式をⅠb式，Ⅲ式をⅡa式，Ⅳ式をⅢa式としている。蒲原氏らは，柳田氏の分類の方がより実情に即しているとしながらも，口唇部のつくり及び陶邑産須恵器との共伴関係から新たに編年案を提示している。実年代観については須恵器生産の開始をAD420年頃を目安とし，Ⅰb式までを5世紀前半，Ⅱa式を5世紀中頃，Ⅲa式をやや遅れて5世紀後半に比定している。

次に北部九州，陶邑の須恵器について土師器との共伴関係をみてみたい。土師器編年は甘木，朝倉地域の良好な編年がないので，福岡平野の今光遺跡[16]，松木遺跡[17]の編年を使用したい。今光編年，松木編年の詳細は各報告書に譲るが，須恵器出現前後として問題となるⅣ～Ⅵ期について，簡単にまとめてみたい。この時期は今光遺跡，松木遺跡共に同様の変化をみせる。

Ⅳ期は，典型的布留期に後出する一群である。器種は壷，小形丸底，甕，高杯，鉢，椀がある。壷，甕には口縁部に布留的な要素を残す内湾気味のものと，「く」字状に外反するものがある。高杯は，杯部が深いものが新しく出現する。小形丸底も頸部付け根の締まったものが出現する。Ⅴ期は調整が荒くなる時期である。壷，甕の口縁部は，ほぼ直線的に伸びる。甕は胴部の長胴化が始まる。高杯は脚部が強く屈曲するものが多く，スカート状に広がるものも出現する。また杯部が深く，丸みをおびるものが数を増していく。椀は器高の低いものと，高いものが共存し，口縁部が内5するものも出現する。Ⅵ期は，壷，甕の口縁部は直線的に伸び，長胴化が進む。高杯は体部が丸みをおび，口縁部が外反するものに変わる。小形丸底と湾の器高の低いものは姿を消す。この編年における土師器と須恵器の共伴関係について述べる前に，池の上墳墓群出土資料の問題点を整理しておきたい。

橋口氏の編年の問題点としては，口唇部のつくりの変化と波状文の変化を一致させ，変化をそのまま時期差とした結果，編年に無理が生じてくる点が挙げられる。口唇部の変化は柳田氏の指摘にあるように小差であり，時期差であるのか同時期内の個体差であるのか不明である。波状文についても同様のことが言える。編年を組み立てる場合には，頸部や底部，全体のプロポーションといった他の要素もま考慮にいれたうえで分類を行なうべきであり，さらに層位や他遺物との共伴関係などから時期差を決定する必要があると考える。以下では，「池の上墳墓群」において各遺構より平均的に出土している広口壺を使用し，再編年を試みたい。

まず分類であるが，3類に分類したい。1類は，6号墳，2号土壙墓出土例である。器形の特徴としては，頸部は垂直に近く立ち上がり，口縁部付近で外反する。肩部の張りは強く，底部は平底もしくはやや上げ底となる。2類は，1号土壙墓出土例である。頸部はやや傾きが強くなり，肩部の張りは弱くなる。底部はまだ平底を呈するが，丸底化の兆しが見え始める。3類は，7号土壙墓出土例である。頸部はより傾き口縁部とほぼ直線的となる。肩部の張りはほとんどなくなり，底部は丸底化し凸レンズ状を呈する。なお，4号土壙墓出土例は口唇部のつくりが明らかに異なっており，別系統の壺と考えられることから編年からは除きたい。今光，松木編年のⅣ期と確実に共伴する須恵器は今のところ見られない。Ⅴ期には，池の上墳墓群出土須恵器では2類と3類が共伴する。陶邑産須恵器では，Ⅰ型式1段階からⅠ型式2段階の古段階のものまでが共伴する。Ⅵ期では，池の上墳墓群出土須恵器との共伴は見られない。陶邑産須恵器はⅠ型式2段階の新段階からⅠ型式3段階が共伴する。[18]

土師器編年における池の上1類～3類の関係だが，1類は共伴土師器が不明であるため1類と2類，3類との前後関係は分からない。しかし，型式的にみると1類は2類，3類に先行すると考えられる。2類と3類は，2類と共伴する土師器がⅤ期の中でも古い様相を示すのに対し，3類と共伴するものは新しい様相を示す。このことから，2類と3類では2類が先行する。しかしⅤ期内に納まる程度の差であることから，1類から3類までをまとめてⅠ期とし，1類と2類をⅠa期，3類をⅠb期としたい。ただ1類については，今後の資料の増加によりⅤ期を遡る可能性を含んでいる。以上のことをまとめると表13のようになる。この表を基に，須恵器の生産開始時期および老司古墳出土須恵器の年代観について触れてみたい。

現在までにわかっている須恵器の最古段階は土師器編年で言えば今光Ⅴ期，松木Ⅴ期にあたる。年代としては，今光Ⅲ期，松木Ⅲ期が布留式の新段階に比定されるので，この時期を4世紀後半とし，今光Ⅳ期，松木Ⅳ期を4世紀末から5世紀初頭とすると，5世紀前半といった年代が与えられる。しかし，老司古墳出土須恵器がⅠ型式1段階以前に位置付けられることや，池の上出土資料もこの時期を遡りうる可能性を持っていることを考慮に入れると，須恵器生産は遅くとも5世紀初頭には開始されていたと考えられる。

したがって，老司古墳出土須恵器の年代は5世紀初頭に位置付けたい。

4) おわりに

以上，老司古墳出土須恵器の編年的位置付けと年代観について考察を行なった。

現時点では須恵器の生産開始時期は5世紀初頭に位置付けられるが，近年関西方面で布留式模倣須恵器の出土が報告されており[19]，年代についてはさらに遡る可能性を含んでいる。また，北部九州における初期須恵器の編年は，器種構成や時期区分においてまだ問題を残している。これらはいずれ別稿を用意したい。

〈参考文献〉

1．中村浩他　「一須賀2号窯」『陶邑Ⅲ』　大阪府教育委員会　1978

2．「第5章吹田32号須恵器窯跡の発掘調査」『昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概要』吹田市教育委員会　1986

3．中村浩他　「陶邑」Ⅰ～Ⅴ　大阪府教育委員会　1970，1976～1980

4．田辺昭三　「須恵器大成」　角川書店　1981

5．森浩一　「和泉河内窯の須恵器編年」『世界陶磁器全集』1　河出書房新社　1958

6．中村浩　「出土須恵器の編年的考察」『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981

7．白石太一郎　「近畿における古墳の年代」『考古学ジャーナル』№164　ニューサイエンス社　1979

8．原口正三　「須恵器の源流をたずねて」『古代史発掘』6　講談社　1975

関川尚行　「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論巧』10　橿原考古学研究所　1984

9．水野精一，樋口隆康，岡崎敬　「対馬」　東亜考古学会　1953

10．小田富士雄　「九州の須恵器序説」『九州考古学』22　九州考古学会　1964

11．橋口達也他　「池の上墳墓群」　甘木市文化財調査報告第5集　甘木市教育委員会　1979

12．橋口達也他　「古寺墳墓群」，「古寺墳墓群Ⅱ」　甘木市文化財調査報告第14集，第15集　甘木市教育委員会　1982，1983

13．橋口達也　「出土陶質土器の編年」『池の上墳墓群』，「Ⅲ　陶質土器についての若干の考察」『古寺墳墓群』，「Ⅲ　考察」『古寺墳墓群』Ⅱ　甘木市文化財調査報告第5集，第14集，第15集　甘木市教育委員会　1979，1982，1983

14．柳田康雄　「原始」『甘木市史』上巻　1982

15．蒲原宏行，多々良友博，藤井伸幸　「佐賀平野の初期須恵器・陶質土器」『古文化談叢』第15集　九州古文化研究会　1985

16．浜田信也，佐々木隆彦，田平徳栄　「今光遺跡，地余遺跡」　東急不動産株式会社　1980

17．佐々木隆彦，小池史哲　「松木遺跡」Ⅰ　那珂川町教育委員会　1984

18．共伴関係については下記文献を参照されたい。

文献11，文献12，文献15，文献17，丸山康晴，佐土原逸男，佐々木隆彦，平田定幸，秀嶋龍男　「赤井手遺跡」　春日市教育委員会　1980，井上裕弘　「御床松原遺跡」　志摩町教育委員会　1983，新原正典，中間研志，平嶋文博「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告6　甘木市所左柿原古墳群の調査Ⅱ（Ⅰ地区）中巻」福岡県教育委員会　1986，

柳田康雄　「国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会　1984

19．村上年生他　「小阪遺跡」その3　(財)大阪文化財センター　1987

（太田　睦）

<table>
<tr><th rowspan="2">年　代</th><th rowspan="2">今光・松木</th><th>陶　邑</th><th colspan="3">北　部　九　州</th></tr>
<tr><th>中村（田辺）</th><th>本　稿</th><th>柳　田</th><th>橋　口</th></tr>
<tr><td rowspan="8">400
450</td><td rowspan="2">Ⅲ</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">Ⅰ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅳ</td><td rowspan="2">老司</td><td rowspan="2"></td><td></td><td rowspan="2">Ⅱ</td></tr>
<tr><td>Ⅰa</td></tr>
<tr><td rowspan="3">Ⅴ</td><td rowspan="2">Ⅰ-1(TK73)</td><td rowspan="2">Ⅰa</td><td>Ⅰb</td><td rowspan="2">Ⅲ</td></tr>
<tr><td>Ⅱa</td></tr>
<tr><td rowspan="3">Ⅰ-2
(TK216)　(ON46)</td><td rowspan="2">Ⅰb</td><td></td><td rowspan="2">Ⅳ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅵ</td><td rowspan="2">Ⅱa</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>Ⅰ-3(TK208)</td><td></td></tr>
</table>

表13．土師器および初期須恵器編年案対照表

7．老司古墳出土の埴輪・土器について

老司古墳では墳丘に樹立していた埴輪と，墳丘斜面などから，本古墳に関係するとみられる土師器などが出土した。埴輪は，壷形埴輪を主体とし，少量の円筒埴輪と形象埴輪がある。形象埴輪は小破片であるので，ここでの検討は避ける。以下ではその他の資料について特に編年的な位置付けについて検討してみたい。

円筒埴輪は小破片のみであり，詳細な検討はできない。外径の推定できる例では口径20cm弱のものと，筒部が40cmを超えるものがある。また調査時に取り上げられなかったNo.17とNo.45は底部径が30cm前後である。器壁外面の調整は破片では外面は縦ハケの一次調整のみか，その上をナデている。ハケの条線は８本前後／１cmである。器壁は1.2～1.6cmである。No.17・45は器壁が0.6～0.9cmと比べて総じて薄い。タガは１cm以下と低いものが多い。黒斑がみられいわゆる野焼きにより作成されているとみられる。これだけの資料で編年的位置付けはかなり困難である。しかし，その主な特徴は高橋徹編年[(1)]でⅠ～Ⅱ期の範疇に位置付けられよう。高橋氏はその編年の中で老司古墳の例をⅠ期に位置付けているが，規定されるタガや器壁の特徴はここに示した資料に一致しない。藤瀬禎博，蒲原宏行氏による佐賀県下の埴輪編年[(2)]において，最古のⅠ期に位置付けられる浜玉町谷口古墳，佐賀市銚子塚古墳の例は低いタガと薄い器壁をもち，老司古墳の資料の一部に共通点がある。福岡市丸隈山古墳では形態，調整などが異なる３種の円筒埴輪が出土している[(3)]。これらは縦ハケ一次調整のみであり，器壁は0.9～2.1cmのものがあり，1.5cm以上のものが多い。タガは1.2～2.1cmとやや高い。調査者の柳沢一男氏は川西宏編年のⅡ期に含まれるものとしている。また，北部九州の埴輪のタガは

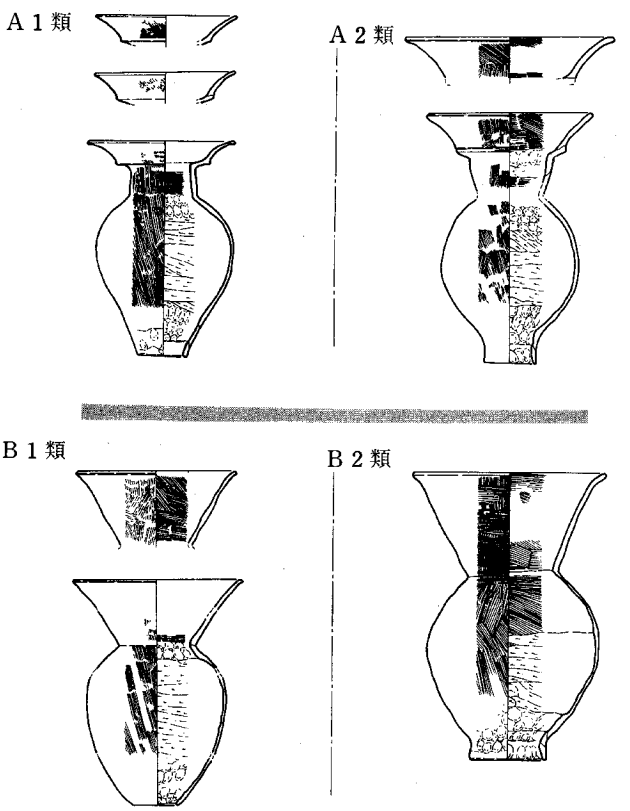


図142． 老司古墳出土壷形埴輪の分類　（縮尺１／12）

横ハケ二次調整の増加するII～III期の段階に最も高くなる。こうした点から，消極的ではあるが老司古墳出土の円筒埴輪は高橋編年のI期に相当する時期のものと考えておきたい。

壷形埴輪は形態から二重口縁と単口縁の2種類がある。ここでは前者をA類，後者をB類とし，さらに器高，形態，調整の精粗でさらに二分する。小型で全体にシャープな造りで胴部が卵型を呈し，最大径が上位にあるものをA1類とB1類とし，大型で全体に粗雑な造りを伺わせ，胴部最大径が中位にあるものをA2類とB2類とする（図142)。これらは樹立状態や後述の諸特徴からほとんど同時に生産されたものとみられ，その差異は別の要因により生じたものとみられる。A，B類は胎土，調整，焼成に共通する特徴が多い。まず粘土巻き上げで形成し，タタキを行わない。調整は外面がハケと指オサエ，ナデにより，胴部内面は荒いヘラケズリ，指オサエ，ナデ，頸部内面はハケとナデで仕上げている。また，特徴的な事項として底部の焼成前穿孔と粘土による拡張がある。これは粘土帯の接合手法，胎土の相違，調整の差などから判断できるものである。まず，底部に直径14～16cm程度の穿孔を行い，その端部に粘土帯を数段にわたって貼り付け，底部を下方に延長している。仕上がりの底部形態はA，B類共通して，1）底部のやや上方まで直線的にすぼまり，底部上方で外反して拡がるもの。2）底部のやや上方まで直線的にすぼまり，底部上方でほぼ直立するもの。3）底部に向ってほぼ直線的にすぼまるものなどがある。数量的には1）が6個体，2）が5個体，3）が8個体ある。また，底部のみの資料のなかに粘土帯によって拡張せず，直径3cm程度の小さな穿孔を行うものが2個体ある。次にA類に共通して頸部から口縁部にかけて2ケ所の疑似口縁が観察される。1つは頸部の頂部であり，もう1つは二重口縁の受部である。両者の剝落した部分では，先行したハケ，ナデなどの調整痕が明瞭に観察される。底部の整形とこうした口縁部の作製は次のような工程として復元できる（図143)。まず，卵型もしくは楕円形の胴部にほぼ直立する口縁の付く壷形土器を作製（第1工程)，次に底部穿孔，粘土による底部の拡張後，乾燥させる（第2工程)，さらに二重口縁の受部を形成，乾燥させる(第3工程)，二重口縁を形成，乾燥させる(第4工程)。こうした後に焼成を行ったとみられる。なお，老司古墳の調査概報で示された「口縁が直線状にやや外反して，底部付近で一旦すぼまる型式」のもの(概報で示されたのは図26－19である)は，第2工程段階の疑似口縁で上部が剝落した個体を，誤って口縁部と理解したものである。

さて，これらの壷形埴輪の編年的位置付けであるが，A類は「茶臼山式壷」「墳墓型二重口縁壷」と呼ばれる壷形埴輪の系譜に連なるものである。これについては近年調査，報告が続き，編年的研究も進められている。小口妙子，片岡宏二氏は4期区分[(4)]，村上久和氏は3期5小区分している[(5)]。これらの編年については詳しく触れないが，その初期において同形式が広域に分布しているにも拘わらず，比較的単純な変化を示し，時期が下がると地域差が顕著となるようである。北部九州に限ると，基本的には小口妙子，片岡宏二，村上久和氏らの編年はほぼ妥当で

ある。A類の系譜としては筑紫野市峠山1号墳，福岡市藤崎1・7号墳[6]が初期の例であり，小郡市三国の鼻1号墳が次の段階に位置付けられる。老司古墳のA類はさらに後出するとみられる。これらは一貫して口縁部径の拡大，長頸化，長胴化という変化を辿っている。こうした変化は基本的に墳丘を飾る装飾性を次第に増加させるもので，視覚的効果をねらった動きであると考えられる。なお，二重口縁形の壺形埴輪には，他に朝顔形埴輪の影響を強く受けた系譜が存在する。ところで，小口氏は三国の鼻1号墳と老司古墳の間に佐賀市銚子塚古墳の資料を位置付けている。しかし，示されている資料は老司古墳の例と同様に口縁径が胴部径より大きく，頸部はより長く拡張されている。また，器形各部のシャープさも失われており，その位置は片岡宏二氏の位置付けのように老司古墳に並行するか，むしろ後出すると考えられる。さて，三国の鼻1号墳と老司古墳の形態的な差は，特に底部と口縁形態において大きいが，底部の拡張という手法を除くと両者は連続的に捉えられるものである。

B類は村上久和氏により「朝顔形壺」として編年がなされている[7]。それによるとA類にやや遅れてⅠ期後半からⅡa期の間に出現し，Ⅱc期の老司古墳まで系譜を持つという。その主な特徴はⅡb期まで焼成後穿孔であるという。しかし，近年調査された宗像市東郷高塚古墳では焼成

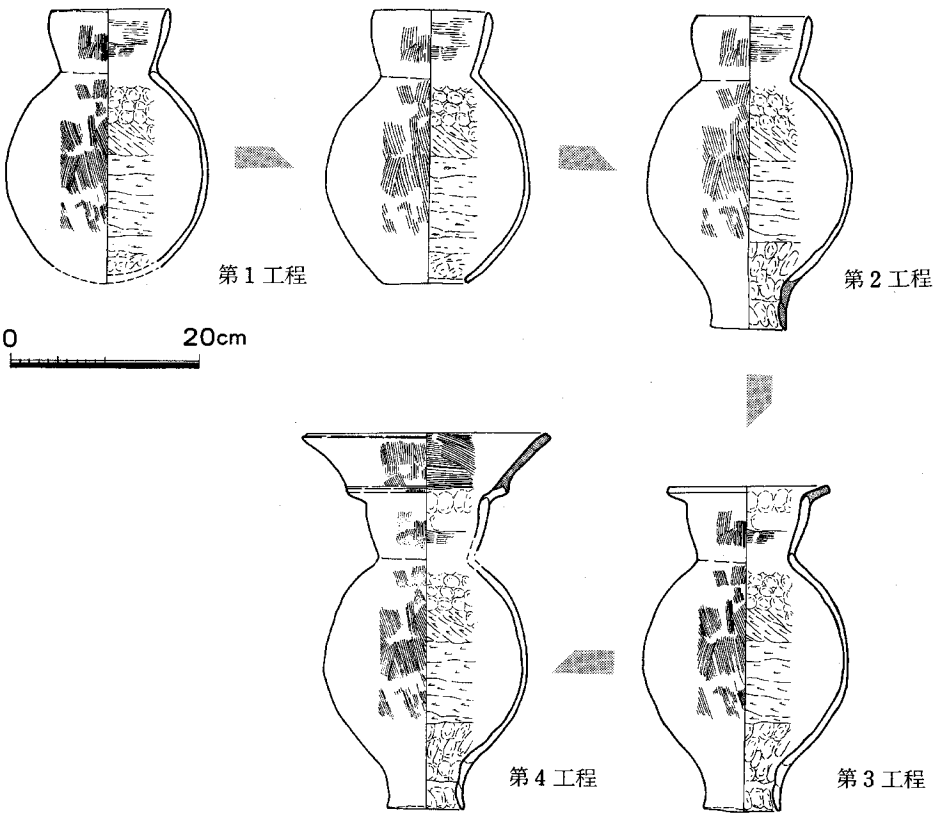


図143. 壺形埴輪A類の製作工程想定図　(縮尺1／8)

前穿孔を有するB類の系譜の壷形埴輪が多く出土している。[8]その器形は口縁部が拡大し，長胴化の傾向が認められるものの，口縁部の特徴や低部穿孔の形態などは老司古墳のものより古相をもっている。底部形の特徴は大きく異なるが，器面の調整や器高，器形などから老司古墳の前段階に位置付けられるものと考えられる。

さて，老司古墳からは僅かながら土師器が出土している。検討可能な確実な個体数は杯1，高杯2，壷2である。杯は直径が12.5～13.0cm，器高は4cm以下と浅く，底部から強く立ち上がる。高杯は何れも軸部より下位であり，やや特徴が異なる。軸部の立ち上がりは急角であり，端部は鋭く折れるものと，ゆるく拡がるものがある。壷は二重口縁壷と，球形の胴部を持ち，頸部がしまり口縁を「く」字状に外反するものがある。後者は器壁を薄く仕上げられ，外面をヘラミガキしている。こうした特徴を周辺の遺跡に求めると，老司古墳の南東1.5～2.0km付近に位置する那珂川町今光，地余[9]，松木遺跡[10]などに良好な資料がある。その中では今光遺跡溝2の資料が最も近い例となろう。この遺構からは壷，小形丸底壷，甕，杯，片口形土器，高杯，甑，手ずくね，陶質土器などが出土している。しかし，調査者も指摘しているようにこの遺構出土の遺物には，各器種ごとに異変があり多少の時期幅が存在するようである。特に高杯には脚部の開くもの，「ハ」字状に開くものがあり新しい様相のものも含んでいる。また，杯では類似した口縁径でも器高が4.5～6.0cmに中心があり，全体に深いものが多い。杯にはしだいに深底化する傾向があり，こうした点から老司古墳の土師器はこの溝2のなかでも古い一群か，やや先行する時期に位置付けられよう。少量の土器片のために危険ではあるが，あえてその編年的位置を求めるならば，報告者の佐々木隆彦氏による今光遺跡Ⅳ期の範疇に位置付けられようか。

註

1．高橋徹「九州の埴輪概論」『二塚山遺跡』久留米市開発公社　1976
2．藤瀬禎博，蒲原宏行「西九州地方の埴輪」『季刊考古学』20　1987
3．柳沢一男「丸隈山古墳Ⅱ」　福岡市教育委員会　1986
4．片岡宏二，小口妙子「土器の出土状態と観察」『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市教育委員会　1985
　片岡宏二「まとめ」『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市教育委員会　1985
5．村上久和，田中裕介「勘助野地遺跡」『一般国道中津バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』大分県教育委員会　1988
6．浜石哲也，池崎譲二「藤崎遺跡」福岡市教育委員会　1982
7．註5に同じ
8．宗像市教育委員会編「東郷高塚が語る古代のむなかた」宗像市教育委員会　1988
　東郷高塚とその出土資料については，宗像市教育委員会原俊一氏に教示を受けた。記して感謝したい。
9．浜田信也，佐々木隆彦，田平徳栄「今光遺跡　地余遺跡」　東急不動産株式会社　1980
10．佐々木隆彦，小池史哲「松木遺跡Ⅰ」那珂川町教育委員会　1984

（吉留秀敏）

IX 結　語

老司古墳は福岡市の中央部を南から北に貫流する那珂川中流域左岸の丘陵上に営造された前方後円墳である。福岡少年院の裏山にあたるこの古墳は，太平洋戦争後の少年院敷地拡張のため採土整地工事が進行して崖上に孤立する状態となり，破壊消滅が危惧されるにいたった。1965年の墳丘測量に始まり，1969年にいたる九州大学文学部考古学研究室関係者による発掘調査はこのような情勢下で行われたのであった。当初盗掘をうけていた1号石室の清掃のつもりで実施したのであったが，最終的には後円部3基，前方部1基の竪穴系横口石室を調査し，後円部に壷形埴輪がめぐっている事実を確かめて一応終了した。1987年福岡市教育委員会では将来の遺跡整備のため，さきの調査で手の及ばなかった墳丘構造を主とする補足調査を遂行して，ここに着手以来20余年を経てようやく完結をみた。

まず老司古墳の外形は南に前方部を向けた前方後円墳で，前方部二段，後円部三段築成になる全長75（～76）mの大型クラスに属する。復原された後円部径42m，高さ約7.9m，前方部長約33m，高さ約4m。くびれ部幅約24mで，前方部端に向けて直線的に広がり，先端ではほぼ後円部径に近い幅に達すると思われる。また後円部径は正確には正円形をなさず南北方向に若干長い。墳頂部には壇状施設があったと考えられるが，同様な施設は前方部先端でも確認された。墳丘の形成にあたってその大部分が地山整形され，後円部で2m前後（三段目中位）まで，前方部で1m以下の盛土であったようである。前方部上面（二段目平坦面）は後円部二段目平坦面と連続するが，この両者の平坦面は敷石で覆われ，後円部ではこの敷石面に壷形埴輪がめぐらされている。さらに敷石は各段築の平坦面に認められ，また葺石は墳丘を構成する斜面で認められる。

墳丘の形成と石室の構築の関係についても，層位調査によって，まず石室構築以前にある程度墳丘の形成作業がおこなわれたのち，墓壙を掘りこんで石室を構築するという二時期の工程が知られた。

つぎに石室は後円部に3基（1・2・3号），前方部に1基（4号）が構築されている。1960年代の調査以来，老司古墳が全国的に有名になったのはこの石室構造の特異性にあった。4基の石室ともに板石を平積みした長方形プラン箱型構造である点では，竪穴式石室の構築法を基本とするものである。問題はいずれも石室の一方の小口が横口閉塞の構造をとる点にあった。そしてそこから外方に通ずる墓道が設けられている点とあわせて，導入期の横口式石室の様相を示すものとして注目され，竪穴系横口石室の名称と共に，この種石室の最古段階に位置づけられたのであった。なかでも後円部の中心主体である3号石室は墳丘内における構築位置も最も深く，石室規模も約3×2m，高さ約1.7mと最大であり，南側小口から前方部上面に通ずる墓道は約9mに達していた。しかもこの墓道床面のレベルは石室の天井面に近いため，出入口

にあたる南側小口部はこの部分の大きな一枚天井石（扉石）を除いて上から降りてゆく方法をとることとなった。複数体の追葬を行った最終段階ではこの扉石は斜立した状態となっていた。後続する1・2・4号石室では規模の小さいことにもよるためか，石室の内蔵位置は高くなり，墓道も小口方向に傾斜させて横口からの出入に応じられる方向にすすんでいる。しかし総じて横口構造の設営には未消化な対応段階にあったことは否定できない。そしてこのような状況は大陸系横穴式石室が導入された最初の段階で，従来の竪穴式石室構築側からの対応がどのようなものであったかを示す具体相である点で注目すべきものである。現段階ではさらに4世紀末頃にまでさかのぼる横口構造例として現在調査中の佐賀県・谷口古墳が知られるにいたったが，その横口にあたる小口構造においては共通するところがみられる。竪穴系横口石室はこの後北部九州からさらに中・四国，近畿，東海地方へと展開してゆくが，老司古墳は谷口古墳などと並んで，いまなおこの石室系列中の最古段階に位置付けられることはかわらない。北部九州で4世紀代にさかのぼって横口式石室が現われるようになった契機には，369年に始まる倭軍の半島介入の歴史がまずあげられるであろう。百済と連合して対新羅，対高句麗の戦斗に関与したが，このような軍事行動は404年帯方界に侵入して敗退するまで続けられたことは好太王碑文にくわしい。このような機会を通じて高句麗や楽浪地域の横穴式古墳の知識が獲得されたであろうことは想像に難くない。

石室内の副葬品は種類，数量ともに豊富である。装身具・鏡・武具・武器・馬具・農工具・土器の項に分ってそれぞれ整理した解説が加えられているので，詳細はそれらに拠られたい。本古墳の中心的存在である3号石室は最も副葬品多く，鉄製の武器・武具・農工具に加えて計8面の銅鏡を所有していた。その中には同笵鏡を有する舶載三角縁神獣鏡片を含んでいる。また勾玉・管玉には被葬者に着装されない状態での副葬が注目された。複数体の埋葬が考えられていることとあわせて副葬品配置状態の吟味がすすめられた。また馬具では2個の鉄棒を捩りあわせた数少ない初期の轡形式で伽耶地域とも共通する点が注目される。

つづいては1号石室，4号石室の副葬品が多い。ここでも追葬があるが，武器・農工具が主体で1号石室では滑石製模造玉類と舶載方格規矩文鏡1面が注目された。また土師器器台は両石室から発見されているが，型式的には4号石室のものがやや後出するものである。

最も規模の小さい2号石室では副葬品も少ないが，やはり追葬が認められ，武器のほかに仿製変形文鏡1面，三角板革綴短甲1領を有していた。

以上の4基の石室は副葬品を検討してみると，きわめて近接した時期の間に次々に設けられたものであり，或る時には並行して使用されたこともあったであろうかと思われる。5世紀初頭を下らない頃に最初の埋葬があり（3号石室），5世紀中頃を下限とする期間にさらに3基の石室が次々に営まれ，いずれにも追葬が行われている。人骨が検出されたものや，副葬品の配置によって推定されている被葬者の内容を石室別に整理してみると，

1号石室　1体以上
2号石室　1号男性（成～熟年）
　　2号男性（成人）
3号石室　女性（成年）＋2体以上
4号石室　1号男性（熟年）
　　2号男性（成年）
　　3号成人（熟年女性？）

となる。石室内における埋葬順序は2号石室で1号男→2号男，4号石室で3号女→2号男→1号男となり，人類学からの推定では2号石室では兄弟関係，4号石室では親子関係の可能性が指摘されている。ともあれ5世紀前半代におけるこの地域の最高首長クラスの家系であるが，顔面の特徴はいわゆる渡来人的でなく，縄文人的特徴をも保有している点で「弥生時代以来の混血を経た形質」であるとされたことは重要な示唆を与えてくれる。すなわち伝統的な在地型首長の家系をひく首長層であることを意味しており，一部の副葬品に伽耶系遺物があることのみを重視して，渡来系首長であることを主張する向きがあったことに対する警鐘であり，また考古学的にみても遺跡・遺物の総合的検討によって判断されるべきことを示している。

一方，墳丘の調査で検出された初期須恵器が螢光X線分析と考古学的検討によって5世紀前半代に比定される大阪陶邑窯群産と認定されたことも注目される成果であった。

老司古墳は5世紀初頭に築造された福岡・那珂平野を支配する最大級の首長墓である。『後漢書』や『魏志倭人伝』に記された奴国連合時代にまでその発祥をさかのぼりうる可能性を有する首長系列の墳墓であり，近畿の倭政権とも密接な関係を有し，かつ大陸交渉ともかかわりを持って，5世紀初頭にはこの地域最大の豪族に成長したと考えられる。そして老司古墳にはその首長の直系親族を含む一族が短期間のうちにあいついで埋葬されていったことを如実に示していたのである。

老司古墳の調査着手以来報告書の発刊までには多くの方々の御協力があった。とりわけ調査当時の福岡少年院長井上謙二郎氏には敷地拡張のため古墳域を削平する予定であった当初の計画を変更されるまでの御理解を示していただき，この重要な遺跡を保存する端緒を開くにいたったことを特筆して深く感謝の意を表したい。また第2次調査には福岡県教育委員会の，第3・4次調査には福岡市教育委員会の御支援によるところが大きい。さらに発掘調査から今回の資料整理・報告書作成にいたるまでたずさわった九州大学考古学研究室関係者・福岡市教育委員会関係者も，長年月の間に移動があったが，幸いにも新旧関係者一同総動員して事にあたることができ，ここに無事完結をみることができたことは喜びにたえないところである。近い将来古墳の環境整備も計画されているので，一般に公開される日もそう遠くないであろう。関係諸機関にもあわせて謝意を表する次第である。

（森貞次郎，小田富士雄）

付説

筑前国卯内尺古墳出土と伝える鏡

三木文雄

かつて，筆者のもとに一面の神獣鏡と銅鏃をおもちになって見せて頂いたことがあった。その折，手拓をさせて頂いた拓影に，筑前那珂郡老司卯ノ内己ノ内出土と記入するのみで，持主のお名前を書きおとして，今知るよしがない。その後，福岡市在住の学友にこのことを知らせていたことから，今次老司古墳の報告書が出版されるに際して，卯内尺出土と伝える鏡について書けとの仰せに応じて，この拙文をつづる次第である。

この拓影にいう己ノ内出土の鏡は，三角縁獣帯三神三獣鏡とよばれているうちの仿製鏡である。当時の計測では面径22.0cm，背面径21.6cm，鈕径1.8cm，同高0.8cmと測っていて，柳葉形銅鏃の拓影をとりそえている。

この種の鏡は，今日のわが学界で舶載か，わが国でつくられたかについてとかく問題をはら

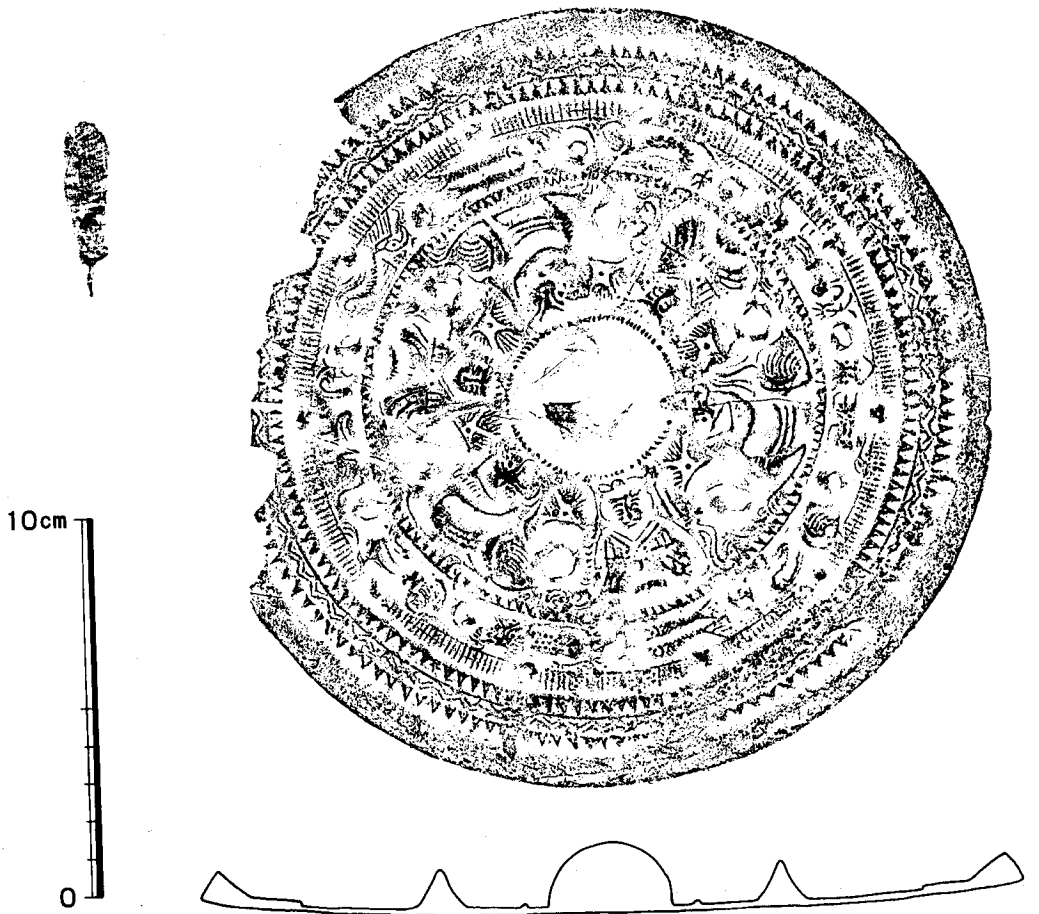


図144．卯内尺古墳出土と伝える銅鏡および銅鏃拓影　縮尺½

んだところの，外縁が三角形の断面を呈し，複線波文をはさむ鋸歯文の平坦な縁と，三神三獣の主文の内区との間に，天王日月，君宜高官，あるいは長宜子孫などの文字を，一字ないし四文字かの方形格と乳文を交互にはさんだ8ないし12区に，双魚，蛙，竜，鳥ほかの動物文の帯をもつ在銘三角縁獣帯三神三獣鏡の硬化したものである。内行花文鏡や四神鏡などの仿製には大小の違いの多いことと異なって，三角縁三神三獣鏡の仿製は，20ないし24.0cm程度の，いずれも大きい鏡径を呈することが，とくに注意を惑く。かつ，北部九州から北陸ないし関東地域に広く分布し，そのいずれも古式古墳からの出土であることは，限られた短かい時期の製作をうかがわせる。

在銘三角縁獣帯三神三角獣鏡との違いは，内区主文の神像は硬化し，正面向の獣形が左横向にかわり，捩形文の乳座が円座か素乳に省略され，その乳の鈕寄りに松毬形また火焔形ともいわれる施文をもつ。とくに，外縁と主文の内区との間の獣文帯に文字銘を失なって乳文にかわり，希に11ケの乳のものがあるほか，多く10ケの乳で10区に仕切った間に動物文をおいた所謂獣帯になる。獣帯の動物文の向きは，左廻りのもの，右まわりのもののほか，両廻りまじりあったものがあり，動物文の形像の硬化も著しい。

卯内尺出土の本鏡は，以上のような仿製三角縁獣帯三神三獣鏡の一つであって，10ケの乳間は双魚，蛙，竜，鳥ほかの動物文の形像10ケを左まわりに配分したうえ，獣文帯と鋸歯文の外縁との間にある櫛歯文帯と獣文帯との界線上にも，獣文帯の乳文よりいくらか小さめの乳文10ケを，獣文帯の乳文間に等間隔に加えもつことは，同じ三角縁獣帯三神三獣鏡の中でも，この鏡のもつ顕著な特質といってよい。その獣文帯と櫛歯文帯の界線上との両帯に乳文をもつ三神三獣鏡は

備前国邑久郡行幸村花光寺山古墳
摂津国茨木市宿久庄紫金山古墳
山城国向日市寺戸町大塚古墳
　同　　同　　向日町妙見山古墳
河内国羽東野市壷井御旅山古墳
　同　　柏原市国分町茶臼塚古墳

などに，同趣向の鏡を見出すことができる。

以上の数例の同趣向の鏡についてみると，花光寺山古墳出土鏡[注1]は，内区主文の間の六乳すべてに松毬形というか火焔形ともいわれるところの施文をもつが，なお分離していない松毬形的であり，かつ内区の一つの乳の左横片側に火焔形かざりをもつほか，双魚二対は非対照的に位置して右向廻りの方向をとること，および動物文は右向，左向のいりまじった方向をとるなどは卯内尺出土鏡と異なり，面径は21.5cmで，いくらか小さい。

次ぐ寺戸大塚古墳出土鏡[注2]は，内区主文の三ツ山形冠の神像の外側に添う獣文帯の双魚が櫛歯

文帯との界線上の乳文にわざわいされて，外側寄りの魚形が倭小化しているうえ，主文をわける素乳の鈕寄りの松毬形が火焔形状に分離していないことなどが卯内尺出土鏡との違いである。面径は21.9cmはほぼ同大である。

妙見山古墳出土鏡(注3)は，内区主文を分ける乳の鈕寄りの松毬形が分離しないことは，花光寺山古墳および大塚古墳出土鏡と等しいが，双魚二対は非対照的な区画に位置することは，花光寺山古墳出土鏡に似て卯内尺出土鏡と異なる。面径は22.0cmあって，卯内尺鏡と同大ではある。花光寺山古墳出土鏡と同笵と考えられる。

摂津紫金山古墳出土鏡は花光寺鏡と同笵であって卯内尺鏡と異なる。

御旅山古墳出土鏡(注4)は，獣文帯に双魚二対あるが，非対照的な位置で，卯内尺出土鏡が対照的な位置であるのとは異なる。かつ一区の双魚の外側の魚形が小さい上，他の区の魚形は一つで双魚でないなど，施文の違いが目立つ。面径は21.8cmであり大差はない。

ところで，柏原市茶臼塚古墳出土鏡(注5)は，面径21.9cmあって，卯内尺出土鏡の22.0cmと大差はない。共に獣文帯と外縁との間の櫛歯文帯の中央に一条の細い仕切りの線条を加えること，および既述のようにこの櫛歯文帯と獣文帯との界線上で，獣文帯の乳文の中間に当る位置に小乳を加えることなど同工であることはくりかえすまでもない。かつ獣文帯のそれぞれの動物形像の細部も異なるところがない。内区主文では有節重弧文座鈕をとりまいて，神像と獣形を割りつける6ケの円座乳の鈕寄りには，いずれも松毬形が上向と左右斜上向との三つに分離した火焔形状になるに加え，三つ山型冠の神像の容貌をはじめ，他の二神像および左向の三獣形の形容の相似などから見て，茶臼塚古墳出土鏡と卯内尺出土鏡は同笵の確率の高いことをうかがわせる。

この卯内尺出土鏡は，仿製三角縁獣帯三神三獣鏡の多い中での小数群の一つである。同趣鏡が畿内と備前および筑前という広い地域に小数ながら分布し，かつその同笵と思考しうるものが畿内に存することとあわせ，他の三角縁獣帯三神三獣鏡との関係を考えることによって，本卯内尺出土鏡の性質をさらに深めうるであろうことに期待がもたれる。

注

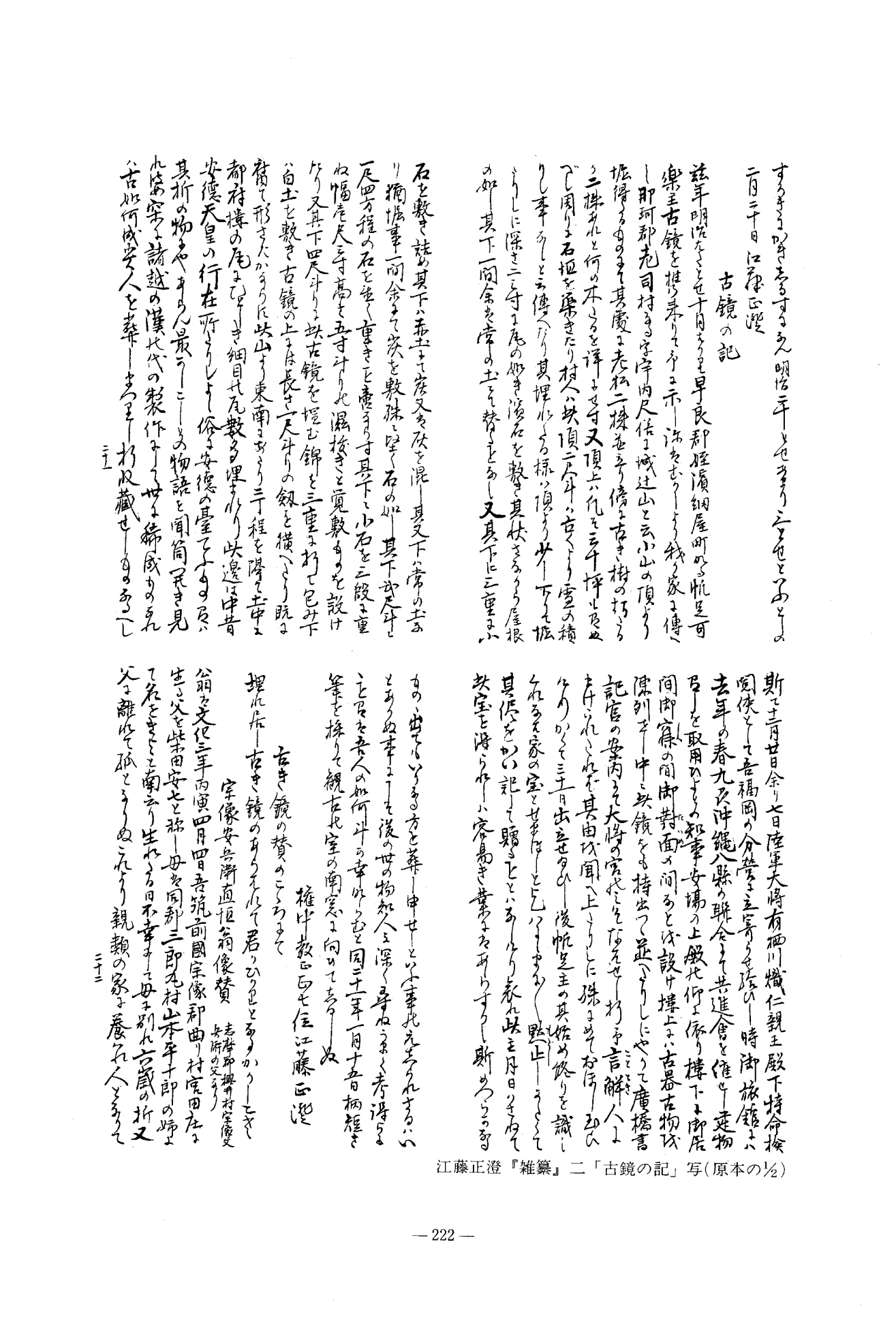
1　梅原末治「備前行幸村花光寺山古墳」　近畿地方古墳墓の調査二　日本古文化研究所報告第4　昭和12年3月

2　梅原末治　乙訓郡寺戸大塚古墳　山域における古式古墳の調査　京都府文化財調査報告第21冊　昭和30年3月

3　梅原末治　向日町妙見山古墳　山城における古式古墳の調査　同前

4　藤沢一夫，田代克巳ほか　南河内石川流域における古墳の調査　大阪府文化財調査報告第22輯　昭和45年3月

5　柏原市教育委員会歴史資料館　特別展　茶臼塚古墳出土品　昭和60年1月



江藤正澄『雑纂』二「古鏡の記」写（原本の½）

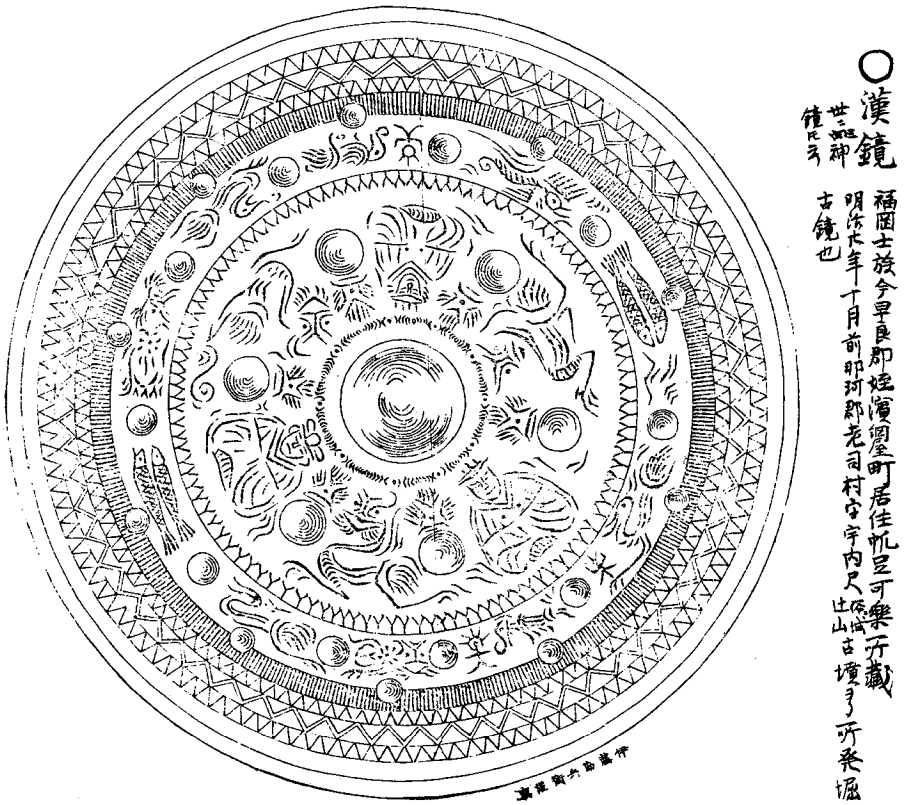


図145. 江藤正澄『福陵雑纂』三所収の三神三獣鏡

〈卯内尺古墳関連資料解説〉

老司古墳調査にさきだち，われわれには，一つの小さな期待があった。それは，旧秋月藩士江藤正澄の自筆本『福陵雑纂』三（九州大学図書館蔵）にみえる那珂郡老司村卯内尺で，明治20年10月に発掘した三角縁三神三獣鏡（図145）が，この古墳出土のものではないかということであった。また，たまたま所在不明のその鏡の写真が，第１次調査中に，東京国立博物館の三木文雄氏から，蒲郡市の荻昌弘氏所蔵品として届けられ，卯内尺の古墳の所在調査を依頼されることなどもあった。しかし，この鏡は，老司古墳の西北200ｍにある粘土槨をもつ円墳から発見されたものであるらしいことが，江藤正澄の『雑纂』二の「古鏡の記」と，現地の中村憲之助氏の証言によって明らかになった。この古墳は老司古墳の一世代前の同族のものとみて差支えなさそうであって老司古墳調査の副産物であるにとどまらず，倭人伝にいう奴国の地域における古墳時代の考察に有力な一資料を加えたといわねばならない。（森貞次郎）

図146. 卯内尺古墳出土と伝える銅鏡および銅鏃写真

鋤崎古墳石室天井部の復元

柳沢一男

ここに述べる鋤崎古墳は，いまのところ老司古墳とともに，日本列島最古期の横穴式石室と想定される資料の一つである。

鋤崎古墳は，1981年から83年にかけて福岡市教育委員会が発掘調査を行い，全長62mの前方後円墳と確認された。後円部から検出された横穴式石室は，玄室上部が崩壊していたが，特異な構造と形態が注目されている。その概要は，すでに福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集に報告した（『鋤崎古墳1981～1983年調査概報』1984，福岡市教育委員会）。

このたび、老司古墳第３号石室との比較資料として，崩落した天井部復元のお薦めがあったので，あらためて検討を行い，その結果を報告する。

石室の概要　石室は後円部中央に掘られた，一辺８m，深さ２mの二段墓壙内につくられ，前方部に向かって開口する。玄武岩の割石を小口積みして壁体を積み上げ，墓壙と壁体との間に割石，塊石と粘土を混合した厚い控え積みがある。石室プランは，長方形の玄室に狭小な羨道部を接続したもので，羨道の前面に前庭と竪坑状の墓道を設ける（図147）。石室規模は次ののとおり。

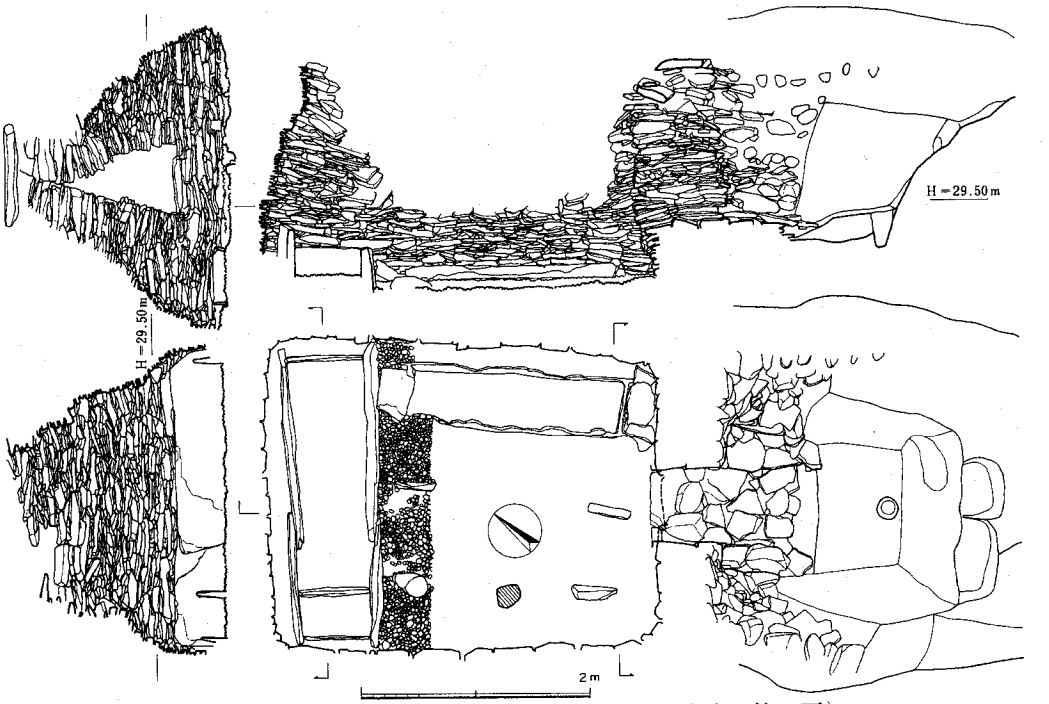


図147.　鋤崎古墳石室実測図　（羨道～墓道は築造時・第Ⅰ面）

石室全長	4.8m	石室長	4 m
玄室幅	2.5～2.7m	玄室長	3.3～3.4m
羨道幅	0.6m	羨道長	0.6m
玄室高	2.0～2.2m(推定)	羨道高	1.4m（石室構築時）

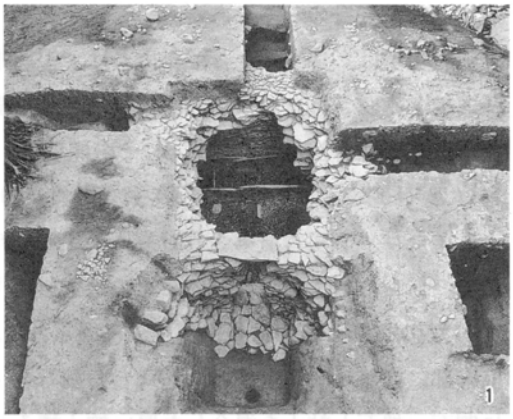
石室の崩壊部分は，玄室左右側壁上部の倒壊，それに伴う天井石の落下である。羨道は，両側壁上部が内側に倒れこんでいるが崩落をまぬがれている。

内側への持送りが強い玄室側壁は，左右とも中央部が大きく倒壊し，U字形に壁体が遺存するにすぎない。これにたいして，持送りが弱い前・奥壁は，完存に近い。

石室上を覆う天井石は，羨道上に横架した1石のみが原状を残すのみ。玄室上に架けられた天井石は，床面上に堆積した倒壊側壁上に落下していた。石材は3石，幅2m前後，長さ1.2m～2m，厚さ8～15cmほどの偏平に加工された玄武岩である。このほかに，天井石とみられるものがなく，この3石で構成されていたと考えてよいだろう。

落ちこんだ天井石を，奥壁側からA・B・Cとして落下状況をみると，中央のBが水平に落ち，羨道側から斜めに落ちこんだCがその上に重なる。Aは2つに折れ，奥壁に沿ってほぼ垂直に落ちこんでいる。この状況からうかがえることは，3石の天井石のうち，側壁中央部の倒壊に伴って，まずBが落ち，ひきずられるようにA・Cが落下したらしい。

天井構造の復元　発掘調査後，十分な検討を加えないまま，資料紹介の一部に，玄室の天井部は，3枚の板石を水平に横架した平天井構造と記した（「福岡市鋤崎古墳の横穴式石室」『考古学ジャーナル』238　1984年）ことがあったが，あらためて資料を突き合わせた結果，次の



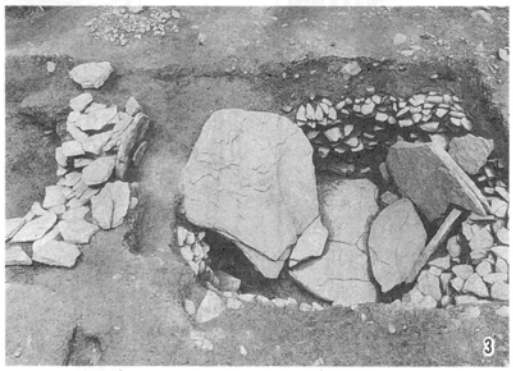


図148.　石室墓壙と天井石崩落状況
1.石室墓壙トレンチ（南東から）
2.天井石崩落状況（北東から）
3.　〃　（　〃　）

ように訂正したい。

結論からいうと，石室の天井部は，まず羨道上に１石（天井石Dとする）を横架したのち，奥壁側からＡ・Ｂ・Ｃの順で覆う。ただし，各石材の端は水平に合わせ目になるのではなく，Ａの上にＢの一部が，Ｂの上にＣの一部が重なる，いわば鎧重ね的な構成法である。Ｃの端部は，またいっぽうで羨道上の天井石にも重なるが，Ｄとのあいだに若干の空隙がある。

この復元案は，次の４つの事実から導かれたものである。

第１は，羨道入口の立石による閉鎖状況。天井石Ｃは羨道上天井石と重なることはあっても，その前面から突出することはない（図149の縦断面図参照）。

第２は，構築時の状態を留める，一部の石室控積み上端面のレヴェル。

第３は，玄室内に落下していた３石の最短辺を並べると，延長が4.8mとなり，玄室の天井空間長３mをはるかに上まわる事実(図149)。第１を前提にし，天井石を水平に横架した場合，天井石Ａは天井空間を覆うことなく，玄室内に落下する可能性がない。

第４は，天井石の下面（玄室内面）に認められる赤色顔料の塗布範囲。顔料は各石材の下面全体に及ばず，かつ石材ごとに塗布範囲と部位に違いがある（図150)。

以上の４点に整合し，具体的な構築法を想定したのが，さきの案である。すなわち，第１・２点は復元にあたっての前提だが，問題の第３点は，天井石の鎧重ね的な構成によって解決する。つぎに第４点の石材ごとの塗布範囲の違いは，この鎧重ね構成の天井石と，側壁上端部とのあいだに生じた空間への顔料塗布とみれば，理解できる。ところで，羨道上の天井石Ｄと，玄室先端部の天井石Ｃとのあいだに認められる空隙部は，天井石Ｄを覆っていた土層が柔らかな堆積土であった点と，天井石Ｃの下面に認められる顔料からすると，まぐさ的な空間部を構成していた可能性がつよい（図150)。

なお付言すれば，玄室天井部の幅は，天井石下面の顔料塗布範囲から1.0～1.2mと推定される。また，落下した天井石上に遺存した土層から，墳丘盛土の厚さは約25cmあまりと推測される。このような，玄室側壁の過度の持ち送りと，天井石上の盛土の僅少さ＝重力不足などが，玄室側壁上部の倒壊，天井石落下という崩壊現象を引き起こした要因といえるであろう。

最後に，この作業のお薦めと，実測図・写真からの復元作業を共同し，アドバイス頂いた小田富士雄氏にお礼申しあげたい。

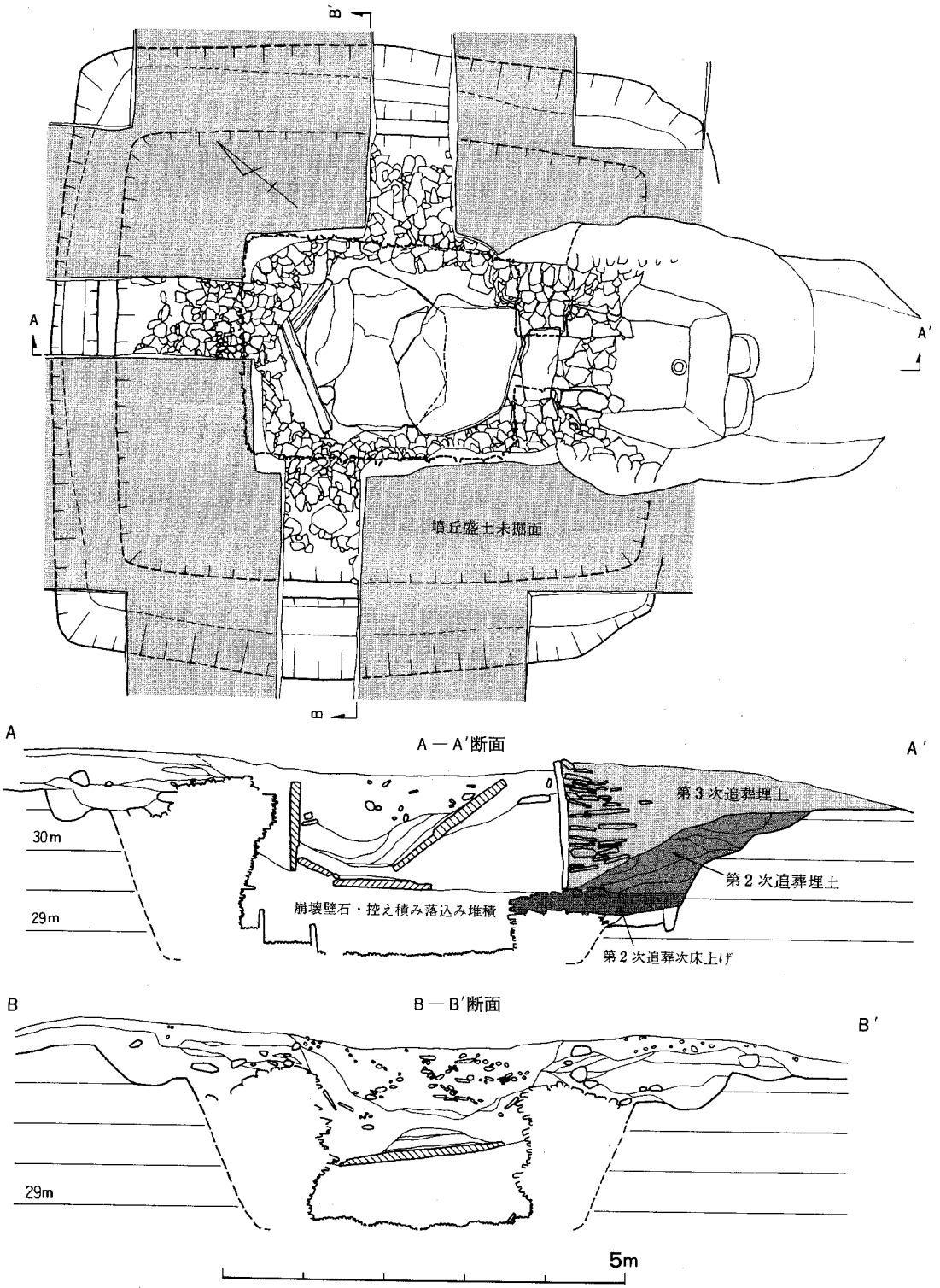


図149. 鋤崎古墳後円部横穴式石室崩壊状況実測図(縮尺1／80)

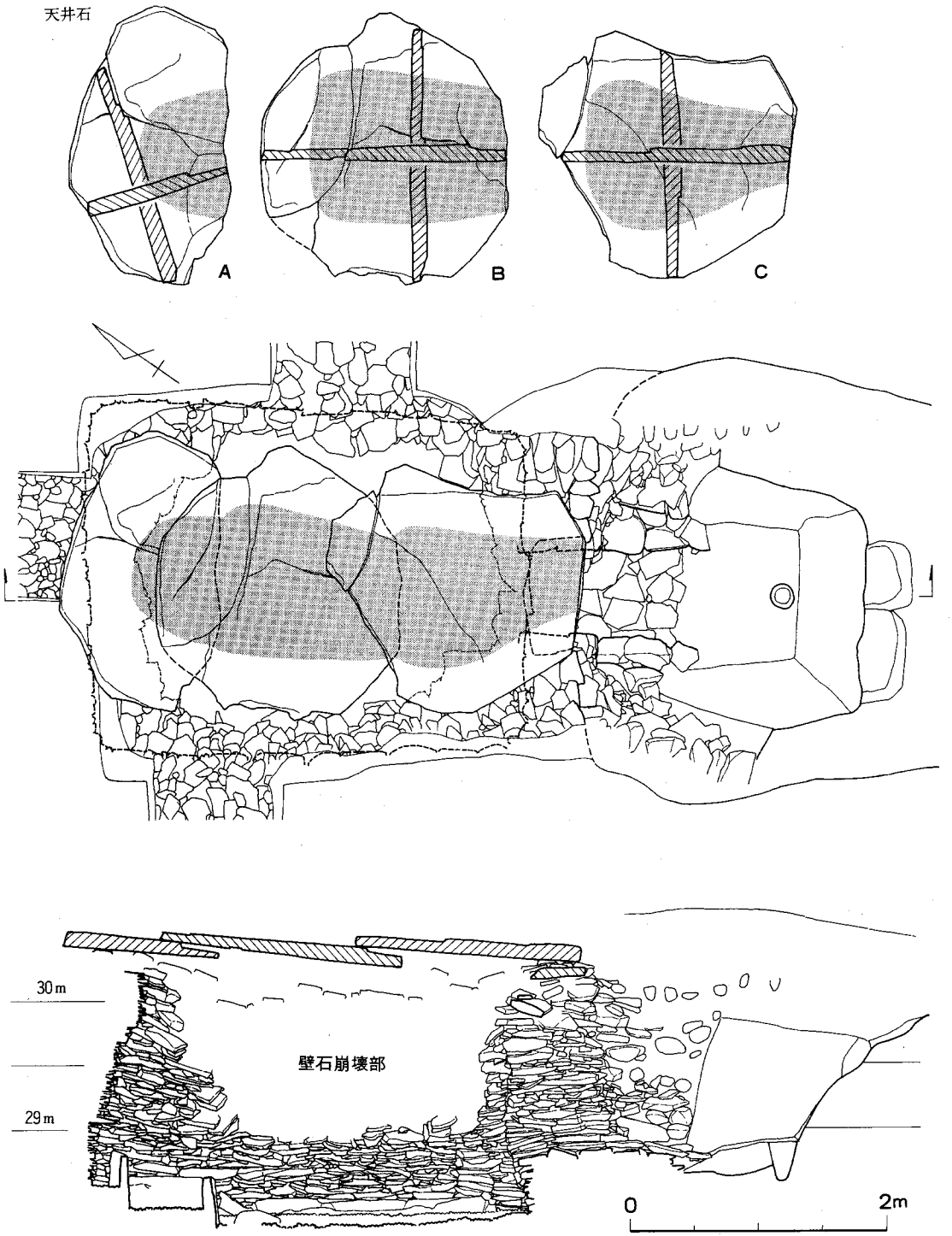


図150. 鋤崎古墳横穴式石室の天井石および石室縦断面方向復元図(縮尺1／50)

天井石のアミは下面に塗布された赤色顔料の範囲をあらわす。

天井石横断面は右が上面、左が下面(玄室側)を示す。

表14　老司古墳出土銅鏡一覧（単位cm，重さg）

石室	鏡　　式	種類	面　径	鈕　径	鈕　厚	内区無文部厚	文様部厚	縁部厚	厚　り	重　さ
1	方格規矩鏡	舶	11.39	2.12	0.81	0.16	0.20	0.33	0.3	(122)
2	変形文鏡	仿	約11.5							
3	三角縁神獣鏡片	舶	22.9			0.205		1.08		(387.5)
	蝙蝠座鈕内行花文鏡	舶	12.77	2.00	0.85	0.18	0.22	0.29	0.25	190
	方格規矩鏡	舶	12.95	2.05	1.31	0.25	0.25	0.40		(227)
	方格規矩四神鏡	舶	12.45	2.06	1.05	0.325	0.35	0.46	0.28	318
	捩文鏡	仿	7.87	1.46	0.62	0.2	0.32	0.30	0.15	73
	方格規矩鏡	仿	約 9.2							
	内行七花文鏡	仿	9.38	1.84	0.95	0.25	0.32	0.29	0.2	127.5
	内行五花文鏡	仿	約 9.2							

表15　老司古墳出土鉄製農工具計測表

1号石室

斧

	全　長	刃部幅	推定袋部径	重量(g)
102	9.3	6.5	1.7 ×2.95	290
103	10.15	6.5	2.3 ×3.2	320
104	9.45	6.0	1.83×2.87	230

鉈

	全長(現存長)	身幅(最大～最小)	身の太さ
105	(31.5)	1.0 ～1.0	0.35, 0.4
106	(24.6)	1.5 ～1.2	0.35, 0.3
107	(16.4)	1.4 ～1.1	0.4 , 0.3
108	(16.2)	1.3 ～1.15	0.5

鑿

	現　存　長	身　　幅
109	6.3	0.45
110	15.45	0.85～0.75
111	15.47	1.13～0.48

蕨手刀子

	全長（現存長）	身　幅	身部厚さ
112	(15.7)	1.2	1.1
113	12.1	1.2	0.8
114	13.4	1.23	0.32
115	14.0	1.0	0.55
116	(11.55)	0.95	0.7
117	12.52	1.1	0.33
118	(1.6)		0.9
119	(8.2)	1.15	1.5
120	(8.4)	1.15	1.2
121	10.48	1.1	1.28
122	(9.2)	1.7	1.5

武器に付着する蕨手刀子

	全長（現存長）	身　幅	身部厚さ
10	(11.95)		
10	(4.0)		

茎刀子

	全長（現存長）	刃関部幅	身部厚さ
123	11.62	2.03	0.5
124	14.82	2.0	0.4
125	10.5	1.9	0.51
126	(8.2)	1.4	0.4
127	(19.8)	2.35	0.6
128	(20.5)	2.25	0.4
129	(8.35)	1.4	0.5
130	8.8	1.3	0.3
131	(8.85)	1.25	0.3
132	(9.02)	1.8	0.35
133	9.1	1.7	0.32
134	(7.55)	2.07	0.4
135	(12.4)	1.25	0.4
136	13.4	1.75	0.5
137	11.35	1.87	0.42
138	(6.75)	1.25	0.37
139	(7.2)	1.5	0.3
140	(5.12)		
141	(4.15)	0.81	0.33
142	(4.6)		0.32
143	(5.43)		0.35

クワ・スキ先

	刃　幅	長　さ	厚　さ
144	12.5	6.95	0.42

手　鎌

	刃　幅	長　さ	厚　さ
145	9.8	2.0	0.35

曲刃鎌

	全　　長	柄着装部幅
146	15.35	3.4

不明鉄器

	現　存　長	身最大幅
147	17.92	3.15

2号石室

鉄状鉄器

	全　　長
75	2.4
76	2.07

3号石室

斧

	全　長	刃部幅	推定袋部径	重量(g)
158	14.9	4.9	5.9×3.9	660
159	13.15	4.1（推定）	4.3×3.55	405
160	15.45	4.35(〃)	4.9×3.6	505
161	11.4	6.35(〃)	3.7×3.0	285
162	10.3（推定）	10.3	5.7×2.3	510
163	13.85(推定)	9.35(推定)	5.7×2.6	790
164	15.8	4.5	4.6×3.7	525
165	15.8	4.2（推定）	4.6×4.0	470
166	9.15	2.9 (〃)		
167	18.3	7.5 (〃)	5.3×4.2	1065
168	13.8	5.4	4.9×4.1	505

鉈

	全長（現存長）	身幅(最大～最小)	身の太さ
170	(42.85)	1.5 ～0.9	0.4, 0.5
171	(36.65)	1.5 ～1.0	0.4, 0.35
172	(33.9)	1.3 ～1.1	0.3, 0.25
173	(37.75)	1.55～1.1	0.6, 0.55, 0.5
174	(11.3)	1.2 ～1,05	0.4

	全長（現存長）	身幅(最大～最小)	身の太さ
175	(3.4)	1.15	
176	(2.05)	1.0	
177	12.1	0.9 ～0.6	0.4, 0.35
178	(5.6)	1.05～1.0	0.4
179	(8.7)	1.15～0.95	0.2
180	(6.8)	1.3 ～0.95	0.4, 0.35

茎鏃

	現　存　長	身　　幅
181	12.38	2.2, 1.9
182	11.41	2.2, 1.55
183	22.42	1.1, 0.75

袋鏃

	全　長	刃先幅	袋部径
184	20.85	2.55	2.95×2.8
185	17.33	2.25	3.1 ×2.4
186	19.5	1.3(推定)	2.9 ×2.3

蕨手刀子

	全長（現存長）	身　幅	身部厚さ
187	(9.71)	1.57	0.45
188	12.25	1.43	0.4
189	(10.6)	1.5	0.4
190	10.9	0.9 , 0.7	0.3
191	11.0	0.8 , 0.65	0.25
192	(5.52)	1.6, 1.4	0.35
193	(5.2)	1.05, 0.9	0.3
194	(10.63)	1.4 , 1.7	1.4

茎刀子

	全長（現存長）	刃関部幅	身部厚さ
195	(8.7)	1.5	0.3
196	9.2	1.4	0.3
197	(8.4)	1.8	0.4
198	22.4	2.35	0.48
199	9.6	1.5	0.4
200	10.4	1.83	0.47
201	9.2	1.6	0.42
202	9.15	1.57	0.53
203	(8.0)	1.7	0.38
204	(7.28)	1.3(推定)	0.4
205	(7.1)		
206	(7.4)		
207	(7.4)	1.8	0.48
208	(6.04)	2.05	
209	(3.7)		
210	(4.82)		
211	(4.63)		
212	(2.64)		0.4
213	(3.7)		

鋸

	現　存　長	身　幅
214	15.5	3.27
215	6.75	3.3

クワ・スキ先

	刃 先 幅	長　さ	耳部径（推定）
216	9.5(推定)	8.5	8.5×1.1
217	9.2(推定)	8.25	8.6×1.2
218	8.8	8.4	7.9×1.0
219	9.4	8.05	9.3×1.3

U字形スキ・クワ先

	刃　幅	長　さ
221	16.05	13.62

鎌

	全　長	基部幅
222	11.53	2.8
223	12.6	3.35
224	12.2	3.3

針形鉄器

	現 存 長
225	6.65
226	6.6

不明鉄器

	現 存 長	鉄身の断面厚さ
169	4.35	0.4
220	6.45	0.5
227	8.85	0.57
228	6.5	0.5
229	10.42	0.45
230	7.07	0.45
231	8.3	0.4
232	8.52	0.3
233	5.65	0.5
234	3.35	0.4
235	2.6	0.4
236	3.32	0.3
237	4.1	0.5
238	4.0	0.2
239	3.7	0.25
240	3.63	0.3
241	3.1	0.23
242	4.25	
243	2.85	
244	4.7	
245	4.4	0.3
246	3.3	0.45
247	2.55	0.4
248	2.82	0.6
249	3.8	0.4

4号石室

斧

	全　長	刃部幅	推定袋部径	重量(g)
12	8.25	5.5	1.5×2.75	225

鉇

	全長（現存長）	身幅(最大～最小)	身の太さ
14	(23.65)	1.3～1.1	0.5

茎刀子

	現 存 長	刃関部幅	身部厚さ
15	12.65	1.68	0.38
16	10.7	1.35	0.35

手鎌

	横　幅	縦　幅
17	10.44	2.05

直刃鎌

	現 存 長	基 部 幅
18	15.4	3.25

不明鉄器

	現 存 長	身　幅	断面厚さ
13	17.7	1.3, 1.1	0.5, 0.42

石室不明

鉇

	全長（現存長）	身幅(最大～最小)	身の太さ
23	(36.75)	1.3 ～1.05	0.4, 0.5, 0.45
24	(31.3)	1.3～1.1	0.55, 0.45, 0.4
25	(27.85)	1.35～1.0	0.4, 0.35

茎刀子

	現 存 長	刃関部幅	身部厚さ
26	8.6	1.5	0.45
27	5.85	1.55	0.3
28	5.55		

表16 老司古墳１号石室出土勾玉観察表(単位：cm, g)

遺物No.	玉群No.	長さ	最大幅	最大厚	穿孔径	重量	色調
001	A 1	1.06	0.56	0.22	0.12	0.15	半透明濃緑色
002	2	0.97	0.56	0.22	0.12	0.12	淡緑色
003	3	1.02	0.55	0.21	0.10	0.10	淡緑灰色

表17 老司古墳３号石室出土勾玉観察表(単位:cm, g)

遺物No.	玉群No.	長さ	最大幅	最大厚	穿孔径			重量	色調
					入口		中心		
001	A 1	4.90	2.90	1.85	0.65	0.60	0.20	36.40	半透明濃緑色
002	2	5.24	3.22	1.95	0.55	0.50	0.25	41.65	半透明濃緑色
034	B 1	3.83	2.35	1.30	0.60	0.50	0.25	16.65	深緑色
048	C 1	4.70	2.80	1.55	0.60	0.45	0.25	26.95	深緑色
061	D 1	3.89	2.45	1.58	0.30	0.30	0.20	13.60	黒緑色

表18 老司古墳３号石室出土管玉観察表(単位:cm, g)

遺物No.	玉群No.	長さ	径	穿孔径			重量	穿孔	色調
				入口		中心			
004	A 4	1.21	0.69	0.30	0.25	0.25	0.60	イ	II a
005	5	1.30	0.62	0.35	0.25	0.25	0.70	ウ	II a
006	6	1.31	0.52	0.25	0.25	0.20	0.65	イ	II a
007	7	1.32	0.65	0.30	0.25	0.20	0.85	イ	II a
008	8	1.32	0.61	0.25	0.25	0.20	0.80	イ	II a
009	9	1.39	0.62	0.35	0.30	0.30	0.75	ウ	II a
010	10	1.40	0.67	0.30	0.25	0.20	0.90	イ	II a
011	11	1.40	0.68	0.35	0.30	0.25	1.10	イ	II a
012	12	1.42	0.65	0.30	0.30	0.20	0.95	イ	II a
013	13	1.47	0.64	0.40	0.30	0.30	0.80	ウ	II a
014	14	1.49	0.61	0.25	0.25	0.20	0.85	イ	II a
015	15	1.50	0.61	0.30	0.30	0.20	0.85	イ	II a
016	16	1.51	0.62	0.25	0.20	0.20	1.05	イ	II a
017	17	1.52	0.60	0.35	0.35	0.30	0.70	イ	II a
018	18	1.54	0.59	0.25	0.20	0.15	0.90	イ	II a
019	19	1.54	0.63	0.45	0.40	0.40	0.75	イ	II a
020	20	1.56	0.58	0.25	0.25	0.20	0.90	イ	II a
021	21	1.57	0.55	0.25	0.25	0.20	0.75	イ	II a
022	22	1.57	0.69	0.40	0.30	0.25	1.10	イ	II a
023	23	1.58	0.58	0.30	0.25	0.20	0.80	イ	II a
024	24	1.60	0.59	0.30	0.30	0.25	0.85	イ	II a
025	25	1.61	0.62	0.35	0.25	0.25	1.00	ア？	II a
026	26	1.61	0.68	0.30	0.20	0.20	1.15	イ	II a
027	27	1.62	0.58	0.30	0.30	0.25	0.80	イ	II a
028	28	1.63	0.60	0.30	0.20	0.15	1.05	イ	II a
029	29	1.65	0.60	0.30	0.30	0.25	0.90	イ	II a
030	30	1.70	0.63	0.35	0.25	0.25	1.05	ウ	II a
031	31	1.82	0.69	0.30	0.25	0.25	1.45	イ	II a
032	32	2.11	0.65	0.25	0.25	0.20	1.30	イ	IV
033	33	2.60	0.64	0.30	0.25	0.20	1.60	イ	IV
035	B 2	1.37	0.55	0.25	0.20	0.15	0.65	イ	II b
036	3	1.55	0.65	0.35	0.25	0.25	1.05	ア？	II b
037	4	1.59	0.65	0.35	0.30	0.30	1.10	イ	II a
038	5	1.59	0.66	0.35	0.35	0.30	1.05	イ	II a
039	6	1.61	0.61	0.35	0.30	0.25	0.98	イ	II b
040	7	1.66	0.66	0.35	0.35	0.30	1.00	イ	II b
041	8	1.66	0.67	0.35	0.25	0.25	1.10	ア？	II b
042	9	1.66	0.67	0.40	0.30	0.30	0.90	ア？	II b
043	10	1.69	0.62	0.30	0.30	0.20	1.10	イ	II a
044	11	1.69	0.68	0.35	0.30	0.25	1.25	イ	II a
045	12	1.70	0.60	0.30	0.25	0.25	0.90	イ	II b
046	13	2.81	0.70	0.50	0.50	0.40	1.90	イ	II b
047	14	3.17	0.62	0.40	0.35	0.30	1.90	イ	II b
049	C 2	1.21	0.59	0.30	0.20	0.20	0.65	ア	III a
050	3	1.42	0.66	0.35	0.30	0.25	0.95	イ	II a
051	4	1.55	0.61	0.30	0.30	0.20	1.00	イ	II a
052	5	1.58	0.63	0.25	0.25	0.20	1.10	イ	II a
053	6	1.62	0.60	0.25	0.20	0.15	1.00	イ	III a
054	7	1.65	0.60	0.40	0.35	0.30	0.80	イ	II a
055	8	1.69	0.61	0.40	0.35	0.30	0.90	ウ	II a
056	9	1.81	0.77	0.40	0.40	0.35	1.55	イ	II a
057	10	1.82	0.66	0.35	0.35	0.20	1.25	イ	II a
058	11	2.21	0.61	0.30	0.30	0.25	1.35	イ	II a
059	12	2.21	0.69	0.35	0.30	0.25	1.65	イ	II a
060	13	2.30	0.59	0.30	0.30	0.25	1.20	イ	II a
063	D 3	1.53	0.56	0.25	0.20	0.20	0.80	イ	III b
064	4	1.71	0.65	0.25	0.20	0.15	1.30	イ	III a
065	5	1.79	0.55	0.25	0.20	0.15	0.95	イ	III b
066	6	1.80	0.72	0.35	0.35	0.20	1.60	イ	I b
067	7	1.85	0.52	0.25	0.25	0.25	0.81	イ	III a
068	8	1.93	0.56	0.20	0.15	0.15	1.05	イ	III b
069	9	2.22	0.56	0.25	0.20	0.15	1.15	イ	III b
070	10	2.25	0.80	0.40	0.40	0.30	2.30	イ	III a
071	11	2.26	0.71	0.30	0.30	0.15	2.00	イ	III b
072	12	2.27	1.11	0.20	0.20	0.10	5.20	イ	III b
073	13	2.28	0.82	0.20	0.20	0.15	2.80	イ	III b
074	14	2.36	0.71	0.25	0.20	0.15	2.15	イ	III b
075	15	2.37	0.52	0.20	0.15	0.15	1.10	イ	III b
076	16	2.42	0.55	0.25	0.20	0.15	1.35	イ	III b
077	17	2.42	0.81	0.30	0.25	0.25	2.75	イ	III a
078	18	2.42	0.64	0.30	0.30	0.20	1.60	イ	III b
079	19	2.46	0.85	0.40	0.40	0.30	2.90	イ	III a
080	20	2.49	0.66	0.20	0.20	0.20	2.00	イ	III a
081	21	2.55	0.92	0.20	0.20	0.20	4.10	イ	III a
082	22	2.56	0.70	0.25	0.15	0.15	2.15	イ	III b
083	23	2.61	0.68	0.25	0.20	0.15	2.05	イ	III b
084	24	2.73	0.85	0.30	0.30	0.15	3.50	イ	I a
085	25	2.76	0.58	0.25	0.20	0.20	1.45	イ	III b
086	26	2.78	0.50	0.20	0.20	0.15	1.10	イ	III b
087	27	2.79	0.90	0.25	0.25	0.20	4.30	イ	III b
088	28	2.89	0.69	0.20	0.15	0.15	2.50	イ	III b
089	29	2.89	0.81	0.30	0.25	0.15	3.30	イ	III b
090	30	2.92	0.72	0.30	0.30	0.20	2.70	イ	III b
091	31	2.94	0.75	0.40	0.35	0.15	0.80	イ	I a
092	32	2.99	0.77	0.25	0.20	0.10	2.70	イ	III b
094	34	3.07	0.85	0.20	0.20	0.20	0.41	イ	III b
095	35	3.10	0.72	0.25	0.25	0.20	2.80	イ	III b
096	36	3.18	1.10	0.20	0.20	0.20	7.00	イ	III b
097	37	3.21	1.81	0.25	0.20	0.15	3.95	イ	III b
098	38	3.21	0.62	0.20	0.15	0.15	2.20	イ	III b
099	39	3.24	0.96	0.20	0.20	0.15	5.25	イ	III b
100	40	3.29	0.91	0.30	0.30	0.20	4.90	イ	III a
101	41	3.31	0.88	0.30	0.25	0.20	4.70	イ	III b
102	42	3.31	1.10	0.30	0.25	0.20	7.65	イ	I a
103	43	3.35	0.89	0.30	0.30	0.20	4.80	イ	III a
104	44	3.38	1.15	0.25	0.25	0.15	8.35	イ	III b
105	45	3.59	0.89	0.30	0.25	0.15	5.15	イ	III b
106	46	3.68	1.22	0.35	0.25	0.15	10.40	イ	III b
108	E 1	1.20	0.33	0.15	0.15	0.10	0.15	イ	III b
109	2	2.54	0.71	0.30	0.25	0.15	2.30	イ	III b

※穿孔ーア：片側，イ：面側；ウ：迎え孔
色調ーI：濃緑色，II：青緑色，III：淡黄緑色，IV：淡白緑色
a・bは各々の濃淡を示す。

表19　老司古墳出土埴輪観察表

No.	器種	残存率	出土地点	法量 口径	法量 頸部径	法量 胴部径	法量 底部径	法量 器高	焼成	赤色顔料	調整・備考
1	単口縁形	口縁部⅔、胴部½残存	前方部 石蓋土壙墓	26.8	11.5	21.7	——	——	良	頸部から胴部にかけて、わずかに付着	外面は口縁部から頸部にかけてと底部が風化のため調整不明。胴部は斜メハケと縦ハケが施してある。内面は、口縁部が横ハケ、頸部、肩部にかけて指オサエ、ナデ。胴部は、ヘラ削り斜メカキ上げが施してある。
2	単口縁形	口縁部⅙残存	前方部 石蓋土壙墓	24.2	——	——	——	——	良好	口縁部付近にわずかに塗付	外面は縦ハケ後、強い横ナデがみられる。内面は、風化のため調整不明であるが斜メハケと思われる痕跡がある。
3	単口縁形	全体の⅓程度残存	第4石室周辺	26.6	12.2	(22.3)	7.2	(35.0)	良好	口縁部から胴部にかけて塗布	外面は頸部から胴部にかけて縦ハケ、底部は指オサエとナデが施されている。内面は口縁部にナデ、頸部に指オサエ、胴部に横ヘラ削りが施されている。
4	(単口縁形)	口縁部¼～⅙程度残存	第4石室周辺	25.0	(11.5)	——	——	——	良好	口縁部から頸部にかけて塗付	外面は縦ハケに一部斜ハケが混り、その後、横ナデで仕上げている。内面は斜メハケと横ハケの後にナデで仕上げている。
5	(単口縁形)	頸部¼残存	第4石室周辺	——	11.8	——	——	——	良好	口縁部から肩部上にかけて塗布	外面は縦ハケが施してあり、内面は頸部上部が指オサエ後横ハケ、頸部下部は指オサエが施されている。
6	(二重口縁形)	口縁部½残存	第4石室周辺	18.8	——	——	——	——	良好	口縁部から頸部にかけて塗布	外面は口縁部上部が縦ハケ後横ナデ、口縁部下部は横ハケ後ナデを施しており、内面は横ナデで仕上げている。
7	(二重口縁形)	口縁部から頸部½残存	第4石室周辺	——	(9.7～)	——	——	——	良好	——	外面は口縁部が横ナデ、頸部は縦ハケが施されている。内面は口縁部が斜メハケ後に横ナデ、頸部は横ハケが施されている。
8	単口縁形	口縁部から胴部⅔残存	前方部 東側斜面	30.2	14.1	27.2	11.5	45.7	良好	口縁部から胴部にかけて塗布	外面は口縁部から頸部は縦ハケ、上部は横ハケ、下部は横位ヘラミガキが施されている。胴部は斜メ、縦ハケ後にナデで仕上げている。底部は指オサエ後ナデ。内面は口縁部が斜メハケ後強い横ナデ、胴部上部は斜メヘラ削り後横ハケ、下部は横ヘラ削りが施されている。黒斑あり。
9	単口縁形	口縁部⅓残存	前方部 東側斜面	24.4	——	——	——	——	やや良	——	外面は横ナデ、内面は横ハケ後ナデで仕上げている。No.3と同一個体の可能性あり。
10	単口縁形	全体の⅓程度残存	前方部 東側斜面	27.8	(13.0)	——	——	——	やや不良	風化強いため顔料等は観察できず	外面は口縁部が風化強く調整不明、胴部は縦ハケ後ナデ、内面は口縁部がナデ、頸部が指オサエ、調整後ナデ。胴部は横方のヘラ削りと思われる。
11	単口縁形	口縁部⅓、肩部⅓残存	前方部 東側斜面	——	(13.2)	——	——	——	良好	風化強いため顔料等は観察できず	外面は全体的に縦ハケが施されており、口縁部では縦ハケ後横ナデで仕上げられている。内面は口縁部が横ナデ、頸部が指オサエ後ナデが施されている。胴部は横ヘラ削りである。全体的に風化強い。
12	(単口縁形)	口縁部½～⅙残存	前方部 東側斜面	35.0	——	——	——	——	やや良	口縁部付近に塗布	外面は口縁部に縦ハケ後横ナデが施されている。内面は風化のため調整不明。
13	——	肩部⅓～⅙残存	前方部 東側斜面	——	(12.0～)	(22.0)	——	——	やや良	肩部付近にわずかに付着	外面は風化のため調整不明。内面は頸部が指オサエ・ナデ、肩部に横ヘラ削りが施されている。
14	——	底部のみ½残存	前方部東側斜面	——	——	——	10.5	——	やや良	風化強いため顔料等は観察できず	外面は胴部が縦ハケ、底部に指オサエ・ナデが施されており、内面は胴部が斜位ヘラ削り、底部に指オサエが施されている。
15	(二重口縁形)	ほぼ完形	後円部東側	27.2	12.3～12.7	22.4	10.1	(39.0)	やや不良	風化強いため顔料等は観察できず	口縁部風化のため不明。外頸部横ナデ。胴部上縦ハケで一部斜メハケ胴部下の外面は指オサエ後ナデ。底部は不明。口縁部内面は横ハケ後ナデ。頸部上部の内面は指オサエ後ナデ。頸部下部は横ハケ。胴部上部の内面は指オサエとナデ。胴部中部の内面は横位のヘラ削り、胴下部は指オサエ後ナデ。 縁部に黒斑あり。
16	二重口縁形	ほぼ完形	後円部東側	25.6	(10.2)～13.2	21.7	7.8	(40.0)	やや良	肩部付近にわずかに付着	外面は口縁部から胴部まで縦ハケ、底部には指オサエ・ナデが施されている。内面は口縁部に横ハケ、肩部に指オサエ・ナデ、胴部には横ヘラ削り、底部には指オサエ・ナデが施されている。
17	二重口縁形	口縁部⅓、頸部¼、肩部½胴部から下ほとんど残存	後円部東側（10号）	28.7	11.5～14.7	24.3	9.7	38.2	良好	上半部約⅔、所々に付着	概報3ページ右側の実測図と同一個体である。二重口縁で、頸部形態はa類、胴部は卵形である。底部形態は2類で、底部付近は貼り付けられている。外面は口縁部では斜メハケが施されるが、他は縦方向のハケが施され、胴部上方にはその後、斜め方向のハケが施される。さらにナデによりハケが消えている部分もある。貼り付け部は指オサエ・ナデで仕上げている。胴部の内面はケズリで、比較的丁寧に施されているために、ケズリの先後関係は判然としない。下半部約½には一部に黒斑が見られる。
18	(二重口縁形)	肩部⅔、胴部下部から底部ほとんど残存	後円部東側（9号）	——	(12.6～)	25.5	8.5～10.0	——	良好	胴部最大径付近にわずかに付着	頸部の立ち上がりがおそらく二重口縁と考えられる。胴部は卵形である。底部形態は2類であり、底径は8.5～10.0cmの不整円形を呈する。底部付近は貼り付けられており、貼り付けられた粘土の粘土ヒには、上部の粘土との相違が見られる。つまり上部に比べて砂粒が多量に含まれ、雲母粒が多い。外面は縦方向のハケ後上半部には斜め方向のハケが施される。底部付近は貼り付け後ナデられており、最下部は指オサエが強く施されている。内面はヘラケズリが多く見られる。とくに底部貼り付け部上方では、ケズリ痕が凹面を呈するような斜め方向のケズリが観察できる。また肩部には部分的に黒斑がある。
19	(二重口縁形)	肩部⅓、胴部下部から下ほとんど残存	後円部東側（8号）	——	(13.2～)	25.0	11.0	——	良好	胴部最大径付近に少量付着	概報3ページ左側の実測図と同一個体である。頸部の立ち上がりから、二重口縁形であると思われる。胴部は卵形である。底部形態は4類で、底部に貼り付けが行われていた可能性がある。底部は直径約11cmの円形を呈する。外面では、胴部下部のハケが、ナデの後に施されているのが特徴である。部位は特定できないが、円形文の見られる破片がある。胴部内面にはヘラケズリが施されるが、丁寧に施されているために、ケズリの先後関係は判然としない。また内面の底部付近には、斜め方向のハケメが観察できる。
20	(二重口縁形)	頸部⅓、肩部⅓、胴部下部⅓、底部残存	後円部東側（7号ラ1）	——	(12.5～)	——	11.2	——	良好	肩部から頸部にかけて、わずかに付着	胴部下部と底部を除き接合はできない。しかし同一個体の可能性も否定できないため、試みに図上復元を行ったものである。頸部の立ち上がりから、二重口縁形であると推定される。頸部形態はa類、胴部は楕円形である。底部形態は3類で、底部付近の内外面に接合痕が見えることから、底部に貼り付けが行われたことがわかる。胴部下半部下方の内面には、幅3cmほどの粘土帯が貼り付けられている。底部付近の内外面には黒斑があり、外面上下幅約2cm、¼周、内面上下幅約5cm、½周の範囲に見られる。肩部内面にも接合痕が残っている。
21	——	肩部⅓、胴部下部から底部。ほとんど残存	後円部東側（1号）	——	(15.0～)	23.2	8.9	——	良好	肩部にわずかに付着	胴部は卵形であるが、胴部最大径部が他のものに比べ、やや下方に位置する。底部形態は2類であり、底部に貼り付けが行われたかどうか不明である。肩部外面上方に多方向のハケが施されることと、底部内面にハケが施されていることが特徴である。
22	——	底部½残存	後円部東側	——	——	——	——	——	良好	胴部下半から底部にかけてわずかに残存	外面は縦ハケ。内面は胴部に横ハケ、底部は指オサエ・ナデが施されている。
23	二重口縁形	二重口縁部⅙残存	後円部東側（7号－2）	24.4	——	——	——	——	良好	口縁部にわずかに残存	口縁端が折り曲げられ、下にさがっている。外面は、斜メハケ後横ナデ内面は、横ハケ後横ナデで両面ともハケメがわずかに残っている。胎土・調整は8号埴輪のそれに類似している。
24	二重口縁形	二重口縁部⅙残存	後円部東側（1号－2）	22.4	——	——	——	——	良好	口縁部にわずかに残存	口縁は屈曲部で接合されており、受け部の上面には、接合を補強するために放射状の沈線が入れられている。立ち上がり部の下面には、それがスタンプとして残っている。外面は、斜メハケ後横ナデ。内面は、横ナデが施されている。

No.	器種	残存率	出土地点	法量					焼成	赤色顔料	調整・備考
				口径	頸部径	胴部径	底部径	器高			
25	(二重口縁形)	口縁部小破片	後円部東側 (1号－3)	—	—	—	—	—	良好	—	内外面とも、ハケ後ナデが施されている。
26	(二重口縁形)	口縁端部小破片	後円部東側 (7号－3)	—	—	—	—	—	—	—	外面は縦ハケ後ナデで、残ったハケメを観察できる。内面調整は横ナデである
27	単口縁形	単口縁部1/6、肩部1/6以下、胴部1/6、底部1/6残存	後円部東側 (2号)	30.8	(15.5)	(25.0)	9.7	(40.0)	良好	口縁部から肩部にかけて塗布	同一個体の可能性も否定できないため、試みに図上復元したものである。胴部は卵形である。底部形態は3類で、底部付近の貼り付けの有無は判然としない。外面は胴部下部に縦ハケ後斜メハケが施されるのが特徴的である。胴部内面は、ヘラケズリが強く施され、薄いところで器壁の厚さ4mmぐらいになっている。しかし口縁部には多くの個体と同様に、ヘラケズリは施されておらず器壁の厚さも平均0.9～1.0cmを測る。また胴部下半部に黒斑の見られる破片もある。
28	二重口縁形	口縁部1/2、肩部1/6、胴部1/6、底部1/6残存	後円部東側 (4号、4or5or 9号)	28.8	13.4～(15.0)	(24.0)	9.8	(38.0)	良好	口縁部から肩部にかけて部分的に付着	同一個体の可能性も否定できないため、試みに図上復元したものである。二重口縁形で、口縁立ち上がり部の内面上部は横ナデによりやや窪むところがある。底部形態は3類で、底部に貼り付けが行われたかどうかは不明である。口縁部外面と内面は、ハケ後横ナデが施され、残ったハケメを観察できる。肩部外面には、3条のヘラ描き沈線が見られる。肩部内面にはヘラケズリはみられず、輪積みによる接合痕が残っている。
29	—	口縁小破片	後円部東側 (3号)	25.6	—	—	—	—	—	—	同一個体の可能性も否定できないため、試みに図上復元したものである。現状では二重口縁形なのか単口縁形なのかは判別できない。 胴部は楕円形に近い卵形である。肩部から頸部にかけて内面の一部に、横(斜メ)ヘケが見られる(調整順序は、ハケ後指オサエ・ナデ)。
30	—	肩部から胴部1/3残存	後円部東側 (3号)	—	—	21.8	—	—	良好	肩部に塗布	外面は肩部に斜メハケ、胴部に縦ハケが施されている。内面は胴部に斜メヘラ削り、底部には指オサエ・ナデが施されている。
31	(単口縁形)	口縁部1/6残存	後円部東側 (5号－1)	33.5	—	—	—	—	—	部分的に塗布	外面は縦ハケ後ナデ。内面は横ハケ後ナデが施されている。
32	—	胴部下半部1/3、底部残存	後円部東側 (5号－2)	—	—	—	10.0	—	良好	—	底部形態は2類である。底部付近の内外面に接合痕が見られることから、底部に貼り付けが行われていたと思われる。貼り付けられた底部の外面には、ヘラ削り、ナデが施されている。
33	—	底部1/3残存	後円部東側 (5号－3)	—	—	—	9.9	—	良好	—	底部形態は3類で、貼り付けが行われたかどうかは不明である。器壁は非常に薄く、最も薄いところでは約3mmを測る。底部最下部付近の内面には、凹線状の窪みが観察される。
34	二重口縁形	口縁部、頸部肩部1/3～1/4残存	後円部南～西側 (6号)	24.6	10.7～10.1	—	—	—	良好	頸部から肩部にかけてわずかに付着	同一個体の可能性も否定できないため、試みに図上復元したものである。二重口縁形で頸部形態はb類である。口縁部の残存部の下端(立ち上がり部下端)は接合部であり、放射状に隆起が見られる。これは、その下に接合していた受け部の上面に刻まれていた沈線のスタンプであると考えられる。
35	—	胴部下半1/2残存、底部完周	後円部南～西側	—	—	43.1	10.6	—	やや良	全体的に風化強く顔料等は観察できず	外面は胴部に縦ハケ、底部に指オサエ・ナデが施されている。内面は胴部に横ヘラ削り、下部に指オサエ・ナデが施されている。黒斑あり。
36	(単口縁形)	口縁部1/3残存	後円部南～西側	—	—	—	—	—	やや良	口縁部下半にわずかに付着	内面は風化のため調整不明。外面も風化で判別しにくいものの、横ナデと思われる。
37	—	底部1/6残存	後円部南～西側	—	—	—	3.2	—	良好	—	外面は指オサエ後ナデ、内面は底部上部が横位のヘラ削り、下部が指オサエナデである。
38	—	口縁部1/4残存	後円部南～西側 (A－3号)	30.0	—	—	—	—	良好	—	外面は縦ハケ後ナデを施し、残ったハケメが観察できる。
39	二重口縁形	二重口縁部1/8残存	後円部南～西側 (A－2号－1)	32.6	—	—	—	—	良好	—	外面上方に斜めハケが施されているが、その後軽くナデられているだけなので、ハケメがよく観察できる。内面は斜メ・横ハケ後ナデられているが、残ったハケメを観察できる。
40	二重口縁形	口縁部1/2、頸部1/3、肩部1/4底部3/4残存	後円部南～西側 (A－2号－2)	31.6	11.7～13.6	(43.4)	9.8	(40.0)	良好	口縁部から肩部にかけてわずかに付着	同一個体の可能性も否定できないため、試みに図上復元したものである(胴部の破片も見られるが、図化は困難である)。二重口縁形で、口縁端部がやや上方に突出した部分もある。頸部形態はa類で、胴部形態は欠損部分が多いため断定はできないが、胴部最大径部が下がる卵形のようである。底部形態は4類であり、底部に貼り付けが行われたかどうか不明である。底部付近の外面には、指オサエ・ナデの他に、しぼり状のナデが施される。肩部上方の内面には、接合線が残っている。底部付近には黒斑がみられる。
41	—	肩から頸部にかけて1/4残存	後円部南～西側 (A－4号－1)	—	(9.2～)	—	—	—	良	—	外面は風化が著しく調整は不明である。内面には接合痕が残っている。
42	—	肩部1/6残存	後円部南～西側 (A－4号－2)	—	(～13.6)	—	—	—	良好	頸部から肩部外面全面に塗布(多量)	外面全面に赤色顔料が多量に付着している。外面は肩部上方から頸部つけねにかけて、丁寧に横ナデを施してハケメを消している。内面は肩部と縦方向のヘラケズリのみが観察されることが特徴である。
43	—	胴部下部1/3、底部3/4残存	後円部南～西側 (Aトレ上)	—	—	27.6	7.0～9.5	—	良好	—	胴部形態は、上部を欠くために断定はできないが、球形にかなり近いようである。底部形態は1類で、底部に貼り付けはない。底部径は約7～9.5cmの不整円形を呈する。粘土には、一辺2mm程度の石英粒を多く含み、ほかの埴輪の胎土より素質である。内外面とも風化が著しく、調整は判然としない。
44	二重口縁形	口縁部1/2、頸部3/8、肩部1/2残存	後円部西側 (A－1号－1)	32.9	15.4～16.8	28.9	—	—	良好	口縁部から頸部にかけての内面に塗布	二重口縁形で、頸部形態はa類である。胴部形態については、下部を欠くため判然としないが胴部最大径部はかなり上方に位置している可能性がある。肩部内面に横ハケが見られるが、このことは他の埴輪にもあまり例が無い。肩部には黒斑もわずかに見られる。
45	—	胴部1/4残存	後円部西側 (A－1号－2)	—	—	27.9	—	—	良好	胴の上半部に塗布	胴部は球形に近い可能性がある。先述の(44)(A－1号－1)とは別個体である外面は縦ハケがほぼ全面に観察できる。下半部の内面はヘラケズリにより器壁が薄くなっている(薄いところで約3mm)。上半部の内面は指オサエによる窪みが多数見られる。
46	単口縁形	ほぼ完形	後円部西側	28.0	12.7	23.2	11.6	42.7	良好	口縁部から胴部にかけて塗布	外面調整は口縁部が斜メハケ、胴部に強いナデ、胴部下部に縦ハケ、底部に指オサエ、ナデが施されている。内面は口縁部は口縁部に横ハケ、頸部に指オサエ、ナデ、胴部には横位のヘラ削り、底部には指オサエの後、横ナデが見られる。
47	二重口縁形	ほぼ完形	後円部西側	23.0	10.4～10.5	21.8	7.8	34.4	良好	頸部から胴部にかけて塗布痕跡	外面は口縁部が縦ハケ後横ナデで頸部、胴部にかけては縦ハケが施されている。胴部上部にはスタンプ状のヘラ描き円弧文がみられる。内面は頸部が横ハケ、胴部上部は指オサエが施されており、下部は横位のヘラ削りである。底部は内外面とも指オサエ・ナデであるが、粘土の継目が明確に残っている。
48	(単口縁形)	口縁部1/6残存	後円部西側	28.9	—	—	—	—	良好	口縁部にわずかに付着	外面は縦・斜メハケ後、横ナデで仕上げられている。内面は全面にナデが施されている。

No.	器種	残存率	出土地点	法量					焼成	赤色顔料	調整・備考
				口径	頸部径	胴部径	底部径	器高			
49	——	胴部下半½残存 底面のみ完周	後円部墳頂	——	——	——	3.5	——	やや良	——	外面は指オサエ、ナデが一面に施されている。内面のうち、胴部はヘラ削りとみられるが方向、単位は不明である。底部には指オサエ・ナデが施されている。黒斑あり。
50	(二重口縁形)	肩部½残存	第3号石室排土	——	(~9.7)	——	——	——	良好	頸部から肩部にかけて塗布	頸部下部の直径が9.6cmと小型である。頸部の立ち上がりの角度から、二重口縁形であると思われる。頸部の外面に斜めハケが見られるが、このような例は稀である。内面には接合痕が残っている。
51	(二重口縁形)	口縁部½残存	第3号石室排土	22.4	——	——	——	——	良好	口縁部下半に塗布	口縁径22.4cmと小型である。外面は斜メハケ後横ハケが施されている。内面は風化のため調整は判然としない。
52	——	口縁部½残存	第3室石室排土	19.8	——	——	——	——	良好	口縁部にわずかに付着	口縁径は19.8cmと小型である。口縁部端面は強い横ナデが施され、下方に突出している。
53	——	底部½残存	第3号石室排土	——	——	——	8.9	——	良好	——	底部付近に接合線が見られるが、貼り付けによるものであろう。内面は底部付近であるにもかかわらず、横方向のヘラケズリが観察できる。
54	——	口縁の約⅛残存	墳頂部 (8号袋中－1)	19.8	——	——	——	——	——	——	口縁部はあまり外反していない。 口縁部は指ナデで内面はハケで仕上げる。
55	——	突帯部の約½残存	墳頂部 (8号袋中－2)	——	——	——	——	——	——	——	胴部の小破片で、円筒埴輪の突帯部の可能性も否定できない。外面はヨコナデであり、内面は斜メハケ後ナデで仕上げている。
56	——	突帯のみ 幅7.0cmの 小破片	Rトレンチ内	——	——	(39.0)	——	——	良好	——	外面は横ナデ、内面はナデと思われる。
57	——	突帯のみ 幅3.0cmの 小破片	Rトレンチ内	——	——	——	——	——	良好	——	外面は横ナデ、内面は縦ハケ痕と思われる。
58	——	突帯のみ 幅4.0cmの 小破片	Kトレンチ内	——	——	——	——	——	やや良	——	外面は横ナデ、内面は斜メハケ痕あり。
59	——	突帯のみ 幅2.0cmの 小破片	Kトレンチ内	——	——	——	——	——	やや良	——	外面は横ナデが施されているが、内面は不明である。黒斑に近い部分だと思われる。
60	——	突帯のみ 幅3.5cmの 小破片	(びれ部平坦面東側(Tトンンチ内)	——	——	——	——	——	やや良	——	外面は横ナデが施されている。
61	——	突帯のみ 幅3.5cmの 小破片	(びれ部平坦面東側(Tトレンチ内)	——	——	——	——	——	やや良	——	外面は横ナデが施されている。
62	——	胴部⅓残存	第3号石室 墓道排土中	——	——	(56.0)	——	——	良好	——	外面は縦ハケ、内面は横位ヘラ削りが施されている。 黒斑あり。
63	——	胴部破片 幅7.0cm	後円部墳頂 表採	——	——	(30.0)	——	——	良好	——	外面はナデ、内面は指オサエと縦ハケが施されている。
64	——	胴部破片 幅7.0cm	Kトレンチ内	——	——	(24.0~ 25.0)	——	——	良好	——	外面はナデが施されており、内面は風化のため調整不明。

※出土地点の(号)は1966～1969年時の取上番号である。

執筆者紹介（所属は執筆当時のものである）

小田富士雄	福岡大学教授	溝口孝司	九州大学大学院文学研究科
山口譲治	福岡市教育委員会	林田憲三	福岡市埋蔵文化財センター
吉留秀敏	福岡市教育委員会	土肥直美	九州大学医学部助手
大西智和	九州大学文学部	田中良之	九州大学医学部助手
太田　睦	佐賀県中原町教育委員会	永井昌文	九州大学医学部教授
橋口達也	福岡県教育委員会	本田光子	福岡市埋蔵文化財センター
下條信行	愛媛大学教授	成瀬正和	宮内庁正倉院事務所
西　健一郎	九州大学文学部助手	唐木田芳文	西南学院大学教授
高倉洋彰	九州歴史資料館	三辻利一	奈良教育大学教授
佐田　茂	東海大学助教授	森　貞次郎	元九州産業大学教授
古野徳久	香川県教育委員会	三木文雄	元東京国立博物館考古課長
郭　鐘喆	九州大学大学院文学研究科	柳沢一男	福岡市教育委員会
五百路裕之	九州大学文学部	渡辺芳郎	九州大学文学部助手
高久健二	九州大学文学部		（同不順）
久保寿一郎	九州大学大学院文学研究科		

編集後記

九州大学考古学研究室による測量作業から始まる老司古墳の調査は，約20年後の福岡市教育委員会による墳丘調査を経て終了し，ここに一冊の報告書を呈示することができた。

報告書作成にあたっては新旧の図面の照合や整合などの困難な作業が続いた。しかし，調査関係者各位の適切な指導，助言，さらに九州大学考古学研究室室員を含め，関係者の全面的な協力によって本報告を作成できたことは何よりも喜びに耐えない。ここに改めてその芳名は記さないが，複数の組織や機関に係わる研究者の献身的な協力により成しえた点を強調して，お礼の言葉としたい。

本報告では頁数の関係で呈示できなかった図面，写真も多い。また，報告内容でも不備な点が目立つ。これらは全て，編集者の責任であり，深くお詫びすると共に今後何等かの形で補っていきたいと思う。なお，校了後に不明であった老司古墳出土遺物の一部が，新たに発見された。これについては，次年度の重要遺跡確認調査報告の中で追加報告したいと考えている。

（渡辺芳郎，吉留秀敏）

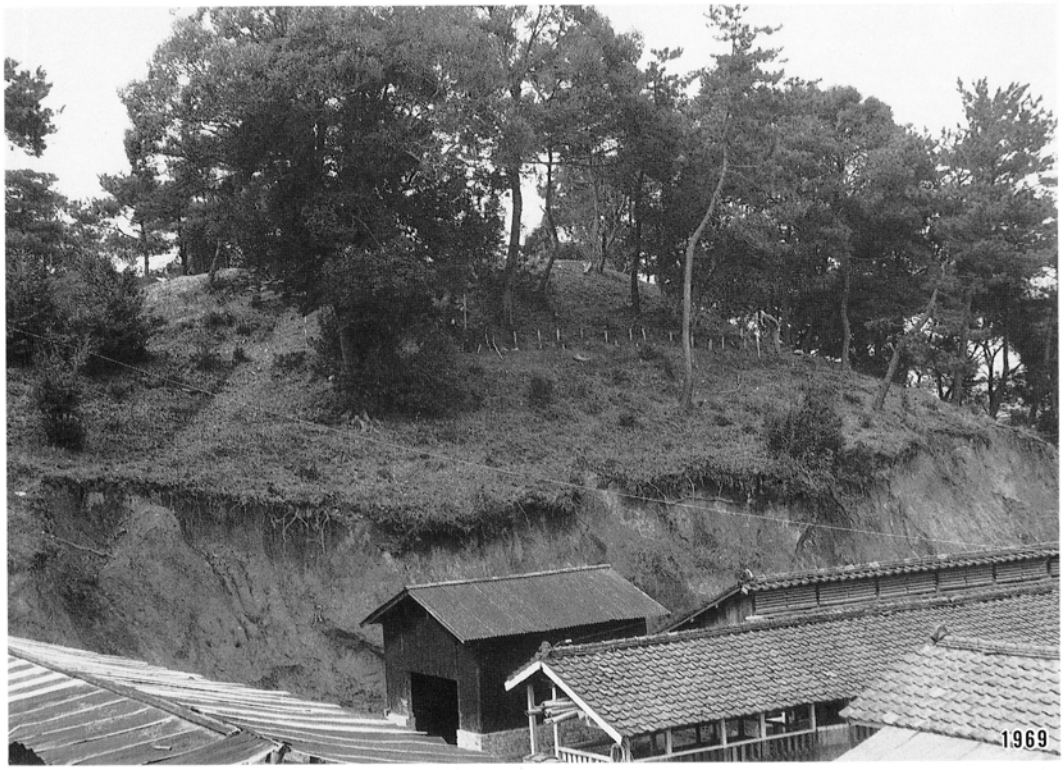
図版

○調査、撮影年度は図版右下に西暦で示した。
○遺物の写真縮尺率は厳密なものではなく、多少の誤差がある。
○縮尺率の示されていないものは任意の大きさである。

図版 1

(1) 墳丘遠景(西より)

(2) 後円部近景(南東より)

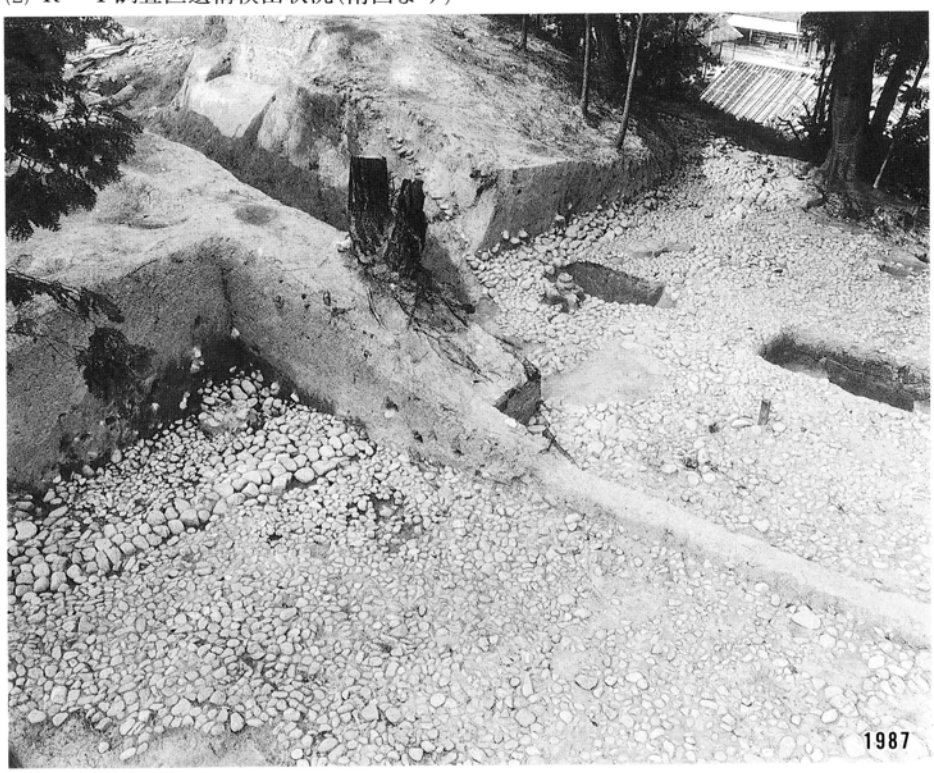


(1)第1トレンチ(南より)

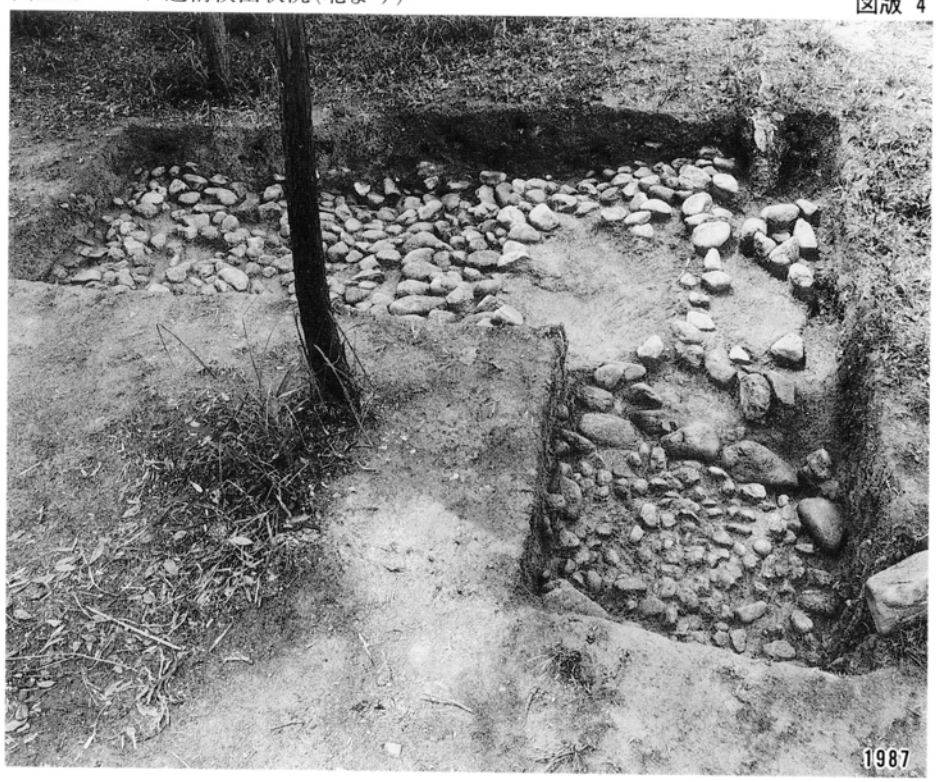
(2)第2トレンチ(西より)

(1) 前方部近景(北より)

(2) R・T調査区遺構検出状況(南西より)



(1) Eトレンチ遺構検出状況(北より)

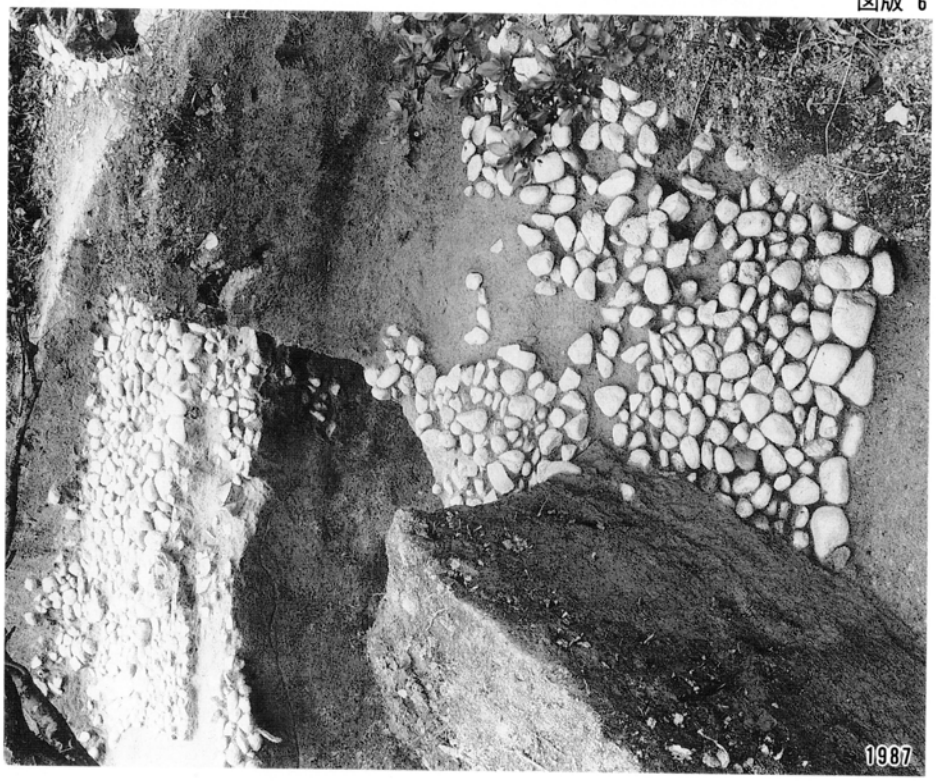


(2) Iトレンチ遺構検出状況(北より)

(1) Aトレンチ遺構検出状況(南より)

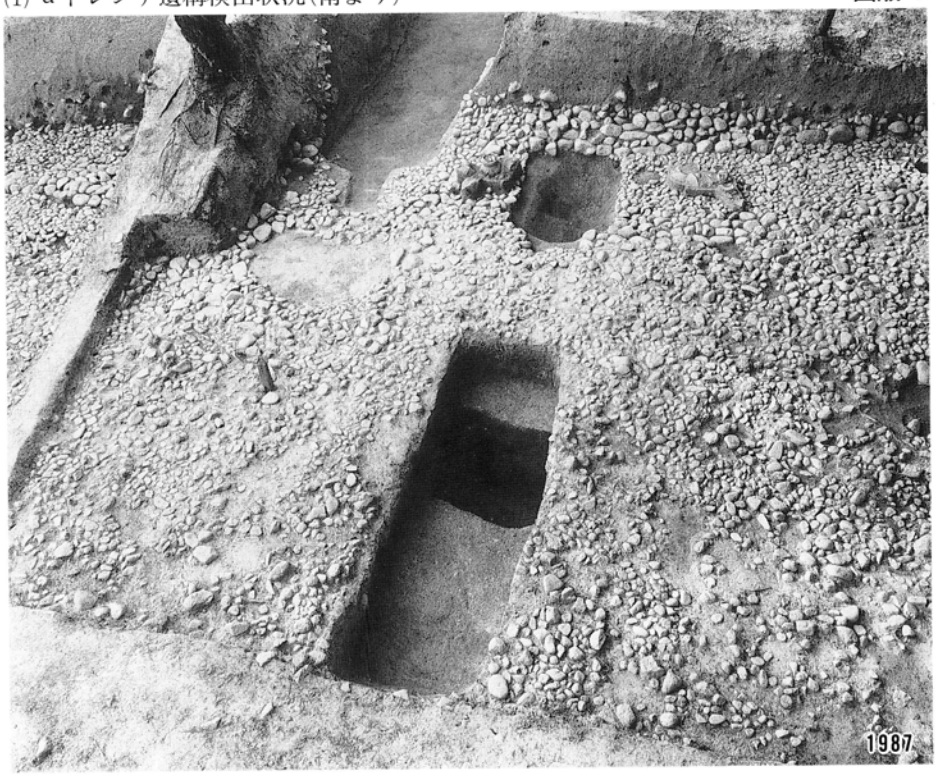
(2) Fトレンチ遺構検出状況(東より)

(1) Bトレンチ遺構検出状況(東より)

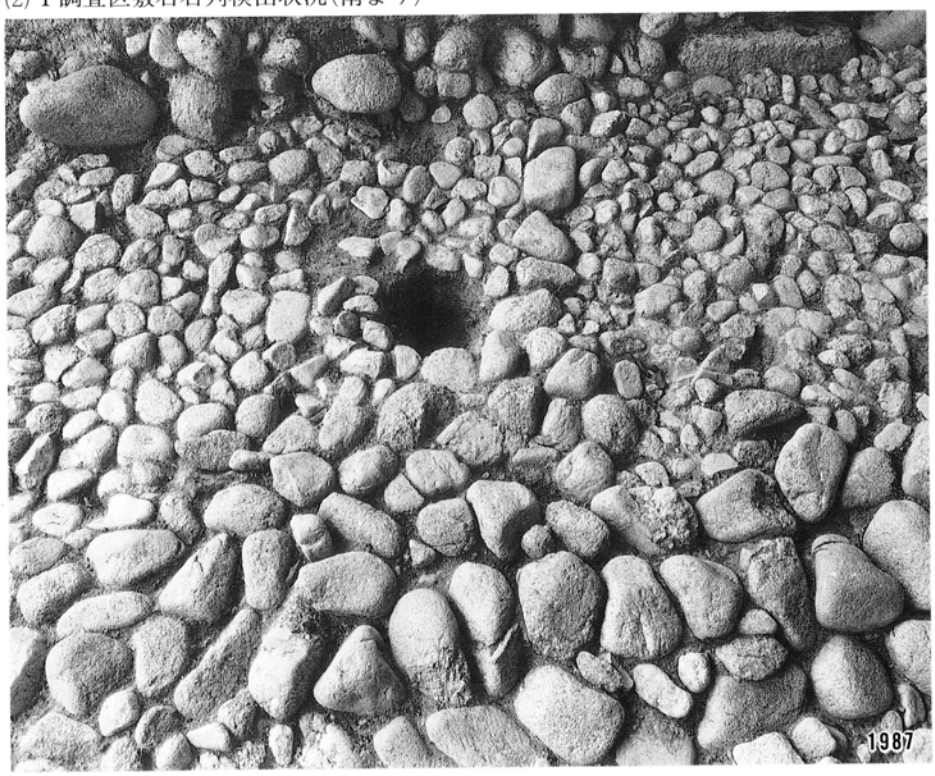


(2) Nトレンチ遺構検出状況(北西より)

(1) uトレンチ遺構検出状況(南より)



(2) T調査区敷石石列検出状況(南より)

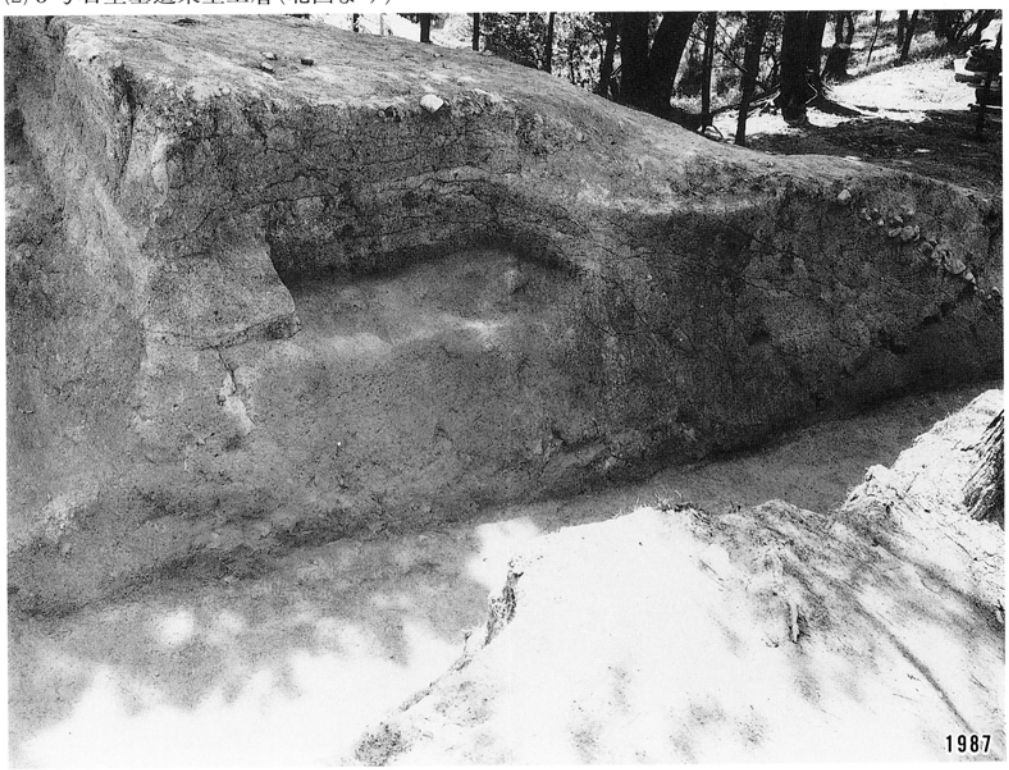


(1) T調査区遺構検出状況(南より)

(2) 後円部2段目平面図埴輪検出状態(南より)

(1) 3 号石室墓道西壁土層(北東より)

(2) 3 号石室墓道東壁土層(北西より)



(1) Oトレンチ南壁土層(北西より)

(2) Pトレンチ南壁土層(北東より)

(1) Pトレンチ東端南壁土層(北東より)

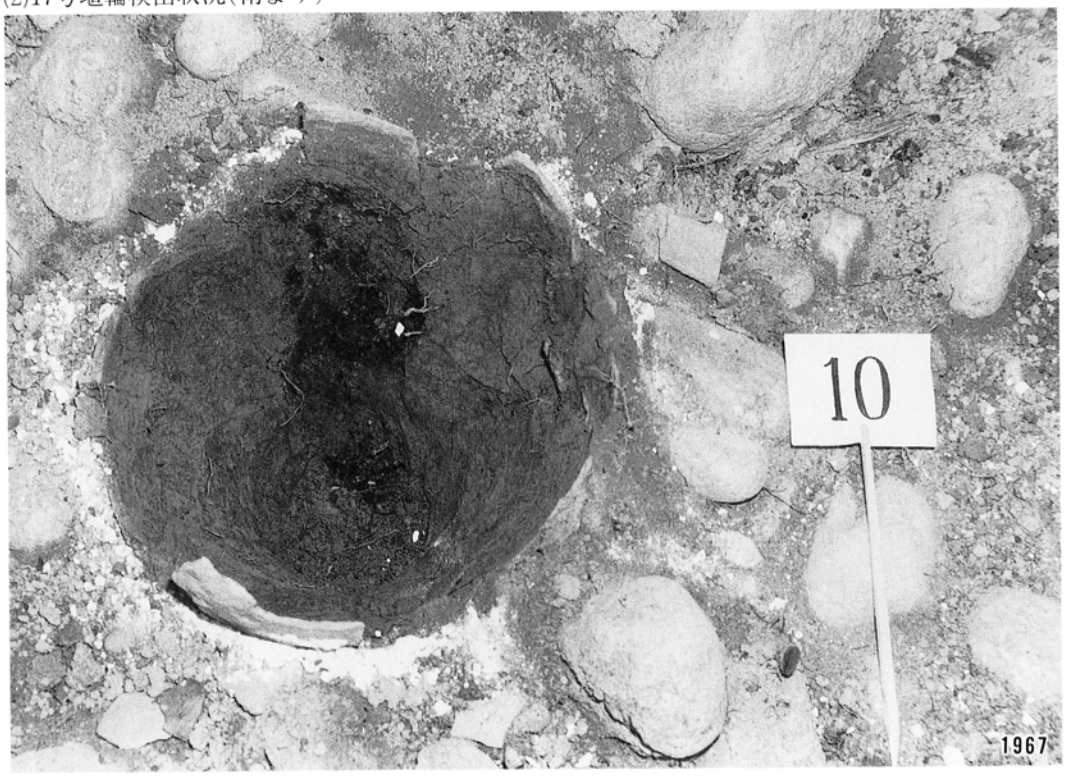
(2) uトレンチ内溝状遺構検出状況(西より)

(1) 15号埴輪検出状況(南より)

(2) 16号埴輪検出状況(南より)

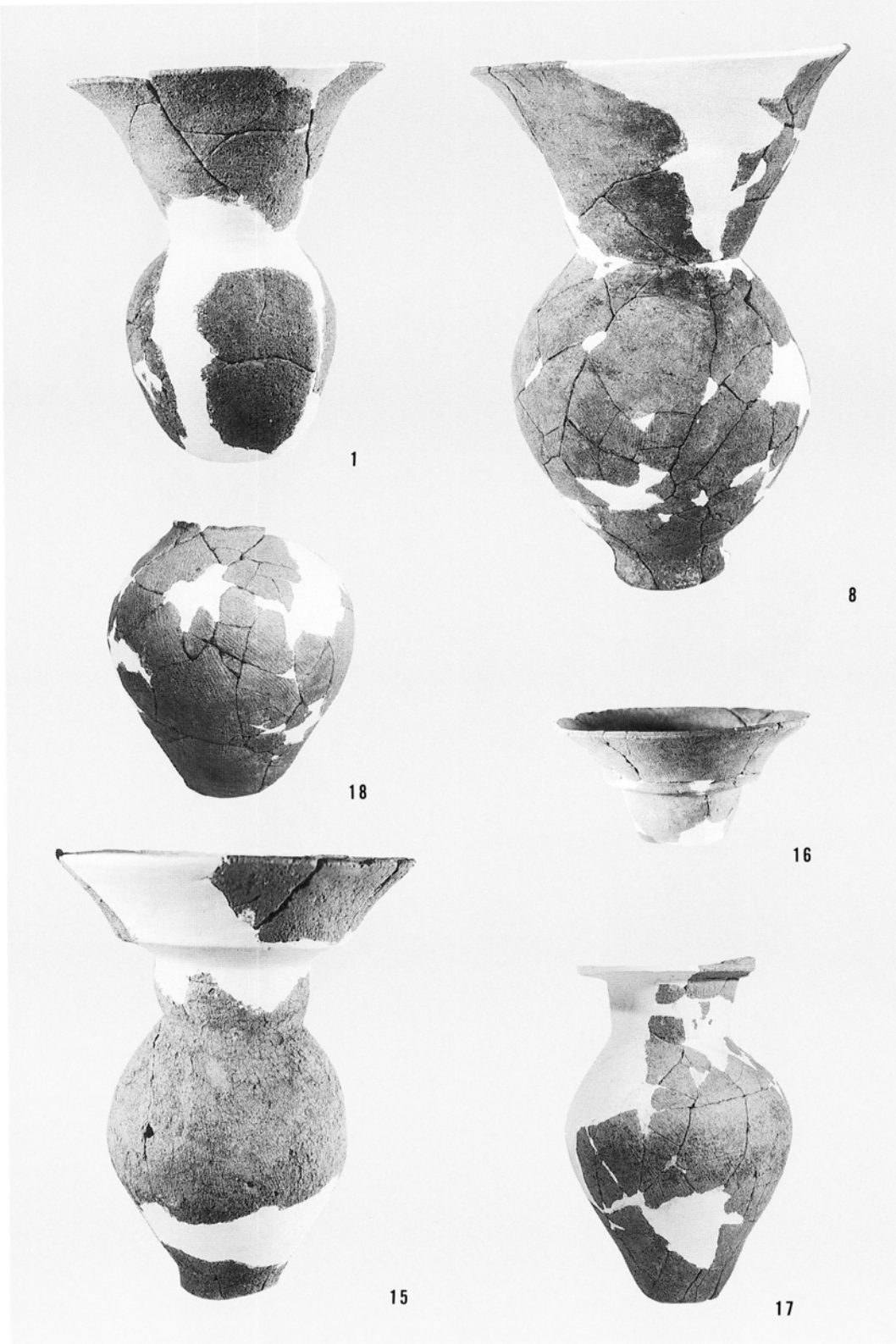
(1) 17号埴輪検出状況(南より)

(2)17号埴輪検出状況(南より)



(1) 8 号埴輪検出状況(東より)

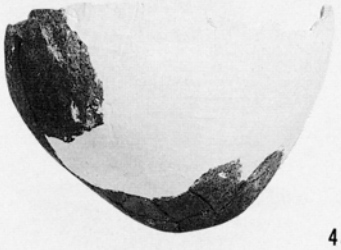
(2) 13号埴輪検出状況(東より)



墳丘出土の遺物　1（壷形埴輪）　縮尺１／６

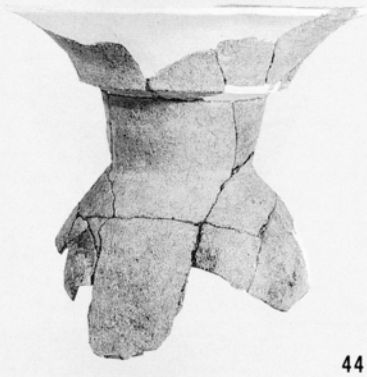
21

33


43

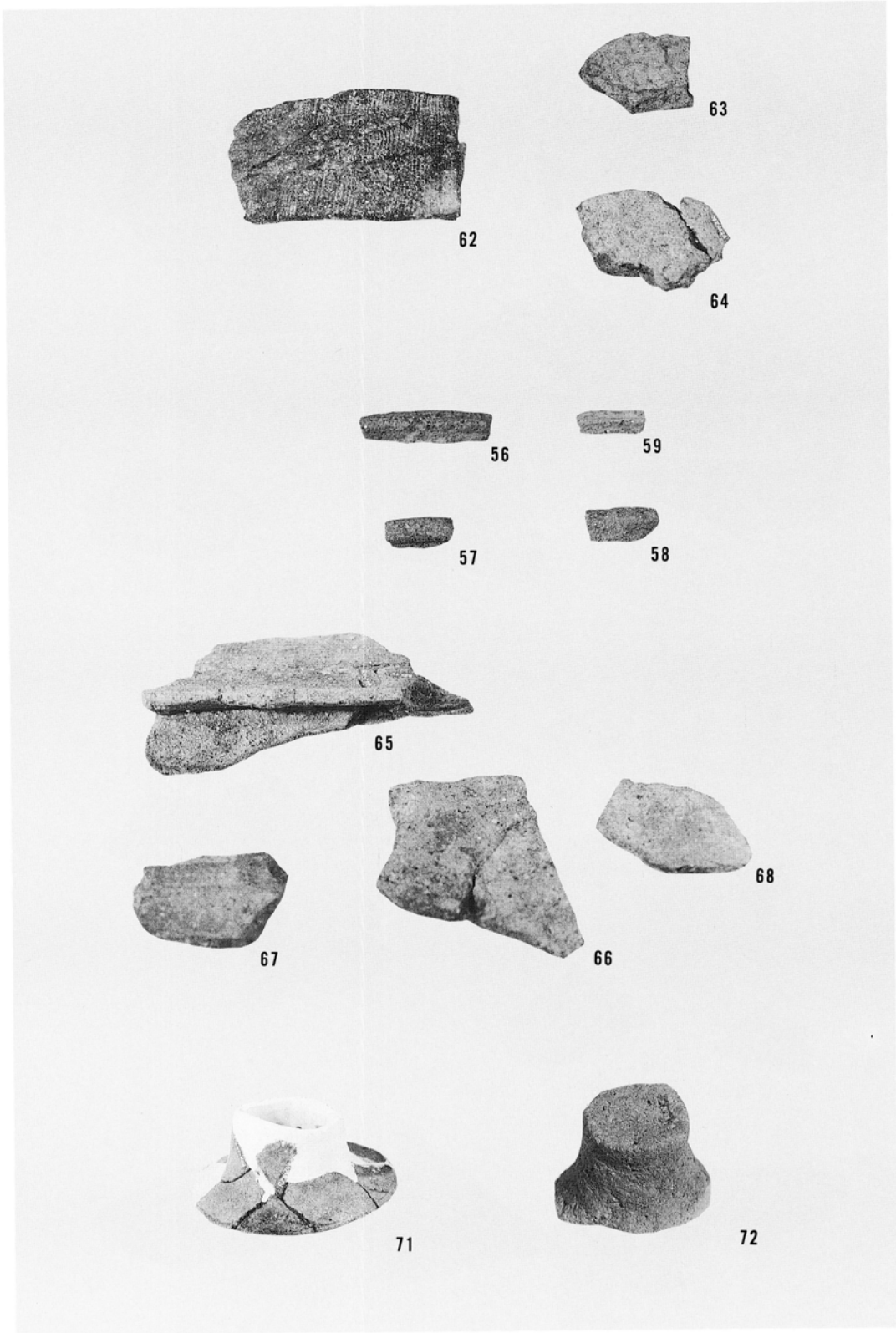
46

27

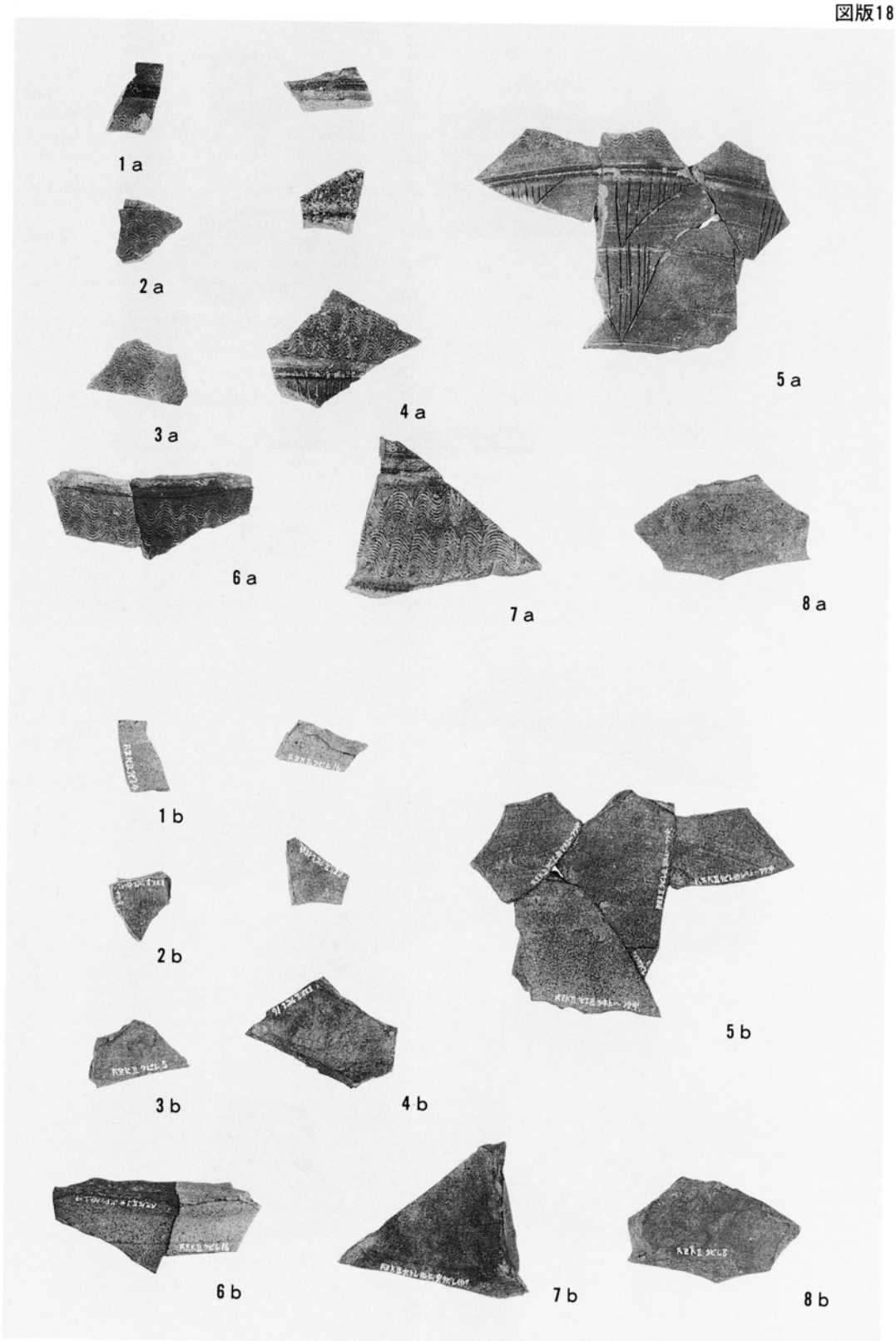

44

47

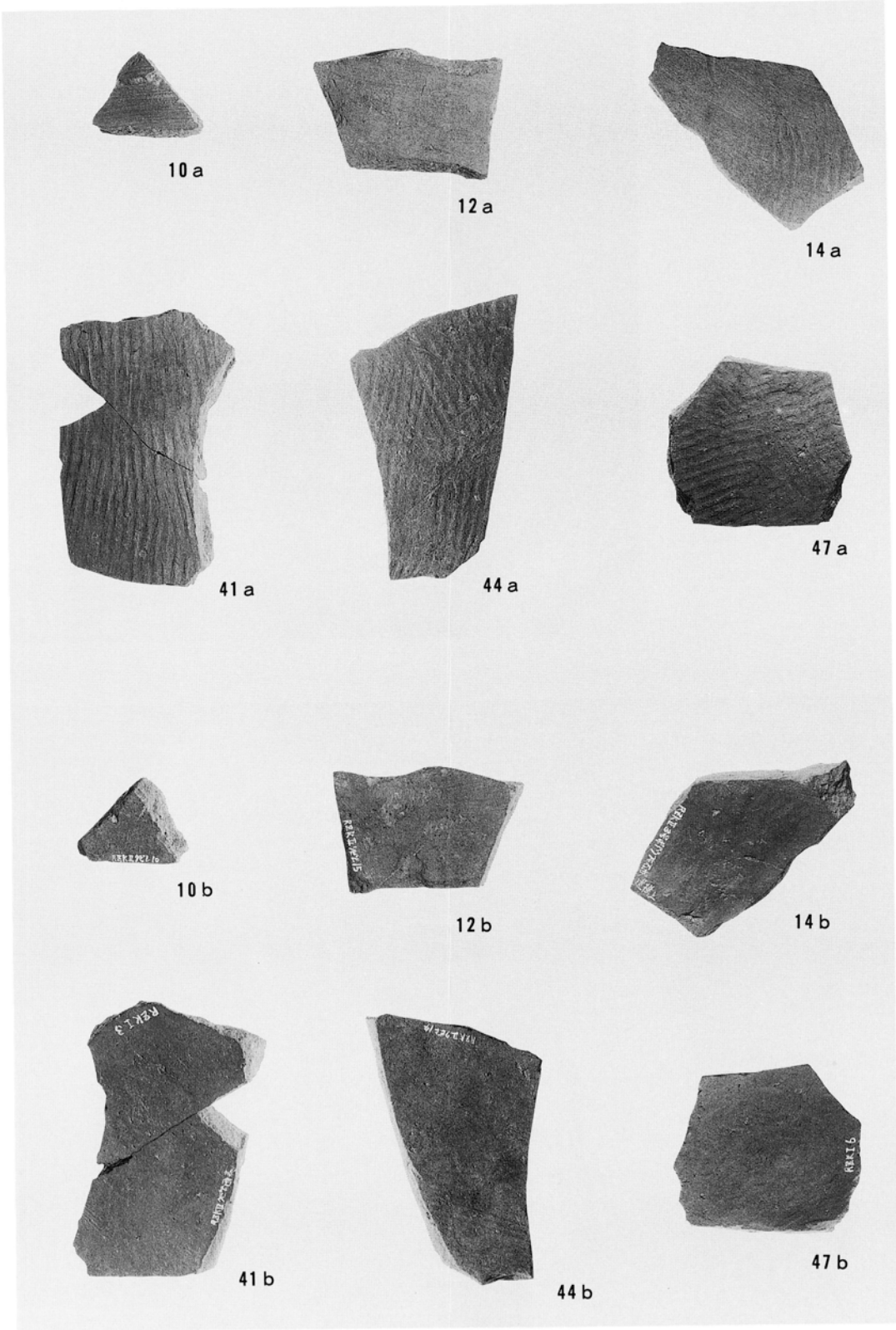
墳丘出土の遺物　2（壷形埴輪）　縮尺１／６



墳丘出土の遺物　3（円筒・形象埴輪・土師器）　縮尺１／３

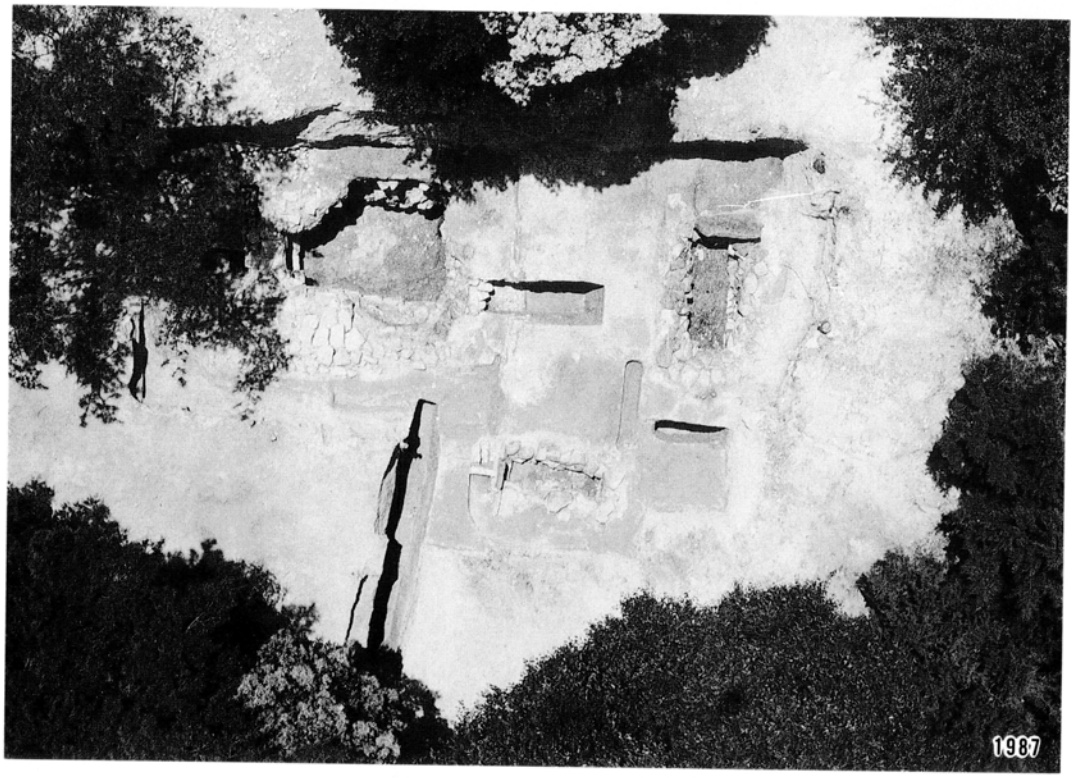


墳丘出土の遺物　4（須恵器器台）　縮尺１／２



墳丘出土の遺物　5（須恵器甕）　縮尺１／２

1～3号石室全景(上空より)

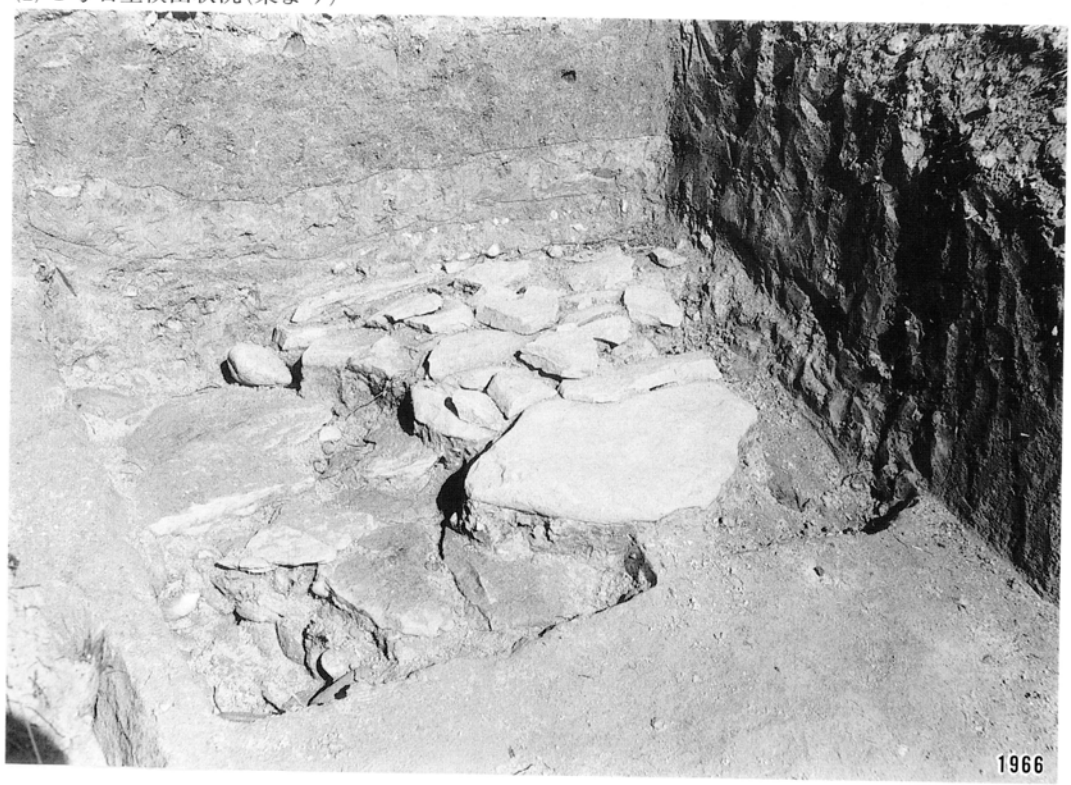


(1) 1～3号石室近景(南西より)

(2) 1～3号石室近景(北より)

(1) 1号石室検出状況(西より)

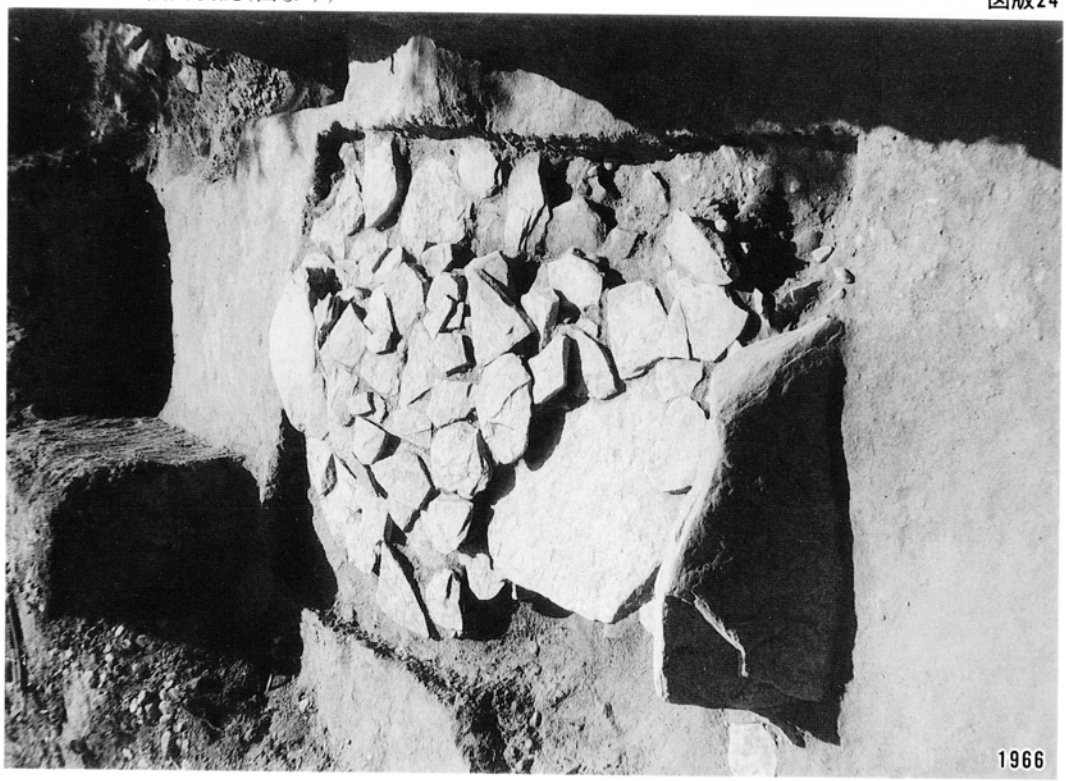
(2) 1号石室検出状況(東より)



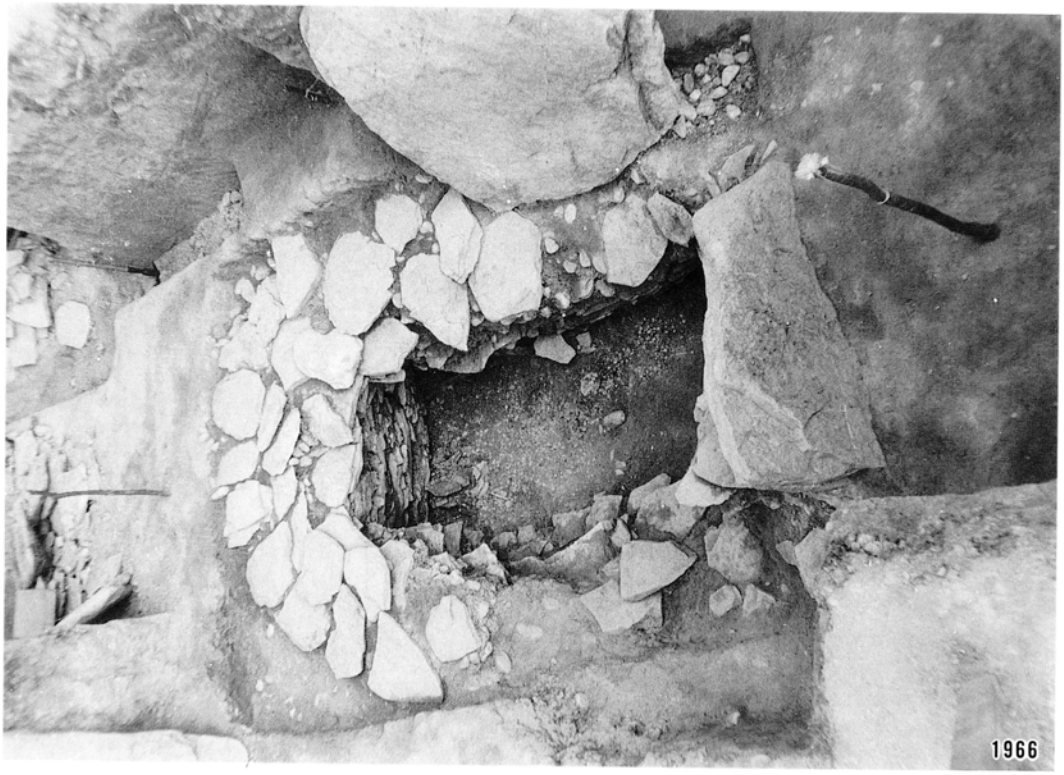
(1) 1号石室検出状況(南東より)

(2) 1号石室検出状況(北東より)

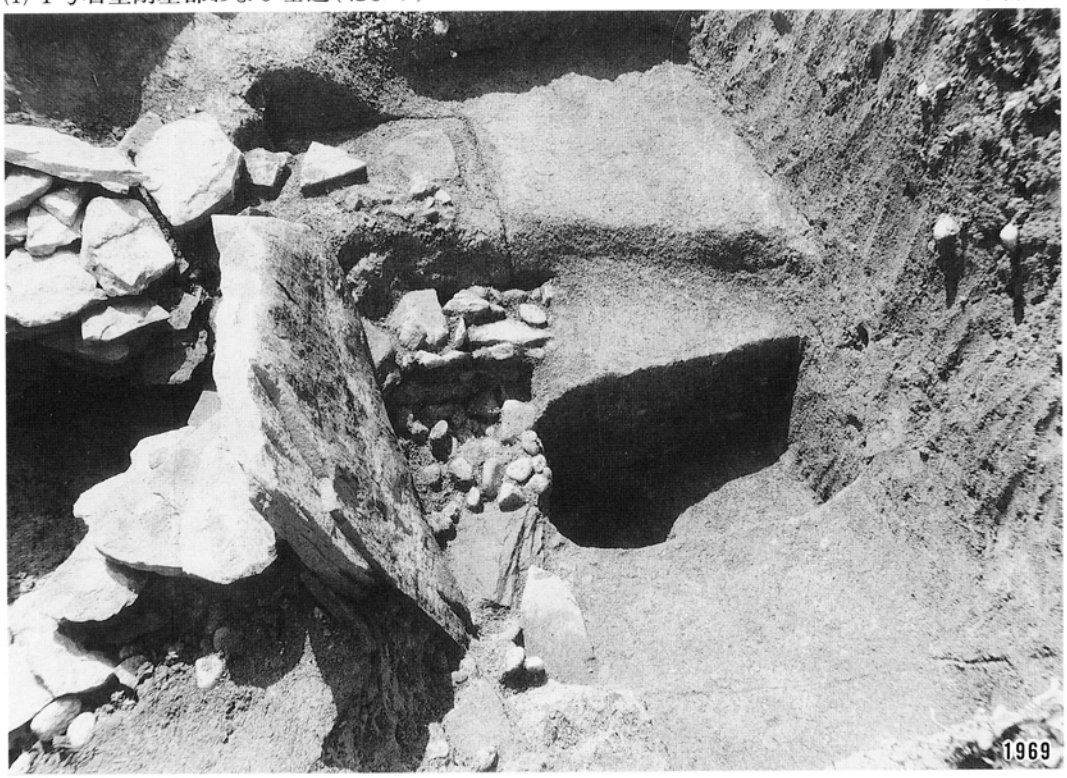
(1) 1号石室検出状況(西より)



(2) 1号石室天井石除去後(西より)



(1) 1号石室閉塞部および墓道(北より)



(2) 1号石室閉塞部(東より)

(1) 1号石室遺物出土状況(III群)

(2) 1号石室遺物出土状況(I・II群)

(1) 1号石室遺物出土状況(II群)

(2) 1号石室遺物出土状況(I群)

(1) 2号石室検出状況(南東より)

(2) 2号石室天井石除去後(北より)

(1) 2号石室閉塞部(北より)

(2) 2号石室閉塞部(西より)

(1) 2号石室甲冠出土状況（北より）

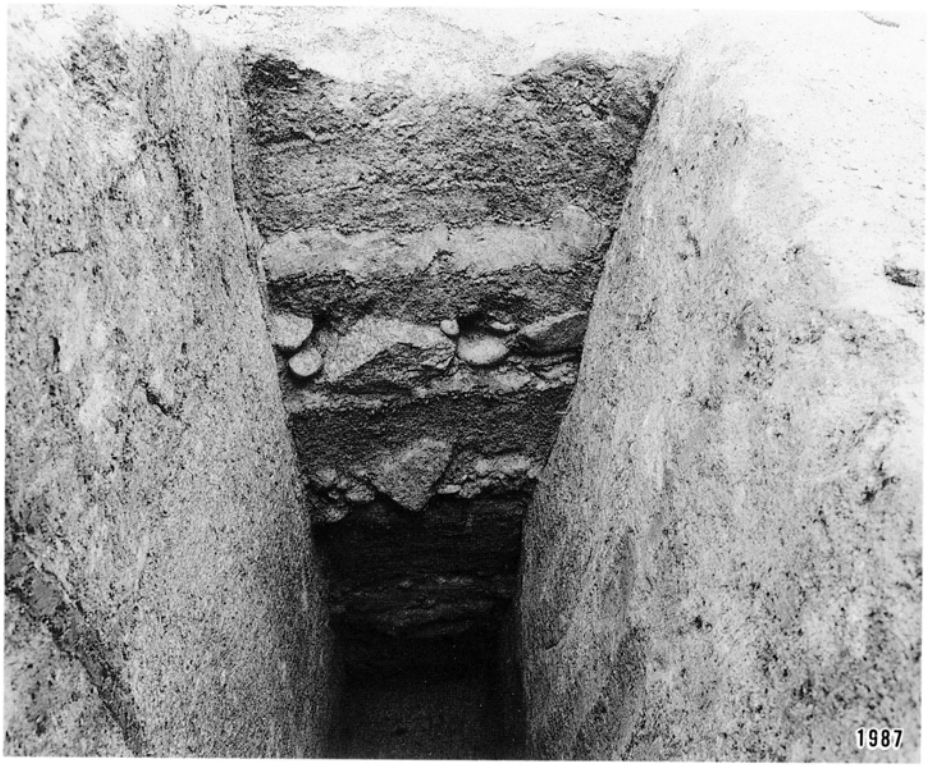
(2) 2号石室遺物出土状況全景（北より）

(1) 3号石室横断面土層(北より)

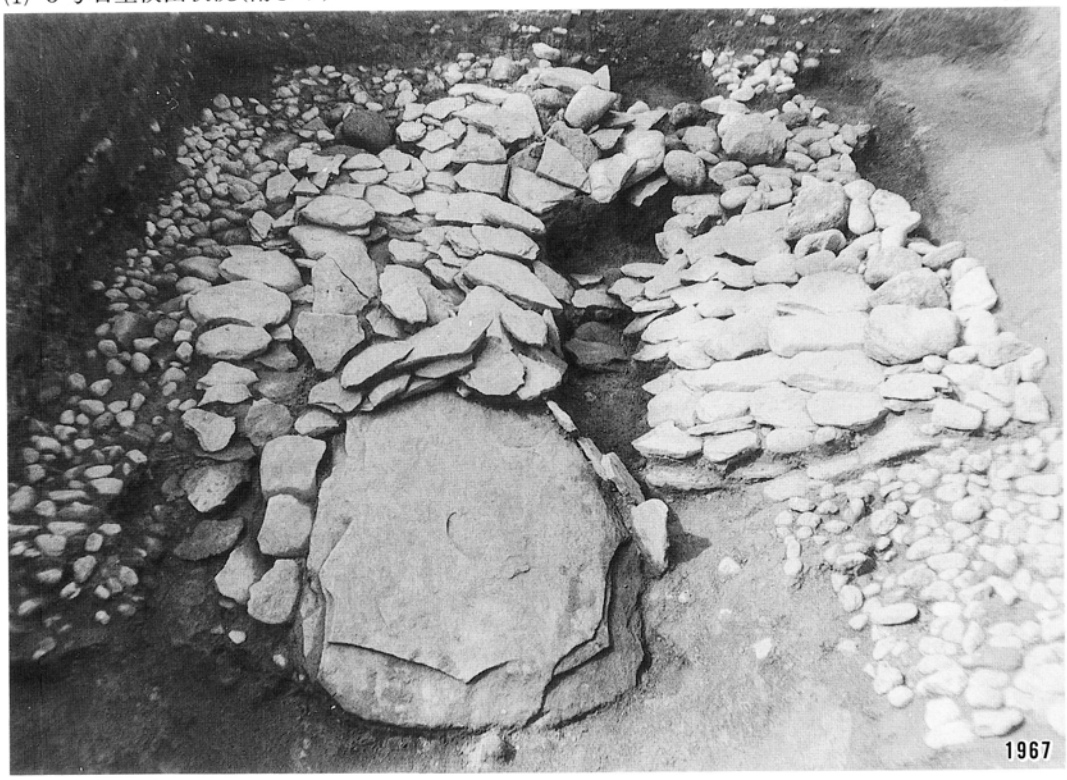
(2) 3号石室西側土層(北東より)

(1) 3号石室横断面土層(北より)

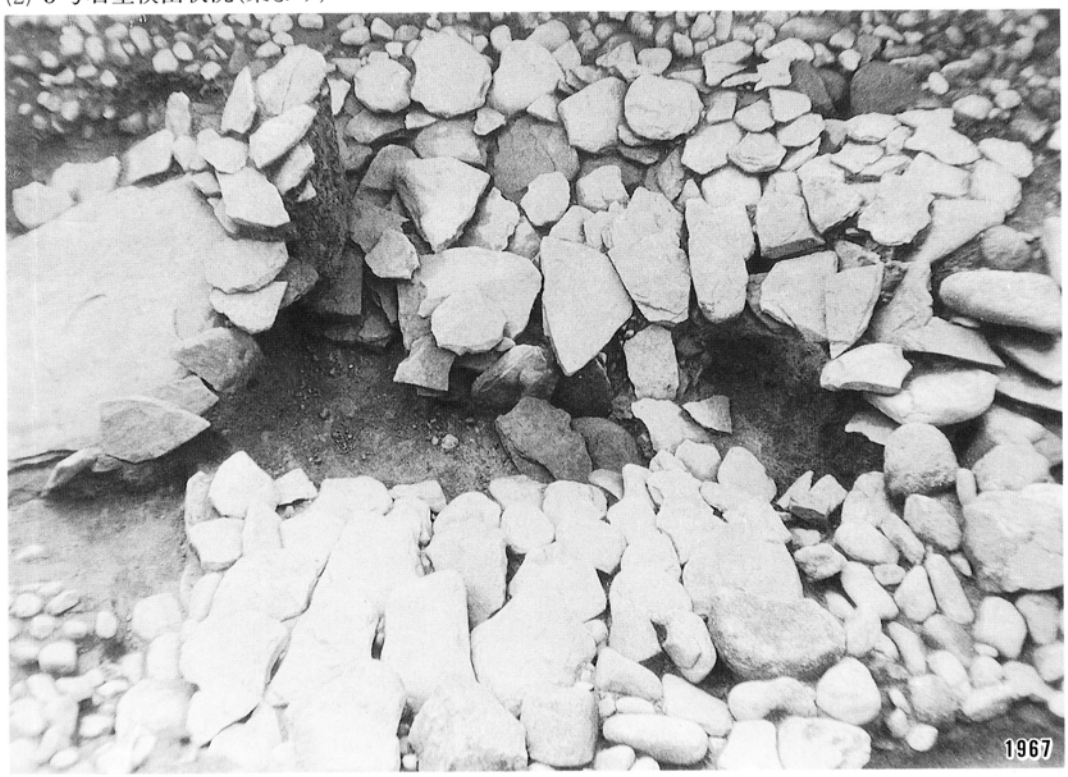
(2) 3号石室奥壁裏込め(東より)



(1) 3号石室検出状況(南より)

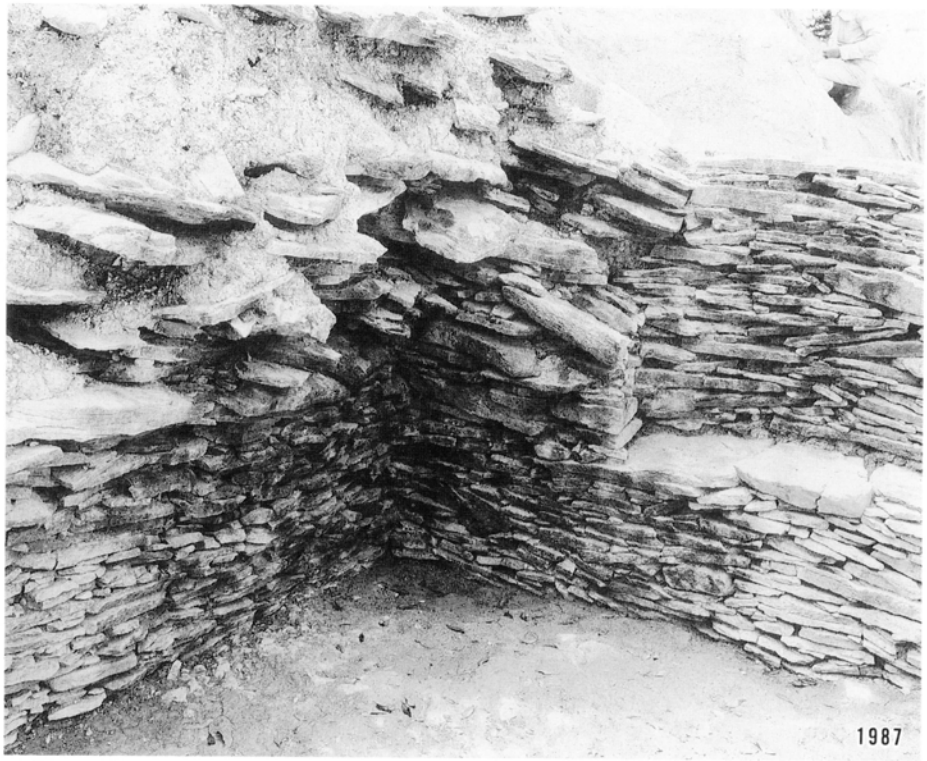


(2) 3号石室検出状況(東より)



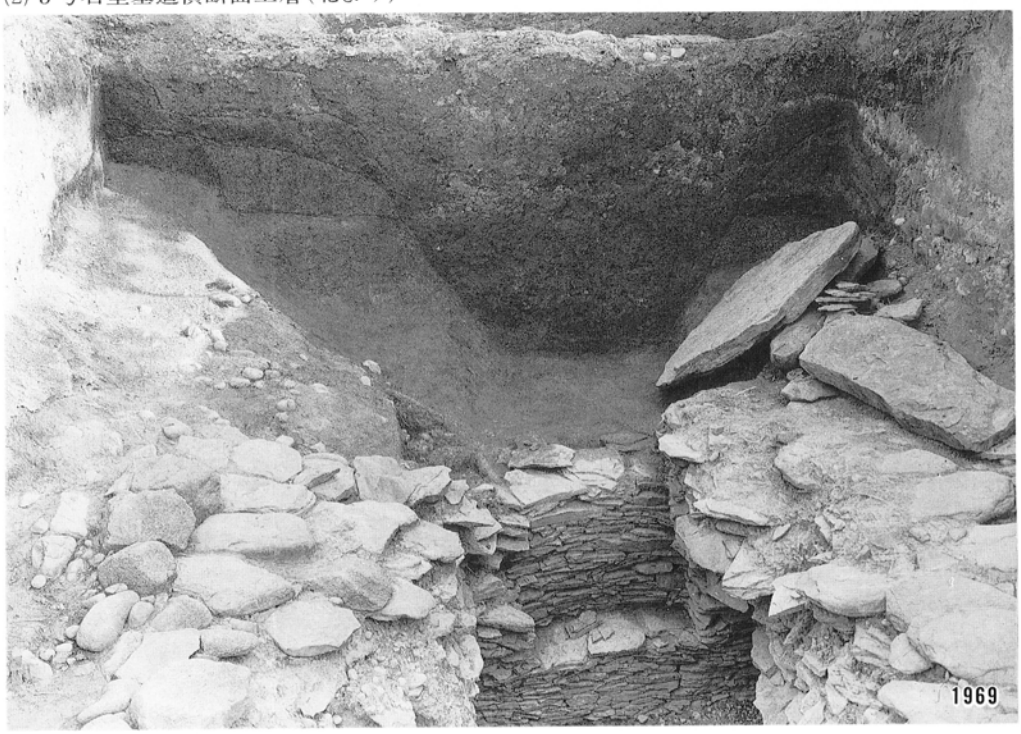
(1) 3号石室横口部(北より)

(2) 3号石室南東(北西より)



(1) 3号石室奥壁(南より)

(2) 3号石室墓道横断面土層(北より)

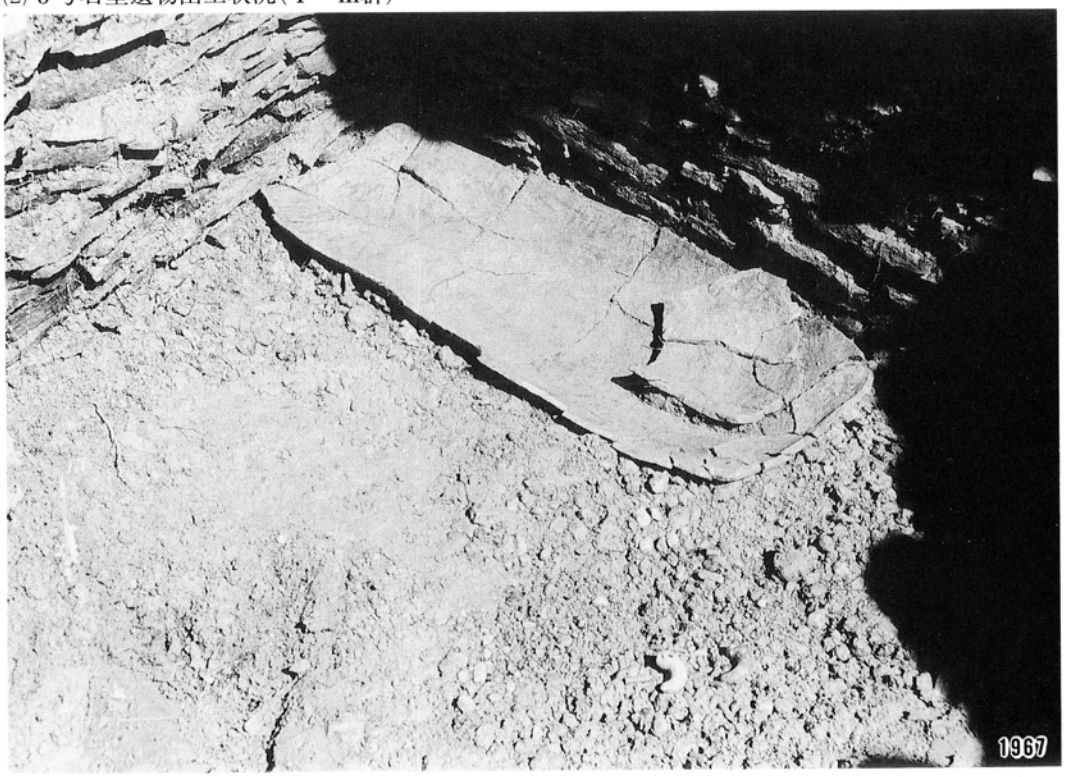


(1) 3号石室墓道(北より)

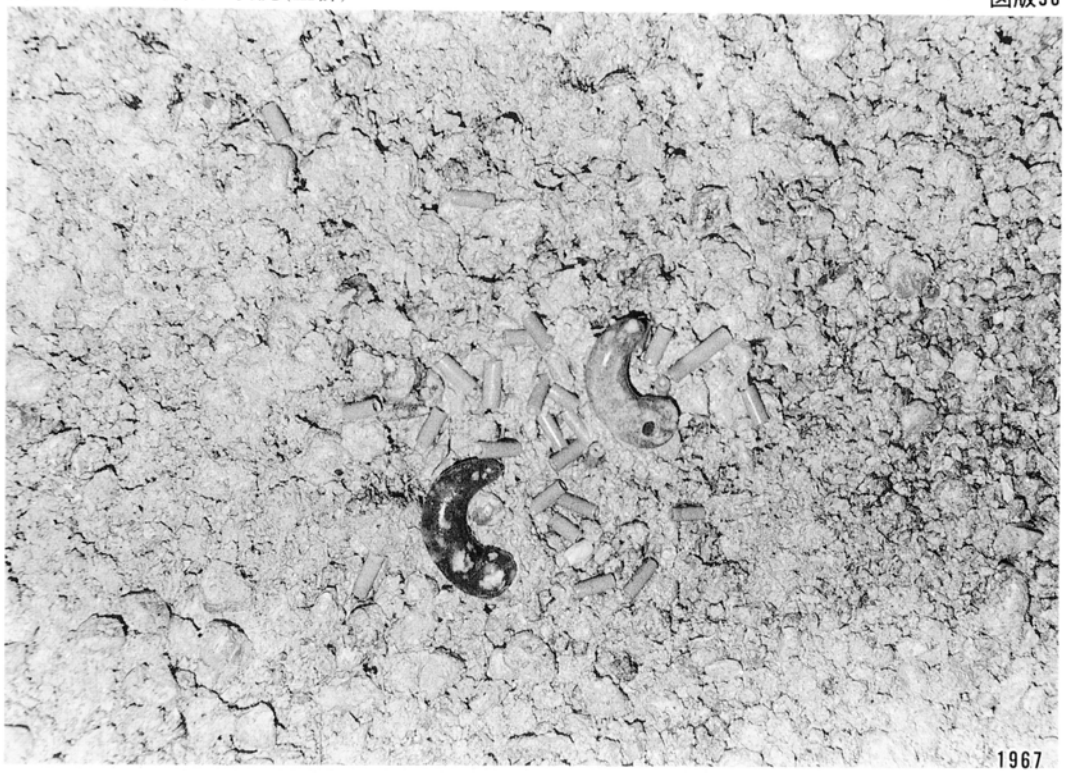
(2) 3号石室墓道(南より)

(1) 3号石室遺物出土状況全景（南より）

(2) 3号石室遺物出土状況（Ⅰ・Ⅲ群）

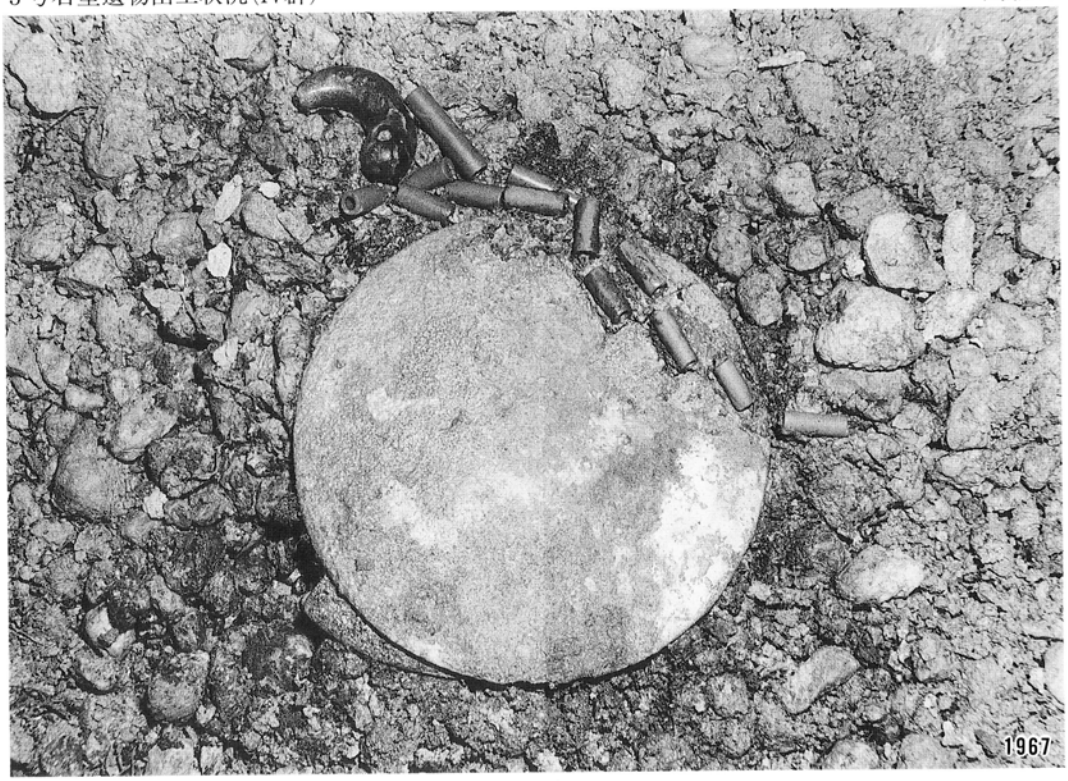


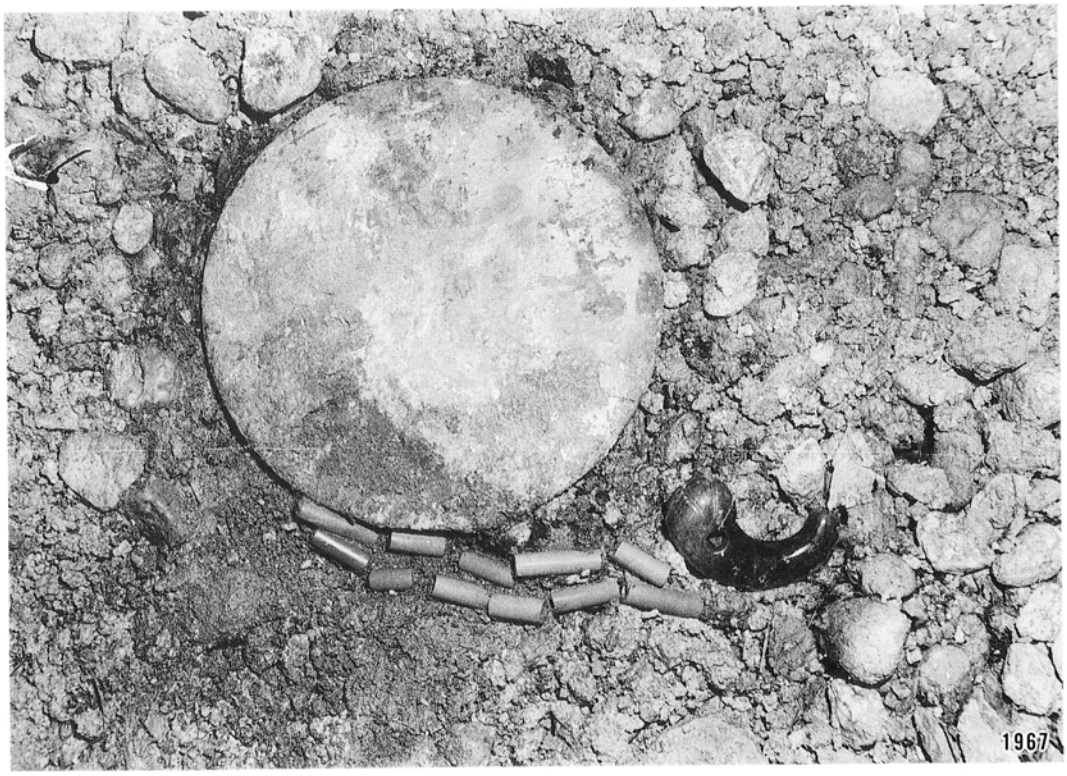
(1) 3号石室遺物出土状況(III群)



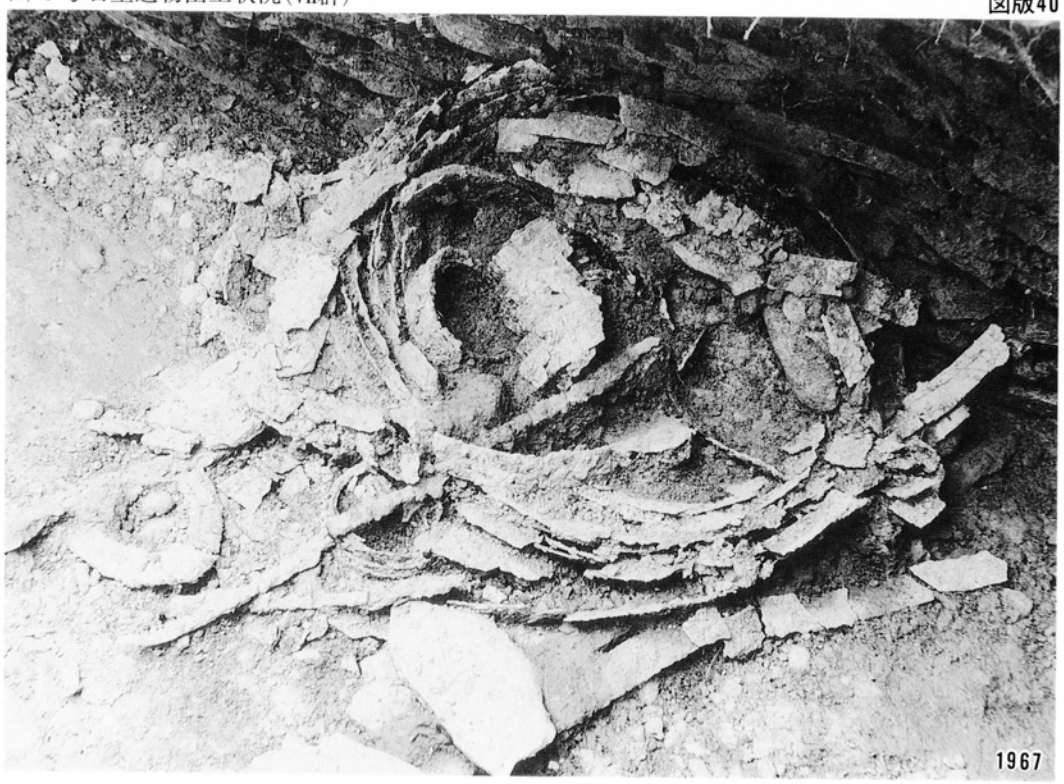
(2) 3号石室遺物出土状況(II群)

3 号石室遺物出土状況(IV群)

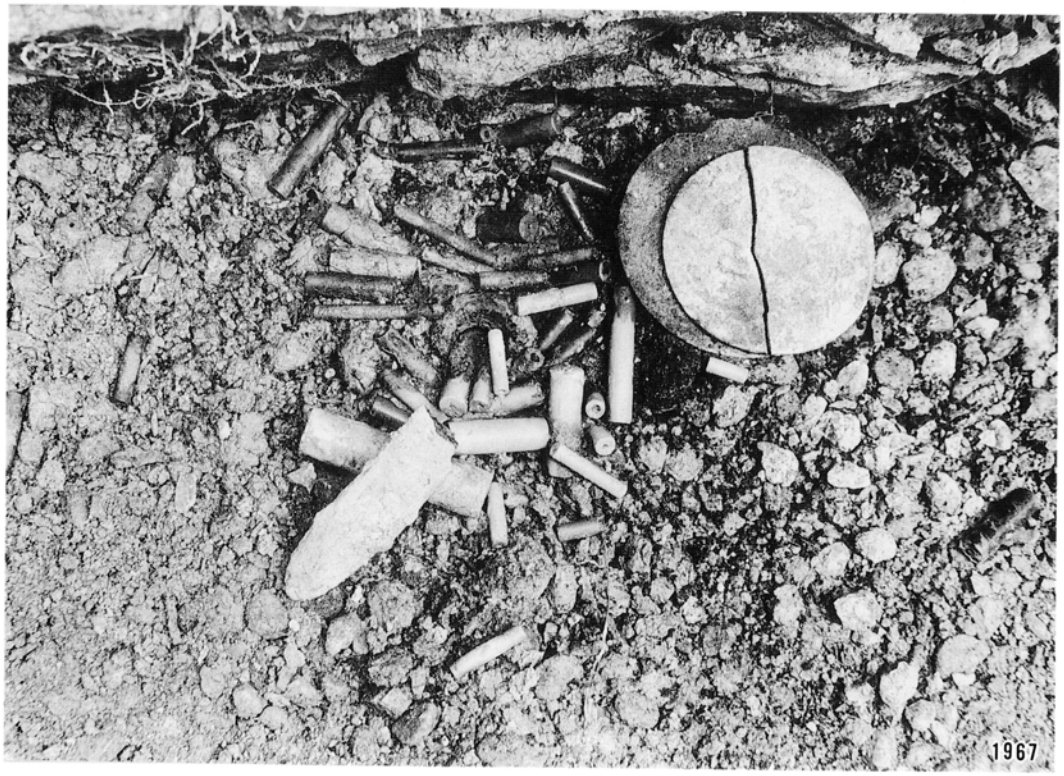




(1) 3号石室遺物出土状況(Ⅶ群)



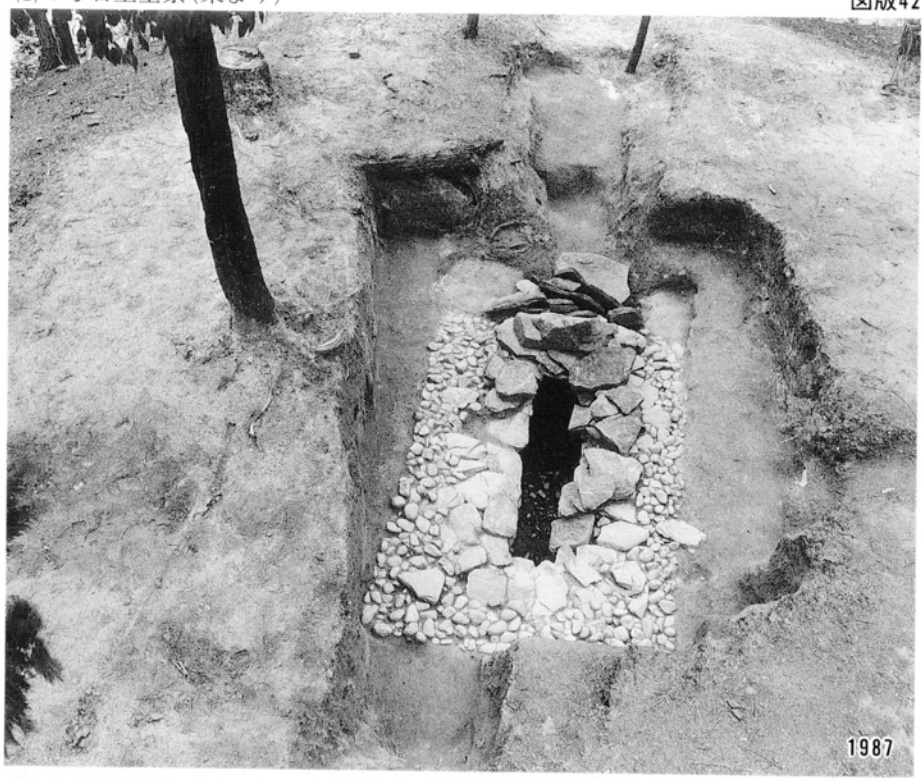
(2) 3号石室遺物出土状況(Ⅳ群)



(1) 3号石室遺物出土状況(Ⅷ群上層)

(2) 3号石室遺物出土状況(Ⅷ群下層)

(1) 4 号石室全景(東より)



(2) 4 号石室検出状況(北西より)

(1) 4号石室検出状況(北東より)

(2) 4号石室墓道(東より)

(1)

(2)

(3)

(4)

4号石室遺物出土状況（1969）

(1) Aトレンチおよび石蓋土壙墓検出状況(東より)

(2) 石蓋土壙墓検出状況(南より)

1

2

1　第3号石室出土舶載三角縁四神四獣鏡片（1号鏡、2／3大）

2　（参考）フリア美術館蔵舶載三角縁四神四獣鏡

（『欧米蒐儲支那古銅精華』5から、1／2大）

3号石室出土三角縁鏡片およびフリア美術館所蔵三角縁四神四獣鏡

1

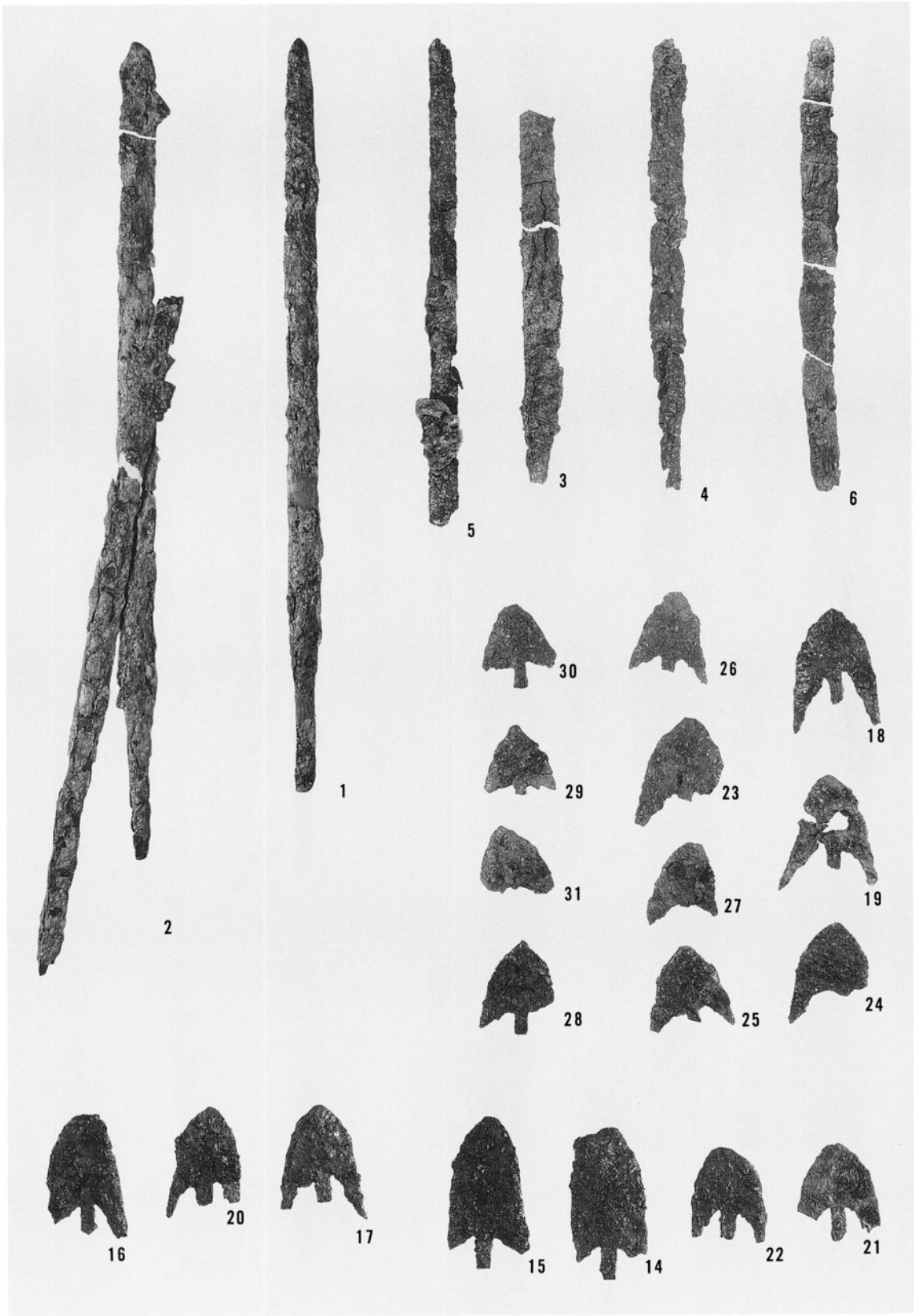
2

3

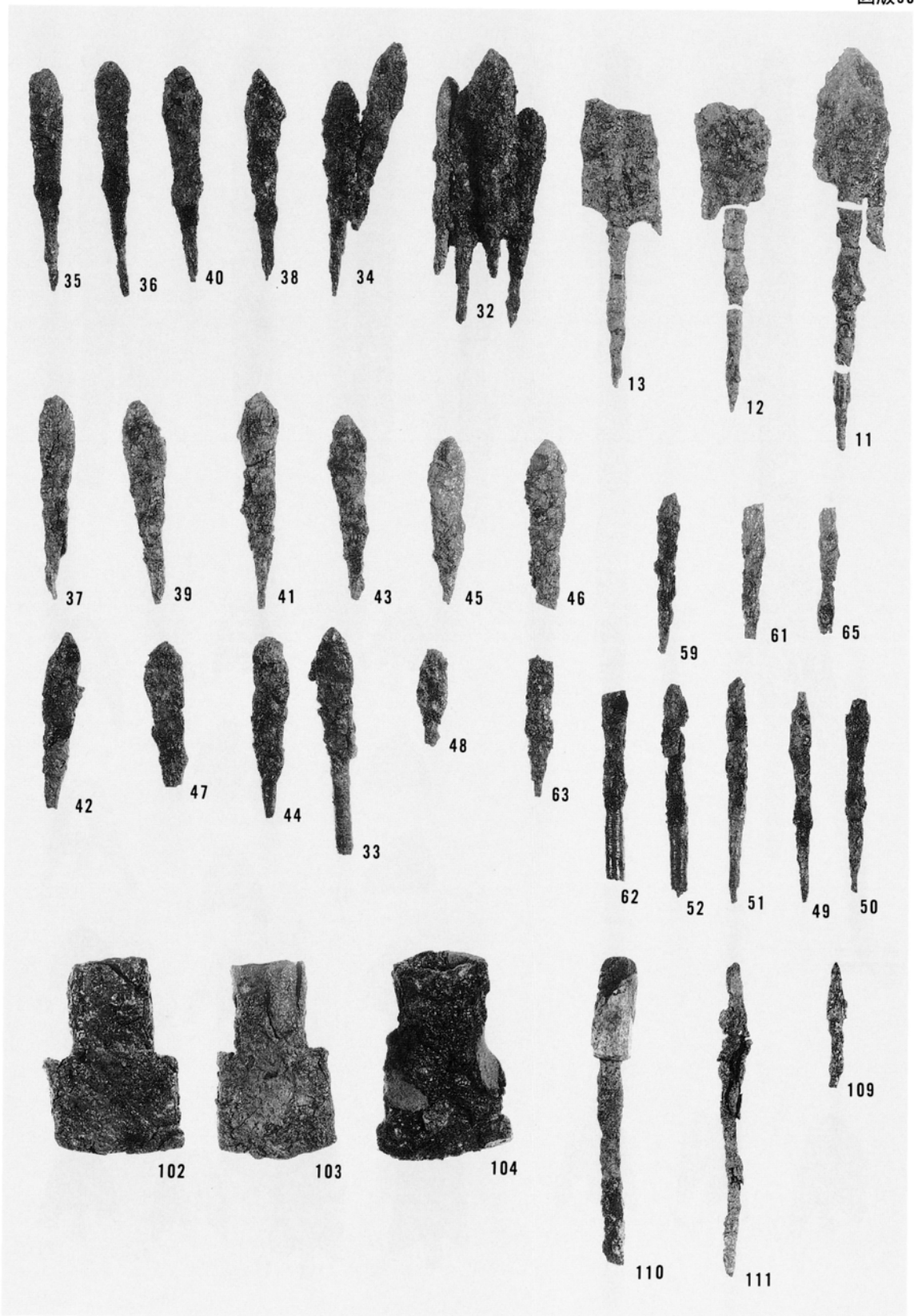
3号石室出土銅鏡

縮尺約2/3

1～3号石室出土銅鏡　　縮尺約2/3

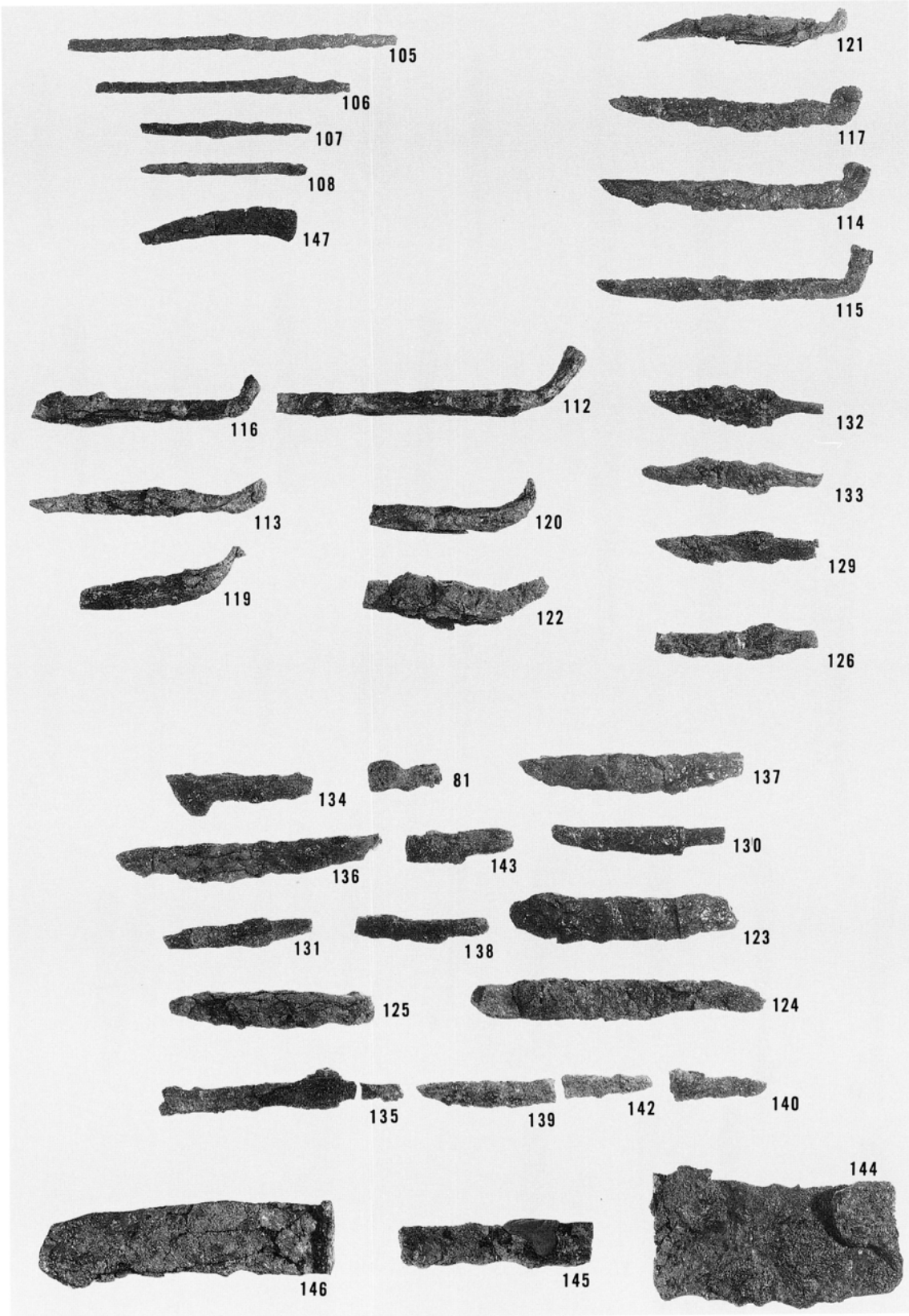


1号石室出土鉄器　1　　縮尺1／6・1／3

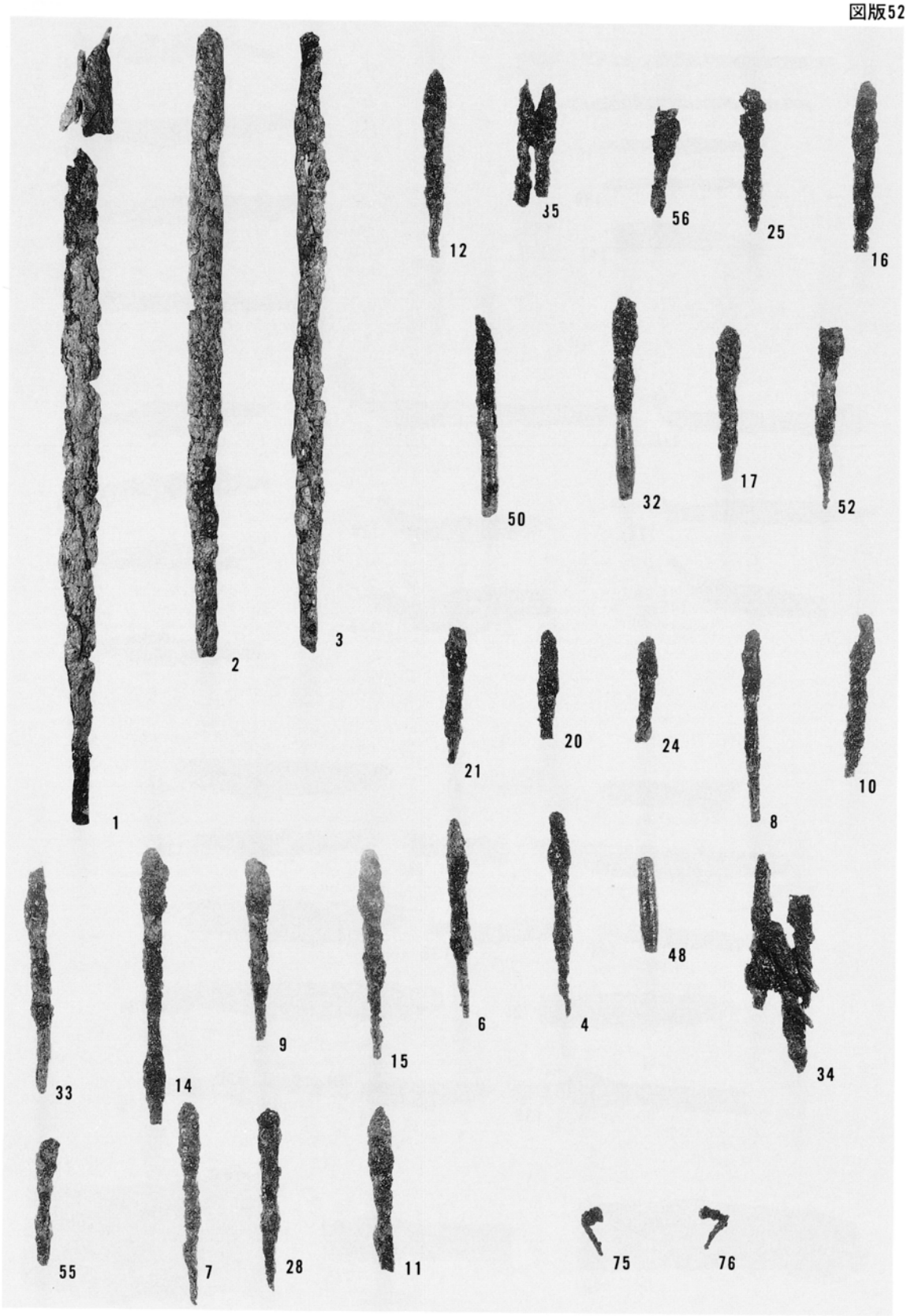


1号石室出土鉄器　2

縮尺1／3

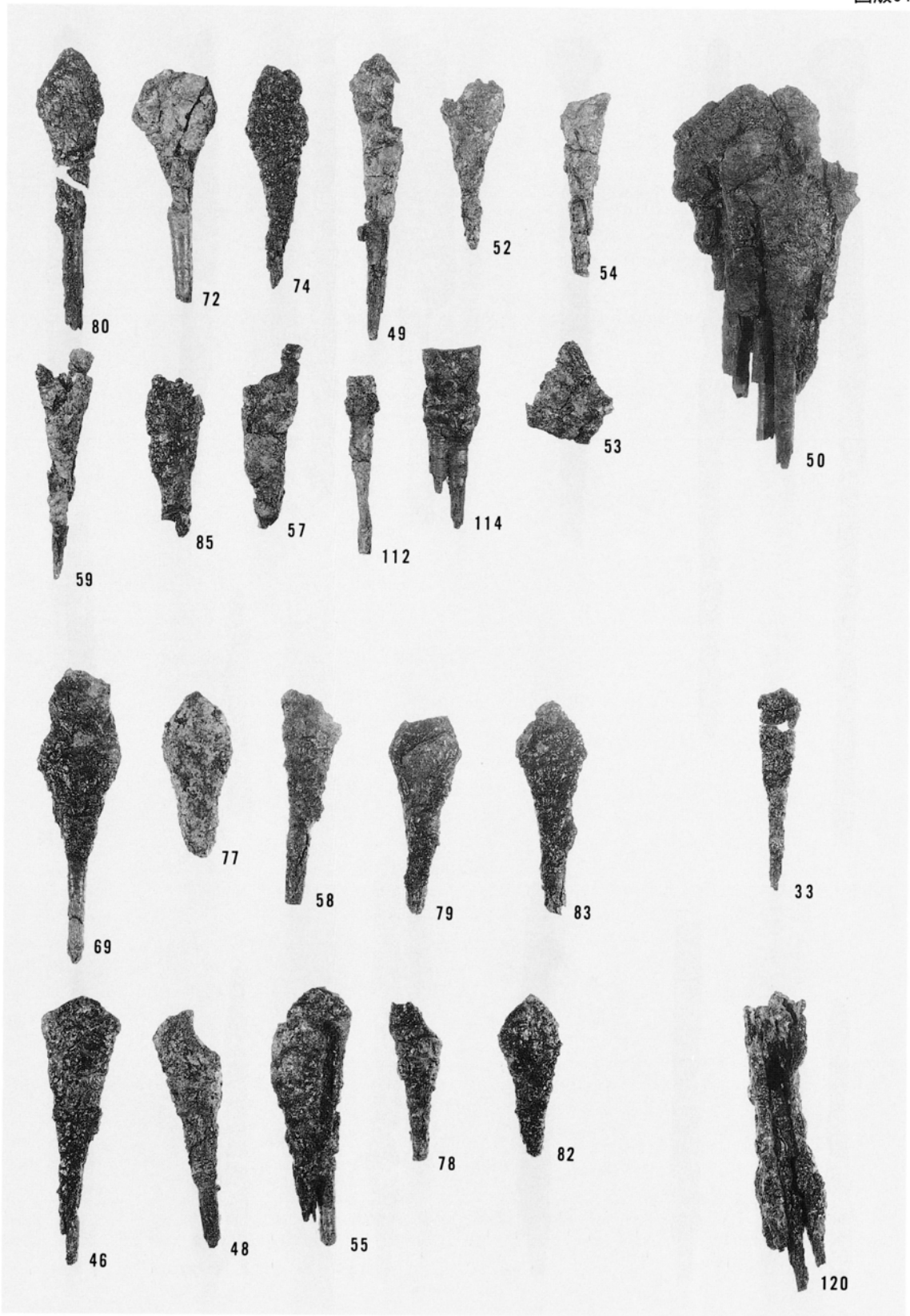


1号石室出土鉄器　3　　縮尺1／6・1／3

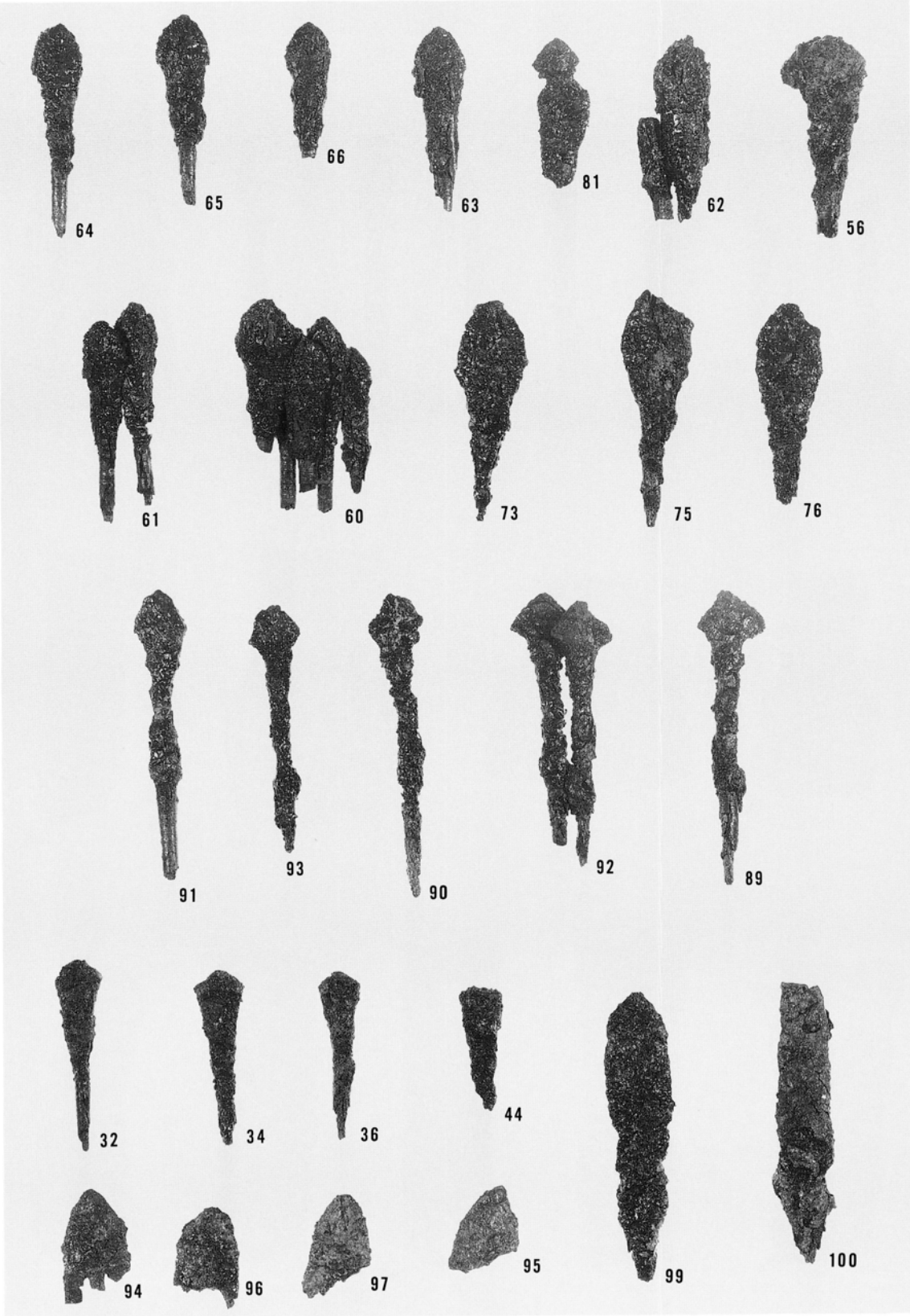


2号石室出土鉄器　　縮尺1／6・1／3

3号石室出土鉄器　1　　縮尺1／6・1／3

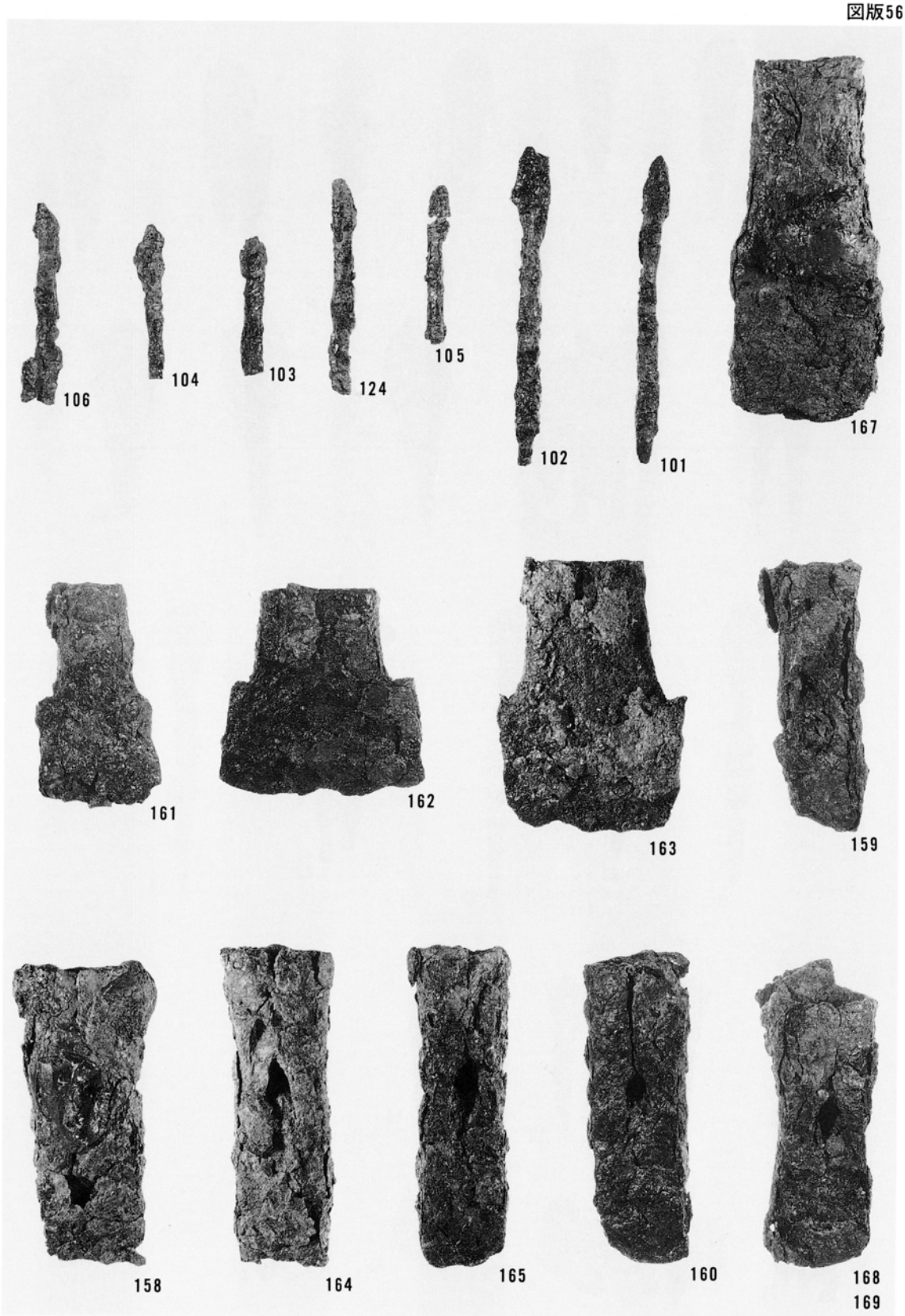


3号石室出土鉄器　2　　縮尺1／3

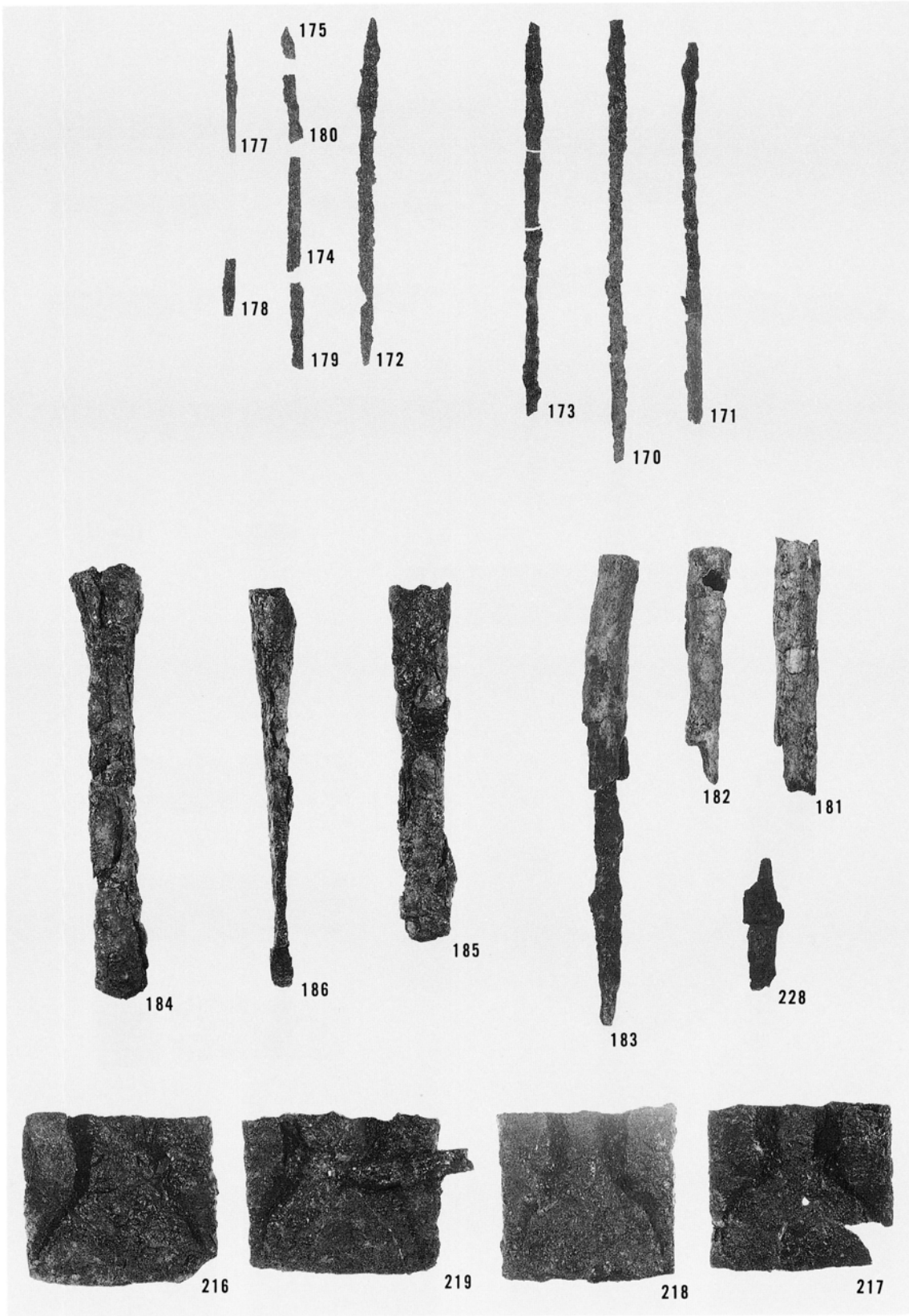


3号石室出土鉄器　3

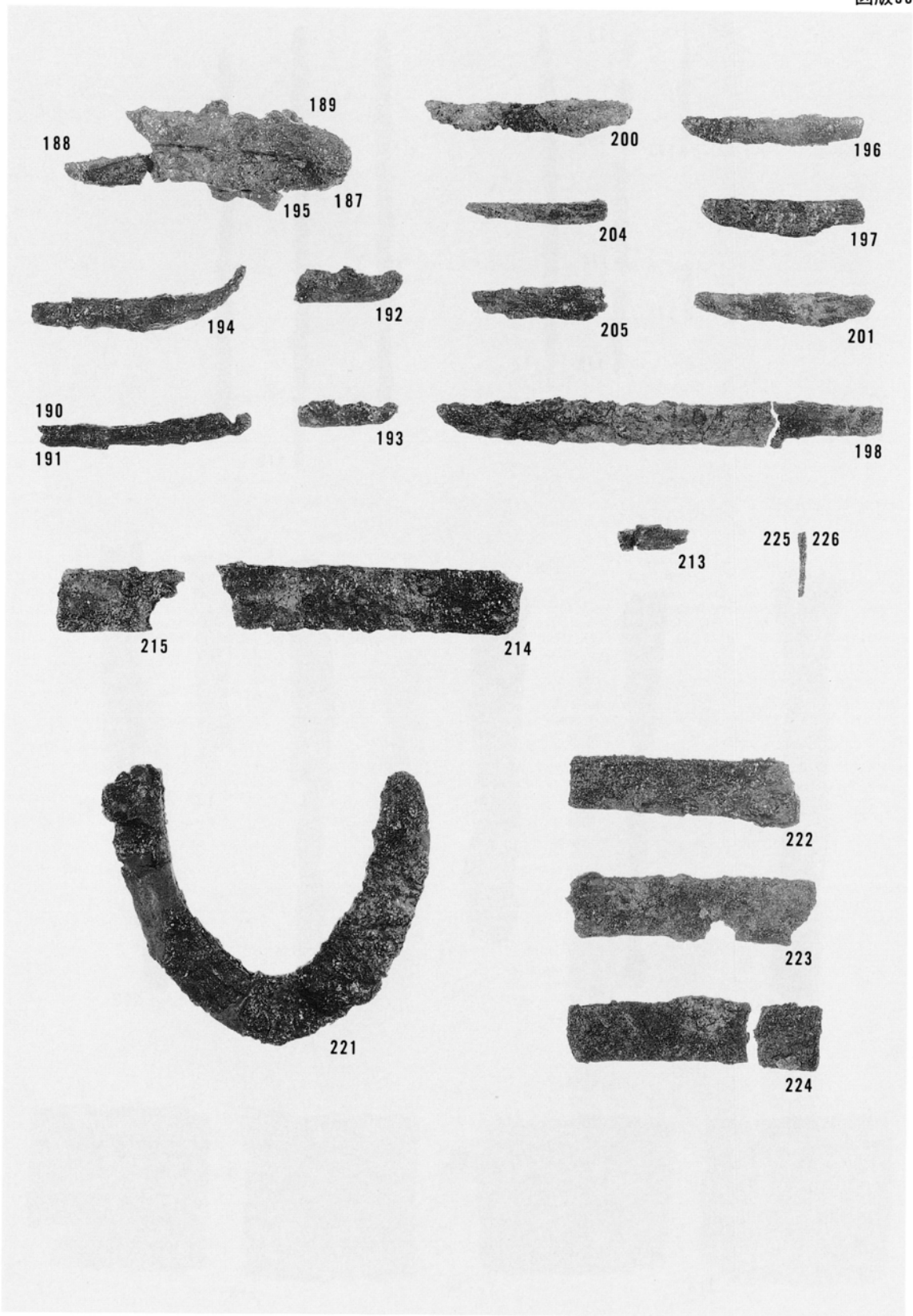
縮尺１／３



3号石室出土鉄器　4　　縮尺1／3



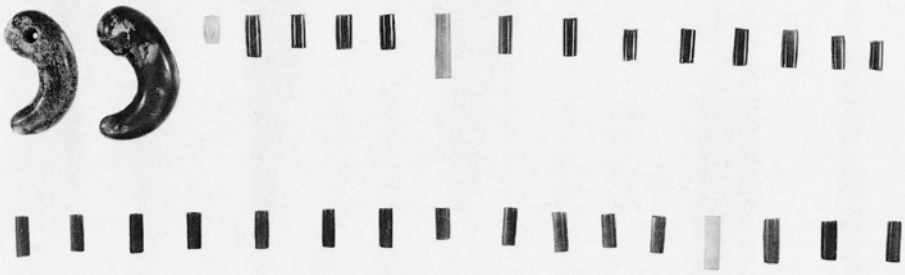
3号石室出土鉄器　5　　縮尺1／6・1／3



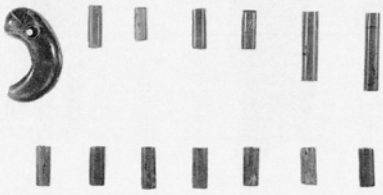
3号石室出土鉄器　6

縮尺1／3

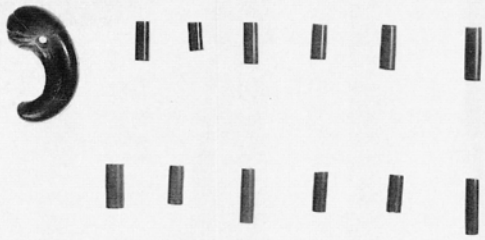
4号石室出土鉄器・土器　　縮尺1／6・1／3



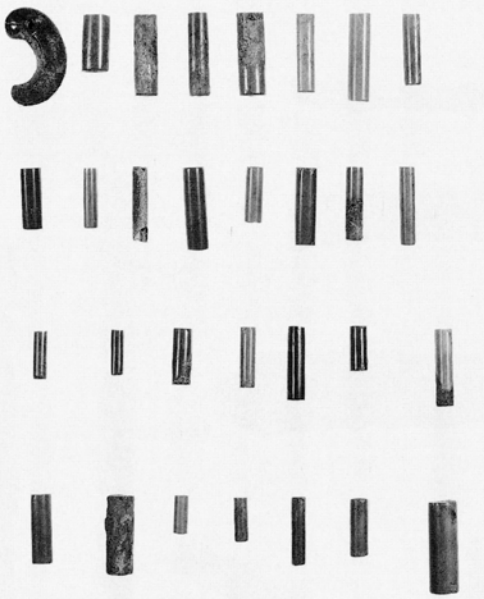
(1) 3 号石室玉群 A



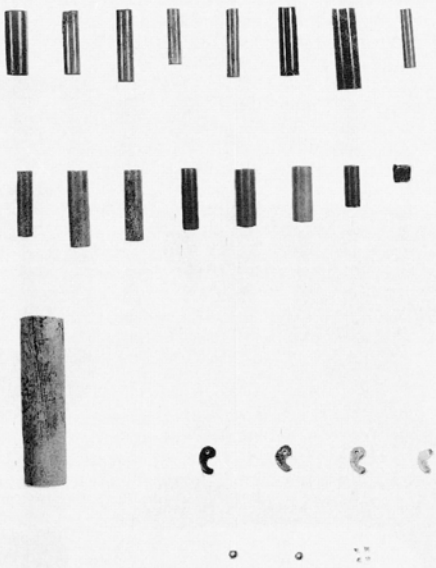
(2) 3 号石室玉群 B



(3) 3 号石室玉群 C



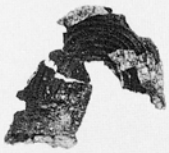
(4) 3 号石室玉群 D



(5) 1 号石室玉群 A

老司古墳出土玉類

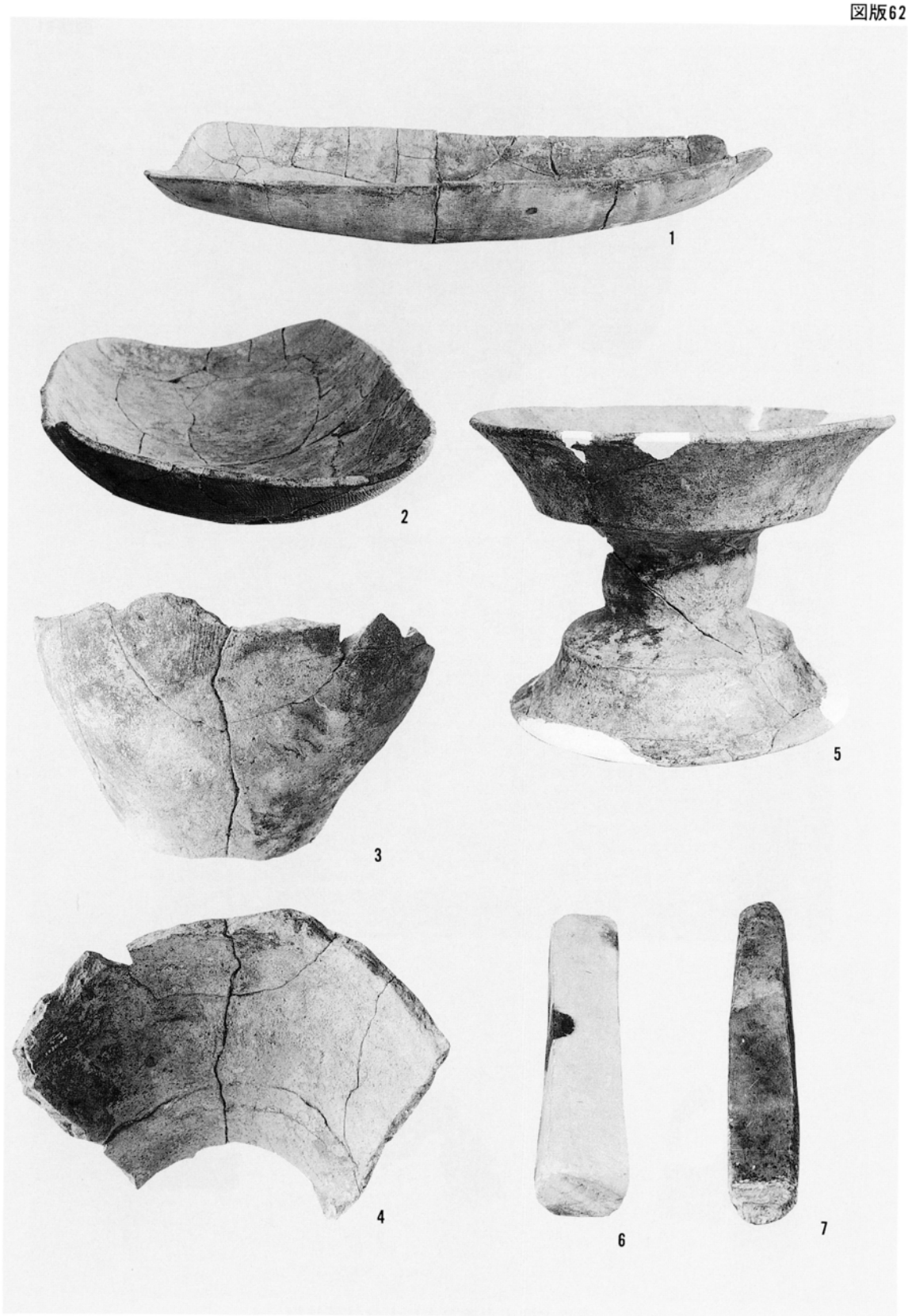
1



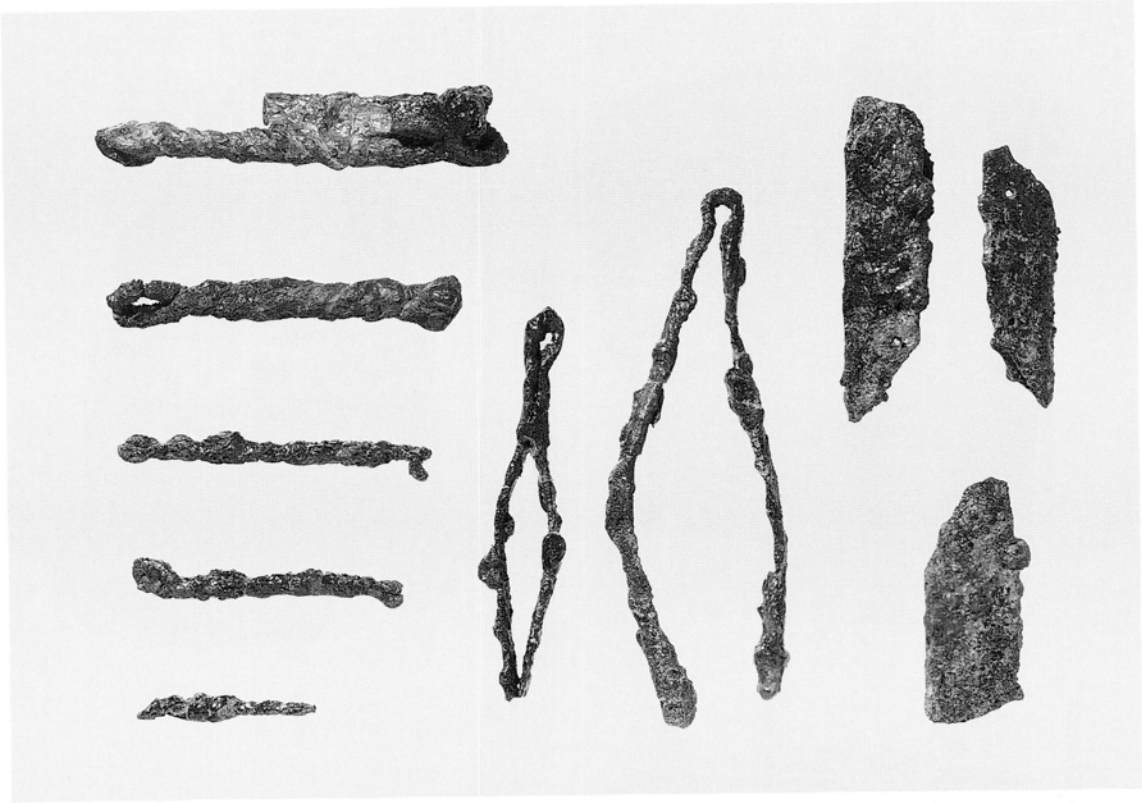
2

3

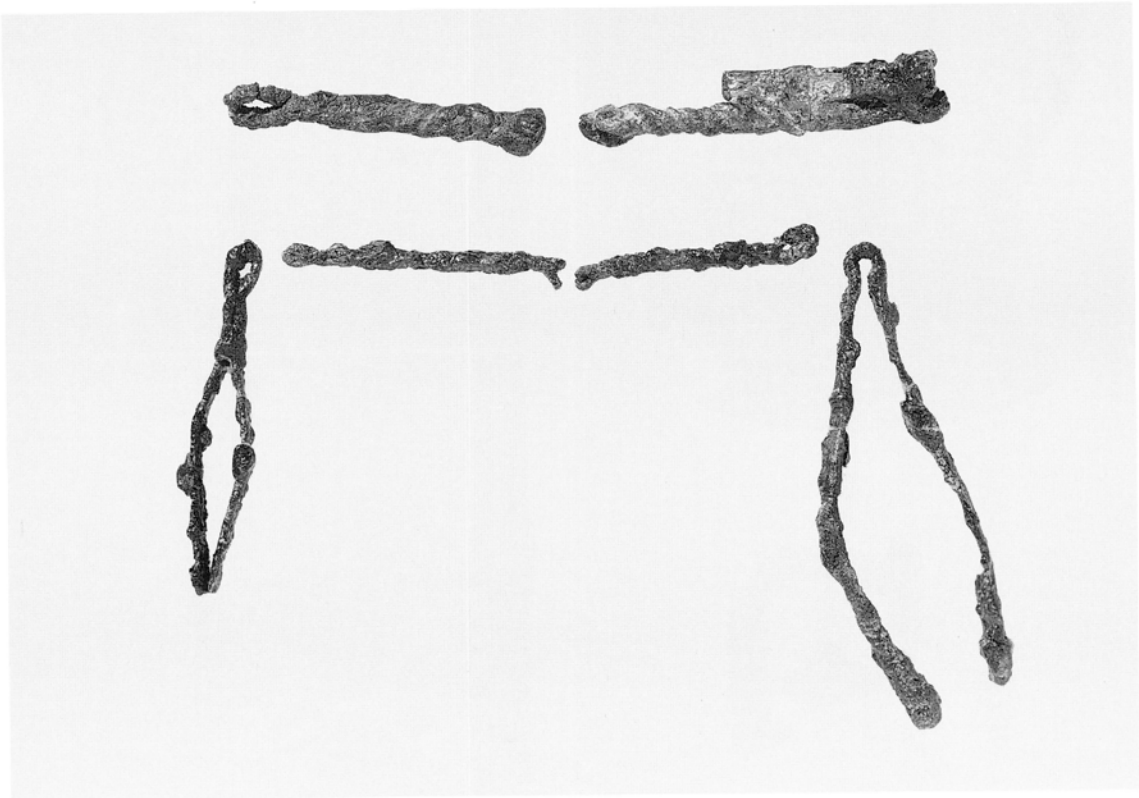
老司古墳出土櫛および人骨付着状態



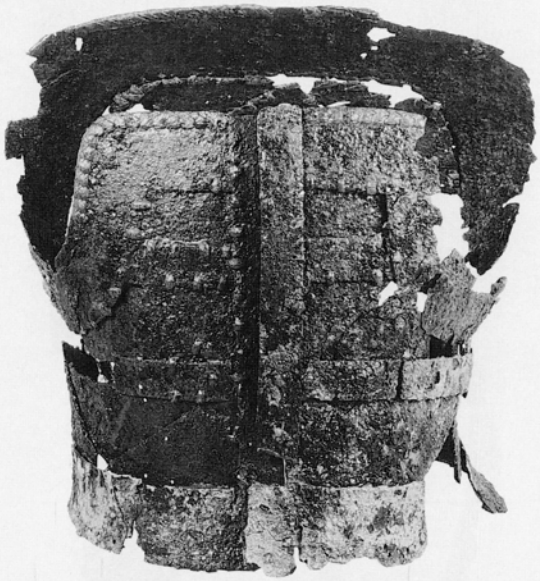
老司古墳出土土器・砥石　　1・2は縮尺約1／6,他は1／3



1．3号石室出土馬具類



2．3号石室出土轡

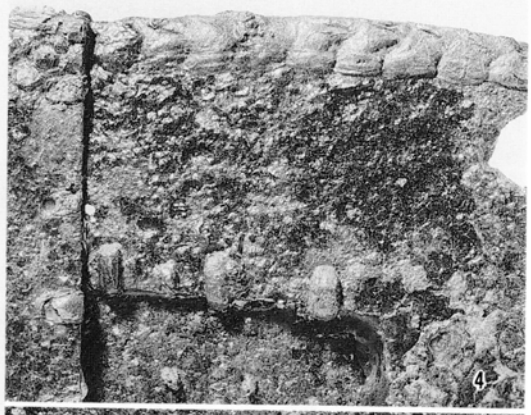


1

2

1～3．2号石室出土短甲

3



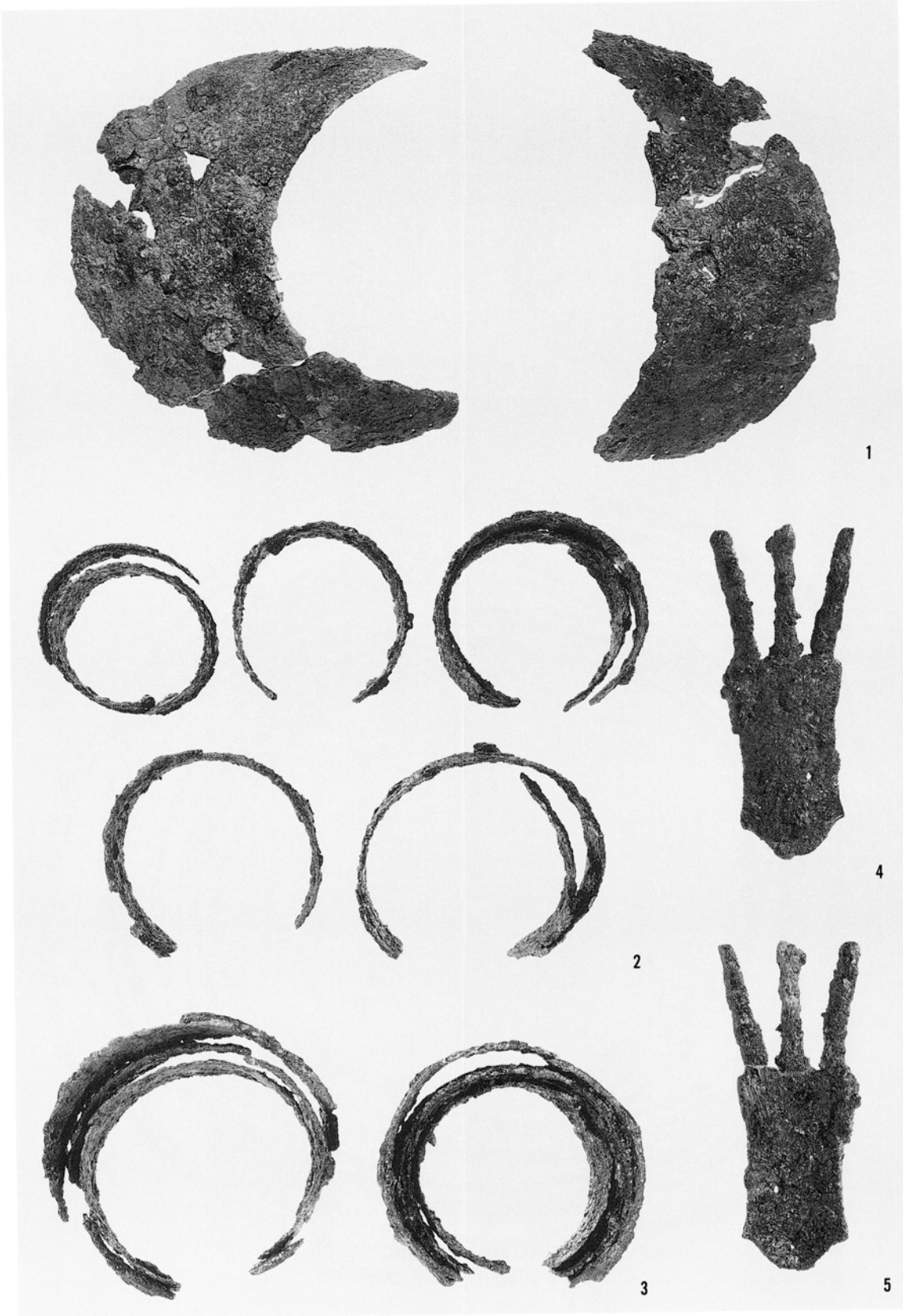
4

5

6

6．2号石室出土鉸具

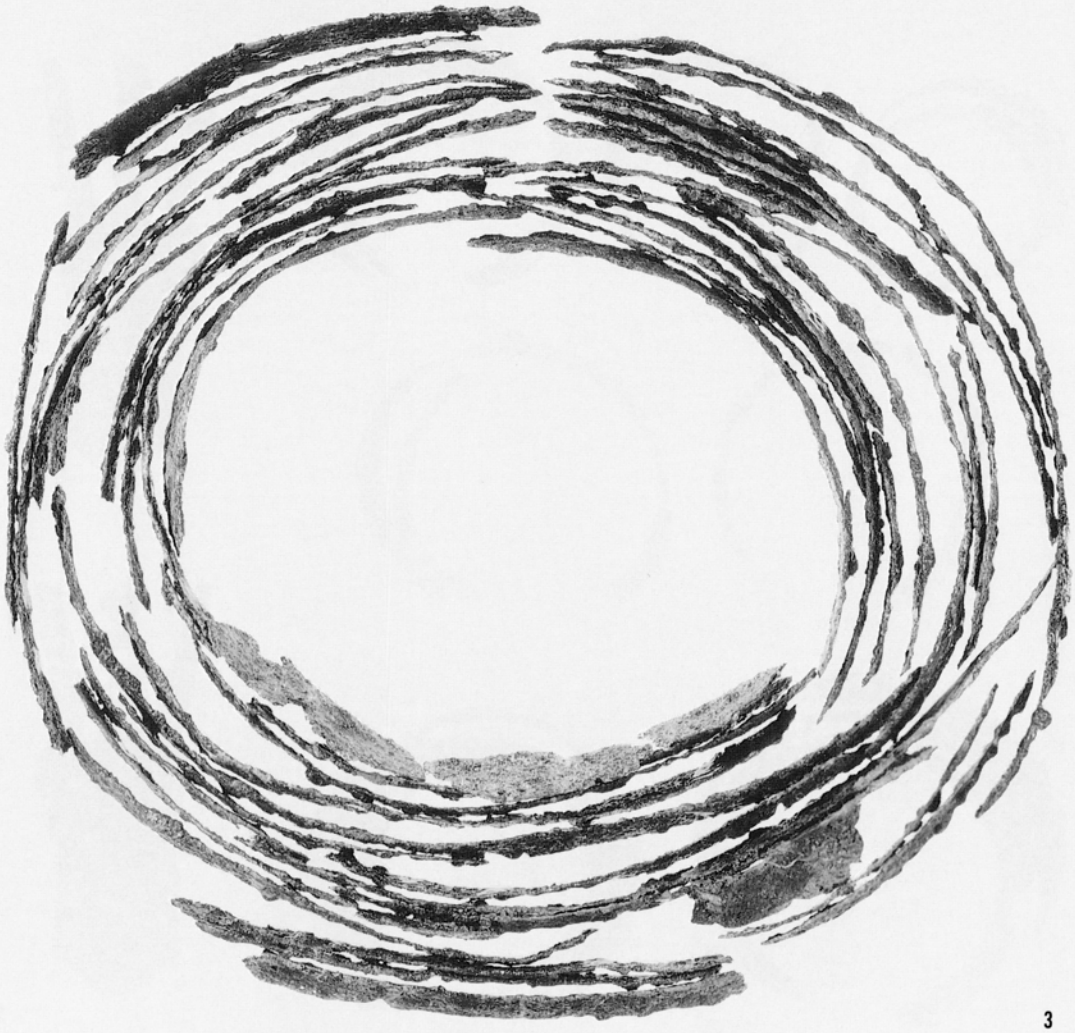
4・5．同上短甲革綴法（4外面および覆輪，5内面）



3号石室出土甲冑　　1．肩甲　　2・3．籠手　　4・5．三尾鉄（4.表・5.裏）

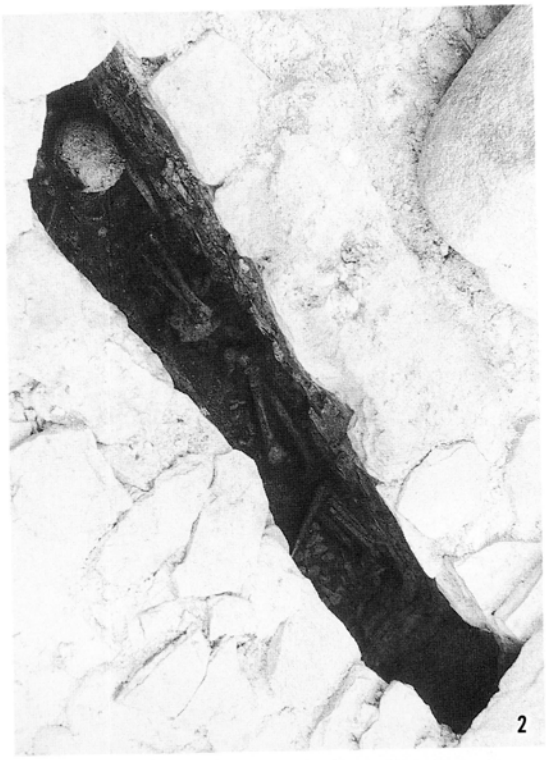
1

2

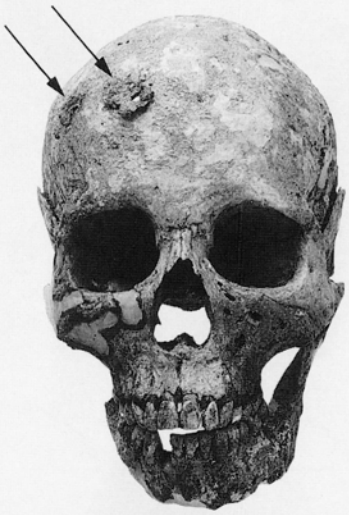


3

3号石室出土甲冑　　1．籠手帯状鉄板　　2．籠手帯状鉄板
4枚の重なり具合　　3．草摺



人骨出土状況(1・2号石室1号人骨，2～4・4号石室)



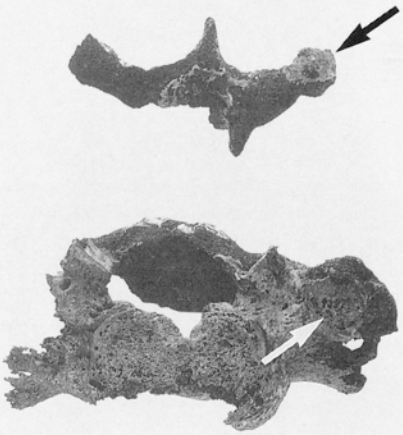
(1) 4号石室2号人骨正面観（矢印は櫛）

(2) 2号石室1号人骨正面観

(3) 4号石室2号人骨側面観

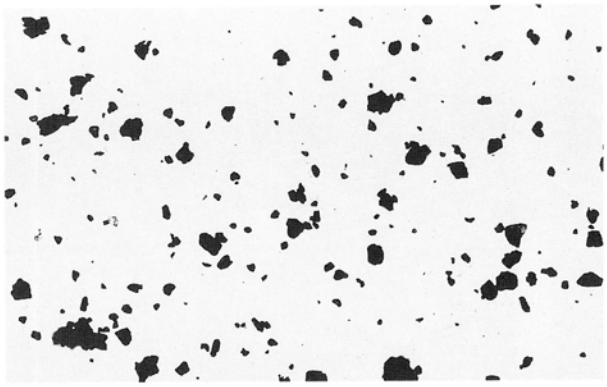
(4) 4号石室1号人骨上面観

(5) 4号石室2号人骨上面観

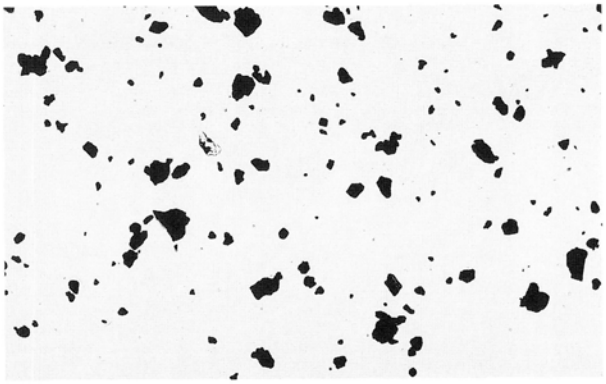


(6) 4号石室1号人骨の移行椎

2・4号石室出土人骨

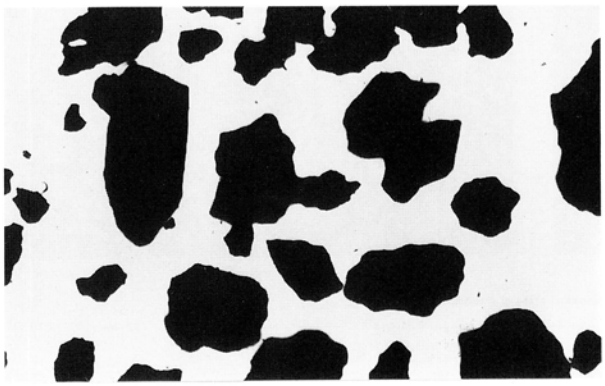


(1)老司古墳3号石室
No.10 方格規矩文鏡に付着の朱
透過光250倍



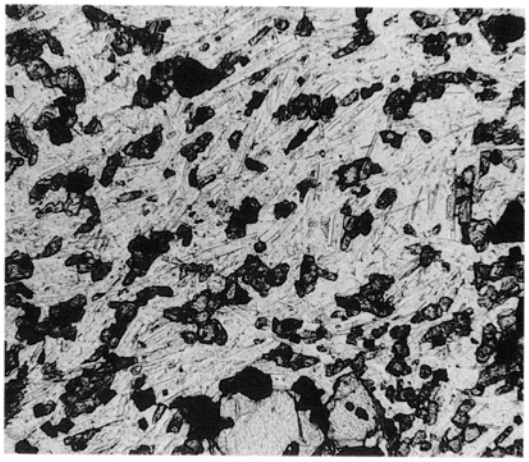
(2)老司古墳3号石室
No.10 方格規矩文鏡に付着の朱
透過光250倍

(3)市販の朱
放光堂「天然辰砂」壱番
透過光250倍



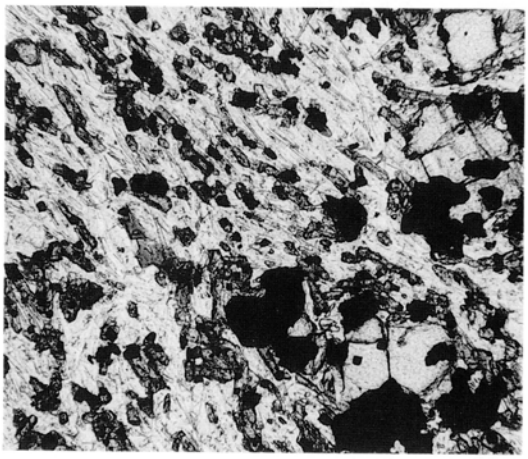
(4)老司古墳3号石室
No.8 方格規矩四神鏡に付着の
粗粒の朱
透過光50倍

出土顔料の顕微鏡写真

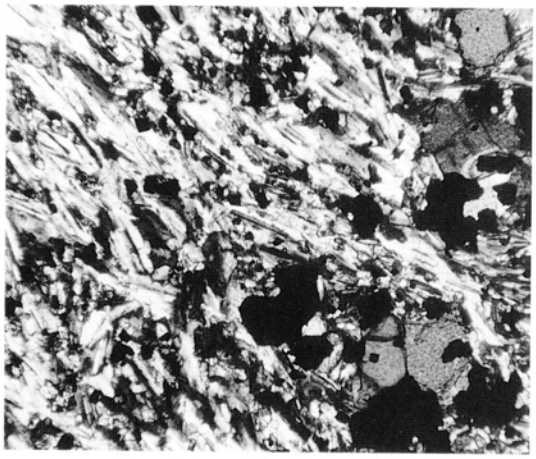


1

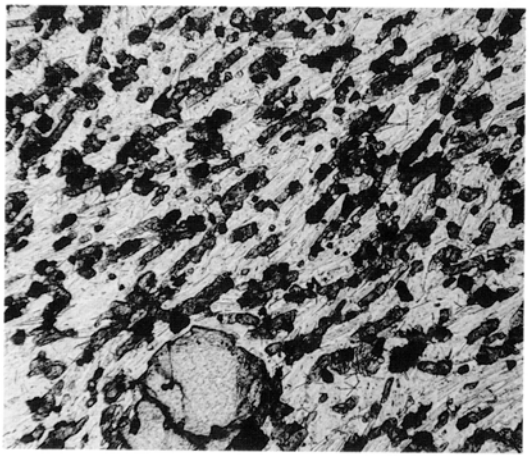
2



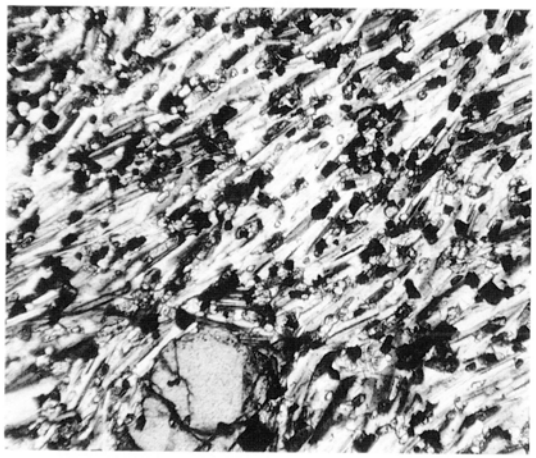
3



4

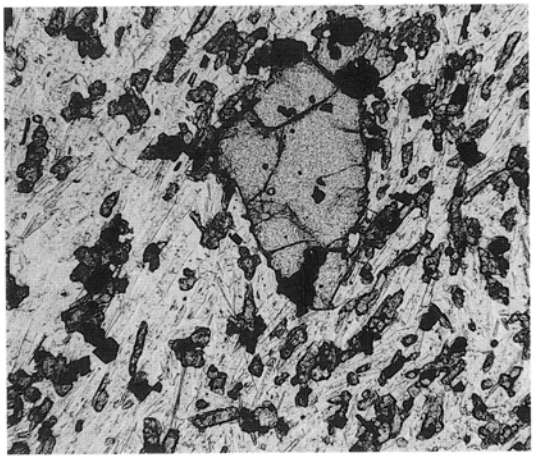


5

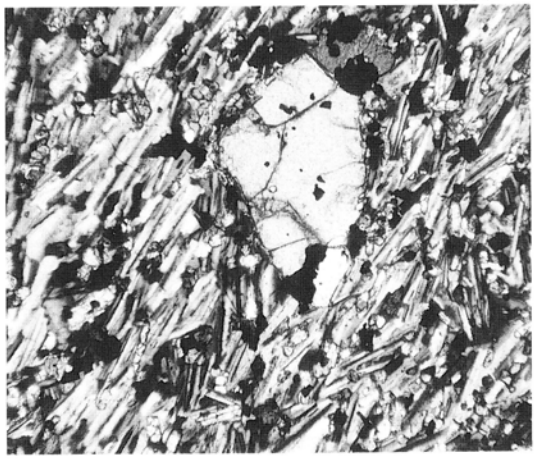


6

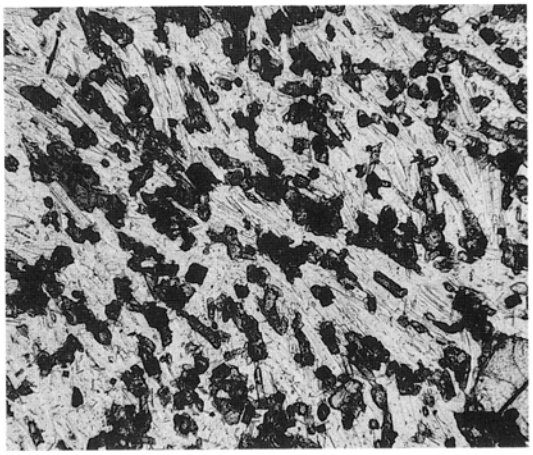
1・3号石室石材の偏光顕微鏡写真



1

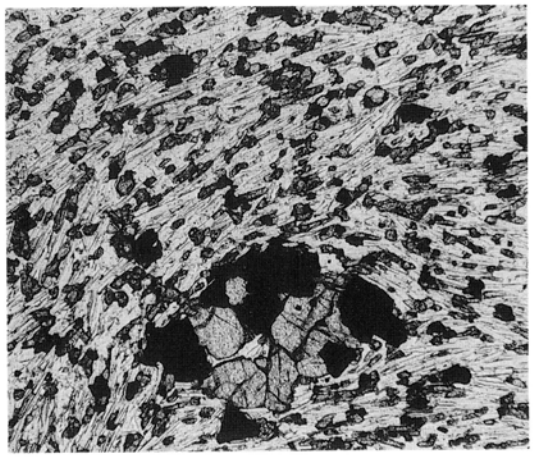


2

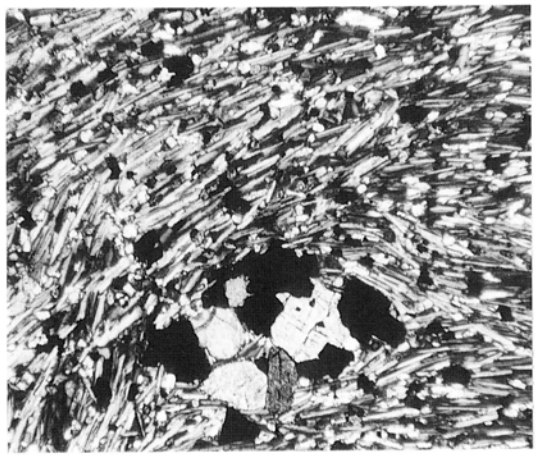


3

4

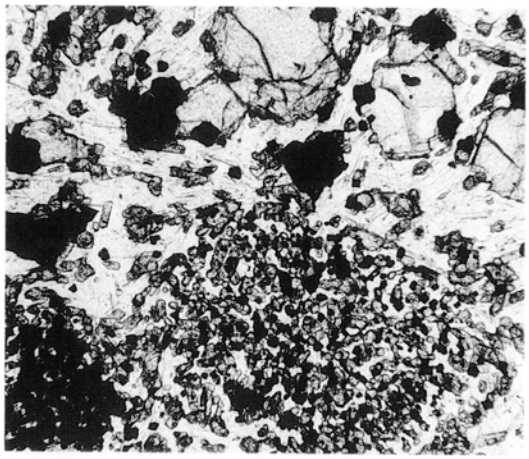


5

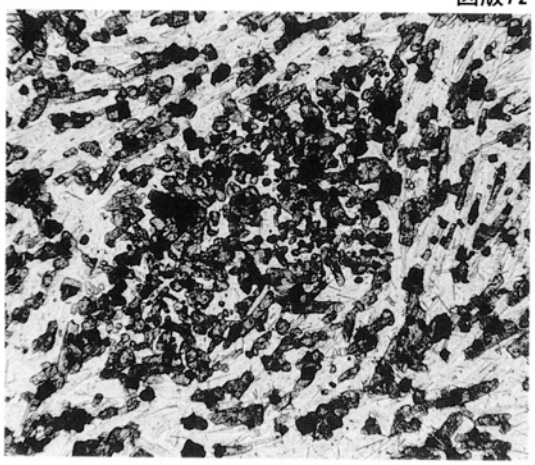


6

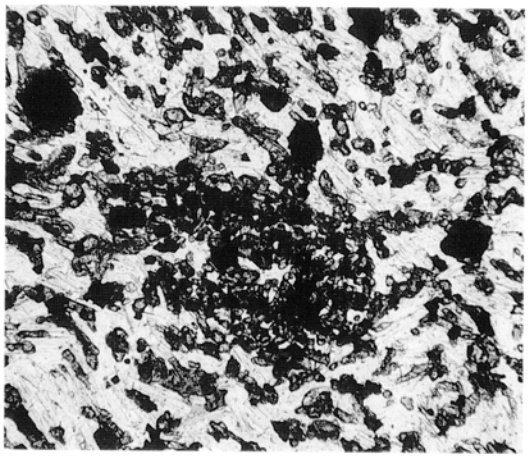
4号石室石材および可也山・能古島粗面玄武岩の偏光顕微鏡写真



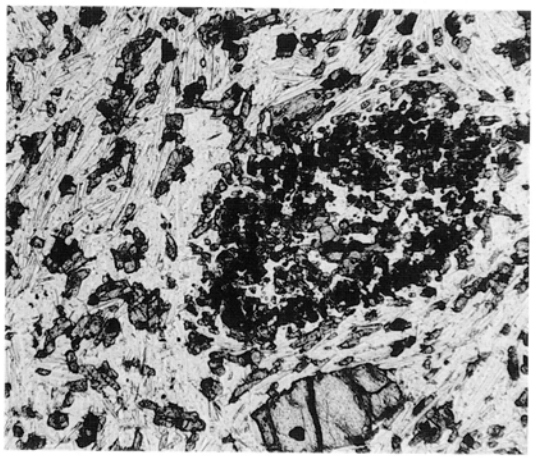
1



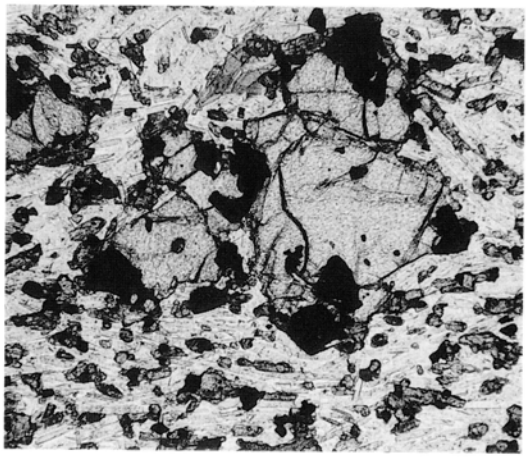
2



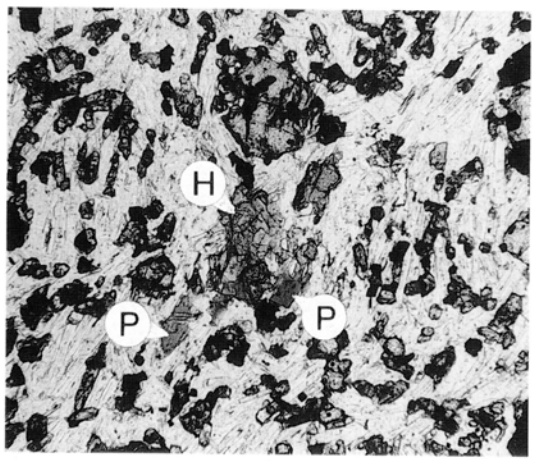
3



4



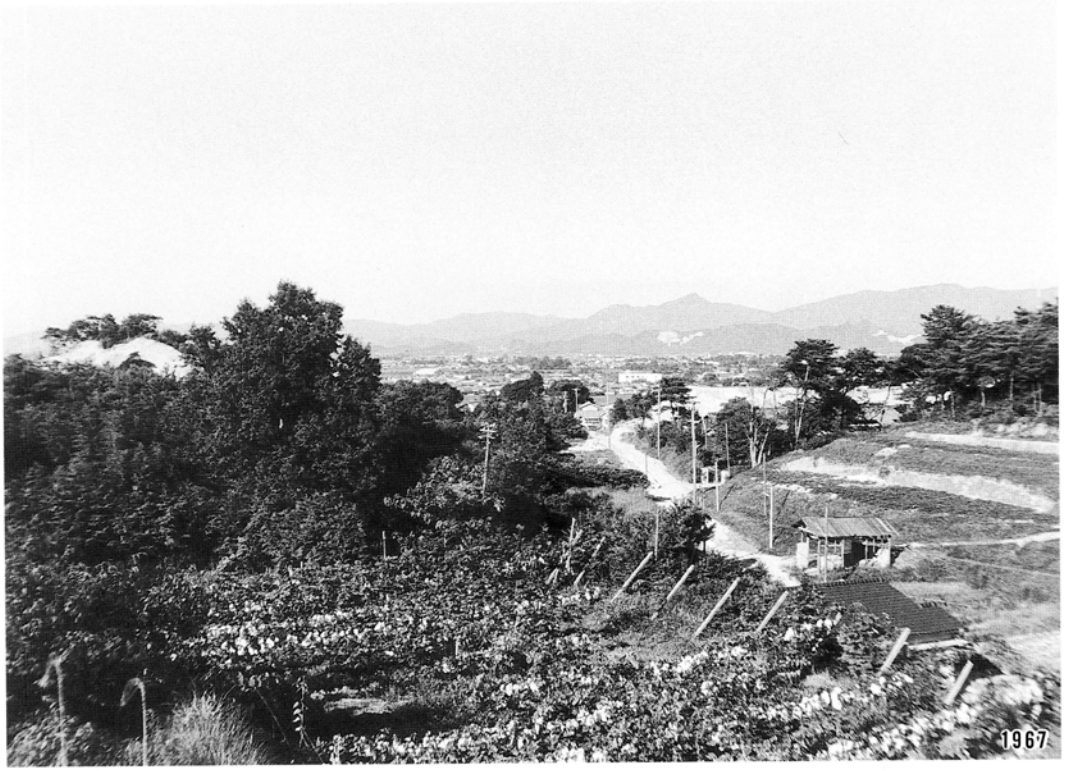
5



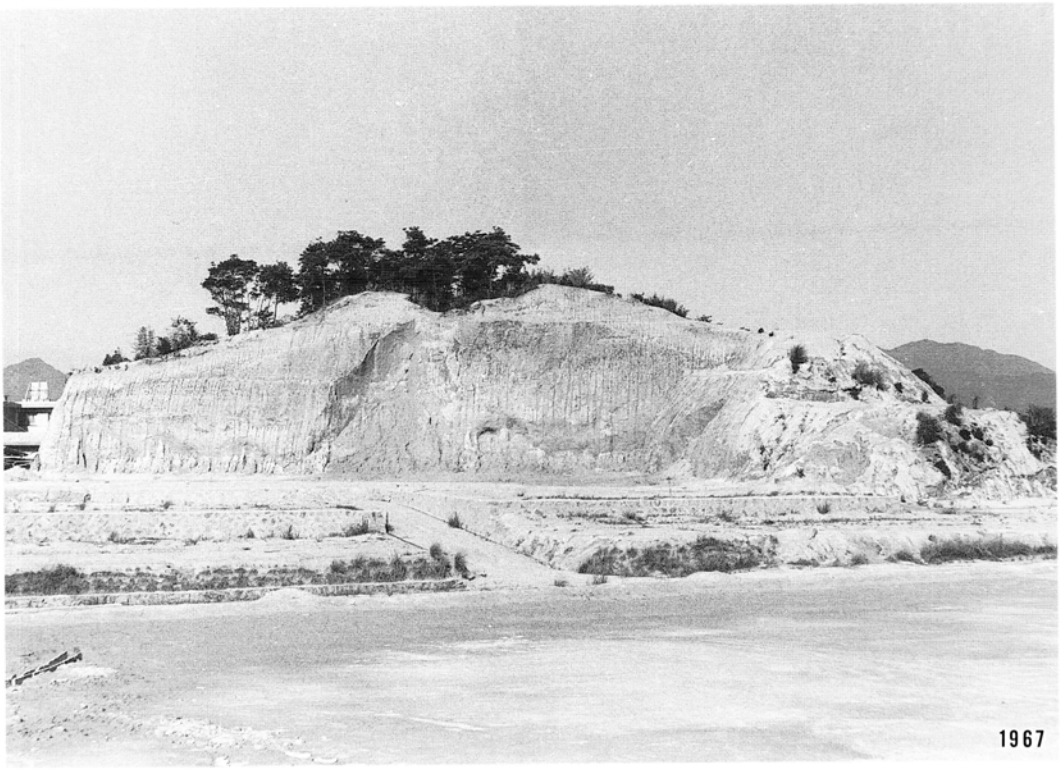
6

1・3・4号石室石材および可也山・能古島粗面玄武岩の偏光顕微鏡写真

(1) 卯内尺古墳(左)と老司古墳(右)(南西より)



(2) 卯内尺古墳全景(西より)



福岡市埋蔵文化財調査報告書　第209集
老司古墳
1989年３月25日

発行　福　岡　市　教　育　委　員　会
福岡市中央区天神１丁目８の１
印刷　㈱　西　日　本　新　聞　印　刷